

世代間比較からみる
高校生の居場所に関する研究

平成 18 年 度

小 長 井 明 美

世代間比較からみる
高校生の居場所に関する研究

教科教育専攻 家政教育専修

小長井 明美

平成19年2月13日提出

目次

<序論>

1～21

- 第一節 研究の意義目的
- 第二節 既研究の検討
- 第三節 用語の定義と理論的考察

<本論>

第一章 研究方法と調査対象の概要

22～29

- 第一節 研究方法
- 第二節 調査対象の概要
- 第三節 調査項目

第二章 親世代・子ども世代比較にみる高校生の生活と行動

30～49

第一節 高校生の行動実態

1. 放課後の行動パターン
2. 学校における放課後の過ごし方
3. 地域における過ごし方
4. 家庭における過ごし方
5. 家庭における交流
6. 土日の過ごし方

第二節 高校生の生活と心理

1. 所有物
2. 性格
3. 居心地の良い場所
4. 受験勉強・友人関係に対するストレスの有無

第三節 本章のまとめ

第三章 親世代・子ども世代比較にみる家庭における高校生の居場所

50～85

第一節 家庭における高校生の心理状態

1. 家庭における居心地が良いと感じる時
2. 家庭における心理状態

第二節 家庭における高校生の人間関係

1. 親子関係
2. きょうだいとの関係
3. 本節のまとめ

第三節 家庭における高校生の居場所の実態と意識

1. 家庭の各室における空間の支配度

2. 家庭における居場所の所有率
3. 家庭における居場所となる具体的な場所
4. 家庭における居場所に対する要求
5. 家庭における社会的居場所ですす相手
6. 家庭における社会的居場所の具体的な場所と交流相手との関係
7. 家庭における居場所パターンの分類

第四節 本章のまとめ

第四章 親世代・子ども世代比較にみる学校における高校生の意識と居場所の実態

86～121

第一節 子ども世代にみる学校における高校生の所属

1. 部活動の参加状況
2. 生徒会・委員会活動の参加状況

第二節 学校における高校生の心理状態

1. 学校における居心地が良いと感じる時
2. 学校における高校生の心理状態

第三節 学校における高校生の人間関係

1. 先生との関係
2. 友だちとの関係
3. 先生や友達以外の人（先輩や後輩など）との関係
4. 本節のまとめ

第四節 学校における高校生の居場所の実態と意識

1. 学校の各場所における空間の支配度
2. 学校における居場所の所有率
3. 学校における居場所となる具体的な場所
4. 学校における居場所に対する要求
5. 学校における社会的居場所ですす相手
6. 学校における居場所パターンの分類

第五節 本章のまとめ

第五章 親世代・子ども世代比較にみる地域における高校生の意識と居場所の実態

122～159

第一節 高校生を取り巻く地域の環境

1. 地域の雰囲気
2. 自宅の周辺環境

第二節 地域における高校生の生活と意識

1. 居住期間

2. よく行く場所
3. 居心地が良いと感じる時
4. 人間関係の実態

第三節 地域における高校生の居場所の実態と意識

1. 地域における主な場所の空間の支配度
2. 地域における居場所の所有率
3. 地域における居場所となる具体的な場所
4. 地域における居場所に対する要求
5. 地域における社会的居場所で話す相手
6. 居場所パターンの分類

第四節 本章のまとめ

第六章 子ども世代における社会的居場所としての面識のない人との間接的コミュニケーション 160～163

1. 面識のない人との間接的なコミュニケーションの有無
2. 社会的居場所としての間接的なコミュニケーションの実態
3. 本章のまとめ

第七章 親世代・子ども世代比較にみる家庭・学校・地域全体における高校生の居場所の実態 164～192

第一節 家庭・学校・地域全体でみた高校生の居場所所有の実態

1. 個人的居場所
2. 社会的居場所
3. 本節のまとめ

第二節 家庭・学校・地域それぞれにおける高校生の居場所所有状況

1. 個人的居場所
2. 社会的居場所
3. 本節のまとめ

第三節 家庭・学校・地域間における居場所所有の関係

1. 家庭と学校間における居場所所有の関係
2. 家庭と地域間における居場所所有の関係
3. 学校と地域間における居場所所有の関係
4. 家庭・学校・地域間の代替型補完構造の検討

第八章 親世代・子ども世代比較にみる家庭における高校生の居場所と関連構造

193～224

第一節 家庭における居場所タイプの設定

第二節 家庭における居場所の形成要因と居場所タイプとの関連

1. 高校生の属性と居場所タイプとの関連
2. 空間条件と居場所タイプの関連
3. 人間関係と居場所タイプとの関連
4. 本節のまとめ

第三節 家庭における居場所タイプと居場所所有が及ぼす影響との関連

1. 居場所タイプと生活実態との関連
2. 居場所タイプと心理状態との関連
3. 居場所タイプと人間関係との関連
4. 本節のまとめ

第四節 本章のまとめ

第九章 親世代・子ども世代比較にみる学校における高校生の居場所と関連構造

225～244

第一節 学校における居場所タイプの設定

第二節 学校における居場所の形成要因と居場所タイプとの関連

1. 高校生の属性と居場所タイプとの関連
2. 人間関係と居場所タイプとの関連
3. 本節のまとめ

第三節 学校における居場所タイプと居場所所有が及ぼす影響との関連

1. 居場所タイプと生活実態との関連
2. 居場所タイプと心理状態との関連
3. 居場所タイプと人間関係との関連
4. 本節のまとめ

第四節 本章のまとめ

第十章 親世代・子ども世代比較にみる地域における高校生の居場所と関連構造

245～279

第一節 地域における居場所タイプの設定

第二節 地域における居場所の形成要因と居場所タイプとの関連

1. 高校生の属性と居場所タイプとの関連
2. 空間条件と居場所タイプとの関連
3. 人間関係と居場所タイプとの関連
4. 本節のまとめ

第三節 地域における居場所タイプと居場所所有が及ぼす影響との関連

1. 居場所タイプと生活実態との関連
2. 居場所タイプと心理状態との関連

3. 居場所タイプと人間関係との関連

4. 本節のまとめ

第四節 本章のまとめ

第十一章 親世代・子ども世代比較にみる家庭・学校・地域における高校生の居場所と
関連構造 **280～299**

第一節 家庭・学校・地域それぞれにおける居場所の形成要因

1. 高校生の属性と家庭・学校・地域それぞれにおける居場所タイプとの関連

2. 空間条件と家庭・地域それぞれにおける居場所タイプとの関連

3. 人間関係と家庭・学校・地域それぞれにおける居場所タイプとの関連

4. 本節のまとめ

第二節 家庭・学校・地域それぞれにおける居場所所有が及ぼす影響

1. 家庭・学校・地域それぞれにおける居場所タイプと生活実態との関連

2. 家庭・学校・地域それぞれにおける居場所タイプと心理状態との関連

3. 家庭・学校・地域それぞれにおける居場所タイプと人間関係との関連

4. 本節のまとめ

第三節 本章のまとめ

<結論>

300～316

第一節 本研究のまとめ

第二節 今後の課題

序 論

<序論>

第一節 意義・目的

現在、不登校やいじめ、少年犯罪等の子どもに関わる社会問題は、未だに深刻な状況であり、その背景の一つとして「子どもの居場所がない」ということがいわれている。「居場所」とは、一人になって自分を取り戻せる場や、気持ちが通じ合える人とのコミュニケーションの場など、子どもの心理状態を安定・回復させる側面や、子どもが社会の中で自分を確認できる側面を持つ重要な場所であるといえる。このような子どもの成長に関わる「居場所」について考えることは、子どもに関する社会問題に向き合っていく上で、意義のあることと考えられる。

「居場所」には、子どもを取り巻く環境のさまざまな側面（空間面・時間面・人間関係面）が影響を与えていると考えられる。現在、この子どもを取り巻く環境が著しく変化している。空間面においては、自然環境が減少する一方で、都市化が進み、社会施設等は充実してきている。時間面においては、過度な受験勉強により子どもの自由な時間が失われている。さらに、人間関係面においては、核家族化や少子化、近所付き合いの希薄化から、人間関係が希薄化しているといわれている。その一方で、携帯電話やインターネット等の新しいコミュニケーションツールが急速に普及したことにより、これまでより人間関係のあり方が多様になってきている。このような環境の変化は、複雑でかつ、家庭・学校・地域を含んだ子どもの生活環境全体にわたっている。この状況下において、子どもの「居場所」のあり方も変化してきているのではないと思われる。

「居場所」をキーワードとした研究についてみると、あまり多くないが、1990年代から研究がなされており、心理学・社会学・建築学・住居学系など研究分野は多岐にわたっている。「居場所」とは、物理的な側面、心理的な側面の両方を含むもので、その研究においても、両側面を包括するものでないとならないが、一方の側面に偏った研究が多い。また、子どもの生活環境を断片的にしか捉えていない研究が多く、未だ不十分であるといえる。2000年代になると、家庭・学校・地域全体を通して「居場所」を捉える研究や、居住環境と「居場所」の関連を明らかにした研究がなされるようになり、研究の内容が深まりつつあると思われる。しかし、子どもを取り巻く環境の変化による、子どもの「居場所」の変化の状況は捉えきれていない。

そこで、現在の子どもの「居場所」が以前と比べてどのように変化しているのかを捉えるため、本研究室において、2004年度に調査を行った。¹⁾ この調査は、高校生とその保護者を対象に実施したもので、保護者には自身の高校生当時のことを質問している。そして、世代間比較を通して、高校生の「居場所」について検討し、現在の高校生の「居場所」の実態や特徴を明らかにした。その結果、現在の子どもの方が「居場所」を多く所有していることが捉えられた。しかし、この調査は「居場所」の中で「個人的居場所」²⁾ についてのみ捉えたものであり、「居場所」の概念すべてを捉えきれていない。また、調査対象は、

自然に恵まれたところに居住している高校生で、受験勉強に追われず、仲間と遊ぶ時間も持ちやすい生活をしており、以前との環境変化は大きくないといえる。現在の子どもを取り巻く環境の変化には強弱があると考えられ、子どもの「居場所」の変化を捉えるには、環境の変化が大きいと思われる子どもを対象とした調査も行ったうえで、検討する必要があると考えられる。

これらを踏まえて、本研究ではまず、「居場所」の定義及び理論的枠組みを考察し、「居場所」の概念すべてを包括する調査を行った。また、2004年度の調査対象とは異なった調査対象として大学進学者が比較的多い進学校の生徒とその保護者に調査を実施した。なお、保護者から得られるデータは、今から25～35年前の高校生当時の記憶に頼ったものであり、やや記憶に曖昧な点が含まれると考えられる。しかし、世代間比較の調査としてはこの方法をとらざるをえない。そこで、本論文では保護者のデータは、現在の高校生の特徴をより明確にするための比較サンプルとして位置づけるものとする。世代間比較により「居場所」の変化の状況を実証的に捉え、現在の高校生の「居場所」の特徴を明らかにすることを目的とする。この目的を達成するために以下の検討を行う。

- ① 世代間比較を通して、それぞれの世代の「居場所」の特徴と、高校生の主体条件・空間条件・人間関係の状況を捉え、現在の高校生の「居場所」の特徴を明確にする。
- ② 世代別で、「居場所」の所有実態と所有に関係すると思われる、高校生の主体条件・空間条件・人間関係との関連をそれぞれ分析し、居場所の関連構造を明らかにするため、「居場所の形成要因」と「居場所が及ぼす影響」の2側面について検討する。
- ③ ②の結果を踏まえ、現在の高校生の「居場所の形成要因」と「居場所が及ぼす影響」の特徴について明確にする。

このように、世代間比較から、現在の高校生の「居場所」形成の特徴を捉えることは、これからの高校生の「居場所」のあり方や、「居場所」づくりの手立てを考える上で、意義があると考えられる。

第二節 既研究の検討

「居場所」の概念は、心理面・物理面の二つの側面を含むため、子どもの「居場所」に関する研究も幅広く行われている。そのため、研究分野を＜社会学・教育学系＞と＜建築学・住居学系＞の2つに分類し、検討する。

既研究の検索方法は、4種類のデータベースを利用し、「居場所」とそれぞれ「子ども」「小学生」「中学生」「高校生」「大学生」「中高生」「児童」「生徒」をキーワードに用いた関係論文を検索した。なお、今回利用したデータベースは、「CiNii 論文情報ナビゲータ」「MAGAZINEPLUS」、また「日本建築学会」「住宅総合研究財団」のホームページにおけるものである。

1. 社会学・教育学系の既研究

＜社会学・教育学系＞の既研究を表1に示す。＜社会学・教育学系＞の既研究について、「発表年」「対象者」「居場所」の対象とする場所」「研究内容」「居場所」定義の有無の側面から、検討する。

(1) 発表年

＜社会学・教育学系＞は、1990年代から研究され始め、2000年代には研究数が増加しており、現在までに約30件みられる。

(2) 対象者

対象者については、比較的「中学生」「高校生」「中高生」を対象としている論文が多いが(No.4,7,9,13,14,15,17,19,23)、論文によって示され方が様々である。例えば、表1に示す3件は、「不登校児」と限定しているが(No.3,21,24)、9件では対象者を絞らずに「子ども」「若者」「青少年」としており(No.6,8,10,16,20,22,25)、幅広く捉えられている。

(3) 「居場所」の対象とする場所

「居場所」の対象とする場所について、「学校」や「保育所」のみ対象とした研究は、表1に示す7件(No.1,4,5,11,12,18,24)であり、「学校」における「居場所」を捉えようとしている。また、「地域や特定の施設」のみ対象とした研究は、10件(No.7,9,10,13,15,16,20,21,22)であり、学校以外における「居場所」を捉えようとしている。これは後の「(4) 研究内容」で述べるが、学校以外に「居場所」づくりを検討した研究が多いことが関係していると考えられる。一方、家庭・学校・地域全てを対象とした研究は、4件のみであり(No.14,17,28,29)、子どもの生活場面全体から「居場所」を捉えた研究は少ない。したがって、ほとんどの＜社会学・教育学系＞の研究は、「学校」もしくは「地域」に限定しており、家庭・学校・地域の子どもの生活場面全てから「居場所」を捉えていない。

(4) 研究内容

研究内容について、表1に示す10件(No.1~5,11,12,18,19,24,25)は、学校問題の解決の視点から「居場所」を捉えている。例えば、子ども、特に不登校児、自傷を繰り返す子

どもに対するカウンセラーや教師など、大人の関わり方や支援などの事例を挙げて検討している。また、5件（No.20,21,23,27）は学校以外でも、それぞれ「心のケア」「心の教育」「居場所感」「対人関係」「心の居場所」がキーワードになっている研究であり、＜社会学・教育学系＞の多くは、心理面から「居場所」を捉えている。しかし、地域における施設を利用した「居場所」づくりを検討し、物理面から「居場所」を捉えている研究も7件（No.9,10,13,15,16,22,26）みられる。

（5）「居場所」の定義の有無

「居場所」定義の有無について、論文中に「居場所」の定義がされているのは、表1に示す10件（No.1,3,6,14,17,21,23,25,26,27）であり、全論文の半分以下である。それぞれの「居場所」の定義を表3の下に示す。多くの「居場所」の定義に「心」「安定」「安心」「やすらぎ」という言葉が含まれており、＜社会学・教育学系＞の研究における「居場所」の定義は、心理面から捉えられているといえる。

2. 建築学・住居学系の既研究

＜建築学・住居学系＞の既研究を表2に示す。また、本研究室(三重大大学住居学研究室)における既研究を表3に示す。

＜建築学・住居学系＞の既研究について、「発表年」「対象者」「居場所」の対象とする場所」「研究内容」「居場所」定義の有無の側面から、検討する。

（1）発表年

＜建築学・住居学系＞は1999年から研究されている。また、本研究室においても2000年代から研究を行っており、＜建築学・住居学系＞は、前述した＜社会学・教育学系＞より最近になって研究されるようになったといえる。研究数については、＜社会学・心理学系＞より少なく、約20件である。

（2）対象者

対象者については、本研究室も含め、ほとんどの論文で「中高生」を対象としており、＜建築学・住居学系＞では、「中高生」に関心が寄せられている（No.1～6,8,9,14）。

（3）「居場所」の対象とする場所

「居場所」となる対象場所について、「家庭」のみは表2に示す2件（No.5,11）、「保育園や学校」のみは3件（No.10,12,14）、また「特定の施設や公園」のみを対象とした研究は4件（No.2,4,9,12）である。これらは、住宅内のみ、学校内のみ、特定の施設のみに場面が限定されており、子どもの生活場面の一部分しか捉えきれていない。中には子どもの「居場所」を家庭・学校・地域全ての生活場面から捉えている研究もあるが、前述した＜社会学・教育学系＞より少なく、1件（No.6）のみである。一方、本研究室では、家庭・学校・地域を取り上げて子ども生活場面全体から「居場所」を捉えている（表3 No.2～4）。

（4）研究内容

研究内容について、表2に示す10件（No.1,2,4,5,8～12,14）は、それぞれの場所の利用実態やあり方を検討している。「居場所」は、物理面・心理面、2つの側面を含む概念であ

るが、「居場所」の捉え方が、物理面に偏っており、不完全であるといえる。一方、本研究室では、「居場所」を物理面・心理面両方から捉えて検討している（表3 No.1～4）。最近では、「居場所」の実態を捉えるだけでなく、「居場所」の形成要因や「居場所」が与える影響を捉える研究（表3 No.4）、また世代間比較によって現在の子どもの「居場所」の実態や特徴を明らかにした研究（表3 No.3）も行っている。しかし、まだ研究数も少なく、内容も十分ではないため、今後さらに検討をしていく必要があると考えられる。

（５）「居場所」の定義の有無

「居場所」の定義の有無について、論文中に「居場所」の定義がされているのは、表2に示す2件（No.7,10）のみであり、ほとんど定義はされていない。1つは、「居場所」を「遊びなどの積極的な行為の場だけでなく、気晴らしのような余暇空間や、気ままな行為のできる場」（No.7）とし、もう1つは、「子どもの活動が展開している場所」（No.10）としている。これらは、場所を限定しているだけで、「居場所」の心理的側面が含まれておらず、本質的な定義ではないと考えられる。一方、本研究室では、「居場所」を「自分を確立できる場所」と定義しており、心理的側面である「他者との関わり」と物理的側面である「空間の支配度」の2つの側面から「居場所」を捉えている。詳細は序章第三節で述べている。

3. <社会学・教育学系>と<建築学・住居学系>研究の比較検討

以上より、<社会学・教育学系>と<建築学・住居学系>研究の比較検討を行う。

「発表年」について、<社会学・教育学系><建築学系・住居学系>とも研究され始めた時期は最近であり、1990年代からである。また、子どもの「居場所」に関する研究数は両分野ともまだ多いとはいえない。

「対象者」について、<社会学・教育学系>では「中学生」「不登校児」「青少年」など対象者を様々な視点から捉えているが、<建築学・住居学系>では「中高生」を対象とした研究が多い。

「「居場所」の対象とする場所」について、<社会学・教育学系>では、「学校」もしくは「地域」に場面が限定されており、<建築学・住居学系>では、住宅内のみ、学校内のみ、特定の施設のみそれぞれに場面が限定されている。したがって、<社会学・教育学系><建築学・住居学系>ともに、家庭・学校・地域の子どもの生活場面全てから「居場所」を捉えている研究は少なく、子どもの生活の一部分しか捉えきれていない。

「研究内容」について、<社会学・教育学系>は、学校問題の解決を中心に、「居場所」を心理面から捉えている研究が多い。一方<建築学・住居学系>は、施設などの利用実態やあり方が中心で、「居場所」の捉え方も、物理面に偏っている。

「「居場所」の定義の有無」について、<社会学・心理学系><建築学・住居学系>ともに、「居場所」の定義が論文中にされているのは少ない。その中で、「居場所」の定義がされている論文に注目すると、「居場所」は、<社会学・心理学系>では心理面から、<建築学・住居学系>では物理面から捉えられている。

第三節 用語の定義と理論的考察

1. 「居場所」の定義と「居場所」の枠組み

「居場所」は、「いどころ」「座る場所」などという物理的側面だけでなく、「身を落ち着ける場所」などの心理的側面からも捉えられ、物理的・心理的両方の側面から「居場所」は定義されている。

しかし、子どもの「居場所」に関する研究では、「居場所」を定義している研究は少なく、その定義も研究者によって様々である。そこで、これまで示されてきた「居場所」の定義や分類を検討し、「居場所」概念を明確にする。

(1) 「居場所」の定義

①これまでの「居場所」の定義

これまでの「居場所」の定義について例を挙げると、「自分自身を肯定的に確認できる場所」³⁾「アイデンティティを実感できる場所」⁴⁾「自分の存在を確かなものとして心の中で納得できる場所」⁵⁾「リアリティを持って自己の存在を享受できる場所」⁶⁾「一人の人間がアイデンティティを確かめることができる空間であり、自己が自己であるという存在感をヴィヴィットに実感できる場所」⁷⁾「他者との関わりの中で自分の位置と将来の方向性を確認できる場所」⁸⁾「自己を再確認し、自己肯定感や安心感を実感できる場所」⁹⁾「自分の存在を確認できる場所」¹⁰⁾などがある。しかし、これらは、「居場所」を「自分自身」「アイデンティティ」「自分の存在」「自己の存在」「自分の位置」などを「確認」「実感」「享受」「納得」できる場所であり、藤竹の「自分の存在を確認できる場所」に集約できるものである。

②「居場所」の定義の設定

①より、「居場所」は他者から認められたり、他者から自由になって自分を取り戻したりして得られるような「自分を確認できる場所」と定義することができる。これは、藤竹と同様の定義である。

また、人間がもつ重要な要素である「他者との関わり」の視点から、「居場所」を二種類に分類できると考えられる。一つは、「社会的居場所」で「他者との関わりをもつことで自分を確認できる場所」である。他は、「個人的居場所」で「他者との関わりから離れて自分を取り戻せる場所」である。ここで「個人的居場所」は、後述する藤竹の「人間的居場所」と同様の概念であるが、「社会的居場所」と対置するものとして、「個人的居場所」と表現する方が適切であると考えられる。

(2) 「居場所」の分類

「居場所」の定義を「自分を確認できる場所」と述べたが、「居場所」を詳しく捉えるため、「居場所」の分類を検討する。

①これまでの「居場所」の分類

これまで、「居場所」を明確に分類しているものは、二つみられる。一つは、藤竹¹¹⁾による分類で、①社会的居場所（自分が他人によって必要とされている場所）、②人間的居場所（自分であることを取り戻せる場所）、③匿名的居場所（匿名的な状態になることによって自分を取り戻せる場所）の三分類したものである。二つ目は、住田¹²⁾による分類で、「居場所」を人間の「関係性」と「空間性」の二軸で構成し、四分類にしたもので、①Ⅰ型（他者との共感的な関係性が安定的に形成されている社会的な場所）、②Ⅱ型（他者との共感的な関係が形成されている私的空間）③Ⅲ型（他者との関係性から切り離されて孤立した状態の私的空間）④Ⅳ型（他者との関係性から切り離されて孤立している社会的な場所）とされている。

この分類について、住田は明確な分析軸を示しているが、藤竹は明確に示していない。しかし、藤竹の分類は、住田による人間の「関係性」によって分類されていると考えられる。住田と藤竹の分類を一つの図で表現すると、図1のようになる。

②分析軸の検討

「居場所」を分類するにあたり、まず分析軸を検討する。分析軸を示した上で「居場所」の分類を行っているのは、住田だけであるので、住田が示す「関係性」と「空間性」について、検討する。

社会的と個人的という対立概念で構成されている、住田の「関係性」軸において、住田は「他者との安定的関係の有無」と捉えており、「個人的」は「他者との関係から切り離され、孤立している」ものとしている。しかし、「個人的」の概念である孤立は、否定的で限定された意味になり、これでは捉えきれない部分があると推測される。したがって、「関係性」は、人との交流と人からの隔離という客観的な状態として捉える方が適切であると考えられる。

また、「社会的場所」と「個人的場所」という対立概念で構成されている「空間性」軸について、住田は個人的場所を「個人の私的自由が及ぶ範囲」とし、それ以外を社会的場所としている。しかし、この社会的場所・個人的場所というのは抽象的であいまいな表現であり、現実的にはより相対的なものとして捉えることが必要であると考えられる。

③他者の捉え方

「居場所」の分類の考え方を大きく左右するものの1つが、他者の捉え方である。住田は、自分以外の人を全て他者と捉えているのに対し、藤竹は「人間的居場所」に一緒にいる人を他者と捉えていない。つまり、「人間的居場所」に一緒にいる人は気の許せる仲間であり、これを他者としてしまうと、住田の示すⅢ型は非常に限定的になってしまうと考えられる。

3)「居場所」の理論的枠組み

前述した「居場所」の検討を踏まえて、「居場所」の理論的な枠組みについて検討する。

①分類軸の設定

まず、「居場所」分類の基礎となる分類軸を設定する。図2に示すように、二軸で構成し、「居場所」を4タイプに分類する。横軸は「他者との関わり」を示す軸であり、住田の「関係性」軸をより客観的な捉え方をしたものであり、他者との関わりの主目的が他者との交流にあるのか、他者からの隔離にあるのかに視点を置いたものである。ただし、この時、他者からの隔離を主目的とした「居場所」の中における気の許せる仲間は他者ではない。例えば、大人に隠れて何かの行為をともに行う気の許せる仲間は他者ではないということである。次に、縦軸は「空間の支配度」を示す軸とする。これは、住田の「空間性」軸をより相対的、現実にしたものである。物や空間に対する支配度の強弱の視点で捉えたものであり、テリトリーの考え方につながるものである。ここで、テリトリーとは、本研究室にて行われたテリトリーの研究から、米田¹³⁾が定義した「人の侵入や物の出入りを制限でき、自分の所有物を自由に置き、好きなときに好きな行為ができる空間」とする。

「他者との関わり」において、交流を主目的とした「居場所」CとDが「社会的居場所」となり、隔離を主目的とした「居場所」AとBが「個人的居場所」となる。また、「空間の支配度」において、支配度の強いものが自分のテリトリーを有する「居場所」となり、支配度の弱いものが自分のテリトリーを持たない「居場所」となる。

②各分類タイプの性格付け

二軸で構成した四タイプの「居場所」について図3に示す。

Aタイプは、他者との関わりから隔離されていて、空間の支配度も強いタイプで、心理的にも物理的にも隔離されている「テリトリー型個人的居場所」であり、「個人的居場所」の中心となるものである。具体的には、自分の個室や秘密基地などが挙げられ、場合によっては家庭における風呂や便所などのプライベートな空間もここに含まれる。

Bタイプは、他者との関わりから隔離されているが、空間の支配度は弱いタイプで、「非テリトリー型個人的居場所」と言え、Aタイプの「居場所」を補完する役割があると考えられる。このBタイプは、その性格から二種類あると考えられる。一つは、ありのままの自分でいられる相手のテリトリーの場合であり、自分の支配が及ばない空間であるが、一緒にいるのは気の許せる相手であり、心理的に隔離されているといえる。二つ目は匿名的な場所であり、物理的に隔離されていないが誰にも自分の正体を知られていないという意味で、心理的に隔離されている場合である。具体的には、前者は兄弟姉妹などの個室や友達の個室、保健室など、後者は繁華街、図書館、ネット友達などが考えられる。

Cタイプは、他者との交流を目的としているが空間の支配度は強いタイプで、「テリトリー型社会的居場所」と言え、後述するDタイプを補完する「居場所」であると考えられる。このCタイプは、その性格から二種類考えられ、一つは、交流を目的とした特定の他者と共有するテリトリーであり、二つ目は、社会的な場にあって自分のテリトリーとして、自他共に認められている場所である。具体的には、前者はクラブ・サークルなどの部屋、後者は家庭の居間などで自分が座る場所や教室の自分の席などが考えられる。

D タイプは、他者との交流を目的とし、空間の支配度は弱いタイプで、心理的にも物理的にも開放されている「非テリトリー型社会的居場所」であり、「社会的居場所」の中心的なものである。具体的には、家庭における居間や学校における教室、地域における青少年センターや子ども会などが考えられる。

4) 「居場所」の持つ概念

＜人との関わり＞の視点による分類について前述したが、ここではさらに「居場所」の実態を具体的に捉えるために、＜人との関わり＞の分類を踏まえた上で、「居場所」の概念化を行う。

「個人的居場所」については、①＜精神的プライバシー行為＞、②＜心理状態の維持＞、③＜個人的な休息＞、④＜管理の目からの逃避＞、⑤＜心理状態の回復＞の5つとし、「社会的居場所」については、⑥＜価値観の共有＞、⑦＜所属（仲間）意識＞、⑧＜受容意識＞、⑨＜被受容意識＞の4つとして扱うものとする。

また、「個人的居場所」に関して、＜隔離・逃避要求＞の視点から、①②③を心理的に隔離されていれば要求が満たされる、低次元の隔離・逃避要求に対応できるもの、④⑤を心理的にも物理的にも隔離が必要な、高次元の隔離・逃避要求に対応できるものと分類する。この分類を4に示す。「社会的居場所」に関しては、＜交流の仕方＞の視点から、⑥⑦を表面的な交流でも得られる、低次元の交流に対応できるもの、⑧⑨を親密な交流によって得られる、高次元の交流に対応できるものと分類する。この分類を図5に示す。

以上、「居場所」の定義、分類、タイプ分け、概念をそれぞれ示したが、他者との関わりの視点から捉えた「社会的居場所」と「個人的居場所」は、どちらか一方があれば良いというものではなく、人間が生活する上で、共に所有していることが必要な場所であると考えられる。また、空間の支配度から捉えた「居場所」の4タイプは、中心となる「社会的居場所」と「個人的居場所」を補完したり、特殊化したものであり、「居場所」を構築する上では、いずれも必要なものであると考えられる。

<注>

- 1) 中島喜代子 他 「世代間比較からみた子どもの居場所に関する研究—個人的居場所の場合—」三重大学教育学部研究紀要 第57巻、2006年
- 2) 「個人的居場所」とは、本研究室における「居場所」の分類の1つである。詳細については、序章第三節で述べている。
- 3) 佐々木英和「ケータイ・インターネット時代の自己実現観」田中治彦編『子ども・若者の居場所の構想』94～95頁、学陽書房、2001年
- 4) ～7) 前納弘武「夫の居場所」藤竹暁編『現代人の居場所』（『現代のエスプリ』：生活文化シリーズ3）171～182頁、至文堂、2000年
- 8) 田中治彦「関わりの中としての「居場所」の構想」田中治彦編『子ども・若者の居場所の構想』7～11頁、学陽書房、2001年
- 9) 12) 住田正樹「子どもたちの「居場所」と対人的世界」住田正樹・南博文編『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』3～14頁、九州大学出版会、2003年
- 10) 11) 藤竹暁「居場所を考える」藤竹暁編『現代人の居場所』（『現代のエスプリ』：生活文化シリーズ3）47～57頁、至文堂、2000年
- 13) 米田友紀「家庭における既婚男女のテリトリーに関する研究」三重大学住居学研究室修士論文、2002年

表 1 <社会学・教育学系>の既研究

N o	発表 年	論文名	発表誌名	著作者	対象者	対象 場所	研究内容	「居場所」 定義の有無
1	1991	子どもの「居場所」とその発達の意味—1—	昭和女子大学女性文化研究所紀 要 8～12 号	玄田初栄	園児	保育所	居場所の概念化 年齢段階比較	有(※1)
2	1996	震災避難所における子どもの「心のケア」に ついて 一心の居場所の構築をめぐる	神戸海星女子学院大学・短期大学 研究紀要 第 35 号	竹内伸宜	幼児 児童	避難所	震災時の避難所 における「心のケア」	
3	1997	不登校現象と子どもの「居場所」	山口大学文学部誌 48 巻	沖田寛子	不登校児	学校 施設	不登校児の「居場 所」 「居場所」の諸類型	有(※2)
4	1998	子どもの居場所を求めて	愛知教育大学教育実践センター紀 要 創刊号	中野靖彦	小中学生	学校	学校生活での楽し みと嫌なこと	
5	1999	子どもの心をとらえる「自由な時間」の研究 —学校の中における子どもの居場所さがし	鳴門生徒指導研究 9 巻	辻映子 田中雄三	小学生	学校	学校での好きな場 所 学校構築	
6	1999	家庭・地域に於ける「子どもの居場所」の教 育的意義	創大教育研究 8 号	木全力夫	子ども	家庭 地域	「居場所」の教育的 意義	有(※3)
7	2000	中学生・高校生を取り巻く環境と居場所づく り —グループワークの活用を軸として	人間福祉研究 3 巻	太田由加里	中高生	地域	「居場所」づくり	
8	2001	子どもは家族の中に居場所があるのか —家族福祉の力動理論的展開を目指して	山口県立大学社会福祉学部紀要 第7号	二村克行	子ども	家庭	家族福祉	
9	2001	「居場所」型施設における若者の関わり方 —公的中高生施設「ゆう杉並」のエスノグラ フィー	生涯学習・社会教育学研究 26 巻	新谷周平	中高生	施設	若者の関わり方	
1 0	2001	子ども・若者の居場所づくり —若者の居場所づくりに取り組んで	日本社会教育学会紀要 No37	大場孝弘	青少年	施設	「居場所」づくり	
1 1	2001	子どもの居場所作りを目的とした小学校スク ールカウンセリング—当初に立てた目標の 振り返りを中心として	教育実践総合センター研究紀要 12号 <山口大学>	田辺敏明	小学生	学校	スクールカウンセ リングのスタンス	
1	2001	教室での居場所をなくしていた女子高校生	生徒指導研究 第 13 号	赤松久美子	女子高校	学校	時間制限カウセ	

2		への時間制限カウンセリングー中学時代に受けたいじめによる心の傷を克服して	<兵庫教育大学生徒指導研究会>	上地安昭	生		リングの意義とその効果	
1 3	2001	中・高校生の新しい居場所をめざして 杉並区児童青少年センターの中・高校生に せまる実践と展望	児童育成研究	添田京子 鈴木なおみ 佐藤裕 他	中高生	施設	施設の利用状況	
1 4	2002	小中学生における居場所と生活意識に 関する調査	発達心理学の研究 第4号 <中央大学文学部>	石田直子 田澤実 照井裕子 他	小中学生	家庭 学校 地域	「居場所感」の実態 「居場所」と生活意 識との関係	有(※4)
1 5	2002	子ども参画による中・高校生の居場所づくり ー政策過程への子ども参加	「子どもゼミナール」論文集 (平成13年度)	加藤真樹	中高生	施設	「居場所」づくり	
1 6	2002	青少年施設の居場所機能 ー90年代の青少年問題関連文献の分析か ら	徳島大学大学開放実践センター紀 要	西村美東士	青少年	施設	「居場所」づくり	
1 7	2003	子どもたちの「居場所」と対人関係(Ⅱ) ー小学生・中学生の場合	子どもたちの居場所と対人的世界 の現在(単行本)	住田正樹	小中学生	家庭 学校 地域	「居場所」の実態 「居場所」の形成条 件	有(※5)
1 8	2003	孤立をくりかえす女子中学生の事例 ー居場所を見つけるまでのかかわり	お茶の水女子大学発達臨床心理 学紀要	畑山愛	女子中 学生	学校	セラピストの関わ り方	
1 9	2003	中学生の心の居場所の研究 ー感情と行動及び意味からの考察	情報文化研究 第17号 <名古屋大学情報文化学部>	小畑豊美 伊藤義美	中学生	家庭 学校	「居場所」での感 情・行動及び意味	
2 0	2003	こころの居場所を求め、自傷を繰り返す子 どもへの援助を通して	大正大学カウンセリング研究所紀要	国分美希	子ども	施設	精神的な問題を抱 えた子どもへの援 助	
2 1	2003	不登校児キャンプに参加する子どもたち (Ⅱ) ー不登校児の居場所としてのキャンプ	千葉大学教育実践研究 第10号	笠井孝久	不登校児	地域	不登校児にとって 必要な「居場所 」	有(※6)
2 2	2003	子どもの居場所づくりと鈴木道太の「子ども 会」論	生涯学習・社会教育学研究	森本扶	子ども	地域	「居場所」づくり	
2 3	2004	高校生がやすらげる「居場所」に関する調 査研究	高知大学教育実践研究	高柳真人	高校生	ー	やすらげる場所 「居場所」のあり方	有(※7)
2	2004	小学校において支援が必要な児童への教	岡山大学教育学部研究集録	佐藤暁	不登校児	学校	不登校児に対する	

4		育的支援 第 6 報 教室を居場所にできない子どもの支援	第 125 号	築山道代 大 竹 喜 久 他			支援のあり方	
2 5	2004	子どもの居場所と臨床教育社会学	教育社会学研究 74集 ＜日本教育社会学会＞	住田正樹	子ども	—	問題行動の解決に とって「居場所」の 持つ意味	有(※8)
2 6	2005	子 ども・若者の「居場所」づくりに関する事 例分析 一愛知県豊田市井郷地区交流館 の「井郷子ども塾」事業への参与観察を手 がかりに	中部教育学会紀要	益川浩一	子ども	塾	「居場所」づくり	有(※9)
2 7	2005	包括的な若者の自立支援と福祉教育の展 開 —「子ども・若者の居場所」論にもふれて	市立名寄短期大学紀要	大坂祐二	若者	—	社会的自立に対す る支援	有(※10)
2 8	2005	子どもの遊びと居場所に関する一考察 —宇都宮市を例に	宇都宮大学教育学部 教育実践総合センター紀要	関谷千晴 陣内雄次 上田由美子	小学生	家庭 学校 地域	「居場所」での遊び 「居場所」のあり方	
2 9	2005	外国人の子どもの人権と居場所	横浜国立大学教育人間科学部紀 要 1 教育科学 第7号	矢野泉	外国人の 子ども	家庭 学校 地域	「居場所」づくり	

※1 子どもの心と活動の拠り所

※2 子ども一人ひとりの個性が大切にされ、自分の能力が十分に発揮でき、「自己存在感」を得られるような、子どもが精神的に安定できる場所

※3 自分の安全を守り、休息と新しいエネルギーの補給をしてくれる環境

※4 「居場所感」・・・個人が自分と周囲の状況や人々の間に良好な相互関係があると、主観的に感じており、その結果としてその個人の中に肯定的な感情が生じている状態

※5 単に人が居るという物理的空間を意味するのではなく、そこに居ると安心とかやすらぎとかくつろぎを感じ、またありのままの自分をそこに
いる他者が受け入れてくれる、

承認してくれるといった自己受容、自己承認、そして自己肯定感を実感できるような所

※6 一人ひとりの存在価値を認め、大切に扱ってくれる場所

※7 「やすらげる」という心理的な意味を有する場所

※8 安心感とリラックス感をもてる場

※9 他者との関係を基盤とし、自己を承認し確認し、自己肯定感や安心感、安らぎを覚え、ほっと安心して居られるところ

※10 学校や社会の中で抑圧され、傷ついた若者達が、一方的に指導され方向づけられる場から逃れ、自分自身を取り戻そうとする「癒しの場」

表2 <建築学・住居学系>の既研究

N o	発表 年	論文名	発表誌名	著作者	対象者	対象 場所	研究内容	「居場所」 定義の有無
1	1999	住戸及び地域内における中・高生の居場所について	日本女子大学紀要 家政学部 第46号	定行まり子 松木要詩子	中高生	家庭 地域	子ども部屋の使われ方 地域で好きな場所	
2	2000	児童青少年センター『ゆう杉並』の利用実態と中高生の地域施設要求について	日本女子大学大学院 紀要 家政学研究科 人間生活学研究科6	松木要詩子 定行まり子	中高生	施設	利用場所の実態 施設利用の実態	
3	2001	高校生の生活とストレス・居場所の実態－北陸2県におけるケーススタディ	都市計画論文集	桜井康宏 竹田昌美	高校生	家庭 学校	居場所の実態 居場所とストレス・生活実態との関連	
4	2002	大型児童センター及び児童センターにおける中高生の地域施設利用の実態について	日本女子大学紀要 家政学部 第49号	定行まり子 根橋由里子	中高生	施設	施設利用の実態	
5	2002	集合住宅に居住する中高生の家族生活からみた自室に関する考察	日本女子大学紀要 家政学部 第49号	定行まり子 下戸由貴子	中高生	家庭	子ども部屋のあり方	
6	2003	中学生の意識からみた家庭、学校、地域における居場所に関する考察	日本女子大学紀要 家政学部 第50号	定行まり子 下戸由貴子	中学生	家庭 学校 地域	地域比較 家庭・学校・地域に対する意識	
7	2003	地域生活における子どもの居場所－大阪市都心部の小学校3校区の調査から－	生活科学研究誌 Vol.2 <大阪市立大学大学院生活科学研究科 生活科学部>	西川知子 小伊藤亜希子 上野勝代 他	小学生	地域	居場所形成の条件	有(※1)
8	2003	都市における児童・青少年・ホームレスの居場所と環境構造特性	住宅総合研究財団 研究年報 No.30	水月昭道	小中高生 ホームレス	地域	居場所における行動と環境との関わり	
9	2004	児童館における中高生対応についての考察 地域における中高生の居場所に関する研究 その1	日本建築学会計画系論文集 No577	定行まり子 根橋由里子	中高生	施設	児童館整備	
1	2004	保育所における園児の居場所の展開と	日本建築学会計画系論文集	山田あすか	園児	保育所	年齢段階比較	有(※2)

0		活動場面の抽出方法に関する考察：保育所におけるこどもの生活行動特性と居場所に関する研究(その1)	No580	上野淳 登張絵夢			居場所の実態	
1 1	2005	住空間における子どもの居場所について一子どもを中心にみた住環境の計画に関する研究(その1)	子ども環境学研究 Vol1 No2	山田直美 森保洋之	小中学生	家庭	居場所の実態 住環境計画	
1 2	2005	都市部における街区公園の使われ方の調査—神奈川県内都市部での子どもの居場所調査	子ども環境学研究 Vol1 No2	浅見美穂 佐藤里紗 関口佐代子 他	—	公園	公園の利用実態	
1 3	2006	保育所における園児の居場所の反復性に関する研究	日本建築学会計画系論文集 No602	山田あすか 上野淳	園児	保育所	年齢段階比較 居場所の反復性	
1 4	2006	中学校における生徒の場所の想起と居場所の選択に関する考察	日本建築学会計画系論文集 No604	常陰有美 倉斗綾子 新田佳代他	中学生	学校	居場所の実態 中学校空間のあり方	

※1 遊びなどの積極的な行為の場だけでなく、気晴らしのような余暇空間や、気ままな行為のできる場

15 ※2 子どもの活動が展開している場所

表3 三重大学住居学研究室における既研究

N o	発表 年	論文名	発表誌名	著者者	対象者	対象 場所	研究内容	「居場所」 定義の有 無
1	2003	中学生と大学生の比較からみた子どもの「居場所」	三重大学教育学部 研究紀要 第54巻	中島喜代子	中学生 大学生	家庭	中大比較 子ども部屋の対する意識と実態	有
2	2004	家庭、学校、地域における子どもの居場所	三重大学教育学部 研究紀要 第55巻	中島喜代子	高校生	家庭 学校 地域	居場所の実態 居場所と心理状態 の関連	有
3	2006	世代間比較からみた子どもの居場所に関する研究 — 個人的居場所の場合 —	三重大学教育学部 研究紀要 第57巻	中島喜代子 小長井明美 木屋真依	高校生	家庭 学校 地域	世代間比較 居場所の実態	有
4	2006	子どもの居場所形成とそのメカニズム	2005 年度修士論文	木屋真依	中学生	家庭 学校 地域	居場所形成とメカニズム	有

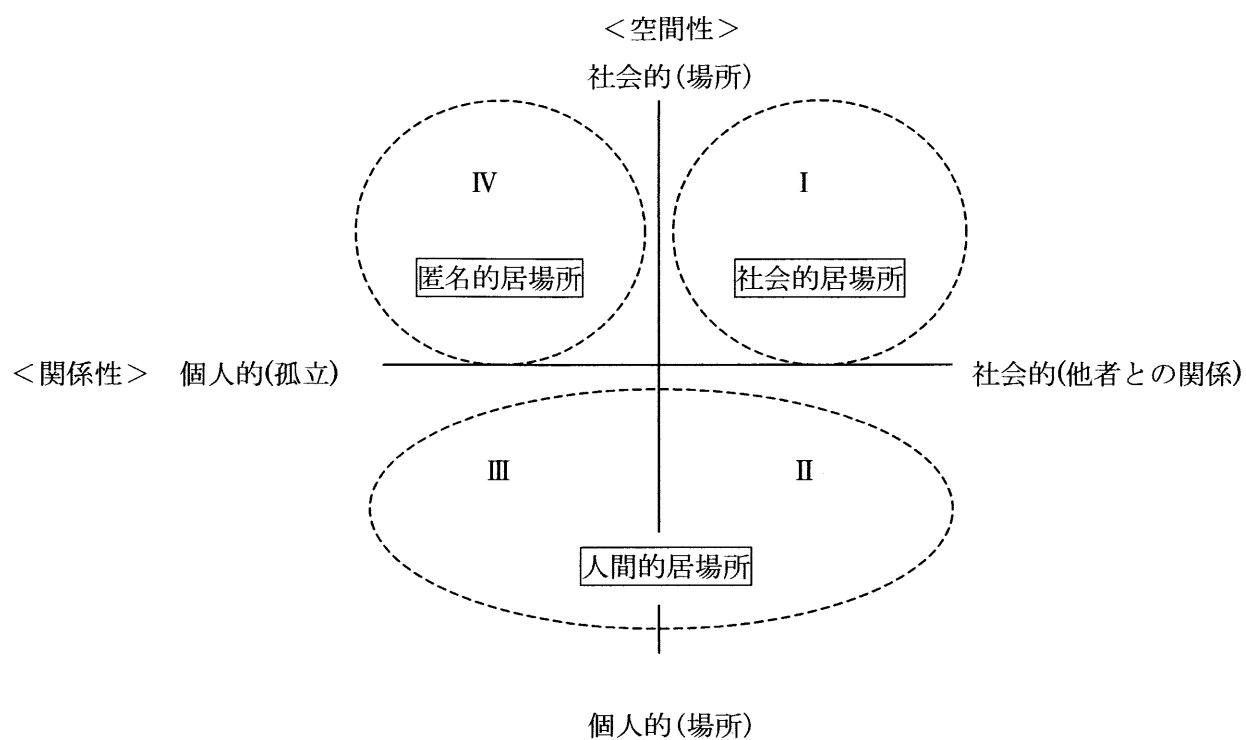


図1 藤竹と住田による分類の関係

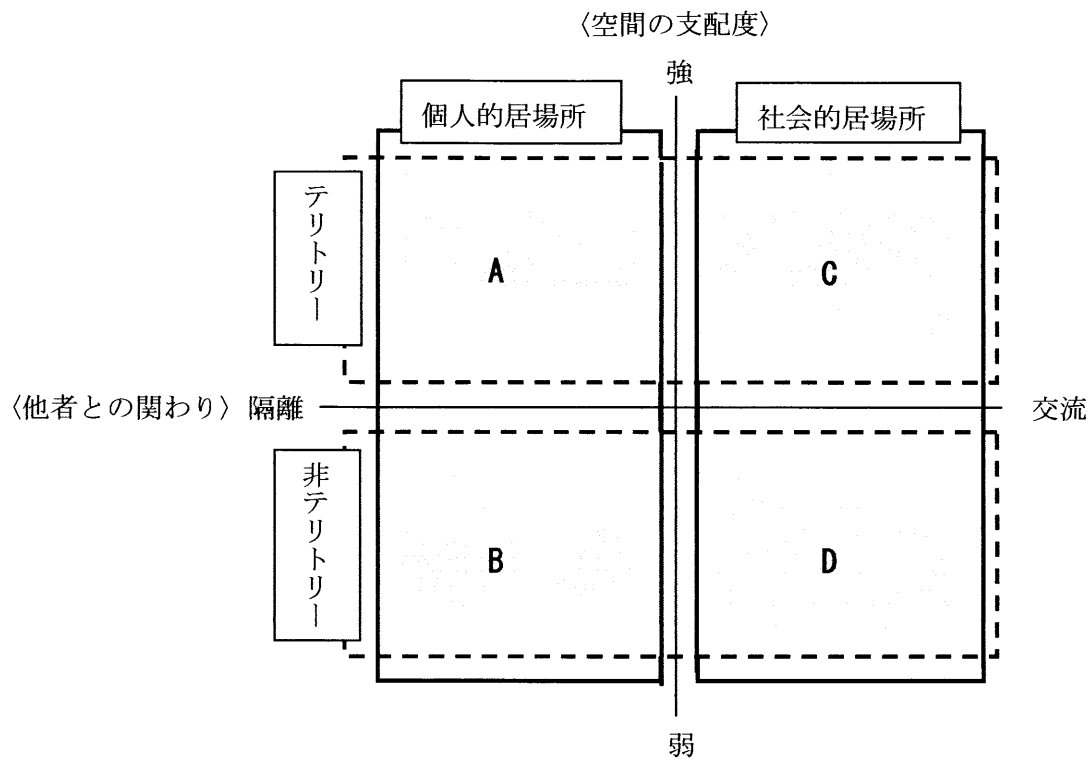
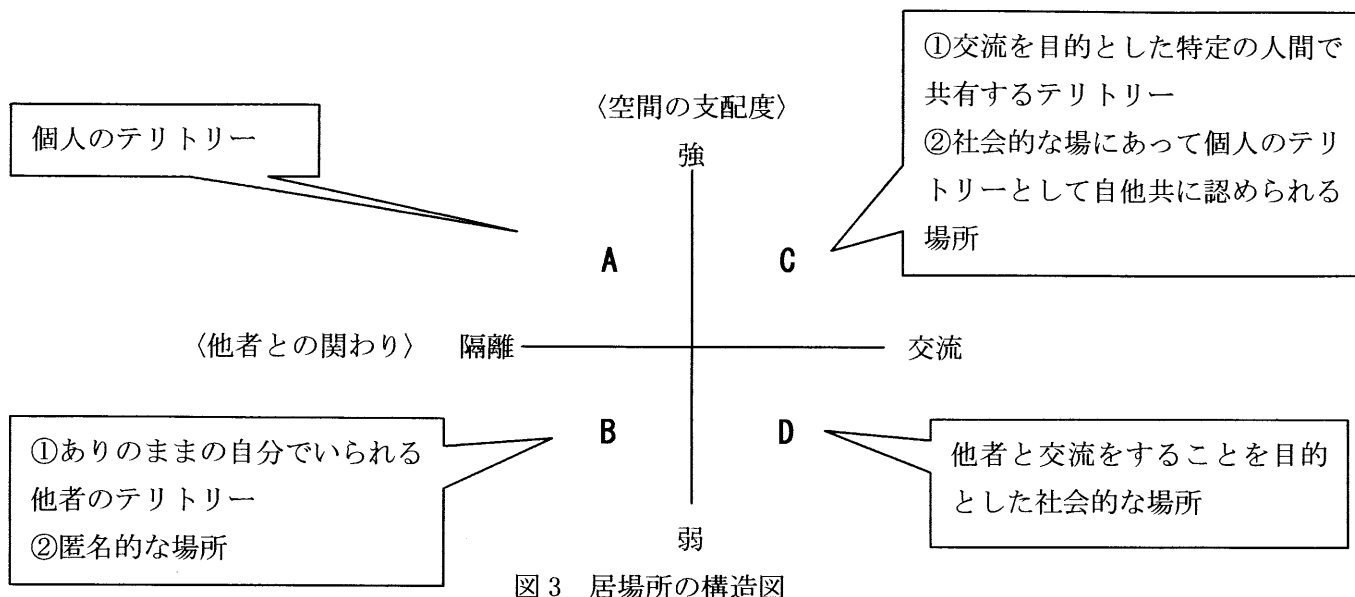


図 2 分類軸の構成



隔離・逃避要求

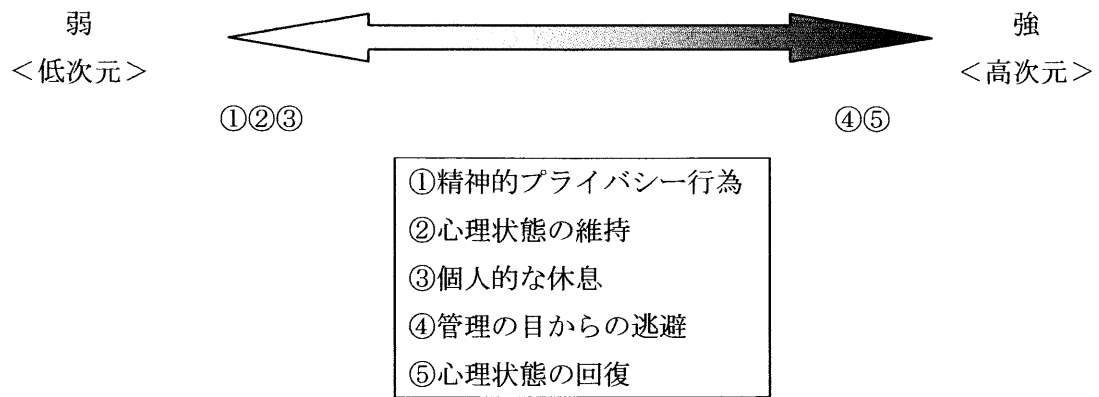


図4 「個人的居場所」概念の分類

交流の仕方

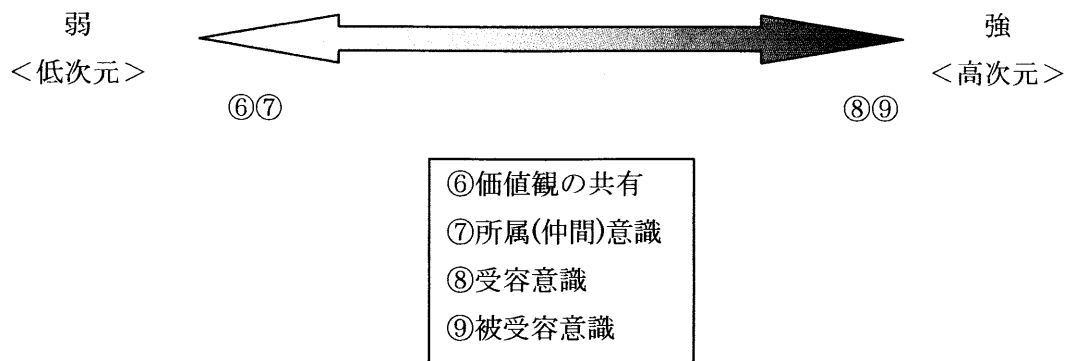


図5 「社会的居場所」概念の分類

本 論

第一章 研究方法と調査対象の概要

第一節 調査の方法

研究の目的に従って、本研究全体の手順とその方法について述べる。研究手順を表 1-1-1 に示す。

本研究は、現在の高校生の居場所が以前と比べてどのように変化しているのか捉え、現在の高校生の居場所の実態や特徴を明らかにすることを目的としている。2004 年に同様の研究を行ったが、「居場所」の中で「社会的居場所」を捉えるには至っていない。また、調査対象者の生活は、自然環境に恵まれたところに居住し、受験勉強にも追われず、仲間と遊ぶ時間も持ちやすい生活をしている高校生であり以前との環境変化は大きくない。そのため、環境変化が大きいと思われる高校生を対象とした調査も行った上で検討する必要がある。2004 年度の研究を踏まえて、本調査を行った。

本研究で用いた調査票について、高校生とその保護者を対象としたものをそれぞれ作成した。保護者には、自身が高校生あるいは中学生当時のことについて思い出して回答してもらうという方法である。しかし、高等学校は義務教育ではないため高校に通っていた保護者のみを対象に調査をすることは困難である。そこで、調査票に高校生当時について回答するのか、中学生当時について回答するのか明記してもらい、分析の際には比較の対象を明確にするため、高校生当時について回答した保護者のみを比較対象とした。そして高校生の傾向と保護者の傾向を比較検討する。さらに、居場所の形成要因や居場所所有が影響を与える要素についても明らかにするため、居場所の所有実態と調査項目との関連についても分析する。

この調査目的の主旨にそって調査を実施した。調査時期は 2006 年 6 月で、三重県内の県立 Y 高等学校の 1、2 年生の生徒とその保護者を対象としたアンケート調査である。その結果、高校生は 234 件、保護者は 278 件の有効サンプルを得た。調査の概要を表 1-1-2 に示す。

表 1-1-1 研究の手順

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">① 本研究の方向・内容を明確にするために、子どもの居場所に関する文献、既研究の検討を行い、本研究の位置づけを明らかにした。② 2004 年度に行った同様の研究を検討し、今後の課題を明確にした。③ ①②で検討した結果をもとに、本研究の意義・目的を明らかにした。④ 高校生とその保護者を対象とした調査票を作成し調査を行った。対象校に調査票の配布と回収を依頼した。⑤ 調査票を回収後、調査票の中には記入不足による無効票も含まれているため、有効票と無効票に分類した上で、転記票とコード表を作成し転記を行った。⑥ 統計処理用ソフトである SPSS を用いてデータを入力し、単純集計を行った。⑦ 調査項目と〈子ども世代〉〈親世代〉の指標とをクロス分析し、カイ二乗検定及び順位相関係数についての検定を行い、世代別の特徴を明らかにした。⑧ 居場所の形成要因や、居場所所有が影響を与える要素を明らかにするため、居場所の所有実態と調査項目との関連をクロス分析し、カイ二乗検定を行い、居場所の関連構造を明らかにした。 |
|--|

第二節 調査対象の概要

本節では、調査対象の高校生が居住する地域の概要と調査対象の概要について述べる。

1. 調査対象の高校生が居住する地域の概要

三重県四日市市は三重県の北部に位置しており、人口約 31 万人（人口密度 1,481.0 人／km²）で三重県内で最も人口の多い都市である。

今回調査対象とした高校生の通う Y 高校は四日市市の主要駅から電車で約 10 分のところに位置しており、全校生徒 958 人の普通科の高校である。周辺にはショッピングセンターや飲食店、娯楽施設などが徒歩圏内にある。生徒の大半が大学進学を目指す進学校であるが、勉強だけでなく部活動や生徒会活動も盛んな学校である。

2. 調査対象者の概要

調査対象の高校生の学年について表 1-2-2-1 に示す。1 年生が約 3 割、2 年生が約 7 割と、2 年生が多い。

保護者の調査回答時代について表 1-2-2-2 に示す。高校生時代について回答したものが 9 割強であり、中学生時代については 4.1%とわずかであった。ほとんどが高校当時のことについて回答している。本研究は世代間比較から高校生の居場所について捉えることを目的としている。分析軸を明確にするため、以下の分析では保護者の中でも高校生時代について回答したもののみを分析対象として扱うこととする。なお、以下本論文では調査対象の高校生を〈子ども世代〉、保護者を〈親世代〉と表すものとする。

調査対象の保護者の年齢について表 1-2-2-3 に示す。40 代が全体の約 8 割をしめ、平均年齢は 45.6 歳である。このことから、〈子ども世代〉と〈親世代〉の時間的な開きは約 25～35 年であるといえる。

〈子ども世代〉〈親世代〉それぞれの性別、家族人数、家族形態、居住形態、居住地域について表 1-2-2-4～8 に示す。

性別については、両世代とも男性が約 4 割、女性が約 6 割と、やや女性が多い。

家族人数については、両世代とも平均家族人数は約 5 人である。

家族形態については、両世代とも核家族が約 6 割、拡大家族が約 3.5 割と核家族が多い。平均家族人数は約 5 人であったことから、両親と子ども三人からなる家族形態の子どもが多いといえる。

居住形態については、両世代とも約 9 割が一戸建て住宅に居住している。

居住地域については、両世代ともほとんど三重県に居住している。

以上より、調査対象の〈子ども世代〉と〈親世代〉は約 25～35 年の時間的な開きがあることが捉えられた。調査対象の概要については、世代間で大きな違いはなく、両世代とも性別はやや女性が多い。また、両世代とも調査対象者の平均像は、三重県内の一戸建て住宅に居住しており、両親ときょうだい二人と生活する高校生であることが捉えられた。

第三節 調査項目

I. 家庭について

- (1) 居心地が良いと感じる時
- (2) 6つの側面からみた心理状態
- (3) 家庭における場所の空間の支配度－基本テリトリー・防御テリトリー
- (4) 居場所の実態－場所・相手

II. 学校について

- (1) 部活動の参加状況 (※子ども世代のみ)
- (2) 生徒会・委員会活動の参加状況 (※子ども世代のみ)
- (3) 居心地が良いと感じる時
- (4) 6つの側面からみた心理状態
- (5) 学校における場所の空間の支配度－基本テリトリー
- (6) 居場所の実態－場所・相手

III. 地域について

- (1) 地域の雰囲気
- (2) 近所付き合い
- (3) 居住期間
- (4) 自宅周辺の環境
- (5) よく行く場所
- (6) 居心地が良いと感じる時
- (7) 地域における場所の空間の支配度－基本テリトリー
- (8) 居場所の実態－場所・相手

IV. 居場所に対する要求

- (1) 居場所に対する要求 ー家庭・学校・地域

V. 生活について

- (1) 所有物
- (2) 居心地の良い場所
- (3) 勉強と友人関係に対するストレスの有無
- (4) 平日の行動パターン
- (5) 放課後の学校における行動パターン
- (6) 放課後の地域における行動パターン

- (7) 家庭での行動パターン
- (8) 家庭における交流
- (9) 土日の行動パターン
- (10) 間接的コミュニケーションの有無・社会的居場所としての役割
(※子ども世代のみ)

VI. 性格について

- (1) 性格

VII. 人間関係について

- (1) 親との関係
- (2) きょうだいとの関係
- (3) 先生との関係
- (4) 友達との関係
- (5) 先生や友達以外の知人（先輩や後輩など）との関係
- (6) 地域で本音で話せる人の有無

VIII. 高校生の属性について

- (1) 家族人数
- (2) 家族形成
- (3) 居住地域
- (4) 居住形態
- (5) 家族形態
- (6) 学年
- (7) 性別
- (8) 年齢 (※親世代のみ現在の年齢を回答)
- (9) 回答時代 (※親世代のみ)

表 1-1-2 調査の概要

	高校生	保護者
配布数 (部)	640	1280
回収数 (部)	242	339
回収率 (%)	37.8	26.5
無効数 (部)	8	45
有効数 (部)	234	294
有効率 (%)	96.7	86.7

表 1-2-2-1 学年

	件数	%
1 年生	62	26.5
2 年生	172	73.5
合計	234	100.0

表 1-2-2-2 保護者の調査回答時代

	件数	%
高校生時代	278	95.9
中学生時代	12	4.1
計	290	100.0
無回答	4	—
合計	294	—

表 1-2-2-3 保護者の年齢

	件数	%
30～34歳	1	0.4
35～39歳	8	2.9
40～44歳	108	39.3
45～49歳	114	41.5
50～54歳	39	14.2
55～59歳	4	1.5
60歳～	1	0.4
計	275	100.0
平均年齢	45.6（歳）	—
無回答	3	—
合計	278	—

表 1-2-2-4 性別

	〈子ども世代〉		〈親世代〉	
	件数	%	件数	%
男	102	44.5	112	40.6
女	127	55.5	164	59.4
計	229	100.0	276	100.0
無回答	5	—	2	—
合計	234	—	278	—

表 1-2-2-5 家族人数

	〈子ども世代〉		〈親世代〉	
	件数	%	件数	%
2人	1	0.5	3	1.2
3人	11	5.1	20	7.8
4人	74	34.3	104	40.3
5人	61	28.2	64	24.8
6人	44	20.4	43	16.7
7人	20	9.3	21	8.1
8人	5	2.3	3	1.2
計	216	100.0	258	100.0
平均人数	5 (人)	—	4.8 (人)	—
無回答	18	—	20	—
合計	234	—	278	—

表 1-2-2-6 家族形態

	〈子ども世代〉		〈親世代〉	
	件数	%	件数	%
核家族	130	60.5	152	58.9
拡大家族	78	36.3	90	34.9
欠損家族	7	3.3	16	6.2
計	215	100.0	258	100.0
無回答	19	—	20	—
合計	234	—	278	—

表 1-2-2-7 居住形態

	〈子ども世代〉		〈親世代〉	
	件数	%	件数	%
一戸建て住宅	207	90.0	248	92.5
集合住宅	23	10.0	20	7.5
計	230	100.0	268	100.0
無回答	4	—	10	—
合計	234	—	278	—

表 1-2-2-8 居住地域

		〈子ども世代〉		〈親世代〉	
		件数	%	件数	%
東 海 地 方	三重県	228	100.0	209	78.3
	愛知県	0	0	16	6.0
	岐阜県	0	0	3	1.1
北海道・東北地方		0	0	1	0.4
関東地方		0	0	4	1.5
甲信越・北陸地方		0	0	9	3.4
近畿地方		0	0	8	3.0
中国・四国地方		0	0	8	3.0
九州・沖縄地方		0	0	9	3.4
計		228	100.0	267	100.0
無回答		6	—	11	—
合計		234	—	278	—

第二章 親世代・子ども世代比較にみる高校生の生活と行動

居場所とは、日々生活しながらみつけていくものであり、生活のあり方と大きく関係していると考えられる。

本章では、高校生の居場所のあり方全般に対して、関連があると考えられる高校生の行動と生活や心理について世代間比較を通して検討する。

第一節 高校生の行動実態

高校生は平日の大半を学校で過ごす。授業など学校全体である程度統一的なプログラムをこなしていくが、授業終了後は、すぐ帰宅する者や部活をする者、寄り道して帰宅するものなど個人によって行動パターンは様々であると考えられる。そのため、本節では、高校生が比較的自分の意思で行動できる放課後の過ごし方について、世代による違いを捉えるため、「放課後の行動パターン」「学校における放課後の過ごし方」「地域における過ごし方」「家庭における過ごし方」「家庭における交流」の5項目について検討する。また、休日の生活について捉えるため、「土日の過ごし方」の検討も行う。

1. 放課後の行動パターン

放課後の行動パターンについて大枠で捉えるため、A「授業終了後→帰宅」、B「授業終了後→学校→帰宅」、C「授業終了後→学校→地域→帰宅」、D「授業終了後→地域→帰宅」の4カテゴリーから最も多い行動パターンを1つ選択する方法で調査し、世代間比較を通して検討した。結果を図2-1-1に示す。

両世代ともB「授業終了→学校→帰宅」の学校に残ったあと帰宅するものが過半数を占めており、授業終了後も学校で過ごすものが多い。すぐ帰宅するAパターンや地域に寄り道するDパターンは1～2割と低い。

世代間の違いについて検討すると、カイ二乗検定において1%水準の有意差がみられ、世代による違いがみられた。Bの行動パターンに次いで多い行動パターンは〈子ども世代〉ではC「授業終了→学校→地域→帰宅」であるのに対し、〈親世代〉ではA「授業終了後→帰宅」であった。このことから、〈子ども世代〉は授業終了後すぐに帰宅するものは少なく、学校に残ったり、地域に寄り道するものが多いことが捉えられた。

2. 学校における放課後の過ごし方

学校において放課後どのような過ごし方をしているのか捉えるため、放課後の過ごし方について「部活動をする」「生徒会・委員会活動をする」「勉強したり読書をしたりする」「友達や先生と遊んだりしゃべったりする」「その他」「何もせずに帰る」の6カテゴリーから最も多い過ごし方を1つ選択する方法で調査し、世代間比較を通して検討した。結果を図2-1-2に示す。

両世代とも、部活動をするものが過半数を占め、放課後は部活動をしているものが多い。部活以外の過ごし方では、「友達や先生と遊んだりしゃべったりする」が1～2割である。

世代間の違いについて検討すると、カイ二乗検定において1%水準の有意差があり、世代による違いがみられた。部活動をして過ごす割合は〈子ども世代〉の方が高い。また、何

もせずに帰宅する割合は〈親世代〉の方が高い。このことから、〈子ども世代〉の方が学校で過ごす時間が長く、過ごし方では、部活動をしているものが多いことが捉えられた。

3. 地域における過ごし方

地域ではどのように過ごしているのか捉えるため、地域での過ごし方について、「塾・習い事に行ったり、図書館で自習をする」「友達の家に行く」「友達と店や公園、駅などでぶらぶらする」「一人で店や公園、駅などでぶらぶらする」「その他」「家庭・学校には行かない」の6カテゴリーから最も多い過ごし方を1つ選択する方法で調査し、世代間比較を通して検討をした。結果を図2-1-3に示す。

両世代とも、「家庭・学校以外には行かない」割合は半数以下で、何らかの形で地域に行くものが多い。

世代間の違いについて検討すると、カイ二乗検定において1%水準の有意差があり、世代による違いがみられた。地域における過ごし方に違いがあり、〈子ども世代〉では「塾・習い事に行ったり、図書館で自習をする」「友達と店や公園、駅などでぶらぶらする」が多いことに對し、〈親世代〉では「友達の家に行く」が多い。また、〈親世代〉の方が「家庭・学校以外には行かない」という割合が高い。これらのことから、〈子ども世代〉の方が地域に行く高校生が多く、過ごし方も友達の家で過ごすのではなく、塾や図書館で勉強したり、友達とお店に行ったりして過ごすものが多いことが捉えられた。

4. 家庭における過ごし方

帰宅後、就寝まで家庭ではどのように過ごしているのか大枠で捉えるため、家庭での過ごし方について「ほとんど自分の部屋にいる」「ほとんど家族と一緒に過ごす」「家族と一緒に過ごすのと自分の部屋にいるのが大体半分ずつくらい」「家には寝る時だけしかいない」の4カテゴリーから最も多い過ごし方を1つ選択する方法で調査し、世代間比較を通して検討した。結果を図2-1-4に示す。

両世代とも、「家族と一緒に過ごすのと自分の部屋にいるのが大体半分ずつくらい」が過半数であり、家庭では交流と隔離のバランスのとれた過ごし方をしているといえる。次いで多い過ごし方は「ほとんど自分の部屋にいる」が2～3割であり、家庭では一人で過ごす時間を持っているものが多い。

世代間の違いについて検討すると、カイ二乗検定において5%水準の有意差があり、世代でやや違いがみられた。〈子ども世代〉の方が「ほとんど自分の部屋にいる」という割合が高く、〈子ども世代〉の方が家庭において一人で過ごす傾向があることが捉えられた。

5. 家庭における交流

家庭では誰とどのように関わっているのか捉えるため、「友達を家によんで遊ぶ」「友達に電話したり、メールしたりして過ごす」「家族と一緒に過ごす」「家ではほとんどだれとも関わらない」の4項目について、あてはまるもの全てを選択する方法で調査し、世代間比較を通して検討した。結果を図2-1-5に示す。

両世代とも「家族と一緒に過ごす」が約8割であり、ほとんどが家庭では家族と交流している。友達との交流については、「友達を家によんで遊ぶ」という直接的な交流は2～3

割、「友達に電話したり、メールしたりして過ごす」という間接的な交流は3～6割であり、家庭での交流は主に家族であることが捉えられた。また、「家ではほとんどだれとも関わらない」は1割おり、家族とも友達とも交流をもたないものもいることが捉えられた。

世代間の違いについて検討すると、「友達を家に呼んで遊ぶ」と「友達に電話したり、メールしたりして過ごす」の2項目について、カイ二乗検定で1%水準の有意差、順位相関係数で1%水準の有意性があり、世代による違いがみられた。「友達を家に呼んで遊ぶ」は〈親世代〉の方が多く、「友達に電話したり、メールしたりして過ごす」は〈子ども世代〉の方が多い。このことから、家庭における友達との交流手段は世代によって異なっており、〈子ども世代〉では直接的な交流よりも、メールや電話をつかった間接的な交流が多くなっていることが捉えられた。家族との交流については、世代による違いはみられなかった。

6. 土日の過ごし方

土日の過ごし方を捉えるため、「家の中で一人でのんびりする」「家の中で趣味や好きな事に一人で集中する」「家で家族や友達と一緒に過ごす」「家で宿題や予習、復習など勉強をする」「部活動をする」「一人で店や公園、公共施設などでのんびりする」「一人で買い物に出かけたり遊んだりする」「家族と一緒に買い物に出かけたり遊んだりする」「友達と一緒に店や公園、友達の家などで遊ぶ」「塾・習い事に行ったり、図書館で自習する」「その他」の11カテゴリから最も多い過ごし方を1つ選択する方法で調査し、世代間比較を通して検討した。結果を図2-1-6に示す。

両世代とも、家庭あるいは学校で過ごすものが多く、地域で過ごすものは少なくなっている。

世代間の違いについて検討すると、カイ二乗検定において1%水準の有意差があり、世代による違いがみられた。〈子ども世代〉では「部活動をする」が多く、〈親世代〉では家庭で過ごすものが多い。また、〈親世代〉では「友達と一緒に店や公園、友達の家などで遊ぶ」が多い。このことから、〈子ども世代〉では平日と同様に土日も部活動をして過ごすものが多いことが捉えられた。

第二節 高校生の生活と心理

居場所のあり方と関係があると思われる、高校生の生活と心理について世代別の傾向を捉えるため、「所有物」「性格」「居心地の良い場所」「受験勉強・友人関係に対するストレスの有無」について世代間比較を通して検討を行った。

1. 所有物

生活が豊かになり、子ども専用の所有物は充実してきていると思われる。また、最近では携帯電話やインターネットが急速に普及し、相手と直接顔を合わせなくともコミュニケーションを取りやすくなり、コミュニケーションのあり方も変化してきている。このことから、所有物は子どもの生活に大きく影響を与えていると考えられる。そこで、所有物について世代間の変化を捉えるため、①「携帯電話」②「家での自分専用電話」③「専用パソコン」④「専用テレビ」⑤「専用テレビゲーム機」⑥「専用部屋」⑦「きょうだいとの

共用部屋」の7項目について、それぞれ「所有している」「所有していない」のどちらか1つを選択する方法で調査した。ただし、①「携帯電話」については、普及し始めたのが最近であるため、〈子ども世代〉のみ調査を行った。②～⑦については両世代調査を行い、世代間比較を通して検討した。結果を図2-2-1に示す。

① 携帯電話

〈子ども世代〉では97.8%が所有しており、ほとんどが携帯電話を所有していることが捉えられた。

② 家庭での自分専用電話

両世代とも所有率は1割未満であり所有率は低く、高校生の主な通信手段は携帯電話の方である。

世代間による違いについて検討すると、カイ二乗検定において5%水準の有意差、順位相関係数において5%水準の有意性があり、世代によりやや違いがみられた。〈子ども世代〉の方がやや所有率が高いことが捉えられた。

③ 専用パソコン

世代による違いについて検討すると、カイ二乗検定における1%水準の有意差、順位相関係数における1%水準の有意性があり、世代による違いがみられた。〈親世代〉では所有者はいない。〈子ども世代〉の方も所有率は約2割と低い。〈子ども世代〉ではほとんどが携帯電話を持っており、自分専用電話の所有率もやや高かったことから、世代間では通信手段に大きな違いがあることが捉えられた。

④ 専用テレビ

両世代とも所有率は2割前後と低い。

世代による違いについて検討すると、カイ二乗検定における1%水準の有意差、順位相関係数における1%水準の有意性があり、世代による違いがみられた。〈子ども世代〉の方が所有率は高いことが捉えられた。

⑤ 専用テレビゲーム機

両世代とも所有率は低い。

世代による違いについて検討すると、カイ二乗検定における1%水準の有意差、順位相関係数における1%水準の有意性があり、世代による違いがみられた。専用テレビと同様に〈子ども世代〉の方が所有率は高いことが捉えられた。

⑥ 専用部屋

両世代とも所有率は高く、7～8割が専用部屋を所有している。

世代による違いについて検討すると、カイ二乗検定における1%水準の有意差、順位相関係数における1%水準の有意性があり、世代による違いがみられた。〈子ども世代〉の方が所有率が高いことが捉えられ、子ども部屋の専用個室化が進んでいるといえる。

⑦ きょうだいとの共用部屋

両世代とも所有率は約2割と低い。

世代間による違いについて検討すると、カイ二乗検定において5%水準の有意差、順位相関係数において5%水準の有意性があり、世代によりやや違いがみられた。〈親世代〉の方がやや所有率が高い。専用部屋の所有率は〈子ども世代〉の方が高かったことから、〈子ども世代〉の方が子ども部屋の専用個室化が進んでいるといえる。

また、⑥「専用部屋」の調査結果と合わせて、子ども部屋の所有状況を検討したところ、4つの子ども部屋所有パターンが得られた。結果を図2-2-1-1に示す。得られた子ども部屋所有パターンは、A「専用部屋と共用部屋の両方を所有している」、B「専用部屋のみ所有している」、C「共用部屋のみ所有している」、D「子ども部屋は所有していない」の4パターンである。両世代とも最も多いパターンは、Bパターンの専用部屋のみ所有しているもので、次いでCパターンの共用部屋のみ所有しているパターンであった。Aパターンの両方所有しているものも約5%いるが、少数である。Dパターンの子ども部屋を所有していないものは5%以下であり、専用部屋か共用部屋のどちらかは所有しているといえる。

世代間の違いを検討したところ、カイ二乗検定において5%水準の有意差、順位相関係数において1%水準の有意性があり、世代によって違いがみられた。専用部屋のみ所有しているBパターンは〈子ども世代〉の方が多く、共用部屋のみ所有しているCパターンは〈親世代〉の方が多い。このことから、〈子ども世代〉の方が子ども部屋の専用個室化が進んでいることが明らかになった。

以上より、高校生の所有物において世代による違いが捉えられた。

通信機器においては、〈子ども世代〉ではほとんどが携帯電話を所有している。家庭での専用電話や専用パソコンの所有率においても〈子ども世代〉の方が高く、世代間では通信手段に大きな違いがある。本章の第一節5. 家庭における交流において、〈子ども世代〉では友達との間接的な交流が多くなっていることが捉えられたが、この変化には通信手段の影響が大きいと考えられる。

子ども部屋においては、両世代とも専用部屋を所有しているものがほとんどであり、共用部屋所有も合わせるとほとんどが子ども部屋を所有している。その中で、〈子ども世代〉の方が専用部屋の所有率が高く共用部屋の所有率が低いことから、子ども部屋の専用個室化が進んでおり、家庭内において一人の時間を確保できる環境であるといえる。

専用テレビ、専用テレビゲーム機の所有率についても、所有率は高くないものの、〈子ども世代〉の所有率が高かったことから、全体的に〈子ども世代〉の方が物理的に充実しているということが捉えられた。

2. 性格

両世代ともに、性格の傾向を捉えるため、性格について①「外向的—内向的」②「プラス思考—マイナス思考」③「協調性—自己中心的」の3つの側面から世代間比較を通して検討した。

①「外向的—内向的」

性格の一つの側面である「外向的—内向的」でどちらの傾向であるのかを捉えるため、「人と話をするのが好きである」（外向的）、「人と話をするのが苦手である」（内向的）の2カテゴリーからどちらかといえばあてはまる方1つを選択する方法で調査した。結果を図2-2-2に示す。

世代間による違いを検討すると、カイ二乗検定、順位相関係数ともに有意差、有意性はなく、世代による違いはない。両世代とも「人と話をするのが好きである」という外向的な性格のものが約7割と多く、内向的より外向的な性格のものが多くことが捉えられた。

②「プラス思考—マイナス思考」

性格の一つの側面である「プラス思考—マイナス思考」のどちらの傾向であるのかを捉えるため、「物事を気楽に考える」（プラス思考）、「物事を悪い方向に考えやすい」（マイナス思考）の2カテゴリーからどちらかといえばあてはまる方1つを選択する方法で調査をした。結果を図2-2-2に示す。

両世代ともプラス思考の性格のものがやや多い傾向である。世代間による違いを検討すると、カイ二乗検定における1%水準の有意差、順位相関係数における1%水準の有意性があり、世代による違いがみられた。両世代ともプラス思考の性格とマイナス思考の性格がそれぞれ半数いるが、〈親世代〉の方がプラス思考の割合が多い。このことから、〈子ども世代〉の方が〈親世代〉よりもマイナス思考の性格のものが多くことが捉えられた。

③「協調性—自己中心的」

性格の一つの側面である「協調性—自己中心的」のどちらの傾向であるのかを捉えるため、「協調性がある」（協調性）、「自己中心的である」（自己中心的）の2カテゴリーからどちらかといえばあてはまる方1つを選択する方法で調査をした。結果を図2-2-2に示す。

両世代とも、協調性のある性格のものが多く傾向である。世代間による違いを検討すると、カイ二乗検定における1%水準の有意差、順位相関係数における1%水準の有意性があり、世代による違いがみられた。協調性のある性格は〈親世代〉の方が多く、自己中心的な性格は〈子ども世代〉の方が多く。このことから、〈子ども世代〉の方が自己中心的な性格のものが多くことが捉えられた。

以上より、両世代とも、外向的、プラス思考、協調性のある性格のものが多く傾向であることが捉えられた。世代間比較によると、〈子ども世代〉の方がマイナス思考で自己中心的な性格のものが多く、〈子ども世代〉の方が人と付き合っていく上で不利な性格のものがやや多いといえる。

3. 居心地の良い場所

子どもが生活する環境は、家庭・学校・地域の大きく3つにわけられる。この中のどこに居心地の良さを感じるかを捉えることは、生活の拠点をどこにしているかを探ることにつながると考えられる。そこで、居心地の良いと感じる場所について、「家庭」「学校」「家

庭・学校以外」「特にない」の4カテゴリーからあてはまるもの1つを選択する方法で調査した。結果を図2-2-3に示す。

世代間による違いを検討すると、カイ二乗検定による有意差はなく、世代による違いはない。両世代とも、一番居心地が良いと感じる場所は「家庭」とするものが約7割と最も多く、ついで「学校」が約1割、「特にない」ものが約1割である。両世代とも、多くの高校生が「家庭」に居心地のよさを感じていることが捉えられた。

4. 受験勉強・友人関係に対するストレスの有無

ストレスを抱える人は増えているといわれている。ストレスの原因は様々であるが、高校生にとって主である原因は大学受験と友人関係であると思われる。大学受験は今後の将来を決める第一歩であり、高校生にとって大きな試練であろう。また、部活動や課外活動など学校で過ごす時間が多い高校生にとって、生活の中で友達の占める割合は大きい。そのため、友人関係に対してもストレスを感じやすいのではないかとと思われる。

そこで、高校生が感じているストレスについて、世代間の違いを捉えるため、「受験勉強に対するストレス」「友人関係に対するストレス」の有無について調査し、世代間比較を通して検討した。そのため、「受験勉強に対するストレスを感じている」「友人関係に対するストレスを感じている」「特に受験勉強や友人関係に対するストレスは感じていない」の3項目について、あてはまるもの全てを選択する方法で調査した。結果を図2-2-4に示す。

両世代の傾向を検討すると、ストレスを感じているものは約半数おり、両世代ともストレスを抱えた高校生が多いといえる。ストレスの原因については、友人関係よりも受験勉強に対するストレスの方が約1割多い。

世代間による違いについて検討すると、「受験勉強に対するストレス」においてカイ二乗検定で5%水準の有意差、順位相関係数で5%水準の有意性があり、世代による違いがややみられた。「友人関係に対するストレス」「特に受験勉強や友人関係に対するストレスは感じていない」においては、カイ二乗検定で1%水準の有意差、順位相関係数で1%水準の有意性があり、世代による違いがみられた。「特に受験勉強や友人関係に対するストレスは感じていない」は〈親世代〉の方が多く、〈子ども世代〉の方がストレスを感じているものが多い。ストレスの原因においては、受験勉強と友人関係どちらにおいても〈子ども世代〉の方がストレスを感じているものが多い。特に、友人関係に対するストレスにおいて、世代間の違いが大きいことが捉えられ、〈子ども世代〉の方がより友人関係にストレスを感じているといえる。受験勉強に対するストレスについては、〈子ども世代〉は進学校の生徒であるため、勉強も負担となりストレスの強さにつながるのではないかと考えられる。友人関係に対するストレスについては、〈子ども世代〉の方が人付き合いに不利な性格が多いことと関係しているのではないかと考えられる。

第三節 本章のまとめ

本章では、高校生の居場所のあり方全般に関連があると思われる、高校生の行動と生活や心理について世代間比較を通して検討を行った。その結果、以下のことが明らかになっ

た。

1. 高校生の行動実態

行動実態について捉えるため、平日の行動に関する項目として、「放課後の行動パターン」「放課後の過ごし方（学校）」「放課後の過ごし方（地域）」「家庭での過ごし方」「家庭における交流」の5項目と休日の行動に関する項目として「土日の過ごし方」の1項目の合わせて6項目について世代間比較を通して検討した。

平日の行動において、両世代共通の傾向は、平日の行動パターンが「授業終了後学校に残り、帰宅」という家庭と学校が主な活動場所となるパターンである。放課後も学校で過ごすものが多く、学校における生活時間が特に長いことが捉えられた。平日に地域に寄るものについては、学校に残った後、帰宅途中に立ち寄るものが多い。学校における過ごし方は、部活動が大半を占め、それ以外は、先生や友達とおしゃべりをして過ごしている。家庭における過ごし方は、交流と隔離のバランスがとれた過ごし方をしているものが多いことが捉えられた。家庭における交流相手は主に家族であり、友達との交流は多くない。

平日の行動における世代別の違いについては、〈子ども世代〉の方が学校で部活動をするものが多く、平日の生活で学校の占める割合がより大きいことが捉えられた。学校では多くの時間を友達と過ごしていることから、〈子ども世代〉の方が生活の中で友達の占める割合が多いと考えられる。地域における過ごし方では、〈子ども世代〉の方が塾や図書館、お店等、地域の施設をよく利用し、〈親世代〉の方が友達の家に行くものが多いことが明らかになった。このことから、地域において、高校生が利用できる施設は充実してきたが、友達を呼べるオープンな家庭は少なくなっていることが考えられる。家庭における過ごし方は、〈子ども世代〉の方が一人で過ごすものがやや多いことが捉えられた。家庭における交流は、友達との交流手段において世代間で違いがあり、〈子ども世代〉では、友達を家に呼ぶという直接的な交流より、電話やメールを使った間接的な交流の方が多いことが明らかになった。

休日の過ごし方について、両世代共通の傾向は、土日を家庭あるいは学校で過ごすものが多いということである。世代別の違いについては、〈子ども世代〉の方が部活動をするものが多く、平日だけでなく、休日にも部活をしている高校生が多いことが明らかになった。

2. 高校生の生活と心理

高校生の生活や心理について捉えるため、「所有物」「性格」「居心地の良い場所」「受験勉強・友人関係に対するストレスの有無」について世代間比較を通して検討を行った。

所有物については、世代別で大きな違いがあることが明らかになった。〈子ども世代〉の方が所有物の専用化が進んでおり、特に子ども部屋の専用個室化が進んでいる。このことから、〈子ども世代〉の方が、家庭において一人になれる場所を確保しやすく、居場所も得やすい環境であるといえる。また、世代間で通信機器の違いが大きく、〈子ども世代〉では携帯電話、専用パソコン等の所有率が高く、通信手段が充実しているといえる。この結果は、家庭内の友達との交流が直接的より間接的な交流が多いということと関係していると

考えられる。

性格において、両世代共通の傾向は、両世代とも外向的、プラス思考、協調性のある性格のものが多くことである。世代間の違いは、〈子ども世代〉の方がマイナス思考の性格が多く、自己中心的な性格も多いことが捉えられ、〈子ども世代〉の方が、良好な人間関係を築いていく上で障害になる性格の高校生が多くなっていることが捉えられた。

居心地の良い場所においては、世代間で違いはなく、両世代とも一番居心地が良いと感じる場所は「家庭」であることが捉えられた。

受験勉強・友人関係に対するストレスの有無では、両世代とも約半数の高校生がストレスを感じており、友人関係より受験勉強に対するストレスの方が多くことが捉えられた。世代間の違いにおいては、〈子ども世代〉の方がストレスを感じている高校生が多い。ストレスの原因をみると、受験勉強より友人関係に対するストレスの方が世代間の違いが大きいことが明らかになった。性格において〈子ども世代〉の方がマイナス思考や自己中心的な性格が多く、人間関係を良好に築くことが困難なものが多いと思われる。これらのことが、〈子ども世代〉の方が、より友人関係に対するストレスが大きいことの要因になっていることが考えられる。

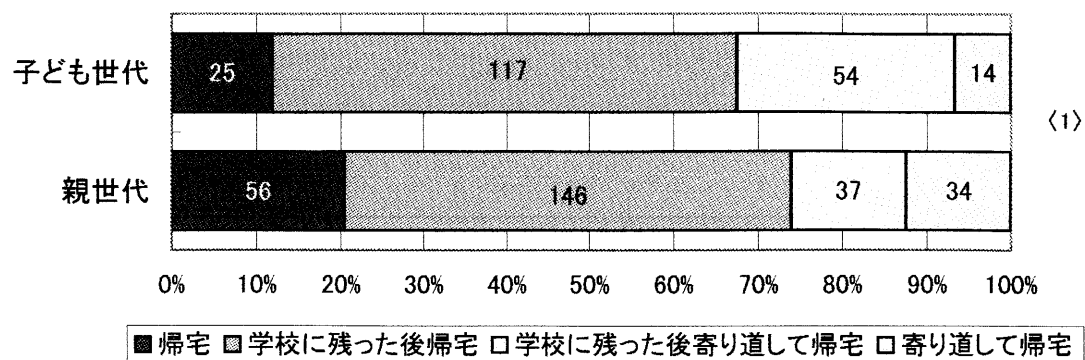


図2-1-1 行動パターン〈世代間比較〉

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

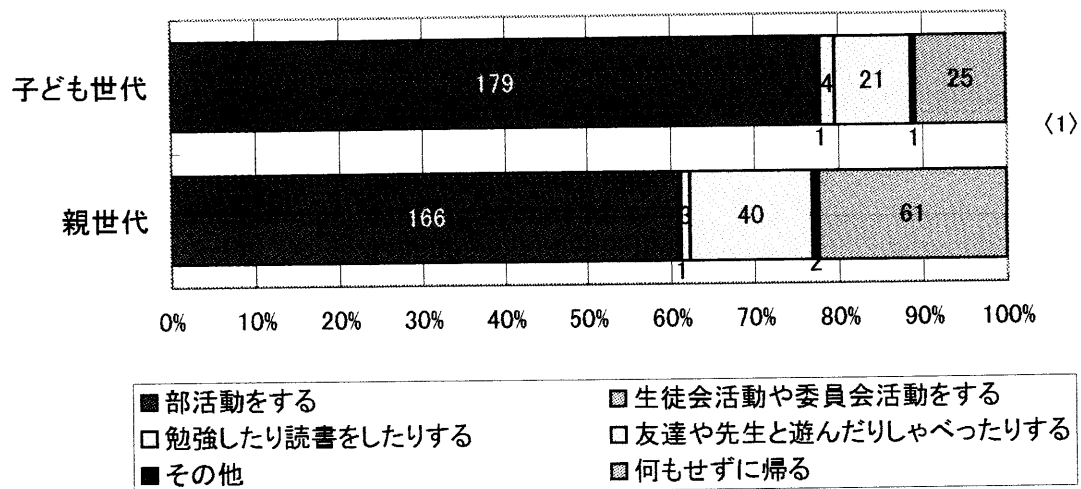


図2-1-2 放課後の過ごし方(学校)〈世代間比較〉

※グラフ内数値は件数。

<内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

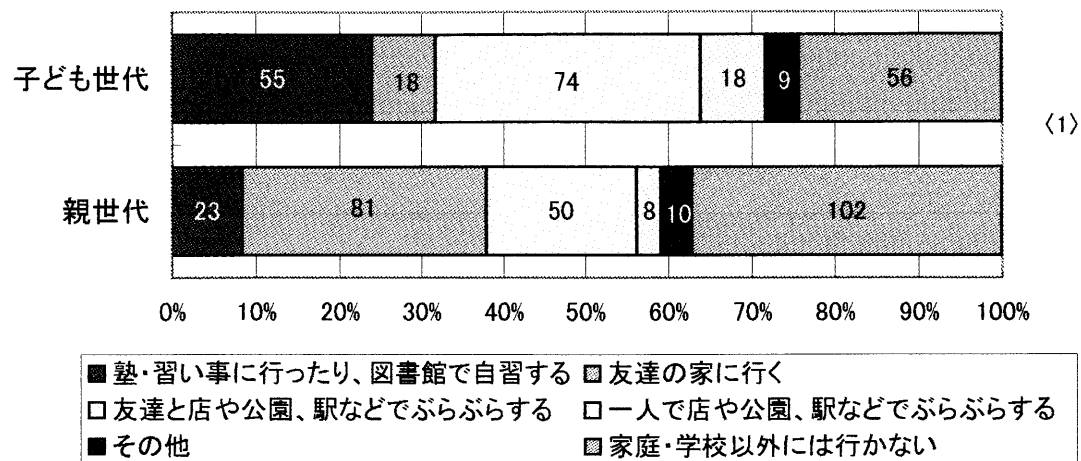


図2-1-3 地域における過ごし方〈世代間比較〉

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

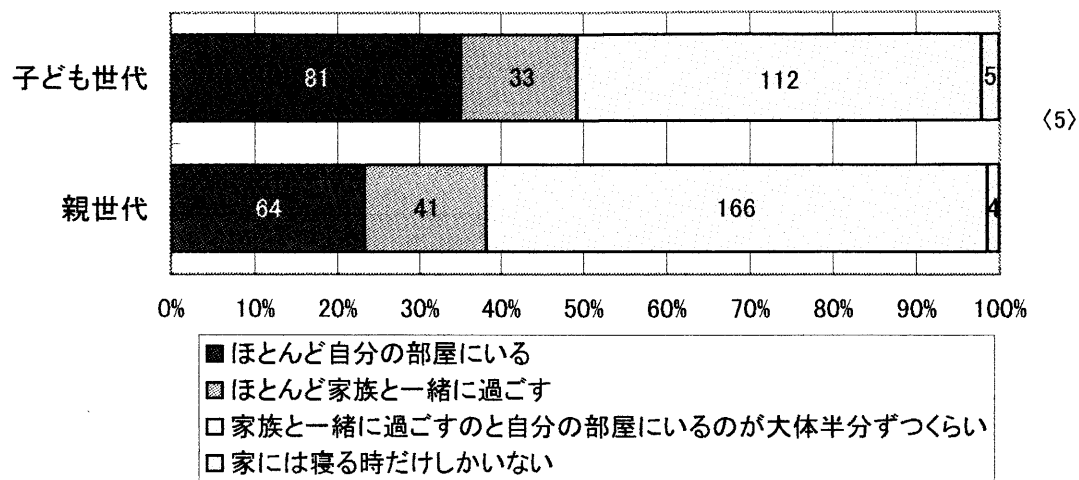


図2-1-4 家庭における過ごし方〈世代間比較〉

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

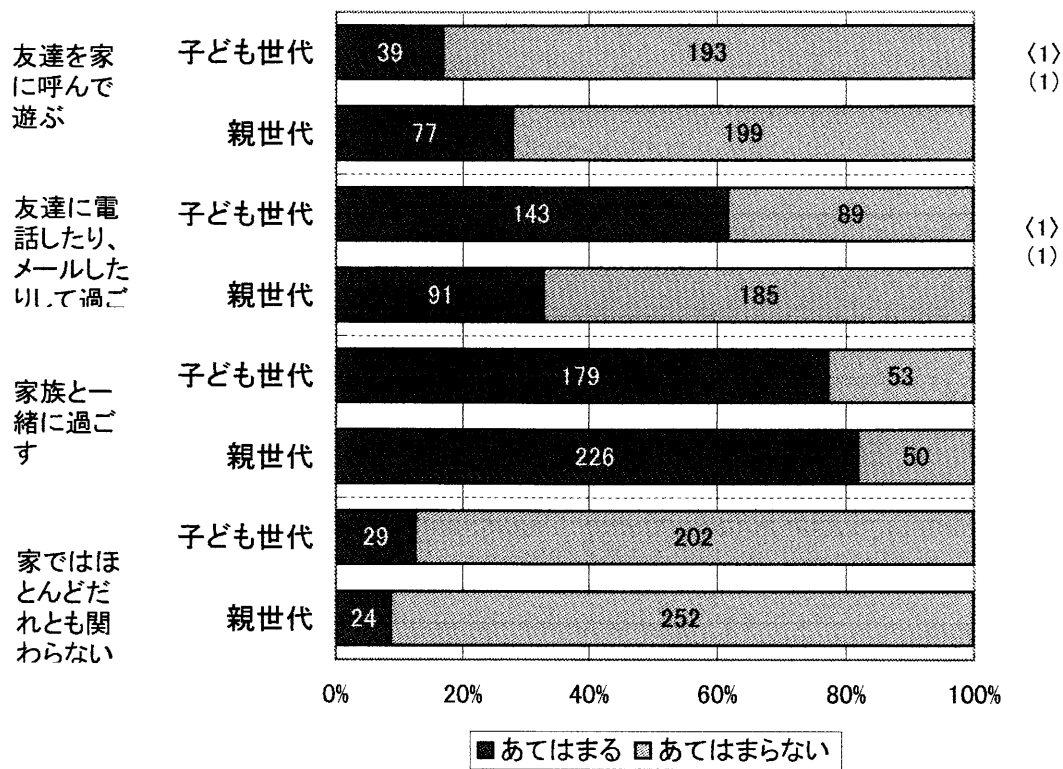


図2-1-5 家庭における交流〈世代間比較〉

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

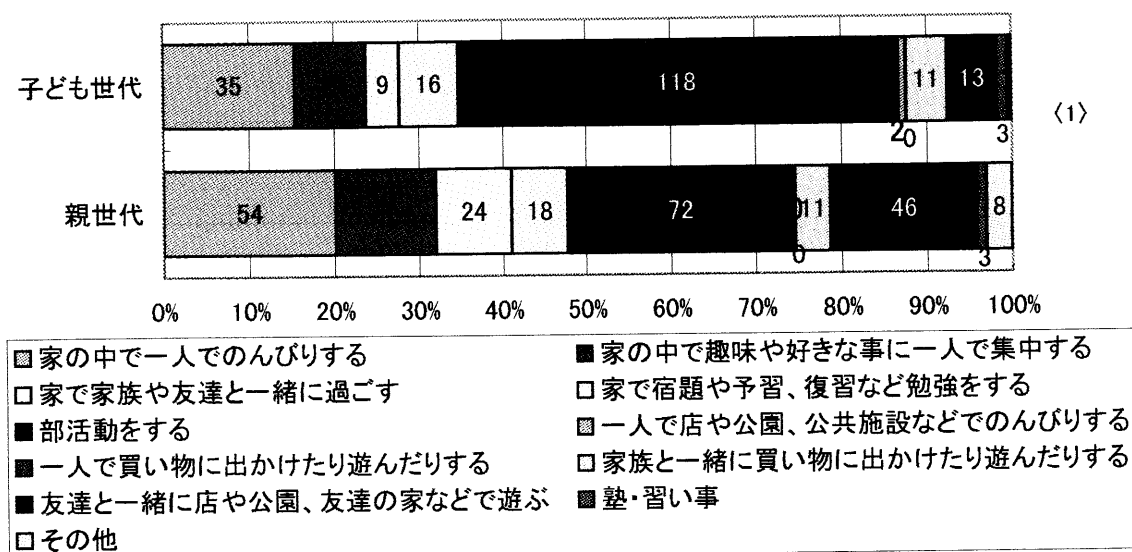


図2-1-6 土日の過ごし方〈世代間比較〉

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

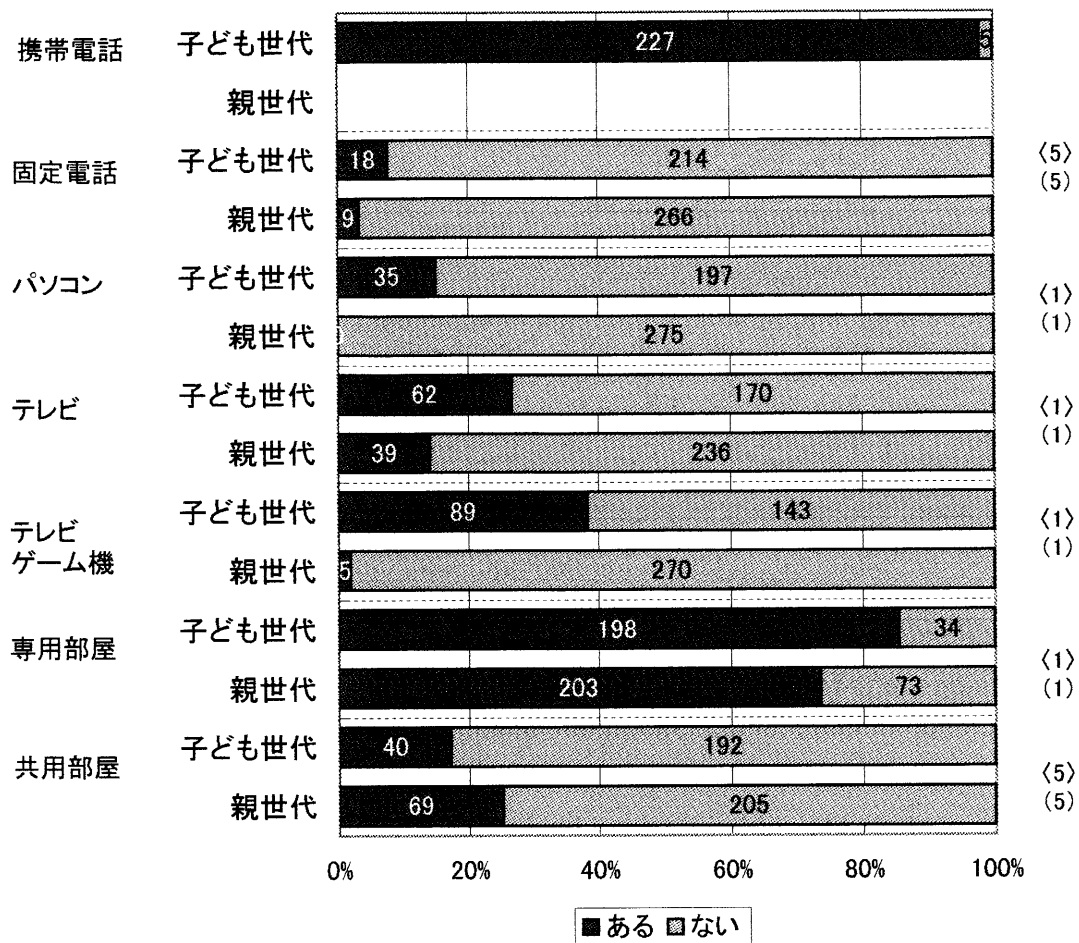


図2-2-1 所有物〈世代間比較〉

※グラフ内数値は件数。

<内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

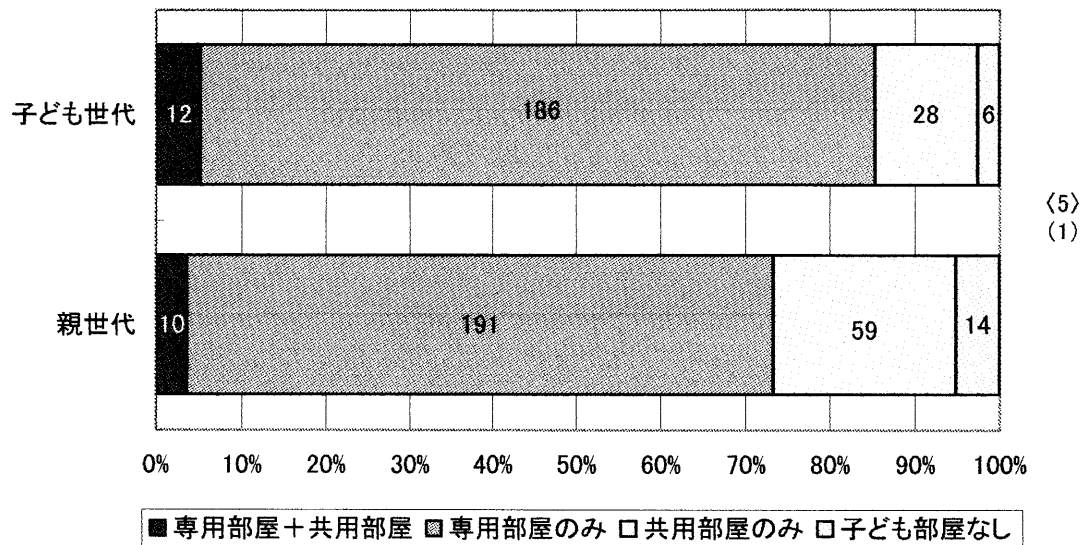


図2-2-1-1 子ども部屋の所有状況

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

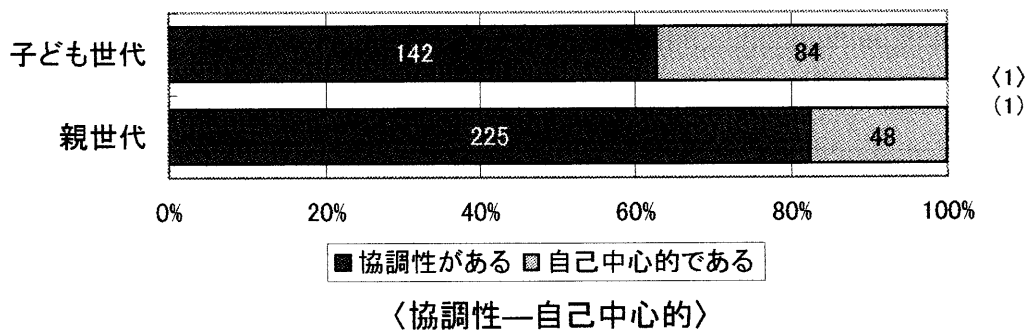
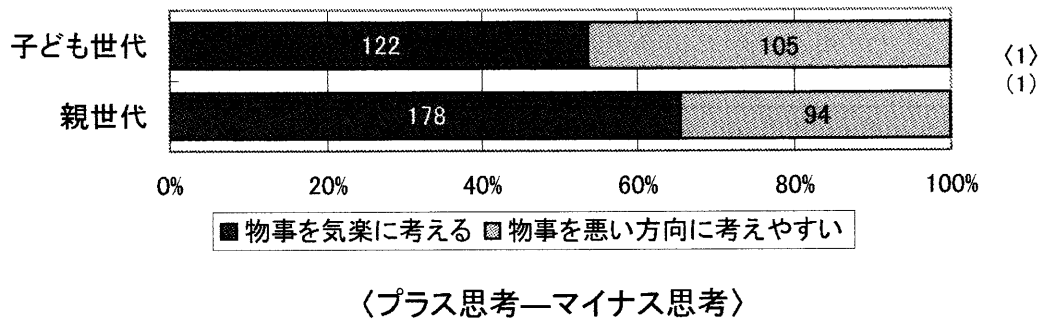
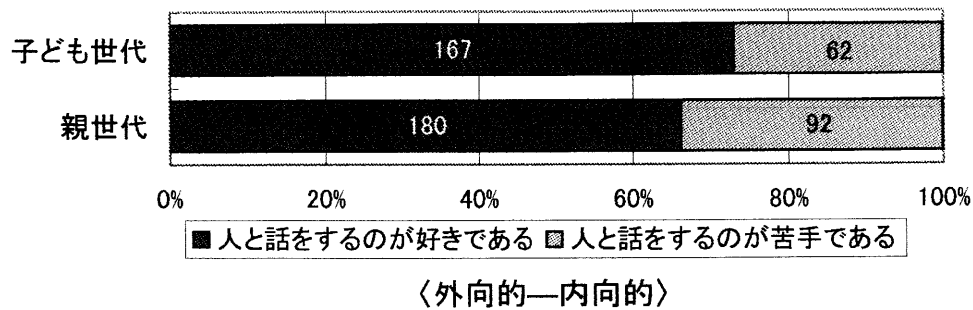


図2-2-2 性格〈世代間比較〉

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

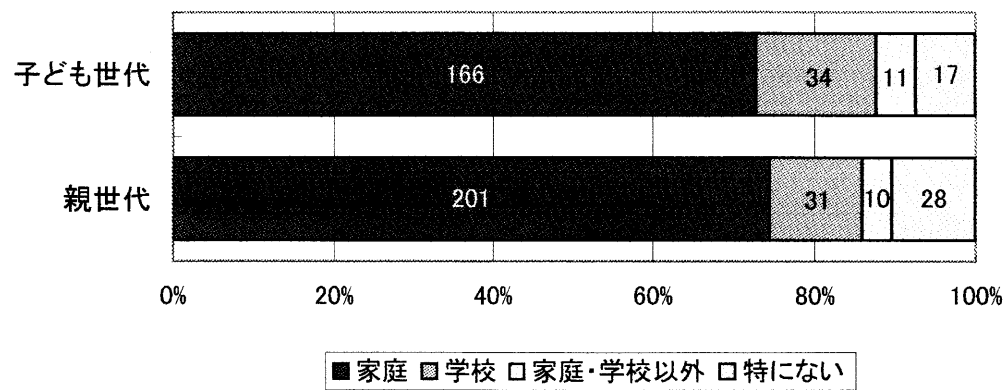


図2-2-3 居心地の良い場所〈世代間比較〉

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

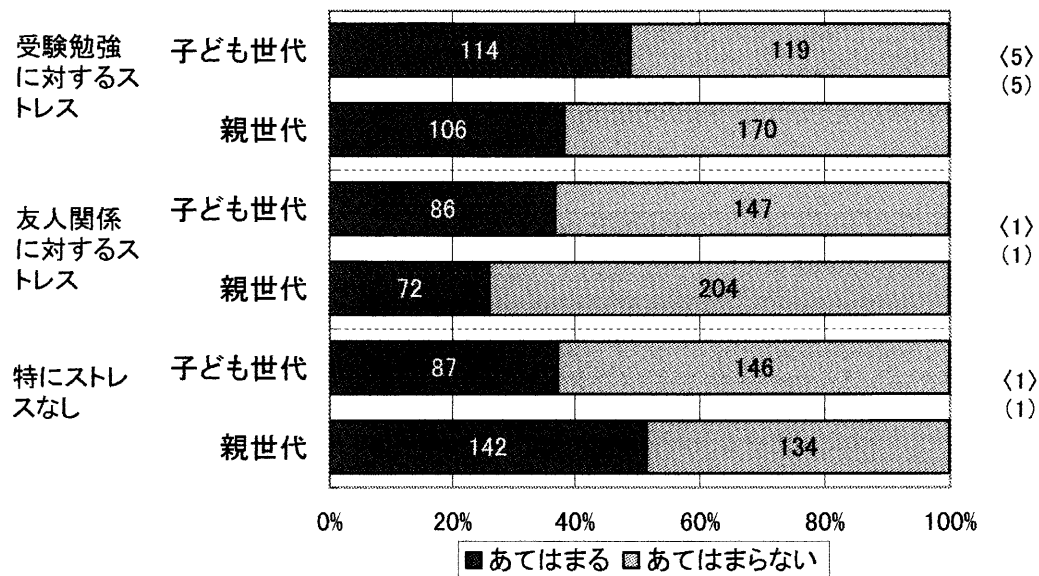


図2-2-4 受験勉強・友人関係に対するストレスの有無〈世代間比較〉

※グラフ内数値は件数。

<内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。
(内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

第三章 親世代・子ども世代比較にみる家庭における高校生の居場所

本章では、家庭における高校生の居場所を捉えるため、家庭において居場所の形成に関わりがあると考えられる高校生の心理状態と人間関係について世代間比較を通して検討する。また、家庭における居場所の実態と意識についても世代間比較を通して検討する。なお、両世代の高校生の概要については、第一章第三節に、家庭における過ごし方や所有物については、第二章に示した通りである。

第一節 家庭における高校生の心理状態

本節では、家庭における高校生の心理状態について検討するため、「家庭における居心地が良いと感じる時」「家庭における6つの側面からみた心理状態」の2項目について、世代間比較を通して検討し、世代別の特徴を明らかにする。

1. 家庭における居心地が良いと感じる時

家庭において、高校生はどんな時に居心地の良さを感じているのか捉えるため、家庭において最も居心地が良いと感じる時について、「家族団らんをしている時」「一人でのんびりくつろいでいる時」「友達を部屋によんだり、電話やメールをしている時」「人に邪魔をされずに好きなことに集中できる時」「特に居心地が良いと感じる時はない」の5カテゴリーから、最もあてはまるものを1つ選択する方法で調査し、世代間比較を通して検討した。結果を図3-1-1に示す。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において有意差はなく、家庭において居心地が良いと感じる時については世代間で違いはなかった。両世代とも「一人でのんびりくつろいでいる時」に居心地の良さを感じているものが約4割で最も多い。次いで、「人に邪魔をされずに好きなことに集中できる時」が約2割、「家族団らんをしている時」が約2割、「友達を部屋に呼んだり、電話やメールをしている時」が約1割であった。これらのことから、両世代とも家庭において一人にいるときに居心地の良さを感じる傾向が強いといえる。「平日の行動パターン（第二章）」や「放課後の過ごし方（学校）（第二章）」において、両世代とも学校で過ごす時間が長いことが明らかになり、学校では友達や先生など誰かと交流している時間が長く、一人になる時間は少ないと考えられる。そのため、自分の専用部屋があり、比較的一人の時間を持ちやすい家庭では、一人でいる時間に居心地の良さを感じているのではないかと思われる。一方、交流をしている時に居心地の良さを感じているものは約3割で、その内、家族との交流が2割、友達との交流が1割であり、家庭においては、友達よりも家族との交流に居心地の良さを感じるものが多いことが捉えられた。

2. 6つの側面からみた家庭における心理状態

家庭における高校生の心理状態を捉えるため、①「安心感」②「安定感」③「快楽感」④「満足感」⑤「解放感」⑥「好感」の6つの側面から検討した。6つの側面それぞれ【プラス評価】【中間評価】【マイナス評価】からなる、異なる3つの選択肢の中から最もあてはまるもの1つを選択する方法で調査し、世代間比較を通して検討した。なお、調査票に

における各側面の具体的な選択肢を表 3-1-2 に、世代間比較の結果を図 3-1-2 に示す。

① 安心感

世代による違いはみられず、両世代とも同じ傾向である。【プラス評価】である「安心できる」ものの割合は 7 割強、【中間評価】のものは約 2 割であり、家庭においては「安心感」を感じているものが世代を通して多いことが捉えられた。

② 安定感

世代による違いはみられず、両世代とも同じ傾向である。【プラス評価】である「落ちつける」ものの割合は 7 割強、【中間評価】のものは約 2 割であり、家庭においては「安心感」と同様に「安定感」を感じているものが世代を通して多いことが捉えられた。

③ 快楽感

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定における 1%水準の有意差、順位相関係数における 1%水準の有意性があり、世代別で違いがみられた。【プラス評価】である「楽しい」と感じているものは〈子ども世代〉では 5 割、〈親世代〉では 2.5 割であり、〈子ども世代〉の方が「快楽感」を感じているものが多いことが捉えられた。

④ 満足感

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定における 1%水準の有意差、順位相関係数における 1%水準の有意性があり、世代別で違いがみられた。【プラス評価】である「満足感がある」と感じているものは〈子ども世代〉では 4.5 割、〈親世代〉では 2.5 割であり、〈子ども世代〉の方が「満足感」を感じているものが多いことが捉えられた。しかし、両世代とも【マイナス評価】である「不満がある」というものが約 1 割もあり、生活の拠点である家庭においても不満を感じているものがあることが捉えられた。

⑤ 解放感

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定における 1%水準の有意差、順位相関係数における 1%水準の有意性があり、世代別で違いがみられた。【プラス評価】である「解放感を感じる」というものは〈子ども世代〉では 5 割、〈親世代〉では 2.5 割であり、〈子ども世代〉の方が「解放感」を感じているものが多いことが捉えられた。

⑥ 好感

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定における 5%水準の有意差、順位相関係数における 5%水準の有意性があり、世代別でやや違いがみられた。【プラス評価】である「家庭が好き」というものは〈子ども世代〉では 6 割、〈親世代〉では 5 割であり、〈子ども世代〉の方が「好感」を感じているものがやや多いことが捉えられた。

心理状態の 6 つの側面を通して検討すると、両世代とも【プラス評価】の割合が高いものは「安心感」「安定感」であり、7 割を越えている。次いで、「好感」では約半数が【プラス評価】を示している。比較的【プラス評価】が低かった側面は、「快楽感」「満足感」「解放感」である。【マイナス評価】については、どの側面も 1 割以下と同程度であり、【プラス評価】の割合が低ければ、【中間評価】の割合が高くなるという傾向である。このことか

ら、家庭は高校生にとって「安心感」や「安定感」を特に感じられるような心の拠り所であり、全体的に心理状態がよいといえる。しかし、この生活の拠点である家庭においても、心理状態の悪いものが0.5～1割いることが明らかになった。

世代により傾向が異なる心理状態の側面は、「快感」「満足感」「解放感」「好感」であり、〈子ども世代〉の方が【プラス評価】の割合が高く、心理状態の良いものが多いといえ、家庭における心理状態は全体的に〈子ども世代〉の方が良いことが明らかになった。

第二節 家庭における人間関係

家庭における人間関係は、家庭における居場所の形成に関わりがあると考えられる。また、家庭における居場所所有の実態が家庭における人間関係に何らかの影響を与える可能性も考えられる。そこで、本節では、家庭における人間関係について捉えるため、「親子関係」「きょうだいとの関係」の2項目について、世代間比較を通して検討する。

1. 親子関係

高校生が親とどのような関係であるか捉えるため、「親とは表面上の会話しかしない」「親とは仲が良いが、関係を悪くしないよう気をつかうことがある」「親とは本音で話し合っている」の3項目について、あてはまるもの全てを選択する方法で調査し、世代間比較を通して検討した。結果を図3-2-1に示す。

両世代とも、「親とは本音で話し合っている」というものは4～6割であり、約半数は親と本音で話しているものの、親であっても本音で話していないものも多い。また、「親とは表面上の会話しかしない」は2～3割、「親とは仲が良いが、関係を悪くしないよう気をつかうことがある」は約3割であり、親との関係が希薄なものがやや多い傾向が捉えられた。

世代間の違いを検討すると、「親とは表面上の会話しかしない」「親とは本音で話し合っている」において、カイ二乗検定で1%水準の有意差、順位相関係数で1%水準の有意性があり、世代による違いがみられた。「親とは本音で話し合っている」という割合は〈子ども世代〉では6割強対し、〈親世代〉では4割強であり、〈子ども世代〉の方が親と本音で話し合っている高校生が多い。さらに、「親とは仲が良いが、関係を悪くしないよう気をつかうことがある」において、カイ二乗検定で10%水準の有意差、順位相関係数で10%水準の有意性があり、〈親世代〉の方が親に気をつかうものの割合が若干高いことが捉えられた。これらのことから、親子関係については、〈子ども世代〉の方が良いこといえる。

2. きょうだいとの関係

高校生がきょうだいとどのような関係であるのか捉えるため、親子関係と同様に、「きょうだいとは表面上の会話しかしない」「きょうだいとは仲が良いが、関係を悪くしないよう気をつかうことがある」「きょうだいとは本音で話し合っている」の3項目について、あてはまるもの全てを選択する方法で調査し、世代間比較を通して検討した。結果を図3-2-2に示す。

両世代とも、「きょうだいとは本音で話し合っている」というものは6～7割であり、過

半数はきょうだいと本音で話しているものの、きょうだいであっても本音で話していないものも多い。また、「きょうだいとは表面上の会話しかしない」は2～3割、「きょうだいとは仲が良いが、関係を悪くしないよう気をつかうことがある」は約3割であり、親との関係と同様に、きょうだいとの関係においても希薄なものがやや多いことが捉えられた。

世代による違いを検討すると、「きょうだいとは本音で話し合っている」においては、カイ二乗検定で5%水準の有意差、順位相関係数で1%水準の有意性があり、「きょうだいとは表面上の会話しかしない」においては、カイ二乗検定で5%水準の有意差、順位相関係数で5%水準の有意性があり、両項目について世代間で違いがややみられた。「きょうだいと本音で話し合っている」ものの割合は、〈子ども世代〉で7割であるのに対し、〈親世代〉では6割であり、〈子ども世代〉の方が多。一方、「きょうだいとは表面上の会話しかしない」という割合は〈親世代〉で3割、〈子ども世代〉で2割であり、〈親世代〉の方が多。また、「きょうだいとは仲が良いが、関係を悪くしないよう気をつかうことがある」においても、検定における有意差や有意性はなかったものの、〈親世代〉の方がきょうだいに気をつかうものが多い傾向がみられた。これらのことから、きょうだいとの関係においても、親子関係と同様に、〈子ども世代〉の方が関係が良いことが捉えられた。

3. 本節のまとめ

親子関係ときょうだいとの関係を通して検討すると、両世代とも親やきょうだいと本音で話しているものは5～7割と多く、全体的に良好の関係のものが多。しかし、親やきょうだいであっても本音で話さないものも半数近くおり、表面上の会話しかしないものや、気をつかうものもいることから、親やきょうだいであっても、その関係が希薄なものの割合が高いことが捉えられた。世代による違いを検討すると、親子関係ときょうだい関係の両方において、世代による違いがみられた。特に親子関係において世代間の違いが大きく、〈子ども世代〉の方が親やきょうだいと良好な関係を築いているものが多いことが捉えられた。

第三節 家庭における高校生の居場所の実態と意識

本節では、家庭における高校生の居場所の実態と意識について捉えるため、「家庭の各室における空間の支配度」「家庭における居場所の所有率」「家庭における居場所となる具体的な場所」「家庭における居場所に対する要求」「家庭における社会的居場所で話す相手」「家庭における社会的居場所の具体的な場所と交流相手との関係」「家庭における居場所タイプの分類」の合計6項目について、世代間比較を通して、世代別の特徴を明らかにする。

1. 家庭の各室における空間の支配度

空間の支配度とは、「用語の定義と理論的考察（序章、第三節）」において示したように、「居場所」の分類軸の縦軸をなすものである。この分類軸は物や空間に対する支配度の強弱の視点で捉えたものであり、テリトリーの考え方につながるものである。ここでのテリトリーとは、本研究室にて行なわれたテリトリーの研究から、米田が定義した「人の侵入や物の出入りを制限でき、自分の所有物を自由に置き、好きな時にしたい行為ができる空

間」とする。また、米田はテリトリータイプの分類を行っており、「自分の持ち物が自由に置け、好きな時にしたい行為ができる部屋」を「基本テリトリー」、「人や物の出入りを制限でき、自分の持ち物が自由に置け、好きな時にしたい行為ができる部屋」を「防御テリトリー」としている。

米田の定義と分類を踏まえて、空間の支配度を捉える。家庭においては、空間の支配度を①「基本テリトリー」と②「防御テリトリー」の2側面から検討することとする。家庭内の各室について、①「基本テリトリー」あるいは②「防御テリトリー」であると認識しているのかについて調査し、テリトリーである部屋は空間の支配度が強いものとみなすこととする。また、②「防御テリトリー」は①「基本テリトリー」にさらに「人や物の出入りを制限する」という人や物の排除の側面を含んでおり、①より②の方がより空間の支配度が強いものとみなすこととする。そこで、a「自分専用の部屋、きょうだいとの共用部屋」b「自分以外の家族の部屋」c「居間・食事室」d「納戸・衣裳部屋」e「客間・応接間」の5項目について、①「自分の持ち物を自由に置け、好きな時に好きなことができる場所」（基本テリトリー）の有無を調査し、世代間比較を通して検討した。さらに、a～eの5項目について②「他人の侵入や、物の出入りを制限できる場所」（防御テリトリー）の有無も同様に調査し、世代間比較を通して検討した。結果を図3-3-1-1,3-3-1-2に示す。

なお、a「自分専用の部屋、きょうだいとの共用部屋」の項目を回答したもののうち、「専用部屋」「共用部屋」の所有（第二章、第二節、1. 所有物）において、どちらも所有していないものは分析外とした。

さらに、家庭内には、トイレや風呂といった場所があるが、これらは家族共用の場所であり、継続的に使用する空間ではない。そのため、空間の支配度を検討するにあたっては、分析の対象外であり、分析からは除いた。

① 基本テリトリーの側面からみた空間の支配度

両世代とも、基本テリトリーであると認識している割合が最も高い項目は、a「自分専用の部屋、きょうだいとの共用部屋」であり、9割以上である。次いで、c「居間・食事室」で約7割、その他の項目はどれも約5割である。このことから、基本テリトリーの側面から空間の支配度をみると、家庭内のどの部屋も、空間の支配度が高いものが過半数いることが捉えられた。中でも特に、a「自分専用の部屋、きょうだいとの共用部屋」では、ほとんどのものが基本テリトリーであると認識しており、家庭において空間の支配度が最も強いといえる。また、c「居間・食事室」も多く、多くのものが基本テリトリーであると認識しており、家族で共有するスペースでさえも、支配度が高い傾向であることが捉えられた。

世代間の違いを検討したところ、違いはみられなかった。

② 防御テリトリーの側面からみた空間の支配度

両世代とも、基本テリトリーであると認識している割合が最も高い項目は、a「自分専用の部屋、きょうだいとの共用部屋」であり、約6割であった。その他の項目はどれも約2割前後であり、これらの部屋を防御テリトリーであると認識しているものは少ない。a「自分専用の部屋、きょうだいとの共用部屋」は、①基本テリトリーの側面においても、支配

度が最も強い部屋であった。しかし、防御テリトリーであると認識している割合は6割と、基本テリトリーよりも低い。自分専用部屋の所有率が7～8割であることを考慮すると、自分専用の部屋であっても、防御テリトリーにはなり得ていないものもいることが捉えられた。

世代間の違いを検討したところ、違いはみられなかった。

③ 基本テリトリーと防御テリトリーの両側面からみた空間の支配度

①②の調査結果から、「基本テリトリー」と「防御テリトリー」の2側面を合わせて空間の支配度の検討を行なう。①②の結果から、防御テリトリーである部屋を「空間の支配度【強】」、防御テリトリーではないが、基本テリトリーである部屋を「空間の支配度【中】」、防御テリトリーでも基本テリトリーでもない部屋を「空間の支配度【弱】」として検討を行なった。結果を図3-3-1-3に示す。

世代による違いはみられず、世代間で同じ傾向である。両世代とも支配度【強】の割合が最も高い部屋はa「自分専用の部屋、きょうだいとの共用部屋」で約6割である。a「自分専用の部屋、きょうだいとの共用部屋」は支配度【弱】の割合はわずかであり、子ども部屋は高校生にとって、家庭内で最も空間の支配度が強い部屋であるといえる。他の部屋は支配度【強】の割合は約2割であり、空間の支配度は子ども部屋よりも弱いといえる。その中で、c「居間・食事室」は支配度【中】である割合が約5割と他の部屋よりも高い。そのため、居間や食事室は子ども部屋ほど空間の支配度は強くないが、自分の好きな時にしたいことができ、比較的自由にできるものが多いと考えられる。よって、家庭において、居間や食事室は子ども部屋の次に空間の支配度が強いということから、空間の支配度の程度は中間であり、空間の支配度【中】であるといえる。その他の部屋は家庭においては空間の支配度の程度は弱く、空間の支配度【弱】であるといえる。

2. 家庭における居場所の所有率

家庭における居場所所有の実態を捉えるため、序章第三節で定義づけした居場所の概念について調査票では、次のような文言で表した。個人的居場所について①（「一人になって考え事などができる場所」【精神的プライバシー行為】）②（「好きなことに集中できる場所」【心理状態の維持】）③（「一人になってくつろぐことができる場所」【個人的な休息】）④（「大人の目を避けられる場所」【管理の目からの逃避】）⑤（「嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所」【心理状態の回復】）の5項目、社会的居場所について⑥（「お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所」【価値観の共有】）⑦（「自分の仲間、あるいは家族など、仲間意識を感じられる人と話をする場所」【所属（仲間）意識】）⑧（「自分を頼ってくれる人と話をする場所」【受容意識】）⑨（「自分を受け入れてくれる人と話をする場所」【被受容意識】）の4項目の合計9項目の所有率を検討する。後述する「家庭における居場所となる具体的な場所」（本節4.）において、具体的な場所の選択肢a～fを選択したものを「所有している」、g「場所がない」h「家庭ではその行為自体しない」を選択したものを「所有していない」とし、家庭における居場所所有率について世代間比較

を通して検討した。結果を図 3-3-2 に示す。

(1) 個人的居場所

①「一人になって考え事などができる場所」【精神的プライバシー行為】

世代による違いはなく、両世代とも 9 割以上が所有しており、家庭ではほとんどのものが「一人になって考え事ができる場所」を所有していることが捉えられた。

②「好きなことに集中できる場所」【心理状態の維持】

世代による違いはなく、両世代とも 9 割以上が所有しており、家庭ではほとんどのものが「好きな事に集中できる場所」を所有していることが捉えられた。

③「一人になってくつろぐことができる場所」【個人的な休息】

両世代とも約 9 割が所有しており、所有率が高い。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において 10%水準の有意差、順位相関係数において 5%水準の有意性があり、世代による違いがややみられた。〈子ども世代〉の方が所有率がやや高いことが捉えられた。

④「大人の目を避けられる場所」【管理の目からの逃避】

世代による違いはなく、両世代とも約 9 割が所有しており、家庭では多くのものが「大人の目を避けられる場所」を所有していることが捉えられた。

⑤「嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所」【心理状態の回復】

世代による違いはなく、両世代とも約 9 割が所有しており、家庭では多くのものが「嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所」を所有していることが捉えられた。

(2) 社会的居場所

⑥「お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所」【価値観の共有】

世代による違いはなく、両世代とも約 8 割が所有しており、家庭では多くのものが「お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所」を所有していることが捉えられた。

⑦「自分の仲間、あるいは家族など、仲間意識を感じられる人と話をする場所」【所属（仲間）意識】

世代による違いはなく、両世代とも約 8 割が所有しており、家庭では多くのものが「自分の仲間、あるいは家族など、仲間意識を感じられる人と話をする場所」を所有していることが捉えられた。

⑧「自分を頼ってくれる人と話をする場所」【受容意識】

世代による違いはなく、両世代とも所有率は 6 割強である。家庭において、過半数は所有しているが、3～4 割は所有しておらず、他の居場所と比べて「自分の頼ってくれる人と話をする場所」の所有率は低いことが捉えられた。

⑨「自分を受け入れてくれる人と話をする場所」【被受容意識】

世代による違いはなく、両世代とも約 8 割が所有しており、家庭では多くのものが「自分を受け入れてくれる人と話をする場所」を所有していることが捉えられた。

以上より居場所の①～⑨を通して検討を行なう。世代で違いがみられたものは、③「一人になってくつろぐことができる場所」【個人的な休息】のみであり、家庭における居場所所有の実態に関しては世代による違いがあまりないことが明らかになった。③【個人的な休息】においては、〈子ども世代〉の所有率がやや高いことが捉えられた。

世代による共通の傾向をみると、両世代とも個人的居場所の所有率はどれも約 9 割であり、低次元の個人的居場所と高次元の個人的居場所どちらも所有率が高いことが捉えられた。社会的居場所の所有率は⑧「自分の頼ってくれる人と話をする場所」【受容意識】を除き、全ての所有率は約 8 割であり、個人的居場所の所有率よりは低いものの、高い所有率であることが捉えられ、家庭においては、個人的居場所と社会的居場所ともに所有率が高いことが明らかになった。⑧【受容意識】の所有率は他の居場所よりも低く、約 6 割であったことから、社会的居場所の中でも高次元の居場所である「自分を頼ってくれる人と話をする場所」は所有しにくいことが捉えられた。家庭においては、自分の専用部屋、きょうだいとの共用部屋のような子ども部屋や家族と団欒できる居間などがあり、居場所を所有するための物理的環境が整っていると考えられる。そのなかで、「自分を頼ってくれる人と話をする場所」の所有率のみ他の居場所よりも低くなっていることから、「自分を頼ってくれる」という相手がいるかどうかに関係するのではないかと考えられる。

3. 家庭における居場所となる具体的な場所

家庭において、具体的にどの場所が居場所となっているのか捉えるために、先述した(2)の①～⑨の居場所の具体的な場所について検討する。①～⑨の具体的な場所について、a「自分専用の部屋、きょうだいとの共用部屋」b「自分以外の家族の部屋」c「居間・食事室」d「納戸・衣裳部屋」e「客間・応接間」f「トイレ・風呂」g「場所がない」h「家庭ではその行為自体しない」の8カテゴリーから最もあてはまるもの1つを選択する方法で調査し、世代間比較を通して検討した。なお、本項目は居場所となる具体的な場所を検討するため、選択肢のg「場所がない」h「家庭ではその行為自体しない」を回答したものは分析から除いた。結果を図3-3-3-1～9に示す。

また、具体的な場所として、a「自分専用の部屋、きょうだいとの共用部屋」を選択したもののうち、「専用部屋」「共用部屋」の所有(第二章、第二節、1. 所有物)において、どちらも所有していないものは分析外とした。

(1) 個人的居場所

①「一人になって考え事などができる場所」【精神的プライバシー行為】

両世代とも最も多い部屋はa「自分専用の部屋」であり、約 9 割を占めている。その他の部屋はごくわずかであり、「一人になって考え事などができる場所」の中心となる場所は子ども部屋であることが捉えられた。個人的居場所は、他者から心理的あるいは物理的に、隔離・逃避する必要がある場所であるため、家庭における空間の支配度が最も強い子ども部屋が中心となっていると考えられる。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において 1%水準の有意差があり、世代によ

る違いがみられた。具体的な場所は〈親世代〉ではほぼ a 「自分専用の部屋、きょうだいとの共用部屋」であるのに対し、〈子ども世代〉では f 「トイレ・風呂」が約 1 割を占めている。トイレや風呂は、家族共用のものであり、居室ではなく、継続的に使用する場所ではない。しかし、鍵をかけるなど、使用中一時的には他者を完全に排除できる空間であるといえ、子ども部屋以上の完全な密室になり得る場所である。〈子ども世代〉では、子ども部屋ではなく、トイレや風呂を居場所とするものが約 1 割もいることから、〈子ども世代〉の方が、子ども部屋以上の完全な隔離・逃避ができる場所を求め、使用する傾向が強いと考えられる。

②「好きなことに集中できる場所」【心理状態の維持】

世代による違いはみられず、両世代とも最も多く使われている場所は a 「自分専用の部屋、きょうだいとの共用部屋」であり、約 9 割を占めている。次いで c 「居間・食事室」が約 0.5 割であり、その他の部屋はごくわずかである。①と同様に空間の支配度が強い子ども部屋が中心的な場所となっている。また、低次元の個人的居場所であるため、個室に閉じこもって他者から逃避しなくとも、「好きな事に集中する」といった心理状態を維持できればよいことから、空間の支配度【中】の家族共用の部屋である居間や食事室を使用するものもいると考えられる。

③「一人になってくつろぐことができる場所」【個人的な休息】

両世代とも最も多く使われている場所は a 「自分専用の部屋、きょうだいとの共用部屋」であり、約 9 割を占めている。次いで、c 「居間・食事室」であり、その他の場所はわずかである。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において 5%水準の有意差があり、世代による違いがややみられた。a 「自分専用の部屋、きょうだいとの共用部屋」の割合は〈親世代〉が約 9.5 割であるのに対し、〈子ども世代〉では約 8.5 割であり、〈親世代〉の方が多い。一方、c 「居間・食事室」の割合は〈子ども世代〉が約 1 割であるのに対し、〈親世代〉は 0.5 割であり、〈子ども世代〉の方が若干多い。また、〈子ども世代〉では f 「トイレ・風呂」の割合も約 0.5 割いる。〈子ども世代〉の方が、居間や食事室を使うものの割合がやや高いことに関しては、〈子ども世代〉の方が親やきょうだいとの関係がよく（本章、第 2 節）、家族共用の部屋であっても家族のことが気にならず、くつろげるのではないかと考えられる。一方、〈子ども世代〉ではトイレや風呂を使うものがあることから、①と同様に〈子ども世代〉の方が、子ども部屋以上の完全な隔離を必要とする傾向がやや強いことが考えられる。

④「大人の目を避けられる場所」【管理の目からの逃避】

両世代ともに、最も多い部屋は a 「自分専用の部屋、きょうだいとの共用部屋」で約 9 割、次いで f 「トイレ・風呂」が 0.5～1 割である。その他の部屋はわずかである。物理的にも心理的にも隔離を必要とする高次元の個人的居場所であるため、空間の支配度が強い子ども部屋が中心となっている。さらに、居室ではないが、子ども部屋以上に密室性が高いトイレや風呂を使う割合も他の居場所よりやや高くなっている。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において 10%水準の有意差があり、世代による違いが若干みられた。a「自分専用の部屋、きょうだいとの共用部屋」の割合は〈親世代〉が約 9.5 割であるのに対し、〈子ども世代〉では約 9 割であり、〈親世代〉の方が若干多い。一方、c「トイレ・風呂」の割合は〈子ども世代〉が約 1 割であるのに対し、〈親世代〉は 0.5 割であり、〈子ども世代〉の方が若干多い。このことから、個人的居場所の中心的な場所である子ども部屋を使用する割合は〈親世代〉の方が高いが、トイレや風呂を使用する割合は〈子ども世代〉の方が高いことが捉えられた。これらのことから、①や③で述べたことと同様に、〈子ども世代〉の方が、子ども部屋以上に完全な隔離のできる場所を必要とし、使用する割合が高いといえ、〈子ども世代〉の方が、居住性よりも、隔離性への要求の方がやや高いと考えられる。

⑤「嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所」【心理状態の回復】

世代による違いはみられず、両世代とも最も多い場所は a「自分専用の部屋、きょうだいとの共用部屋」であり、約 8～9 割を占めている。次いで、c「居間・食事室」が 0.5～1 割、f「トイレ・風呂」約 0.5 割であり、他の部屋はわずかである。子ども部屋が中心的な場所になっており、他には、居間・食事室といった開放的な空間を居場所とするものもいれば、対照的に、トイレや風呂といった子ども部屋以上の閉鎖空間を居場所とするものもある。トイレや風呂を使うものについては、高次元の個人的居場所であり、子ども部屋以上に隔離できる場所を必要としていることが考えられる。

(2) 社会的居場所

⑥「お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所」【価値観の共有】

世代による違いはみられず、両世代とも c「居間・食事室」と a「自分専用の部屋、きょうだいとの共用部屋」が約 4～5 割ずつを占め、b「自分以外の家族の部屋」と e「客間・応接間」が約 0.5 割ずつである。社会的居場所であるため、交流する相手が存在しており、主な相手は家族か友達であると思われる。主に使われる場所は c「居間・食事室」と a「自分専用の部屋、きょうだいとの共用部屋」の大きく 2 パターンに分かれていることが捉えられた。家庭における社会的居場所としてどの場所を使うかは、その交流相手に影響を受けていると推測されるため、社会的居場所の具体的な場所とその相手との関係については、本節の 6. で検討を行なう。

⑦「自分の仲間、あるいは家族など、仲間意識を感じられる人と話をする場所」【所属（仲間）意識】

世代による違いはみられず、両世代とも最も多い場所は、c「居間・食事室」であり、約 6 割を占めている。次いで、a「自分専用の部屋、きょうだいとの共用部屋」で約 2.5 割、e「客間・応接間」で 0.5 割であり、主な場所は居間や食事室であり、次いで子ども部屋であることが捉えられた。⑥と同様に、交流相手と合わせた考察は、本節の（6）で行なう。

⑧「自分を頼ってくれる人と話をする場所」【受容意識】

世代による違いはみられず、両世代とも c「居間・食事室」と a「自分専用の部屋、き

ようだいとの共用部屋」が 4.5 割であり、同じ割合を占めている。b「自分以外の家族の部屋」と e「客間・応接間」は約 0.5 割ずつである。⑥と同様に、主に使われる場所は c「居間・食事室」と a「自分専用の部屋、きょうだいとの共用部屋」の大きく 2 パターンに分かれていることが捉えられた。なお、社会的居場所の具体的な場所とその相手との関係については、本節の 6. で検討を行なう。

⑨「自分を受け入れてくれる人と話をする場所」【被受容意識】

両世代とも最も多い部屋は c「居間・食事室」であり、約 5～6 割を占めている。次いで、a「自分専用の部屋、きょうだいとの共用部屋」が約 3～4 割であり、b「自分以外の家族の部屋」と e「客間・応接間」はそれぞれ約 0.5 割ずつである。⑦と同様に、主に使われる場所は、居間・食事室であり、次いで子ども部屋であることが捉えられた。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において 5%水準の有意差があり、世代による違いがややみられた。c「居間・食事室」の割合は、〈親世代〉では約 6 割であるのに対し、〈子ども世代〉では約 5 割であり、〈親世代〉の方が多いたことが捉えられた。一方、a「自分専用の部屋、きょうだいとの共用部屋」の割合は、〈子ども世代〉で約 4 割であるのに対し、〈親世代〉では約 3 割であり、〈子ども世代〉の方が多いたことが捉えられた。このことから、〈子ども世代〉では、社会的居場所の主な場所である居間・食事室を使う割合は低くなっており、子ども部屋を使う割合が高くなっていることが捉えられた。社会的居場所の具体的な場所とその相手との関係については、本節の 6. で検討を行なう。

以上より、居場所の①～⑨を通して検討を行なう。世代間で共通の傾向についてみると、個人的居場所である①～⑤の具体的な場所は、子ども部屋が約 9 割であり、家庭における個人的居場所の中心となる場所は子ども部屋である。子ども部屋以外には、少数ではあるが、居間や食事室、トイレや風呂を使うものもいることが捉えられた。社会的居場所については、どの居場所も居間や食事室を使うものが多い。高校生にとって家庭における一番身近な交流相手は家族であると考えられる。その家族との交流には、居間や食事室が使われることが多いであろう。そのため、社会的居場所の具体的な場所として、居間や食事室の割合が高くなっていると思われる。その中で、⑥【価値観の共有】⑧【受容意識】においては、居間や食事室と子ども部屋が同じ割合であり、子ども部屋を使うものが多くなっている。子ども部屋での交流は、きょうだいや家族との交流の他に、友達との交流が含まれている可能性が高い。このことから、⑥【価値観の共有】⑧【受容意識】については、交流相手として家族以外に友達が占めるウェイトも高いのではないかと推測される。実際に、居場所の具体的な場所と交流相手との関係については本節（6.）で検討する。

居場所の具体的な場所における、世代間の違いを検討したところ、個人的居場所では①【精神的プライバシー行為】③【個人的な休息】④【管理の目からの逃避】で違いがみられ、社会的居場所では、⑨【被受容意識】においてやや違いがみられた。

個人的居場所においては、中心となる場所である子ども部屋を使用するものの割合は〈親世代〉の方がやや高く、居間やトイレなどを使用するものの割合は〈子ども世代〉の方が

やや高いという世代間の違いが捉えられた。居間や食事室を使うものが〈子ども世代〉でやや多いことに関しては、本章第二節から〈子ども世代〉の方が家族との関係が良いものが多いことが関係していると思われる。この人間関係がよければ、居間や食事室で完全に一人にならなくとも、家族の目を気にせず、心理的に一人になることができるのではないかと考えられる。また、トイレや風呂を使うものが〈子ども世代〉の方がやや多いことから、〈子ども世代〉の方が個人的居場所の具体的な場所として、子ども部屋よりも完全な密室を求める傾向がやや強いのではないかと考えられる。

社会的居場所においては、中心的な場所である居間や食事室を使用するものの割合は〈親世代〉の方がやや高く、子ども部屋を使用するものの割合は〈子ども世代〉の方がやや高いという世代間の違いが捉えられた。居場所の具体的な場所は、交流相手に大きく左右されると考えられる。そのため、本節 6. で具体的な場所と交流相手の関係について検討する。

4. 家庭における居場所に対する要求

家庭における居場所に対する要求を捉えるため、個人的居場所について①（「一人になって考え事などができる場所」【精神的プライバシー行為】）（本論文中における居場所①～⑨の「」内は調査票による文言、【 】内は居場所の概念を表すものとする。）②（「好きなことに集中できる場所」【心理状態の維持】）③（「一人になってくつろぐことができる場所」【個人的な休息】）④（「大人の目を避けられる場所」【管理の目からの逃避】）⑤（「嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所」【心理状態の回復】）の 5 項目、社会的居場所について⑥（「お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所」【価値観の共有】）⑦（「自分の仲間、あるいは家族など、仲間意識を感じられる人と話をする場所」【所属（仲間）意識】）⑧（「自分を頼ってくれる人と話をする場所」【受容意識】）⑨（「自分を受け入れてくれる人と話をする場所」【被受容意識】）の 4 項目の合計 9 項目について、必要だと思う場所全てを選択する方法で調査し、世代間比較を通して検討した。結果を図 3-3-4 に示す。

（1）個人的居場所

①「一人になって考え事などができる場所」【精神的プライバシー行為】

世代による違いはみられなかった。両世代とも要求率は 9 割以上であり、ほとんどのものが、家庭に「一人になって考え事などができる場所」を要求していることが捉えられた。

②「好きなことに集中できる場所」【心理状態の維持】

両世代とも要求率は 9 割以上と高い。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定における 5%水準の有意差、順位相関係数における 5%水準の有意性があり、世代による違いがややみられた。〈子ども世代〉の要求率の方がやや高いことが捉えられた。

③「一人になってくつろぐことができる場所」【個人的な休息】

両世代とも要求率は 9 割以上と高い。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定における 10%水準の有意差、順位相関係数における 10%水準の有意性があり、世代による違いが若干みられた。〈子ども世代〉の方が、要求率が若干高いことが捉えられた。

④「大人の目を避けられる場所」【管理の目からの逃避】

両世代とも、要求率は約 8 割と高いが、他の個人的居場所に対する要求率よりはやや低いことが捉えられた。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定における 5%水準の有意差、順位相関係数における 1%水準の有意性があり、世代による違いがみられた。〈子ども世代〉の要求率の方が、約 1 割高いことが捉えられた。

⑤「嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所」【心理状態の回復】

世代による違いはみられなかった。両世代とも要求率は 9 割以上であり、ほとんどのものが、家庭に「嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所」を要求していることが捉えられた。

(2) 社会的居場所

⑥「お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所」【価値観の共有】

世代による違いはみられなかった。両世代とも要求率は約 8 割であり、多くのものが、家庭に「お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所」を要求していることが捉えられた。

⑦「自分の仲間、あるいは家族など、仲間意識を感じられる人と話をする場所」【所属（仲間）意識】

両世代とも、要求率は約 8 割と高い。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定における 10%水準の有意差、順位相関係数における 10%水準の有意性があり、世代による違いが若干みられた。〈子ども世代〉の方が要求率が若干高いことが捉えられた。

⑧「自分を頼ってくれる人と話をする場所」【受容意識】

世代による違いはみられなかった。両世代とも要求率は約 8 割であり、多くのものが、家庭に「自分を頼ってくれる人と話をする場所」を要求していることが捉えられた。

⑨「自分を受け入れてくれる人と話をする場所」【被受容意識】

世代による違いはみられなかった。両世代とも要求率は約 8 割であり、多くのものが、家庭に「自分を受け入れてくれる人と話をする場所」を要求していることが捉えられた。

以上より、居場所の①～⑨を通して検討を行なう。両世代共通の傾向をみると、個人的居場所である①～⑤のうち、④「大人の目を避けられる場所」【管理の目からの逃避】を除く居場所の要求率は、両世代とも 9 割以上であり、ほとんどのものがこれらの場所を要求している。④【管理の目からの逃避】の要求率は 8 割であり、個人的居場所の中では要求率はやや低い。社会的居場所である⑥～⑨に対する要求率は、いずれも約 8 割と高いが、個人的居場所と比べると、やや低い要求率であることが捉えられた。このことから、家庭

における居場所に対する要求率は、個人的居場所と社会的居場所ともに高いが、特に個人的居場所に対する要求の方がやや強いことが捉えられた。

世代による違いをみると、個人的居場所では、②「好きな事に集中できる場所」【心理状態の維持】、③「一人になってくつろぐことができる場所」【個人的な休息】、④「大人目を避けられる場所」【管理の目からの逃避】において、世代間でやや違いがみられ、〈子ども世代〉の要求の方が強くなっている。特に、④【管理の目からの逃避】に対する要求の違いが大きいことが捉えられた。このことから、〈子ども世代〉の方が、意識面において隔離・逃避傾向がやや強いのではないかと考えられる。居場所の所有実態においても、〈子ども世代〉の方が、子ども部屋以上の完全な密室になり得るトイレや風呂を居場所とするものがやや多い傾向であった。これらのことから、〈子ども世代〉の方が、居場所所有の実態や、意識面においても、〈親世代〉より隔離・逃避傾向がやや強いと考えられる。

社会的居場所に対する要求において、世代間で違いがみられたものは、⑦「自分の仲間、あるいは家族など、仲間意識を感じられる人と話をする場所」【所属（仲間）意識】のみであり、違いはあまり大きくないが、〈子ども世代〉の要求の方が若干強いことが捉えられた。

個人的居場所と社会的居場所に対する要求においては、個人的居場所に対する要求の方が、世代による違いが大きいことが捉えられた。このことから、人との交流に対する要求は世代によってあまり変化していないが、隔離や逃避に対する要求は世代によってやや変化しているといえる。〈子ども世代〉の方が、隔離や逃避傾向がやや強くなっていることが捉えられた。

5. 家庭における社会的居場所で話す相手

社会的居場所においては、その場所で交流する相手が存在している。そこで、だれと交流しているのかについて検討する。社会的居場所⑥（「お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所」【価値観の共有】）⑦（「自分の仲間、あるいは家族など、仲間意識を感じられる人と話をする場所」【所属（仲間）意識】）⑧（「自分の頼ってくれる人と話をする場所」【受容意識】）⑨（「自分を受け入れてくれる人と話をする場所」【被受容意識】）の4項目において、居場所を所有しているもの対象に、それぞれ誰との交流であるのか「家族のみ」「家族と友達の両方」「友達のみ」の3カテゴリーから1つ選択する方法で調査し、世代間比較を通して検討した。結果を図3-3-5に示す。

⑥「お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所」【価値観の共有】

世代による違いはみられなかった。「家族と友達の両方」の割合が約5割と最も多く、「家族のみ」「友達のみ」がそれぞれ約2～3割で同程度であることが捉えられた。

⑦「自分の仲間、あるいは家族など、仲間意識を感じられる人と話をする場所」【所属（仲間）意識】

世代による違いはみられなかった。「家族と友達の両方」の割合が約5割と最も多く、「家族のみ」が約3割、「友達のみ」が約1.5割である。家族と友達の両方と交流しているもの

が半数いるが、家族と友達を比較すると、家族と交流するものの方が多いことが捉えられた。

⑧「自分を頼ってくれる人と話をする場所」【受容意識】

世代による違いはみられなかった。「家族と友達の両方」の割合が約4割と最も多く、「家族のみ」「友達のみ」がそれぞれ約3割で同程度であり、⑥と同じ傾向であることが捉えられた。

⑨「自分を受け入れてくれる人と話をする場所」【被受容意識】

世代による違いはみられなかった。「家族と友達の両方」の割合が約5割と最も多く、「家族のみ」が約3割、「友達のみ」が約1.5割である。⑦と同様に、家族と友達の両方と交流しているものが半数いるが、家族と友達を比較すると、家族と交流するものの方が多いことが捉えられた。

社会的居場所の⑥～⑨を通して検討する。世代による違いはみられず、世代間で共通の傾向であった。どの居場所も、家族と友達の両方との交流であるものが半数を占めており、家庭での交流相手は、家族だけでなく友達も含めた両方であるものが多いことが捉えられた。交流相手が、家族と友達どちらか一方のものだけみると、⑦【所属（仲間）意識】と⑨【被受容意識】は家族のみの方が多く、⑥【価値観の共有】⑧【受容意識】は家族のみと友達をみの割合が同程度である。家庭での交流であるため、家族のみの交流の方が多くなると考えられるが、⑥【価値観の共有】⑧【受容意識】は家族のみと友達をみの割合が同程度であり、⑦⑨よりも友達の存在がやや大きくなっていると考えられる。

6. 家庭における社会的居場所の具体的な場所と交流相手との関係

家庭における社会的居場所として、具体的にどの場所を選択しているのかは、誰と交流するのかに大きく左右されると思われる。そこで、先述した「家庭における居場所となる具体的な場所（本節（3））」のうちの社会的居場所に関する項目⑥～⑨と「家庭における社会的居場所と交流する相手（本節（5））」との関係を検討する。居場所となる具体的な場所と交流相手との関連を世代別に検討した。なお、居場所となる具体的な場所のうち、「自分以外の家族の部屋」「客間・応接間」「トイレ・風呂」はサンプル数が20件にも満たない場所であるため、分析からは除外し、「専用部屋・共用部屋」「居間・食事室」のみを分析の対象とした。結果を図3-3-6-1～4に示す。

両世代とも社会的居場所の⑥【価値観の共有】⑦【所属（仲間）意識】⑧【受容意識】⑨【被受容意識】において同じ傾向を示していることが捉えられた。社会的居場所の⑥～⑨において、カイ二乗検定の1%水準で有意差がみられ、居場所となる具体的な場所と交流相手の間には関係がみられた。居場所となる具体的な場所として、「専用個室・共用部屋」を使用する場合の交流相手は、「友達のみ」「家族と友達の両方」がほとんどを占め、「居間・食事室」を使用する場合の交流相手は、「家族のみ」「家族と友達の両方」はほとんどであった。これらのことから、専用部屋のような子ども部屋を使用する場合は、交流相手が友

達であることが多く、居間のような家族共用の部屋を使用する場合は、交流相手が家族であることが多く、交流相手によって、居場所となる場所を使い分けている状況が捉えられた。

7. 家庭における居場所タイプの分類

本項目では、家庭における個人的居場所と社会的居場所の所有状況をトータル的に捉えるため、どの居場所を所有しているのかを検討する。「家庭における居場所の所有率」から、個人的居場所と社会的居場所の所有の有無を機械的に組み合わせた結果、合計 9 個の所有パターンが得られた。具体的なパターンは以下のようなものである。高次元の個人的居場所及び、高次元の社会的居場所をもつケースは「①個人的居場所（高次元）・社会的居場所（高次元）あり」、高次元の個人的居場所及び、低次元の社会的居場所をもつケースは「②個人的居場所（高次元）・社会的居場所（低次元）あり」、高次元の個人的居場所のみもつケースは「③個人的居場所（高次元）あり」、低次元の個人的居場所及び、高次元の社会的居場所をもつケースは「④個人的居場所（低次元のみ）・社会的居場所（高次元）あり」、低次元の個人的居場所及び、低次元の社会的居場所をもつケースは「⑤個人的居場所（低次元のみ）・社会的居場所（低次元のみ）あり」、低次元の個人的居場所のみもつケースは「⑥個人的居場所（低次元のみ）あり」、高次元の社会的居場所をもつケースは「⑦社会的居場所（高次元）あり」、低次元の社会的居場所のみもつケースは「⑧社会的居場所（低次元のみ）あり」、個人的居場所も社会的居場所ももたないケースは「⑨居場所なし」とする合計 9 パターンである。この居場所所有パターンを図 3-3-7 に示す。

世代間で違いはみられず、両世代とも最も多いパターンは、「①個人的居場所（高次元）・社会的居場所（高次元）あり」で全体の約 8 割を占める。次いで、「②個人的居場所（高次元）・社会的居場所（低次元）あり」、「③個人的居場所（高次元）あり」がそれぞれ約 1 割、「④個人的居場所（低次元のみ）・社会的居場所（高次元）あり」は 3%と続き、①のパターン以外は 1 割にも満たない少数である。特に残りの⑤～⑨のパターンは 1%未満の限定的なケースであることが捉えられた。

これらのことから、家庭においては両世代とも、個人的居場所・社会的居場所ともに高次元の居場所を両方所有しているものが多いことが明らかになった。その他のパターンは少数パターンである。

個人的居場所の所有を軸に検討する。パターン①②③は高次元の個人的居場所を所有しているパターンであり、家庭における居場所所有パターンの上位 3 つを占めることから、個人的居場所は十分に所有できているものがほとんどであるといえる。パターン④⑤⑥は、個人的居場所においては低次元の居場所のみ所有しているパターンであり、全体の 1 割にもみたく、個人的居場所を十分に所有できていないパターンは少ない。パターン⑦⑧は、社会的居場所のみを所有するパターンであり、〈親世代〉ではわずかにみられるが、〈子ども世代〉ではおらず、個人的居場所を所有していないパターンもごく少数である。パターン⑨は個人的居場所も社会的居場所も両方所有しないパターンであり、家庭に居場所のな

いものである。両世代とも1%ではあるが、生活の拠点である家庭に居場所を全く持たないものがあるという点で問題であるといえる。全体的にみると、家庭において、個人的居場所と社会的居場所両方を十分に所有しているものがほとんどであることが捉えられた。次に多いパターンは、個人的居場所は十分に所有しているが、社会的居場所は十分に所有できていないパターンである。一方、個人的居場所を十分に所有していないパターンはごく限られたケースであることが捉えられた。また、個人的居場所と社会的居場所を両方所有できていないものは1%未満であるという問題も明らかになった。

第四節 本章のまとめ

本章では、家庭における高校生の居場所を捉えるため、居場所所有の実態や意識について世代間比較を通して検討した。さらに、家庭において居場所の形成に関わりがあると考えられる高校生の心理状態や人間関係についても合わせて検討を行なった。その結果、明らかになったことを以下に示す。

1. 家庭における高校生の心理状態を捉えるため、「家庭における居心地が良いと感じる時」と「家庭における心理状態」の2項目について検討した。

「家庭における居心地が良いと感じる時」については、世代に関わらず、家庭では交流よりも一人でいる時に居心地の良さを感じる傾向が強いことが明らかになった。また、交流については、交流相手において、家族と友達を比較すると、家族との交流に居心地の良さを感じるものが多いことが捉えられた。高校生は家庭において、一人でいる時に居心地の良さを感じる傾向が強いといえる。「家庭における心理状態」について検討すると、安心感や安定感を感じているものが多く、世代を通して、家庭は安心できる心の拠り所になっていることが明らかになった。それに対して、好感、快楽感、満足感、解放感を感じているものはやや少ないことが捉えられた。家庭における心理状態を全体的にみると、両世代ともマイナスの評価の割合は低く、心理状態は良いことが明らかになった。しかし、この心の拠り所である家庭であっても、心理状態の悪いものもいることが明らかになった。世代による違いを検討したところ、快楽感、満足感、解放感、好感において、〈子ども世代〉の心理状態の方が良いことが捉えられ、家庭における心理状態は〈子ども世代〉の方が良いことが明らかになった。これは、〈子ども世代〉の方が家族との関係が良いものが多いことから、心理状態の良さにつながっているのではないかと考えられる。

2. 家庭における人間関係について捉えるため、高校生にとって一番身近な存在である親との関係、きょうだいとの関係について検討した。

「親子関係」については、両世代とも親と本音で話し合っているものは半数程度であり、親であっても本音で話せていないものが多いことが明らかになった。また、親と仲が良いが関係を悪くしないように気をつかうものや、親とは表面上の会話しかしないものも2～4割もいることが捉えられ、親子関係が希薄なものがやや多いことが、世代を通

して明らかになった。「きょうだいとの関係」においても、「親子関係」と同様の傾向が捉えられた。世代による違いをみると、親子関係ときょうだい関係両方において、〈子ども世代〉の方が良好な関係のものが良いことが明らかになり、特に〈子ども世代〉は親子関係の良いものが多いことが明らかになった。

3. 家庭における子どもの居場所の実態と意識について捉えるため、「家庭の各室における空間の支配度」「家庭における居場所の所有率」「家庭における居場所となる具体的な場所」「家庭における居場所に対する要求」「家庭における社会的居場所で話す相手」「家庭における社会的居場所の具体的な場所と交流相手との関係」「家庭における居場所タイプの分類」の合計7項目について、検討した。

「家庭の各室における空間の支配度」においては、基本テリトリーと防御テリトリーの2側面から検討を行ったが、世代を通して共通の傾向であった。家庭における空間の支配度が最も強い場所は、子ども部屋であり、次いで居間や食事室であることが明らかになった。これは、高校生の子ども部屋が専用個室化しているため、その他の家族共用の空間より、支配度が強くなったと考えられる。しかし、子ども部屋が防御テリトリーではないものもみられ、子ども部屋が完全に一人になれる場所になっていないものもいることが明らかになった。

「家庭における居場所の所有率」においては、個人的居場所の③【個人的な休息】のみ世代による違いがややみられ、〈子ども世代〉の所有率の方がやや高いことが捉えられた。他の居場所については、世代を通して同じ傾向であり、家庭における居場所所有の実態に関しては世代による違いはあまりみられないことが明らかになった。両世代とも個人的居場所の所有率は約9割で、ほとんどのものが所有しており、低次元・高次元の隔離逃避要求に関わらず、個人的居場所の所有率は高いことが明らかになった。社会的居場所の所有率は⑧【受容意識】が約6割であるのを除いて、他は約8割と高い所有率である。家庭は子ども部屋や、居間など居場所となりえる物理的環境が比較的整っているため、個人的居場所と社会的居場所どちらも所有率は高く、家庭は居場所を所有しやすい場所であるといえる。その中で、社会的居場所の所有率がやや低く、⑧【受容意識】の所有率のみ特に低い傾向がみられた。物理的に居場所が所有しやすい家庭であっても、社会的居場所においては、交流相手との関わりから、所有率が低くなるのではないかと考えられる。

「家庭における居場所となる具体的な場所」について、世代を通して共通の傾向をみると、個人的居場所の具体的な場所は9割が子ども部屋であり、個人的居場所の中心的な場所であることが明らかになった。子ども部屋以外の場所を個人的居場所としているものは少ないが、居間や食事室、トイレ・風呂を使うものもいることが明らかになった。社会的居場所の具体的な場所は、どの居場所においても、居間や食事室を使うものが多いことが捉えられ、居間や食事室が家庭における社会的居場所の中心的な場所であるといえる。これは、家庭における交流は家族が相手であることが多いことに関係している

と考えられる。その中で、⑥【価値観の共有】⑧【受容意識】においては、居間・食事室と子ども部屋の割合が同程度であり、子ども部屋を使うものが多くなっている。子ども部屋での交流は、家族以外に友達との交流も含まれる可能性が高く、⑥【価値観の共有】⑧【受容意識】については、交流相手として家族以外に友達が占めるウエイトも高いと考えられる。世代により違いがみられた居場所は、個人的居場所では①【精神的プライバシー行為】③【個人的な休息】④【管理の目からの逃避】であり、社会的居場所では、⑨【被受容意識】である。個人的居場所、社会的居場所ともに、それぞれの中心的な場所を使うものの割合は〈親世代〉の方が高いが、それ以外の場所を使用する割合は〈子ども世代〉の方が高い。個人的居場所においては、〈子ども世代〉の方がトイレや風呂を使う割合がやや高いことが捉えられた。トイレや風呂は居室ではないが、鍵をかけ一時的に完全に一人になることのできる場所であるといえる。このことから、〈子ども世代〉の方が、個人的居場所の具体的な場所として、子ども部屋よりも完全な密室を求める傾向がやや強いと考えられる。また、個人的居場所において、〈子ども世代〉の方が、居間や食事室を使うものの割合がやや高いことが捉えられた。これは、〈子ども世代〉の方が家族との関係がよく、居間や食事室であっても、家族などの目を気にせずに、心理的に一人になれるからではないかと考えられる。社会的居場所の⑨【被受容意識】においては、〈子ども世代〉の方が、子ども部屋を使うものの割合がやや高いことが捉えられた。

家庭における居場所所有の実態において、居場所の所有率は世代による違いはなく、両世代ともほとんどのものが居場所を所有していることが明らかになった。しかし、居場所としての具体的な場所においては、世代間でやや傾向が異なっている。〈子ども世代〉は家庭における居場所の中心な場所以外を居場所としているものがやや多くなっており、居場所に求めるものも異なっているのではないと思われる。このことから、家庭は、世代を通して居場所の所有率が高いが、それぞれの居場所に求めるものは異なっているのではないかと考えられる。

「家庭における居場所に対する要求」については、世代間で共通の傾向をみると、個人的居場所においては、④【管理の目からの逃避】を除く居場所をほぼ全員が要求していることが明らかになった。④【管理の目からの逃避】の要求率は個人的居場所の中では若干低いことが捉えられた。社会的居場所に対する要求率はどれも約8割であり、個人的居場所よりも要求がやや低いことが捉えられた。家庭における居場所所有の実態で明らかになったように、個人的居場所の所有率は約9割、社会的居場所の所有率は6～8割であったことと合わせてみると、個人的居場所では④【管理の目からの逃避】以外の居場所において、所有率より要求率の方が若干高い。社会的居場所では、⑧【受容意識】において、所有率より要求率の方が高く、居場所の所有要求を満たせていないものがあることが考えられる。

世代による違いをみると、個人的居場所においては、②【心理状態の維持】③【個人的な休息】④【管理の目からの逃避】において、〈子ども世代〉の要求率の方がやや高いこ

とが明らかになり、特に④【管理の目からの逃避】において世代による違いが大きいことが捉えられた。社会的居場所においては、⑦【仲間（所属）意識】のみ、〈子ども世代〉の方が要求率が若干高いことが捉えられた。個人的居場所と社会的居場所を比較すると、個人的居場所に対する要求の方が、世代による違いが大きく、〈子ども世代〉の要求が強いことが明らかになった。このことから、人との交流に対する要求は世代によってあまり変化していないが、隔離や逃避に対する要求は世代によってやや変化しているといえ、〈子ども世代〉の方が、隔離や逃避傾向がやや強くなっていることが捉えられた。

「家庭における社会的居場所で話す相手」について、世代による違いはみられず、どの居場所も、家族と友達の両方との交流であるものが半数おり、家庭での交流相手は、家族だけでなく友達も含めた両方であるものが多いことが捉えられた。交流相手が、家族と友達どちらか一方のものだけみると、⑦【所属（仲間）意識】⑨【被受容意識】は家族のみが多く、⑥【価値観の共有】⑧【受容意識】は家族のみと友達のみ割合が同程度である。家庭での交流であるため、家族のみの交流の方が多くなると考えられるが、⑥【価値観の共有】⑧【受容意識】は家族のみと友達のみ割合が同程度であり、⑦⑨よりも友達の存在が大きくなっていると考えられる。居場所の具体的な場所から、社会的居場所の⑥⑧は子ども部屋を使うものの割合が多いことから、⑥⑧においては、家族以外に友達の占める割合が高いことがいえる。

「家庭における社会的居場所の具体的な場所と交流相手との関係」については、子ども部屋のようなある程度自由に使える場所を居場所とする場合、交流相手は友達であることが多いことが捉えられた。逆に、家族の共用部屋である居間を居場所とする場合は、家族が交流相手であることが多いことが明らかになった。

「家庭における居場所タイプの分類」については、個人的居場所と社会的居場所両方を十分に所有しているものがほとんどであることが捉えられた。その他のパターンはそのほとんどが、個人的居場所は十分に所有しているが、社会的居場所は十分に所有できていないパターンである。逆に、個人的居場所を十分に所有していないパターンは特に限られたケースであり、ほとんどいないことが捉えられた。また、個人的居場所と社会的居場所を両方所有できていないものは1%であるが、いるという問題も明らかになった。

表 3－1－2 6つの側面からみた心理状態 調査票による文言

	プラス評価	中間評価	マイナス評価
安心感	安心できる	どちらでもない	不安を感じる
安定感	落ちつける	どちらでもない	いらいらする
快楽感	楽しい	どちらでもない	つまらない
満足感	満足感がある	どちらでもない	不満がある
解放感	解放感を感じる	どちらでもない	圧迫感がある
好感	家庭が好き／学校が好き	どちらでもない	家庭が嫌い／学校が嫌い

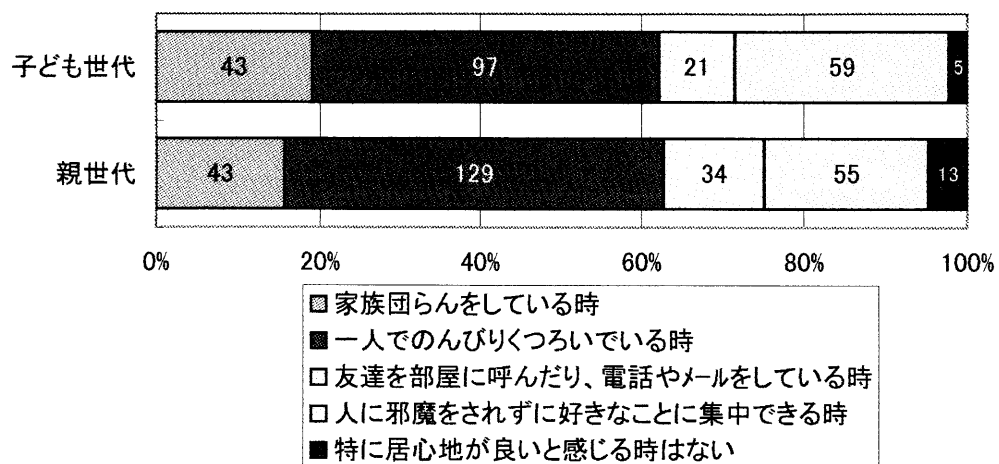
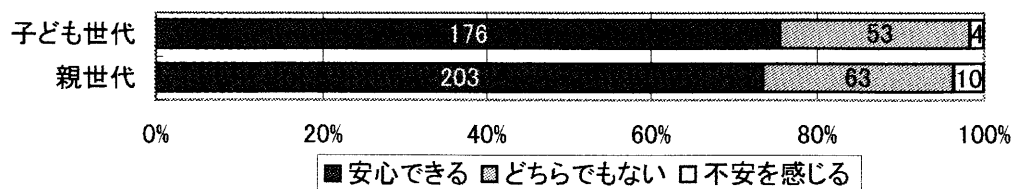


図3-1-1 家庭における居心地が良いと感じる時
〈世代間比較〉

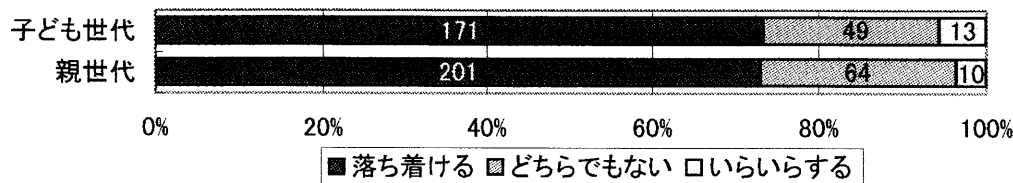
※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

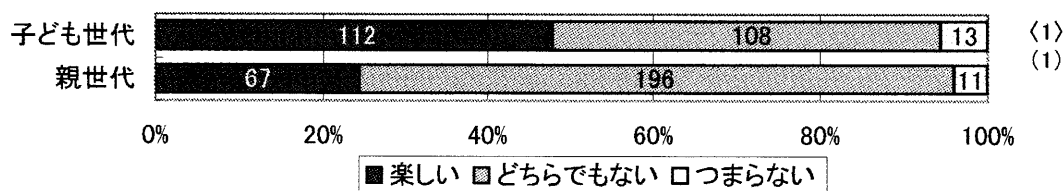
()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。



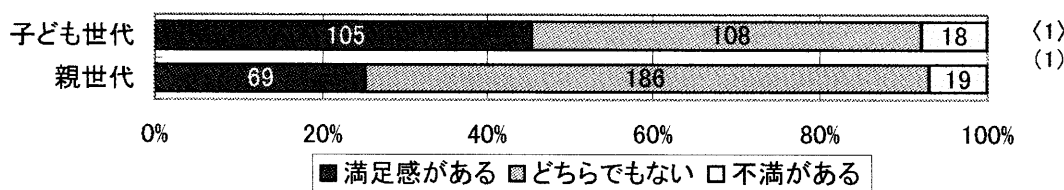
〈安心感〉



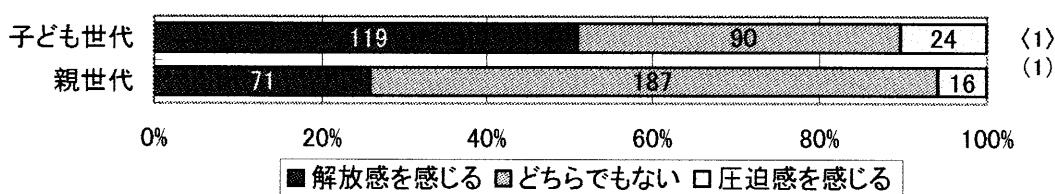
〈安定感〉



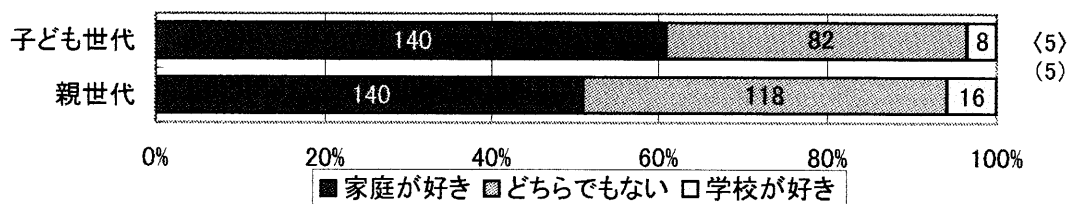
〈快楽感〉



〈満足感〉



〈解放感〉



〈好感〉

図3-1-2 家庭における子どもの心理状態〈世代間比較〉

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

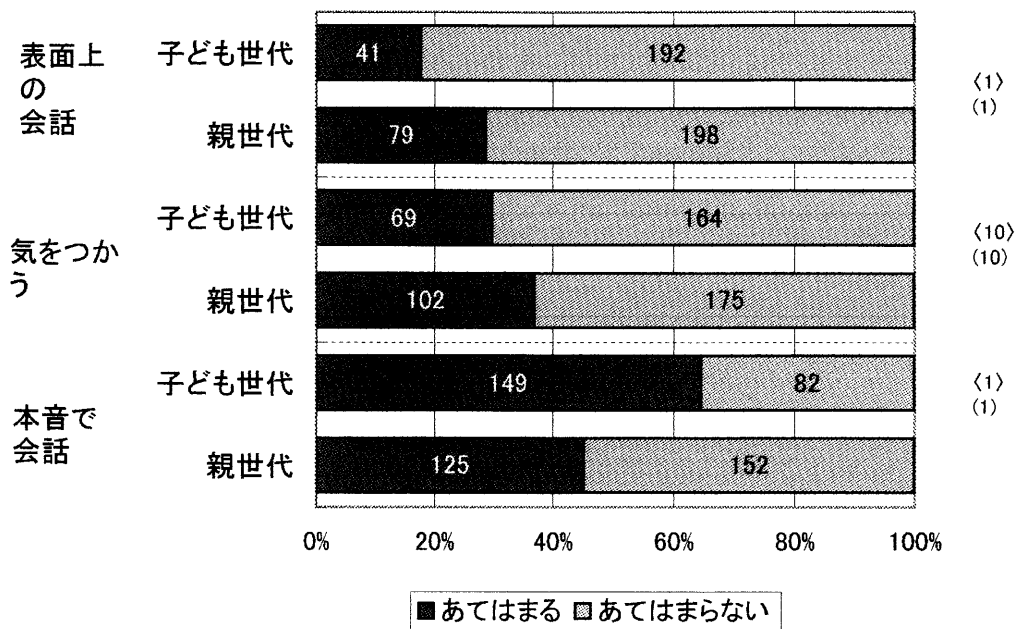


図3-2-1 親との関係〈世代間比較〉

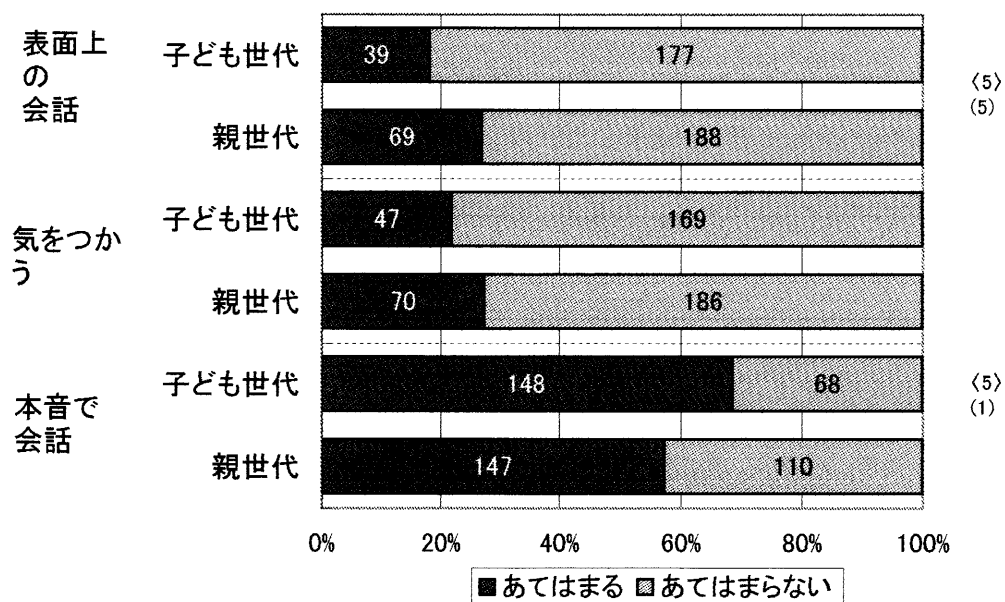


図3-2-2 きょうだいとの関係〈世代間比較〉

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。
 ()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

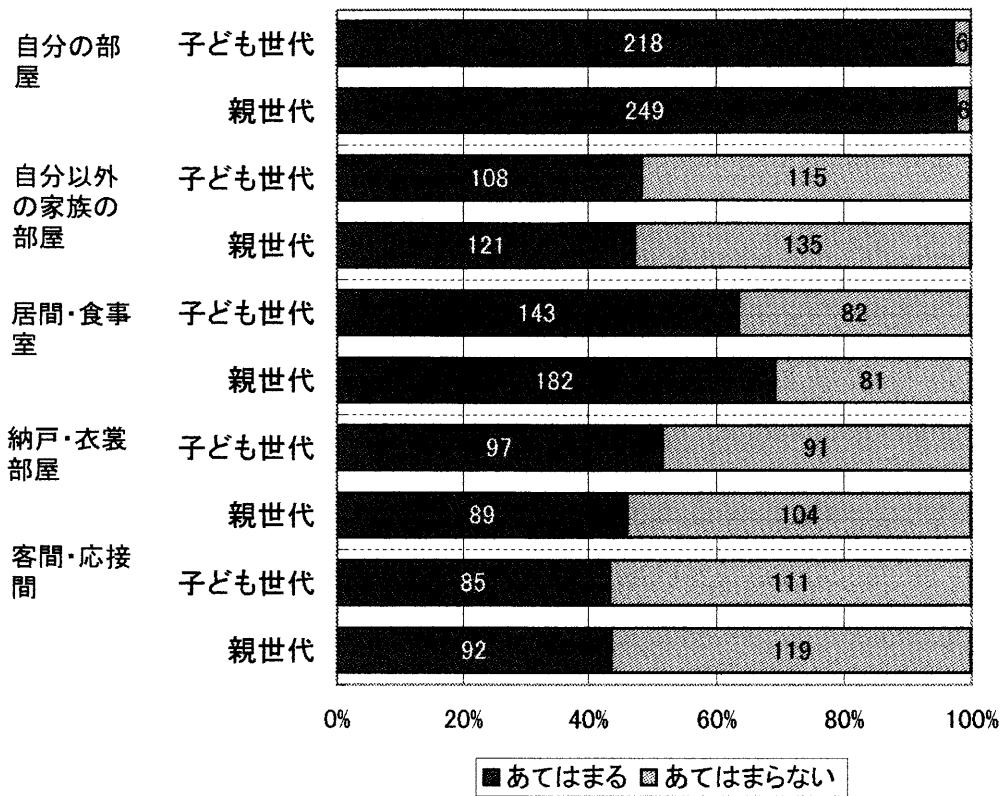


図3-3-1-1 空間の支配度(基本テリトリー)
〈世代間比較〉

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

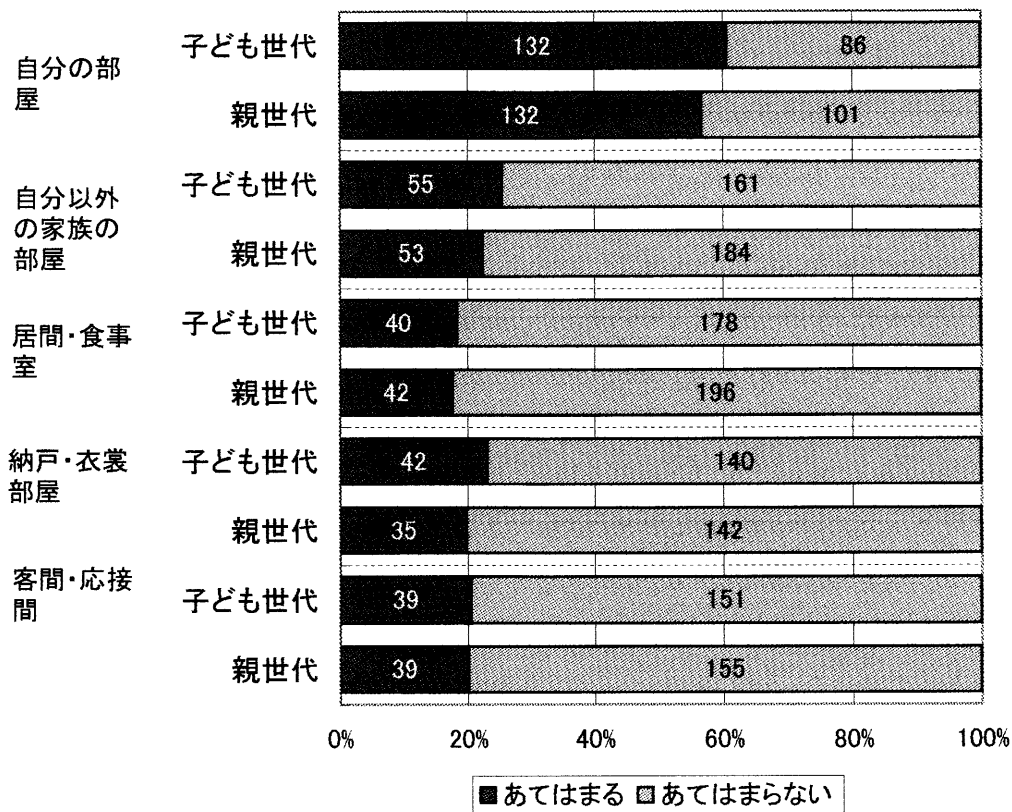


図3-3-1-2 空間の支配度(防御テリトリー)
〈世代間比較〉

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。
()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

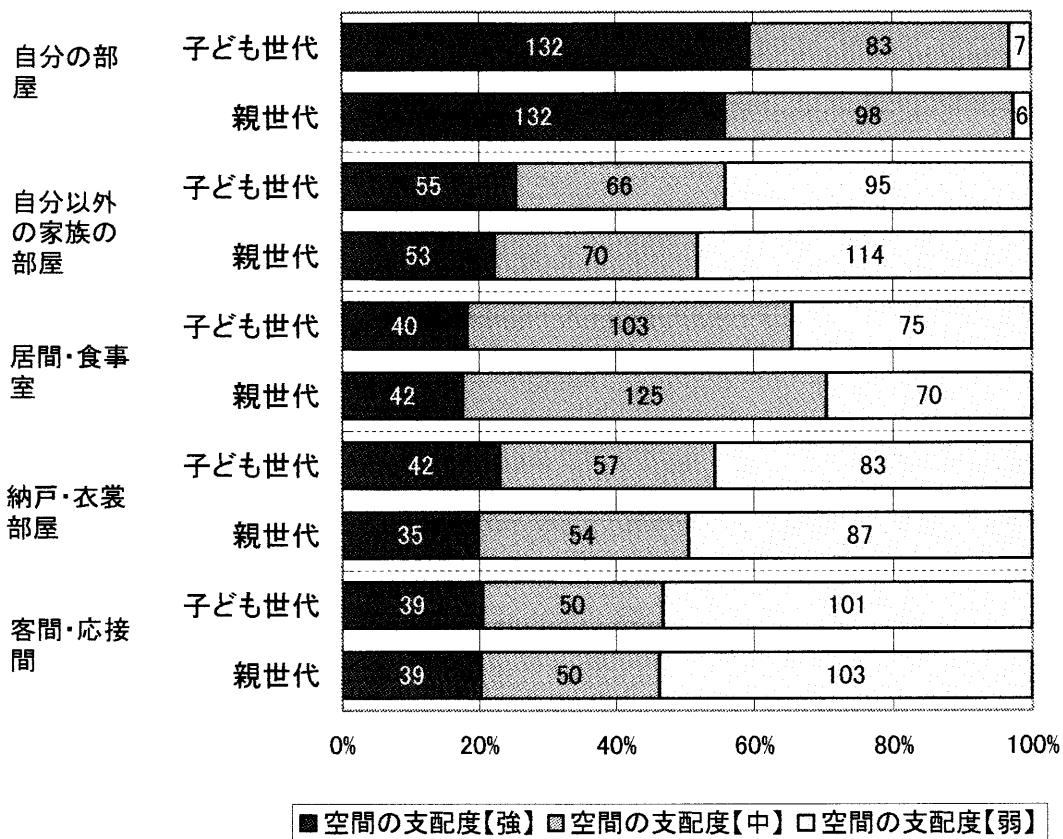


図3-3-1-3 家庭における各室の空間の支配度
〈世代間比較〉

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。
()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

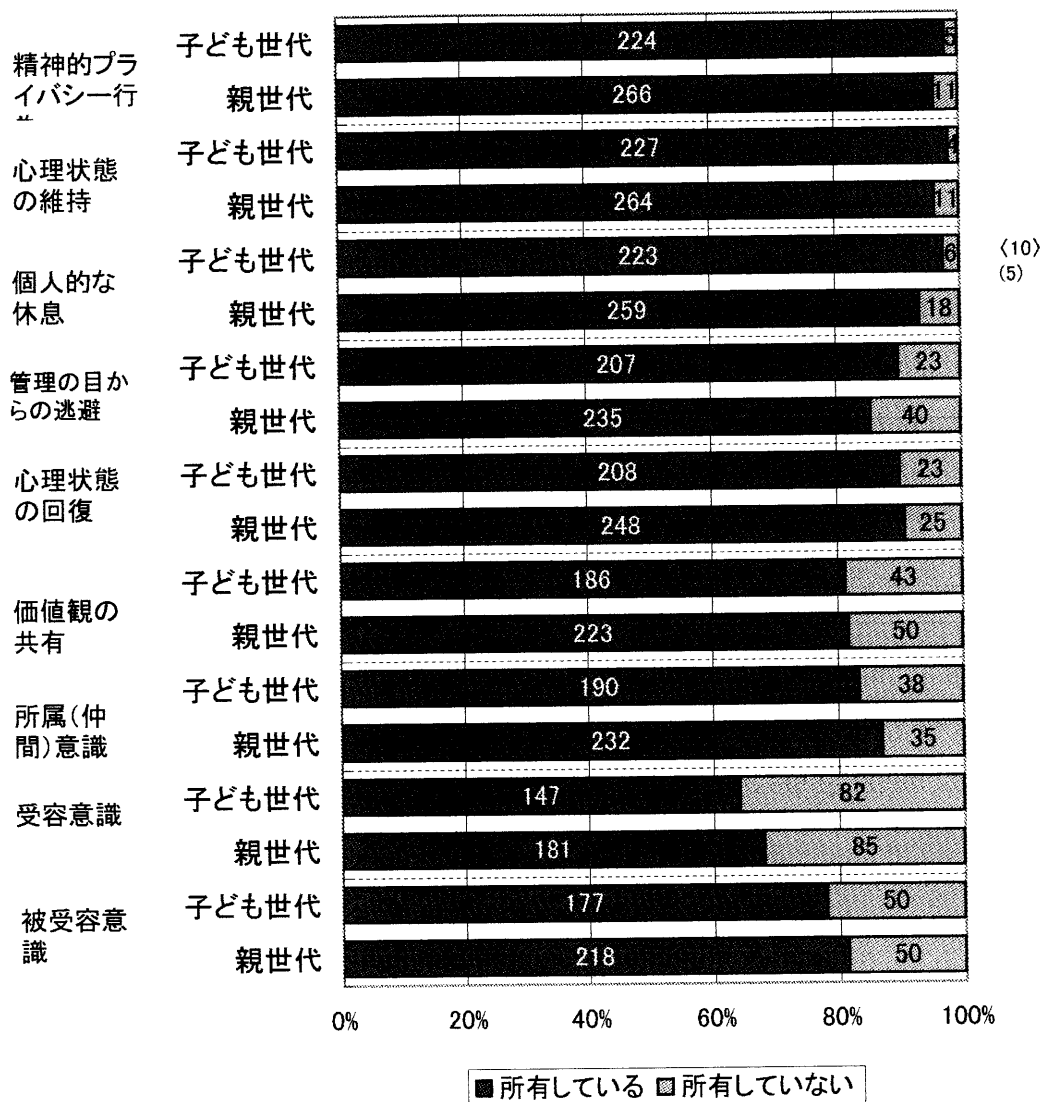
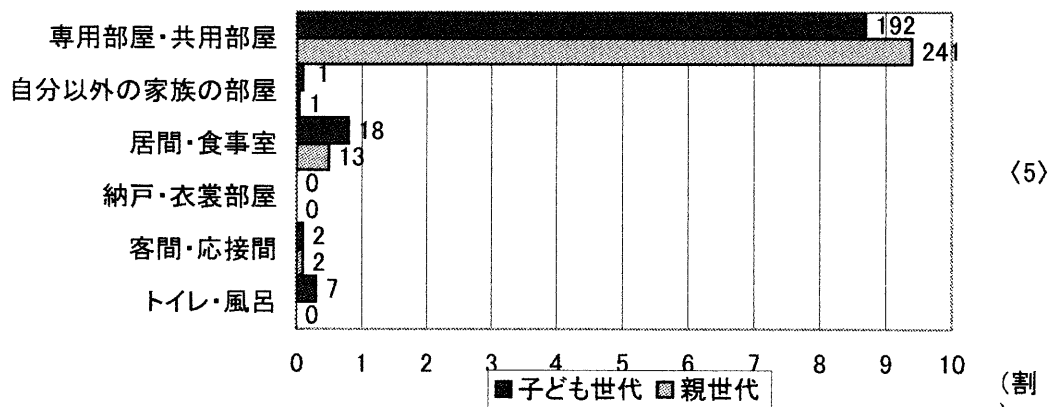
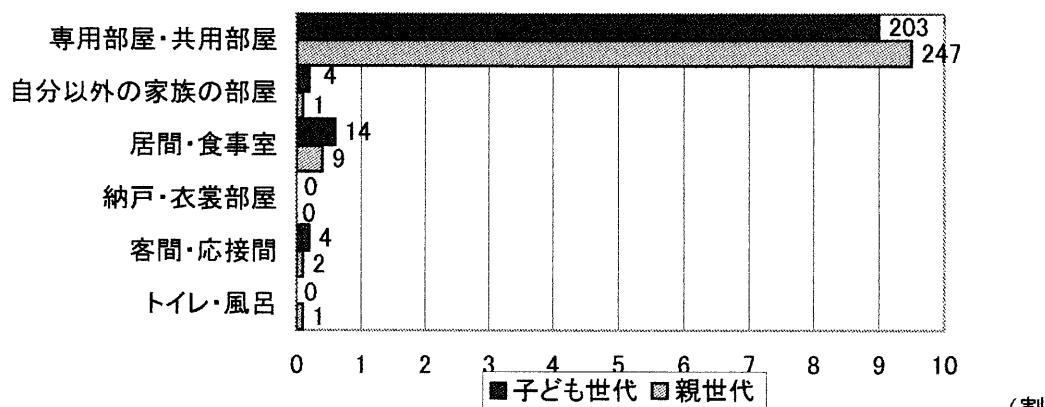
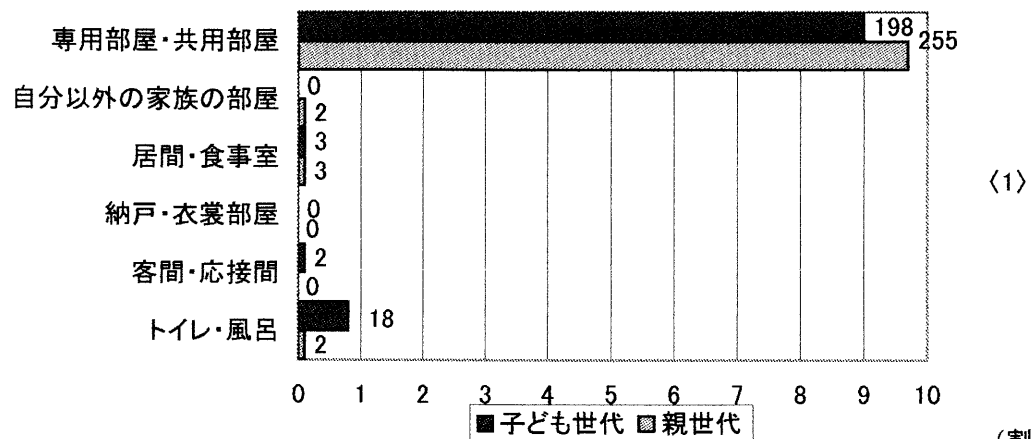


図3-3-2 家庭における居場所の所有率<世代間比較>

※グラフ内数値は件数。

<内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。



※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。
 ()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

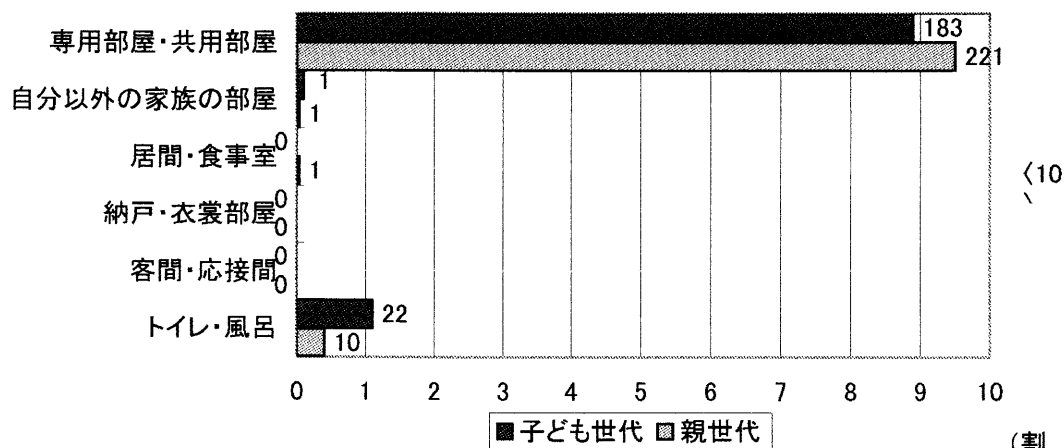


図3-3-3-4 家庭における居場所の具体的な場所【管理の目からの逃避】

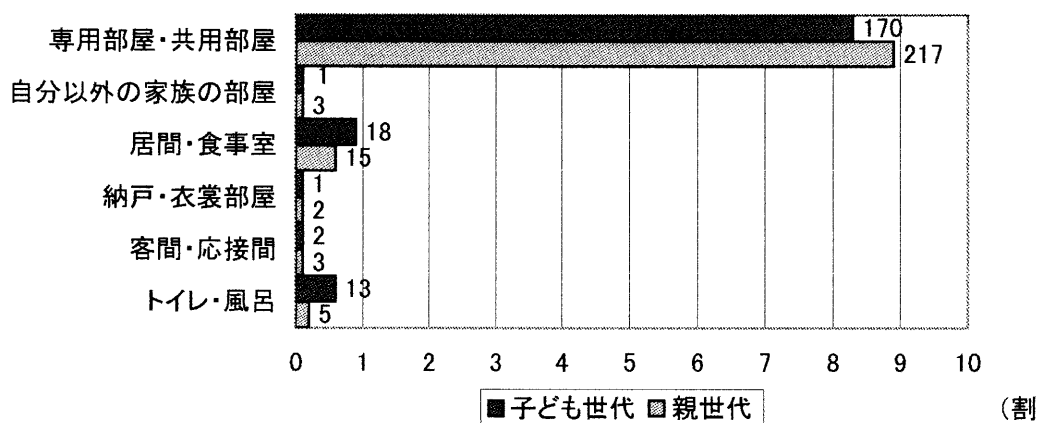


図3-3-3-5 家庭における居場所の具体的な場所【心理状態の回復】

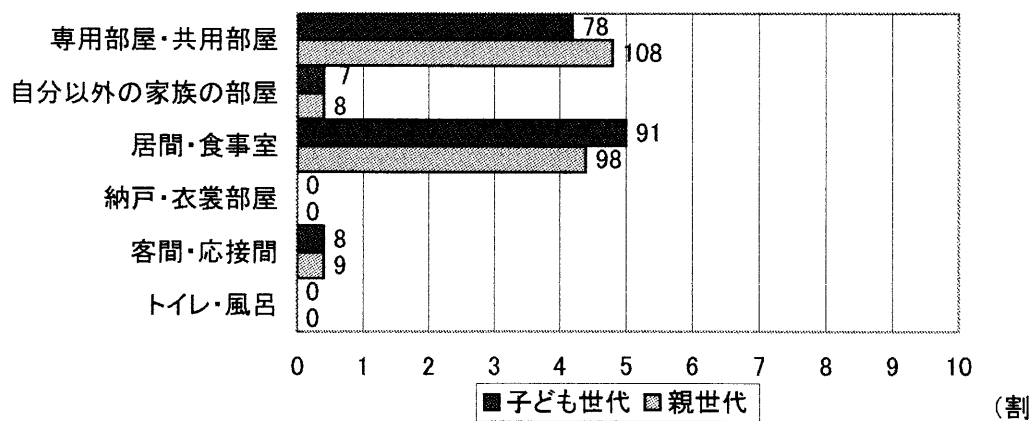


図3-3-3-6 家庭における居場所の具体的な場所【価値観の共有】

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。
 ()内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

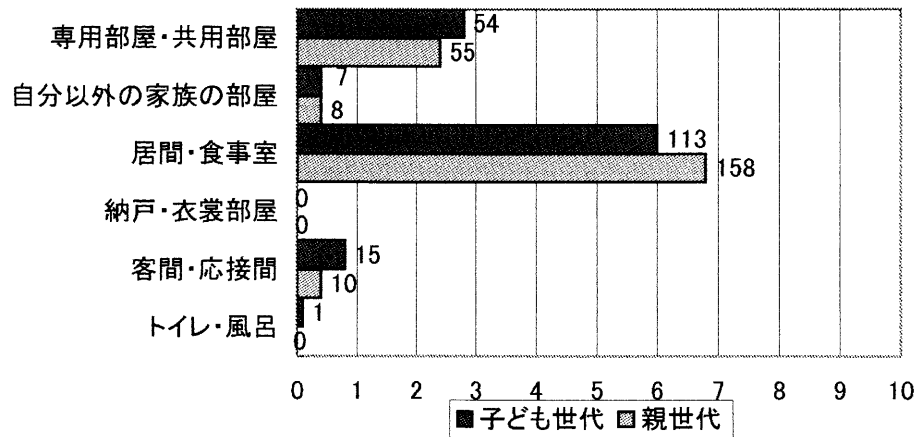


図3-3-3-7 家庭における居場所の具体的な場所【所属(仲間)意識】

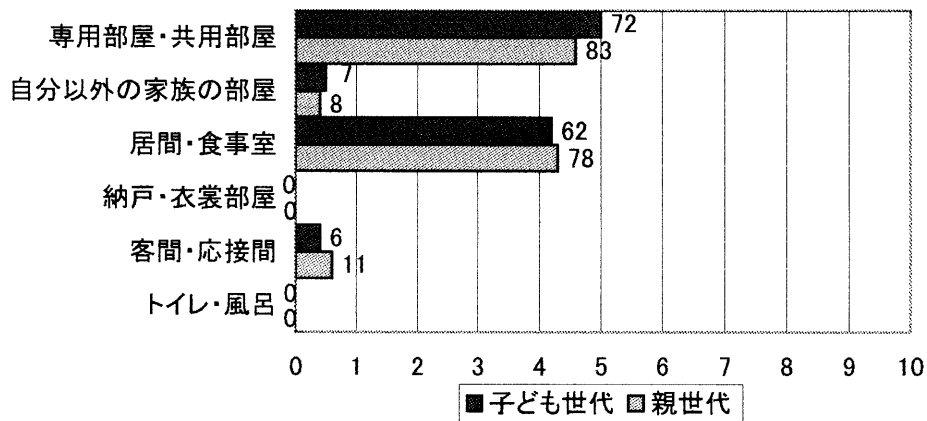


図3-3-3-8 家庭における居場所の具体的な場所【受容意識】

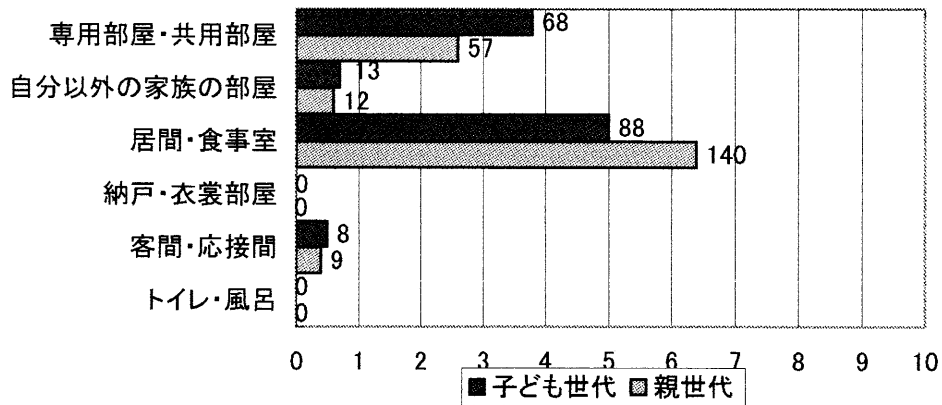


図3-3-3-9 家庭における居場所の具体的な場所【被受容意識】

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。
 ()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

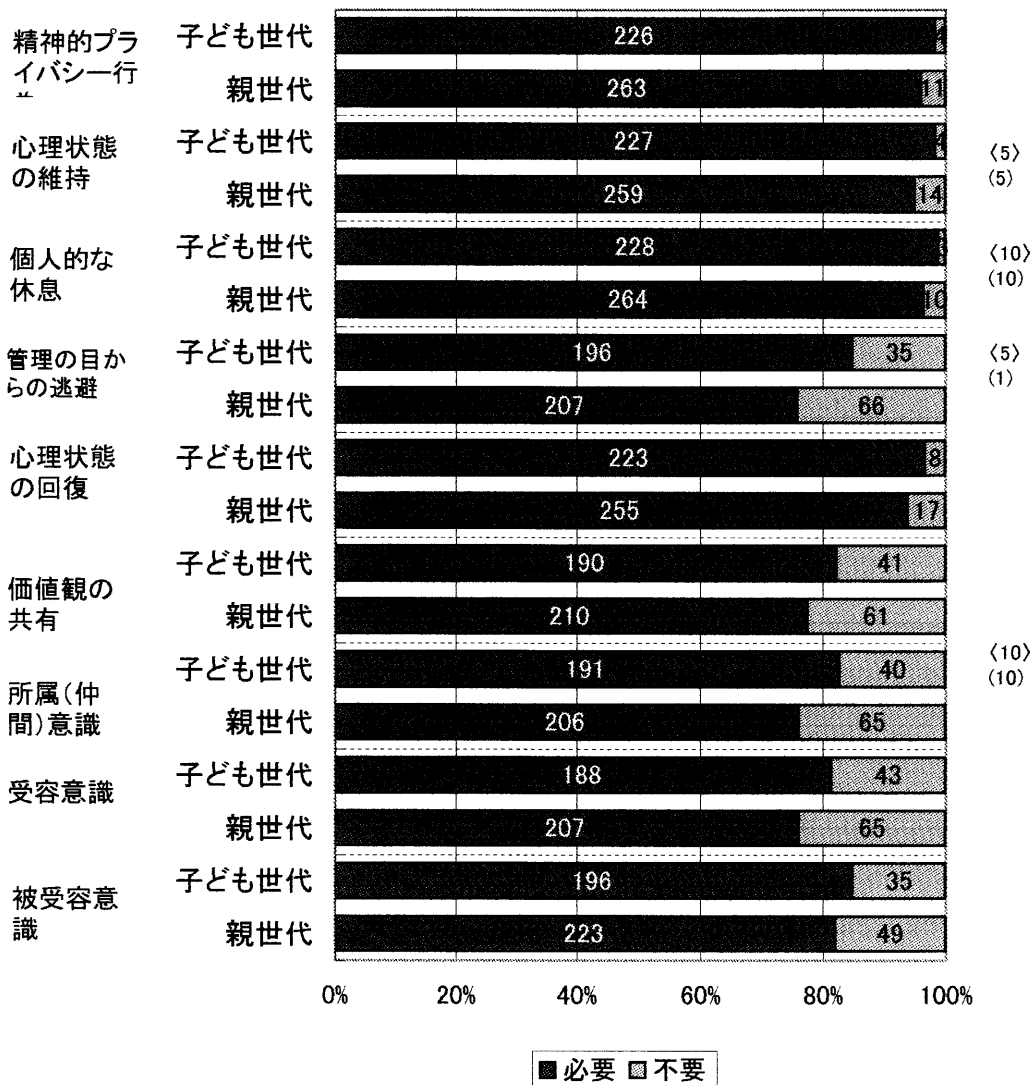


図3-3-4 家庭における居場所に対する要求<世代間比較>

※グラフ内数値は件数。

<>内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

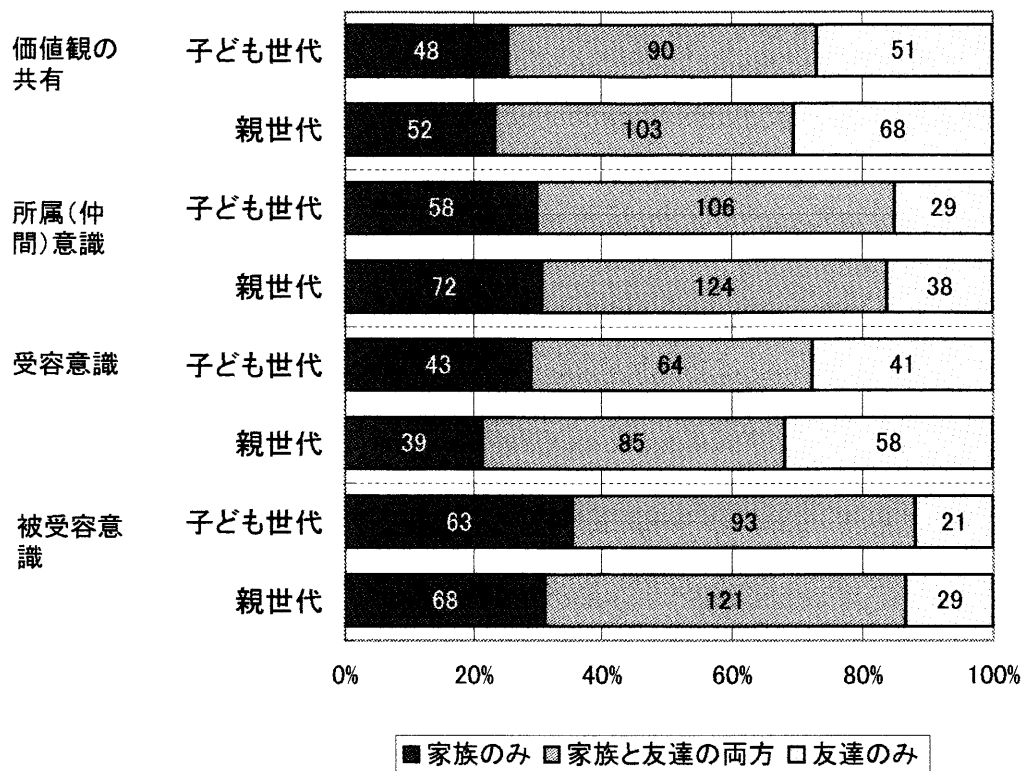


図3-3-5 家庭における社会的居場所で話す相手〈世代間比較〉

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

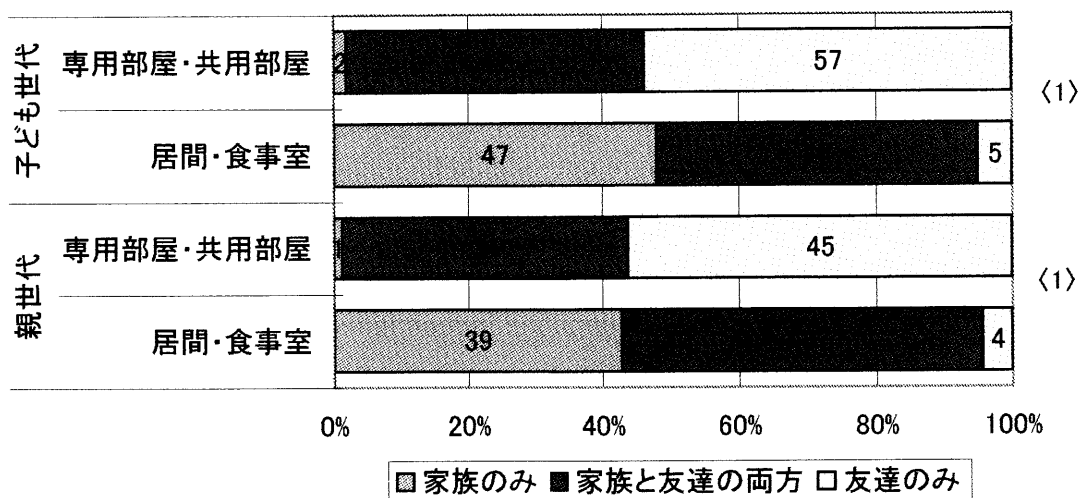


図3-3-6-1 社会的居場所〈価値観の共有〉となる
具体的な場所と交流相手の関連

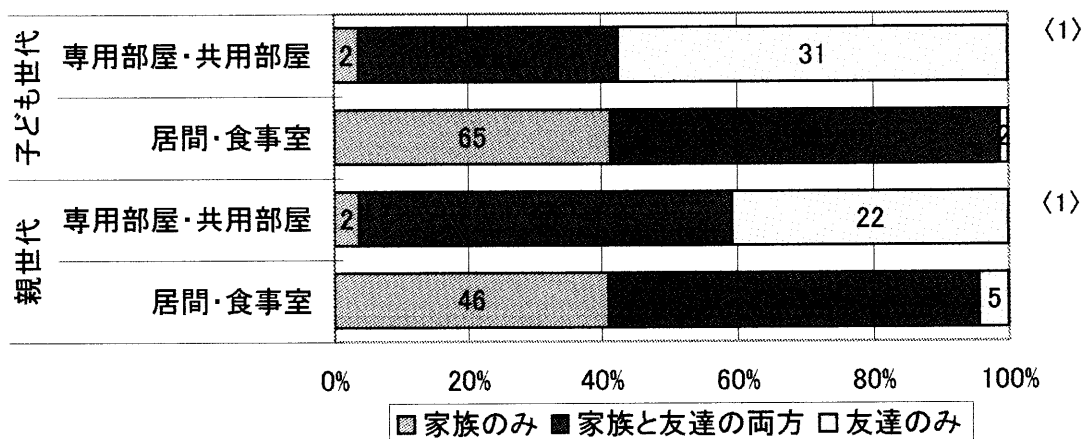


図3-3-6-2 社会的居場所〈所属(仲間)意識〉となる
具体的な場所と交流相手の関連

※グラフ内数値は件数。

<>内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

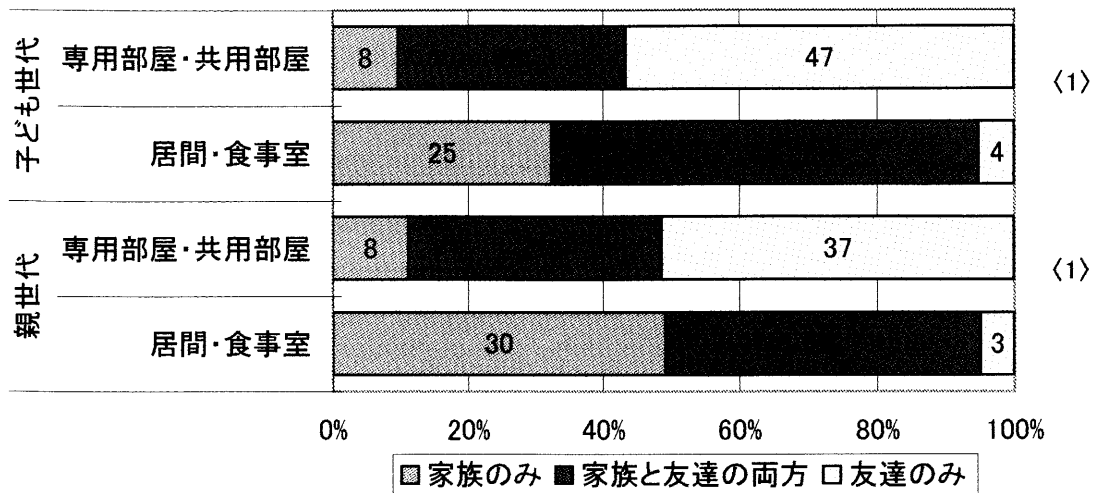


図3-3-6-3 社会的居場所<受容意識>となる
具体的な場所と交流相手の関連

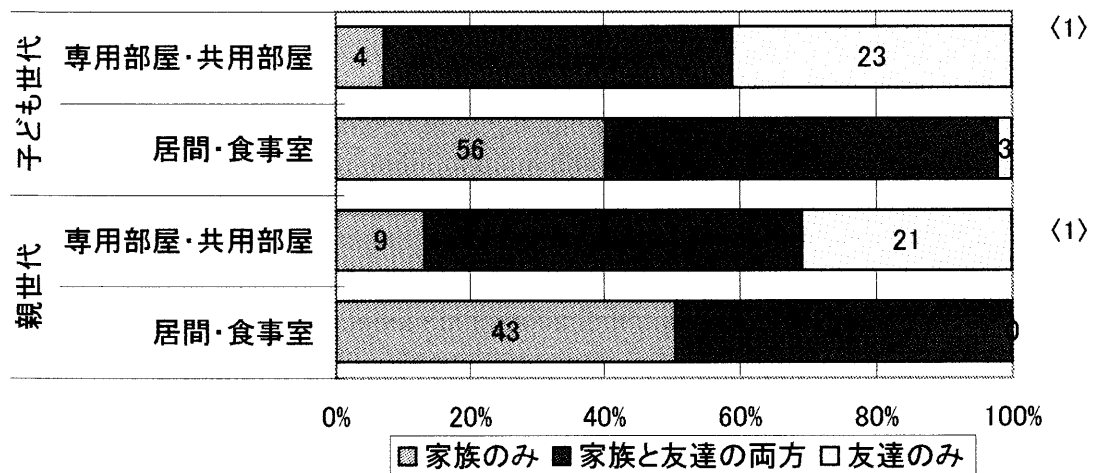


図3-3-6-4 社会的居場所<被受容意識>となる
具体的な場所と交流相手の関連

※グラフ内数値は件数。

<>内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

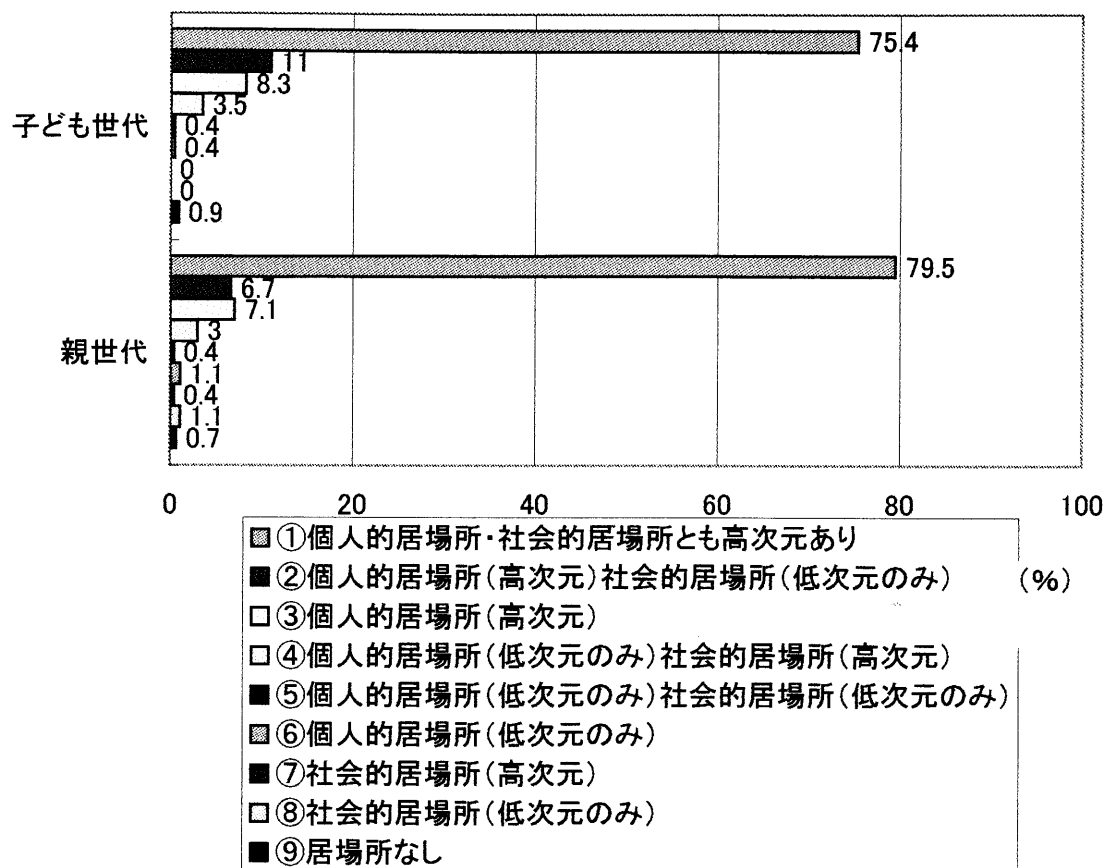


図3-3-7 家庭における居場所所有の9パターン(世代間比較)

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。
 ()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

第四章 親世代・子ども世代比較にみる学校における子どもの意識と居場所の実態

本章では、学校における高校生の居場所を捉えるため、学校において居場所の形成に関わりがあると考えられる「高校生の意識」、「学校における居場所の実態と意識」について世代間比較を通して検討する。

第一節 学校における高校生の所属（子ども世代のみ）

本節では、学校におけるクラス以外の所属を捉えるため、〈子ども世代〉のみ「部活動の参加状況」と「生徒会・委員会活動の参加状況」の2項目について検討を行なった。なお、〈親世代〉については、調査対象者それぞれ通っていた高校が異なるため、〈子ども世代〉と単純に比較はできない。そのため、〈親世代〉については、分析から除いた。

1. 部活動の参加状況

〈子ども世代〉について、部活動の参加状況を捉えるため、「運動系クラブ・サークル」「文化系クラブ・サークル」「入っていない」の3項目について、あてはまるもの全てを選択する方法で調査を行った。調査結果を図4-1-1に示す。なお、〈親世代〉は分析外である。

「入っていない」というものは約1割であり、ほとんどのものが部活動に所属している。部活動に所属しているもののうち、「運動系クラブ・サークル」に所属しているものは約6割、「文化系クラブ・サークル」に所属しているものは約3割であり、運動系のクラブ活動に所属しているものの方が多い。部活動に参加していることは、学校において自分のクラス以外にも活動拠点となる場所を持っているといえ、居場所となる場所の範囲を広げることにつながると考えられる。

2. 生徒会・委員会活動の参加状況

〈子ども世代〉について、生徒会・委員会活動の参加状況を捉えるため、「生徒会活動をしている」「委員会活動をしている」「特にしていない」の3項目について、あてはまるもの全てを選択する方法で調査を行った。調査結果を図4-1-2に示す。なお、〈親世代〉は分析外である。

「生徒会活動をしている」というものは、0.9%であり、ごく一部である。「委員会活動をしている」というものは約4割、「特にしていない」というものは、約6割であり、過半数は、生徒会や委員会活動には参加していない。生徒会や委員会活動は、部活動とは異なり、分担人数が決まっており参加人数は一部である。しかし、委員会などに参加しているものは、自分のクラス以外にも活動拠点となる場所を持っているといえ、居場所となる場所の範囲を広げることにつながると考えられる。

以上より、部活動や生徒会・委員会活動の参加状況を通してみると、部活動にはほとんどが所属しており、生徒会や委員会活動に所属しているものも一部ではあるがことから、学校において、自分のクラス以外にも活動の拠点になる場所を持っているものが多い

といえる。このことから、学校において、居場所となる場所の範囲が広いものが多いのではないかと考えられる。

第二節 学校における高校生の心理状態

本節では、学校における高校生の心理状態について検討するため、「学校における居心地が良いと感じる時」「学校における6つの側面からみた心理状態」の2項目について、世代間比較を通して検討し、世代別の特徴を明らかにする。

1. 学校における居心地が良いと感じる時

学校において、高校生はどんな時に居心地の良さを感じているのか捉えるため、学校において最も居心地が良いと感じる時について、「授業やホームルームなどクラスで行動している時」「部活動をしている時」「生徒会活動・委員会活動をしている時」「休憩中、放課後」「特に居心地が良いと感じる時はない」の5カテゴリーから1つを選択する方法で調査を行い、世代間比較を通して検討した。調査結果を図4-2-1に示す。

世代を通して共通の傾向をみると、両世代とも学校において最も居心地が良いと感じるのは、「休憩中、放課後」で約半数を占める。次いで、「部活動をしている時」が約3割であり、「授業やホームルームなどクラスで行動している時」「生徒会活動・委員会活動をしている時」はごく少数である。学校では授業中など教師に管理された時間が長く、自由に過ごすことは難しい。その中で、「休憩中や放課後」は友達と一緒にしゃべったり、自分の好きなことができたりと自由に過ごせる時間であるため、居心地のよさにつながっていると考えられる。次いで多い「部活動をしている時」については、部活内での決まりや上下関係などがあり、休憩中ほど自由には過ごせないが、好きなことに集中したり打ち込める時間であるため、居心地の良さを感じるのではないかと考えられる。このことから、学校においては、授業中よりも自由に過ごしたり好きなことに集中できる休憩中や放課後、部活動に居心地の良さを感じる傾向が捉えられた。また、「特に居心地が良いと感じる時はない」というものが約1割おり、一日の大半を過ごすにもかかわらず、学校に居心地の良さを感じていないものが多いことが捉えられた。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において5%水準の有意差があり、世代間で違いがややみられた。「休憩中、放課後」に居心地の良さを感じるものの割合は〈子ども世代〉で5割であるのに対し、〈親世代〉では約4割であり、〈子ども世代〉の方がやや多い。一方、「授業中やホームルームなどクラスで行動している時」「部活動をしている時」に居心地の良さを感じるものの割合は〈親世代〉の方がやや高いという違いが捉えられた。これらのことから、〈子ども世代〉の方が学校生活の中で自由に過ごせる時間に居心地の良さを感じるものが多いといえる。

以上より、集団生活の場であり、教師の管理下である学校では、比較的自由に過ごせる休憩中や放課後に居心地の良さを感じるものが、世代を通して多いことが捉えられた。〈子ども世代〉では、さらにこの傾向が強いことが明らかになり、〈子ども世代〉の方が、学校

のような管理社会になじめないものも多いのではないと思われる。

2. 6つの側面からみた学校における心理状態

学校における高校生の心理状態を捉えるため、家庭の場合と同様に、「安心感」「安定感」「快楽感」「満足感」「解放感」「好感」の6つの側面から検討を行なった。家庭の場合と同様に調査を行い、世代間比較を通して検討した。なお、調査票における各側面の具体的な選択肢の文言は表 3-1-2 に、世代間比較の結果を図 4-2-2 に示す。

①安心感

世代による違いを検討したところ、カイ二乗検定と順位相関係数において有意差、有意性はなく、世代による違いはみられない。両世代とも【プラス評価】は約 3 割である。また、【マイナス評価】は約 0.5 割いる。ほとんどのものが【中間評価】であり、家庭における心理状態とくらべると、学校では安心感を感じられていないことが捉えられた。

②安定感

世代による違いを検討したところ、カイ二乗検定と順位相関係数において有意差、有意性はなく、世代による違いはみられない。両世代とも【プラス評価】は約 3 割である。【マイナス評価】はほとんどおらず、【中間評価】のものが最も多い。安定感と同様に、家庭における心理状態と比べると、学校では安定感を感じられていないといえる。

③快楽感

世代を通して共通の傾向をみると、快楽感においては、【プラス評価】は5～6割で、学校における心理状態の中では最も良い。【マイナス評価】は約 0.5 割、【中間評価】は、約 4 割程度である。家庭の心理状態と比べると、学校の方が、快楽感を感じているものが多いことが捉えられた。しかし、快楽感を感じられていないものも少数ではあるが、いることが捉えられた。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において 5%水準の有意差、順位相関係数において 5%水準の有意性があり、世代間でやや違いがみられた。【プラス評価】を示す割合が、〈子ども世代〉では約 6 割であるのに対し、〈親世代〉では約 5 割であり、〈子ども世代〉の方がやや多い。【マイナス評価】については、世代間で違いはみられない。これらのことから、〈子ども世代〉の方が、学校において、快楽感を感じているものが多いことが捉えられた。

④満足感

世代を通して共通の傾向をみると、【プラス評価】は 3 割強である。【マイナス評価】は 0.5～1 割もいる。【中間評価】は半数程度であり、学校では満足感を感じているものが少ないことが捉えられた。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定における 10%水準の有意差があり、世代間で若干違いがみられた。【プラス評価】と【マイナス評価】の割合は、ともに〈子ども世代〉の方が若干高く、〈子ども世代〉の方が満足感を感じられるものも、感じられていないものも若干多いことが捉えられた。

⑤解放感

世代を通して共通の傾向をみると、【プラス評価】は約 2 割と低く、【マイナス評価】は 1 ～1.5 割もいることから、学校においては、解放感を感じられていないものが多いことが捉えられた。学校生活は、主に教師の管理の下であるため、解放感を感じることは特に困難であると考えられる。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において 10%水準の有意差があり、世代間で若干違いがみられた。【マイナス評価】の割合は〈子ども世代〉の方が若干高く、圧迫感を感じているものは〈子ども世代〉の方が若干多いことが捉えられた。

⑥好感

世代を通して共通の傾向をみると、好感については、【プラス評価】は 4 ～ 5 割であり、【マイナス評価】は約 0.5 割程度である。【中間評価】は約 5 割いる。家庭の心理状態とく比べると、学校では好感を感じているものが少ないことが捉えられた。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において 5%水準の有意差、順位相関係数において 1%水準の有意性があり、世代間でやや違いがみられた。【プラス評価】の割合は〈子ども世代〉で 5 割であるのに対し、〈親世代〉では約 4 割であり、〈子ども世代〉の方が好感を感じているものがやや多いことが捉えられた。

以上より、心理状態の 6 項目を通して検討すると、世代を通して共通の傾向は、学校では快楽感や好感を感じているものが多く、その他の安心感、安定感、満足感、解放感を感じているものは少ないことが捉えられた。学校は、友達と一緒に過ごせたり、部活動に打ち込むことができ、快楽感や好感を感じられる場であると考えられる。一方、学校は勉強をする場であり、家庭のようにくつろげる場はないため、安心感や安定感を感じられる場ではないといえる。さらに、学校には校則があり、授業中など教師に管理された時間が長いため、満足感や解放感を感じるものは少ないと考えられる。

世代による違いを検討すると、〈子ども世代〉の方が快楽感、好感、満足感を感じているものが多く、学校の心理状態は全体的に〈子ども世代〉の方が良いものが多いことが捉えられた。しかし、一方で、不満や圧迫感を感じているものも〈子ども世代〉の方が若干多く、〈子ども世代〉では、心理状態の良いものと悪いものに分かれる傾向が捉えられた。第二章でみられた、〈子ども世代〉の方が放課後を部活動などで学校に残るものが多いという傾向は、学校における心理状態の良さも関係しているのではないかと考えられる。その一方で、不満や圧迫感を感じるものも多いということは、学校自体になじめていないものも少なからずいることがうかがえる。

第三節 学校における高校生の人間関係

本節では、学校における高校生の人間関係を捉えるため、高校生が学校で主に関わりを持つと考えられる、先生と友達、さらに先生や友達以外の先輩や後輩とどのような関係であるのかを世代間比較を通して検討する。

1. 先生との関係

学校において、高校生が先生とどのような関わりをもっているのか捉えるため、先生との関係について、「先生とはほとんど表面上の会話しかしない」「仲が良いが、関係を悪くしないように気をつかう先生がいる」「本音で話し合える先生がいる」の3項目について、あてはまるもの全てを選択する方法で調査し、世代間比較を通して検討した。結果を図4-3-1に示す。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定と順位相関係数において有意差、有意性はなく、世代間で違いはみられない。両世代とも、「先生とはほとんど表面上の会話しかしない」が約7割もあり、先生とは希薄な関係であるものがほとんどである。また、「仲が良いが、関係を悪くしないように気をつかう先生がいる」というものは約2～3割おり、先生と良好な関係を持つために、気をつかうものもいることが捉えられた。「本音で話し合える先生がいる」は約2割と相対的には少ないが、希薄な関係が多い先生と生徒の関係の中で、本音で話せるような良好な関係を築けているものもいることが捉えられた。

2. 友達との関係

学校において、高校生が友達とどのような関わりをしているのか捉えるため、友だちとの関係について、「表面上の会話しかしない友達が多い」「仲がよいが、関係を悪くしないよう気をつかう友達が多い」「本音で話し合える友達が多い」の3項目について、あてはまるもの全てを選択する方法で調査し、世代間比較を通して検討した。結果を図4-3-2に示す。

世代を通して共通の傾向をみると、「本音で話し合える友達が多い」というものは約6割、「仲がよいが、関係を悪くしないよう気をつかう友達が多い」というものが約4～5割、「表面上の会話しかしない友達が多い」というものが約2割であり、本音で話せる友達が多いものが最も多い。しかし、残りの4割は本音で話せる友達は多くなく、気をつかう友達が多いものや、表面上の会話しかしない友達が多いものもいることから、友人関係が希薄なものも多いことが捉えられた。

世代による違いを検討すると、「仲がよいが、関係を悪くしないよう気をつかう友達が多い」という項目において、カイ二乗検定における1%水準の有意差、順位相関係数における1%水準の有意性があり、世代間で違いがみられた。「仲がよいが、関係を悪くしないよう気をつかう友達が多い」というものの割合は〈子ども世代〉で約5割であるのに対し、〈親世代〉では約4割であり、〈子ども世代〉の方が友達に気をつかうことが多いものの割合が高い。このことから、友人関係においては、〈子ども世代〉の方がやや希薄な傾向であることが捉えられた。

3. 先生と友達以外の知人（先輩や後輩）との関係

学校において、高校生が関わりをもつ人は、先生や友達だけでなく、部活や委員会などを通して知り合った先輩や後輩などがいると思われる。そこで、先生や友達以外の知人（先

輩や後輩など）との関係について、「表面上の会話しかしない知人が多い」「仲がよいが、関係を悪くしないよう気をつかう知人が多い」「本音で話し合える知人が多い」の3項目について、あてはまるもの全てを選択する方法で調査し、世代間比較を通して検討した。結果を図4-3-3に示す。

世代を通して共通の傾向をみると、「表面上の会話しかしない知人が多い」というものは4割強、「仲がよいが、関係を悪くしないよう気をつかう知人が多い」というものは約4割、「本音で話し合える知人が多い」というものは約2～3割であり、先述した友達との関係とは傾向が異なる。先輩や後輩との関係であるため、本音で話し合える関係は少なく、表面上の会話しかしないものや、仲が良いが気をつかうものの方が多いことが捉えられた。

世代による違いを検討すると、「本音で話し合える知人が多い」という項目において、カイ二乗検定における10%水準の有意差、順位相関係数における10%水準の有意性があり、世代間で若干違いがみられた。「本音で話し合える知人が多い」というものの割合は、〈子ども世代〉で3割であるのに対し、〈親世代〉では2割であり、〈子ども世代〉の方が、本音で話せる友人が多いものが多い。〈子ども世代〉のほとんどが部活動に所属しており、放課後も部活動をして過ごすものが多いことから、クラス以外の人との関わりも多いと考えられる。そのため、友達以外に先輩や後輩とも本音で話せるものが多くなっていると思われる。〈子ども世代〉の方が、学校において居場所となる場所の範囲が広がっていると考えられる。

4. 本節のまとめ

以上より、両世代とも、高校生は学校において、先生や友達、先輩や後輩など様々な人と関わっている。その中で、友達との関係が最も良く、本音で話せる友達の多い高校生が多いことが捉えられた。しかし、中には、仲が悪くならないよう気をつかったり、表面上の会話しかしない希薄な関係が多いものもみられた。次に、先生や先輩・後輩とは、表面上の会話しかしないような関係が多い。特に先生との関係は、希薄な関係のものがほとんどであることが捉えられた。しかし、中には、先生や先輩・後輩とも本音で話せるというものも少数ではあるが、いることが捉えられた。

世代による違いを検討すると、先生との関係は世代を通して共通であり、希薄な関係のものが多く、友達との関係においては〈子ども世代〉の方がやや希薄な傾向がみられた。先輩や後輩との関係においては、〈子ども世代〉の方が親しい関係を築けているものがやや多く、〈子ども世代〉の方が友達の他に、他学年の人とのつながりを持つものが多いことが捉えられた。これは、〈子ども世代〉のほとんどが部活動をしており、クラス以外の人と関わるが多いことが関係していると思われる。これらのことから、〈子ども世代〉の方が、学校において社会的居場所となる場の範囲が広がっているのではないかと推測される。

第四節 学校における高校生の居場所の実態と意識

本節では、学校における居場所の実態と意識について捉えるため、「学校の各場所におけ

る空間の支配度」「学校における居場所の所有率」「学校における居場所となる具体的な場所」「学校における居場所に対する要求」「学校における社会的居場所で話す相手」「学校における居場所パターンの分類」の合計6項目について、世代間比較を通して検討する。

1. 学校の各場所における空間の支配度

第三章の家庭の場合と同様に、学校の各場所についても空間の支配度を捉える。家庭における空間の支配度の検討は、空間の支配度を「基本テリトリー」と「防御テリトリー」の2側面から捉えたが、学校は、公共の場であり、集団生活の場であることから、「防御テリトリー」の側面から検討することは不適當であるといえる。そのため、学校の空間の支配度は「基本テリトリー」の側面からのみ検討することとする。

学校の各場所の空間の支配度を捉えるため、a「自分のクラス」b「他のクラス」c「自分の部室、委員会の場合など」d「グラウンド、体育館、図書館、多目的教室」e「廊下、階段、校庭の片隅、トイレなど」f「職員室、保健室、相談室」の6項目について、「自分の持ち物を自由に置け、好きな時に好きなことができる場所」（基本テリトリー）がある項目全てを選択する方法で調査し、世代間比較を通して検討した。調査結果を図4・4・1に示す。

世代を通して共通の傾向についてみると、基本テリトリーであると認識しているものが最も多い場所はa「自分のクラス」で7～8割であり、自分のクラスの空間の支配度が最も強いことが捉えられた。次いで、c「自分の部室、委員会の場合など」が3～5割である。他の場所については、ほとんど1割未満であり、学校においては、自分のクラスや部室、委員会の場合など以外の場所の支配度は弱いことが捉えられた。自分のクラスや、自分が所属する部活や委員会の活動場所は、自分の机やイス、荷物を置くロッカーなどがあり、自分のテリトリーであると認識しやすいのではないかと考えられる。

世代による違いを検討すると、a「自分のクラス」c「自分の部室、委員会の場合など」d「グラウンド、体育館、図書館、多目的教室」において、カイ二乗検定における1%水準の有意差、順位相関係数における1%水準の有意性があり、世代間で違いがみられた。〈子ども世代〉の方が、空間の支配度が強いものが多いことが捉えられた。世代間で学校の環境が異なっており、〈子ども世代〉の方が高等学校の学校数が多くなっており、学校の土地面積、建物面積も広がっているが、生徒の人数は〈親世代〉の方が多い¹⁾。そのため、〈子ども世代〉の方が、学校に自分のテリトリーであると認識できる程度の空間的なゆとりが存在するのではないかと推測する。また、〈子ども世代〉の方が放課後など部活をする時間が長いこと、過ごす時間が長いほど慣れ親しみ、その場所を自分のテリトリーであると認識しやすいのではないかと推測される。

2. 学校における居場所の所有率

学校における居場所所有の実態を捉えるため、家庭の場合と同様に、個人的居場所について①（「一人になって考え事などができる場所」【精神的プライバシー行為】）②（「好きなことに集中できる場所」【心理状態の維持】）③（「一人になってくつろぐことができる場

所」【個人的な休息】）④（「大人の目を避けられる場所」【管理の目からの逃避】）⑤（「嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所」【心理状態の回復】）の 5 項目、社会的居場所について⑥（「お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所」【価値観の共有】）⑦（「仲間意識を感じられる人と話をする場所」【所属（仲間）意識】）⑧（「自分を頼ってくれる人と話をする場所」【受容意識】）⑨（「自分を受け入れてくれる人と話をする場所」【被受容意識】）の 4 項目の合計 9 項目の所有率を検討する。後述する「学校における居場所となる具体的な場所」（本節 3.）において、具体的な場所の選択肢 a～f を選択したものを「所有している」、g「場所がない」h「学校ではその行為自体しない」を選択したものを「所有していない」とし、学校における居場所所有の実態について世代間比較を通して検討した。結果を図 4-4-2 に示す。

（1）個人的居場所

①「一人になって考え事などができる場所」【精神的プライバシー行為】

両世代とも所有率は半数程度であり、家庭における居場所の所有率よりも低い。学校は集団生活の場であり、家庭の子ども部屋のような場所はないため、個人的居場所をみつけるににくいと考えられる。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において 10%水準の有意差、順位相関係数における 10%水準の有意性があり、世代間で若干違いがみられた。〈子ども世代〉の所有率が約 5 割であるのに対し、〈親世代〉では約 4 割であり、〈子ども世代〉の方が居場所を所有しているものが若干多いことが捉えられた。これは、〈子ども世代〉の方が、学校の各場所における空間の支配度が強いことが関係していると考えられる。（本節 1.）

②「好きなことに集中できる場所」【心理状態の維持】

両世代とも所有率は 6 割強であり、学校における個人的居場所の中では所有率が高い居場所であることが捉えられた。部活動などを通して、好きなことに集中できる場所を得ているのではないかと考えられる。しかし、家庭における居場所の所有率よりは低く、家庭よりは所有しにくいといえる。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定における有意差はなかったが、①【精神的プライバシー行為】と同様に、〈子ども世代〉の所有率の方が若干高い傾向がみられた。

③「一人になってくつろぐことができる場所」【個人的な休息】

両世代とも所有率は半数以下であり、家庭における居場所の所有率よりも低く、学校においては所有しにくい居場所であることが捉えられた。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において 5%水準の有意差、順位相関係数における 5%水準の有意性があり、世代によりやや違いがみられた。〈子ども世代〉の所有率は 4 割強であるのに対し、〈親世代〉の所有率は 3 割強であり、〈子ども世代〉の方が所有率がやや高いことが捉えられた。①【精神的プライバシー行為】と同様に、〈子ども世代〉の方が、学校の各場所における空間の支配度が強いことが関係していると考えられる。（本節 1.）

④「大人の目を避けられる場所」【管理の目からの逃避】

両世代とも所有率は約半数程度であり、家庭における居場所の所有率よりも低く、学校においては所有しにくい居場所であることが捉えられた。学校は、授業中など教師に管理されている時間が長いため、所有しにくいと考えられる。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において1%水準の有意差、順位相関係数における1%水準の有意性があり、世代間で違いがみられた。〈子ども世代〉の所有率が5.5割であるのに対し、〈親世代〉の所有率は4割であり、〈子ども世代〉の所有率の方が高いことが捉えられた。①【精神的プライバシー行為】③【個人的な休息】と同様に、〈子ども世代〉の方が、学校の各場所における空間の支配度が強いことが関係していると考えられる。(本節1.) また、〈子ども世代〉の方が、自由に過ごせる時間に居心地の良さを感じる傾向が強いため、学校においても大人の目を避ける場所を所有するものが多いのではないかと考えられる。

⑤「嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所」【心理状態の回復】

両世代とも所有率は約半数程度であり、家庭における居場所の所有率よりも低く、学校においては所有しにくい居場所であることが捉えられた。学校は、集団生活の場であり、心理状態を回復できるような場所はみつけにくいと考えられる。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において有意差はなかったが、先述した個人的居場所①～④と同様に、〈子ども世代〉の所有率の方が若干高い傾向がみられた。

(2) 社会的居場所

⑥「お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所」【価値観の共有】

世代を通して共通の傾向であり、世代による違いはみられなかった。両世代とも所有率は9.5割と高く、ほとんどのものが居場所を所有している。また、家庭における居場所の所有率よりも高いことが捉えられた。

⑦「仲間意識を感じられる人と話をする場所」【所属(仲間)意識】

世代を通して共通の傾向であり、世代による違いはみられなかった。両世代とも所有率は9.5割と高く、ほとんどのものが居場所を所有している。また、家庭における居場所の所有率よりも高いことが捉えられた。

⑧「自分を頼ってくれる人と話をする場所」【受容意識】

世代を通して共通の傾向であり、世代による違いはみられなかった。両世代とも所有率は9割と高く、ほとんどのものが居場所を所有しており、家庭における居場所の所有率よりも高いことが捉えられた。しかし、先述した低次元の社会的居場所である⑥と⑦の居場所よりは所有率が若干低く、やや所有しにくいことが捉えられた。学校は集団生活の場であり、常に人と関わっている状態であるが、より親密な関係を必要とする交流はやや得にくいと考えられる。

⑨「自分を受け入れてくれる人と話をする場所」【被受容意識】

世代を通して共通の傾向であり、世代による違いはみられなかった。両世代とも所有率は9割と高く、ほとんどのものが居場所を所有しており、家庭における居場所の所有率よ

りも高いことが捉えられた。しかし、先述した低次元の社会的居場所である⑥と⑦の居場所よりは所有率が若干低く、やや所有しにくいことが捉えられた。学校は集団生活の場であり、常に人と関わっている状態であるが、より親密な関係を必要とする交流はやや得にくいと考えられる。

以上より、学校における居場所の①～⑨を通して検討する。世代を通して共通の傾向は、社会的居場所はほとんどのものが所有している。集団行動が主であり、常に友達や先生と関わっている環境であるため、社会的居場所を所有しやすいと考えられる。個人的居場所の所有率は家庭よりも低く、全体的に所有しにくいことが捉えられた。その中で、②【心理状態の維持】の所有率が最も高く、これは部活動などを通して得られると思われ、集団生活のなかでも比較的得やすい居場所であると考えられる。その他の個人的居場所の所有率は半数以下であり、集団生活が基本である学校では得にくい居場所であると考えられる。

世代による違いを検討すると、社会的居場所の所有率については世代で違いがなかった。個人的居場所においては、世代間で違いがあり、〈子ども世代〉の方が所有率が高い傾向が捉えられた。集団行動が基本である学校においても、〈子ども世代〉では半数近くの方が個人的居場所を所有しており、特に、④【管理の目からの逃避】の居場所所有率が〈親世代〉よりも高い。家庭における居場所においても、〈子ども世代〉の方が個人的居場所の所有率が高く、隔離・逃避傾向もやや強かったことから、〈子ども世代〉は家庭と学校を通して、隔離・逃避傾向がやや強いことが捉えられた。また、〈子ども世代〉の方が、学校の各場所における空間の支配度も強く、個人的居場所を得やすい環境であることが所有率の高さに関係しているのではないかと考えられる。

3. 学校における居場所となる具体的な場所

学校において、具体的にどの場所が居場所となっているのか捉えるために、先述した2.の①～⑨の居場所の具体的な場所について検討する。①～⑨の具体的な場所について、a「自分のクラス」b「他のクラス」c「自分の部室、委員会の場など」d「グラウンド、体育館、図書館、多目的教室」e「廊下、階段、校庭の片隅、トイレなど」f「職員室、保健室、相談室」g「場所がない」h「学校ではその行為自体しない」の8カテゴリーから最もあてはまるもの1つを選択する方法で調査し、世代間比較を通して検討した。なお、本項目は居場所となる具体的な場所を検討するため、選択肢のg「場所がない」とf「学校ではその行為自体しない」を回答したものは分析から除いた。結果を図4-4-3-1～9に示す。

(1) 個人的居場所

①「一人になって考え事などができる場所」【精神的プライバシー行為】

世代による違いはみられず、世代を通して共通の傾向である。居場所の具体的な場所として最も多い場所はa「自分のクラス」であり、約6割である。c「自分の部室、委員会

の場など」 d 「グラウンド、体育館、図書館、多目的教室」 e 「廊下、階段、校庭の片隅、トイレなど」はそれぞれ 1～1.5 割と、ごく少数である。学校において、①【精神的プライバシー行為】の居場所の具体的な場所は主に「自分のクラス」であり、学校の中で空間の支配度が最も強い場所を使っていることが捉えられた。

②「好きなことに集中できる場所」【心理状態の維持】

世代による違いはみられず、世代を通して共通の傾向である。居場所の具体的な場所として最も多い場所は a 「自分のクラス」であり、①【精神的プライバシー行為】と同様の傾向である。しかし、c 「自分の部室、委員会の場合など」、d 「グラウンド、体育館、図書館、多目的教室」も 2～3 割ずつ占めており、「自分のクラス」以外の場所を使うものも多い。これは、「好きなこと」の性質によって使用する場所が異なるとためと考えられる。

③「一人になってくつろぐことができる場所」【個人的な休息】

世代を通して共通の傾向をみると、居場所の具体的な場所として最も多い場所は、他の居場所と同様に a 「自分のクラス」である。学校における空間の支配度が最も強い場所であるため、「自分のクラス」が具体的な場所になると考えられる。次いで多い場所が c 「自分の部室、委員会の場合など」 d 「グラウンド、体育館、図書館、多目的教室」であり、それぞれ約 2 割を占めており、「自分のクラス」以外の場所を使うものもやや多いことが捉えられた。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において 5%水準の有意差があり、世代間でやや違いがみられた。a 「自分のクラス」を使う割合は〈子ども世代〉の方が高いが、c 「自分の部室、委員会の場合など」 d 「グラウンド、体育館、図書館、多目的教室」を使う割合は〈親世代〉の方がやや高いという違いがみられた。このことから、〈親世代〉は「自分のクラス」以外の場所を使うものもやや多いことが捉えられた。これは、〈子ども世代〉の方が「自分のクラス」の空間の支配度が強いことが関係すると考えられる。

④「大人の目を避けられる場所」【管理の目からの逃避】

世代で共通の傾向をみると、a 「自分のクラス」 c 「自分の部室、委員会の場合など」 e 「廊下、階段、校庭の片隅、トイレなど」がそれぞれ約 3 割を占め、④【管理の目からの逃避】の具体的な場所は大きく 3 パターンに分かれることが捉えられた。「自分のクラス」「自分の部室、委員会の場合など」は学校における空間の支配度も強い場所であるため、居場所となっていることが考えられる。しかし、これらの場所で教師など大人の目を避けることはできても、クラスメートなどから完全に隔離することはできない。一方、「廊下、階段、校庭の片隅、トイレなど」は空間の支配度は強くないが、一時的には教師や同級生から隠れられる場所であり、人の目から逃避しやすい場所であるため居場所として使われると考えられる。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において 5%水準の有意差があり、世代間でやや違いがみられた。a 「自分のクラス」 e 「廊下、階段、校庭の片隅、トイレなど」を使う割合は〈子ども世代〉の方が高いが、c 「自分の部室、委員会の場合など」 d 「グラウンド、体育館、図書館、多目的教室」を使う割合は〈親世代〉の方がやや高いという違いが

みられた。これは、〈子ども世代〉の方が、「自分のクラス」の空間の支配度が強く、空間的に余裕があるため、「自分のクラス」が居場所となるものが多い。一方、〈親世代〉は、〈子ども世代〉にくらべ、学校に空間的余裕が少なく、「自分のクラス」以外の場所に居場所を求めざるを得ないためと考えられる。また、〈子ども世代〉では「廊下、階段、校庭の片隅、トイレなど」を使う割合が若干多い。廊下やトイレは学校の中でみると、匿名性のある場所であり、完全に他者から逃避できる場所であるといえる。このような匿名的な場所を居場所とするものが多いことは、〈子ども世代〉の方が、隔離・逃避傾向が強いということの現われであると思われる。

⑤「嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所」【心理状態の回復】

世代で共通の傾向をみると、居場所の具体的な場所として最も多い場所は、他の居場所と同様に a 「自分のクラス」である。学校における空間の支配度が最も強い場所であるため、「自分のクラス」が具体的な場所になると考えられる。次いで多い場所が c 「自分の部室、委員会の場など」 d 「グラウンド、体育館、図書館、多目的教室」であり、それぞれ約 2 割を占めており、「自分のクラス」以外の場所を使うものもやや多いことが捉えられた。

世代による違いを検討したところ、カイ二乗検定における 10%水準の有意差があり、世代間で若干違いがみられた。〈子ども世代〉では f 「職員室、保健室、相談室」を使用するものが約 1 割おり、相対的には少ないものの、個人的居場所の中では使用される割合が高いことが捉えられた。〈子ども世代〉保健室や相談室等を⑤【心理状態の回復】の居場所として使用することも多くなっていると考えられる。

(2) 社会的居場所

⑥「お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所」【価値観の共有】

世代で共通の傾向をみると、居場所の具体的な場所として最も多い場所は、a 「自分のクラス」であり、他には c 「自分の部室、委員会の場など」を使用するものが約 1 割おり、その他の場所を使用するものは少ない。学校ではクラスで過ごす時間が最も長く、クラスでの友達との交流が社会的居場所につながっていると考えられる。また、部室・委員会の場を使っているものもいることから、部活動や委員会を通した人とのつながりの方が居場所となっているものもいることが捉えられた。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において 5%水準の有意差があり、世代間でやや違いがみられた。a 「自分のクラス」を使用する割合は〈子ども世代〉の方がやや高く、その他の場所を使う割合は〈親世代〉の方が高いことが捉えられた。

⑦「仲間意識を感じられる人と話をする場所」【所属（仲間）意識】

世代で共通の傾向をみると、⑥【価値観の共有】と同じ傾向である。居場所の具体的な場所として最も多い場所は、a 「自分のクラス」であり、他には c 「自分の部室、委員会の場など」を使用するものが約 2 割おり、その他の場所を使用するものは少ない。学校ではクラスで過ごす時間が最も長く、クラスでの友達との交流が社会的居場所につながっていると考えられる。また、部室・委員会の場を使っているものもいることから、部活動や

委員会を通した人とのつながりの方が居場所となっているものもいることが捉えられた。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において 1%水準の有意差があり、世代間で違いがみられた。a「自分のクラス」を使用する割合は〈子ども世代〉の方が高く、d「グラウンド、体育館、図書館、多目的教室」を使う割合は〈親世代〉の方が高いことが捉えられた。

⑧「自分を頼ってくれる人と話をする場所」【受容意識】

世代で共通の傾向をみると、他の社会的居場所と同様に、居場所の具体的な場所として最も多い場所は、a「自分のクラス」であり、他にはc「自分の部室、委員会の場など」を使用するものが約 2 割おり、他の場所を使うものは少ない。学校ではクラスで過ごす時間が最も長く、クラスでの友達との交流が社会的居場所につながっていると考えられる。また、部室・委員会の場を使っているものもいることから、部活動や委員会を通した人とのつながりの方が居場所となっているものもいることが捉えられた。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において 1%水準の有意差があり、世代間で違いがみられた。a「自分のクラス」を使用する割合は〈子ども世代〉の方が高く、d「グラウンド、体育館、図書館、多目的教室」 e「廊下、階段、校庭の片隅、トイレなど」を使う割合は〈親世代〉の方がやや高いことが捉えられた。

⑨「自分を受け入れてくれる人と話をする場所」【被受容意識】

世代で共通の傾向をみると、他の社会的居場所と同様に、居場所の具体的な場所として最も多い場所は、a「自分のクラス」であり、他にはc「自分の部室、委員会の場など」を使用するものが約 2 割おり、他の場所を使うものは少ない。学校ではクラスで過ごす時間が最も長く、クラスでの友達との交流が社会的居場所につながっていると考えられる。また、部室・委員会の場を使っているものもいることから、部活動や委員会を通した人とのつながりの方が居場所となっているものもいることが捉えられた。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において 1%水準の有意差があり、世代間で違いがみられた。a「自分のクラス」を使用する割合は〈子ども世代〉の方が高く、d「グラウンド、体育館、図書館、多目的教室」 e「廊下、階段、校庭の片隅、トイレなど」を使う割合は〈親世代〉の方がやや高いことが捉えられた。

以上より、学校における居場所①～⑨を通して検討を行なう。世代間で共通の傾向をみると、学校における居場所の具体的な場所として「自分のクラス」が最もよく使われていることが捉えられた。特に、社会的居場所においては、ほとんどが「自分のクラス」を居場所としている。個人的居場所においては、居場所となる場所が概念別に異なっていることが捉えられた。「自分のクラス」を使うものがほとんどである居場所は①【精神的プライバシー行為】である。「自分のクラス」を使うものが最も多いが、「部室や委員会の場」「グラウンドや体育館」などクラス以外の場所を使うものもいる居場所は②【心理状態の維持】③【個人的な休息】⑤【心理状態の回復】である。「自分のクラス」「部室、委員会の場」「廊下、階段、校庭の片隅、トイレなど」の 3 パターンに分かれる居場所は④【管理の目からの

逃避】である。「自分のクラス」は学校において空間の支配度が最も強い場所であり、個人的居場所を得やすい場所であると考えられる。「部室や委員会の場合」は「自分のクラス」に次いで空間の支配度が強い場所であり、これらの場所が個人的居場所となるものもいると考えられる。「グラウンドや体育館」「廊下、階段、校庭の片隅、トイレなど」の空間の支配度は強くないが、学校の中では比較的匿名的な場所であり、一時的には人の目から隔離・逃避できる場所であり、個人的居場所を得やすいのではないかと考えられる。

世代による違いを検討すると、個人的居場所と社会的居場所ともに、世代間で違いがみられた。世代による違いを全体的にみると、「自分のクラス」を居場所として使用する割合は〈子ども世代〉の方が高く、その他の場所を使用する割合は〈親世代〉の方が高いという違いである。世代間では学校における物理的環境が異なっており、〈子ども世代〉の方が、生徒数は減少しているが、学校数は増加しており、学校の建物面積も増えていることから¹⁾、〈子ども世代〉の方が学校やクラス内にゆとりがあると思われる。逆に〈親世代〉は〈子ども世代〉よりもクラス内にゆとりが少なかったため、「自分のクラス」以外の場所に居場所を求めざるを得ない環境だったのではないかと推測される。概念別にみると、④【管理の目からの逃避】では、〈子ども世代〉の方が「廊下、階段、校庭の片隅、トイレなど」のような学校の中で匿名的な場所を使うものが多く、学校においても隔離・逃避傾向がやや強いことが捉えられた。さらに、⑤【心理状態の回復】では、〈子ども世代〉では「職員室、保健室、相談室」を居場所とするものがおり、相談室や保健室など、学校における個人的居場所となる具体的な場所の選択肢が増えていることが捉えられた。

4. 学校における居場所に対する要求

学校における居場所に対する要求を捉えるため、家庭の場合と同様に、個人的居場所について①（「一人になって考え事などができる場所」【精神的プライバシー行為】）②（「好きなことに集中できる場所」【心理状態の維持】）③（「一人になってくつろぐことができる場所」【個人的な休息】）④（「大人の目を避けられる場所」【管理の目からの逃避】）⑤（「嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所」【心理状態の回復】）の5項目、社会的居場所について⑥（「お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所」【価値観の共有】）⑦（「仲間意識を感じられる人と話をする場所」【所属（仲間）意識】）⑧（「自分を頼ってくれる人と話をする場所」【受容意識】）⑨（「自分を受け入れてくれる人と話をする場所」【被受容意識】）の4項目の合計9項目について、必要だと思う場所全てを選択する方法で調査し、世代間比較を通して検討した。結果を図4-4-4に示す。

（1）個人的居場所

①「一人になって考え事などができる場所」【精神的プライバシー行為】

世代による違いを検討したところ、カイ二乗検定において1%水準の有意差、順位相関係数において1%水準の有意性があり、世代間で大きな違いがみられた。〈子ども世代〉の要求率は約6割であるのに対し、〈親世代〉の要求率は3割であり、〈子ども世代〉の方の要求率がかなり高いことが捉えられた。

②「好きなことに集中できる場所」【心理状態の維持】

両世代とも、要求率は 7 割であり、個人的居場所に対する要求の中では、高い要求率である。居場所所有の実態においても、②【心理状態の維持】の所有率は比較的高かったことから、世代を通して、学校に「好きなことに集中できる場所」を必要とし、所有していることが捉えられた。

世代による違いを検討したところ、カイ二乗検定と順位相関係数における有意差、有意性はなく、世代間で違いはみられなかった。

③「一人になってくつろぐことができる場所」【個人的な休息】

世代による違いを検討したところ、カイ二乗検定において 1%水準の有意差、順位相関係数において 1%水準の有意性があり、世代間で大きな違いがみられた。〈子ども世代〉の要求率は 5 割であるのに対し、〈親世代〉の要求率は 2 割であり、①【精神的プライバシー行為】と同様に、〈子ども世代〉の方の要求率がかなり高いことが捉えられた。

④「大人の目を避けられる場所」【管理の目からの逃避】

世代による違いを検討したところ、カイ二乗検定において 1%水準の有意差、順位相関係数において 1%水準の有意性があり、世代間で大きな違いがみられた。〈子ども世代〉の要求率は 6 割であるのに対し、〈親世代〉の要求率は 2 割強であり、①【精神的プライバシー行為】と③【個人的な休息】と同様に、〈子ども世代〉の方の要求率がかなり高いことが捉えられた。

⑤「嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所」【心理状態の回復】

世代による違いを検討したところ、カイ二乗検定において 1%水準の有意差、順位相関係数において 1%水準の有意性があり、世代間で大きな違いがみられた。〈子ども世代〉の要求率は 7 割であるのに対し、〈親世代〉の要求率は 5 割強であり、①【精神的プライバシー行為】と③【個人的な休息】④【管理の目からの逃避】と同様に、〈子ども世代〉の方の要求率が高いことが捉えられた。

(2) 社会的居場所

⑥「お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所」【価値観の共有】

世代により違いはみられず、両世代とも居場所に対する要求率は 9 割以上であり、世代を通してほとんどのものが、学校に⑥【価値観の共有】の居場所を必要としていることが捉えられた。

⑦「仲間意識を感じられる人と話をする場所」【所属（仲間）意識】

世代により違いはみられず、両世代とも居場所に対する要求率は 9 割以上であり、世代を通してほとんどのものが、学校に⑦【所属（仲間）意識】の居場所を必要としていることが捉えられた。

⑧「自分を頼ってくれる人と話をする場所」【受容意識】

世代により違いはみられず、両世代とも居場所に対する要求率は 9 割以上であり、世代を通してほとんどのものが、学校に⑧【受容意識】の居場所を必要としていることが捉え

られた。

⑨「自分を受け入れてくれる人と話をする場所」【被受容意識】

世代により違いはみられず、両世代とも居場所に対する要求率は 9 割以上であり、世代を通してほとんどのものが、学校に⑨【被受容意識】の居場所を必要としていることが捉えられた。

以上より、学校における居場所①～⑨全体を通して検討する。世代間で共通の傾向をみると、両世代ともほとんどのものが社会的居場所を要求している。個人的居場所に対する要求は社会的居場所よりも低く、学校においては、個人的居場所より社会的居場所を必要としていることが捉えられた。

世代による違いを検討すると、個人的居場所と社会的居場所ともに〈子ども世代〉の要求率の方が高いという特徴が捉えられた。特に、個人的居場所に対する要求において、世代間の違いが大きく、〈子ども世代〉の方が、学校に個人的居場所を必要としている。学校は集団生活であり、家庭のような子ども部屋はないため、個人的居場所を所有しにくいことから、〈親世代〉では学校に個人的居場所を要求しているものは少ない。しかし、〈子ども世代〉の個人的居場所に対する要求率は半数以上とかなり高く、所有率を約 1 割程度上まわっている。これは、〈子ども世代〉の学校の方が、生徒人数は減少しているが、学校数は増加しており¹⁾、空間的に余裕ができ、学校であっても個人的居場所を得やすい環境になってきていることが背景にあるのではないかと考えられる。また、学校の捉え方において、「学校は勉強をする場所である」という捉え方から、「学校も家庭や地域と同様に、生活をする場所である」という捉え方に変わってきていることも要因のひとつとして考えられ、このことが、個人的居場所を要求することにつながっていることが考えられる。このように、世代間で、学校数の増加や生徒数の減少などの物理面の変化や、学校の捉え方という心理面の変化があり、〈子ども世代〉では学校にも個人的居場所を求める傾向が強くなっているのではないかと考えられる。

5. 学校における社会的居場所で話す相手

家庭の場合と同様に、社会的居場所で交流する相手について検討を行なう。社会的居場所⑥（「お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所」【価値観の共有】）⑦（「仲間意識を感じられる人と話をする場所」【所属（仲間）意識】）⑧（「自分を頼ってくれる人と話をする場所」【受容意識】）⑨（「自分を受け入れてくれる人と話をする場所」【被受容意識】）の 4 項目において、居場所を所有しているもの対象に、それぞれ誰との交流であるのかを「友達のみ」「友達と先生の両方」「先生のみ」の 3 カテゴリーから 1 つ選択する方法で調査し、世代間比較を通して検討した。結果を図 4-4-5 に示す。

⑥「お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所」【価値観の共有】

世代による違いはみられず、世代を通して共通の傾向である。最も多い交流相手は「友達のみ」であり、約 9 割を占めている。残りの、1 割は「友達と先生の両方」であり、「先

生のみ」のものはいなかった。両世代とも、学校における社会的居場所で話す相手は友達であり、ごく一部のものにとっては先生も社会的居場所で話す相手になっていることが捉えられた。

⑦「仲間意識を感じられる人と話をする場所」【所属（仲間）意識】

⑥【価値観の共有】の居場所と同様の傾向であり、世代による違いはみられず、世代を通して共通の傾向である。最も多い交流相手は「友達のみ」であり、約 9 割を占めている。残りの、1 割は「友達と先生の両方」であり、「先生のみ」のものはいなかった。両世代とも、学校における社会的居場所で話す相手は友達であり、ごく一部のものにとっては先生も社会的居場所で話す相手になっていることが捉えられた。

⑧「自分を頼ってくれる人と話をする場所」【受容意識】

⑥【価値観の共有】⑦【所属（仲間）意識】の居場所と同様の傾向であり、世代による違いはみられず、世代を通して共通の傾向である。最も多い交流相手は「友達のみ」であり、約 9 割を占めている。残りの、1 割は「友達と先生の両方」であり、「先生のみ」のものはいなかった。両世代とも、学校における社会的居場所で話す相手は友達であり、ごく一部のものにとっては先生も社会的居場所で話す相手になっていることが捉えられた。

⑨「自分を受け入れてくれる人と話をする場所」【被受容意識】

他の社会的居場所⑥～⑧と同様に、世代による違いはみられないが、やや交流相手の傾向がやや異なっている。最も多い交流相手は「友達のみ」であることは同様の傾向であるが、その割合は約 8 割であり、他の社会的居場所と比べると 1 割低い。それに伴い、「友達と先生の両方」の割合は約 2 割と他の社会的居場所と比べるとやや高い割合である。このことから、⑨【被受容意識】の居場所では、友達だけでなく先生も交流相手になっているものがやや多いことが捉えられた。「自分を受け入れてくれる」存在であるため、様々な側面で頼ることのできる先生が交流相手になるのではないかと考えられる。

以上より、社会的居場所の⑥～⑨を通して検討する。全ての社会的居場所において、世代間で違いはみられず、学校における社会的居場所で交流する相手は「友達のみ」がほとんどであることが捉えられた。⑨【被受容意識】においては、交流相手に先生を含むものがやや多い。「自分を受け入れてくれる」存在であるため、様々な側面で頼ることのできる先生が交流相手になるのではないかと考えられる。

6. 学校における居場所パターンの分類

本項目では、学校における個人的居場所と社会的居場所の所有状況をトータルの捉えるため、家庭の場合（第三章第三節 7.）と同様に、どの居場所を所有しているのかを検討する。「学校における居場所の所有率」から、個人的居場所と社会的居場所の所有の有無を機械的に組み合わせた結果、合計 9 個の所有パターンが得られた。具体的なパターンは以下のようなものである。高次元の個人的居場所及び、高次元の社会的居場所をもつケースは「①個人的居場所（高次元）・社会的居場所（高次元）あり」、高次元の個人的居場所及

び、低次元の社会的居場所をもつケースは「②個人的居場所（高次元）・社会的居場所（低次元）あり」、高次元の個人的居場所のみもつケースは「③個人的居場所（高次元）あり」、低次元の個人的居場所及び、高次元の社会的居場所をもつケースは「④個人的居場所（低次元のみ）・社会的居場所（高次元）あり」、低次元の個人的居場所及び、低次元の社会的居場所をもつケースは「⑤個人的居場所（低次元のみ）・社会的居場所（低次元のみ）あり」、低次元の個人的居場所のみもつケースは「⑥個人的居場所（低次元のみ）あり」、高次元の社会的居場所をもつケースは「⑦社会的居場所（高次元）あり」、低次元の社会的居場所のみもつケースは「⑧社会的居場所（低次元のみ）あり」、個人的居場所も社会的居場所ももたないケースは「⑨居場所なし」とする合計9パターンである。この居場所所有パターンを図4-4-6に示す。

世代を通して共通の傾向をみると、両世代とも最も多いパターンは「①個人的居場所（高次元）・社会的居場所（高次元）あり」で全体の半数以上を占める。次いで、「④個人的居場所（低次元のみ）・社会的居場所（高次元）あり」、「⑦社会的居場所（高次元）あり」がそれぞれ1～2割であり、その他のパターンはどれも1割未満と少数であることが捉えられた。これらのことから、両世代とも、個人的居場所・社会的居場所ともに高次元の居場所を両方所有しているものが多いことが明らかになり、家庭の場合と同様の傾向である。しかし、社会的居場所は高次元の居場所を所有しているが、個人的居場所は低次元の居場所しか所有していなかったり、個人的居場所自体所有していないパターンも1～2割いることから、高次元の個人的居場所を所有できているものはやや少ないことが捉えられた。

世代別でみると、カイ二乗検定において1%水準で有意差があり、世代別で学校における居場所パターンに違いがみられた。「①個人的居場所（高次元）・社会的居場所（高次元）あり」は〈子ども世代〉の方が多く、「④個人的居場所（低次元のみ）・社会的居場所（高次元）あり」と「⑦社会的居場所（高次元）あり」は〈親世代〉の方が多くという特徴がみられた。これらのことから、〈子ども世代〉の方が学校に個人的居場所も社会的居場所も両方十分に所有できているものが多いことが捉えられた。これは、〈子ども世代〉では学校に個人的居場所を所有するものが多かったことと関係すると考えられる。

次に、学校は集団生活の場であるため、社会的居場所の所有を軸に居場所パターンを検討する。パターン①④⑦は高次元の社会的居場所を所有するパターンであり、全体の約9割を占めることから、学校においては、社会的居場所を十分に所有できているといえる。パターン②⑤⑧は低次元の社会的居場所を所有するパターンであり全体の1割にもみえず、社会的居場所を十分に所有していないものは少ない。パターン③⑥は個人的居場所のみ所有しているパターンであるがごく少数であり、学校に社会的居場所を所有しないものはほとんどいない。パターン⑨は社会的居場所も個人的居場所も両方所有しないパターンであり、学校に居場所のないものである。〈子ども世代〉では2.2%、〈親世代〉では4.6%であり少数ではあるが、平日では一日の生活時間の多くを過ごす学校であるにも関わらず、居場所をもてていないものがあるという問題が明らかになった。

第五節 本章のまとめ

本章では、学校における高校生の居場所を捉えるため、学校において居場所の形成に関わりがあると考えられる「高校生の意識」と、「学校における居場所の実態と意識」について世代間比較を通して検討し、以下のことが明らかになった。

1. 学校における高校生の所属について、〈子ども世代〉のみ検討を行なった。高校生のほとんどが部活動に所属しており、そのうち、運動部に所属するものが多いことが明らかになり、部活の場も学校における居場所の選択肢となるものが多いことが捉えられた。生徒会・委員会活動については、一定人数が所属しているものの、部活動にくらべると活動をしていないものが多いことが捉えられた。

2. 学校における心理状態について、「学校における居心地が良いと感じる時」と「6つの側面からみた心理状態」について検討した。「学校における居心地が良いと感じる時」については、集団生活の場であり、教師の管理下である学校では、比較的自由に過ごせる休憩中や放課後に居心地の良さを感じるものが世代を通して多いことが捉えられた。〈子ども世代〉ではさらにこの傾向が強いことが明らかになり、〈子ども世代〉の方が学校のような管理社会になじめないものも多いのではないかと考えられる。「6つの側面からみた心理状態」については、学校は「快感」「好感」を感じるものが世代を通して多いことが明らかになった。これは、学校は友達と一緒に過ごす時間が長く、部活動にも打ち込めることが関係していると思われる。しかし、常に人と関わっている状態であり、くつろいだりする場には向いていないため、「安心感」「安定感」「満足感」「解放感」を感じるものは、両世代とも少ないことが明らかになった。世代別にみると、〈子ども世代〉の方が心理状態の良いものが多いことが捉えられ、これは〈子ども世代〉の方が学校で過ごす時間が長いことと関係していると考えられる。一方で、〈子ども世代〉の方が不満や圧迫感を感じるものも若干多いことが明らかになり、〈子ども世代〉では心理状態の良いものと悪いものに分かれる傾向であることが捉えられた。学校を楽しんでいると感じ、好感を持っているものが多い一方で、一部のものは、進学校の勉強のストレスなどにより、学校になじめていないものもいるのではないかと考えられる。

3. 学校における人間関係についてみると、両世代とも友達との関係が最も良いことが明らかになった。しかし、友達との関係であっても気をつかったり、希薄な関係のものも多いことが捉えられた。先生や先輩・後輩との関係は表面上の会話しかしない希薄な関係が多いことが明らかになった。その中で、本音で話せるような親しい関係を築いているものもみられた。世代別にみると、先生との関係は世代を通して共通の傾向である。友達との関係においては、〈子ども世代〉の方が気をつかう関係のものが多く、やや希薄な関係であることが捉えられた。先輩・後輩との関係は〈子ども世代〉の方がやや親しい関係のものが多く、〈子ども世代〉は友達の他に他学年の人とのつながりをもつものが多いことが捉え

られた。これは、社会的居場所となる場所の範囲が広くなると考えられる。

4. 学校における居場所の実態と意識については、「学校の各場所における空間の支配度」「学校における居場所の所有率」「学校における居場所となる具体的な場所」「学校における居場所に対する要求」「学校における社会的居場所ですす相手」「学校における居場所パターンの分類」について検討した。

学校の各場所における空間の支配度においては、学校の中で最も空間の支配度の強い場所は「自分のクラス」であり、「自分の部室、委員会の場など」がそれに続く。これ以外の場所の支配度は弱いことが明らかになった。世代別でみると、〈子ども世代〉の方がクラスや部室、廊下などの空間の支配度が強いことが明らかになった。これは、〈子ども世代〉の方が学校で過ごす時間が長いものが多いため、学校を自分のテリトリーであると認識しやすいのではないかと考えられる。また、学校の捉え方において、「学校は勉強をする場所」という捉え方から、「学校も生活をする場所」という捉え方になってきており、学校においても自分のテリトリーを確保しようとする傾向になってきているのではないかと考えられる。また、現在は以前とくらべると、少子化の影響で生徒数は少なくなっているが、学校数は増加してきておりや学校の規模も大きくなっていることから、〈子ども世代〉の学校の方が空間的に余裕があるということも背景にあるのではないかと考えられる。

学校における居場所の所有率については、両世代とも社会的居場所はほとんどのものが所有していることが明らかになった。それに比べ、個人的居場所の所有率は低く、全体的に所有しにくいことが捉えられた。集団生活が主な学校において、個人的居場所は得にくい居場所であると考えられる。世代別にみると、社会的居場所の所有率については世代で違いがなかった。個人的居場所においては、〈子ども世代〉の方が所有率が高い傾向が捉えられた。これは〈子ども世代〉の方が、学校の空間の支配度も強く、個人的居場所を得やすい環境であることが所有率の高さに関係しているのではないかと考えられる。特に、④【管理の目からの逃避】の所有率が〈親世代〉よりも高いという特徴があり、家庭でみられた〈子ども世代〉の方が隔離・逃避傾向がやや強いという状況が学校でも表れているといえる。

学校における居場所となる具体的な場所については、学校における居場所の具体的な場所として「自分のクラス」が最もよく使われていることが明らかになった。「自分のクラス」は学校の中で最も長くいる場所であり、空間の支配度も強いいため、居場所としてよく使われるものと考えられる。個人的居場所においては、④【管理の目からの逃避】以外の居場所は「自分のクラス」を居場所とするものが最も多く、居場所で行なう行為によっては、「部室や委員会の場」「グラウンドや体育館」などを使うものもいることが捉えられた。④【管理の目からの逃避】の具体的な場所には他の居場所と傾向が異なり、「自分のクラス」「部室、委員会の場」「廊下、階段、校庭の片隅、トイレなど」がそれぞれ同程度ずつであり、匿名性の強い廊下やトイレなどを使うものが多い。世代による違いをみると、社会的居場所全体を通して、「自分のクラス」を居場所として使用する割合は〈子ども世代〉の方が高

く、その他の場所を使用する割合は〈親世代〉の方が高いことが明らかになった。世代間では学校における物理的環境が異なっており、〈子ども世代〉の方が、生徒数は減少しているが、学校数は増加しており、学校の建物面積も増えていることから、〈子ども世代〉の方が学校やクラス内にゆとりがあると思われる。逆に〈親世代〉は〈子ども世代〉よりもクラス内にゆとりが少なかったため、「自分のクラス」以外の場所に居場所を求めざるを得ない環境だったのではないかと推測される。さらに世代別でみられた特徴は、④【管理の目からの逃避】では、〈子ども世代〉の方が「廊下、階段、校庭の片隅、トイレなど」のような学校の中で匿名的な場所を使うものが多く、学校においても隔離・逃避傾向がやや強いことが捉えられた。さらに、⑤【心理状態の回復】では、〈子ども世代〉では「職員室、保健室、相談室」を居場所とするものがおり、相談室や保健室など、学校における個人的居場所となる具体的な場所の選択肢が増えていることが捉えられた。

学校における居場所に対する要求については、社会的居場所を要求するものはほとんどであるが、個人的居場所に対する要求は低く、学校においては、個人的居場所より社会的居場所を必要としていることが捉えられた。世代別にみると、〈子ども世代〉の要求率の方が高いという特徴が捉えられた。特に、個人的居場所において顕著であり、〈子ども世代〉の方が、学校に個人的居場所を必要としている。これは、〈子ども世代〉の方が個人的居場所の所有率が高かったことの潜在的な要因であるといえる。

学校における社会的居場所で話す相手については、世代を通して共通の傾向であり、学校における社会的居場所で交流する相手は「友達のみ」がほとんどであることが捉えられた。⑨【被受容意識】においては、交流相手に先生を含むものがやや多いが、これは、「自分を受け入れてくれる」相手であるため、様々な側面で頼ることのできる先生が交流相手になるのではないかと考えられる。

学校における居場所パターンについては、両世代とも、個人的居場所・社会的居場所ともに高次元の居場所を両方所有しているものが多いことが明らかになった。また、社会的居場所は高次元の居場所を所有しているが、個人的居場所は低次元の居場所しか所有していなかったり、個人的居場所自体所有していないパターンも1～2割いることから、学校では、高次元の社会的居場所はほとんどのものが所有しているが、高次元の個人的居場所を所有できているものは少ないことが捉えられた。このことから、家庭が個人的居場所の中心的な場所であることと対照的に、学校は社会的居場所の中心的な場所であることが明らかになった。

参考資料

- 1) 文部科学省 生涯学習政策局調査企画課 「文部科学統計要覧（平成18年度版）」
2006年

本調査対象である〈子ども世代〉と〈親世代〉における学校数や生徒数等の状況を統計的に把握するために上記の「文部科学統計要覧（平成18年度版）」を用いた。昭和30年から現在までの高等学校の「学校数」「生徒数」「学校土地面積」「学校建物面積」の推移に

関するデータを元に、①生徒数、②学校数、③学校土地面積、④学校建物面積の推移を改めて表にしたものを下に示す。なお、〈子ども世代〉と〈親世代〉とは25～35年の時間的な開きがあるため、〈親世代〉については、昭和45～55年のデータを参考とする。

表より、大きく2点捉えられた。1つ目は、生徒数は〈子ども世代〉と〈親世代〉とを比較すると、約100万人減少している。2つ目は、学校数、学校土地面積、学校建物面積ともに増加している。これらのことから、少子化の影響により生徒数は減少しているが、学校そのものの数は増加し、学校の規模も大きくなっていることが明らかになり、〈子ども世代〉の方が、学校において空間的に余裕があることが捉えられた。

表 高等学校における生徒数・学校数・学校の規模の推移

	①生徒数(人)	②学校数	③学校土地面積(単位:千㎡)	④学校建物面積(単位:千㎡)
昭和30年	2,592,001	4,607	116,980	13,697
昭和35年	3,239,416	4,598	137,469	17,983
昭和40年	5,073,882	4,849	215,462	27,248
昭和45年	4,231,542	4,798	216,459	34,152
昭和50年	4,333,079	4,946	259,640	39,712
昭和55年	4,621,930	5,208	281,545	47,775
昭和60年	5,177,681	5,453	314,352	55,732
平成2年	5,623,336	5,506	328,463	59,736
平成7年	4,724,945	5,501	328,623	62,068
平成12年	4,165,434	5,478	333,108	64,302
平成13年	4,061,756	5,479	333,969	64,551
平成14年	3,929,352	5,472	334,400	64,900
平成15年	3,809,827	5,450	333,590	64,909
平成16年	3,719,048	5,429	333,636	64,576
平成17年	3,605,242	5,418	333,204	64,845

注) この表は、文部科学省 生涯学習政策局調査企画課「文部科学統計要覧(平成18年版)」によるデータをもとに著者が作成したものである。なお、〈子ども世代〉の状況は平成17年のデータを参考に、〈親世代〉の状況は昭和45年～55年のデータを参考にした。

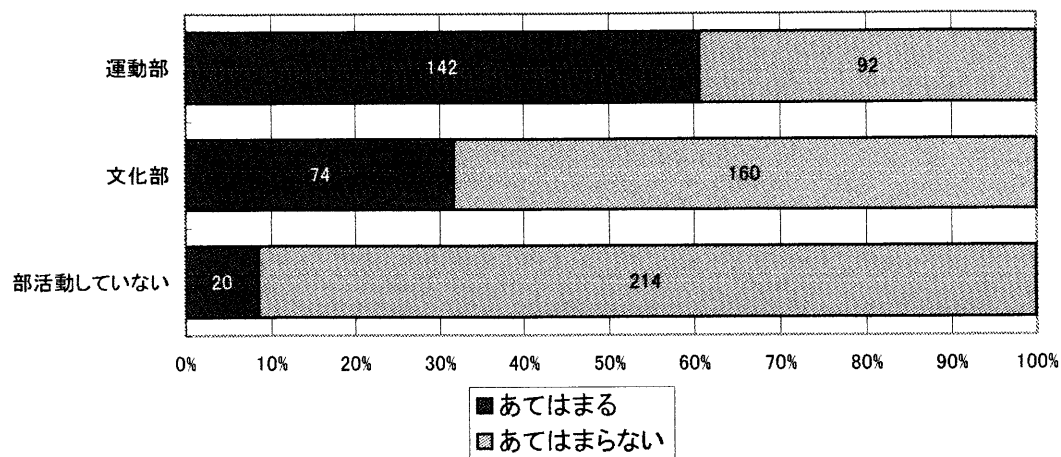


図4-1-1 子ども世代における部活動参加の有無

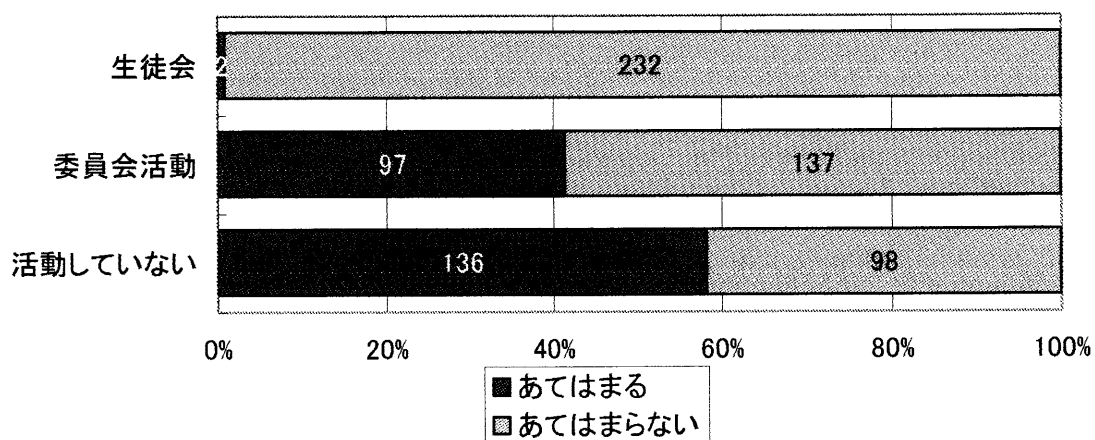


図4-1-2 子ども世代における生徒会・委員会活動の参加の有無

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

（）内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

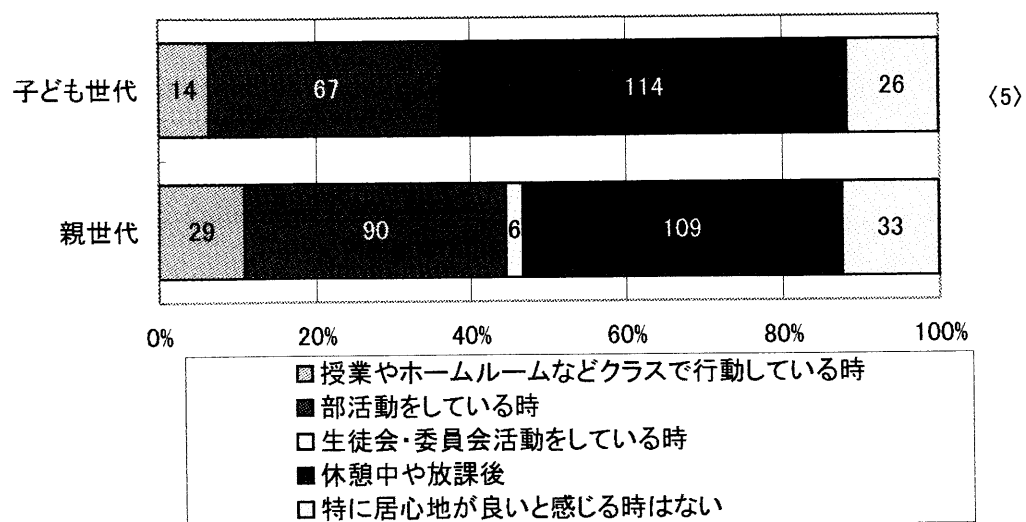
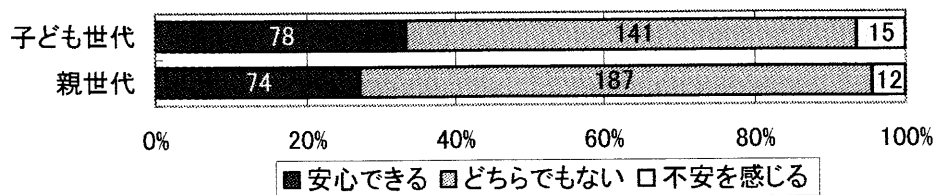


図4-2-1 学校における居心地が良いと感じる時〈世代間比較〉

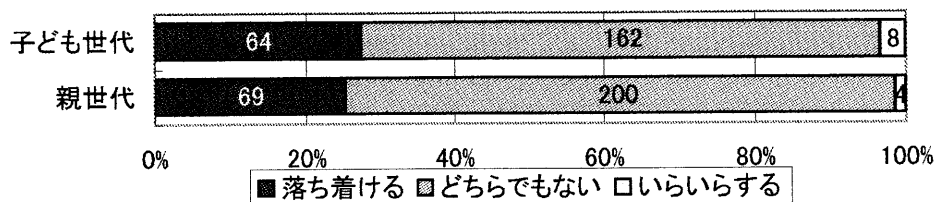
※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

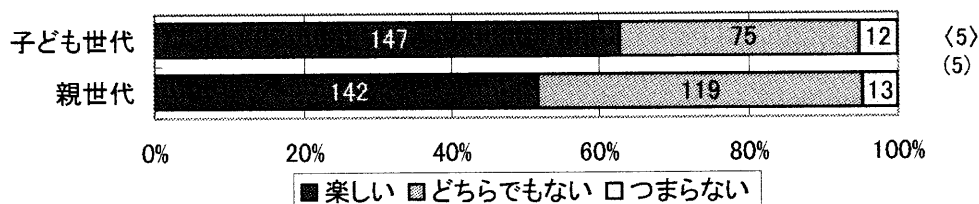
()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。



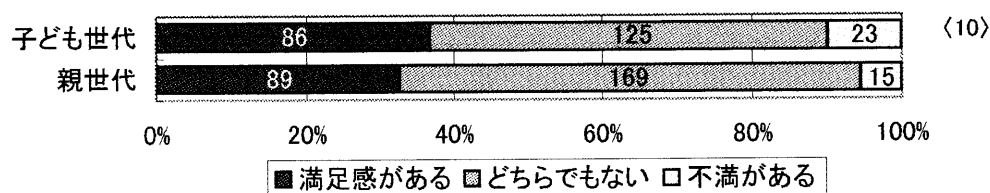
〈安心感〉



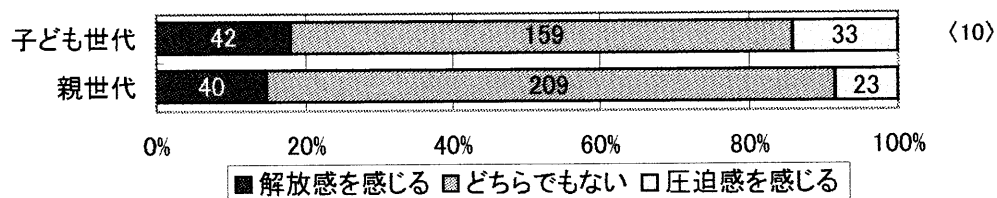
〈安定感〉



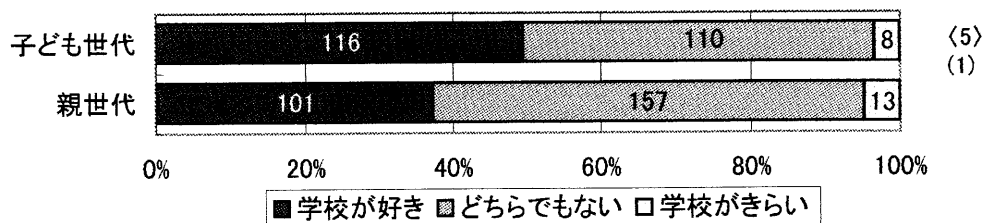
〈快楽感〉



〈満足感〉



〈解放感〉



〈好感〉

図4-2-2 学校における心理状態(世代間比較)

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

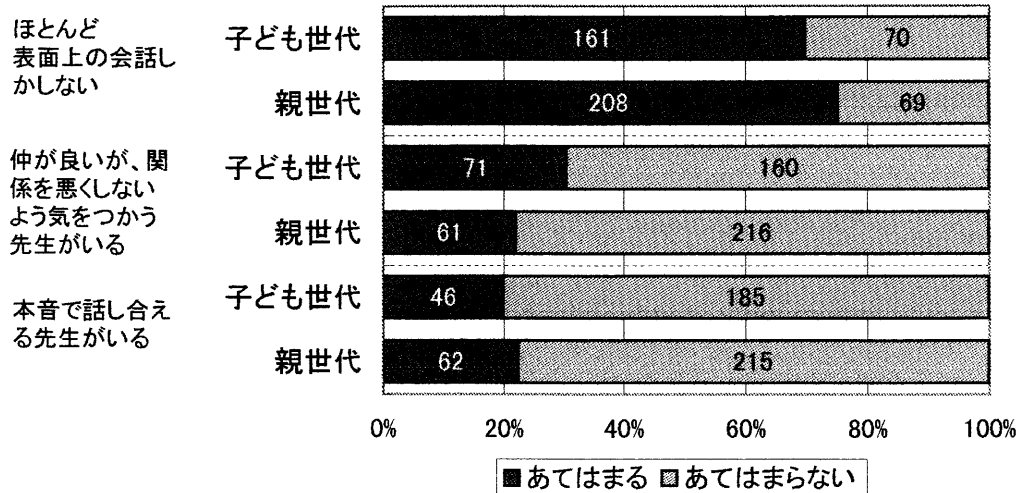


図4-3-1 先生との関係〈世代間比較〉

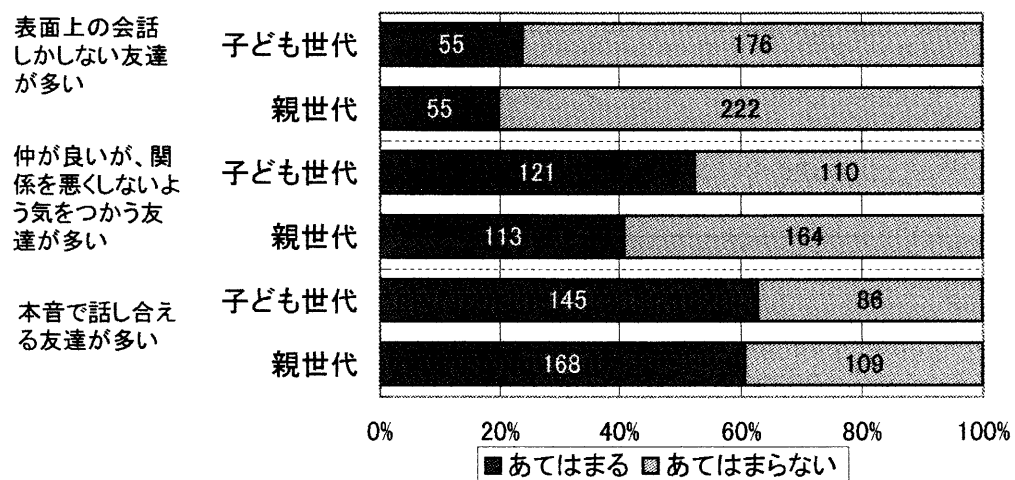


図4-3-2 友だちとの関係〈世代間比較〉

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

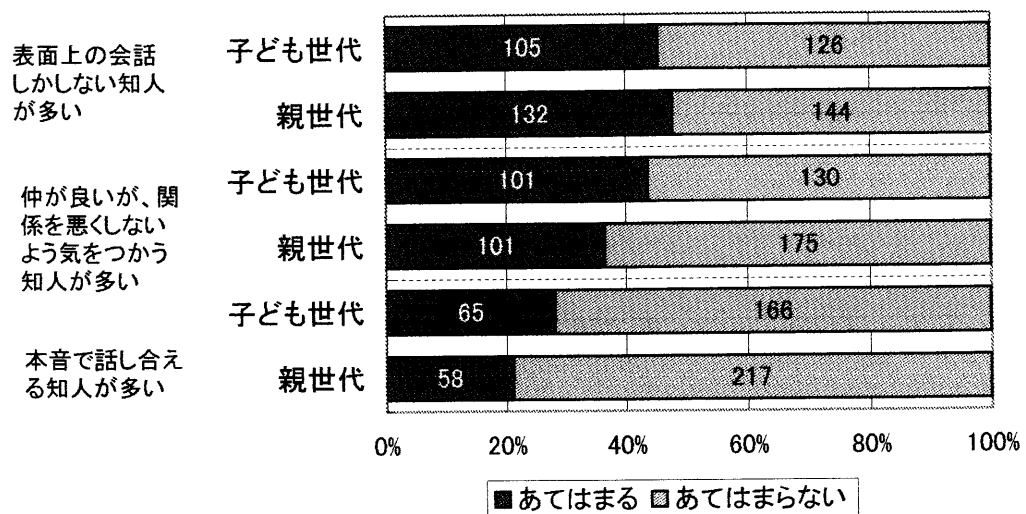


図4-3-3 学校における、先生や友達以外の知人との関係
〈世代間比較〉

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

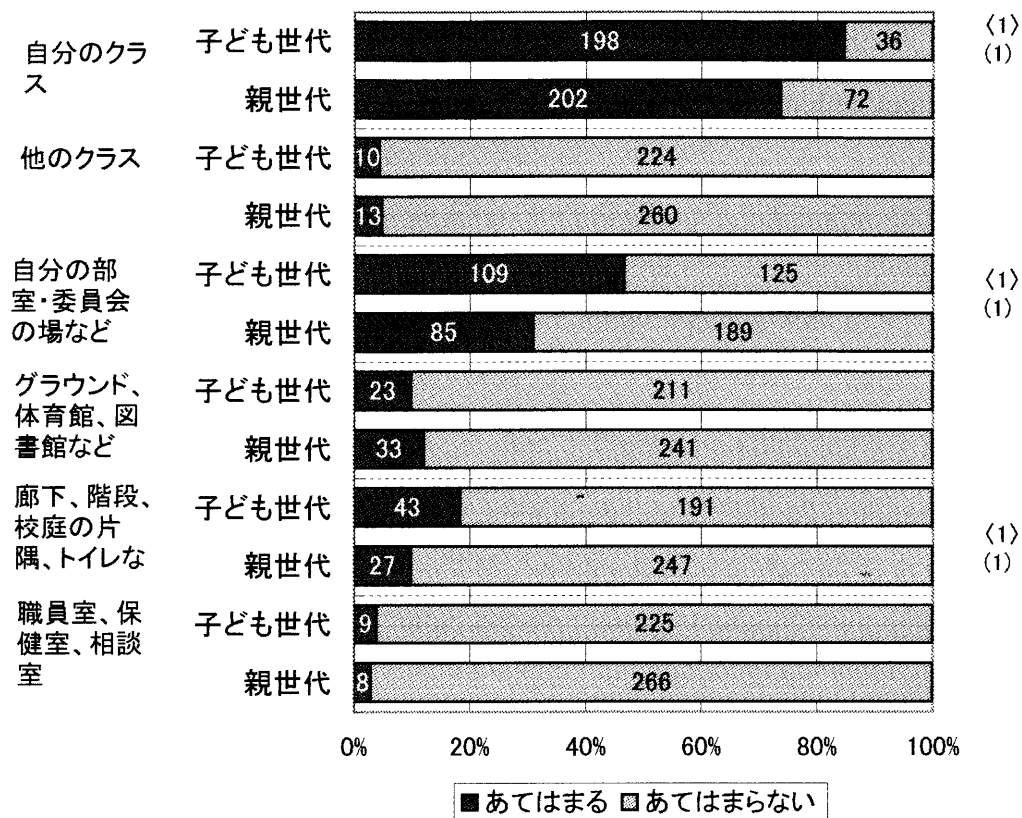


図4-4-1 学校における各室の空間の支配度〈世代間比較〉

※グラフ内数値は件数。

<内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

(内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

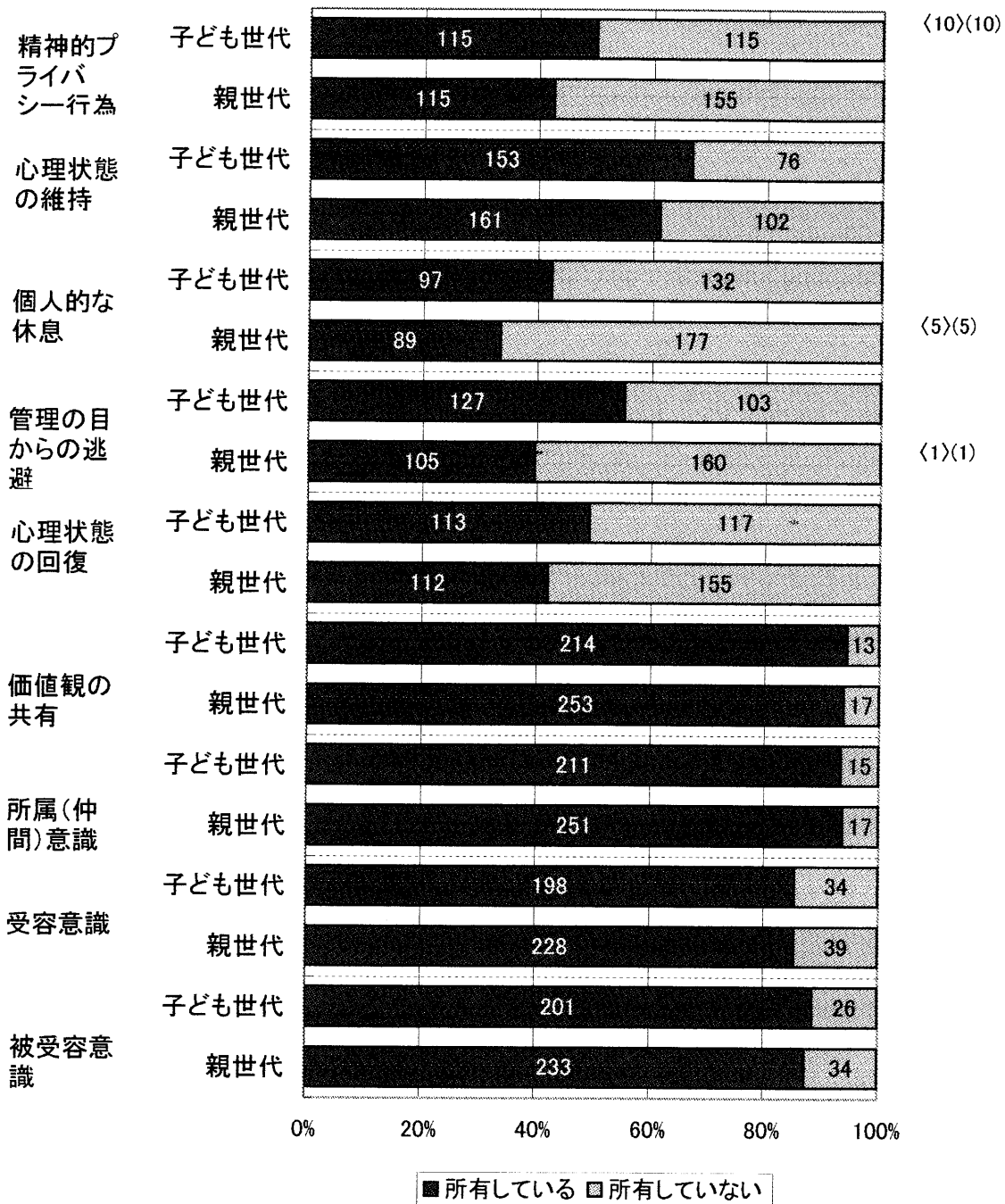


図4-4-2 学校における居場所の所有率<世代間比較>

※グラフ内数値は件数。

<>内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。
 ()内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

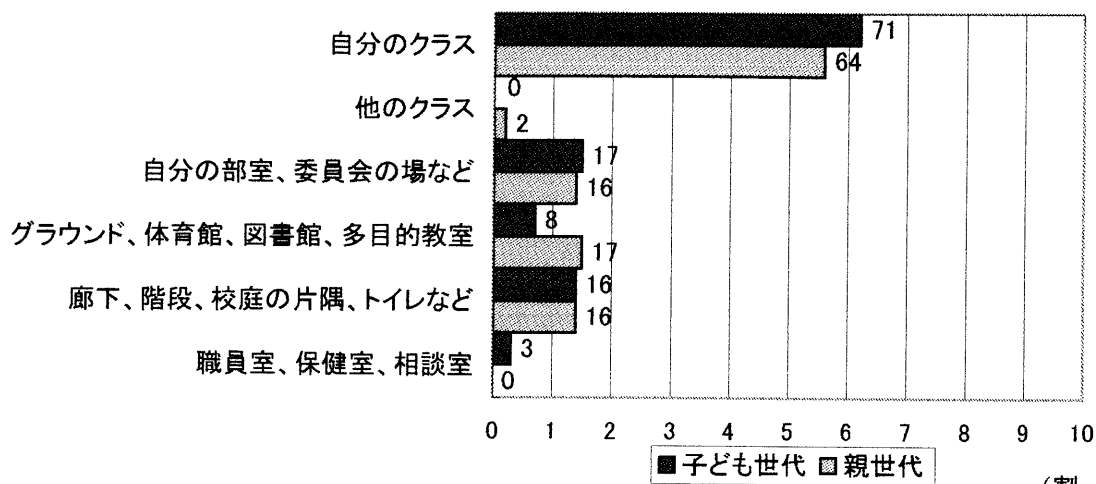


図4-4-3-1 学校における居場所の具体的な場所
【精神的プライバシー行為】(世代間比較)

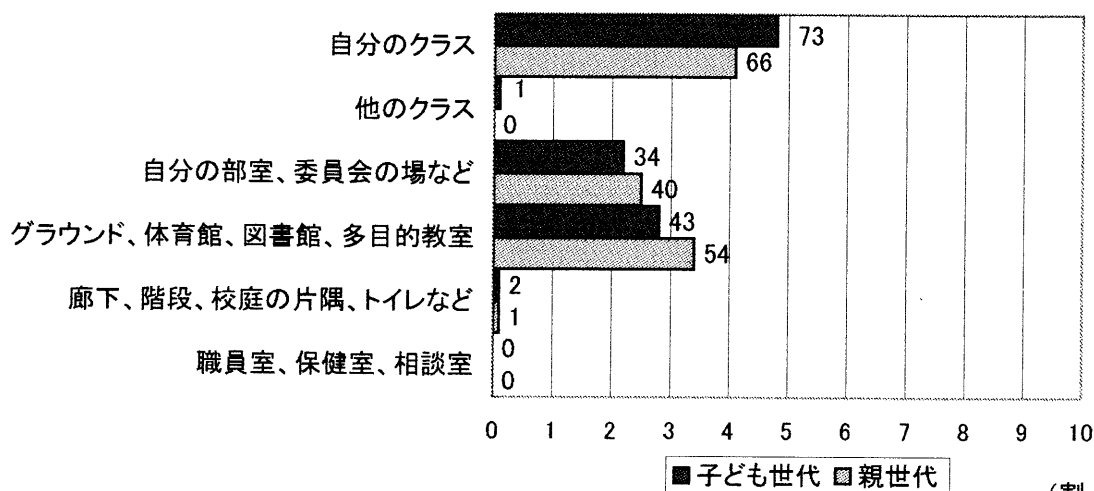


図4-4-3-2 学校における居場所の具体的な場所
【心理状態の維持】(世代間比較)

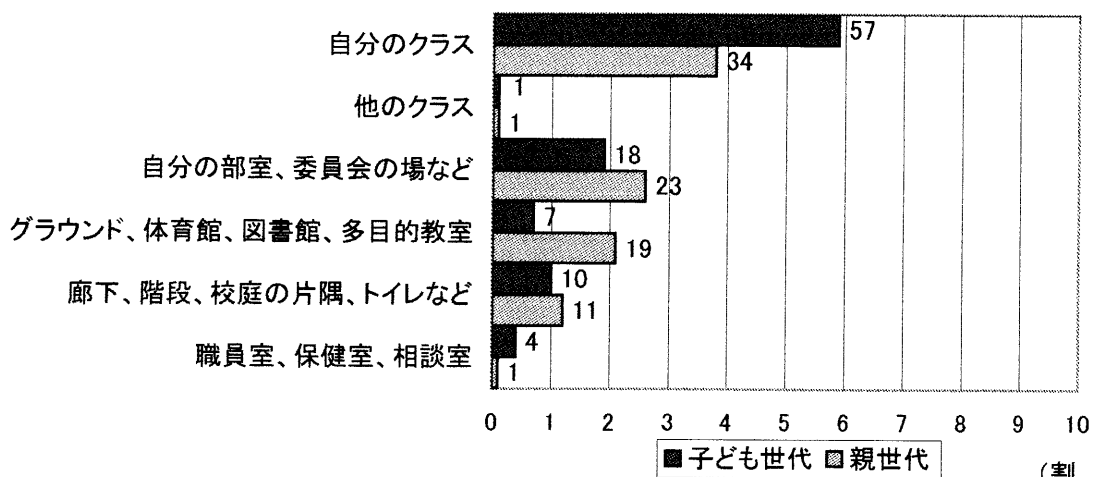


図4-4-3-3 学校における居場所の具体的な場所【個人的な休息】(世代間比較)

<>内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

※グラフ内数値は件数。()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

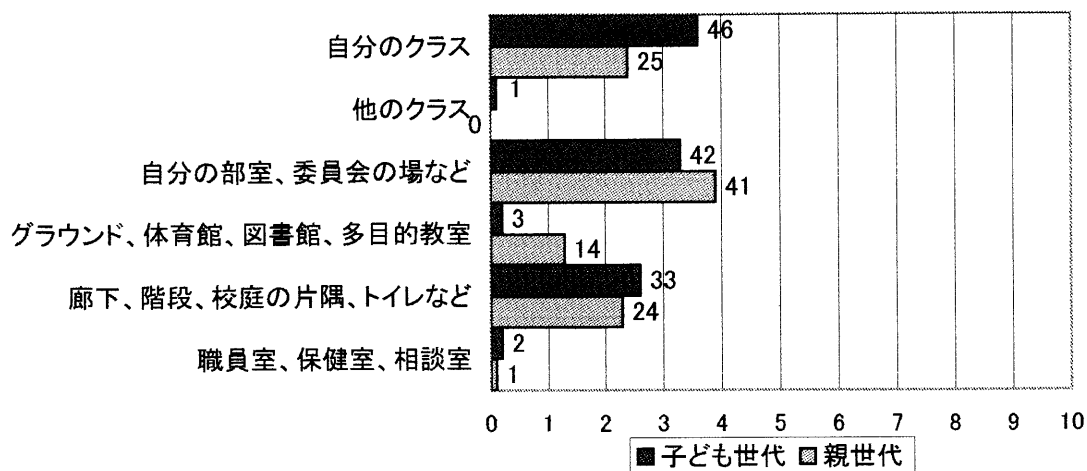


図4-4-3-4 学校における居場所の具体的な場所【管理の目からの逃避】
(世代間比較)

(割
)
<5>

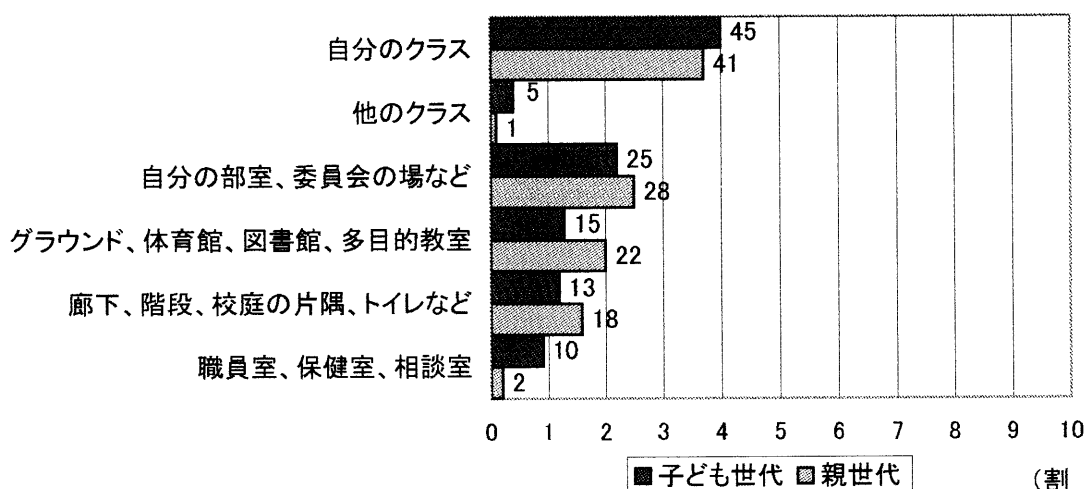


図4-4-3-5 学校における居場所の具体的な場所【心理状態の回復】
(世代間比較)

(割
)
<10>

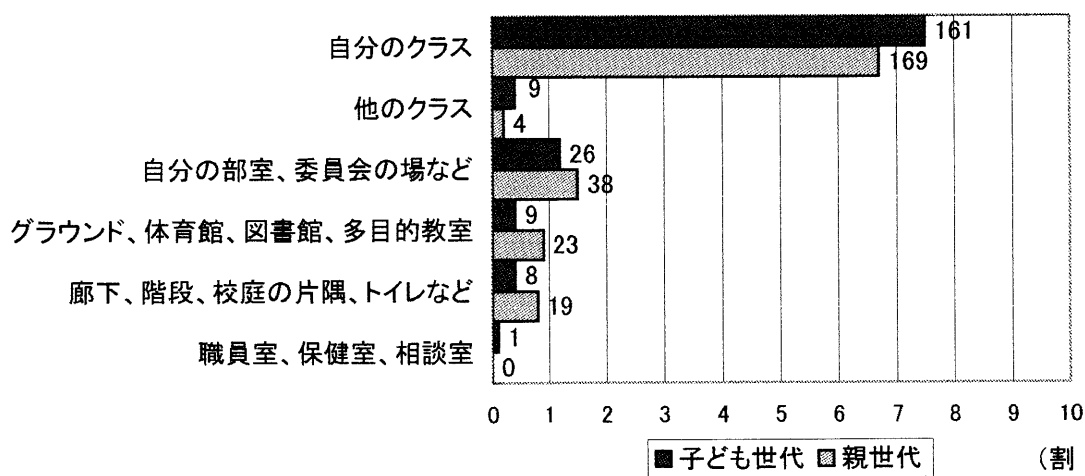


図4-4-3-6 学校における居場所の具体的な場所
【価値観の共有】(世代間比較)

(割
)
<5>

<>内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。
※グラフ内数値は件数。()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

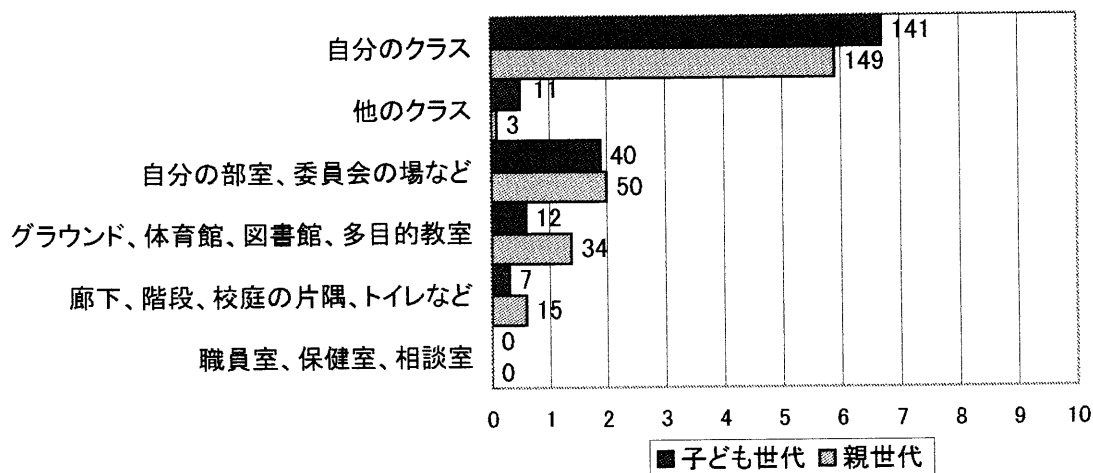


図4-4-3-7 学校における居場所の具体的な場所【所属(仲間)意識】
(世代間比較)

(割
)
<1>

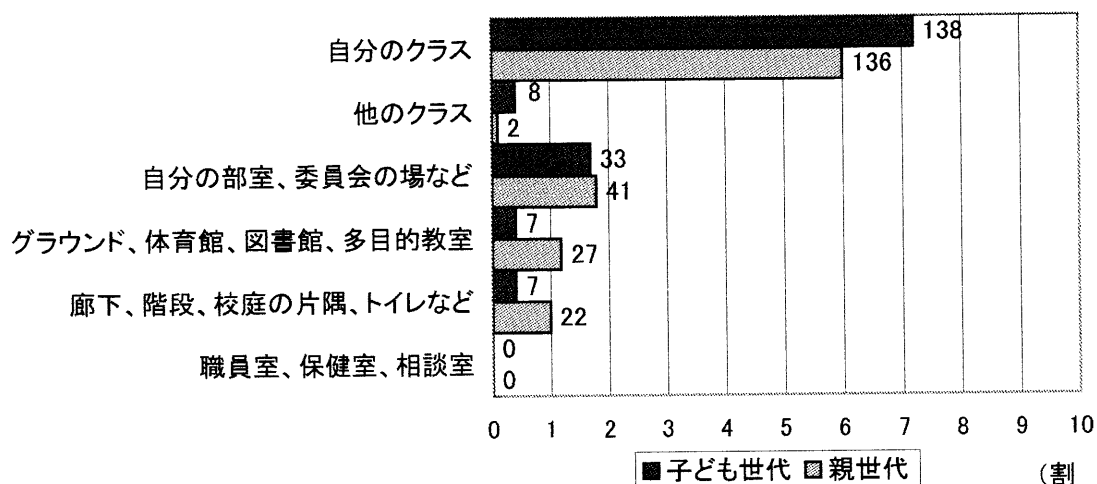


図4-4-3-8 学校における居場所の具体的な場所【受容意識】
(世代間比較)

(割
)
<1>

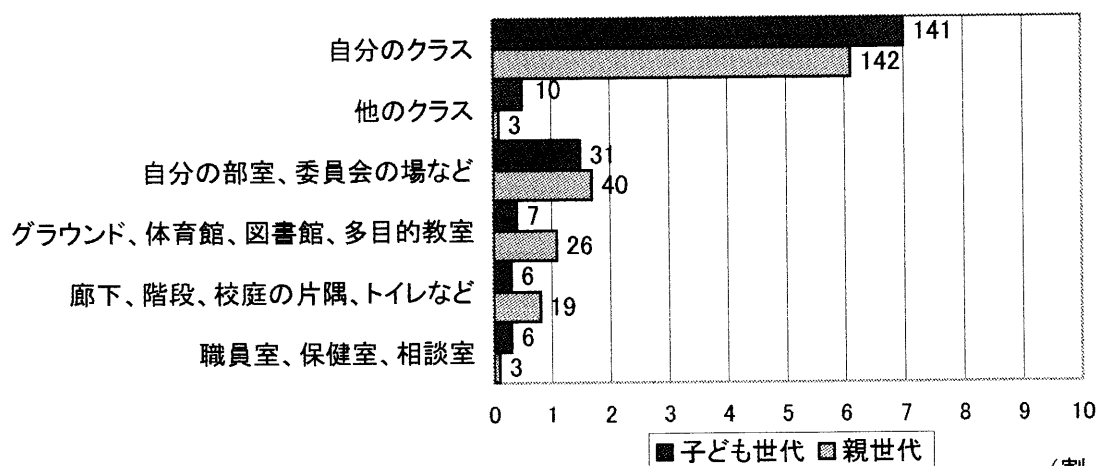


図4-4-3-9 学校における居場所の具体的な場所【被受容意識】
(世代間比較)

(割
)
<1>

<>内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

※グラフ内数値は件数。()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

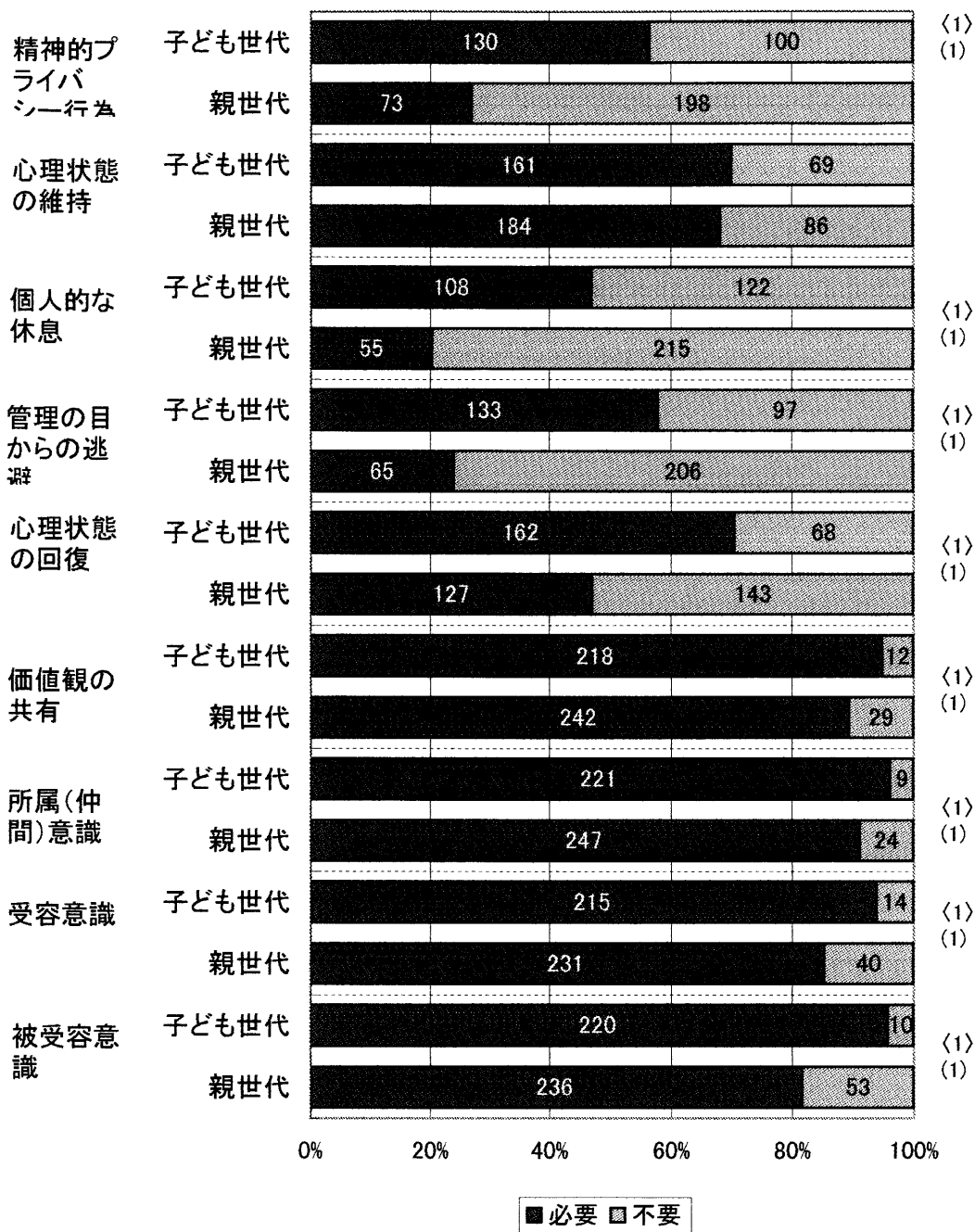


図4-4-4 学校における居場所に対する要求<世代間比較>

※グラフ内数値は件数。

<>内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

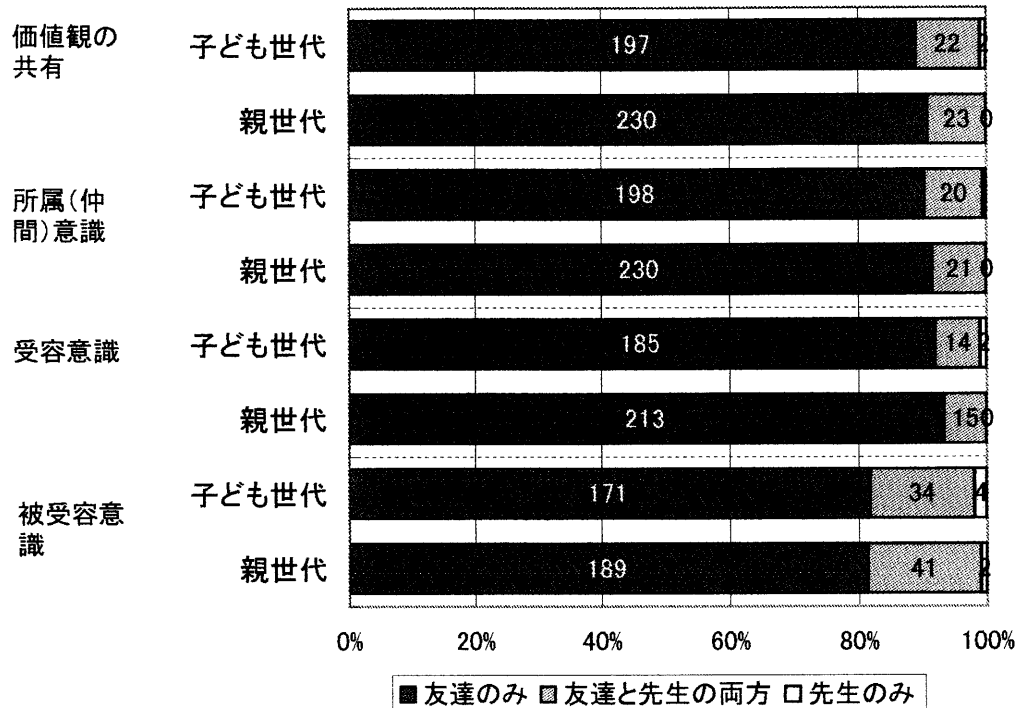


図4-4-5 学校における社会的居場所で話す相手〈世代間比較〉

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

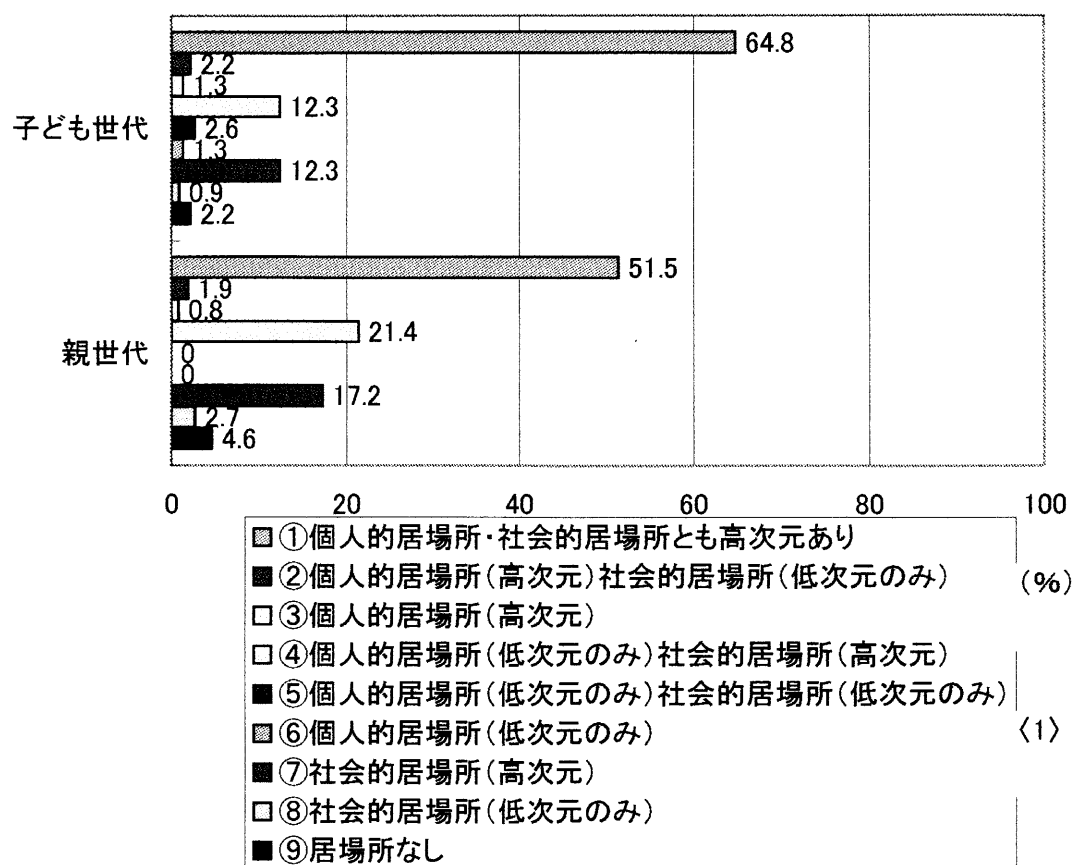


図4-4-6 学校における居場所所有の9パターン(世代間比較)

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

第五章 親世代・子ども世代比較にみる地域における子どもの生活と居場所の実態

本章では、地域における高校生の居場所を捉えるため、地域において居場所の形成に関わりがあると考えられる高校生を取り巻く環境、地域における高校生の生活と意識について、世代間比較を通して検討する。また、地域における居場所の実態と意識についても世代間比較を通して検討する。なお、両世代の高校生の概要については、第一章第三節に、放課後の過ごし方（地域）については第二章に示した通りである。

第一節 高校生を取り巻く地域の環境

本節では、高校生を取り巻く地域の環境について捉えるため、「地域の雰囲気」「自宅の周辺環境」の2項目について、世代間比較を通して、世代別の特徴を明らかにする。

1. 地域の雰囲気

地域における雰囲気を捉えるため、住んでいる地域の雰囲気について、「地域活動や交流が盛んで、住民同士の仲が良い」「地域活動や交流が時々行なわれ、住民同士の仲はそれほど悪くはない」「地域活動や交流はほとんどなく、住民同士はよそよそしい感じがする」の3カテゴリーから最も当てはまるもの1つを選択する方法で調査し、世代間比較を通して検討した。調査結果を図5-1-1に示す。

世代間で共通の傾向をみると、両世代とも、「地域活動や交流が時々行なわれ、住民同士の仲はそれほど悪くはない」がほとんどであり、次いで「地域活動や交流が盛んで、住民同士の仲が良い」がやや多く、地域の雰囲気は比較的良いものが多いことが捉えられた。しかし、「地域活動や交流はほとんどなく、住民同士はよそよそしい感じがする」が1割強もあり、地域の雰囲気が悪いものもいることが捉えられた。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において1%水準の有意差、順位相関係数において1%水準の有意性があり、世代により違いがみられた。「交流が盛んで、住民同士の仲が良い」は〈親世代〉で3割いるのに対し、〈子ども世代〉ではその半分しかおらず、〈子ども世代〉の方が地域の雰囲気がやや悪いことが捉えられた。

2. 自宅の周辺環境

自宅の周辺の環境を捉えるため、自然環境と人工的な環境について検討する。自然環境については①「原っぱ・田んぼ・畑」②「河原・土手・池」③「雑木林・野山」の3項目、人工的な環境について、④「公園・アスレチック」⑤「商店街」⑥「デパート・ショッピングモール」⑦「スーパー」⑧「コンビニ」⑨「ファーストフード店・ファミレス」⑩「ゲームセンター・カラオケボックス」⑪「駅」⑫「空き地・駐車場」⑬「公共施設（図書館・公民館・文化会館など）」の10項目、合計13項目について、家の近く（歩いていける距離）にあるもの全てを選択する方法で調査し、世代間比較を通して検討を行なった。調査結果を図5-1-2に示す。

①原っぱ・田んぼ・畑

世代による違いはみられず、自宅周辺に原っぱや田んぼ、畑といった、自然のあるものがほとんどであることが捉えられた。

②河原・土手・池

世代による違いはみられず、約6割が自宅の周辺に河原などがあるとしており、自宅周辺に河原などの自然があるものも比較的多いことが捉えられた。

③雑木林・野山

世代による違いはみられず、約半数が自宅の周辺に雑木林などがあるとしている。自宅周辺に雑木林などの隠れられる自然があるものも比較的多いことが捉えられた。

④公園・アスレチック

両世代とも公園やアスレチックが自宅の周辺にあるものが半数以上であり比較的多い。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において1%水準の有意差、順位相関係数における1%水準の有意性があり、世代間で違いがみられた。〈子ども世代〉の方が自宅近くに公園やアスレチックのあるものがさらに多いことが明らかになった。

⑤商店街

両世代とも自宅の周辺に商店街のあるものは半数以下と少ない。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において1%水準の有意差、順位相関係数における1%水準の有意性があり、世代間で違いがみられた。商店街が自宅近くにあるものは〈親世代〉の方が多いことが明らかになった。

⑥デパート・ショッピングモール

両世代とも自宅周辺にショッピングモールのあるものは少ない。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において1%水準の有意差、順位相関係数における1%水準の有意性があり、世代間で違いがみられた。自宅の周辺にショッピングモールのあるものは〈子ども世代〉の方がやや多くなっていることが明らかになった。

⑦スーパー

両世代とも自宅周辺にスーパーがあるものは半数以上であり、比較的多い。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において1%水準の有意差、順位相関係数における1%水準の有意性があり、世代間で違いがみられた。自宅の周辺にスーパーがあるものは〈子ども世代〉の方がやや多いことが明らかになった。

⑧コンビニ

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において1%水準の有意差、順位相関係数における1%水準の有意性があり、世代間で違いがみられた。〈親世代〉では家の近くにコンビニのあるものはほとんどいなかったのに対し、〈子ども世代〉では自宅近くにコンビニがあるものがほとんどであり、約25～35年の間にかなり増加したことが明らかになった。

⑨ファーストフード店・ファミレス

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において1%水準の有意差、順位相関係数における1%水準の有意性があり、世代間で違いがみられた。〈親世代〉では自宅近くに飲

食店のあるものはほとんどいなかったのに対し、〈子ども世代〉では自宅近くに飲食店のあるものが全体の3割にも上っていることが明らかになった。

⑩ゲームセンター・カラオケボックス

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において1%水準の有意差、順位相関係数における1%水準の有意性があり、世代間で違いがみられた。飲食店と同様に、〈親世代〉では自宅近くにゲームセンター当の娯楽施設のあるものはほとんどいなかったのに対し、〈子ども世代〉では自宅近くに娯楽施設のあるものが全体の3割にも上っていることが明らかになった。

⑪駅

世代による違いはみられず、約6割が自宅の周辺に駅があるとしている。自宅周辺に駅があるものが比較的多く、移動に比較的便利な居住地であることが捉えられた。

⑫空き地・駐車場

両世代とも自宅の周辺に空き地や駐車場のあるものが7～8割と多い。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において1%水準の有意差、順位相関係数における1%水準の有意性があり、世代間で違いがみられた。自宅の近くに空き地や駐車場のあるものは〈子ども世代〉の方がやや多いことが捉えられた。

⑬公共施設（図書館・公民館・文化会館など）

両世代とも自宅の周辺に公共施設のあるものは半数以下で少ない。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において5%水準の有意差、順位相関係数における5%水準の有意性があり、世代間でやや違いがみられた。自宅の近くに公共施設のあるものは〈子ども世代〉の方がやや多いことが捉えられた。

全体的な傾向をみると、自然環境については世代による違いがみられず、世代を通して全体的に自然環境が豊かな居住地であることが捉えられた。人工的な環境の一部については、世代を通して共通の傾向であり、公園や空き地・駐車場といった広場の多い環境である。また、駅が自宅周辺にあるものも両世代ともに多く、移動に比較的便利な居住地であるといえる。

自宅周辺の環境において、世代で大きく違いがみられたのは、人工的な環境であり、〈子ども世代〉の方が充実してきていることが捉えられた。特に、買い物をする場所については、商店街は少なくなったが、コンビニが圧倒的に増え、スーパーもやや増えており、商店街からスーパーやコンビニに置き換わっていることが捉えられた。さらに、〈親世代〉の自宅周辺にはほとんどなかった飲食店や娯楽施設も〈子ども世代〉では全体の三分の一までに多くなっている。ショッピングモールのような複合施設も〈子ども世代〉の方が多くなっており、買い物できる店や、一人で時間をつぶせる場所や友達と遊べる場所も多くなっていることが捉えられた。

第二節 地域における高校生の生活と意識

本節では、地域における高校生の生活と意識について、「居住期間」「よく行く場所」「地域における居心地が良いと感じるとき」「人間関係の実態」の4項目から捉えることとする。各項目について、世代間比較を通して検討し、世代別の特徴を明らかにする。

1. 居住期間

居住期間を捉えるため、今の家にいつ頃から住んでいるのかについて、「生まれた頃から」「小学校入学前から」「小学校の頃から」「中学校の頃から」「高校になってから」の5カテゴリーから当てはまるもの1つを選択する方法で調査し、世代間比較を通して検討した。調査結果を図5-2-1に示す。

両世代とも「生まれた頃から」がほとんどであり、両世代とも居住期間は比較的長く、自分の住んでいる地域にも慣れているものが多いことが捉えられた。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において1%水準の有意差があり、世代による違いがみられた。「生まれた頃から」は〈親世代〉の方が多く、〈親世代〉の方が居住期間の長いものがやや多いことが捉えられた。

2. よく行く場所

地域において、高校生はどんな場所によく行くのかを捉えるため、「一人でぶらぶらしたり考え事などができる自然があるところ」「仲間としゃべったり遊んだりできる自然があるところ」「一人でぶらぶらしたり考え事などができる公園や広場」「仲間としゃべったり遊んだりできる公園や広場」「一人でぶらぶらしたり好きなことで時間をつぶせる店」「仲間としゃべったり遊んだりできる店」「店員やお客さんと仲良くできる店」「一人で好きなことに集中したり考え事などができる公共施設」「仲間としゃべったり遊んだりできる公共施設」「職員や利用している人と仲良くできる公共施設」「勉強や自分の好きなことに集中して取り組める塾や習い事」「先生や生徒と仲良くできる塾や習い事」「いっしょにしゃべったり遊んだりできる仲の良い友達の家」「仲の良い親戚や気軽に行ける近所の人の家」の14項目について、よく行く場所全てを選択する方法で調査を行い、世代間比較を通して検討した。調査結果を図5-2-2に示す。

① 一人でぶらぶらしたり考え事などができる自然があるところ

世代による違いはなく、自然のあるところに一人でよく行くというものは3割程度と少ないことが捉えられた。

② 仲間としゃべったり遊んだりできる自然があるところ

両世代とも、自然のあるところで仲間と遊ぶものは半数以下で少ないが、①の一人で自然があるところによく行くものと合わせてみると、自然のあるところによく行くもののうち、一人で行くものより交流を目的として行くものの方がやや多いことが捉えられた。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において5%水準の有意差、順位相関係数において5%水準の有意性があり、世代間でやや違いがみられた。交流を目的として自然に行くものは、〈親世代〉の方がやや多いことが捉えられた。

③ 一人でぶらぶらしたり考え事などができる公園や広場

世代による違いはなく、両世代とも、公園や広場に一人でよく行くというものは1.5割と少なく、一人で公園に行くものはほとんどいないことが捉えられた。

④ 仲間としゃべったり遊んだりできる公園や広場

世代による違いはなく、両世代とも仲間と公園に行くものは4割程度おり、前述した一人で公園に行くものよりは多い。公園や広場では、一人で過ごすよりも交流を目的として行くものの方が多いことが捉えられた。

⑤ 一人でぶらぶらしたり好きなことで時間をつぶせる店

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において1%水準の有意差、順位相関係数における1%水準の有意性があり、世代間で大きな違いがみられた。〈親世代〉では2割であるのに対し、〈子ども世代〉は半数のものが一人で店を利用しており、〈子ども世代〉の方が一人で店を利用するものが多いことが捉えられた。

⑥ 仲間としゃべったり遊んだりできる店

両世代とも、店に友達と行くものは過半数と多いことが捉えられた。店の利用は、一人よりも、交流を目的とした利用の方が多いことが捉えられた。

⑦ 店員やお客さんと仲良くできる店

両世代とも、店員やお客さんと仲良くできる店によく行くものは1割未満であり、ほとんどいないことが捉えられた。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において5%水準の有意差、順位相関係数における5%水準の有意性があり、世代間でやや違いがみられた。〈親世代〉の方がやや多いことが捉えられた。

⑧ 一人で好きなことに集中したり考え事などができる公共施設

世代による違いはみられず、公共施設に一人で行くものは2割強と少なく、公共施設を一人で利用するものはあまりいないことが捉えられた。

⑨ 仲間としゃべったり遊んだりできる公共施設

世代による違いはみられず、公共施設に仲間と行くものは3割強と少なく、あまりいないことが捉えられた。

⑩ 職員や利用している人と仲良くできる公共施設

世代による違いはみられず、職員や利用している人と仲良くできる公共施設に行くものは約3%であり、ほとんどいないことが捉えられた。公共施設については、いずれもよく行くものは少数であり、あまり利用されていないことが捉えられた。

⑪ 勉強や自分の好きなことに集中して取り組める塾や習い事

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において1%水準の有意差、順位相関係数における1%水準の有意性があり、世代間で違いがみられた。〈子ども世代〉の方が、塾や習い事に行くものが多く、これは、進学校の生徒であるためと考えられる。

⑫ 先生や生徒と仲良くできる塾や習い事

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において 1%水準の有意差、順位相関係数における 1%水準の有意性があり、世代間で違いがみられた。〈子ども世代〉の方が、塾や習い事に行くものが多く、⑪と同様に、進学校の生徒であるためと考えられる。

⑬ いっしょにしゃべったり遊んだりできる仲の良い友達の家

両世代とも、友達の家によく行くものは過半数と多いことが捉えられた。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において 10%水準の有意差、順位相関係数における 10%水準の有意性があり、世代間で若干違いがみられた。〈親世代〉の方が友達の家に行くものが若干多いことが捉えられた。

⑭ 仲の良い親戚や気軽にに行ける近所の人の家

両世代とも、親戚や近所の人の家によく行くものは少ないことが捉えられた。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において 1%水準の有意差、順位相関係数における 1%水準の有意性があり、世代間で違いがみられた。〈親世代〉の方が親戚や近所の人の家に行くものが多いことが捉えられた。

全体的な傾向をみると、両世代とも、「いっしょにしゃべったり遊んだりできる仲の良い友達の家」「仲間としゃべったり遊んだりできる店」「仲間としゃべったり遊んだりできる公園や広場」によく行くものが多く、これらは全て仲間と過ごすものであり、地域では一人で過ごすよりも仲間と交流をするために行くものの方が多くことが捉えられた。中でも、店や友達の家によく行くものが多い。

世代により違いがみられたところは、〈子ども世代〉がよく行く場所は「一人でぶらぶらしたり好きなことで時間をつぶせる店」「仲間としゃべったり遊んだりできる店」「勉強や自分の好きなことに集中して取り組める塾や習い事」「先生や生徒と仲良くできる塾や習い事」であり、店や塾の利用が多くなっている。その中で、特に一人で店を利用するものが多くなっている。〈親世代〉がよく行く場所は「仲間としゃべったり遊んだりできる自然があるところ」「いっしょにしゃべったり遊んだりできる仲の良い友達の家」「仲の良い親戚や気軽にに行ける近所の人の家」であり、自然や友達の家、親戚など知り合いの家の利用が多い。以上より、〈子ども世代〉における特徴をみると、一人で地域を利用するものが多くなっており、その中でも店や塾によく行くものが多いことが捉えられた。一方、自然のあるところや友達など知り合いの家に行くものは少なくなっており、地域では交流を目的とするよりも一人で地域を利用する傾向が強くなっていることが捉えられた。このような傾向は、〈子ども世代〉の方が店をはじめ社会的な施設が充実してきていることが関係していると考えられる。また、塾によく行くものについては、進学校に通う高校生の特徴が現れていると考えられる。

3. 地域における居心地が良いと感じる時

地域において、どんな時に居心地の良さを感じているのかを捉えるため、地域において最も居心地が良いと感じるときについて、「公園、自然のあるところにいる時」「たまり場

で仲間と集まっている時」「よく行く店にいる時」「地域活動（清掃活動、子ども会など）をしている時」「塾や図書館で勉強、あるいは習い事をしている時」「友達の家にいる時」「その他」「特に居心地が良いと感じる時はない」の8カテゴリーから最もあてはまるもの1つを選択する方法で調査し、世代間比較を通して検討した。調査結果を図5-2-3に示す。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において1%水準の有意差があり、世代間で違いがみられた。「友達の家にいる時」に居心地のよさを感じるものは〈親世代〉の方が多いのに対し、「たまり場で仲間と集まっている時」に居心地のよさを感じているものは〈子ども世代〉の方が多い。その他の選択肢はどれも1割未満で同程度である。これらから、〈子ども世代〉の方が、友達の家よりも匿名的な場所であるたまり場に居心地のよさを感じる傾向が強いことが捉えられた。これは、地域におけるよく行く場所において、〈子ども世代〉では友達の家に行くものより、店に行くものの方がやや多いという傾向がみられたこととも関係していると考えられる。

4. 地域における人間関係の実態

地域における人間関係について、「近所付き合い」と「地域における本音で話せる相手」の2項目から検討を行なう。

（1）近所付き合い

高校生が近所の人とどのような付き合いをしているのか捉えるため、近所付き合いについて、「家族ぐるみで交流している」「あいさつくらいはしている」「近所付き合いはほとんどしていない」の3カテゴリーから最もあてはまるもの1つを選択する方法で調査し、世代間比較を通して検討を行なった。調査結果を図5-2-4-1に示す。

両世代とも「あいさつくらいはしている」というものがほとんどであり、近所の人と顔見知りではあるものの、それほど親しい関係は持っていないことが捉えられた。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において1%水準の有意差、順位相関係数において1%水準の有意性があり、世代間で違いがみられた。「家族ぐるみで交流している」は〈親世代〉の方が多いが、「近所付き合いはほとんどしていない」は〈子ども世代〉の方が多いことから、近所付き合いは〈子ども世代〉の方がやや希薄である傾向が捉えられた。

（2）地域における本音で話せる相手

地域において本音で話せる親しい相手がいるかどうか、また、どのような人と親しい関係であるのかを捉えるため、家庭・学校以外の場所で本音で話せる人について、「学校の友達」「学校以外の友達」「近所の大人」「塾やお店・公共施設などで知り合った大人」「親戚（おじいさん、おばあさん、おじさん、おばさん、いとこなど）」「その他」「本音で話し合える人はいない」の7項目の中から本音で話せる人全てを選択する方法で調査し、世代間比較を通して検討を行なった。調査結果を図5-2-4-2に示す。

世代を通して共通の傾向についてみると、地域において本音で話せる相手は「学校の友達」が最も多く、次いで「学校以外の友達」であり、同年代がほとんどであることが捉え

られた。同年代以外の相手の中では、「親戚」が2割程度みられたが、他はほとんど本音で話せる相手にはなっていないことが捉えられた。

世代による違いを検討すると、「学校以外の友達」「塾やお店・公共施設などで知り合った大人」において、カイ二乗検定において1%水準の有意差、順位相関係数において1%水準の有意性があり、〈子ども世代〉の方がこれらと本音で話しているものが多いことが捉えられた。「近所の大人」においては、カイ二乗検定において5%水準の有意差、順位相関係数において5%水準の有意性があり、〈親世代〉の方がやや多いことが捉えられた。「本音で話し合える人はいない」においてはカイ二乗検定において5%水準の有意差、順位相関係数において5%水準の有意性があり、〈親世代〉の方が本音で話し合える人はいないものがやや多く、〈子ども世代〉の方が地域に本音で話せる相手のいるものがやや多いことが捉えられた。本音で話せる相手については、〈子ども世代〉では近所の大人との関係は希薄になっているものが多い。その代わりに、学校以外の友達、店などで知り合った大人と本音で話せるものが増えており、〈子ども世代〉の方が社会的居場所となる場の範囲が広がっているのではないかと考えられる。

第三節 地域における子どもの居場所の実態と意識

本節では、地域における高校生の居場所の実態と意識について捉えるため、「地域の各場所における空間の支配度」「地域における居場所の所有率」「地域における居場所となる具体的な場所」「地域における居場所に対する要求」「地域における社会的居場所で話す相手」「地域における居場所タイプの分類」の合計6項目について、世代間比較を通して検討し、世代別の特徴を明らかにする。

1. 地域の各場所における空間の支配度

第四章の学校の場合と同様に、地域の各場所についても空間の支配度を捉える。地域の空間の支配度についても、「基本テリトリー」の側面からのみ検討することとする。

地域の各場所の空間の支配度を捉えるため、a「自然のあるところ（公園、川の土手など）」b「空き地・駐車場など」c「よく行く店・駅」d「公共施設（図書館、公民館、児童館、スポーツ施設など）」e「塾・習い事などの教室」f「友達の家」の6項目について、「自分の持ち物を自由に置け、好きな時に好きなことができる場所」（基本テリトリー）がある項目全てを選択する方法で調査し、世代間比較を通して検討した。調査結果を図5-3-1に示す。

世代を通して、地域におけるどの場所も、空間の支配度は弱いということが捉えられた。地域は家庭や学校と違い、公共の場であり、不特定多数の人が利用する場所が多いため、自分の自由にふるまうことは困難であるといえる。

世代による違いを検討すると、c「よく行く店・駅」e「塾・習い事などの教室」においてカイ二乗検定における1%水準の有意差、順位相関係数における1%水準の有意性があり、世代による違いがややみられた。また、f「友達の家」においては、カイ二乗検定に

おける 5%水準の有意差、順位相関係数における 5%水準の有意性があり、世代で若干違いがみられた。店や塾の空間の支配度は〈子ども世代〉の方がやや強く、友達の家空間の支配度は〈親世代〉の方が若干強いことが捉えられた。世代間で空間の支配度がやや異なった理由としては、〈子ども世代〉は店や塾に行くものが多く、〈親世代〉は友達の家に行くものが多いことから、よく行く場所の空間の支配度がやや強くなったのではないと思われる。

2. 地域における居場所の所有率

地域における居場所所有の実態を捉えるため、家庭や学校の場合と同様に、個人的居場所について①（「一人になって考え事などができる場所」【精神的プライバシー行為】）②（「好きなことに集中できる場所」【心理状態の維持】）③（「一人になってくつろぐことができる場所」【個人的な休息】）④（「大人の目を避けられる場所」【管理の目からの逃避】）⑤（「嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所」【心理状態の回復】）の 5 項目、社会的居場所について⑥（「お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所」【価値観の共有】）⑦（「仲間意識を感じられる人と話をする場所」【所属（仲間）意識】）⑧（「自分を頼ってくれる人と話をする場所」【受容意識】）⑨（「自分を受け入れてくれる人と話をする場所」【被受容意識】）の 4 項目の合計 9 項目の所有率を検討する。後述する「地域における居場所となる具体的な場所」（本節（3））において、具体的な場所の選択肢 a～f を選択したものを「所有している」、g「場所がない」h「地域ではその行為自体しない」を選択したものを「所有していない」とし、地域における居場所所有の実態について世代間比較を通して検討した。結果を図 5-3-2 に示す。

（1）個人的居場所

①「一人になって考え事などができる場所」【精神的プライバシー行為】

世代による違いはなく、両世代とも約 3 割が、地域において一人になって考え事などができる場所を所有している。家庭や学校における居場所所有の実態と比較すると、地域における居場所の所有率は低いことが捉えられた。

②「好きなことに集中できる場所」【心理状態の維持】

①【精神的プライバシー行為】と同様の傾向であり、世代による違いはなく、両世代とも約 3 割が、好きなことに集中できる場所を所有している。この居場所は、家庭や学校において個人的居場所の所有実態の中では、所有率の高い居場所であった。しかし、地域においては他の個人的居場所と同程度の所有率であり、地域においては所有しにくい居場所であることが捉えられた。

③「一人になってくつろぐことができる場所」【個人的な休息】

両世代とも、地域における居場所所有の中では、最も所有率が低く、所有しにくい居場所であることが捉えられた。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定における 5%水準の有意差、順位相関係数における 1%水準の有意性があり、世代間でやや違いがみられた。〈親世代〉の方が所有率が

やや高いことが捉えられた。〈子ども世代〉の方が、地域に一人でいくものが多いが、進学校の生徒であり、塾に通うものも多いため、地域に居場所をみつける余裕がなかったり、居場所と感じられるまでには至っていないのではないかと推測される。

④「大人の目を避けられる場所」【管理の目からの逃避】

前述した①【精神的プライバシー行為】②【心理状態の維持】と同様の傾向である。世代による違いはなく、両世代とも約 3 割が、地域において大人の目を避けられる場所を所有している。家庭や学校における居場所所有の実態と比較すると、地域における居場所の所有率は低いことが捉えられた。

⑤「嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所」【心理状態の回復】

前述した他の個人的居場所と同様に、世代による違いはなく、両世代とも約 3 割が、地域において大人の目を避けられる場所を所有している。家庭や学校における居場所所有の実態と比較すると、地域における居場所の所有率は低いことが捉えられた。

(2) 社会的居場所

⑥「お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所」【価値観の共有】

両世代とも、お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所を 6～7 割が所有している。地域で過ごす時間は、家庭や学校に比べると少ないと思われるが、それにも関わらず、半数以上のものが居場所を所有しており、高い所有率であるといえる。地域では仲間と一緒に過ごすことが多く、その交流が地域における社会的居場所につながっていると考えられる。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において 5%水準の有意差、順位相関係数における 5%水準の有意性があり、世代間でやや違いがみられた。〈親世代〉の方が居場所を所有しているものが多いことが捉えられた。〈子ども世代〉の方が、近所付き合いは希薄化しており、〈親世代〉よりも社会的居場所を得にくくなっているのではないかと考えられる。

⑦「仲間意識を感じられる人と話をする場所」【所属（仲間）意識】

両世代とも仲間意識を感じられる人と話をする場所を 6～7 割が所有しており、⑥【価値観の共有】と同じ傾向である。地域で過ごす時間は、家庭や学校に比べると少ないと思われるが、それにも関わらず、半数以上のものが居場所を所有しており、高い所有率であるといえる。地域では仲間と一緒に過ごすことが多く、その交流が地域における社会的居場所につながっていると考えられる。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において 1%水準の有意差、順位相関係数における 1%水準の有意性があり、世代間で違いがみられた。〈親世代〉の方が居場所を所有しているものが多いことが捉えられた。〈子ども世代〉の方が、近所付き合いは希薄化しており、〈親世代〉よりも社会的居場所を得にくくなっているのではないかと考えられる。

⑧「自分を頼ってくれる人と話をする場所」【受容意識】

両世代とも、自分を頼ってくれる人と話をする場所を 5～6 割が所有している。家庭や学校より過ごす時間の短い地域であっても、所有率は高いといえる。しかし、前述した低次元の社会的居場所の所有率よりはやや低く、より親しい交流は得にくいと考えられる。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において 5%水準の有意差、順位相関係数における 5%水準の有意性があり、世代間でやや違いがみられた。〈親世代〉の方が居場所を所有しているものが多いことが捉えられた。〈子ども世代〉の方が、近所付き合いは希薄化しており、〈親世代〉よりも社会的居場所を得にくくなっているのではないかと考えられる。

⑨「自分を受け入れてくれる人と話をする場所」【被受容意識】

前述した⑧【受容意識】と同様の傾向であり、両世代とも、自分を受け入れてくれる人と話をする場所を約 5 割が所有している。低次元の社会的場所よりも親しい交流であるため、所有率がやや低くなっていると考えられる。

世代による違いを検討すると、検定による有意差、有意性はなかったが、他の社会的居場所と同様に、〈親世代〉の所有率の方がやや高い傾向がみられた。

以上より、地域における居場所①～⑨を通して検討する。両世代とも社会的居場所を所有しているものが過半数であり比較的多いが、個人的居場所を所有しているものは全体の 3 割程度と低く、中でも、③【個人的な休息】を所有しているものはほとんどいない。これは、地域を一人で利用するものよりも、交流を目的として利用するものの方が多いことと関係していると考えられる。また、地域のような公共の場所では、家庭や学校のように空間の支配度が強い場もなく、個人的居場所は所有しにくいと考えられる。

世代による違いをみると、個人的居場所では③【個人的な休息】、社会的居場所においては、すべてにおいて、〈親世代〉の方が居場所の所有率が高いという違いが捉えられた。〈子ども世代〉の方が、店など社会的な施設が充実しており、一人で地域に行くものも多い反面、将来大学受験が控えていることから、塾に通うものも多く、立ち寄りお店などを居場所と感じられるまでには至っていないのではないかと推測される。また、社会的居場所の所有率が低くなっていることには、〈子ども世代〉の方が、近所付き合いが希薄化しているということも関係しているのではないかと考えられる。

3. 地域における居場所となる具体的な場所

地域において、具体的にどの場所が居場所となっているのか捉えるために、先述した 2. の①～⑨の居場所の具体的な場所について検討する。①～⑨の具体的な場所について、a「自然のあるところ（公園、川の土手など）」b「空き地・駐車場など」c「よく行く店・駅」d「公共施設（図書館、公民館、児童館、スポーツ施設など）」e「塾・習い事などの教室」f「友達の家」g「場所がない」h「地域ではその行為自体しない」の 8 カテゴリーから最もあてはまるもの 1 つを選択する方法で調査し、世代間比較を通して検討した。なお、本項目は居場所となる具体的な場所を検討するため、選択肢の g「場所がない」と f「地域ではその行為自体しない」を回答したものは分析から除いた。結果を図 5-3-3-1～ 9 に示す。

（1）個人的居場所

①「一人になって考え事などができる場所」【精神的プライバシー行為】

両世代とも、半数が「自然のあるところ」を居場所としており、自然が主な居場所となっていることが捉えられた。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において1%水準の有意差があり、世代により違いがみられた。「よく行くお店」「塾・習い事」を居場所とするものは〈子ども世代〉の方が多く、「自然のあるところ」「友達の家」を居場所とするものは〈親世代〉の方が多いことが捉えられた。

②「好きなことに集中できる場所」【心理状態の維持】

両世代とも、「空き地・駐車場」を除いて、それぞれ1～3割のものが居場所としている。「好きなこと」の種類によって居場所となる場所が異なると考えられる。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において1%水準の有意差があり、世代により違いがみられた。①【精神的プライバシー行為】と同様に、「よく行くお店」「塾・習い事」を居場所とするものは〈子ども世代〉の方が多く、「自然のあるところ」「友達の家」を居場所とするものは〈親世代〉の方が多いことが捉えられた。

③「一人になってくつろぐことができる場所」【個人的な休息】

両世代とも、約半数が「自然のあるところ」を居場所としており、自然が主な居場所となっていることが捉えられた。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において5%水準の有意差があり、世代によりやや違いがみられた。他の個人的居場所と同様に、「よく行くお店」「塾・習い事」を居場所とするものは〈子ども世代〉の方が多く、「自然のあるところ」「友達の家」を居場所とするものは〈親世代〉の方が多いことが捉えられた。

④「大人の目を避けられる場所」【管理の目からの逃避】

両世代とも、「友達の家」が最も多く、次いで「自然のある場所」であり、友達の家と自然が主な場所であることが捉えられた。物理的な隔離・逃避を必要とする高次元の個人的居場所であり、自然よりも、友達の家の方が自由に振舞え、管理の目から隠れられるのではないかと考えられる。

世代による違いを検討したところ、カイ二乗検定において有意差はみられなかったが、他の個人的居場所と同様の傾向がみられ、「よく行くお店」「塾・習い事」を居場所とするものは〈子ども世代〉の方が若干多く、「自然のあるところ」「友達の家」を居場所とするものは〈親世代〉の方が若干多い傾向である。

⑤「嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所」【心理状態の回復】

世代で共通の傾向をみると、「友達の家」「自然のあるところ」を居場所とするものが全体的に多い傾向である。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において1%水準の有意差があり、世代により違いがみられた。他の個人的場所と同様に、「よく行くお店」「塾・習い事」を居場所とするものは〈子ども世代〉の方が多く、「自然のあるところ」「友達の家」を居場所とするものは〈親世代〉の方が多いことが捉えられた。特に、「よく行くお店」を居場所とするものの違いが大きく、〈子ども世代〉においては、お店を居場所とするものが最も多い。〈子

ども世代)では一人で店を利用するものが多いこととも関係していると考えられる。

(2) 社会的居場所

⑥「お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所」【価値観の共有】

両世代とも、居場所としているものが最も多い場所は「友達の家」であり、次いで「よく行くお店」である。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において5%水準の有意差があり、世代によりやや違いがみられた。「よく行くお店」「塾・習い事」を居場所とするものは〈子ども世代〉の方が若干多く、「自然のあるところ」「友達の家」を居場所とするものは〈親世代〉の方が若干多いことが捉えられ、個人的居場所とも同様の傾向である。

⑦「仲間意識を感じられる人と話をする場所」【所属(仲間)意識】

両世代とも、居場所としているものが最も多い場所は「友達の家」であり、次いで「よく行くお店」である。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において5%水準の有意差があり、世代によりやや違いがみられた。「よく行くお店」「塾・習い事」を居場所とするものは〈子ども世代〉の方が若干多く、「自然のあるところ」「友達の家」を居場所とするものは〈親世代〉の方が若干多いことが捉えられた。⑥【価値観の共有】とも同様の傾向である。

⑧「自分の頼ってくれる人と話をする場所」【受容意識】

他の社会的居場所と同様の傾向であり、両世代とも、居場所としているものが最も多い場所は「友達の家」であり、次いで「よく行くお店」である。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において5%水準の有意差があり、世代によりやや違いがみられた。「よく行くお店」「塾・習い事」を居場所とするものは〈子ども世代〉の方が若干多く、「自然のあるところ」「友達の家」を居場所とするものは〈親世代〉の方が若干多いことが捉えられた。

⑨「自分を受け入れてくれる人と話をする場所」【被受容意識】

他の社会的居場所と同様の傾向であり、両世代とも、居場所としているものが最も多い場所は「友達の家」であり、次いで「よく行くお店」である。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において5%水準の有意差があり、世代によりやや違いがみられた。「よく行くお店」「塾・習い事」を居場所とするものは〈子ども世代〉の方が若干多く、「自然のあるところ」「友達の家」を居場所とするものは〈親世代〉の方が若干多いことが捉えられた。

以上より、地域における居場所①～⑨を通して検討すると、世代を通して共通の傾向については次のようなことが明らかになった。両世代とも個人的居場所においては、「自然のあるところ」を居場所とするものが多いことが捉えられた。特に①【精神的プライバシー行為】③【個人的な休息】⑤【心理状態の回復】において自然を居場所とするものが多いことから、地域において自然は心理的に一人になれ、くつろぐことができ、ストレスをやわらげたりすることのできる場所なのではないかと考えられる。高次元の個人的居場所に

においては、自然のあるところの他に「友達の家」を居場所とするものも多い。これは、仲の良い友達の家であるため、地域における他の場所よりも自由に振舞えるためではないかと考えられる。社会的居場所の具体的な場所については、「友達の家」次いで「よく行くお店」を居場所とするものが多いことが捉えられた。これらは、地域においては、友達の家によく行くもの、店に仲間と行くものが多かったことから裏付けられる。また、地域において本音で話せる相手は友達が多かったことから、その友達との交流場所として友達の家を居場所としていると考えられる。

世代間の違いについては、個人的居場所と社会的居場所ともに、居場所としての具体的な場所に違いがみられ、特に個人的居場所における世代間の違いが大きいことが捉えられた。個人的居場所、社会的居場所ともに、「よく行く店」「塾や習い事など」を居場所としているものは〈子ども世代〉の方が多く、「自然のあるところ」「友達の家」を居場所としているものは〈親世代〉のほうが多いという違いがみられた。個人的居場所については、〈子ども世代〉の方が、店に一人で行くもの、塾や習い事に行くものが多く、〈親世代〉の方が、自然や友達の家に行くものが多いことから裏付けられる。社会的居場所についても、〈子ども世代〉の方が店に仲間と行くもの、塾や習い事に行くものが多く、〈親世代〉の方が自然に仲間と行くもの、友達の家に行くものが多いことから裏付けられる。しかし、地域における居場所の所有率で明らかになったように、〈子ども世代〉の居場所所有率の方が低い。これは、高次元の個人的居場所と社会的居場所の具体的な場所となる友達の家に行くものが〈子ども世代〉の方が少ないため、居場所所有の低さにつながっているのではないかと考えられる。〈子ども世代〉においてはお店などの施設が充実し、これらの場所に行くものも多くなっているが、「自分の居場所である」と感じられるまでには至っていないものも多いのではないかと推測される。また、〈子ども世代〉は塾に通うものも多く、勉強に追われ、地域に居場所をみつけられるような余裕があまりないのではないかと推測される。

4. 地域における居場所に対する要求

地域における居場所に対する要求を捉えるため、家庭や学校の場合と同様に、個人的居場所について①（「一人になって考え事などができる場所」【精神的プライバシー行為】）②（「好きなことに集中できる場所」【心理状態の維持】）③（「一人になってくつろぐことができる場所」【個人的な休息】）④（「大人の目を避けられる場所」【管理の目からの逃避】）⑤（「嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所」【心理状態の回復】）の5項目、社会的居場所について⑥（「お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所」【価値観の共有】）⑦（「仲間意識を感じられる人と話をする場所」【所属（仲間）意識】）⑧（「自分を頼ってくれる人と話をする場所」【受容意識】）⑨（「自分を受け入れてくれる人と話をする場所」【被受容意識】）の4項目の合計9項目について、必要だと思う場所全てを選択する方法で調査し、世代間比較を通して検討した。結果を図5・3・4に示す。

（1）個人的居場所

①「一人になって考え事などができる場所」【精神的プライバシー行為】

両世代とも、要求率は2～4割と、家庭や学校よりも低い要求率であることが捉えられた。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において1%水準の有意差、順位相関係数における1%水準の有意性があり、世代間で違いがみられた。〈子ども世代〉では4割要求しているのに対し、〈親世代〉では2割しか要求しておらず、〈子ども世代〉の要求率の方が高いことが捉えられた。〈子ども世代〉は地域に一人で行くものが多く、個人的居場所に対する要求が高いのではないかと考えられる。

②「好きなことに集中できる場所」【心理状態の維持】

両世代とも要求率は4～5割と、地域における個人的居場所の中では、やや高い要求率であることが捉えられた。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において1%水準の有意差、順位相関係数における1%水準の有意性があり、世代間で違いがみられた。〈子ども世代〉では5割の要求率であるのに対し、〈親世代〉は4割であり、〈子ども世代〉の要求率の方が高いことが捉えられた。〈子ども世代〉は地域に一人で行くものが多く、個人的居場所に対する要求が高いのではないかと考えられる。

③「一人になってくつろぐことができる場所」【個人的な休息】

両世代とも、要求率は2～4割と、家庭や学校よりも低い要求率であることが捉えられた。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において1%水準の有意差、順位相関係数における1%水準の有意性があり、世代間で違いがみられた。〈子ども世代〉では4割要求しているのに対し、〈親世代〉では2割しか要求しておらず、〈子ども世代〉の要求率の方が高いことが捉えられた。〈子ども世代〉は地域に一人で行くものが多く、個人的居場所に対する要求が高いのではないかと考えられる。

④「大人の目を避けられる場所」【管理の目からの逃避】

両世代とも、要求率は2～4.5割と、家庭や学校よりも低い要求率であることが捉えられた。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において1%水準の有意差、順位相関係数における1%水準の有意性があり、世代間で違いがみられた。〈子ども世代〉では4.5割要求しているのに対し、〈親世代〉では2割しか要求しておらず、〈子ども世代〉の要求率の方が高いことが捉えられた。〈子ども世代〉は地域に一人で行くものが多く、個人的居場所に対する要求が高いのではないかと考えられる。

⑤「嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所」【心理状態の回復】

両世代とも要求率は4～6割と、地域における個人的居場所の中では、やや高い要求率であることが捉えられた。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において1%水準の有意差、順位相関係数における1%水準の有意性があり、世代間で違いがみられた。〈子ども世代〉では6割要求しているのに対し、〈親世代〉では4割しか要求しておらず、〈子ども世代〉の要求率の方が

高いことが捉えられた。〈子ども世代〉は地域に一人で行くものが多く、個人的居場所に対する要求が高いのではないかと考えられる。

（２）社会的居場所

⑥「お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所」【価値観の共有】

両世代とも要求率は約６割であり、家庭や学校に比べて過ごす時間の短い地域でさえも、要求率が高いことが捉えられた。地域へは、一人で行くより仲間と行く方が多いこととも関係していると考えられる。

世代による違いを検討すると、検定による有意差、有意性はないものの、個人的居場所と同様に、〈子ども世代〉の方がやや要求率が高い傾向がみられた。

⑦「仲間意識を感じられる人と話をする場所」【所属（仲間）意識】

両世代とも要求率は約６割であり、家庭や学校に比べて過ごす時間の短い地域でさえも、要求率が高いことが捉えられた。地域へは、一人で行くより仲間と行く方が多いこととも関係していると考えられる。

世代による違いを検討すると、検定による有意差、有意性はないものの、個人的居場所と同様に、〈子ども世代〉の方がやや要求率が高い傾向がみられた。

⑧「自分を頼ってくれる人と話をする場所」【受容意識】

両世代とも要求率は約６割であり、家庭や学校に比べて過ごす時間の短い地域でさえも、要求率が高いことが捉えられた。地域へは、一人で行くより仲間と行く方が多いこととも関係していると考えられる。

世代による違いを検討すると、検定による有意差、有意性はないものの、個人的居場所と同様に、〈子ども世代〉の方がやや要求率が高い傾向がみられた。

⑨「自分を受け入れてくれる人と話をする場所」【被受容意識】

両世代とも要求率は約６割であり、家庭や学校に比べて過ごす時間の短い地域でさえも、要求率が高いことが捉えられた。地域へは、一人で行くより仲間と行く方が多いこととも関係していると考えられる。

世代による違いを検討すると、検定による有意差、有意性はないものの、個人的居場所と同様に、〈子ども世代〉の方がやや要求率が高い傾向がみられた。

以上より、地域における居場所①～⑨を通して検討する。世代を通して共通の傾向については、次のようなことが明らかになった。社会的居場所に対する要求率は６～７割であり、家庭や学校よりも過ごす時間の短い地域においても、社会的居場所に対する要求は高いことが捉えられた。個人的居場所に対する要求については、社会的居場所に対するものよりも低い傾向が捉えられた。

世代による違いを検討すると、個人的居場所において、世代間で大きな違いがみられた。〈子ども世代〉の要求率が約半数あるのに対し、〈親世代〉の要求率は２～４割と低い。また、〈子ども世代〉においては、実際に居場所を所有しているものより、居場所を要求しているものの方が多く、〈子ども世代〉の方が、地域に対し個人的居場所を必要としているこ

とが捉えられた。〈子ども世代〉の方が、個人的居場所の所有率は低いものの、地域のお店などが充実しており、お店に一人で行くものも多いことから、地域における個人的居場所に対する要求が潜在化していると考えられる。また、社会的居場所に対する要求についても、検定による有意差はなかったものの、〈子ども世代〉の要求率の方がやや高い傾向が見受けられ、個人的居場所と同様の傾向であることが捉えられた。

5. 地域における社会的居場所で話す相手

家庭や学校の場合と同様に、社会的居場所で交流する相手について検討を行なう。社会的居場所⑥（「お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所」【価値観の共有】）⑦（「仲間意識を感じられる人と話をする場所」【所属（仲間）意識】）⑧（「自分を頼ってくれる人と話をする場所」【受容意識】）⑨（「自分を受け入れてくれる人と話をする場所」【被受容意識】）の4項目において、居場所を所有しているもの対象に、それぞれ誰との交流であるのかを「友達のみ」「友達と大人の両方」「大人のみ」の3カテゴリーから1つ選択する方法で調査し、世代間比較を通して検討した。結果を図 5-3-5 に示す。

⑥「お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所」【価値観の共有】

両世代とも、「友達のみ」というものがほとんどであり、地域における社会的居場所で交流する相手はほとんどが友達であることが捉えられた。

世代による違いを検討すと、カイ二乗検定において 1%水準の有意差、順位相関係数における 1%水準の有意性があり、世代による違いがみられた。〈子ども世代〉では「友達と大人の両方」というものが約 1 割おり、〈子ども世代〉では交流相手に大人を含むものがやや多いことが捉えられた。

⑦「仲間意識を感じられる人と話をする場所」【所属（仲間）意識】

両世代とも、「友達のみ」というものがほとんどであり、地域における社会的居場所で交流する相手はほとんどが友達であることが捉えられた。

世代による違いを検討すと、カイ二乗検定において 1%水準の有意差、順位相関係数における 1%水準の有意性があり、世代による違いがみられた。〈子ども世代〉では「友達と大人の両方」というものが約 1 割おり、〈子ども世代〉では交流相手に大人を含むものがやや多いことが捉えられた。

⑧「自分を頼ってくれる人と話をする場所」【受容意識】

両世代とも、「友達のみ」というものがほとんどであり、地域における社会的居場所で交流する相手はほとんどが友達であることが捉えられた。

世代による違いを検討すと、カイ二乗検定において 1%水準の有意差、順位相関係数における 1%水準の有意性があり、世代による違いがみられた。〈子ども世代〉では「友達と大人の両方」というものが約 1 割おり、〈子ども世代〉では交流相手に大人を含むものがやや多いことが捉えられた。

⑨「自分を受け入れてくれる人と話をする場所」【被受容意識】

両世代とも、「友達のみ」というものがほとんどであり、交流相手はほとんどが友達である。しかし、他の社会的居場所より、「友達と大人の両方」とするものの割合がやや多く、交流相手に大人を含むものがやや多いことが捉えられた。これは、「自分を受け入れてくれる」存在であり、大人との交流のウエイトがやや高くなるのではないかと考えられる。

世代による違いを検討すと、カイ二乗検定において 1%水準の有意差、順位相関係数における 1%水準の有意性があり、世代による違いがみられた。〈子ども世代〉では「友達と大人の両方」というものが約 1 割おり、〈子ども世代〉では交流相手に大人を含むものがやや多いことが捉えられた。

以上より、社会的居場所全体を通して検討する。世代を通して共通の傾向についてみると、社会的居場所での交流相手はほとんどが友達のみであることが捉えられた。一部に「友達と大人の両方」のものがみられ、特に⑨【被受容意識】においては 1～2 割と他の居場所よりも高い割合である。これは、「自分を受け入れてくれる」存在であり、大人との交流のウエイトがやや高くなるのではないかと考えられる。

世代による違いを検討すると、社会的居場所全てにおいて世代間の違いがみられた。〈子ども世代〉の方が、「友達と大人の両方」の占める割合がやや高いことが捉えられた。これは、〈親世代〉では近所付き合いの良いものもまだ多く、地域内での異年齢集団で遊んだり交流することがあったのではないかとと思われる。一方、〈子ども世代〉においては、近所付き合いの良いものは少なく、地域の異年齢間のつながりもなくなっているのではないかと考えられる。異年齢間のつながりがなくなったが、店や塾など大人のいる場所によく行くようになり、そこにいる大人と本音で話しているというものもやや多くなっていることから、大人が交流相手に含まれるものが多くなっているのではないかと推測される。

6. 地域における居場所パターンの分類

本項目では、地域における個人的居場所と社会的居場所の所有状況をトータル的に捉えるため、家庭や学校の場合と同様に、どの居場所を所有しているのかを検討する。「地域における居場所の所有率」から、個人的居場所と社会的居場所の所有の有無を機械的に組み合わせた結果、合計 9 個の所有パターンが得られた。具体的なパターンは以下のようなものである。高次元の個人的居場所及び、高次元の社会的居場所をもつケースは「①個人的居場所（高次元）・社会的居場所（高次元）あり」、高次元の個人的居場所及び、低次元の社会的居場所をもつケースは「②個人的居場所（高次元）・社会的居場所（低次元）あり」、高次元の個人的居場所のみもつケースは「③個人的居場所（高次元）あり」、低次元の個人的居場所及び、高次元の社会的居場所をもつケースは「④個人的居場所（低次元のみ）・社会的居場所（高次元）あり」、低次元の個人的居場所及び、低次元の社会的居場所をもつケースは「⑤個人的居場所（低次元のみ）・社会的居場所（低次元のみ）あり」、低次元の個人的居場所のみもつケースは「⑥個人的居場所（低次元のみ）あり」、高次元の社会的居場所をもつケースは「⑦社会的居場所（高次元）あり」、低次元の社会的居場所のみもつケ-

スは「⑧社会的居場所（低次元のみ）あり」、個人的居場所も社会的居場所ももたないケースは「⑨居場所なし」とする合計9パターンである。この居場所所有パターンを図5-3-6に示す。

全体的にみて、両世代とも、家庭や学校は「①個人的居場所（高次元）・社会的居場所（高次元）あり」に大きく偏っていたのに対し、地域ではパターン間でばらつきがみられた。地域には様々な場所があるため、居場所パターンも様々になっていると考えられる。その中で、最も多いパターンは「①個人的居場所（高次元）・社会的居場所（高次元）あり」で全体の3～4割を占め、個人的居場所も社会的居場所も両方所有するものは、家庭や学校の場合と比べると少ないが、地域は家庭や学校とくらべて過ごす時間が限られているという点を考慮すると、地域に居場所を十分に所有しているものは多いといえる。次いで多いパターンは、「⑨居場所なし」が2割、「⑦社会的居場所（高次元）あり」が1.5割と続き、他のパターンは1割以下である。このことから、地域では個人的居場所よりも社会的居場所の方がやや所有しやすい傾向があるといえる。しかし、地域に居場所が全くないものも2割もいることが捉えられた。

世代による違いを検討すると、カイ二乗検定において5%水準の有意差があり、地域における居場所パターンは世代により違いがみられた。「①個人的居場所（高次元）・社会的居場所（高次元）あり」は〈親世代〉で約4割であるのに対し、〈子ども世代〉では約3割であることから、〈親世代〉の方が地域に個人的居場所も社会的居場所も両方所有しているものが多いことが捉えられた。一方、「②個人的居場所（高次元）・社会的居場所（低次元）あり」と「③個人的居場所（高次元）あり」は〈子ども世代〉の方が多く、個人的居場所は高次元の居場所を所有できているが、社会的居場所は高次元の居場所を所有できていないパターンが多いことが捉えられた。これらのことから、〈子ども世代〉は地域において、社会的居場所をやや所有しにくい状況であると考えられる。これは、地域において、友達の家に行くものが〈子ども世代〉では少なくなっていることが背景にあるのではないかと思われる。

第四節 本章のまとめ

本章では、地域における高校生の居場所を捉えるため、地域における居場所の実態と意識について検討した。また、地域において居場所の形成に関わりがあると考えられる高校生を取り巻く環境、地域における高校生の生活と意識についても合わせて検討した。その結果以下のようなことが明らかになった。

1. 高校生を取り巻く地域の環境についてみると、地域の雰囲気は両世代とも比較的良いものが多いことが捉えられた。しかし、一部では雰囲気の悪い地域に住んでいるものもみられ、特に〈子ども世代〉の方が地域の雰囲気がやや悪い傾向であることが明らかになった。自宅の周辺環境は、両世代とも自然環境が比較的豊かなところに居住していることが捉えられた。周辺施設については、両世代とも公園や空き地、駐車場といった広場が多く、

駅も近くにあるものが多い。一方、世代間で周辺施設は大きく違っているところがあり、特に買い物をする場については、〈子ども世代〉では商店街からスーパーやコンビニに置き換わっていることが捉えられた。さらに、〈親世代〉ではほとんどみられなかった飲食店や娯楽施設も〈子ども世代〉では全体の三分の一にまで多くなっている。ショッピングモールのような複合施設も〈子ども世代〉の方が多くなっており、買い物できる店や、一人で時間をつぶせる場所や友達と遊べる施設も多くなっていることが明らかになった。

2. 地域における高校生の生活と意識についてみると、居住期間は、両世代とも生まれた頃から住んでいるものが多く、居住期間は比較的長いことから、地域になじんでいるものが多いことが捉えられた。地域の場所の中で、よく行く場所については、両世代とも友達の家や店、公園などによく行くものが多く、地域では一人で過ごすものより、仲間と交流するために行くものが多いことが明らかになった。世代間でみられた違いは、〈子ども世代〉では一人で地域を利用するものも多くなっており、その中でも店や塾によく行くものが多いことが捉えられた。一方、友達など知り合いの家や自然に行くものは少なくなっており、地域では交流を目的とするよりも一人で利用する傾向が強くなっていることが捉えられた。このような傾向は、〈子ども世代〉の方が、店をはじめ社会的な施設が充実してきていることが関係していると考えられる。また、塾によく行くものについては、進学校に通う高校生の特徴が表れていると考えられる。地域における居心地が良いと感じる時については、世代で傾向が異なっており、〈子ども世代〉はたまり場に居心地のよさを感じるものが多く、〈親世代〉は友達の家で居心地の良さを感じるものが多いことが捉えられた。このことから、〈子ども世代〉の方が、友達の家よりも匿名的な場所であるたまり場に居心地の良さを感じる傾向が強いことが明らかになった。これは、地域におけるよく行く場所において、〈子ども世代〉では友達の家に行くものより、店に行くものの方がやや多い傾向がみられたこととも関係していると考えられる。地域における人間関係について、近所付き合いは、両世代とも「あいさつくらいはしている」というものがほとんどであり、近所の人と顔見知りではあるものの、それほど親しい関係は持っていないことが捉えられた。さらに〈子ども世代〉は近所付き合いをほとんどしないものもやや多く、〈子ども世代〉の方が近所付き合いが希薄な傾向であることが明らかになった。地域において本音で話せる相手については、「学校の友達」が最も多く、次いで「学校以外の友達」であり、同年代がほとんどである。それ以外では、「親戚」が2割程度みられたが、他はほとんど本音で話せる相手にはなっていないことが捉えられた。世代間でやや傾向が異なっており、〈子ども世代〉では近所の大人との関係は希薄になっているものが多い。その代わりに、学校以外の友達、店などで知り合った大人と本音で話せるものがやや多くなっていることが捉えられた。

3. 地域における子どもの居場所の実態と意識については、「地域の各場所における空間の支配度」「地域における居場所の所有率」「地域における居場所となる具体的な場所」「地域における居場所に対する要求」「地域における社会的居場所です話相手」「地域における居

場所パターンの分類」について検討した。

地域の各場所における空間の支配度については、世代を通して、地域におけるどの場所の空間の支配度も弱いことが明らかになった。地域は、家庭や学校とは異なり、不特定多数の人が利用する場所が多いため、自分の自由にふるまうことは困難であることが背景になると考えられる。世代別でみると、店と塾における空間の支配度は〈子ども世代〉の方がやや強い傾向であり、友達の家における空間の支配度は〈親世代〉の方がやや強い傾向であることが明らかになった。これは、それぞれの世代がよく行く場所と一致しており、よく利用する場所であるため、支配度が強くなっていると考えられる。

地域における居場所の所有率については、両世代とも社会的居場所を所有しているものが過半数と比較的多いが、個人的居場所を所有しているものは全体の3割程度と低く、中でも、③【個人的な休息】を所有しているものはほとんどいないことが捉えられた。これは、地域を一人で利用するものよりも、交流を目的として利用するものの方が多いことと関係していると考えられる。また、地域のような公共の場所では、家庭や学校のように空間の支配度が強い場もないため、個人的居場所は所有しにくいと考えられる。世代による違いをみると、個人的居場所では③【個人的な休息】、社会的居場所においては、すべてにおいて、〈親世代〉の方が居場所の所有率が高いという違いが捉えられた。〈子ども世代〉の方が、店など社会的な施設が充実しており、一人で地域に行くものも多い反面、将来大学受験が控えていることから、塾に通うものも多く、立ち寄るお店などを居場所と感じられるまでには至っていないのではないかと推測される。また、社会的居場所の所有率が低くなっていることには、〈子ども世代〉の方が、近所付き合いが希薄化しているということや、友達の家に行くものが少なくなっていることも関係しているのではないかと考えられる。

地域における居場所となる具体的な場所については、両世代とも個人的居場所においては、「自然のあるところ」を居場所とするものが多いことが明らかになった。特に、低次元の個人的居場所においてこの傾向が強く、自然はほっとしたり、心理的に一人になれるような場所であるといえる。また、高次元の個人的居場所においては、自然の他に「友達の家」を居場所とするものが多い。高次元の個人的居場所は、心理的にも物理的にも隔離できる場所が必要であるため、地域の中では、比較的自由に振舞える「友達の家」が居場所として使われるのではないかと考えられる。社会的居場所の具体的な場所は、「友達の家」で次いで「よく行く店」を居場所とするものが多いことが捉えられた。これは、地域の中で、友達の家や店に仲間とよく行くものが多いことから裏付けられる。世代間の違いをみると、個人的居場所、社会的居場所ともに、「よく行く店」「塾、習い事」を居場所とするものは〈子ども世代〉の方が多く、「自然のあるところ」「友達の家」を居場所とするものは〈親世代〉の方が多い傾向が明らかになった。特に、個人的居場所で顕著にあらわれている。これらは、それぞれの世代がよく行く場所と一致しており、よく行く所ほど、居場所となっていることが捉えられた。

地域における居場所に対する要求については、社会的居場所に対する要求率は6～7割で

あり、家庭や学校よりも過ごす時間の短い地域においても、社会的居場所に対する要求は高いことが捉えられた。個人的居場所に対する要求については、社会的居場所に対するものよりも低い傾向が捉えられた。世代による違いを検討すると、個人的居場所において、世代間で大きな違いがみられた。〈子ども世代〉の要求率が約半数あるのに対し、〈親世代〉の要求率は2～4割と低い。また、〈子ども世代〉においては、実際に居場所を所有しているものより、居場所を要求しているものの方が多く、〈子ども世代〉の方が、地域に対し個人的居場所を必要としていることが捉えられた。〈子ども世代〉の方が、個人的居場所の所有率は低いものの、地域のお店などが充実しており、お店に一人で行くものも多いことから、地域における個人的居場所に対する要求が潜在化していると考えられる。また、社会的居場所に対する要求についても、検定による有意差はなかったものの、〈子ども世代〉の要求率の方がやや高い傾向がみられ、個人的居場所と同様の傾向であることが捉えられた。

地域における社会的居場所で話す相手については、両世代ともほとんどが友達のみであることが捉えられた。一部に「友達と大人の両方」のものがみられ、特に⑨【被受容意識】においては1～2割と他の居場所よりも高い割合である。これは、「自分を受け入れてくれる」存在であり、大人との交流のウエイトがやや高くなるのではないかと考えられる。世代による違いを検討すると、〈子ども世代〉の方が、「友達と大人の両方」の占める割合がやや高いことが捉えられた。これは、〈親世代〉では近所付き合いの良いものもまだ多く、地域内での異年齢集団で遊んだり交流することがあったのではないかとと思われる。一方、〈子ども世代〉においては、近所付き合いの良いものは少なく、地域の異年齢間のつながりもなくなっているのではないかと考えられる。異年齢間のつながりがなくなったが、店や塾など大人のいる場所によく行くようになり、そこにいる大人と本音で話しているというものもやや多くなっていることから、大人が交流相手に含まれるものが多くなっているのではないかと推測される。

地域における居場所パターンについては、両世代とも、家庭や学校の場合と異なり、地域ではパターンの割合にばらつきがみられた。地域には様々な場所があるため、居場所パターンも様々になっていると考えられる。その中で、最も多いパターンは「①個人的居場所（高次元）・社会的居場所（高次元）あり」で全体の3～4割を占め、地域に居場所を十分に所有しているものは比較的多いといえる。次いで多いパターンは、「⑨居場所なし」が2割、「⑦社会的居場所（高次元）あり」が1.5割と続き、他のパターンは1割以下である。このことから、地域では個人的居場所よりも社会的居場所の方がやや所有しやすい傾向があるといえる。しかし、地域に居場所が全くないものも2割もいることが捉えられた。世代による違いを検討すると、〈親世代〉の方が地域に個人的居場所も社会的居場所も両方所有しているものが多く、〈子ども世代〉は社会的居場所を所有するパターンはやや少ないことが捉えられた。これは、地域において、友達の家に行くものが〈子ども世代〉では少なくなっていることが背景にあるのではないかとと思われる。

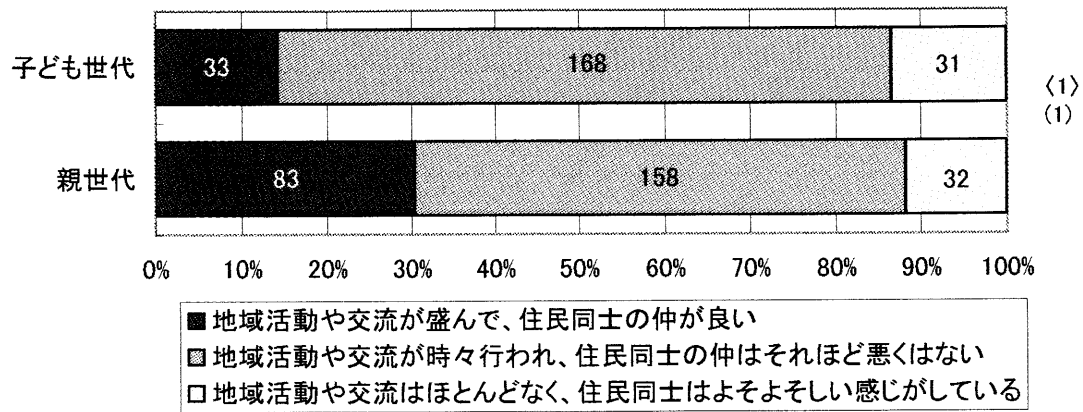


図5-1-1 地域の雰囲気〈世代間比較〉

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

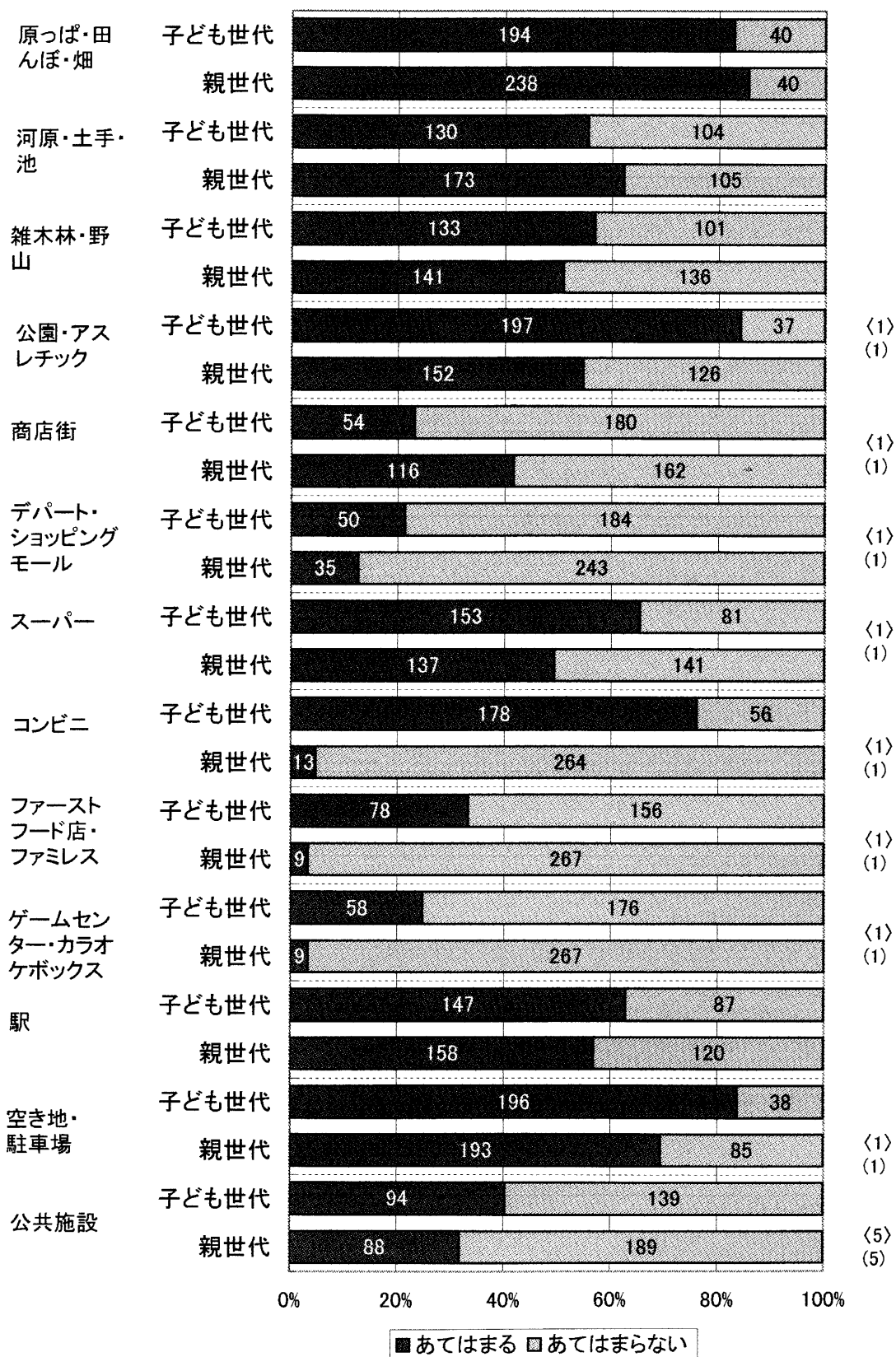


図5-1-2 自宅の周辺環境〈世代間比較〉

※グラフ内数値は件数。

<内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

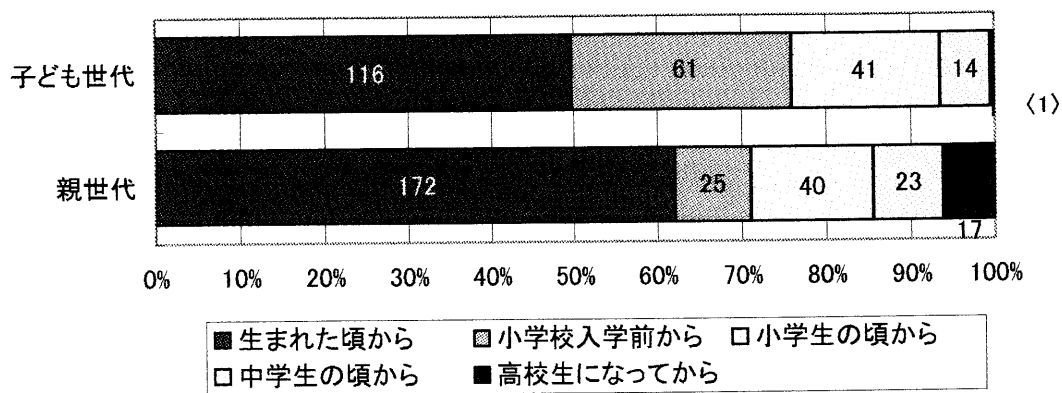


図5－2－1 居住期間〈世代間比較〉

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

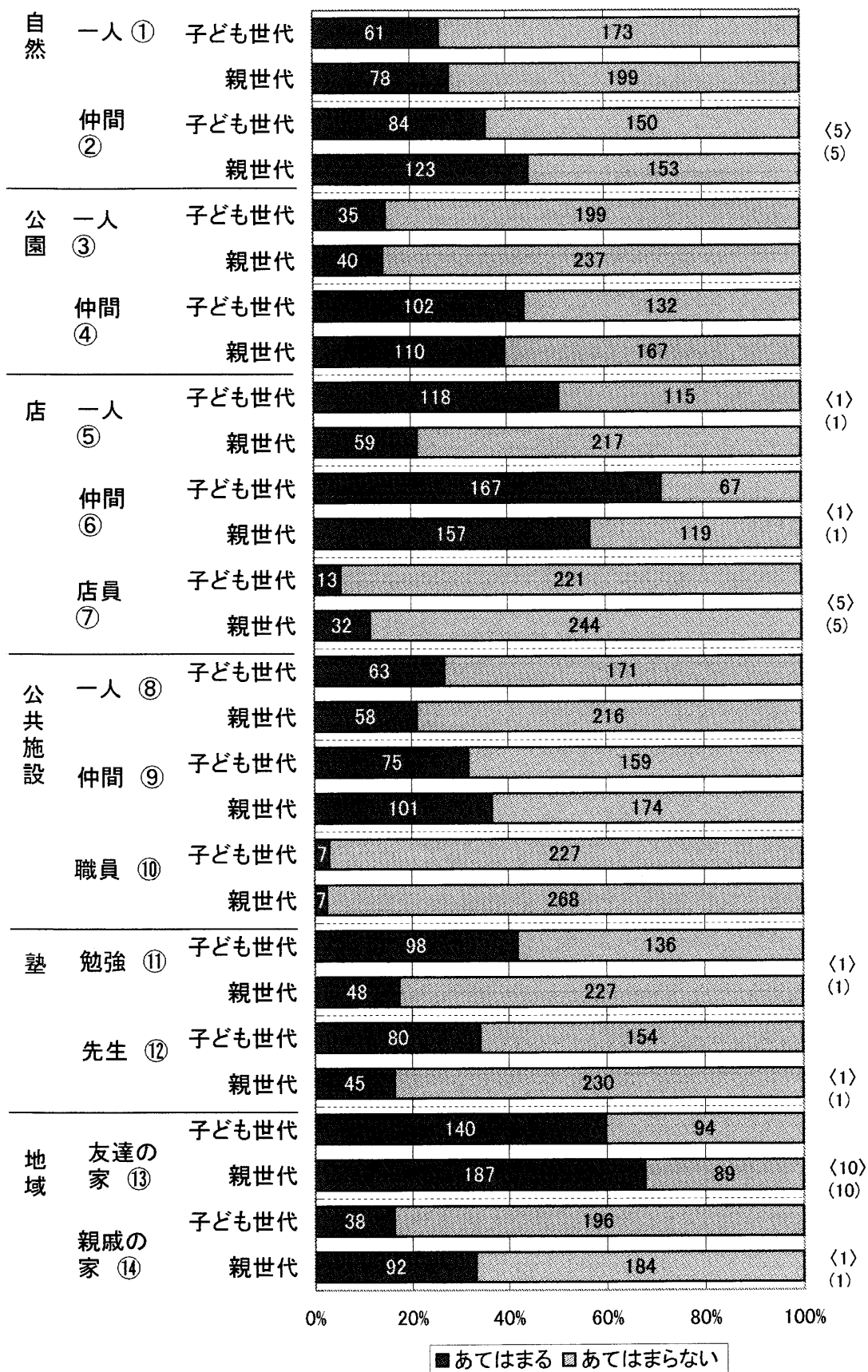


図5-2-2 よく行く場所〈世代間比較〉

①～⑭ 表5-1参照

表5-1

①	一人でぶらぶらしたり考え事などができる自然があるところ
②	仲間としゃべったり遊んだりできる自然があるところ
③	一人でぶらぶらしたり考え事などができる公園や広場
④	仲間としゃべったり遊んだりできる公園や広場
⑤	一人でぶらぶらしたり好きなことで時間をつぶせる店
⑥	仲間としゃべったり遊んだりできる店
⑦	店員やお客さんと仲良くできる店
⑧	一人で好きなことに集中したり考え事などができる公共施設
⑨	仲間としゃべったり遊んだりできる公共施設
⑩	職員や利用している人と仲良くできる公共施設
⑪	勉強や自分の好きなことに集中して取り組める塾や習い事
⑫	先生や生徒と仲良くできる塾や習い事
⑬	いっしょにしゃべったり遊んだりできる仲の良い友達の家
⑭	仲の良い親戚や気軽に行ける近所の人の家

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

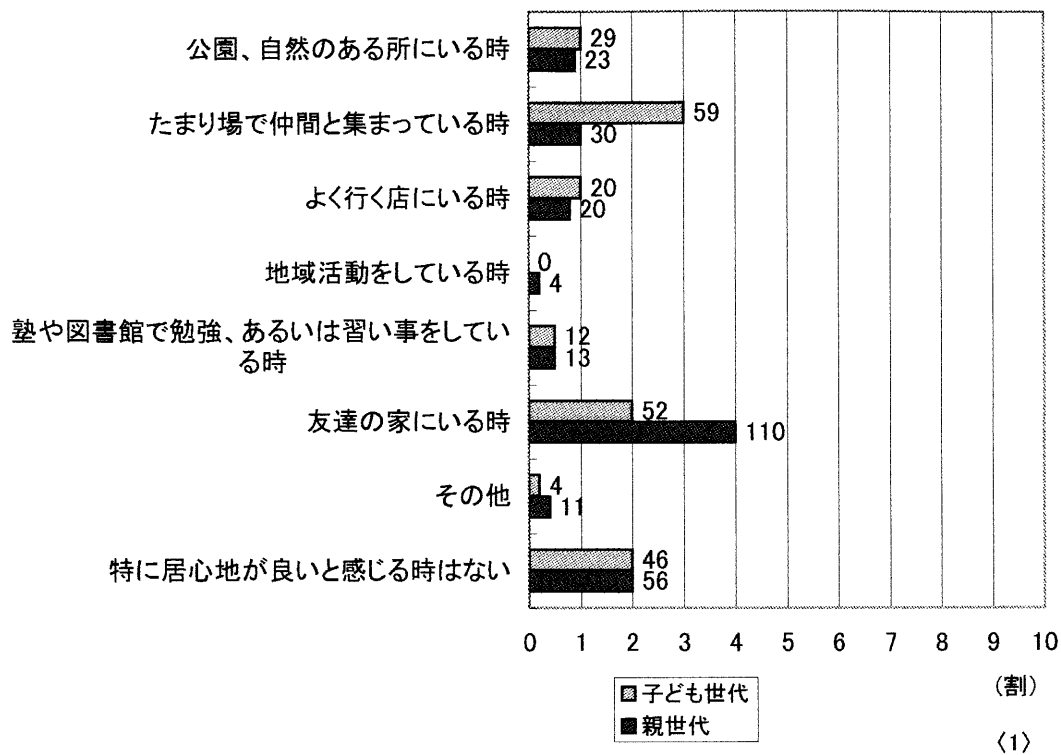


図5-2-3 地域における居心地が良いと感じる時〈世代間比較〉

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

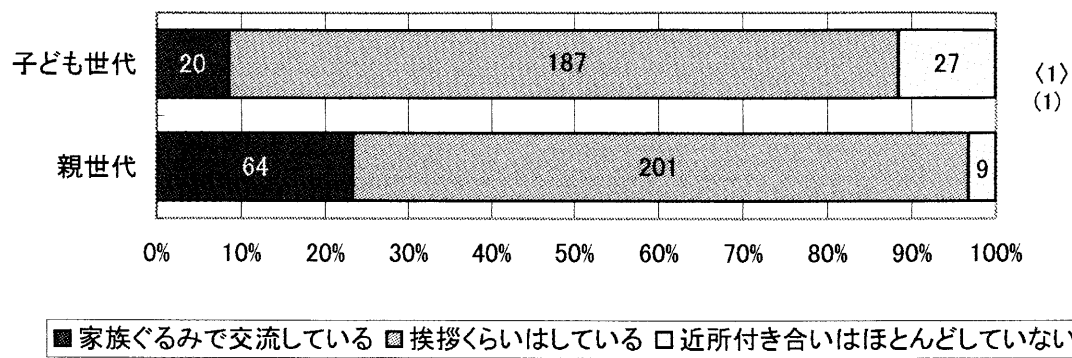


図5-2-4-1 近所付き合い 〈世代間比較〉

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

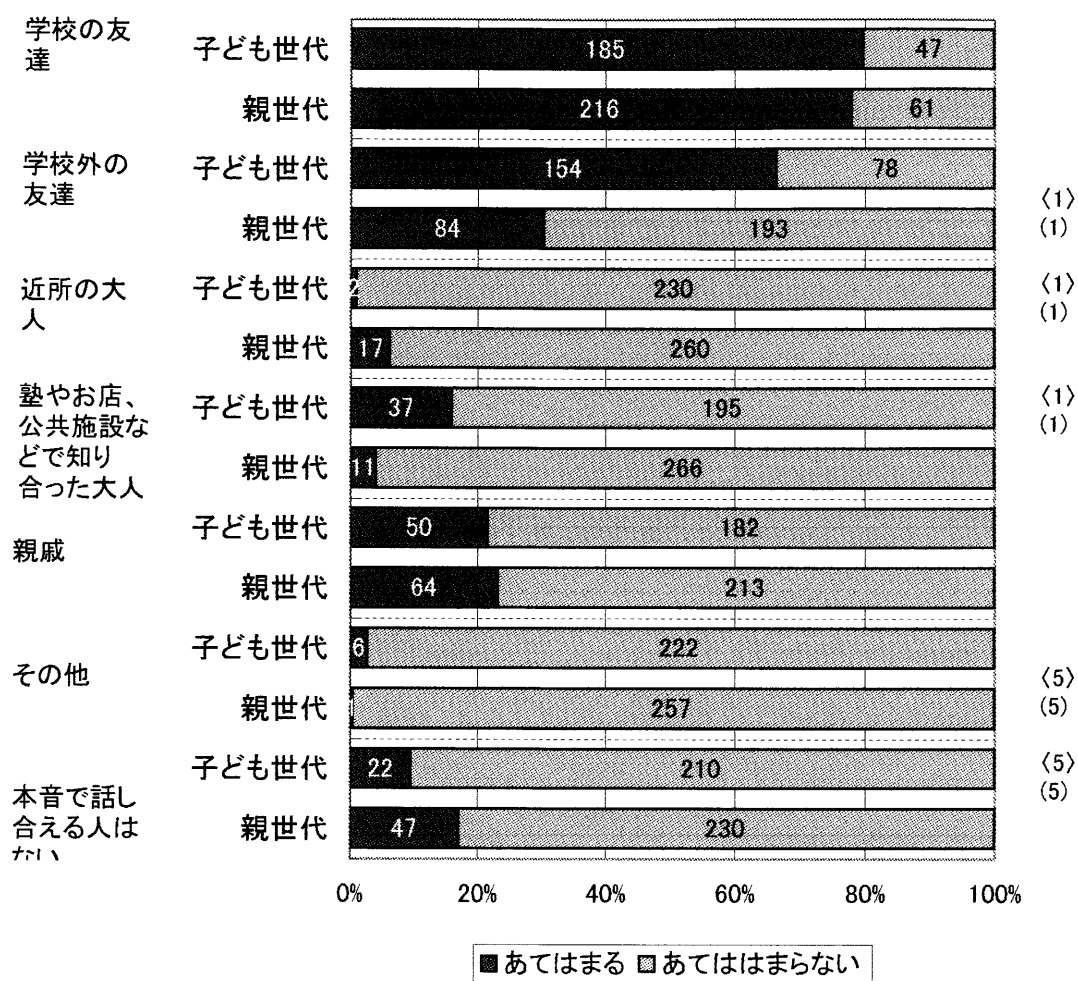


図5-2-4-2 地域において本音で話し合える人〈世代間比較〉

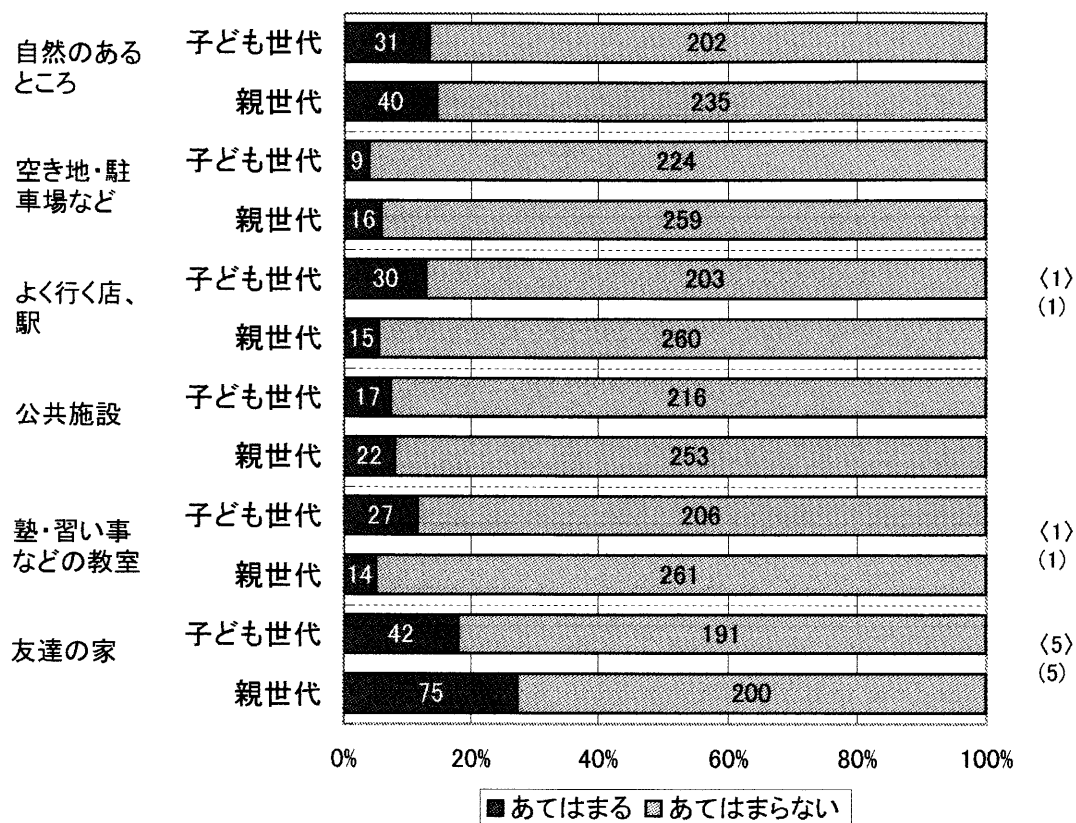


図5-3-1 地域における場所の空間の支配度〈世代間比較〉

※グラフ内数値は件数。

<内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

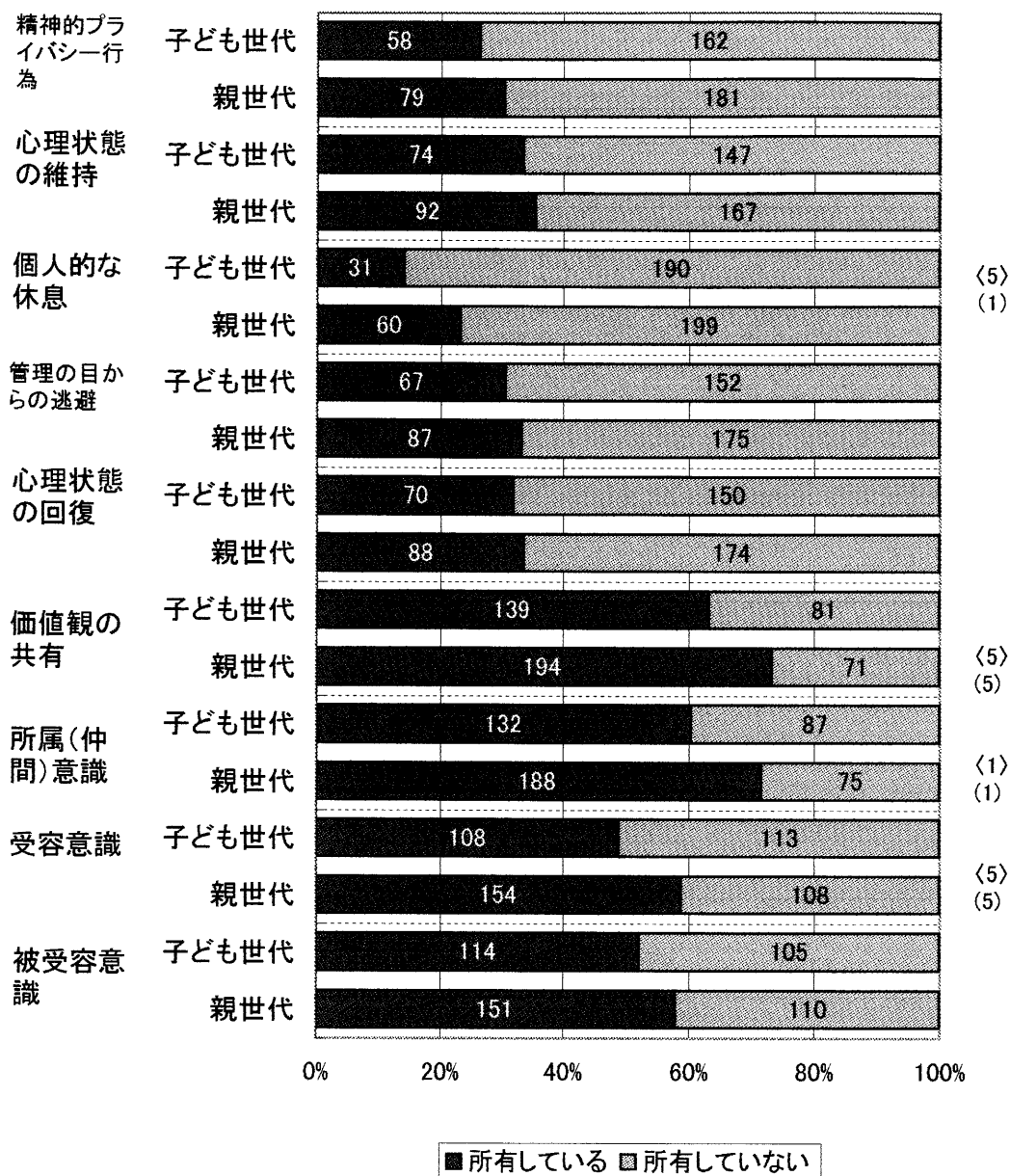


図5-3-2 地域における居場所の所有率<世代間比較>

※グラフ内数値は件数。

<>内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

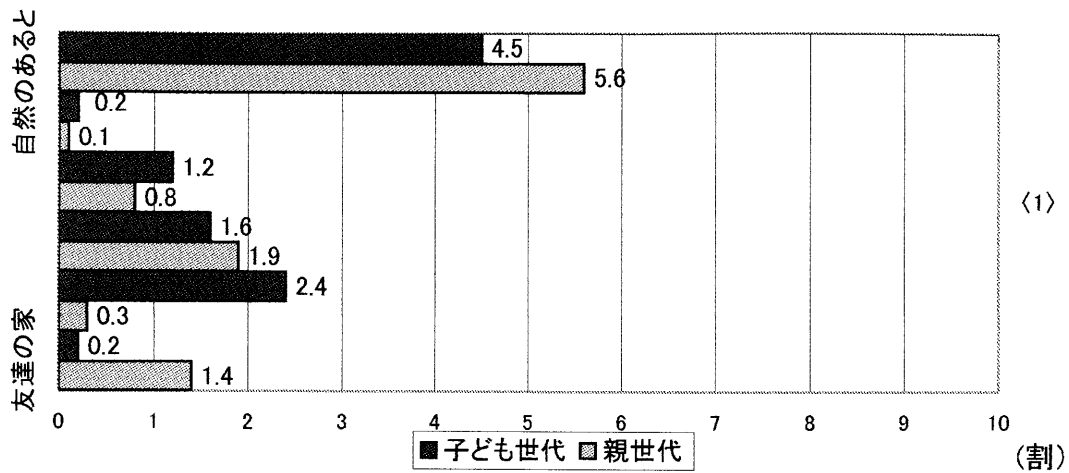


図5-3-3-1 地域における居場所の具体的な場所
【精神的プライバシー行為】

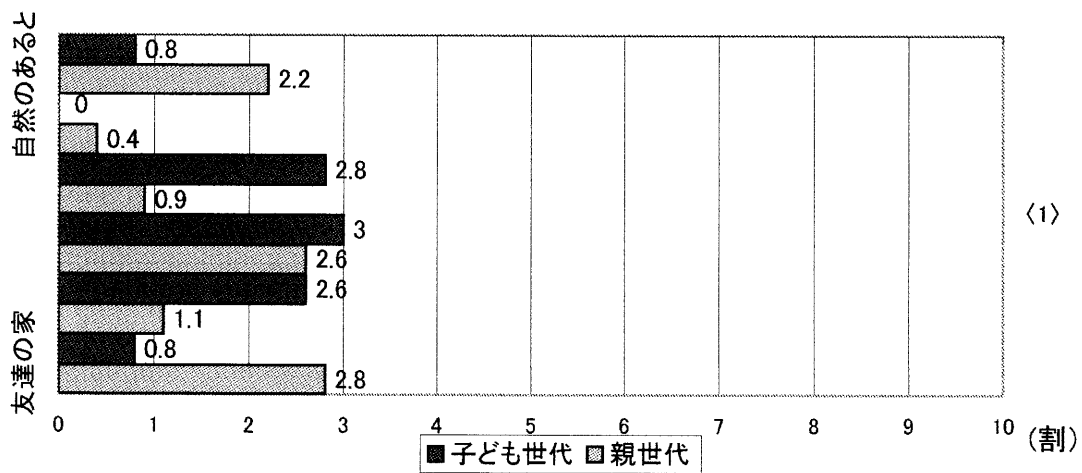


図5-3-3-2 地域における居場所の具体的な場所
【心理状態の維持】

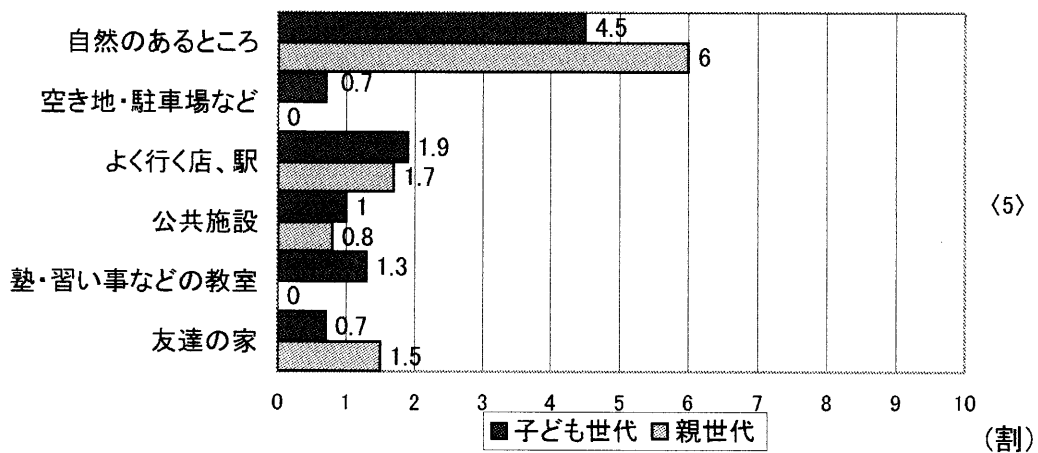


図5-3-3-3 地域における居場所の具体的な場所【個人的な休息】

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

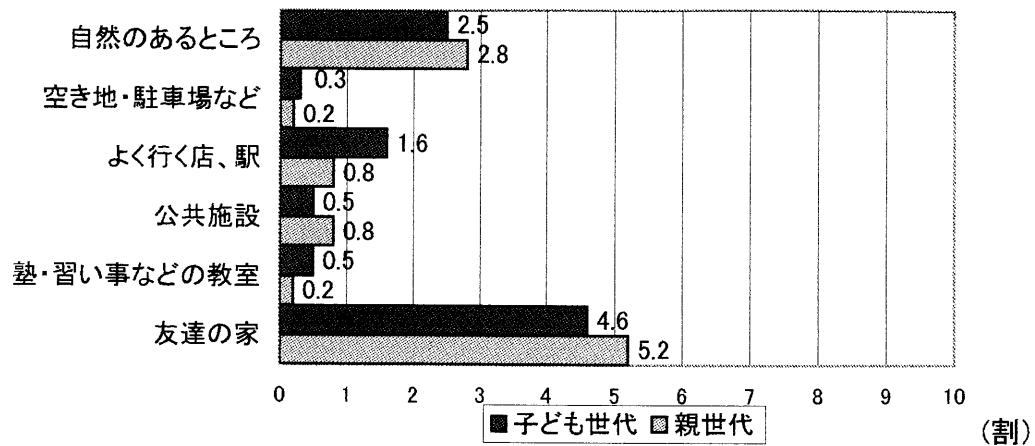


図5-3-3-4 地域における居場所の具体的な場所【管理の目からの逃避】

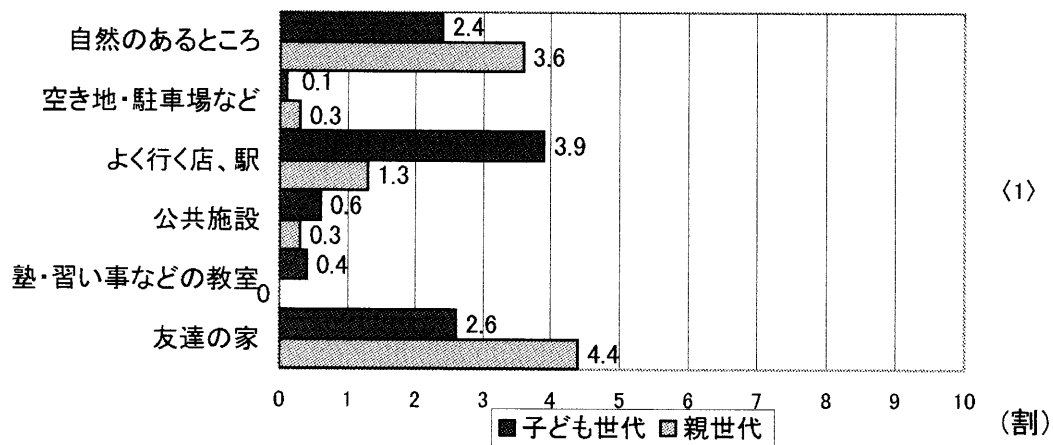


図5-3-3-5 地域における居場所の具体的な場所【心理状態の回復】

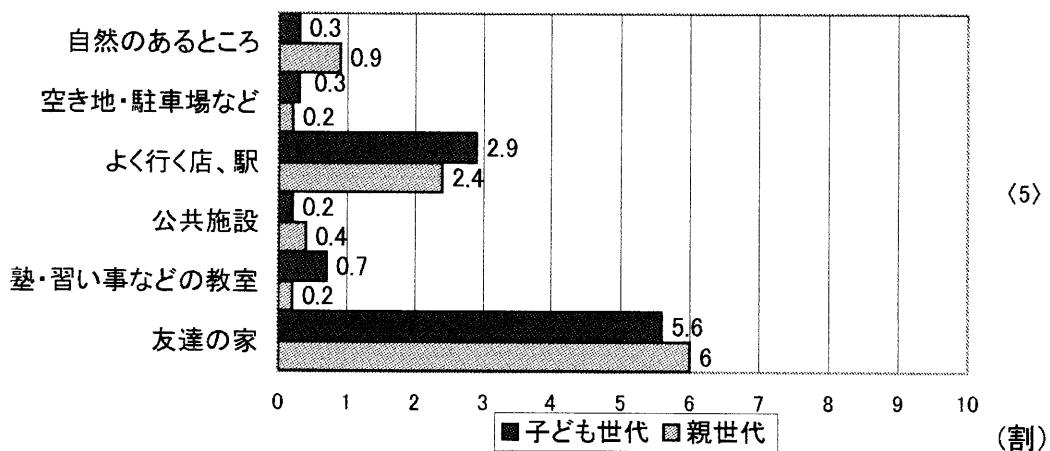


図5-3-3-6 地域における居場所の具体的な場所【価値観の共有】

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

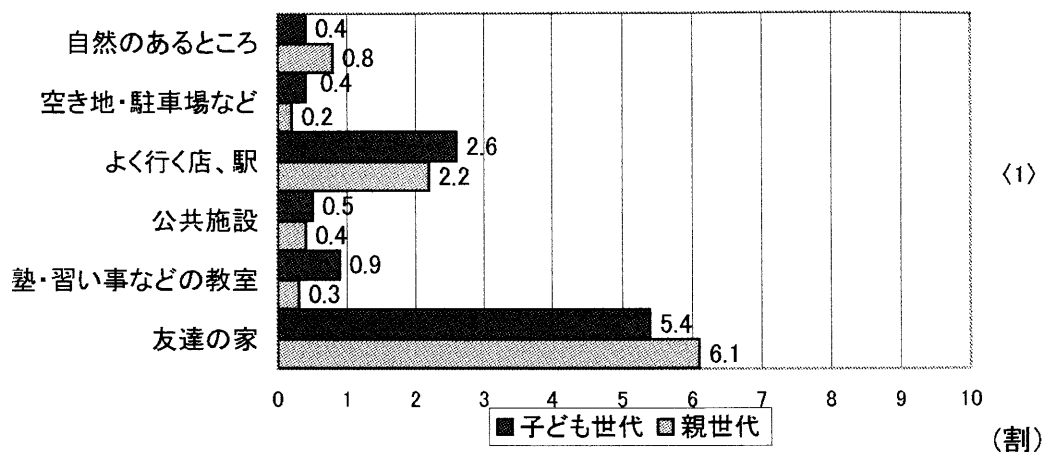


図5-3-3-7 地域における居場所の具体的な場所【所属(仲間)意識】

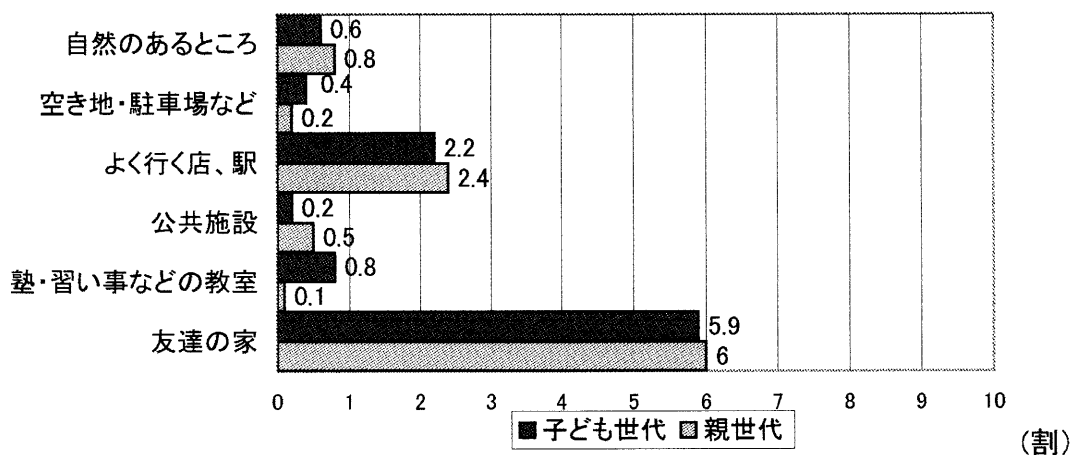


図5-3-3-8 地域における居場所の具体的な場所【受容意識】

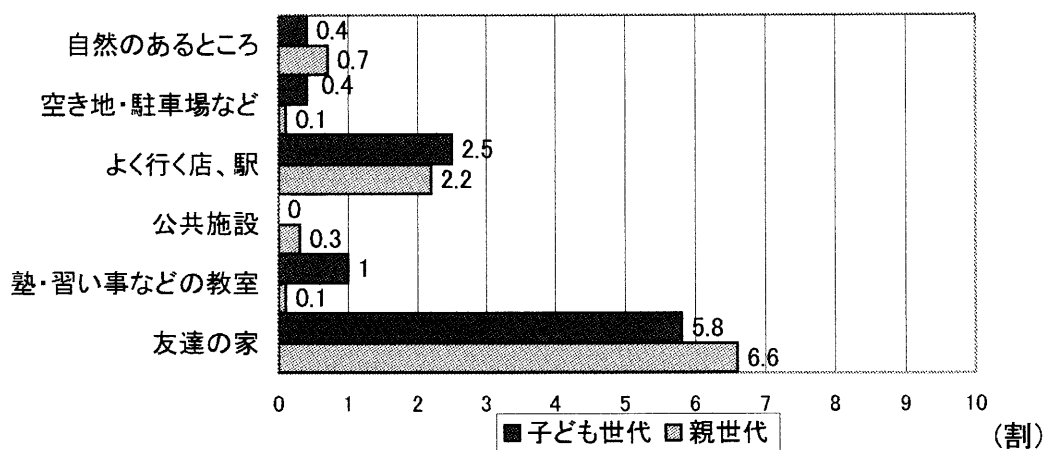


図5-3-3-9 地域における居場所の具体的な場所【被受容意識】

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。
 ()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

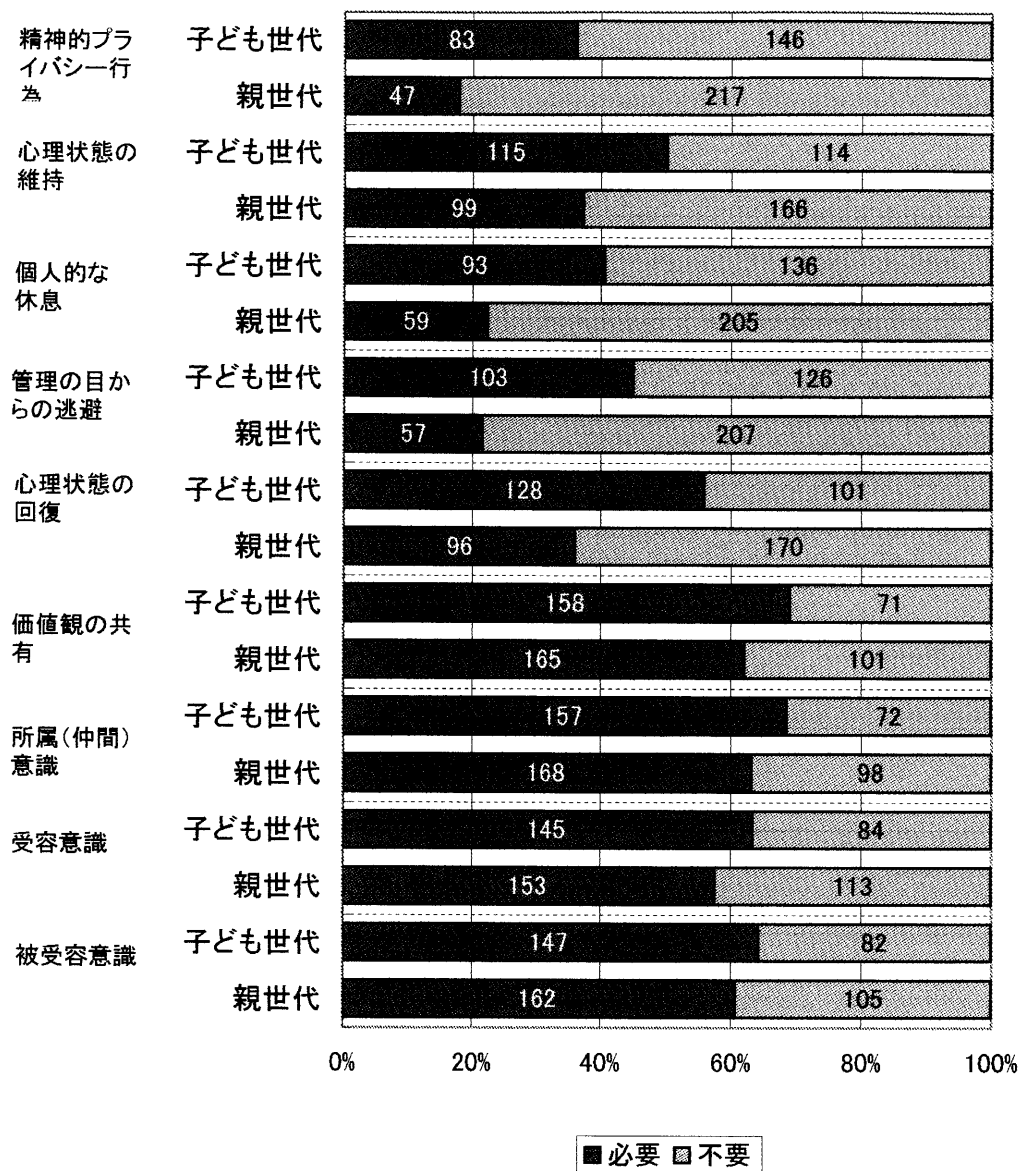


図5-3-4 地域における居場所に対する要求〈世代間比較〉

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。
 ()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

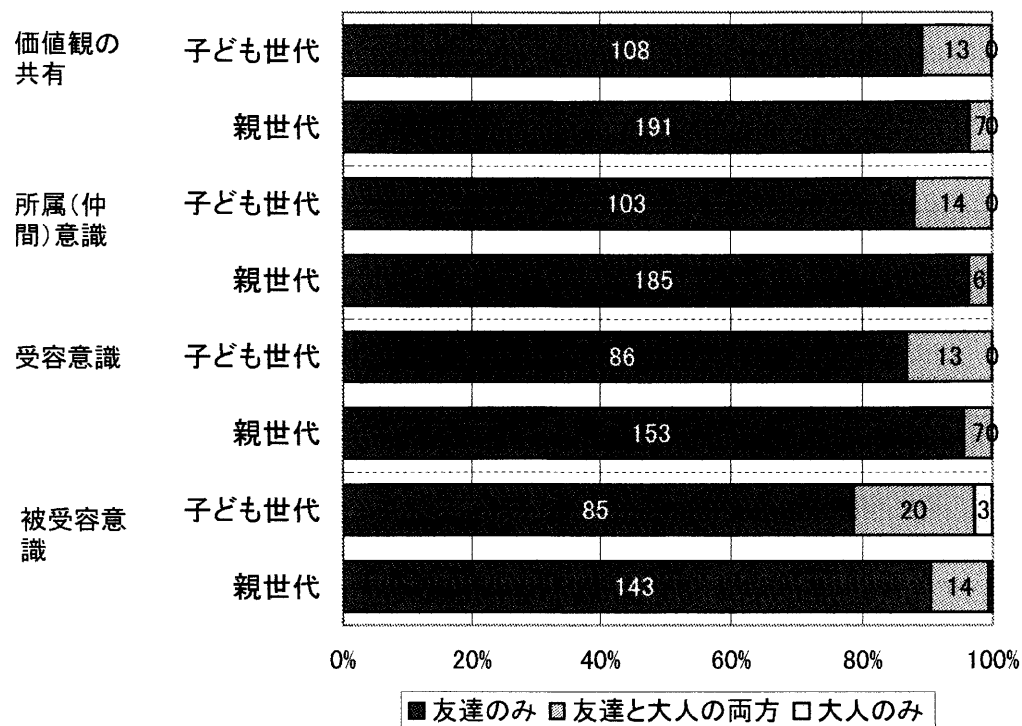


図5-3-5 地域における社会的居場所で話す相手〈世代間比較〉

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

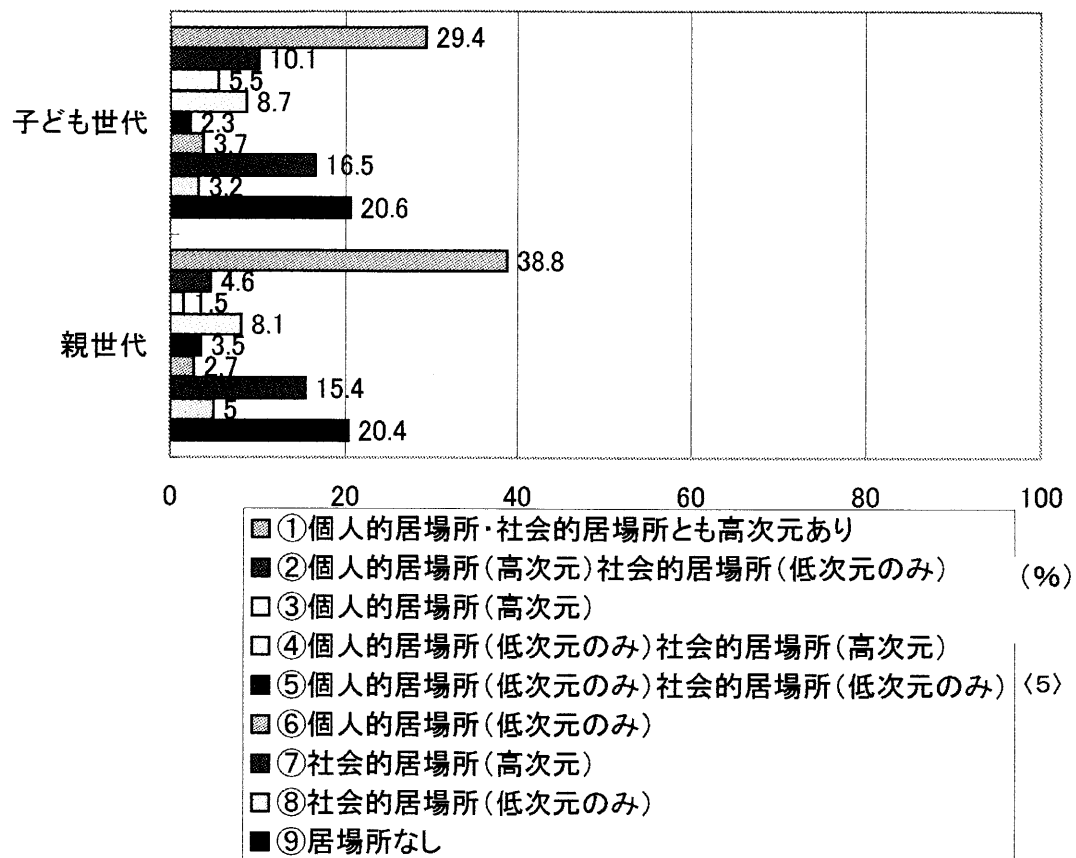


図5-3-6 地域における居場所所有の9パターン(世代間比較)

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

第六章 子ども世代における社会的居場所としての間接的なコミュニケーション

本章では、高校生の面識のない人との間接的なコミュニケーションの状況について検討する。子ども世代においては、高校生のほぼ全員が携帯電話を所有していることが明らかになり、自分専用のパソコンを所有するものもみられる。(第二章) 携帯電話やパソコンを使えば、直接相手と会わなくとも簡単にコミュニケーションをとることができる。その相手は、友達をはじめ家族や知り合いが多くを占めるであろう。しかし、それ以外にメル友やネット友達など実際には会ったことのない人と交流を持っているものの中にはいると考えられる。近年、出会い系サイト等を利用して事件に巻き込まれるという問題がおきていることも考慮しなければならないが、直接顔を合わせず交流を持てることから、人と直接話をするのが苦手なものにとってはこうした交流が心の支えになる可能性もあると思われる。また、直接的な交流を補完し、コミュニケーションツールの幅を広げる要素になると考えられる。

そこで本章では、携帯電話やパソコンを使った間接的なコミュニケーションについて、特に面識のない人との交流の実態について捉えることとする。そのため、「面識のない人との間接的なコミュニケーションの有無」と「社会的居場所としての間接的なコミュニケーションの実態」の2項目について検討する。なお、携帯電話やパソコンの普及は最近であるため、〈子ども世代〉のみの検討を行なう。

1. 面識のない人との間接的なコミュニケーションの有無

子ども世代における高校生の面識のない人との間接的なコミュニケーション経験について検討するため、面識のない人と電話やメールを使って交流したことがあるかどうか調査した。結果を図6-1に示す。

面識のない人と電話やメールを使って交流したことがあるものは、全体の約4割もいることが明らかになった。このことから、携帯電話やパソコンなどは高校生のコミュニケーションツールになりえていることが捉えられた。

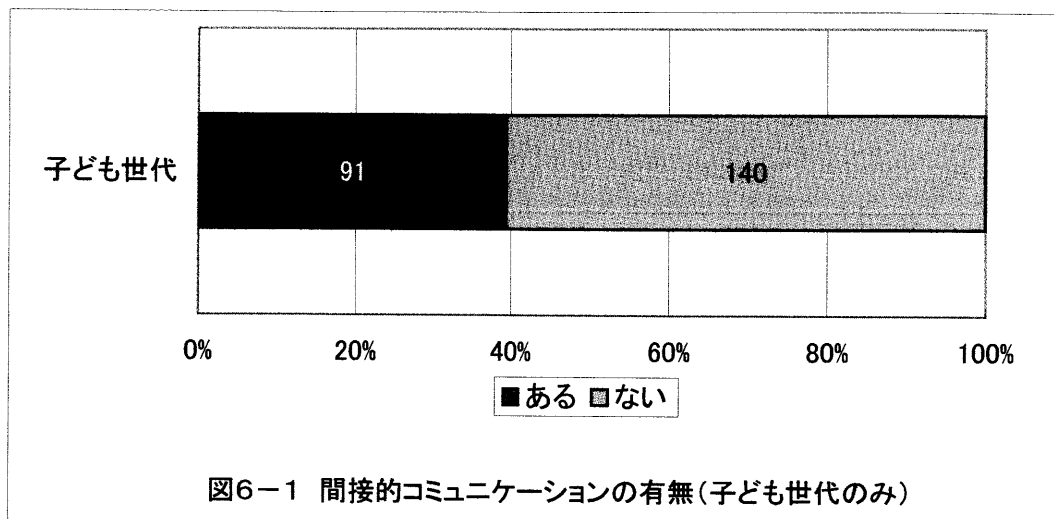
2. 社会的居場所としての間接的なコミュニケーションの実態

間接的なコミュニケーションの交流内容について検討する。交流といっても、その内容は表面的な交流から、親密な交流の様々であると考えられる。そこで、この間接的なコミュニケーションが高校生にとって社会的居場所になりえるものなのか検討する。「1. 面識のない人との間接的なコミュニケーションの有無」において、間接的なコミュニケーション経験のある者を対象に、その交流内容について、「お互いに気が合ったり、考え方が合う人との交流」【価値観の共有】、「仲間意識を感じられる人との交流」【所属(仲間)意識】、「自分を頼ってくれる人との交流」【受容意識】、「自分を受け入れてくれる人との交流」【被受容意識】の4項目の中、あてはまるもの全てを選択する方法で調査した。結果を図6-2に示す。

「お互いに気が合ったり、考え方が合う人との交流」が約7割を最も多く、社会的居場所の【価値観の共有】につながる交流は多いことが捉えられた。次いで、「仲間意識を感じられる人との交流」が約半数であり、【仲間意識】につながる交流も多いことが捉えられた。一方で、「自分を頼ってくれる人との交流」「自分を受け入れてくれる人との交流」といった、より親しい交流である高次元の社会的居場所につながっているものは少ない。特に【受容意識】につながるものは少なく、実際に会ったことのない人とは、相手を受け入れたり、頼られるような交流はあまり持たないことが捉えられた。

3. まとめ

本章では、近年の携帯電話普及やパソコン所有の層化に伴い、電話やメールを使った間接的なコミュニケーションの状況を検討した。その結果、次のようなことが明らかになった。面識のない人と電話やメールを使って交流したことがあるものは、全体の約4割もいることが明らかになった。その中、交流内容についてみると、半数以上は、社会的居場所の中で低次元の交流につながる内容であることが捉えられた。しかし、社会的居場所の高次元の交流につながる内容のものは少なく、直接会ったことのない人とはあまり親しい交流をするものは少ないことが明らかになった。これらのことから、間接的なコミュニケーションは、社会的居場所の低次元の交流においては、直接的な交流を補完するものになることが期待できよう。



※グラフ内数値は件数。

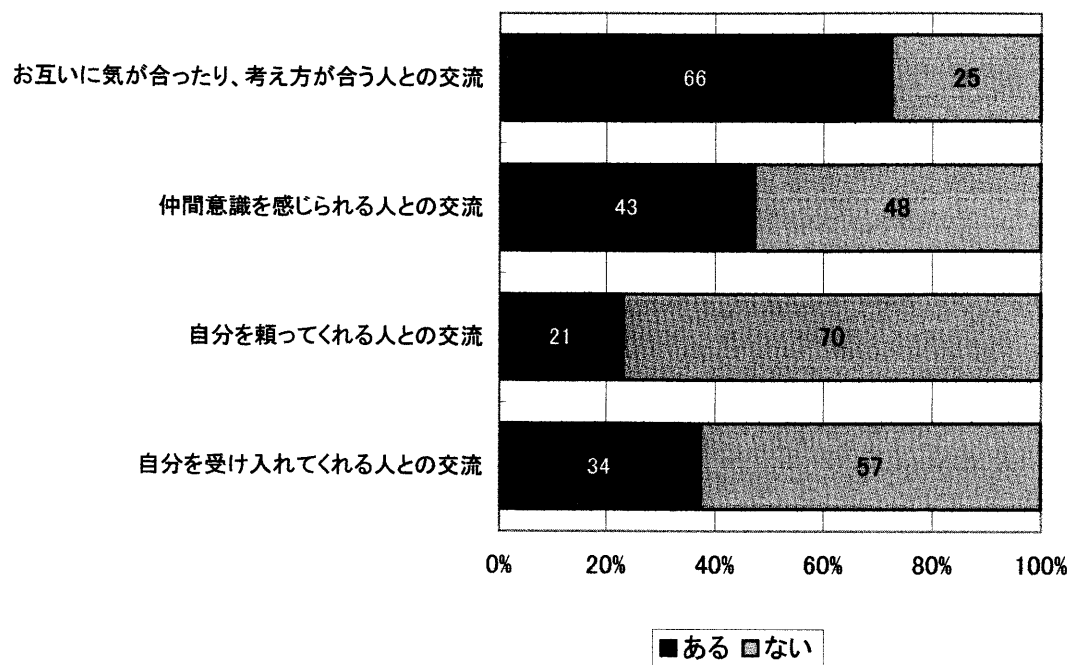


図6-2 間接的コミュニケーションにおける交流内容(子ども世代のみ)

※グラフ内数値は件数。

第七章 親世代・子ども世代比較にみる家庭・学校・地域全体における高校生の居場所の実態

本章では、高校生の居場所の実態を家庭・学校・地域全体で捉えるため、「家庭・学校・地域全体でみた高校生の居場所所有の実態」「家庭・学校・地域それぞれにおける高校生の居場所所有状況」「家庭・学校・地域間における居場所所有の関係」について検討する。

第一節 家庭・学校・地域全体でみた高校生の居場所所有の実態

高校生の居場所所有の実態について、家庭・学校・地域全体で捉えるため、それぞれの居場所の所有率を表7-1に示す。

1. 個人的居場所

個人的居場所の①～⑤項目について、家庭・学校・地域全体を通して所有実態を検討する。

①「一人になって考え事などができる場所」【精神的プライバシー行為】

両世代とも、家庭における所有率が最も高くほとんどのものが所有している。一方、学校では半数、地域においてはさらに所有率が低く、家庭における所有率と比べると低いことが明らかになった。しかし、家庭のような専用個室のない学校や地域においても、所有しているものがある程度いることが明らかになった。特に、〈子ども世代〉においては、学校における所有率が高かったことから、〈子ども世代〉の方が、家庭以外に学校でも所有できているものがやや多いことが捉えられた。

②「好きなことに集中できる場所」【心理状態の維持】

両世代とも、家庭における所有率が最も高くほとんどのものが所有している。学校においては6割所有しており、家庭よりは低いものの高い所有率であるといえる。地域では3割であり、家庭や学校と比べると所有しにくいことが捉えられた。これらのことから、「好きなことに集中できる場所」は家庭を中心に、学校においても所有できているものが多いことが明らかになった。

③「一人になってくつろぐことができる場所」【個人的な休息】

両世代とも、家庭における所有率が最も高くほとんどのものが所有している。一方、学校では半数以下、地域においてはさらに所有率が低く、家庭における所有率と比べると低いことが明らかになった。しかし、家庭のような専用個室のない学校においても、所有しているものがある程度いることが明らかになった。特に〈子ども世代〉の方が、学校における所有率が高いことから、家庭以外に学校でも所有しているものがやや多いといえる。また、地域においては所有率がかなり低く、地域ではくつろげる場所をみつけにくいことが明らかになった。地域における所有率は〈子ども世代〉の方が低かったことから、〈子ども世代〉ではさらに居場所をみつけにくいといえる。

④「大人の目を避けられる場所」【管理の目からの逃避】

両世代とも、家庭における所有率が最も高くほとんどのものが所有している。一方、学校では半数以下、地域においてはさらに所有率が低く、家庭における所有率と比べると

と低いことが明らかになった。しかし、家庭のような専用個室のない学校や地域においても、所有しているものがある程度いることが明らかになった。特に〈子ども世代〉の方が、学校における所有率が高いことから、家庭以外に学校でも所有しているものがやや多いといえる。

⑤「嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所」【心理状態の回復】

両世代とも、家庭における所有率が最も高くほとんどのものが所有している。一方、学校では半数以下、地域においてはさらに所有率が低く、家庭における所有率と比べると低いことが明らかになった。しかし、家庭のような専用個室のない学校や地域においても、所有しているものがある程度いることが明らかになった。

2. 社会的居場所

社会的居場所の⑥～⑨について、家庭・学校・地域全体を通して所有実態を検討する。

⑥「お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所」【価値観の共有】

両世代とも、学校における所有率が最も高くほとんどのものが所有している。また、家庭や地域においても所有率は高く、家庭・学校・地域を通して、居場所の所有率が高いことが明らかになった。しかし、〈子ども世代〉の方が、地域における居場所の所有率が低いことから、〈子ども世代〉では、地域のウエイトがやや低いことが捉えられた。

⑦「仲間意識を感じられる人と話をする場所」【所属（仲間）意識】

両世代とも、学校における所有率が最も高くほとんどのものが所有している。また、家庭や地域においても所有率は高く、家庭・学校・地域を通して、居場所の所有率が高いことが明らかになった。しかし、〈子ども世代〉の方が、地域における居場所の所有率が低いことから、〈子ども世代〉では、地域のウエイトがやや低いことが捉えられた。

⑧「自分を頼ってくれる人と話をする場所」【受容意識】

両世代とも、学校における所有率が最も高くほとんどのものが所有している。また、家庭や地域においても所有率は高く、家庭・学校・地域を通して、居場所の所有率が高いことが明らかになった。しかし、〈子ども世代〉の方が、地域における居場所の所有率が低いことから、〈子ども世代〉では、地域のウエイトがやや低いことが捉えられた。

⑨「自分を受け入れてくれるひとと話をする場所」【被受容意識】

両世代とも、学校における所有率が最も高くほとんどのものが所有している。また、家庭や地域においても所有率は高く、家庭・学校・地域を通して、居場所の所有率が高いことが明らかになった。

3. 本節のまとめ

以上より、個人的居場所においては、家庭ではほとんどのものが所有している状況である。家庭は子ども部屋のような、高校生が容易に一人になれる場所があるため、所有しやすいと考えられる。家庭以外では、学校において所有しているものが半数程度、地域では3割程度所有しており、専用部屋のない学校や地域においてもある程度のものは所有してい

ることが捉えられ、特に学校において所有しているものが多い。学校は、高校生が一日の大半を過ごす場所であり、個人的居場所もなんらかの形で所有しているものと考えられる。特に、〈子ども世代〉では、学校における居場所所有率が高かったことから、〈子ども世代〉は家庭以外に学校でも個人的居場所を所有しているものが比較的多いことが明らかになった。

社会的居場所においては、学校で所有しているものがほとんどであり、家庭や地域における所有率も比較的高かったことから、学校をはじめ、家庭と地域すべてにおいて、社会的居場所の所有率は高いことが捉えられた。しかし、〈子ども世代〉では地域における社会的居場所の所有率が低いことから、〈子ども世代〉の方が、社会的居場所における地域のウェイトがやや低い傾向であることが捉えられた。

第二節 家庭・学校・地域それぞれにおける高校生の居場所所有状況

家庭・学校・地域において、居場所の所有状況を捉えるため、個人的居場所と社会的居場所それぞれ、高次元の居場所を1つでも所有していれば〈高次元の居場所所有〉、高次元の居場所を所有しておらず、低次元の居場所のみ所有していれば〈低次元の居場所のみ所有〉、1つも居場所を所有していなければ〈居場所なし〉として、検討した。結果を図7-2に示す。

1. 個人的居場所

家庭、学校、地域をくらべると、両世代とも、〈高次元の居場所所有〉の割合が最も高い場所は家庭であり、次いで学校、地域と続く。家庭においては、ほとんどのものが高次元の個人的居場所を所有できており、家庭では個人的居場所を十分に所有できていることが捉えられた。学校においては、高次元の個人的居場所を所有できているものが最も多いが、〈低次元の居場所のみ所有〉や〈居場所なし〉のものもそれぞれ約2割ずつおり、家庭ほど十分に居場所を所有できていない。地域においては、〈高次元の居場所所有〉と〈居場所なし〉が同程度であり、個人的居場所を全く所有できていないものも多いことが明らかになった。

世代別にみると、学校における個人的居場所の所有状況において、カイ二乗検定における1%水準の有意差、順位相関係数における1%水準の有意性があり、世代でやや違いがみられた。〈子ども世代〉の方が、〈高次元の居場所所有〉が多く、〈居場所なし〉は少ないことが捉えられ、〈子ども世代〉の方が学校に個人的居場所を十分に所有しているものが多いことが明らかになった。なお、家庭と地域においては世代による違いはみられなかった。

2. 社会的居場所

家庭、学校、地域をくらべると、両世代とも、〈高次元の居場所所有〉の割合が最も高い場所は学校であり、次いで家庭、地域と続く。学校においては、ほとんどのものが高次元の社会的居場所を所有できており、学校では社会的居場所を十分に所有できていることが捉えられた。家庭においても、学校に続いて、多くのものが高次元の社会的居場所を所

有している。地域においては、学校や家庭とくらべると、高次元の社会的居場所を所有しているものはやや少なく、＜居場所なし＞も約 3 割と多いことが捉えられた。これは、地域は家庭や学校よりも過ごす時間が短いためと考えられる。

世代別にみると、地域における社会的居場所の所有状況において、順位相関係数における 10%水準の有意性があり、世代で若干違いがみられた。〈子ども世代〉の方が、＜居場所なし＞が多く〈子ども世代〉の方が地域に社会的居場所を十分に所有できていないものが若干多いことが捉えられた。

3. 本節のまとめ

以上より、家庭、学校、地域をくらべると、両世代とも、個人的居場所の所有状況は、家庭が最も良く、次いで学校、地域と続く。学校と地域においては、個人的居場所を全く所有しないものも 2～4 割もいることが明らかになった。〈子ども世代〉においては、学校でも個人的居場所を十分に所有しているものが多く、個人的居場所における学校のウェイトもやや高いことが捉えられた。

社会的居場所の所有状況は、学校が最も良く、家庭でも良いものが多いことが明らかになった。地域においても比較的所有状況は良いが、社会的居場所を全く所有しないものも多いことが捉えられた。

第三節 家庭・学校・地域間における居場所所有の関係

これまで、居場所所有の実態について、家庭・学校・地域それぞれで検討してきた。しかし、居場所所有はそれぞれが関連なく存在しているのではなく、家庭・学校・地域間で相互に関連し合い、補完関係があると思われる。この補完関係は大きく 2 種類考えられ、「拡張型補完」と「代替型補完」がそれにあたる。「拡張型補完」とは、例えば、家庭・学校に居場所を所有していることが地域にも居場所を所有することにつながっているというような、居場所所有が拡大していく構造をもつものである。一方、「代替型補完」とは、例えば、家庭や学校には居場所を所有しない代わりに、地域には居場所を所有しているというような、家庭・学校・地域間で居場所所有を補い合う構造をもつものである。そこで、まず、「家庭と学校」「家庭と地域」「学校と地域」における居場所所有の関係について検討する。

1. 家庭と学校間における居場所所有の関係

家庭と学校間における居場所所有の関係を明らかにするため、個人的居場所の 5 項目と社会的居場所の 4 項目それぞれ、家庭における所有と学校における所有との関連を検討した。結果を図 7-3-1-1～9 に示す。

(1) 個人的居場所

①「一人になって考え事などができる場所」【精神的プライバシー行為】

図 7-3-1-1 に示すように、両世代とも家庭と学校間における居場所所有において、検定における有意差、有意性はみられなかったものの、家庭に居場所を所有しているものの方が、学校に居場所を所有しているものが多いという傾向がみられ、「拡張型補完」の傾向が捉え

られた。

②「好きなことに集中できる場所」【心理状態の維持】

図 7-3-1-2 に示すように、両世代とも家庭と学校間における居場所所有において、検定における有意差、有意性はみられなかったものの、家庭に居場所を所有しているものの方が、学校に居場所を所有しているものが多いという傾向がみられ、「拡張型補完」の傾向が捉えられた。

③「一人になってくつろぐことができる場所」【個人的な休息】

図 7-3-1-3 に示すように、〈親世代〉においてはカイ二乗検定において 5%水準の有意差、順位相関係数において 1%水準の有意性があり、家庭と学校間における居場所所有に関連がややみられた。家庭に居場所を所有しているものの方が、学校に居場所を所有しているものが多いという、「拡張型補完」の特徴が捉えられた。〈子ども世代〉においても、検定による有意差、有意性はなかったが、同様の傾向であり、「拡張型補完」の傾向がみられた。

④「大人の目を避けられる場所」【管理の目からの逃避】

図 7-3-1-4 に示すように、〈子ども世代〉においてはカイ二乗検定において 5%水準の有意差、順位相関係数において 5%水準の有意性があり、家庭と学校間における居場所所有に関連がややみられた。家庭に居場所を所有しているものの方が、学校に居場所を所有しているものが多いという、「拡張型補完」の特徴が捉えられた。〈親世代〉においても、検定による有意差、有意性はなかったが、同様の傾向であり、「拡張型補完」の傾向がみられた。

⑤「嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所」【心理状態の回復】

図 7-3-1-5 に示すように、両世代とも家庭と学校間における居場所所有において、検定における有意差、有意性はみられなかったものの、家庭に居場所を所有しているものの方が、学校に居場所を所有しているものが多いという傾向がみられ、「拡張型補完」の傾向が捉えられた。

(2) 社会的居場所

⑥「お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所」【価値観の共有】

図 7-3-1-6 に示すように、〈子ども世代〉においては、カイ二乗検定において 5%水準の有意差、順位相関係数において 10%水準の有意性があり、〈親世代〉ではカイ二乗検定において 10%水準の有意差があり、家庭と学校間における居場所所有に関連がややみられた。家庭に居場所を所有しているものの方が、学校に居場所を所有しているものが多いという、「拡張型補完」の特徴が捉えられた。

⑦「仲間意識を感じられる人と話をする場所」【所属（仲間）意識】

図 7-3-1-7 に示すように、〈子ども世代〉においては、カイ二乗検定において 1%水準の有意差、順位相関係数において 5%水準の有意性があり、〈親世代〉ではカイ二乗検定において 10%水準の有意差があり、家庭と学校間における居場所所有に関連がややみられた。家庭に居場所を所有しているものの方が、学校に居場所を所有しているものが多いという、「拡張型補完」の特徴が捉えられた。

⑧「自分を頼ってくれる人と話をする場所」【受容意識】

図 7-3-1-8 に示すように、〈子ども世代〉においては、カイ二乗検定において 5%水準の有意差、順位相関係数において 5%水準の有意性があり、〈親世代〉ではカイ二乗検定において 1%水準の有意差、順位相関係数において 1%水準の有意性があり、家庭と学校間における居場所所有に関連がみられた。家庭に居場所を所有しているものの方が、学校に居場所を所有しているものが多いという、「拡張型補完」の特徴が捉えられた。

⑨「自分を受け入れてくれるひとと話をする場所」【被受容意識】

図 7-3-1-9 に示すように、〈子ども世代〉においては、カイ二乗検定において 1%水準の有意差、順位相関係数において 1%水準の有意性があり、〈親世代〉ではカイ二乗検定において 1%水準の有意差、順位相関係数において 5%水準の有意性があり、家庭と学校間における居場所所有に関連がみられた。家庭に居場所を所有しているものの方が、学校に居場所を所有しているものが多いという、「拡張型補完」の特徴が捉えられた。

以上より、家庭と学校間における居場所の所有関係は、個人的居場所と社会的居場所ともに「拡張型補完」の特徴が捉えられ、特に社会的居場所において強い傾向であることが捉えられた。

2. 家庭と地域間における居場所所有の関係

家庭と地域間における居場所所有の関係を明らかにするため、個人的居場所の 5 項目と社会的居場所の 4 項目それぞれ、家庭における所有と地域における所有との関連を検討した。結果を図 7-3-2-1～9 に示す。

(1) 個人的居場所

①「一人になって考え事などができる場所」【精神的プライバシー行為】

図 7-3-2-1 に示すように、〈親世代〉においては、カイ二乗検定において 10%水準の有意差があり、家庭と地域間における居場所所有にやや関連がみられた。家庭に居場所を所有しているものの方が、地域に居場所を所有しているものが多いという、「拡張型補完」の特徴が捉えられた。〈子ども世代〉においては、特に関連はみられなかった。

②「好きなことに集中できる場所」【心理状態の維持】

図 7-3-2-2 に示すように、〈親世代〉においては、カイ二乗検定において 10%水準の有意差、順位相関係数において 5%水準の有意性があり、家庭と地域間における居場所所有にやや関連がみられた。家庭に居場所を所有しているものの方が、地域に居場所を所有しているものが多いという、「拡張型補完」の特徴が捉えられた。〈子ども世代〉においても、検定による有意差、有意性はなかったが、同様の傾向であり、「拡張型補完」の傾向がみられた。

③「一人になってくつろぐことができる場所」【個人的な休息】

図 7-3-2-3 に示すように、両世代ともに検定による有意差、有意性はなく関連は弱い。〈親

世代〉においては、関連は弱いものの、「拡張型補完」の傾向がみられた。〈子ども世代〉においては、特に関連はみられなかった。

④「大人の目を避けられる場所」【管理の目からの逃避】

図 7-3-2-4 に示すように、〈子ども世代〉においては、カイ二乗検定において 1%水準の有意差、順位相関係数において 1%水準の有意性があり、家庭と地域間における居場所所有に関連がみられた。家庭に居場所を所有しているものの方が、地域に居場所を所有しているものが多いという、「拡張型補完」の特徴が捉えられた。〈親世代〉においても、検定による有意差、有意性はなかったが、同様の傾向であり、「拡張型補完」の傾向がみられた。

⑤「嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所」【心理状態の回復】

図 7-3-2-5 に示すように、両世代とも検定による有意差、有意性はなく、関連は弱い、家庭に居場所を所有しているものの方が、地域に居場所を所有しているものが多いという、「拡張型補完」の傾向がややみられた。

(2) 社会的居場所

⑥「お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所」【価値観の共有】

図 7-3-2-6 に示すように、両世代とも検定による有意差、有意性はなく、関連は弱い、家庭に居場所を所有しているものの方が、地域に居場所を所有しているものが多いという、「拡張型補完」の傾向がややみられた。

⑦「仲間意識を感じられる人と話をする場所」【所属（仲間）意識】

図 7-3-2-7 に示すように、〈子ども世代〉においては、カイ二乗検定において 1%水準の有意差、順位相関係数において 1%水準の有意性があり、家庭と地域間における居場所所有に関連がみられた。家庭に居場所を所有しているものの方が、地域に居場所を所有しているものが多いという、「拡張型補完」の特徴が捉えられた。〈親世代〉においても、検定による有意差、有意性はなかったが、同様の傾向であり、「拡張型補完」の傾向がみられた。

⑧「自分を頼ってくれる人と話をする場所」【受容意識】

図 7-3-2-8 に示すように、〈子ども世代〉においては、カイ二乗検定において 5%水準の有意差、順位相関係数において 1%水準の有意性があり、〈親世代〉ではカイ二乗検定において 1%水準の有意差、順位相関係数において 1%水準の有意性があり、家庭と地域間における居場所所有に関連がみられた。家庭に居場所を所有しているものの方が、地域に居場所を所有しているものが多いという、「拡張型補完」の特徴が捉えられた。

⑨「自分を受け入れてくれるひとと話をする場所」【被受容意識】

図 7-3-2-9 に示すように、〈子ども世代〉においては、カイ二乗検定において 10%水準の有意差、順位相関係数において 10%水準の有意性があり、家庭と地域間における居場所所有に関連がみられた。家庭に居場所を所有しているものの方が、地域に居場所を所有しているものがやや多いという、「拡張型補完」の特徴が捉えられた。〈親世代〉においても、検定による有意差、有意性はなかったが、同様の傾向であり、「拡張型補完」の傾向がみられた。

以上より、家庭と地域間における居場所所有の関係は、「拡張型補完」の傾向がみられたが、個人的居場所については、家庭と学校間における居場所所有の関係とくらべると、あまり関連は強くないことが捉えられた。

3. 学校と地域間における居場所所有の関係

学校と地域間における居場所所有の関係を明らかにするため、個人的居場所の5項目と社会的居場所の4項目それぞれ、学校における所有と地域における所有との関連を検討した。結果を図7-3-3-1～9に示す。

(1) 個人的居場所

①「一人になって考え事などができる場所」【精神的プライバシー行為】

図7-3-3-1に示すように、〈子ども世代〉においては、カイ二乗検定において1%水準の有意差、順位相関係数において1%水準の有意性があり、〈親世代〉ではカイ二乗検定において1%水準の有意差、順位相関係数において1%水準の有意性があり、学校と地域間における居場所所有に関連がみられた。学校に居場所を所有しているものの方が、地域に居場所を所有しているものが多いという、「拡張型補完」の特徴が捉えられた。

②「好きなことに集中できる場所」【心理状態の維持】

図7-3-3-2に示すように、〈子ども世代〉においては、カイ二乗検定において1%水準の有意差、順位相関係数において1%水準の有意性があり、〈親世代〉ではカイ二乗検定において1%水準の有意差、順位相関係数において1%水準の有意性があり、学校と地域間における居場所所有に関連がみられた。学校に居場所を所有しているものの方が、地域に居場所を所有しているものが多いという、「拡張型補完」の特徴が捉えられた。

③「一人になってくつろぐことができる場所」【個人的な休息】

図7-3-3-3に示すように、〈子ども世代〉においては、カイ二乗検定において5%水準の有意差、順位相関係数において5%水準の有意性があり、〈親世代〉ではカイ二乗検定において1%水準の有意差、順位相関係数において1%水準の有意性があり、学校と地域間における居場所所有に関連がみられた。学校に居場所を所有しているものの方が、地域に居場所を所有しているものが多いという、「拡張型補完」の特徴が捉えられた。

④「大人の目を避けられる場所」【管理の目からの逃避】

図7-3-3-4に示すように、〈子ども世代〉においては、カイ二乗検定において1%水準の有意差、順位相関係数において1%水準の有意性があり、〈親世代〉ではカイ二乗検定において1%水準の有意差、順位相関係数において1%水準の有意性があり、学校と地域間における居場所所有に関連がみられた。学校に居場所を所有しているものの方が、地域に居場所を所有しているものが多いという、「拡張型補完」の特徴が捉えられた。

⑤「嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所」【心理状態の回復】

図7-3-3-5に示すように、〈子ども世代〉においては、カイ二乗検定において1%水準の

有意差、順位相関係数において 1%水準の有意性があり、〈親世代〉ではカイ二乗検定において 1%水準の有意差、順位相関係数において 1%水準の有意性があり、学校と地域間における居場所所有に関連がみられた。学校に居場所を所有しているものの方が、地域に居場所を所有しているものが多いという、「拡張型補完」の特徴が捉えられた。

(2) 社会的居場所

⑥「お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所」【価値観の共有】

図 7-3-3-6 に示すように、〈子ども世代〉においては、カイ二乗検定において 1%水準の有意差、順位相関係数において 1%水準の有意性があり、〈親世代〉ではカイ二乗検定において 1%水準の有意差、順位相関係数において 1%水準の有意性があり、学校と地域間における居場所所有に強い関連がみられた。学校に居場所を所有しているものの方が、地域に居場所を所有しているものが多いという、「拡張型補完」の特徴が捉えられた。

⑦「仲間意識を感じられる人と話をする場所」【所属（仲間）意識】

図 7-3-3-7 に示すように、〈子ども世代〉においては、カイ二乗検定において 1%水準の有意差、順位相関係数において 1%水準の有意性があり、〈親世代〉ではカイ二乗検定において 1%水準の有意差、順位相関係数において 1%水準の有意性があり、学校と地域間における居場所所有に強い関連がみられた。学校に居場所を所有しているものの方が、地域に居場所を所有しているものが多いという、「拡張型補完」の特徴が捉えられた。

⑧「自分を頼ってくれる人と話をする場所」【受容意識】

図 7-3-3-8 に示すように、〈子ども世代〉においては、カイ二乗検定において 1%水準の有意差、順位相関係数において 1%水準の有意性があり、〈親世代〉ではカイ二乗検定において 1%水準の有意差、順位相関係数において 1%水準の有意性があり、学校と地域間における居場所所有に強い関連がみられた。学校に居場所を所有しているものの方が、地域に居場所を所有しているものが多いという、「拡張型補完」の特徴が捉えられた。

⑨「自分を受け入れてくれるひとと話をする場所」【被受容意識】

図 7-3-3-9 に示すように、〈子ども世代〉においては、カイ二乗検定において 1%水準の有意差、順位相関係数において 1%水準の有意性があり、〈親世代〉ではカイ二乗検定において 1%水準の有意差、順位相関係数において 1%水準の有意性があり、学校と地域間における居場所所有に強い関連がみられた。学校に居場所を所有しているものの方が、地域に居場所を所有しているものが多いという、「拡張型補完」の特徴が捉えられた。

以上より、学校と地域間の居場所所有の関係は、個人的居場所と社会的居場所ともに「拡張型補完」の特徴が捉えられ、特に社会的居場所については、強い関連がみられた。

4. 家庭・学校・地域間の代替型補完構造の検討

次に、居場所を所有していないものに注目し、家庭・学校・地域間の代替補完構造を検討する。これまでも述べたように、個人的居場所は家庭を中心に所有しており、社会的

居場所は学校を中心に所有していることから、個人的居場所の中心な場所は家庭、社会的居場所の中心な場所は学校であるといえる。この中心な場所に居場所を所有していない場合、他の場が代替補完できているのかを本項（１）（２）で検討する。また、子どもの居場所づくりにおいて、家庭や学校以外の地域に居場所を設けようとする動きがあることから^{1) 2)}、社会的居場所については、地域を軸にした検討も行なう（本項（３））。

（１） 家庭における個人的居場所の代替補完

個人的居場所の 5 項目について、家庭に個人的居場所を所有していないものを対象に、どこに居場所を所有しているのか検討し、結果を図 7-3-4-1 に示す。

家庭に個人的居場所を所有していないものの半数以上は、「どこにもない」としており、家庭になれば個人的居場所を所有することは困難であることが捉えられた。補完できているものは、学校のみが補完するもの、地域のみが補完するもの、学校と地域の両方が補完するものの 3 タイプみられた。なお、家庭に個人的居場所のないものは、サンプル数自体少ないため、代替型補完の構造をさらに分析することは困難である。今後、さらにサンプル数を増やし、検討する必要がある。

（２） 学校における社会的居場所の代替補完

社会的居場所の 4 項目について、学校に社会的居場所を所有していないものを対象に、どこに居場所を所有しているのか検討し、結果を図 7-3-4-2 に示す。

学校に社会的居場所を所有していないものの半数以上は、家庭や地域で代替補完できていることが捉えられた。その中で、家庭のみが補完しているものが多く、地域のみが補完しているものは少ないことが明らかになった。このことから、学校における社会的居場所は家庭が補完しているウエイトが高いことが捉えられた。

（３） 地域における社会的居場所の代替補完

社会的居場所の 4 項目について、地域に社会的居場所を所有していないものを対象に、どこに居場所を所有しているのか検討し、結果を図 7-3-4-3 に示す。

地域に社会的居場所を所有できていなくとも、ほとんどのものが家庭と学校両方で所有していることが捉えられ、地域に居場所がなくても、他の場所では居場所を所有しているものがほとんどであることが明らかになった。

5. 本節のまとめ

本節では、家庭・学校・地域間における居場所所有の関係を検討した。その結果、以下のことが明らかになった。

家庭・学校・地域間における居場所所有の関係をみると、個人的居場所と社会的居場所ともに、「拡張型補完」の傾向であることが明らかになり、居場所を所有することが、他の場所で居場所を所有することにつながっていることが捉えられた。特に、学校と地域間の社会的居場所の所有関係で「拡張型補完」の傾向が顕著に表れており、学校と地域間では居場所所有の関連が強いことが明らかになった。これは、学校と地域における社会的居場所で交流する相手はほとんどが友達であり、地域において本音で話す相手も「学校の友達」

が多いということから、学校での交流が地域に波及している考えられる。

次に、居場所のないものを対象に検討し、代替型補完の構造をみた結果、個人的居場所においては、中心的な家庭に所有できていないものは、他の場所で代替補完をすることは困難であることが捉えられた。なお、家庭に個人的居場所のないサンプルの数が少数であったため、「代替型補完」の構造をさらに追及するには至らなかったため、今後の課題となる。社会的居場所においては、中心的な学校に所有できていないものは、主に家庭がその代わりを果たしている傾向が捉えられた。また、地域に社会的居場所がない場合をみると、家庭や学校には所有できているものがほとんどであり、地域に居場所がなくても、他の場所で所有できていることが明らかになった。地域においては、家庭や学校に居場所がないものの受け皿にするため、居場所づくり事業がなされたり、施設が作られたりといった試みがされてきている。しかし、本調査結果からは、地域が他の場所を補完するような傾向はみられず、地域は家庭や学校の居場所を補完する役割を果たすには至っていないことが捉えられた。

第四節 本章のまとめ

本章では、高校生の居場所の実態を家庭・学校・地域全体で捉えるため、「家庭・学校・地域全体でみた高校生の居場所所有の実態」「家庭・学校・地域それぞれにおける高校生の居場所所有状況」「家庭・学校・地域間における居場所所有の関係」について検討した。その結果、以下のことが明らかになった。

1. 家庭・学校・地域全体でみた高校生の居場所所有の実態については、個人的居場所においては、家庭ではほとんどのものが所有している状況である。家庭は子ども部屋のような、高校生が容易に一人になれる場所があるため、所有しやすいと考えられる。家庭以外では、学校において所有しているものが半数程度、地域では3割程度所有しており、専用部屋のない学校や地域においてもある程度のものは所有していることが捉えられ、特に学校において所有しているものが多い。学校は、高校生が一日の大半を過ごす場所であり、個人的居場所もなんらかの形で所有しているものと考えられる。特に、〈子ども世代〉では、学校における居場所所有率が高かったことから、〈子ども世代〉は家庭以外に学校でも個人的居場所を所有しているものが比較的多いことが明らかになった。

社会的居場所においては、学校で所有しているものがほとんどであり、家庭や地域における所有率も比較的高かったことから、学校をはじめ、家庭と地域すべてにおいて、社会的居場所の所有率は高いことが捉えられた。しかし、〈子ども世代〉では地域における社会的居場所の所有率が低いことから、〈子ども世代〉の方が、社会的居場所における地域のウェイトがやや低い傾向であることが捉えられた。

2. 家庭・学校・地域それぞれにおける高校生の居場所所有状況については、家庭、学校、地域をくらべると、両世代とも、個人的居場所の所有状況は、家庭が最も良く、次い

で学校、地域と続く。学校と地域においては、個人的居場所を全く所有しないものも2～4割もいることが明らかになった。〈子ども世代〉においては、学校でも個人的居場所を十分に所有しているものが多く、個人的居場所における学校のウエイトもやや高いことが捉えられた。

社会的居場所の所有状況は、学校が最も良く、家庭でも良いものが多いことが明らかになった。地域においても比較的所有状況は良いが、社会的居場所を全く所有しないものも多いことが捉えられた。

3. 家庭・学校・地域間における居場所所有の関係については、家庭・学校・地域間における居場所所有の関係をみると、個人的居場所と社会的居場所ともに、「拡張型補完」の傾向であることが明らかになり、居場所を所有することが、他の場所で居場所を所有することにつながっていることが捉えられた。特に、学校と地域間の社会的居場所の所有関係で「拡張型補完」の傾向が顕著に表れており、学校と地域間では居場所所有の関連が強いことが明らかになった。これは、学校と地域における社会的居場所で交流する相手はほとんどが友達であり、地域において本音で話す相手も「学校の友達」が多いということから、学校での交流が地域に波及していると考えられる。

次に、居場所のないものを対象に検討し、代替型補完の構造をみた結果、個人的居場所においては、中心的な家庭に所有できていないものは、他の場所で代替補完をすることは困難であることが捉えられた。なお、家庭に個人的居場所のないサンプルの数が少数であることから、「代替型補完」の構造をさらに追及するには至らなかったため、今後の課題となる。社会的居場所においては、中心的な学校に所有できていないものは、主に家庭がその代わりを果たしている傾向が捉えられた。また、地域に社会的居場所がない場合をみると、家庭や学校には所有できているものがほとんどであり、地域に居場所がなくても、他の場所で所有できていることが明らかになった。地域においては、家庭や学校に居場所がないものの受け皿にするため、居場所づくり事業がなされたり、施設が作られたりといった試みがされてきている。しかし、本調査結果からは、地域が他の場所を補完するような傾向はみられず、地域は家庭や学校の居場所を補完する役割を果たすには至っていないことが捉えられた。

<注>

- 1) 添田 他「中・高校生の新しい居場所をめざして ～」児童育成研究、2001年
- 2) 加藤 真樹「子ども参画による中・高校生の居場所づくり―」「子どもゼミナル」論文集（平成13年度）、2002年

表7-1 家庭・学校・地域における高校生の居場所の所有率

			家庭		学校		地域	
			子ども 世代	親世代	子ども 世代	親世代	子ども 世代	親世代
個人的居場所	精神的プライバシー行為	一人になって考え事などができる場所	9.5割	9.5割	5割	4割	3割	3割
	心理状態の維持	好きなことに集中できる場所	9.5割	9.5割	6割	6割	3割	3割
	個人的な休息	一人になってくつろぐことができる場所	9割	9割	4割	3割	1割	2割
	管理の目からの逃避	大人の目を避けられる場所	9割	9割	5.5割	4割	3割	3割
	心理状態の回復	嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所	9割	9割	4.5割	4.5割	3割	3割
社会的居場所	価値観の共有	お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所	8割	8割	9.5割	9.5割	6割	7割
	所属（仲間）意識	仲間意識を感じられる人と話をする場所	8割	8割	9.5割	9.5割	6割	7割
	受容意識	自分を頼ってくれる人と話をする場所	6割	6割	9割	9割	5割	6割
	被受容意識	自分を受け入れてくれる人と話をする場所	8割	8割	9割	9割	5割	5割

176

・・・〈子ども世代〉の所有率が高いもの

・・・〈親世代〉の所有率が高いもの

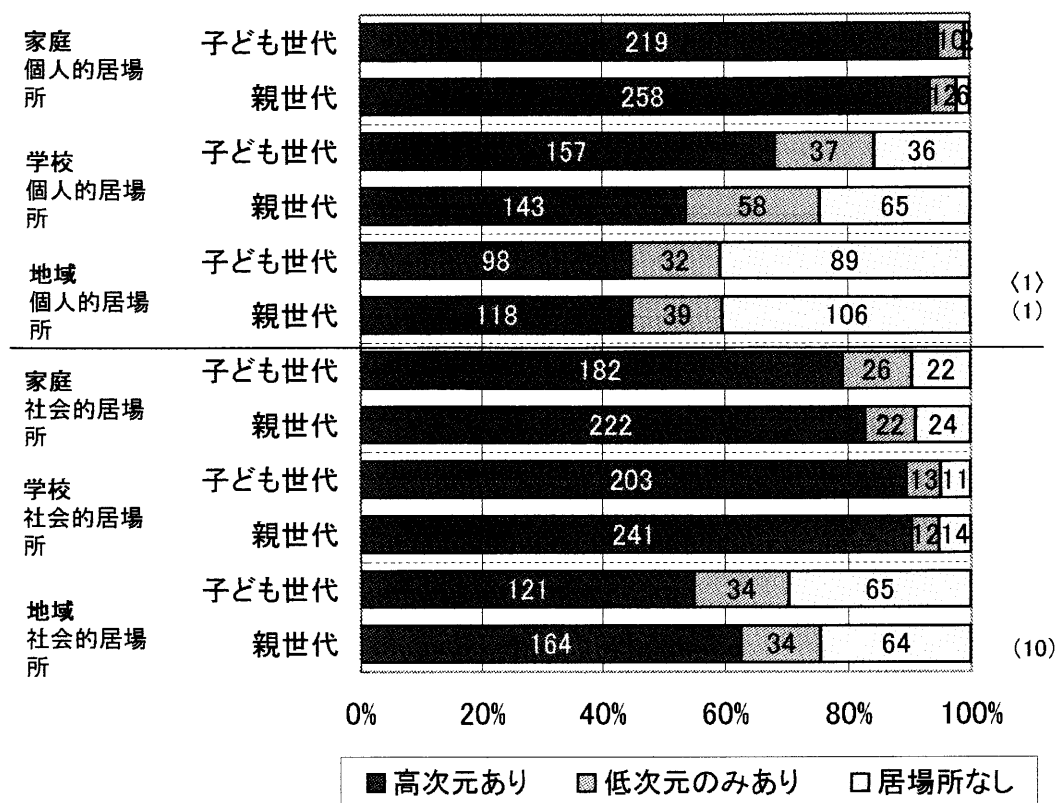


図7-2 家庭・学校・地域における居場所所有<世代間比較>

※グラフ内数値は件数。

<>内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

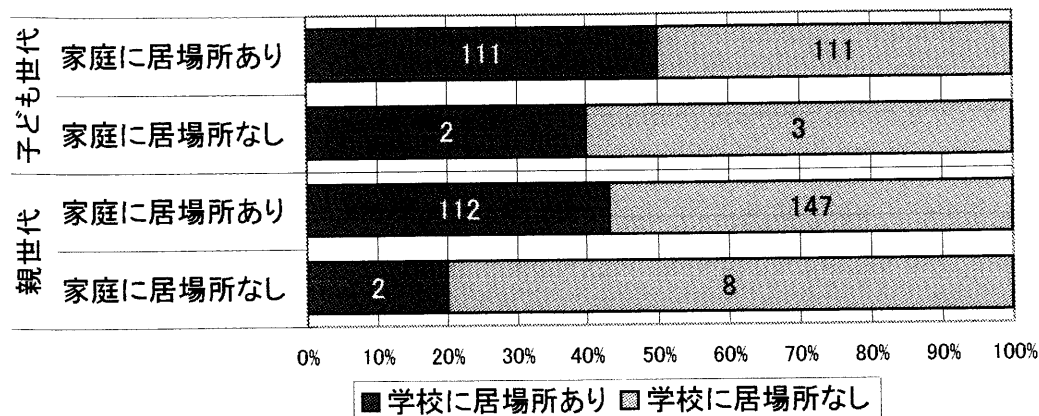


図7-3-1-1 家庭と学校における個人的居場所1の所有関係
(両世代)

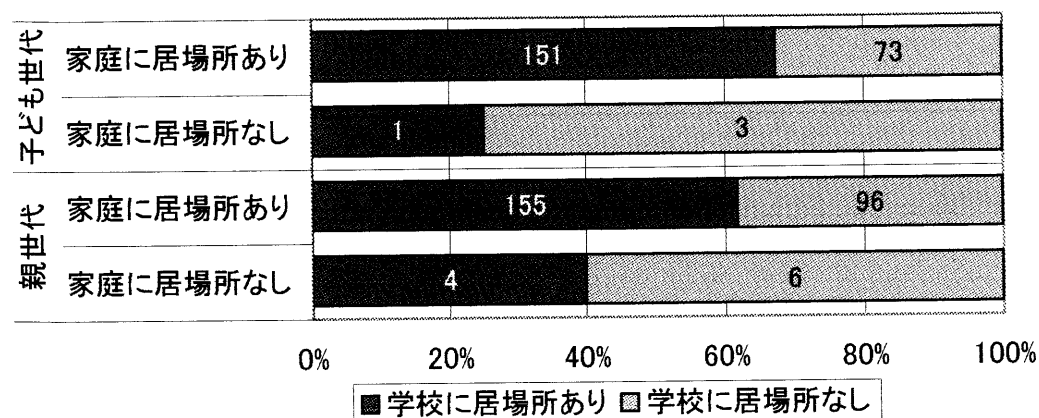


図7-3-1-2 家庭と学校における個人的居場所2の所有関係
(両世代)

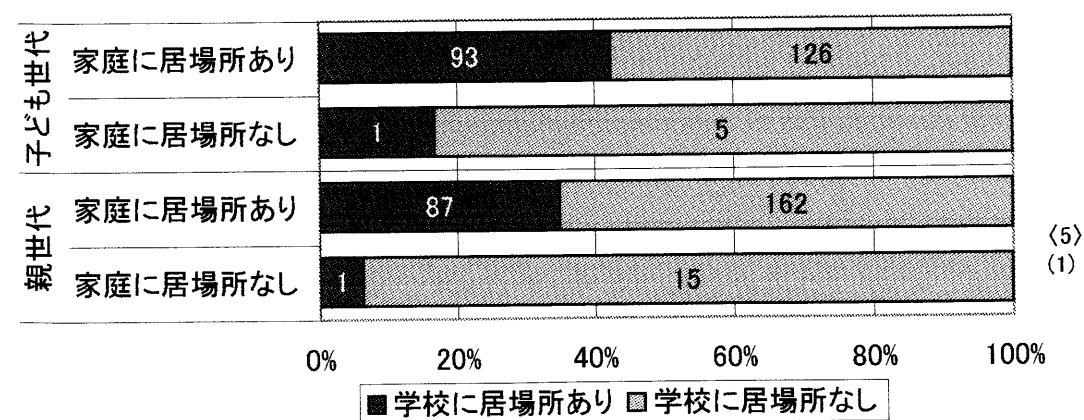


図7-3-1-3 家庭と学校における個人的居場所3の所有関係
(両世代)

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。
()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

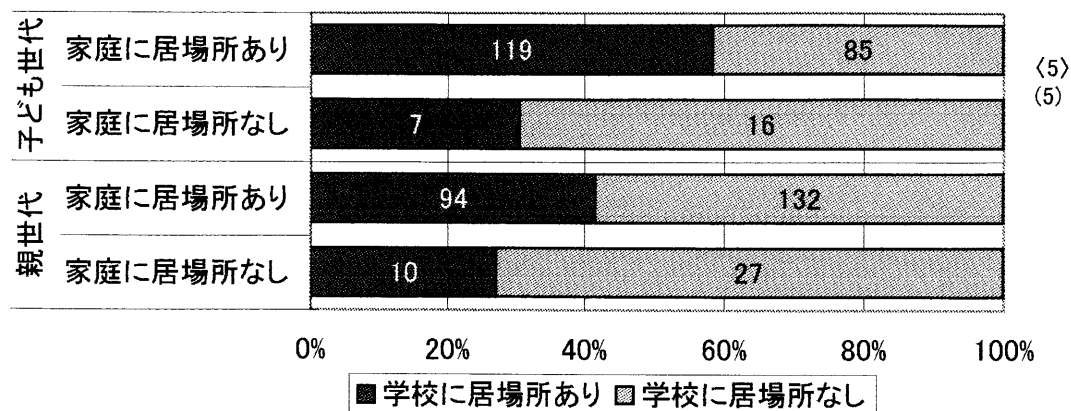


図7-3-1-4 家庭と学校における個人的居場所4の所有関係
(両世代)

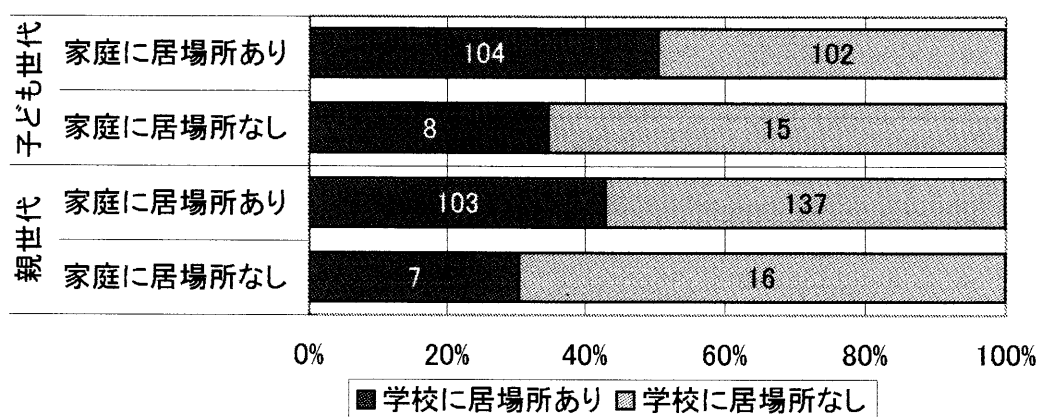


図7-3-1-5 家庭と学校における個人的居場所5の所有関係
(両世代)

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

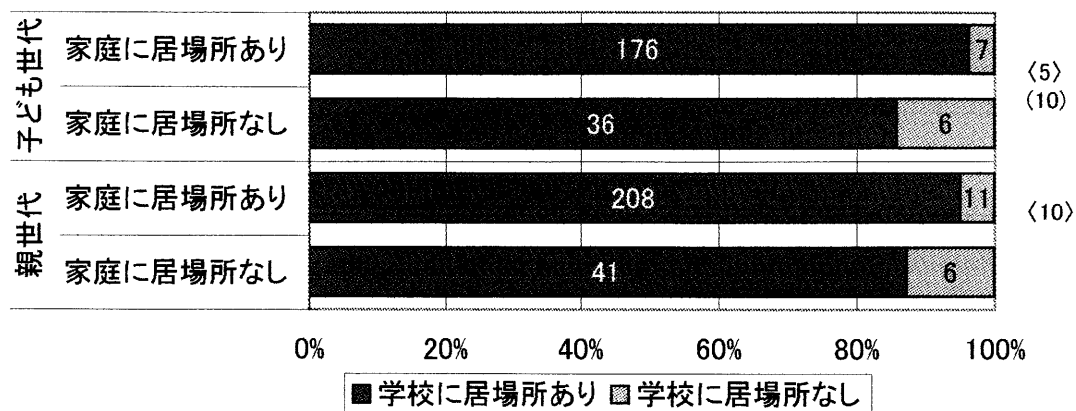


図7-3-1-6 家庭と学校における社会的居場所6の所有関係
(両世代)

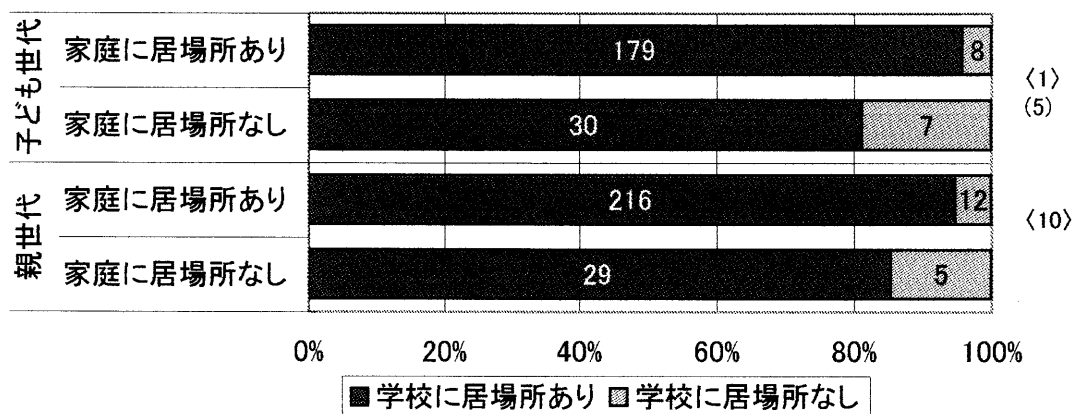


図7-3-1-7 家庭と学校における社会的居場所7の所有関係
(両世代)

※グラフ内数値は件数。

<>内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

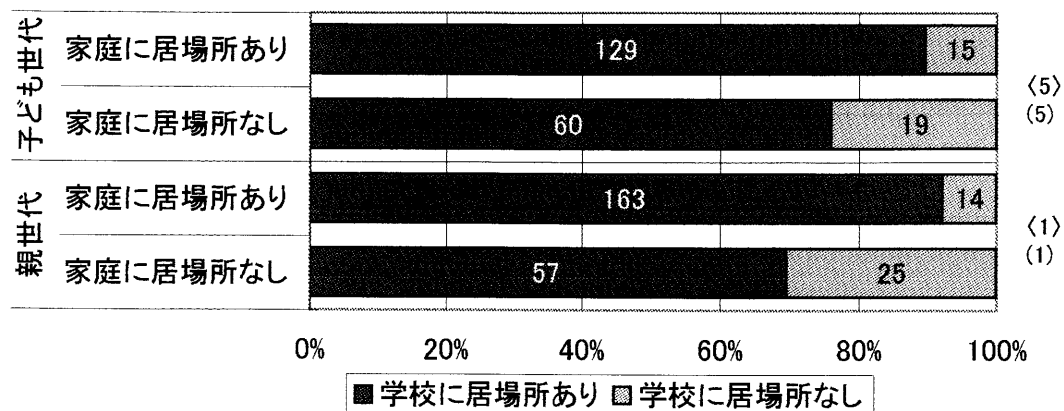


図7-3-1-8 家庭と学校における社会的居場所8の所有関係
(両世代)

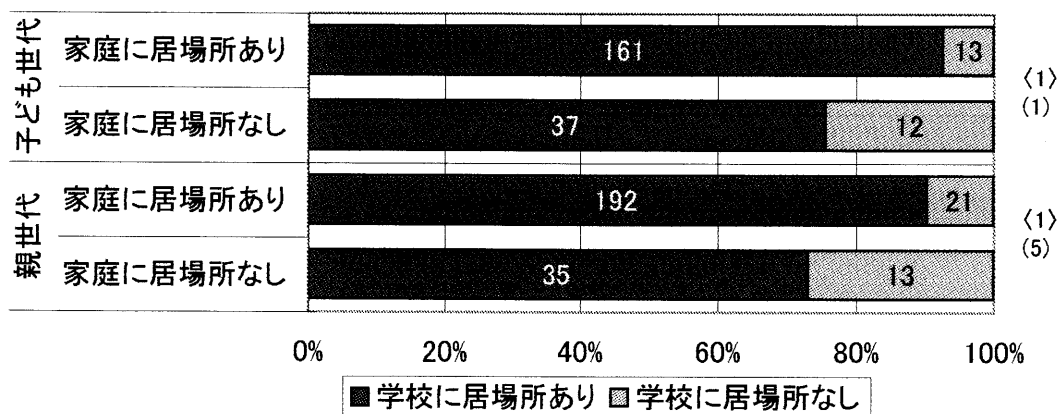


図7-3-1-9 家庭と学校における個人的居場所1の所有関係
(両世代)

※グラフ内数値は件数。

<内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

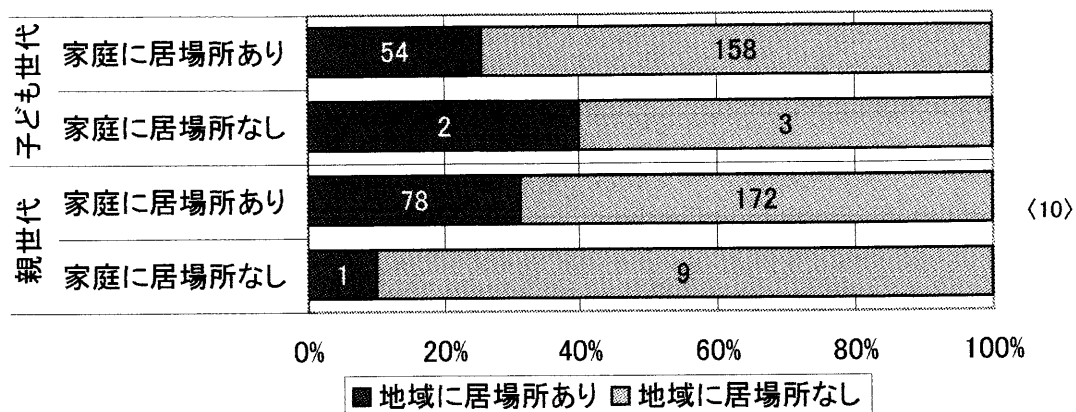


図7-3-2-1 家庭と地域における個人的居場所1の所有関係
(両世代)

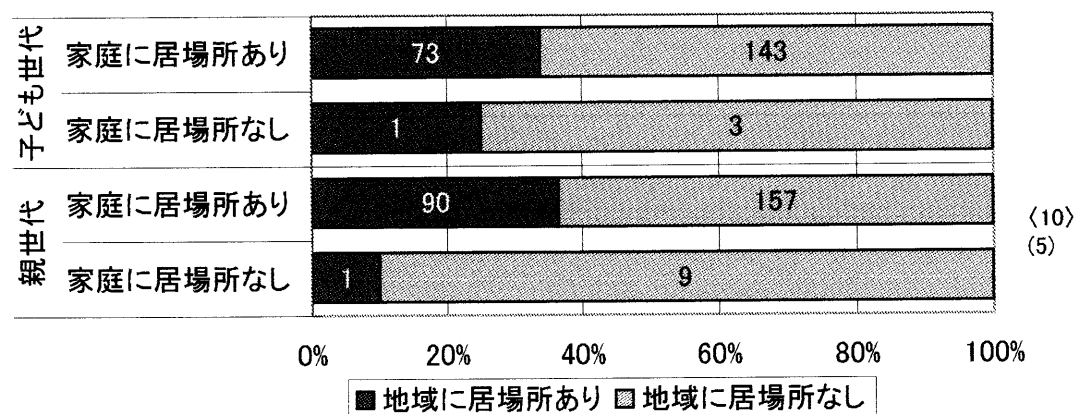


図7-3-2-2 家庭と地域における個人的居場所2の所有関係
(両世代)

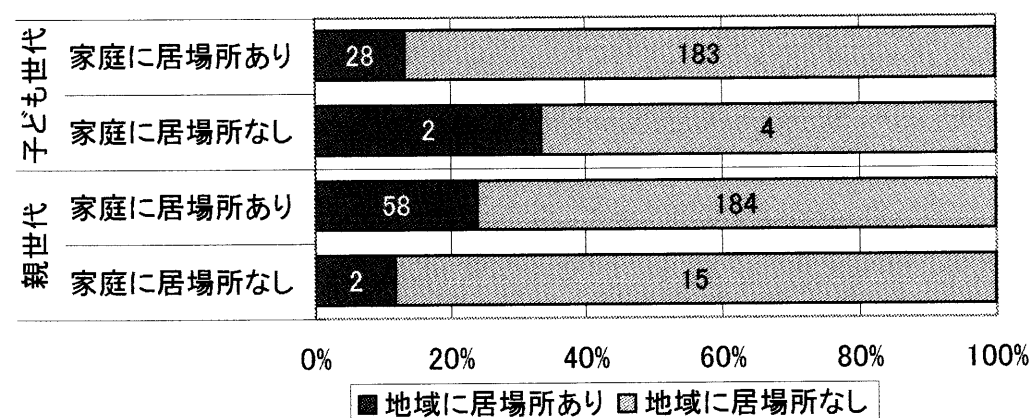


図7-3-2-3 家庭と地域における個人的居場所3の所有関係
(両世代)

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

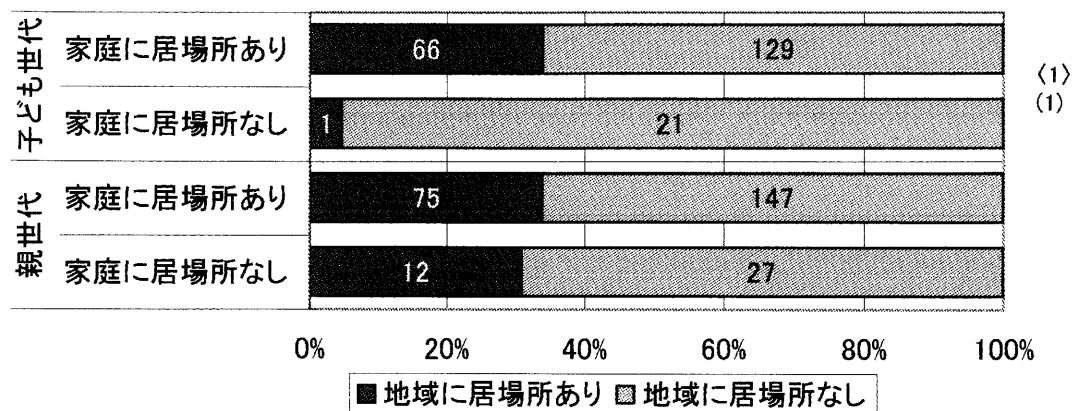


図7-3-2-4 家庭と地域における個人的居場所4の所有関係
(両世代)

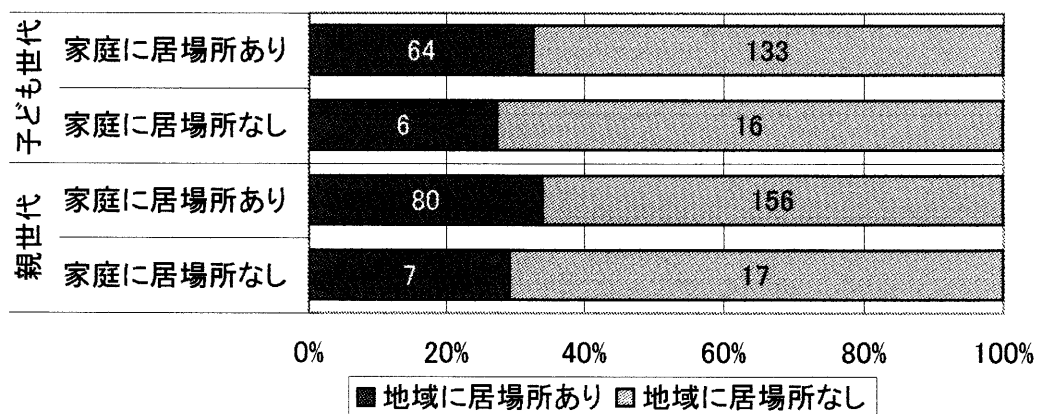


図7-3-2-5 家庭と地域における個人的居場所5の所有関係
(両世代)

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

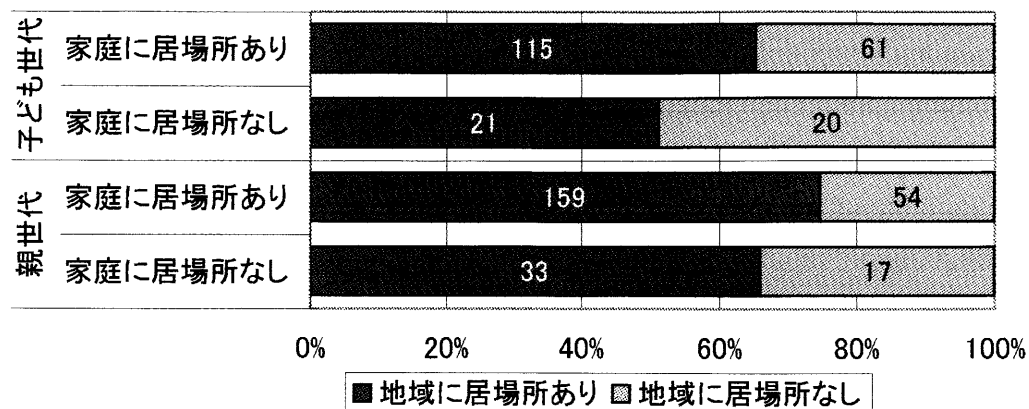


図7-3-2-6 家庭と地域における社会的居場所6の所有関係
(両世代)

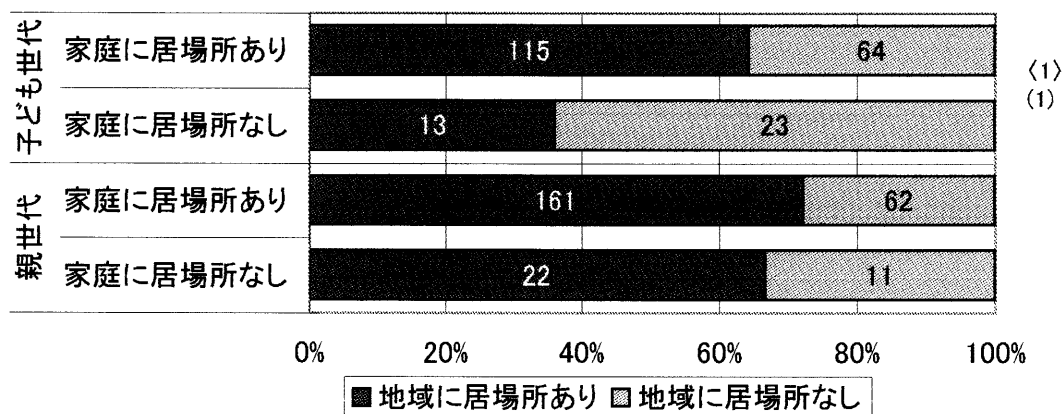


図7-3-2-7 家庭と地域における社会的居場所7の所有関係
(両世代)

※グラフ内数値は件数。

<>内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

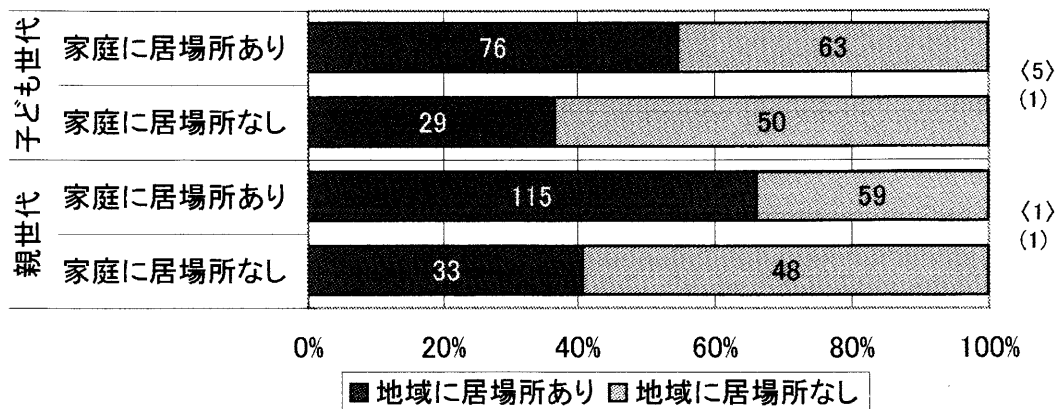


図7-3-2-8 家庭と地域における社会的居場所8の所有関係
(両世代)

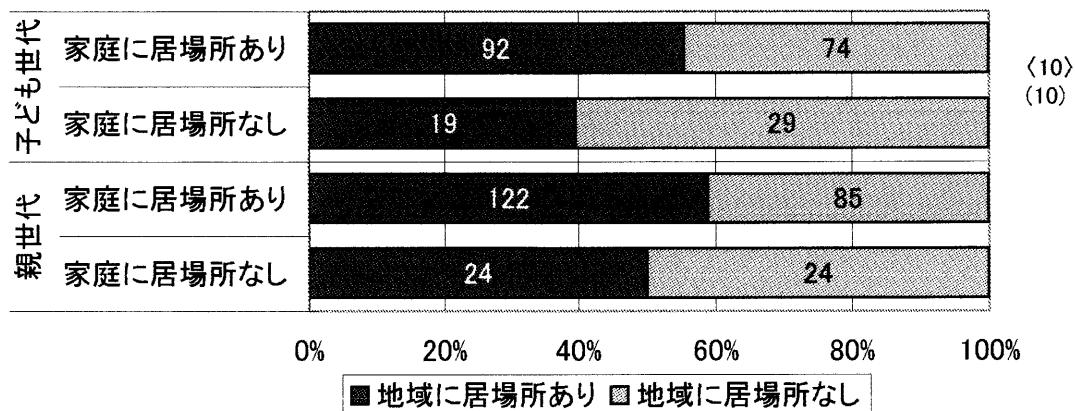


図7-3-2-9 家庭と学校における個人的居場所1の所有関係
(両世代)

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

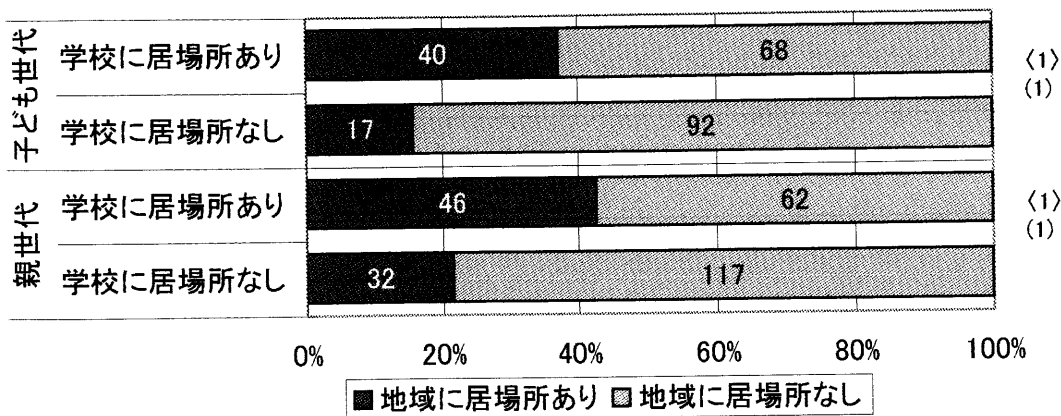


図7-3-3-1 学校と地域における個人的居場所1の所有関係（両世代）

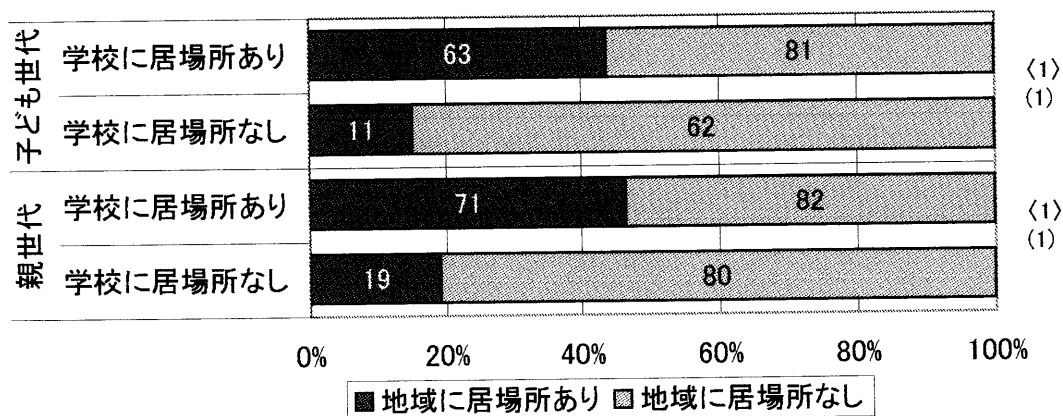


図7-3-3-2 学校と地域における個人的居場所2の所有関係（両世代）

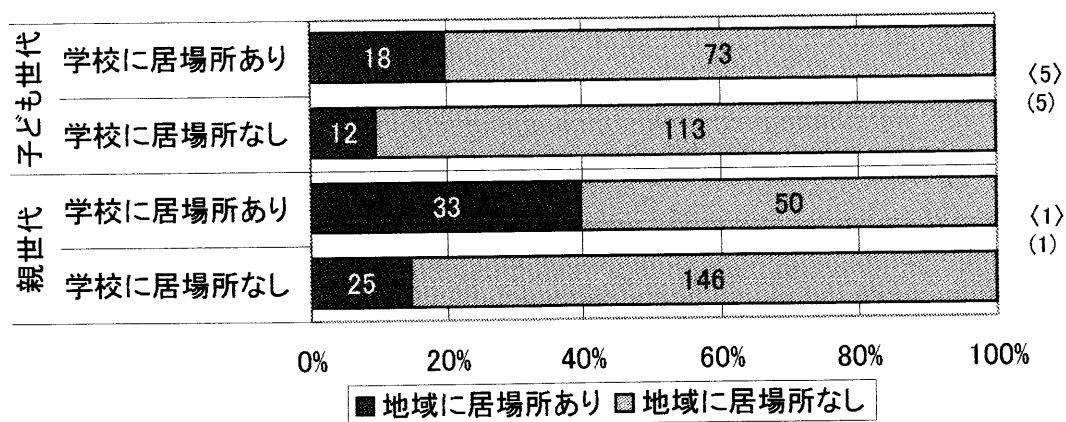


図7-3-3-3 学校と地域における個人的居場所3の所有関係（両世代）

※グラフ内数値は件数。

<)内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

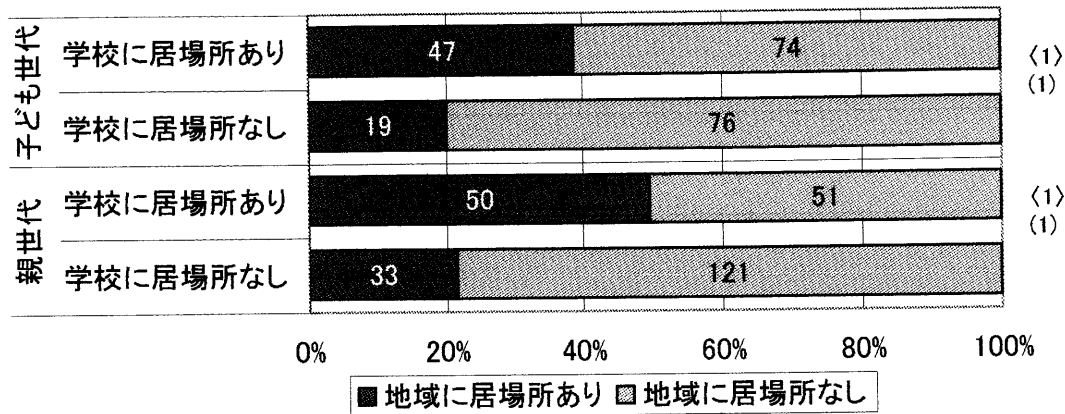


図7-3-3-4 学校と地域における個人的居場所4の所有関係（両世代）

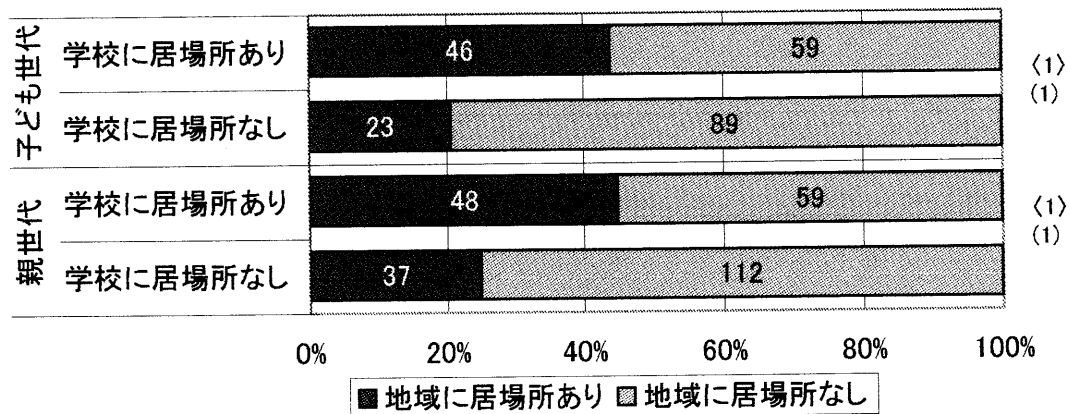


図7-3-3-5 学校と地域における個人的居場所5の所有関係（両世代）

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

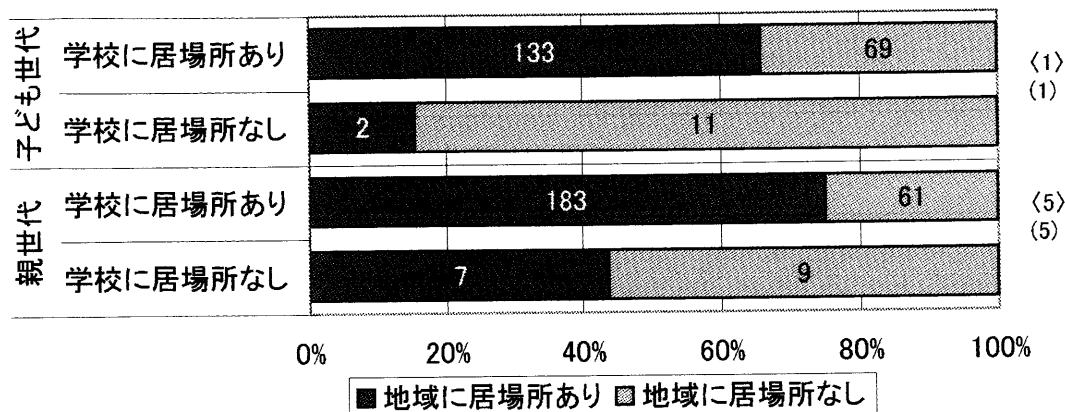


図7-3-3-6 学校と地域における社会的居場所6の所有関係
(両世代)

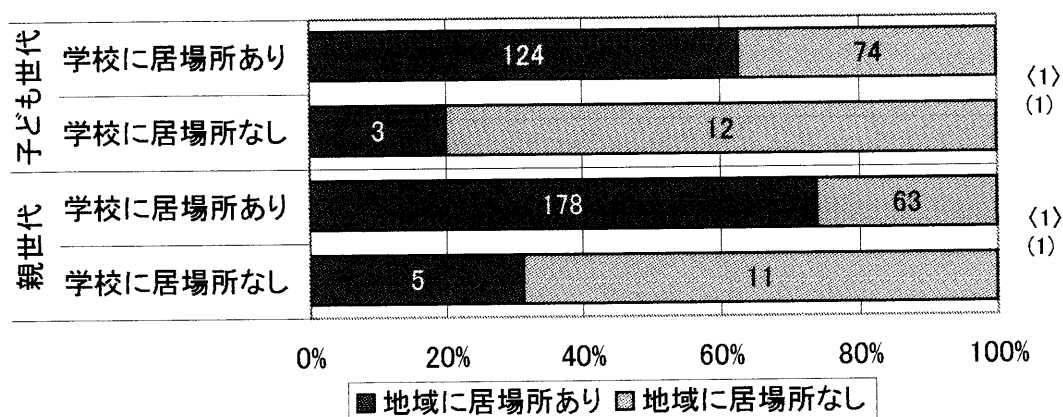


図7-3-3-7 学校と地域における社会的居場所7の所有関係
(両世代)

※グラフ内数値は件数。

<内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

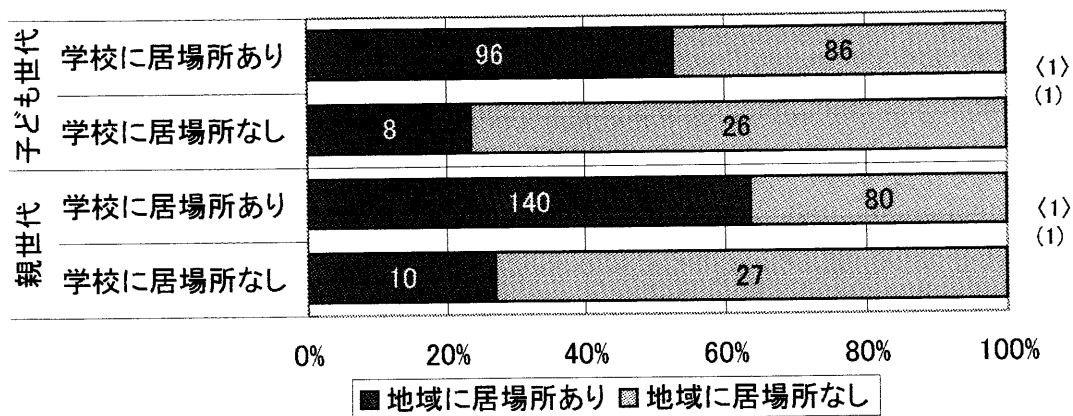


図7-3-3-8 学校と地域における社会的居場所8の所有関係
(両世代)

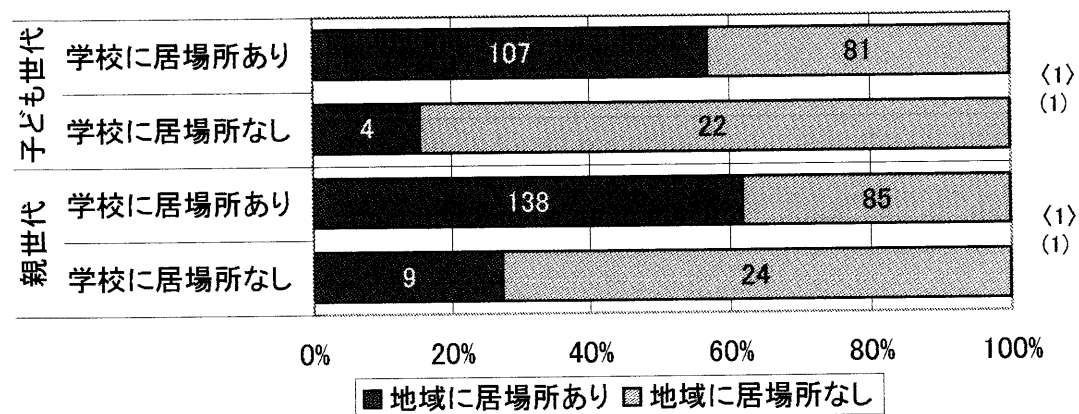


図7-3-3-9 学校と地域における社会的居場所9の所有関係
(両世代)

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

()内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

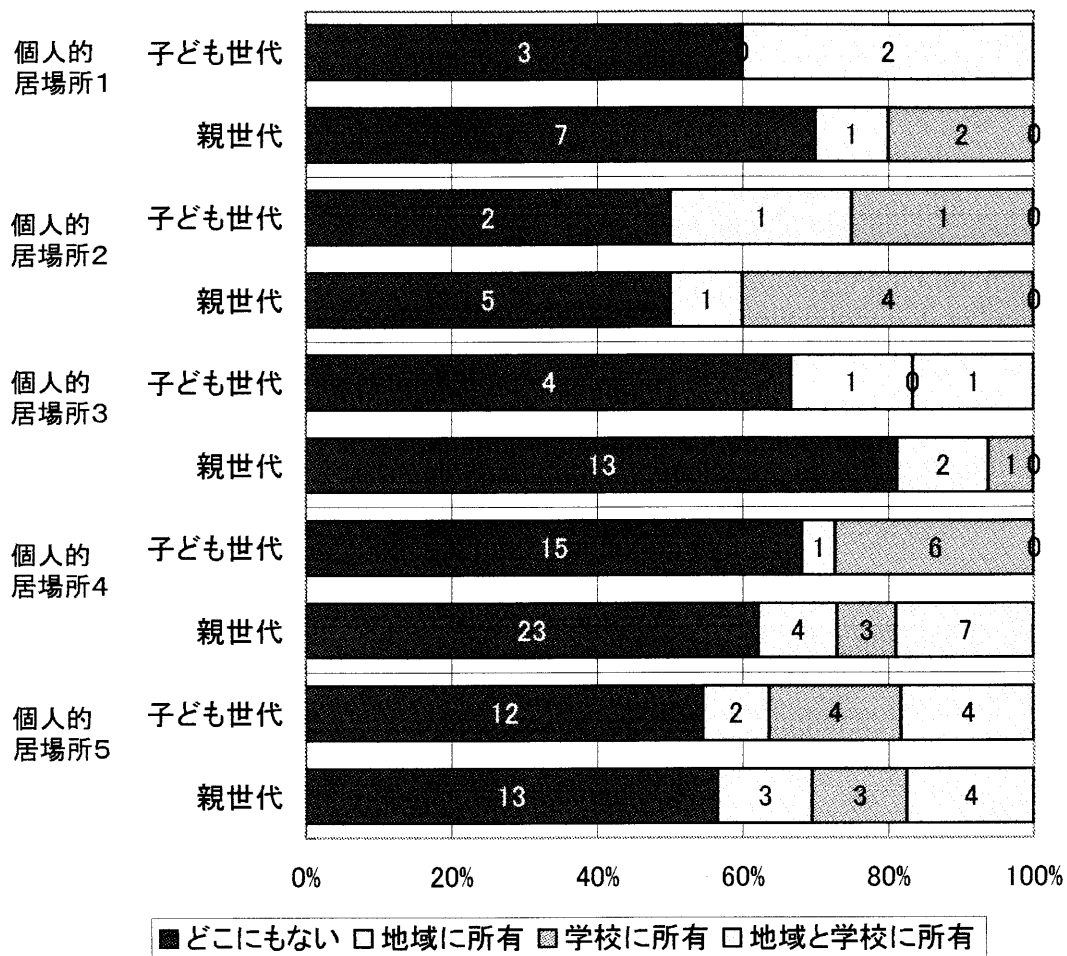


図7-3-4-1 個人的居場所の代替補完構造(世代間比較)

※グラフ内数値は件数。

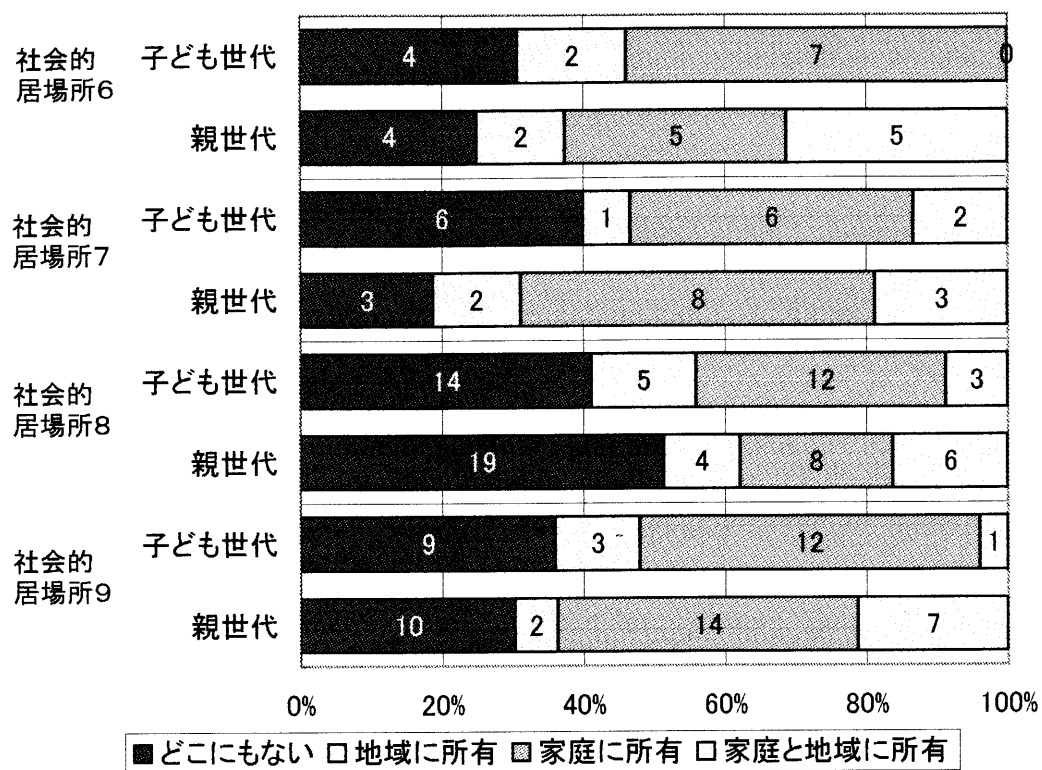


図7-3-4-2 学校における社会的居場所の代替補完構造
(世代間比較)

※グラフ内数値は件数。

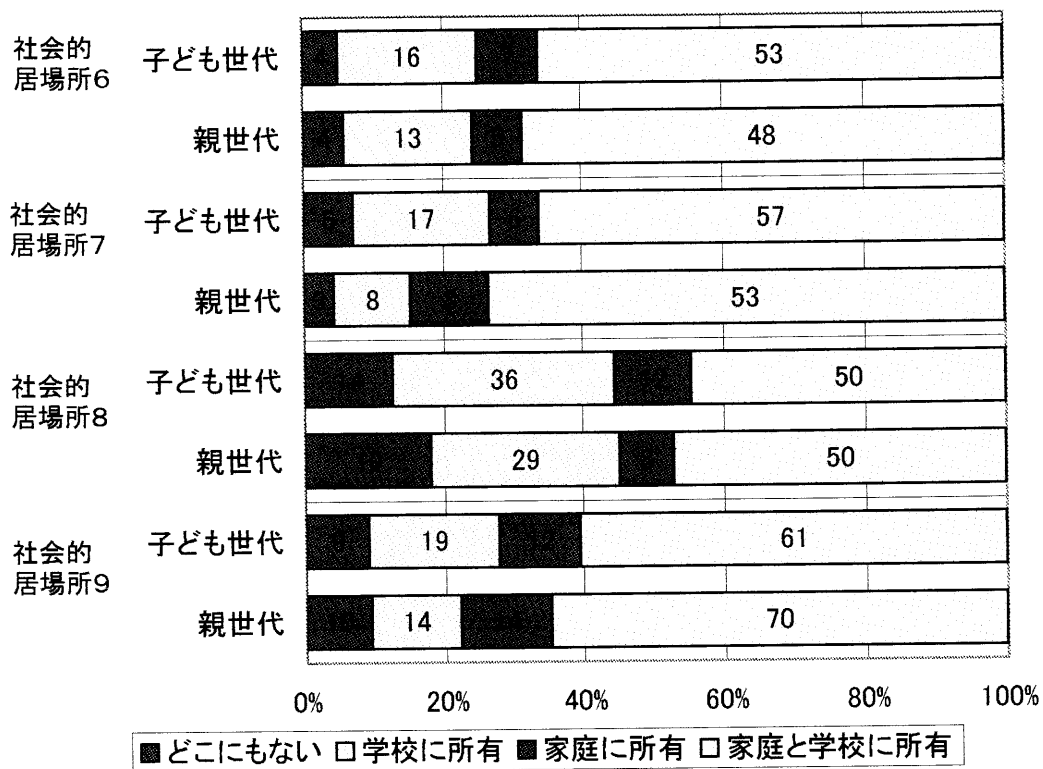


図7-3-4-3 地域における社会的居場所の代替補完構造
(世代間比較)

※グラフ内数値は件数。

第八章 親世代・子ども世代比較にみる家庭における高校生の居場所の関連構造

これまで、家庭・学校・地域それぞれにおける高校生の居場所の実態や意識を検討してきた（第三章、第四章、第五章）。居場所について、さらに考察を深めるため、居場所を取り巻く関連構造について検討していく。この居場所を取り巻く関連構造には、大きく 2 側面あると考えられる。1 つ目は「居場所の形成要因」である。居場所を所有するには何らかの要素が関連し合い、居場所を形成していると考えられる。今後、高校生の居場所を増やしていくためには、この「居場所の形成要因」を解明することが必要であろう。また、2 つ目の側面は「居場所が及ぼす影響」である。居場所を所有することにより、高校生の生活や心理状態に何らかの影響を与えていることも考えられる。この「居場所が及ぼす影響」を明らかにすることは、居場所の必要性をより明確にする手立てになると思われる。そこで、本章では、子ども世代・親世代それぞれ、家庭における居場所の関連構造について検討する。まず、第一節において、本章の分析の軸となる家庭における居場所タイプを設定する。次に、第二節、第三節において、家庭における居場所の関連構造について、「居場所の形成要因」と「居場所所有が及ぼす影響」の 2 側面を明らかにするために、表 8-1 に示す高校生の主体条件・空間条件・人間関係に関する項目と家庭における居場所タイプとの関連を検討する。

第一節 家庭における居場所タイプの設定

本節では、本章の分析の軸となる、家庭における居場所タイプの設定を行なう。居場所タイプについて、第三章第三節 7. でみた 9 つの居場所パターンをパターンのもつ意味別で集約し、タイプ分けを行なう。両世代とも、家庭は個人的居場所の中心的な場所であるため、個人的居場所に重点をおき、9 パターンを集約する。その集約の方法は、個人的居場所については、低次元・高次元の個人的居場所を区別して捉え、社会的居場所については、次元を区別せずに居場所タイプを設定すると以下のように集約できる。

9 パターンの中、「①個人的居場所（高次元）・社会的居場所（高次元）あり」と「②個人的居場所（高次元）・社会的居場所（低次元）あり」は＜高次元の個人的居場所及び、社会的居場所をもつケース＞である。「③個人的居場所（高次元）あり」は＜高次元の個人的居場所はあるが、社会的居場所はもたないケース＞である。「④個人的居場所（低次元のみ）・社会的居場所（高次元）あり」と「⑤個人的居場所（低次元のみ）・社会的居場所（低次元のみ）あり」は＜低次元の個人的居場所及び、社会的居場所をもつケース＞である。「⑥個人的居場所（低次元のみ）あり」は＜低次元の個人的居場所のみもつケース＞である。「⑦社会的居場所（高次元）あり」と「⑧社会的居場所（低次元のみ）あり」は＜社会的居場所のみもつケース＞である。「⑨居場所なし」は＜個人的居場所も社会的居場所ももたないケース＞である。このうち、＜低次元の個人的居場所のみもつケース＞と＜社会的居場所のみもつケース＞

と＜個人的居場所も社会的居場所ももたないケース＞はどれも少数であり、統計的データには適さないため、家庭における居場所タイプからは除くと居場所タイプは3タイプに分かれる。家庭における居場所タイプを図8-1に示す。

世代を通して同じ傾向であり、家庭における居場所タイプは3タイプに分かれる。

第一に、＜高次元の個人的居場所及び、社会的居場所をもつケース＞は、個人的居場所は高次元の居場所も所有し、社会的居場所も所有するタイプであり、家庭においてバランスよく居場所を所有しているものといえる。全体の約9割を占める。以下では＜個（高）・社あり＞と示す。

第二に、＜高次元の個人的居場所はあるが、社会的居場所もたないケース＞は、個人的居場所は十分に所有しているが、社会的居場所はないタイプである。全体の約1割を占める。以下では＜個（高）あり＞と示す。

第三に、＜低次元の個人的居場所及び、社会的居場所をもつケース＞は社会的居場所は所有しているが、個人的居場所は低次元の居場所しか所有していないタイプである。全体の1割未満と少数である。以下では＜個（低）・社あり＞と示す。

以上より、家庭において、両世代とも個人的居場所は高次元の居場所を所有でき、社会的居場所も所有しているというバランスの取れた居場所タイプがほとんどであることが捉えられた。しかし、中には個人的居場所を低次元の居場所しか所有できていないものや、社会的居場所を所有できていないものもみられた。高校生にとって生活の基盤であり、精神的な拠り所である家庭に居場所を十分に持てていない状況であるものがあるという問題も明らかになった。

第二節 家庭における居場所の形成要因

本節では、家庭における居場所を形成する要因を明らかにするため、「家庭における居場所の形成要因」になる要素をもつと考えられる、「高校生の属性」「空間条件」「家庭における人間関係」と家庭における居場所タイプとの関連を検討する。

1. 高校生の属性と居場所タイプとの関連

高校生の属性別に家庭における居場所タイプの特徴を捉える。なお、属性は、①性別、②家族人数、③家族形態、④性格、⑤居住期間の5項目について検討した。

① 性別

性別からみた、居場所タイプについて、図8-2-1-1に示す。

両世代とも、性別と居場所タイプとの間に関連はみられず、性別の違いによる、居場所タイプの特徴はみられなかった。

② 家族人数

家族人数別にみた、居場所タイプについて、図8-2-1-2に示す。

両世代とも、家族人数と居場所タイプとの間に関連はみられず、家族人数の違いによる、居場所タイプの特徴はみられなかった。

③ 家族形態

家族形態別にみた、居場所タイプについて、図 8・2・1・3 に示す。

〈子ども世代〉においては、家族形態と居場所タイプとの間に関連はみられなかった。

〈親世代〉においては、カイ二乗検定において 5%水準の有意差があり、やや関連がみられた。家族形態の中で、欠損家族のものは、Bタイプがやや多いことが捉えられた。〈個（高）あり〉は、社会的居場所を所有していない特徴をもつタイプである。これは、欠損家族は家族構成員が少ないため、社会的居場所を所有しにくいのではないかと考えられる。

以上より、家族形態と居場所タイプとの関連において、〈親世代〉ではやや関連がみられたが、〈子ども世代〉においては関連はみられなかった。

④ 性格

性格の3側面〈外向性—内向性〉〈プラス思考—マイナス思考〉〈協調性—自己中心的〉からみた、居場所タイプについて、図 8・2・1・4・1～3 に示す。

〈子ども世代〉においては、性格の〈外向性—内向性〉の側面と居場所タイプとの関連において、カイ二乗検定の 1%水準の有意差があり、性格の違いにより居場所タイプに特徴がみられた。外向的な性格のものは、〈個（高）・社あり〉が多いことが捉えられた。〈個（高）・社あり〉は高次元の個人的居場所を所有し、社会的居場所も所有しているタイプであるため、人と話すことが好きな外向的な性格であると、高次元の個人的居場所と社会的居場所を両方所有しやすいことが捉えられた。

〈親世代〉においては、性格のどの側面も、居場所タイプとの関連はみられなかった。

以上より、性格と居場所タイプとの関連をみると、〈子ども世代〉において、外向的な性格のものは、家庭に十分居場所を所有しているものが多いという特徴がみられた。しかし、〈親世代〉ではこのような特徴はみられなかった。また、両世代とも、性格の中、「プラス思考であるかマイナス思考であるか」と「協調性があるのか自己中心的であるのか」の2側面と居場所タイプとは関連はみられなかった。

⑤ 居住期間

居住期間別にみた、居場所タイプについて、図 8・2・1・5 に示す。

両世代とも、居住期間と居場所タイプとの間に関連はみられず、居住期間の違いによる、居場所タイプの特徴はみられなかった。

2. 空間条件と居場所パターンとの関連

空間条件別に家庭における居場所タイプの特徴を世代別に捉える。なお、空間条件は、①子ども部屋所有パターン、②住居形態、の2項目について検討した。

① 子ども部屋所有形態

子ども部屋所有形態別にみた、居場所タイプについて、図 8-2-2-1 に示す。

両世代とも、カイ二乗検定において 1%水準の有意差があり、子ども部屋所有形態別で、居場所タイプの特徴に違いがみられた。専用個室のあるものは、＜個（高）・社あり＞＜個（高）あり＞が多く、きょうだいとの共用部屋のものは、Cタイプが多いことが捉えられた。個人的居場所を軸にみると、＜個（高）・社あり＞＜個（高）あり＞は高次元の個人的居場所を所有している特徴であり、＜個（低）・社あり＞は高次元の個人的居場所を所有していない特徴である。これらのことから、専用個室を所有することは高次元の個人的居場所を所有することにつながっていることが捉えられた。

② 住居形態

住居形態別にみた、居場所タイプについて、図 8-2-2-2 に示す。

〈親世代〉においては、カイ二乗検定において 1%水準の有意差があり、住居形態と居場所タイプの間に関連がみられた。一戸建てのものは＜個（高）・社あり＞が多く、集合住宅のものはCタイプが多いことが捉えられた。＜個（高）・社あり＞の特徴は高次元の個人的居場所を所有しているという点であり、＜個（低）・社あり＞は高次元の個人的居場所を所有していない特徴である。居場所タイプは、住宅面積に制約をうけていることが捉えられ、空間的に余裕のある一戸建ての方が、高次元の個人的居場所を所有しやすいことが明らかになった。

〈子ども世代〉においては、カイ二乗検定における有意差はなかったものの、〈親世代〉と同様の傾向がみられた。

3. 家庭における人間関係と居場所タイプとの関連

家庭における人間関係別に家庭における居場所タイプの特徴を世代別に捉える。

なお、人間関係については、①親子関係、②きょうだいとの関係の 2 項目について検討した。

① 親子関係

親子関係の 3 項目（「表面上の会話しかしない関係」「仲が良いが気をつかう関係」「本音で会話する関係」）それぞれの項目別にみた、居場所タイプについて、図 8-2-3-1-1～3 に示す。

両世代とも、「表面上の会話しかしない関係」「本音で会話する関係」において、カイ二乗検定における 1%水準の有意差があり、親子関係と居場所タイプの間に関連がみられた。表面上の会話しかしないものは＜個（高）あり＞が多く、本音で会話する関係のものは＜個（高）・社あり＞＜個（低）・社あり＞が多いことが捉

えられた。〈個（高）・社あり〉〈個（低）・社あり〉は家庭に社会的居場所のあるタイプであり、〈個（高）あり〉は家庭には社会的居場所を所有していないタイプである。これらのことから、親と表面上の会話しかしない希薄な関係のものは、家庭に社会的居場所を所有していないものが多く、親と本音で話している良好な関係のものは、家庭に社会的居場所を所有しているものが多いことが捉えられた。

なお、両世代とも「仲が良いが気をつかう関係」と居場所タイプとの間には関連がみられなかった。

② きょうだいとの関係

きょうだいとの関係の3項目（「表面上の会話しかしない関係」「仲が良いが気をつかう関係」「本音で会話する関係」）それぞれの関係別にみた、居場所タイプについて、図8-2-3-2-1～3に示す。

〈子ども世代〉においては、「表面上の会話しかしない関係」「本音で会話する関係」において、カイ二乗検定における1%水準の有意差があり、きょうだいとの関係と居場所タイプの間に関連がみられた。表面上の会話しかしないものは〈個（高）あり〉が多く、本音で会話する関係のものは〈個（高）・社あり〉〈個（低）・社あり〉が多いことが捉えられ、親子関係と同様の傾向である。きょうだいと良好な関係のものは、家庭に社会的居場所を所有しているものが多く、表面上の会話しかしないような希薄な関係のものは、家庭に社会的居場所を所有しているものが少ないことが明らかになった。なお、「仲が良いが気をつかう関係」と居場所タイプとの間に関連はみられなかった。

〈親世代〉においては、「本音で会話する関係」について、カイ二乗検定における有意差はなかったが、〈子ども世代〉と同様の傾向がみられた。「表面上の会話しかしない関係」「仲が良いが気をつかう関係」については、居場所タイプとの関連はみられなかった。

4. 本節のまとめ

本節では、家庭における居場所の形成要因を明らかにするため、高校生の属性、空間条件と人間関係それぞれと家庭における居場所タイプとの関連を検討した。

家庭における居場所タイプと関連がみられた項目は、空間条件と人間関係であり、世代を通して同じような傾向である。また、〈子ども世代〉においては、性格との関連もみられた。

空間条件については、住居形態、子ども部屋の所有形態において関連があり、個人的居場所の所有タイプに特徴がみられた。住居形態の中で、一戸建てに住むものは高次元の個人的居場所を所有するタイプが多く、子ども部屋の所有形態においては、自分専用の個室を所有するものも高次元の個人的居場所を所有するタイプが多い傾向が

捉えられた。これらのことから、高次元の個人的居場所を所有するには、高校生が家庭において容易に一人になれる専用の子ども部屋を確保できる環境が必要であることが明らかになった。世代を通して同様の傾向であるが、特に〈親世代〉において顕著にみられた。

人間関係については、親きょうだいとの関係において関連があり、社会的居場所の所有の有無に特徴がみられた。親やきょうだいと本音で会話しているものは、家庭に社会的居場所を所有するタイプが多く、親やきょうだいと表面上の会話しかしないものは、家庭に社会的居場所を所有していないタイプが多いことが捉えられた。両世代とも、家庭において社会的居場所を所有するには、家族と良好な人間関係をもつことが必要であることが明らかになった。なお、親との関係においては、両世代で関連が強くみられたが、きょうだい関係においては、〈子ども世代〉の傾向の方が顕著にあらわれており、〈子ども世代〉の方が人間関係との関連が強いといえる。

〈子ども世代〉でみられた、性格との関連については、内向的な性格のものより、外向的な性格のものの方が、高次元の個人的居場所と社会的居場所の両方を所有するタイプが多いという特徴が捉えられた。一方、〈親世代〉ではこのような傾向はみられなかった。

以上より、〈子ども世代〉における居場所形成要因について次のようなことが明らかになった。〈子ども世代〉においては、空間条件との関連よりも、人間関係との関連の方が強い。また、性格の違いにおいても、外向的な性格のものは、高次元の個人的居場所と社会的居場所を両方所有するタイプが多いという特徴があることから、良好な人間関係を作りやすい性格のものは居場所を十分に所有しているといえる。これらのことから、家庭においては、居場所となる物理的な環境を整えることが基本条件ではあるが、それに加えて、良好な人間関係をもつことが、居場所を十分に所有することにつながっていることが明らかになった。

第三節 家庭における居場所所有が及ぼす影響

本節では、家庭における居場所所有が及ぼす影響について明らかにするため、家庭における居場所所有が何らかの影響を与えている可能性のある「生活実態」「心理状態」「人間関係」と家庭における居場所タイプとの関連を検討する。「人間関係」については、「居場所の形成要因（本章、第一節）」の側面から検討したが、居場所を所有することで何らかの影響をうけることも考えられるため、関連構造の両側面から検討する。

1. 居場所タイプと生活実態との関連

家庭における居場所タイプ別に生活実態を検討し、居場所所有が生活実態に何らかの影響を与えているかどうかを検討する。なお、生活実態については、①平日の行動パターン、②家庭における過ごし方、③家庭における交流パターンの3項目について

検討した。

① 平日の行動パターン

家庭における居場所タイプ別にみた平日の行動パターンについて、図8-3-1-1に示す。

両世代とも、居場所タイプと平日の行動パターンとの間に関連はみられず、居場所所有は、平日の行動パターンにあまり影響を与えていないと考えられる。

② 家庭における過ごし方

家庭における居場所タイプ別にみた家庭における過ごし方について、図8-3-1-2に示す。

〈子ども世代〉においては、カイ二乗検定において1%水準の有意差があり、〈親世代〉においては5%水準の有意差があり、居場所タイプと家庭における過ごし方との間に関連がみられた。世代を通して共通の傾向であり、居場所タイプ別で家庭における過ごし方に特徴がみられた。〈個（高）・社あり〉は「家族と一緒に過ごすのと自分の部屋にいるのが大体半分ずつくらい」のパターンが多い。〈個（高）あり〉は「ほとんど自分の部屋にいる」のパターンが多い。〈個（低）・社あり〉は「ほとんど家族と過ごす」のパターンが多い。〈個（高）・社あり〉は高次元の個人的居場所と社会的居場所を両方所有しておりバランスのとれたタイプといえる。家庭における過ごし方も交流と隔離のバランスのとれたパターンであり、居場所タイプと生活実態が対応していることが捉えられた。〈個（高）あり〉は社会的居場所を所有しないタイプであり、家庭においてもほとんど自分の部屋で過ごすものが多いことから、居場所タイプと生活実態が対応している。〈個（低）・社あり〉は個人的居場所を低次元の居場所しか所有していないタイプであり、家庭においてはほとんど家族と過ごすものが多いことから、このタイプも居場所タイプと生活実態が対応しているといえる。これらのことから、居場所所有は家庭における過ごし方に対応していることが捉えられた。

③ 家庭における交流パターン

家庭における居場所タイプ別にみた、家庭における交流パターンについて図8-3-1-3-1～4に示す。

「家庭における友達との直接交流」と居場所タイプの関連をみると、〈親世代〉ではカイ二乗検定において5%水準の有意差があり、「家庭における家族との交流」と居場所タイプの関連をみると、〈子ども世代〉ではカイ二乗検定において1%水準の有意差、〈親世代〉ではカイ二乗検定において5%水準の有意差がみられた。また、「家庭において誰とも交流しない」と居場所タイプの関連をみると、両世代ともカイ二乗検定において1%水準の有意差があり、関連がみられた。家庭において、〈個（高）・社あり〉や〈個（低）・社あり〉のような社会的居場所を所有するものは、家族や友達と交流するものが多い特徴がみられた。一方、〈個（高）あり〉の社会的居場所を所有して

いないものには、家庭において誰とも交流しないものが多いという特徴がみられた。これらのことから、家庭において社会的居場所を所有することは、家庭において家族や友達と交流することにつながっていることが捉えられた。

2. 居場所タイプと心理状態との関連

家庭における居場所タイプ別に家庭における心理状態を検討し、居場所所有が家庭における心理状態に何らかの影響を与えているかどうかを検討する。なお、家庭における心理状態については、①家庭における6つの側面からみる心理状態、②家庭における居心地が良いと感じる時、③最も居心地が良いと感じる場所の3項目について検討した。

① 家庭における6つの側面からみる心理状態

家庭における居場所タイプ別にみた、家庭における心理状態について、図 8-3-2-1-1～6 に示す。

〈子ども世代〉の傾向について述べる。居場所タイプとの関連において、「好感」のみカイ二乗検定における5%水準の有意差があり、居場所タイプの違いにより心理状態に特徴がみられた。社会的居場所を所有する〈個（高）・社あり〉〈個（低）・社あり〉のものは好感を感じているものが多いことが捉えられた。「安心感」「安定感」「快楽感」「満足感」においては、カイ二乗検定において有意差はなかったものの、「好感」と同様の傾向がみられ、社会的居場所を所有しているものの方が心理状態が良いという特徴が捉えられた。「解放感」においては、カイ二乗検定において有意差はなかったものの、他の心理状態とは違う傾向がみられた。〈個（高）・社あり〉が心理状態の良いものが最も多く、〈個（低）・社あり〉は心理状態の良いものが少ない傾向であり、Bタイプはその中間である。個人的居場所所有を軸にみると、〈個（高）・社あり〉は高次元の個人的居場所を所有しているタイプだが、〈個（低）・社あり〉は低次元の個人的居場所のみ所有しているタイプである。これらのことから、「解放感」については、個人的居場所の高次元の居場所を所有しているかどうかに関わっていると考えられる。

〈親世代〉の傾向について述べる。居場所タイプとの関連において、「安心感」「快楽感」においては、カイ二乗検定における5%水準の有意差があり、「安定感」「満足感」においては10%水準の有意差がみられた。「安心感」「安定感」においては、〈個（高）・社あり〉〈個（低）・社あり〉のものの心理状態が良いことが捉えられた。「好感」についても検定による有意差はなかったものの同様の傾向がみられ、社会的居場所を所有することは、「安心感」「安定感」「好感」を感じることににつながっているといえ、〈子ども世代〉と同様の傾向である。「満足感」においては、Aタイプの心理状態が最もよく、次いで〈個（高）あり〉、〈個（低）・社あり〉と続く傾向である。「解放感」についても検定に有意差はなかったものの同様の傾向がみられ、「満足感」「解放感」については個人的居場所の高次元の居場所を所有しているかどうかの影響を与えている

と考えられる。「快楽感」については、〈個（高）・社あり〉のものの心理状態が最もよく、家庭において十分に居場所をもつことが「快楽感」を感じることに繋がっていると考えられる。

以上より、〈子ども世代〉では、「解放感」を除く全ての側面において、社会的居場所を所有するタイプの心理状態が良いという傾向であるが、〈親世代〉では「安心感」「安定感」「好感」の3側面のみである。〈親世代〉の他の側面においては、高次元の個人的居場所を所有するタイプの心理状態が良いという傾向である。これらのことから、〈子ども世代〉では、高次元の個人的居場所を所有することよりも、社会的居場所を所有することの方が、家庭においてプラスの心理を感じることに繋がる傾向が捉えられ、〈子ども世代〉においては家庭に社会的居場所を所有することが重要であるといえる。

② 家庭における居心地が良いと感じる時

家庭における居場所タイプ別にみた、家庭における居心地が良いと感じる時について、図8-3-2-2に示す。

〈親世代〉において、カイ二乗検定における1%水準の有意差がみられ、居場所タイプ別に家庭における居心地が良いと感じる時に特徴があることが捉えられた。〈子ども世代〉においては、検定における有意差はなかったものの、〈親世代〉と同様の傾向がみられた。両世代とも、〈個（高）・社あり〉〈個（高）あり〉のものは、「一人でのんびりくつろいでいる時」に居心地の良さを感じているものが多い。〈個（低）・社あり〉のものは、「家族団らんをしている時」に居心地の良さを感じているものが多い。これらのことから、高次元の個人的居場所を所有しているものは、一人でいる時に居心地の良さを感じているが、低次元の個人的居場所しか所有できていないものは、家族団らんに居心地の良さを感じているものが多いことが捉えられ、家庭においては、個人的居場所の高次元の居場所を所有しているかしていないかで居心地の良さを感じる状況が異なっているといえる。

③ 最も居心地が良いと感じる場所

家庭における居場所タイプ別にみた、最も居心地が良いと感じる場所について、図8-3-2-3に示す。

〈子ども世代〉においては、カイ二乗検定において5%水準の有意差があり、居場所タイプ別で居心地の良い場所に特徴がみられた。〈個（高）・社あり〉〈個（低）・社あり〉は家庭に居心地の良さを感じているものが多い。〈個（高）あり〉は居心地の良さを感じられる場所のないものが多い。これらのことから、家庭に社会的居場所を所有していることは、家庭を居心地良く感じることに繋がるといえる。

〈親世代〉においては、カイ二乗検定において1%水準の有意差があり、居場所タイプ別で居心地が良いと感じる場所に特徴がみられた。〈個（高）・社あり〉は家庭に居

地の良さを感じているものが多く、＜個（高）あり＞は居心地の良さを感じられる場所のないものが多い。これらのことから、家庭に個人的居場所も社会的居場所も両方十分所有しているものは、家庭に居心地の良さを感じることにつながるといえる。

世代間でやや傾向は異なるものの、家庭に個人的居場所も社会的居場所も十分に所有しているものは、家庭に居心地の良さを感じるものが多く、家庭に社会的居場所を所有していないものは、どこにも居心地の良さを感じられないものが多いことが捉えられた。

3. 居場所タイプと家庭における人間関係との関連

家庭における居場所タイプ別に家庭における人間関係を検討し、居場所所有が家庭における人間関係に何らかの影響を与えているかどうかを検討する。なお、家庭における人間関係については、①親子関係、②きょうだいとの関係の2項目について検討した。

① 親子関係

居場所タイプ別にみた、親子関係（「表面上の会話しかしない関係」「仲が良いが気をつかう関係」「本音で会話する関係」）の3項目について、図8・2・3・1・1～3に示す。

両世代とも、「表面上の会話しかしない関係」「本音で会話する関係」において、カイ二乗検定における1%水準の有意差があり、居場所タイプ別で親子関係に特徴がみられた。＜個（高）・社あり＞＜個（低）・社あり＞は親と本音で話すものが多い。＜個（高）あり＞は親と表面上の会話しかしないものが多い。これらのことから、家庭に社会的居場所を所有しているタイプは親と良好の関係であり、家庭に社会的居場所を所有していないタイプは親と希薄な関係である傾向が捉えられた。

なお、両世代とも「仲が良いが気をつかう関係」と居場所タイプとの間には関連がみられなかった。

② きょうだいとの関係

居場所タイプ別にみた、きょうだいとの関係（「表面上の会話しかしない関係」「仲が良いが気をつかう関係」「本音で会話する関係」）の3項目について、図8・2・3・2・1～3に示す。

〈子ども世代〉においては、「表面上の会話しかしない関係」「本音で会話する関係」において、カイ二乗検定における1%水準の有意差があり、きょうだいとの関係と居場所タイプの間に関連がみられた。＜個（高）・社あり＞＜個（低）・社あり＞はきょうだいと本音で会話をしているものが多く、＜個（高）あり＞はきょうだいと表面上の会話しかしないものが多い。これらのことから、社会的居場所を所有しているものは、きょうだいと良好の関係であり、社会的居場所を所有していないものはきょうだいと希薄な関係のものが多いことが捉えられ、親子関係と同様の傾向である。なお、「仲が

良いが気をつかう関係」と居場所タイプとの間に関連はみられなかった。

〈親世代〉においては、「本音で会話する関係」について、カイ二乗検定における有意差はなかったが、〈子ども世代〉と同様の傾向がみられた。「表面上の会話しかしない関係」「仲が良いが気をつかう関係」については、居場所タイプとの関連はみられなかった。

4. 本節のまとめ

本節では、家庭における居場所所有が及ぼす影響について明らかにするため、「家庭における居場所所有が何らかの影響を与えている可能性のある「生活実態」「心理状態」「人間関係」と家庭における居場所タイプとの関連を検討した。

居場所タイプと生活実態との関連においては、両世代とも、居場所タイプ別で生活実態に特徴がみられた。〈個（高）・社あり〉のような高次元の個人的居場所と社会的居場所を両方所有するものは、家庭において交流と隔離のバランスのとれた生活をしているものが多い。〈個（高）あり〉のような社会的居場所を所有していないものは、家庭でほとんど自分の部屋で過ごすものが多く、〈個（低）・社あり〉のような高次元の個人的居場所を所有していないものは、家庭では家族と過ごすものが多いという特徴があり、居場所タイプと生活実態が対応していることが捉えられた。また、〈個（高）・社あり〉〈個（低）・社あり〉の社会的居場所を所有しているものは家庭において、家族や友達と交流しているものが多いという特徴も明らかになった。

居場所タイプと心理状態との関連においては、〈個（高）・社あり〉〈個（低）・社あり〉の社会的居場所を所有しているものは、心理状態の良いものが多いことが捉えられた。また、社会的居場所を所有しているタイプは、家庭を最も居心地の良い場所としているものが多い。この傾向は〈子ども世代〉で特にみられることから、〈子ども世代〉にとって、家庭における心理状態を良くするには社会的居場所を所有することが関わっていることが明らかになった。

居場所タイプと人間関係との関連においては、〈個（高）・社あり〉〈個（低）・社あり〉の社会的居場所を所有しているものは、親やきょうだいとの関係が良好であるものが多い特徴がみられた。一方、〈個（高）あり〉は社会的居場所を所有していないタイプは、親やきょうだいとの関係が希薄なものが多い特徴がみられ、〈子ども世代〉でこの傾向が強い。これらのことから、家庭において、社会的居場所を所有することが重要であるといえる。

以上より、心理状態と人間関係においては、居場所タイプの中で、〈個（高）・社あり〉〈個（低）・社あり〉のものの特徴が似ていることが捉えられた。〈個（高）・社あり〉〈個（低）・社あり〉の特徴は、社会的居場所を所有しているタイプである。これらのことから、家庭において個人的居場所の次元の違いよりも、社会的居場所を所有していることが、心理状態の良さや、人間関係の良さに影響を与えていることが捉えられた。

第四節 本章のまとめ

本章では、「居場所の形成要因」と「居場所が及ぼす影響」を明らかにするため、家庭における居場所タイプと高校生の主体条件と空間条件、人間関係との関連を検討し、以下のことが明らかになった。なお、家庭における居場所の関連構造を模式的に表した図を 8-4-1,2 に示す。

1. 分析軸となる家庭における居場所タイプを以下のように設定した。〈個（高）・社あり〉「高次元の個人的居場所及び、社会的居場所をもつケース」、〈個（高）あり〉「高次元の個人的居場所はあるが、社会的居場所はもたないケース」、〈個（低）・社あり〉「低次元の個人的居場所及び、社会的居場所をもつケース」の 3 タイプであり、両世代とも〈個（高）・社あり〉が全体のほとんどを占め、〈個（高）あり〉〈個（低）・社あり〉は少数である。なお、居場所タイプについては世代を通して同じ傾向である。

2. 「居場所の形成要因」についてみると、家庭の居場所形成には、家庭における空間条件と人間関係が関わっていることが明らかになった。

空間条件別にみた居場所タイプでは、高次元の個人的場所の所有に違いがあり、一戸建てに住むもの、自分専用の子ども部屋を持つものは、高次元の個人的居場所を所有するタイプが多い。このことから、家庭に高次元の個人的居場所を所有するには、専用個室を確保できる空間的に余裕のある環境が基本的な条件になるといえる。この傾向は〈親世代〉で顕著にみられ、〈子ども世代〉では関連は弱い。

人間関係においては、居場所タイプの特徴として、社会的居場所の所有の有無に違いがみられた。親やきょうだいと良好の関係のものは、社会的居場所を所有しているものが多く、希薄な関係のものは社会的居場所を所有していないものが多いことが捉えられた。これは、〈子ども世代〉の傾向が強く、〈子ども世代〉の方が、人間関係との関連が強いことが明らかになった。

この他、性格別にみると、〈子ども世代〉では、外向的な性格のものの方が、高次元の個人的居場所と社会的居場所の両方を所有しているものが多い特徴が明らかになった。

以上より、〈子ども世代〉における「居場所の形成要因」については、空間条件より人間関係の方が関連が大きいことが明らかになった。また、性格別にみて、外向的な性格のものは十分に居場所を所有しているタイプが多いことから、良好な人間関係を作るのに有利な性格のものは居場所を十分に所有しているといえる。これらのことから、家庭においては、居場所となる物理的な環境を整えることも基本条件ではあるが、それに加えて、良好な人間関係を持つことが、居場所の形成に大きく関わっていることが明らかになった。

3. 「居場所が及ぼす影響」についてみると、生活実態においては、居場所タイプと家庭における行動パターンは対応していることが明らかになった。〈個（高）・社あり

＞の高次元の個人的居場所も社会的居場所も両方所有しているものは、家庭において交流と隔離のバランスのとれた生活をしている。＜個（高）あり＞のような社会的居場所を所有していないものは、家庭ではほとんど自分の部屋で過ごすものが多く、＜個（低）・社あり＞のような高次元の個人的居場所を所有しないものは、家庭ではほとんど家族と過ごすものが多いことが捉えられた。また、社会的居場所を所有している＜個（高）・社あり＞＜個（低）・社あり＞は、家庭で家族や友達と交流するものが多いという特徴も明らかになった。

居場所タイプと心理状態との関連においては、＜個（高）・社あり＞＜個（低）・社あり＞の社会的居場所を所有しているものは、心理状態の良いものが多いことが捉えられた。また、社会的居場所を所有しているタイプは、家庭を最も居心地の良い場所としているものが多い。この傾向は〈子ども世代〉で特にみられることから、〈子ども世代〉にとって、家庭における心理状態を良くするには社会的居場所を所有することが関わっていることが明らかになった。

居場所タイプと人間関係との関連においては、＜個（高）・社あり＞＜個（低）・社あり＞の社会的居場所を所有しているものは、親やきょうだいとの関係が良好であるものが多い特徴がみられた。一方、＜個（高）あり＞は社会的居場所を所有していないタイプは、親やきょうだいとの関係が希薄なものが多い特徴がみられ、〈子ども世代〉でこの傾向が強い。これらのことから、家庭において、社会的居場所を所有することが重要であるといえる。

以上より、〈子ども世代〉における居場所所有が心理状態と人間関係に与える影響としては、家庭において個人的居場所の質よりも、社会的居場所を所有することが、心理状態の良さや、人間関係の良さに影響を与えていることが捉えられた。

表 8-1 家庭・学校・地域における居場所の関連構造（検討項目）

				家庭における居場所タイプ	学校における居場所タイプ	地域における居場所タイプ
形成要因・居場所所有が与える影響	属性	性別		○	○	○
		家族人数		○		
		家族形態		○		
		性格	外向性—内向性	○	○	○
			プラス思考—マイナス思考	○	○	○
			協調性—自己中心的	○	○	○
		居住期間		○	○	○
		学校における所属	部活動		△	
			生徒会・委員会活動		△	
	空間条件	子ども部屋所有パターン		○		
		住居形態		○		
		居住環境	①原っぱ・田んぼ			○
			②河原・土手			○
			③雑木林・野山			○
			④公園・アスレチック			○
			⑤商店街			○
			⑥デパート、ショッピングセンター			○
			⑦スーパー			○
			⑧コンビニ			○
			⑨ファミレス			○
			⑩ゲームセンター、カラオケ			○
			⑪駅			○
			⑫空き地、駐車場			○
			⑬公共施設			○
		地域の雰囲気				○
	人間関係	親子関係	表面上の会話	○		
			仲が良いが気をつかう	○		
			本音で会話する	○		
		きょうだいとの関係	表面上の会話	○		
			仲が良いが気をつかう	○		
			本音で会話する	○		
		先生との関係	表面上の会話		○	
			仲が良いが気をつかう		○	
			本音で会話する		○	
		友だちとの関係	表面上の会話		○	
			仲が良いが気をつかう		○	

居場所所有が与える影響			本音で会話する		○	
		先輩・後輩などとの関係	表面上の会話		○	
			仲が良いが気をつかう		○	
			本音で会話する		○	
		地域で本音で話せる相手	学校の友達			○
			②学校以外の友達			○
			③近所の大人			○
			④塾大人			○
			⑤親戚			○
			⑥その他			○
			⑦本音で話す相手なし			○
	近所付き合い				○	
	生活実態	平日の行動パターン		○	○	○
		学校における放課後の過ごし方			○	
		地域における放課後の過ごし方				○
		家庭における過ごし方		○		
		家庭における交流	友達（直接）	○		
			友達（間接）	○		
			家族	○		
			誰とも交流しない	○		
よく行く場所		①自然・一人			○	
		②自然・仲間			○	
		③公園・一人			○	
		④公園・仲間			○	
		⑤店・一人			○	
		⑥店・仲間			○	
		⑦店・店員			○	
		⑧施設・一人			○	
		⑨施設・仲間			○	
		⑩施設・職員			○	
		⑪塾・勉強			○	
		⑫塾・先生			○	
		⑬友達の家			○	
		⑭親戚の家			○	
心理状態		居心地の良い場所		○	○	○
		家庭における居心地の良い時		○		
		学校における居心地の良い時			○	
		地域における居心地の良い時				○
	家庭心理状態	安心感	○			
		安定感	○			

			快楽感	○		
			満足感	○		
			解放感	○		
			好感	○		
		学校心理状態	安心感		○	
			安定感		○	
			快楽感		○	
			満足感		○	
			解放感		○	
			好感		○	

- . . . 関連を検討する。
- △ . . . 子ども世代のみ関連を検討する。
- / . . . 関連を検討しない。

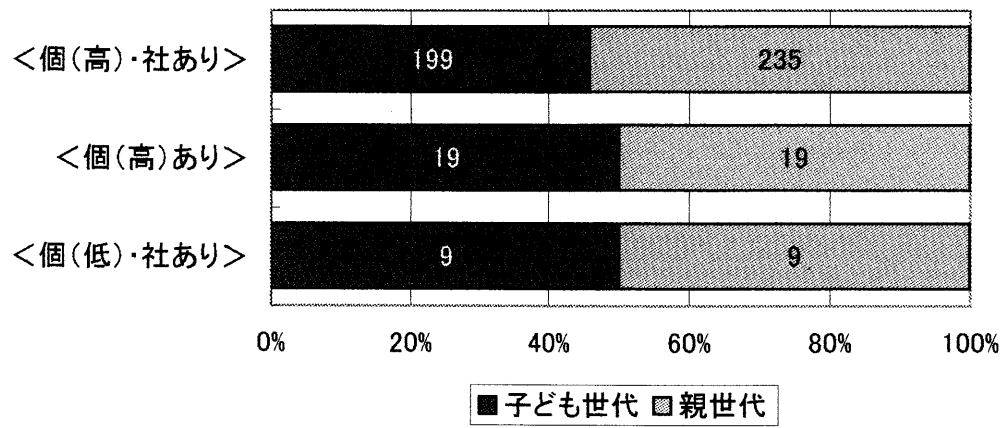


図8-1 家庭における居場所タイプ

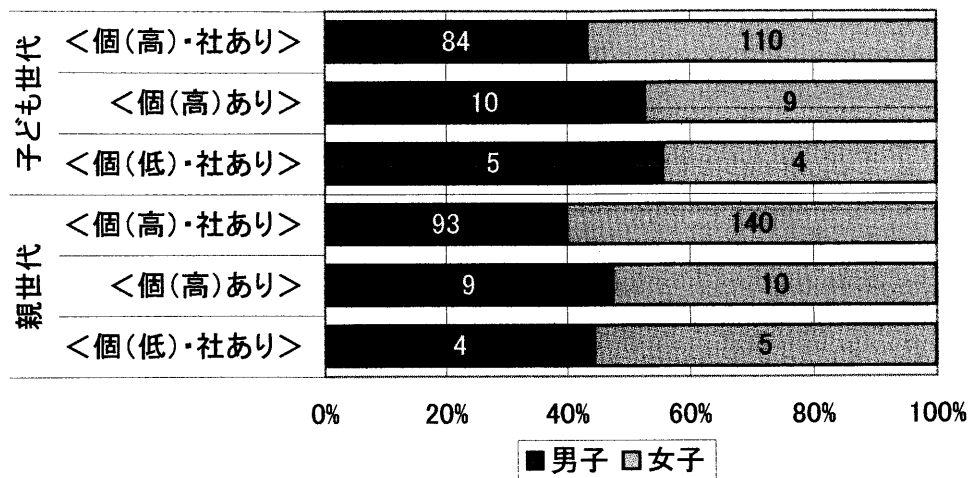


図8-2-1-1 性別と家庭における居場所タイプとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

<>内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

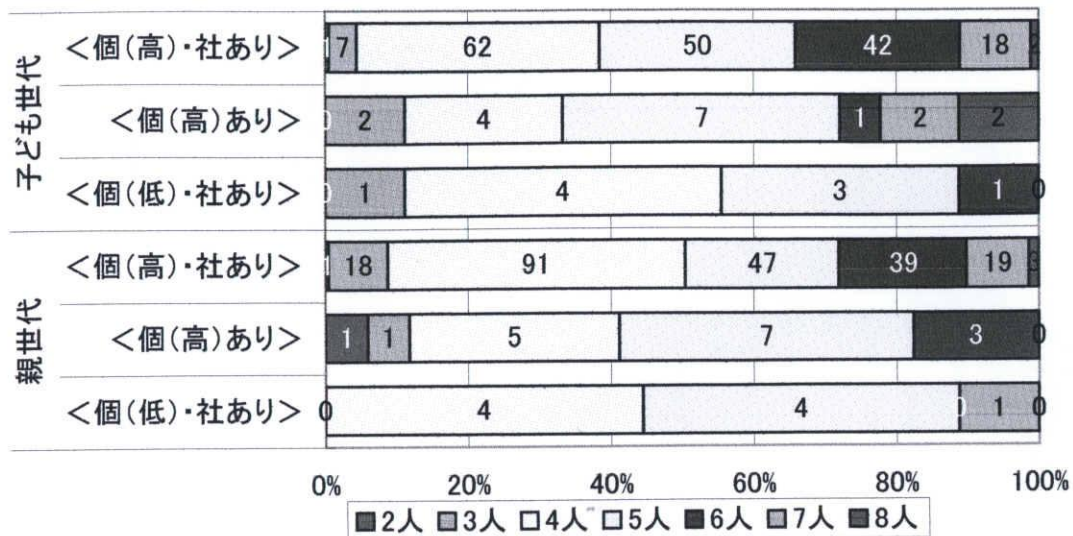


図8-2-1-2 家族人数と家庭における居場所タイプとの関連(両世代)

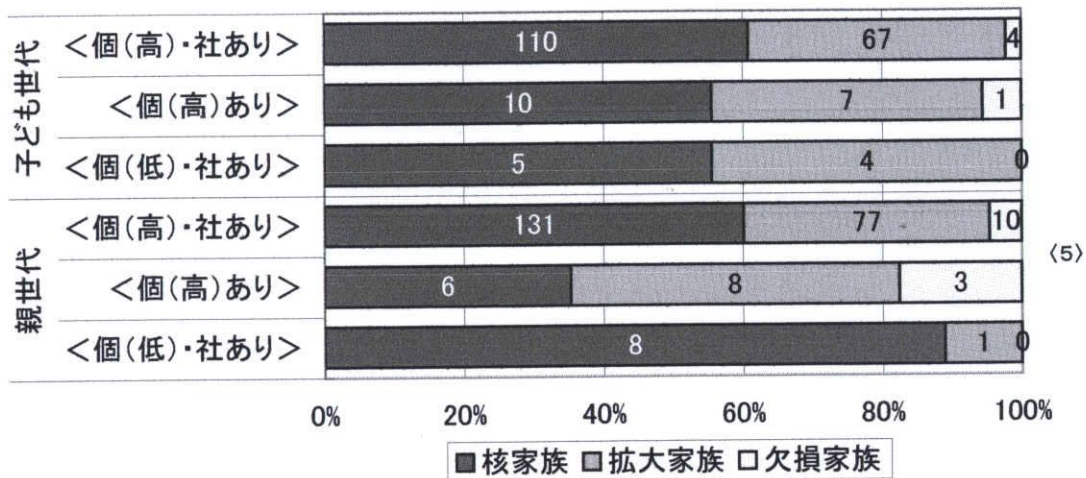


図8-2-1-3 家族形態と家庭における居場所タイプとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

<内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

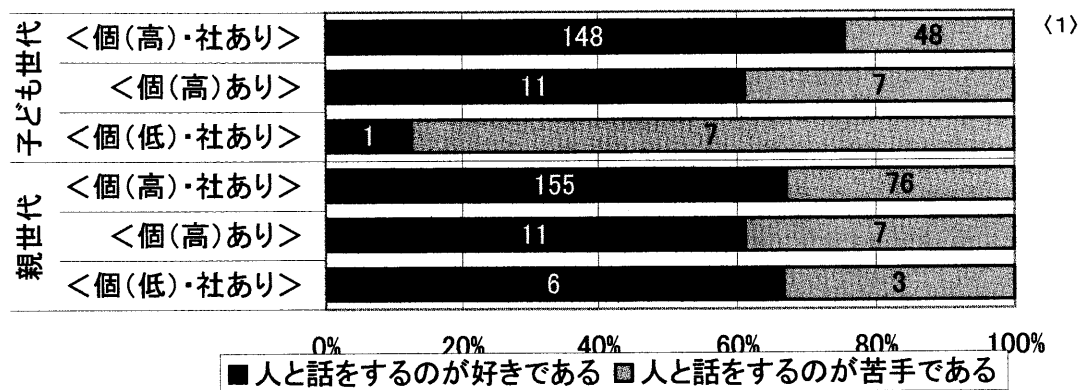


図8-2-1-4-1 性格(外向性—内向性)と家庭における居場所タイプとの関連(両世代)

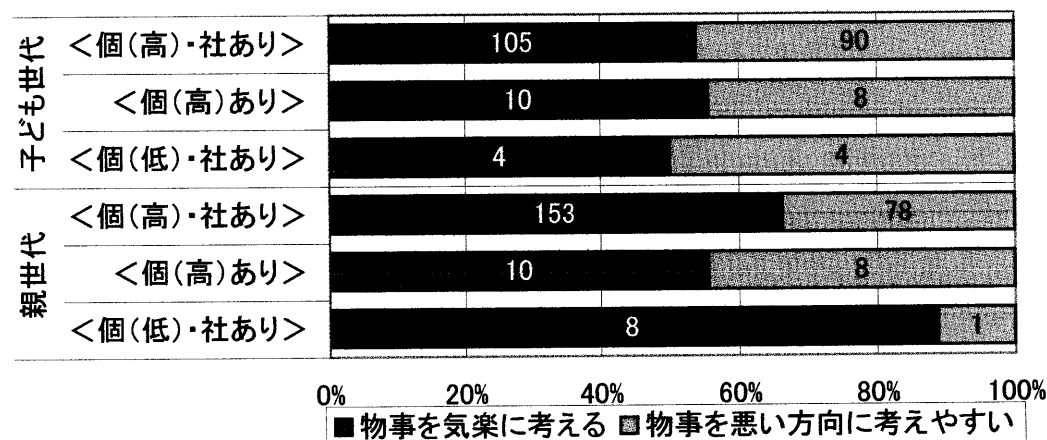


図8-2-1-4-2 性格(プラス思考—マイナス思考)と家庭における居場所タイプとの関連(両世代)

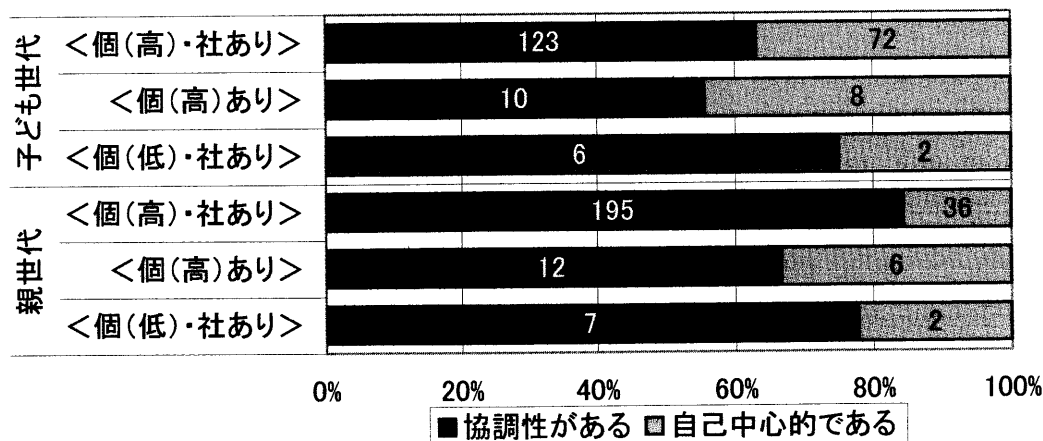


図8-2-1-4-3 性格(協調性—自己中心的)と家庭における居場所タイプとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

<内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

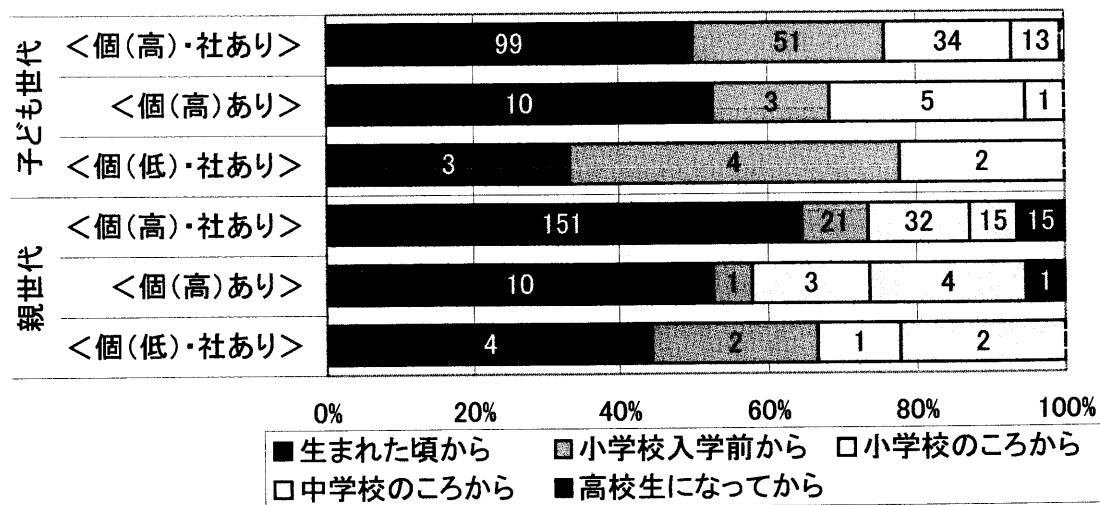


図8-1-2-5 居住期間と家庭における居場所タイプとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

<>内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

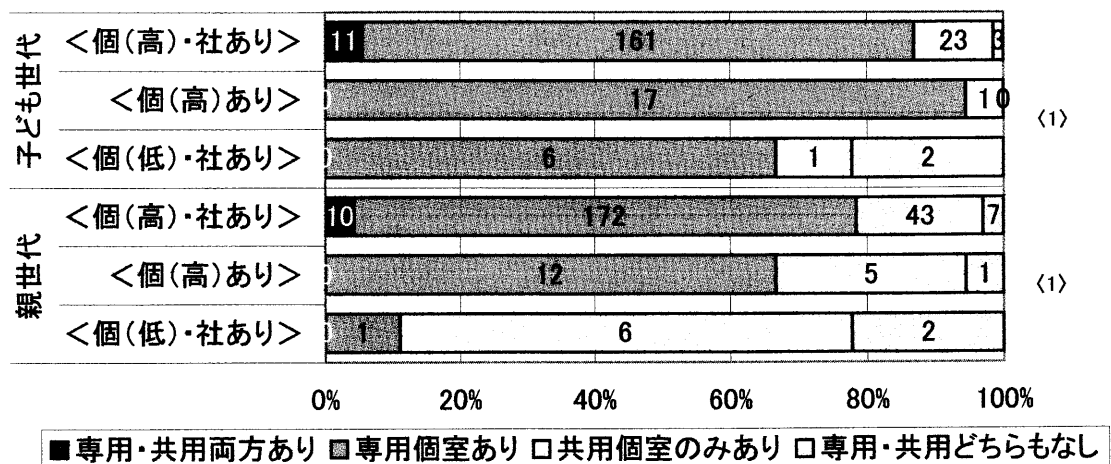


図8-2-2-1 子ども部屋所有形態と家庭における居場所タイプとの関連(両世代)

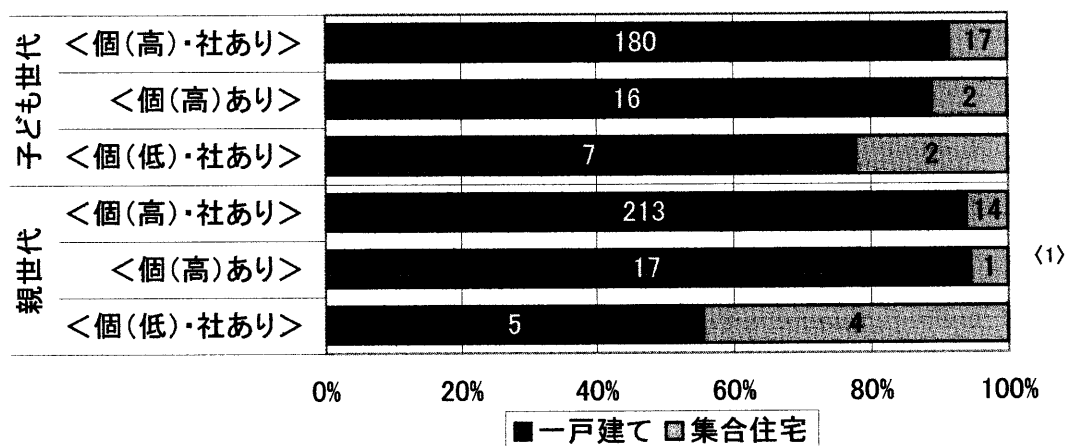


図8-2-2-2 住居形態と家庭における居場所タイプとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

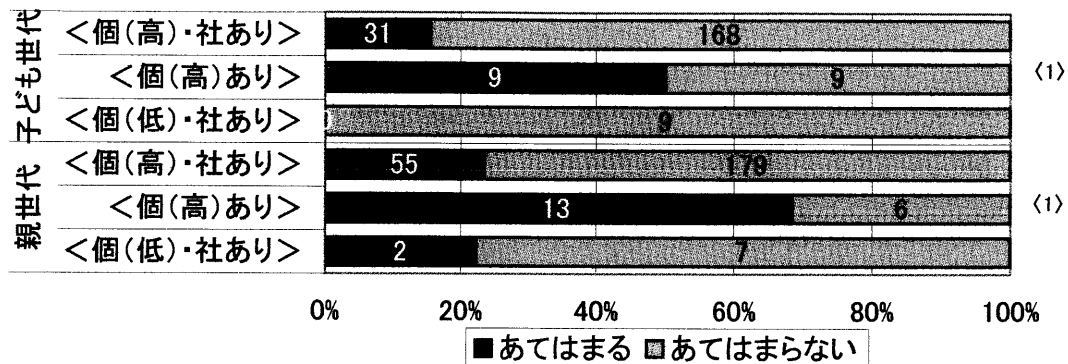


図8-2-3-1-1 親子関係(表面上の会話)と家庭における居場所タイプとの関連(両世代)

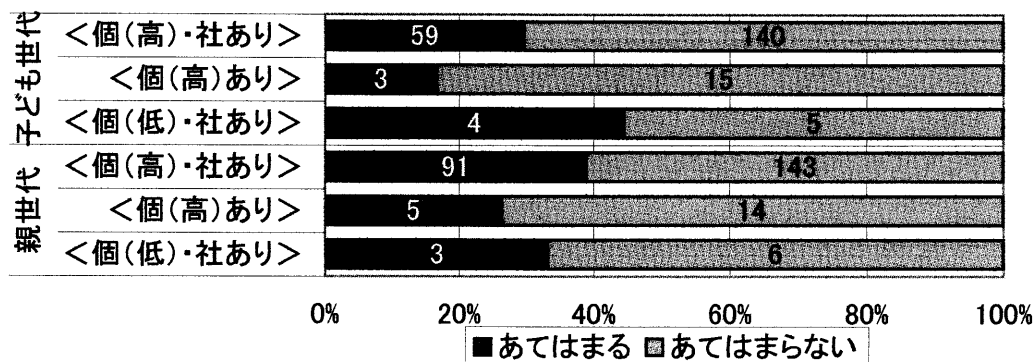


図8-2-3-1-2 親子関係(気をつかう)と家庭における居場所タイプとの関連(両世代)

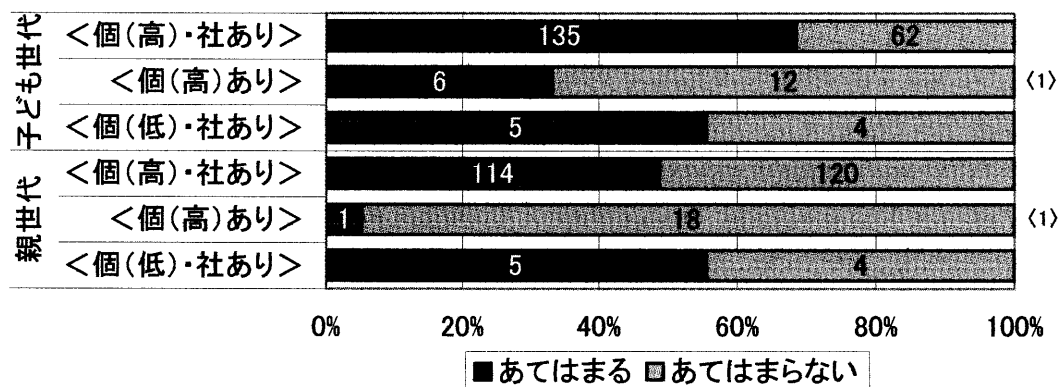
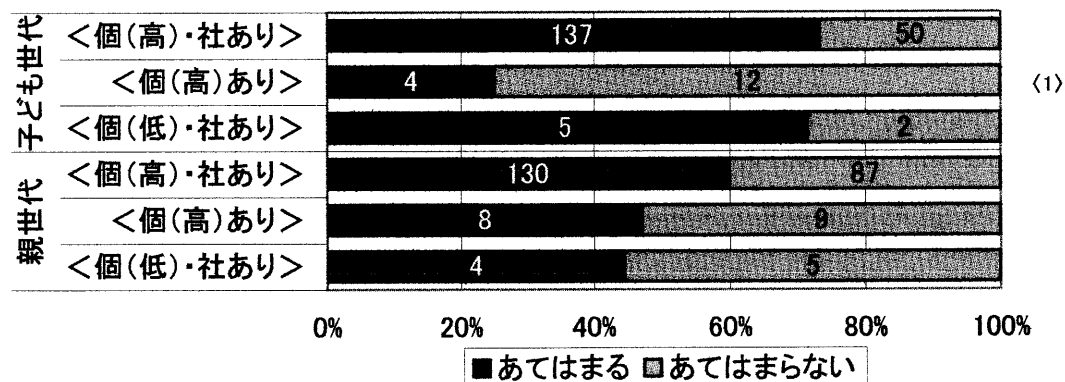
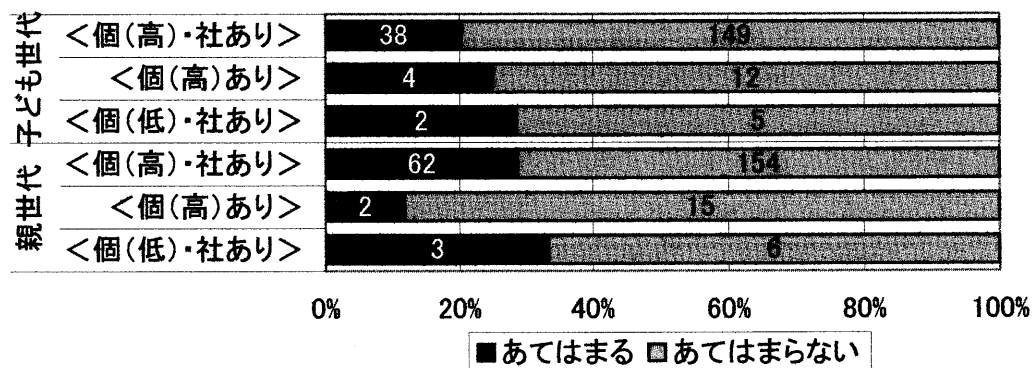
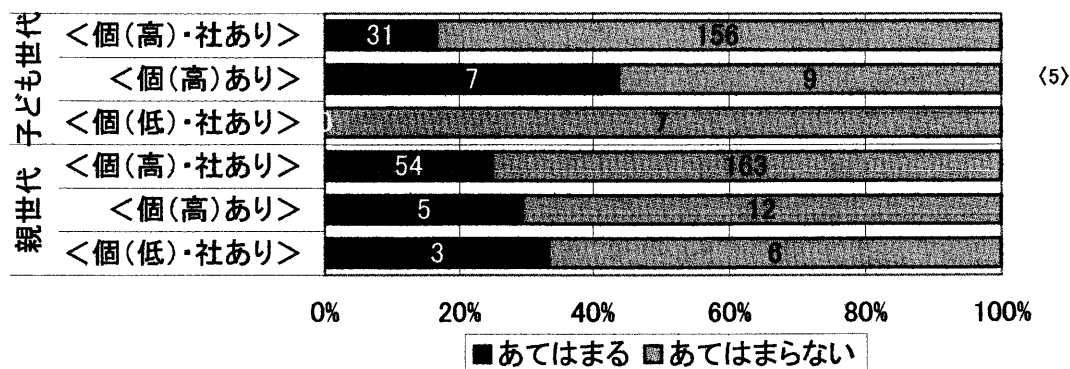


図8-2-3-1-3 親子関係(本音で話す)と家庭における居場所タイプとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。



※グラフ内数値は件数。

＜＞内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

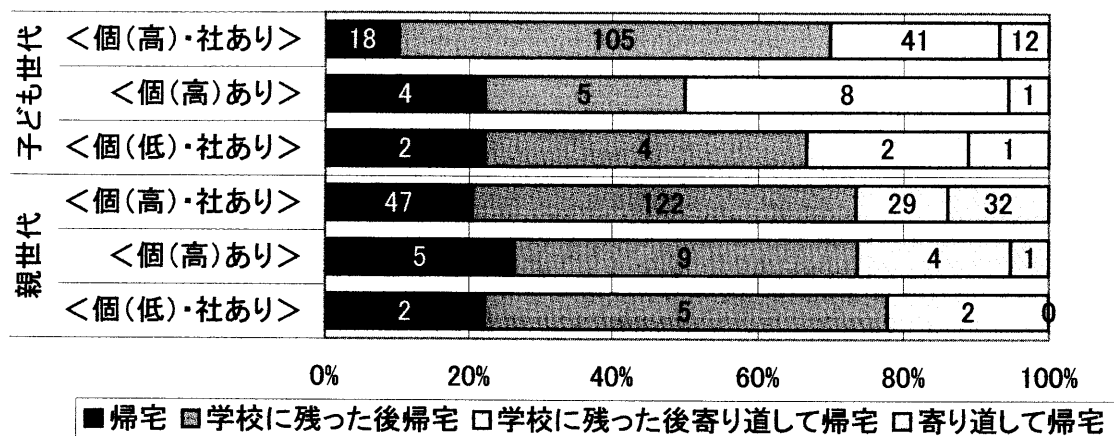


図8-3-1-1 平日の行動パターンと家庭における居場所タイプとの関連(両世代)

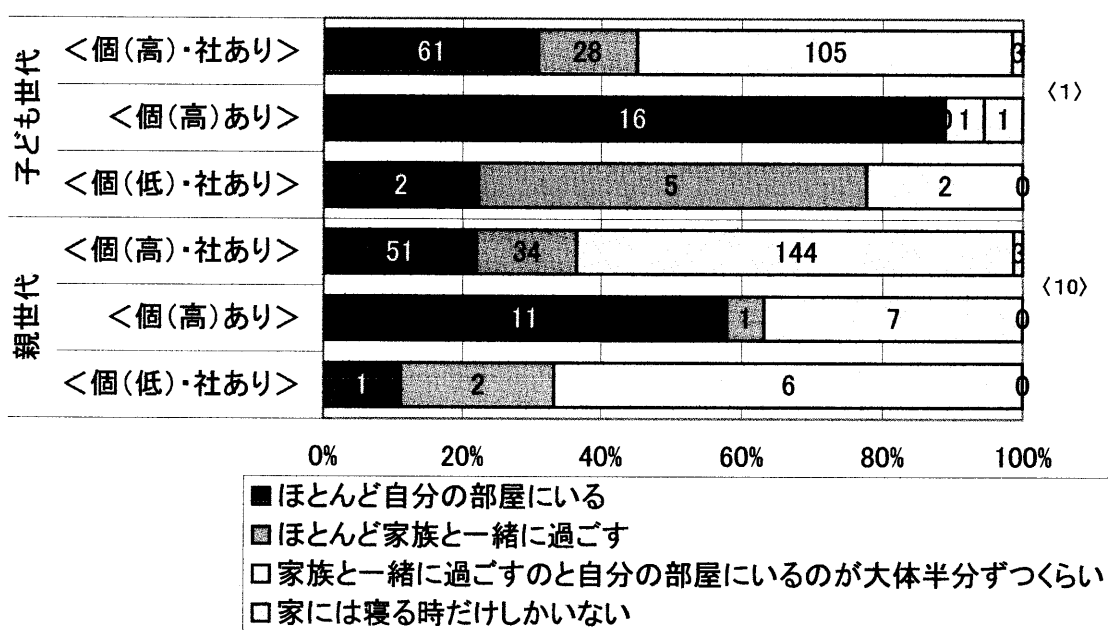


図8-3-1-2 家庭における行動パターンと家庭における居場所タイプとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

<内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

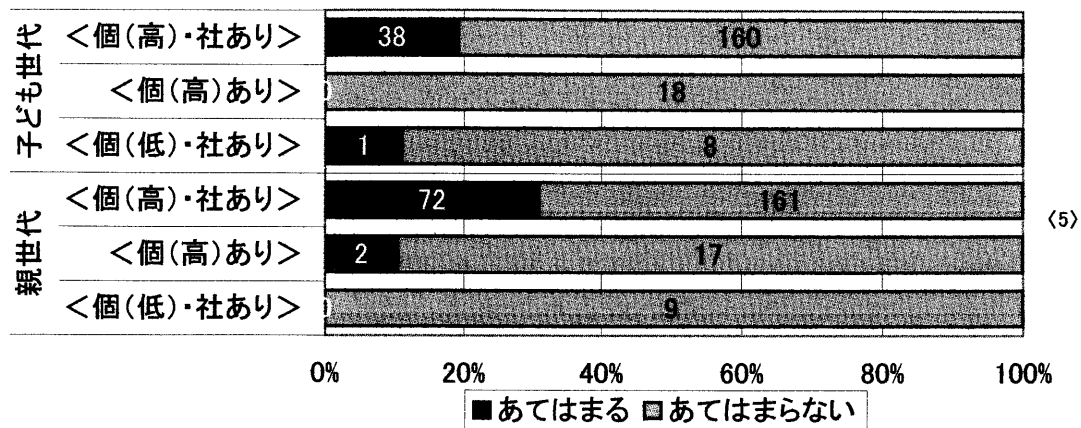


図8-3-1-3-1 家庭における交流(友達・直接)と家庭における居場所タイプとの関連(両世代)

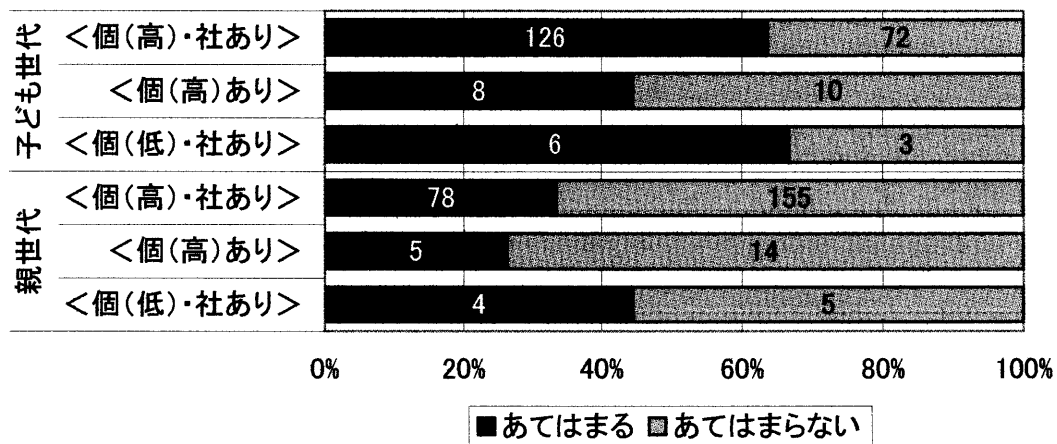


図8-3-1-3-2 家庭における交流(友達・間接)と家庭における居場所タイプとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

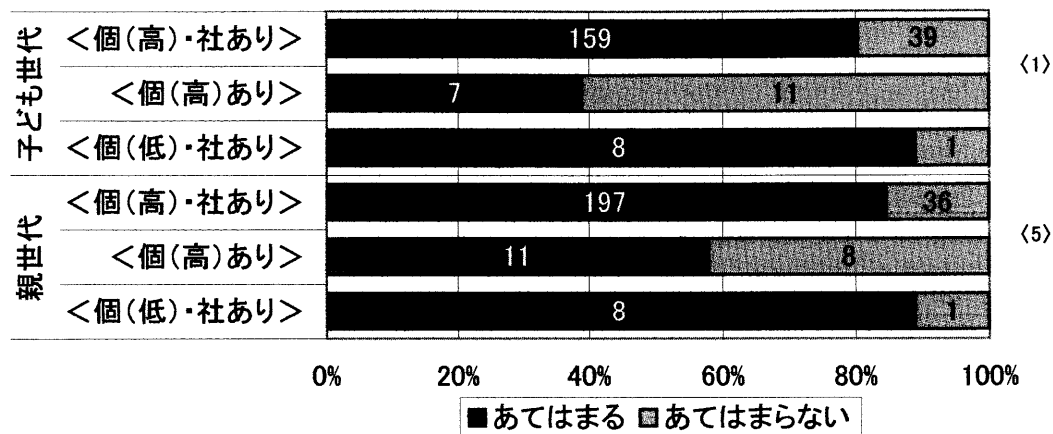


図8-3-1-3-3 家庭における交流(家族)と家庭における居場所タイプとの関連(両世代)

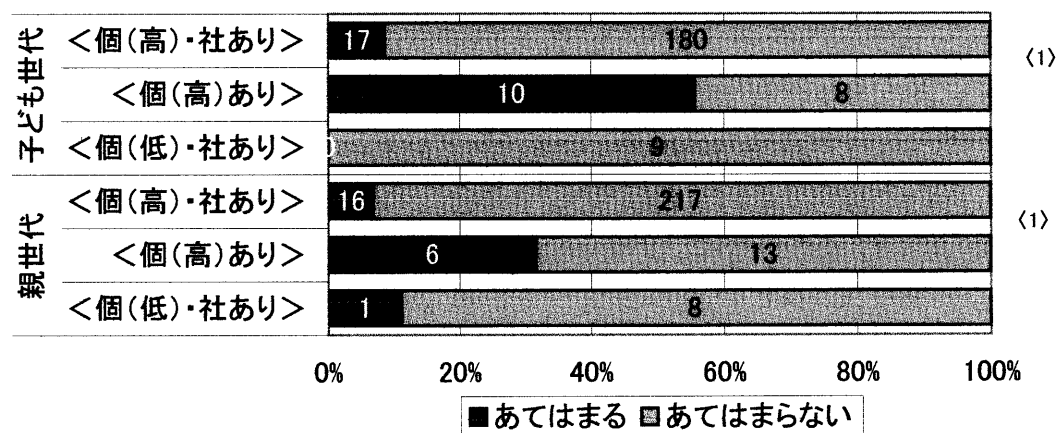


図8-3-1-3-4 家庭における交流なしと家庭における居場所タイプとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

<内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

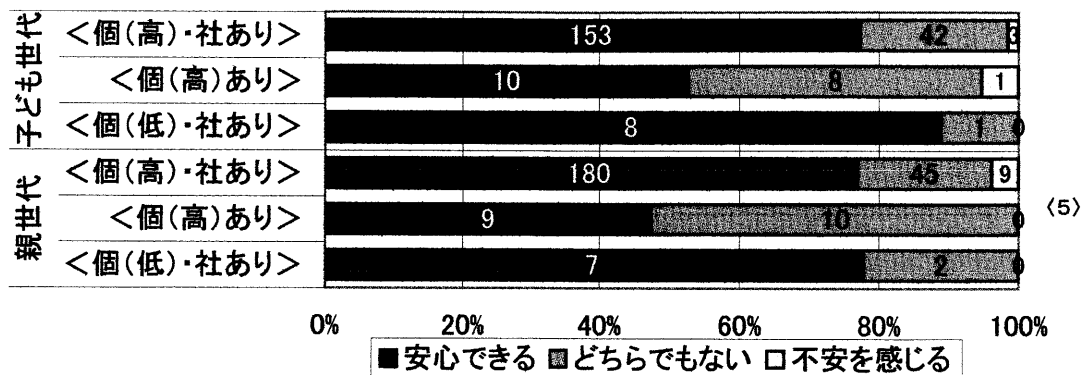


図8-3-2-1-1 心理状態(安心感)と家庭における居場所タイプとの関連 (両世代)

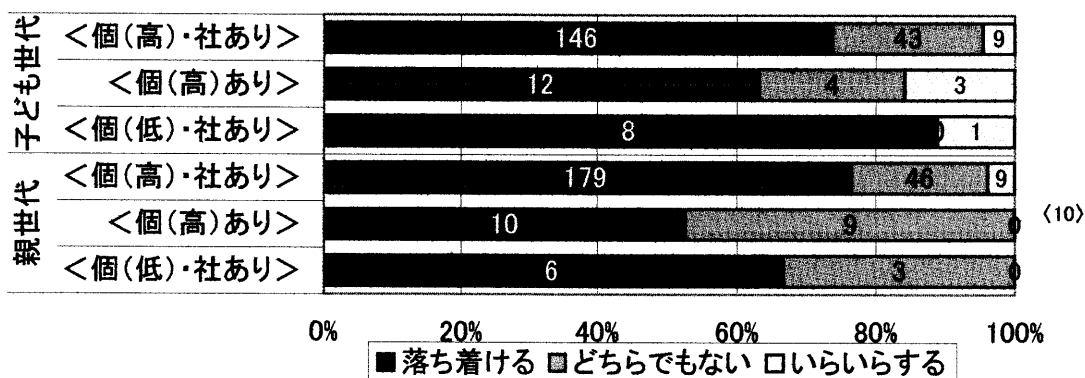


図8-3-2-1-2 心理状態(安定感)と家庭における居場所タイプとの関連 (両世代)

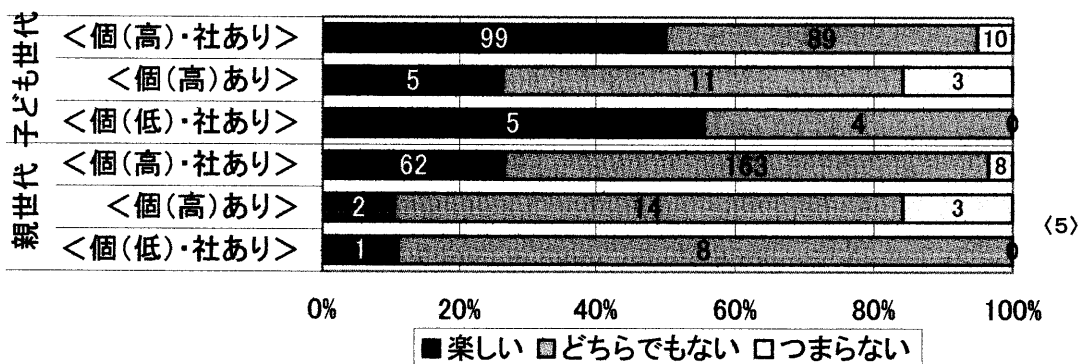


図8-3-2-1-3 心理状態(快感)と家庭における居場所タイプとの関連 (両世代)

※グラフ内数値は件数。

<内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

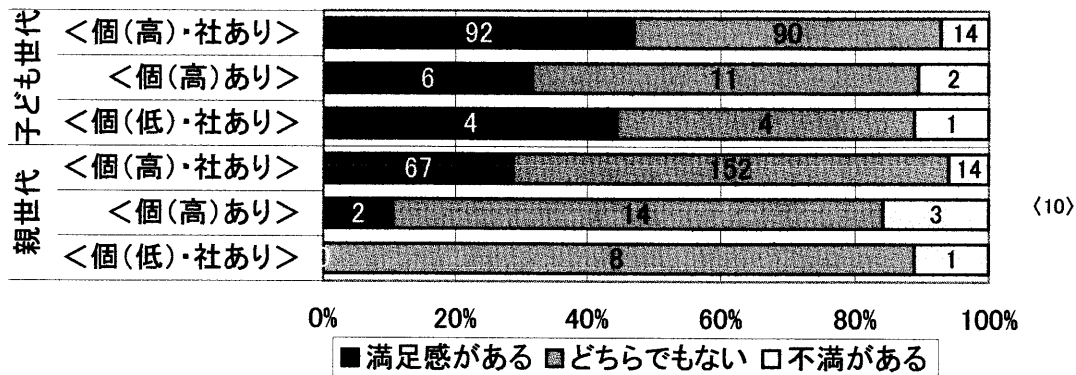


図8-3-2-1-4 心理状態(満足感)と家庭における居場所タイプとの関連(両世代)

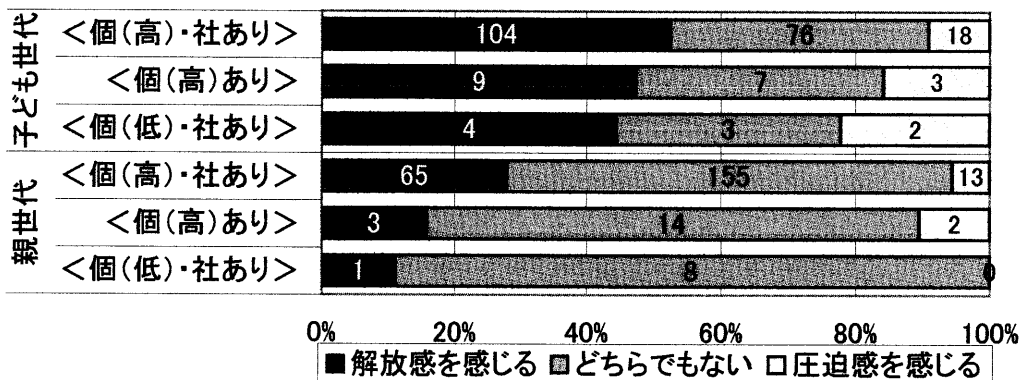


図8-3-2-1-5 心理状態(解放感)と家庭における居場所タイプとの関連(両世代)

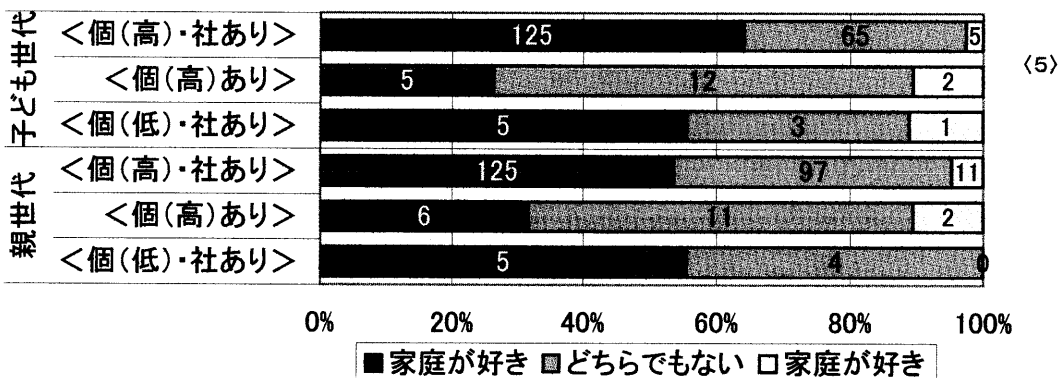


図8-3-2-1-6 心理状態(好感)と家庭における居場所タイプとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

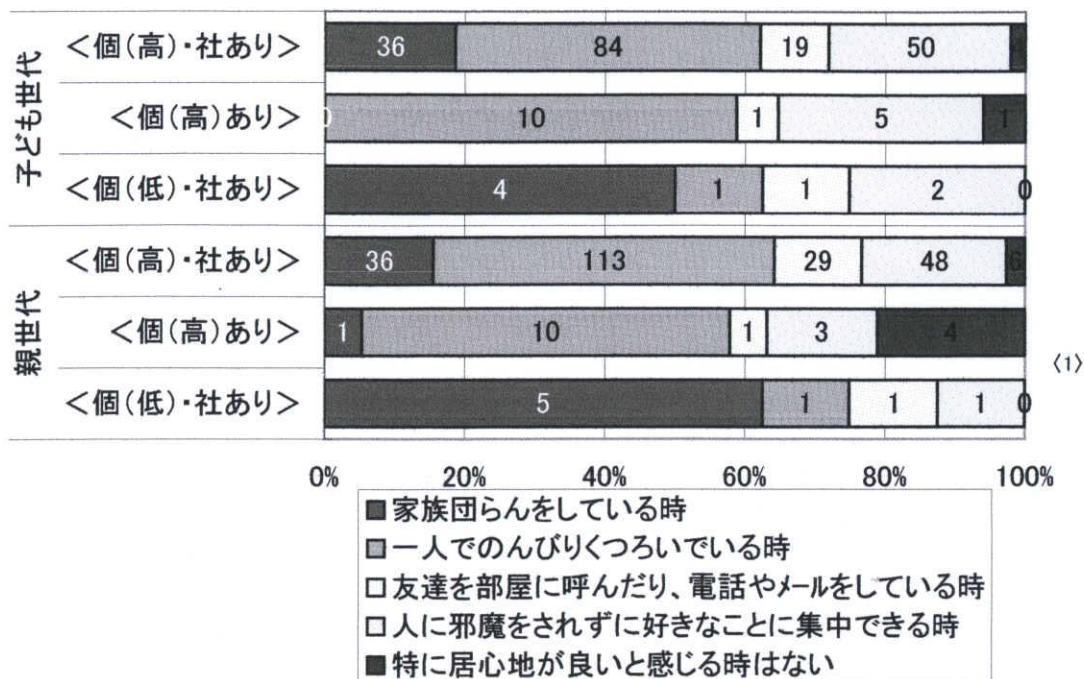


図8-3-2-2 家庭における居心地と家庭における居場所タイプとの関連(両世代)

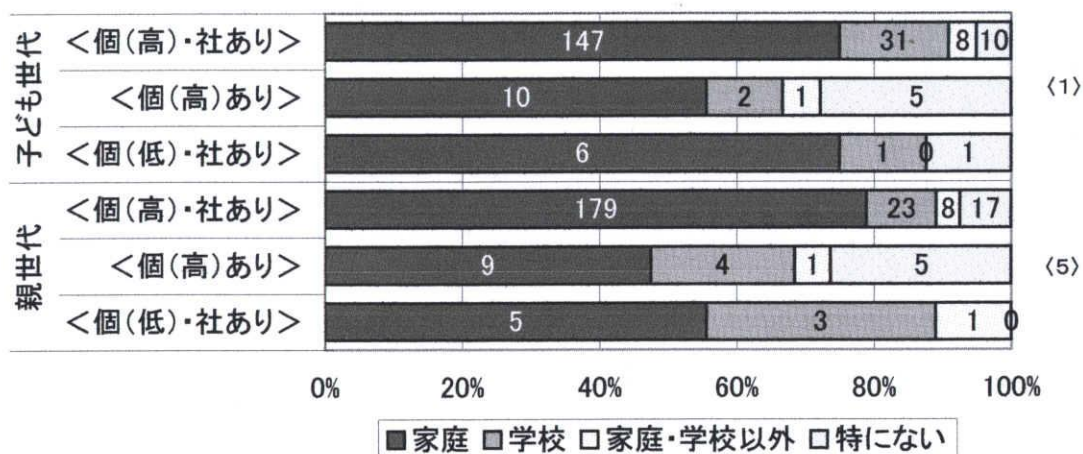
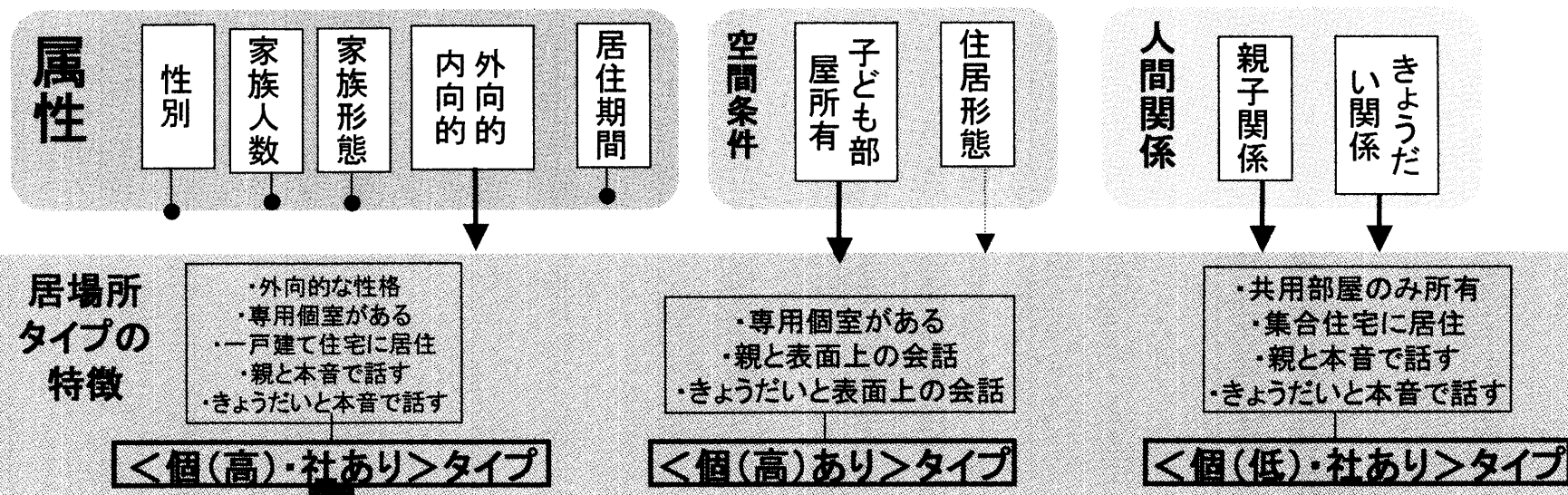


図8-3-2-3 居心地良い場所と家庭における居場所タイプとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

形成要因



居場所所有が及ぼす影響

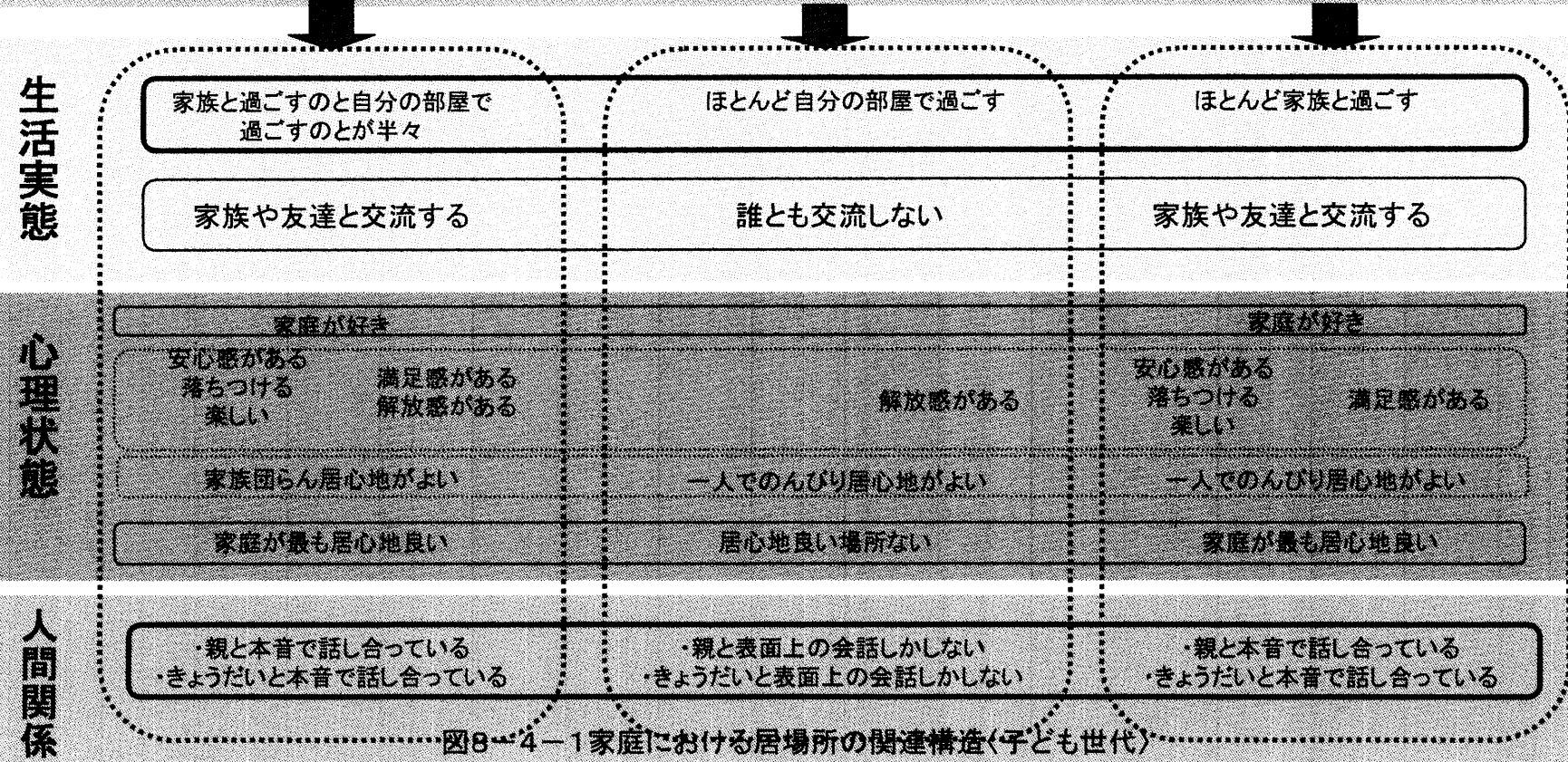


図8-4-1 家庭における居場所の関連構造<子ども世代>

形成要因

属性

性別

家族人数

家族形態

性格

居住期間

空間条件

子ども部屋所有

住居形態

人間関係

親子関係

きょうだいの関係

居場所
タイプ
の特徴

・専用個室がある
・一戸建て住宅に居住
・親と本音で話す
・きょうだいと本音で話す

・欠損家族が多い
・専用個室がある
・親と表面上の会話

・共用部屋のみ所有
・集合住宅に居住
・親と本音で話す
・きょうだいと本音で話す

<個(高)・社あり>タイプ

<個(高)あり>タイプ

<個(低)・社あり>タイプ

生活実態

家族と過ごすのと自分の部屋で過ごすのが半々

ほとんど自分の部屋で過ごす

ほとんど家族と過ごす

家族や友達と交流する

誰とも交流しない

家族や友達と交流する

心理状態

安心感がある

楽しい

安心感がある

落ちつける

満足感がある

満足感がある

解放感を感じる

家庭が好き

家庭が好き

家族団らん居心地がよい

一人でのんびり居心地がよい

一人でのんびり居心地がよい

家庭が最も居心地良い

居心地良い場所ない

人間関係

・親と本音で話し合っている
・きょうだいと本音で話し合っている

・親と表面上の会話しかない

・親と本音で話し合っている
・きょうだいと本音で話し合っている

居場所所有が及ぼす影響

図8-4-2 家庭における居場所の関連構造(親世代)

第九章 親世代・子ども世代比較にみる学校における高校生の居場所の関連構造

本章では、学校における居場所の関連構造について検討する。家庭の場合（第八章）と同様の方法で、まず第一節において、本章の分析軸となる学校における居場所タイプを設定する。次に、第二節・第三節において、学校における居場所の関連構造について「居場所の形成要因」と「居場所所有が及ぼす影響」の2側面を明らかにするため、表8-1に示す項目と学校における居場所タイプとの関連を検討する。

第一節 学校における居場所タイプの設定

本節では、本章の分析軸となる、学校における居場所タイプの設定を行なう。居場所タイプについて、第四章第四節6. でみた9つの居場所パターンをパターンのもつ意味別で集約し、タイプ分けを行なう。両世代とも、学校は社会的居場所を中心に所有しているため、社会的居場所に重点をおき、9パターンを集約する。その集約方法は、社会的居場所については、低次元・高次元の社会的居場所を区別して捉え、個人的居場所については、次元を区別せずに居場所タイプを設定する。その結果以下のように集約できる。

9パターン中、「①個人的居場所（高次元）・社会的居場所（高次元）あり」と「④個人的居場所（低次元のみ）・社会的居場所（高次元）あり」は＜高次元の社会的居場所及び、個人的居場所をもつケース＞である。「⑦社会的居場所（高次元）あり」は＜高次元の社会的居場所はあるが、個人的居場所はもたないケース＞である。「②個人的居場所（高次元）・社会的居場所（低次元のみ）あり」と「⑤個人的居場所（低次元のみ）・社会的居場所（低次元のみ）あり」は＜低次元の社会的居場所及び、個人的居場所をもつケース＞である。「⑧社会的居場所（低次元のみ）あり」は＜低次元の社会的居場所のみもつケース＞である。「③個人的居場所（高次元）あり」と「⑥個人的居場所（低次元のみ）あり」は＜個人的居場所のみもつケース＞である。「⑨居場所なし」は＜個人的居場所も社会的居場所ももたないケース＞である。このうち、＜低次元の社会的居場所のみもつケース＞と＜個人的居場所のみもつケース＞と＜個人的居場所も社会的居場所ももたないケース＞はどれも少数であり、統計的データには適さないため、学校における居場所タイプからは除くと、居場所タイプは3タイプに集約される。学校における居場所タイプを図9-1に示す。

第一に、＜高次元の社会的居場所及び、個人的居場所あり＞は、社会的居場所は高次元の居場所も所有し、個人的居場所も所有するタイプであり、学校においてバランスよく居場所を所有しているものといえる。全体の8割を占める。以下では＜社（高）・個あり＞と示す。

第二に、＜高次元の社会的居場所はあるが、個人的居場所はもたないケース＞は社会的居場所は十分に所有しているが、個人的居場所はないタイプである。全体の1.5～2割を占める。以下では＜社（高）あり＞と示す。

第三に、＜低次元の社会的居場所及び、個人的居場所をもつケース＞は個人的居場所は所有しているが、社会的居場所は低次元の居場所しか所有していないタイプである。全体

の約0.5割程度と少数である。以下では〈社（低）・個あり〉と示す。

世代別の傾向を比較すると、カイ二乗検定において10%水準の有意差があり、世代でやや違いがみられた。個人的居場所を所有しない〈社（高）あり〉は〈子ども世代〉の方が若干多いという傾向がみられた。しかし、あまり大きい違いではなく、世代を通してほぼ同じ傾向といえる。

以上より、学校において、両世代とも社会的居場所は高次元の居場所を所有しており、個人的居場所も所有しているというバランスのとれた居場所タイプのものがほとんどであることが捉えられた。しかし、個人的居場所を所有できていないものも、2割程度みられ、一日の大半を過ごす学校において十分に居場所を所有できていないものも多いことが捉えられた。

第二節 学校における居場所の形成要因

本節では、学校における居場所を形成する要因を明らかにするため、「学校における居場所の形成要因」になる要素をもつと考えられる、「高校生の属性」「学校における人間関係」と学校における居場所タイプとの関連を検討する。

1. 高校生の属性と居場所タイプとの関連

高校生の属性別に学校における居場所タイプの特徴を捉える。なお、属性は、①性別、②性格、③居住期間の3項目について検討した。

① 性別

性別からみた居場所タイプについて、図9-2-1-1に示す。

〈子ども世代〉においては、カイ二乗検定において5%水準の有意差、〈親世代〉においては1%水準の有意差があり、性別の違いにより居場所タイプに特徴がみられた。両世代とも、女子は〈社（高）・個あり〉〈社（高）あり〉が多く、男子は〈社（低）・個あり〉が多く、女子の方が高次元の社会的居場所を所有しているものが多いという特徴が捉えられた。これは、思春期において女子の方が集団で行動するという性質が表れているのではないかと考えられる。

② 性格

性格の3側面〈外向性—内向性〉〈プラス思考—マイナス思考〉〈協調性—自己中心的〉からみた居場所タイプについて、図9-2-1-2-1～3に示す。

〈子ども世代〉においては、性格の〈外向性—内向性〉の側面と居場所タイプとの関連がややみられた。カイ二乗検定における有意差はなかったが、外向的な性格のものは〈社（高）・個あり〉〈社（高）あり〉がやや多いという傾向がみられた。外向的な性格のものは人との関係も築きやすく、学校に高次元の社会的居場所を所有できることにつながっているといえる。性格の他の側面と居場所タイプとの間には特に関連はみられなかった。

〈親世代〉においては、性格の〈プラス思考—マイナス思考〉の側面と居場所タイプと

の関連において、カイ二乗検定の5%水準の有意差があり、性格の違いにより居場所タイプにやや特徴がみられた。プラス思考の性格のものは、〈社（高）・個あり〉〈社（低）・個あり〉が多いことが捉えられた。〈社（高）・個あり〉〈社（低）・個あり〉の特徴は、個人的居場所を所有しているタイプである点である。このことから、プラス思考のものは、嫌なことがあった時でも自分を取り戻せるような個人的居場所を学校にも所有できているのではないかと推測される。また、〈子ども世代〉と同様に、〈外向性—内向性〉の側面において、検定による有意差はないものの、外向的な性格のものの方が高次元の社会的居場所を所有しているものが多いという傾向がみられた。〈協調性—自己中心的〉の側面と居場所タイプとは関連がみられなかった。

以上より、性格の〈外向性—内向性〉の側面においては、両世代とも同様の傾向であり、外向的な性格のものは高次元の社会的居場所を所有しているタイプが多い傾向が捉えられた。〈プラス思考—マイナス思考〉の側面においては、〈親世代〉ではやや関連がみられたが、〈子ども世代〉においては関連はみられなかった。〈協調性—自己中心的〉の側面においては、両世代とも居場所タイプとの関連はみられなかった。

③ 居住期間

居住期間別にみた、居場所タイプについて図 9-2-1-3 に示す。

両世代とも、居住期間と居場所タイプとの間に関連はみられず、居住期間の違いによる、居場所タイプの特徴はみられなかった。

2. 学校における人間関係と居場所タイプとの関連

学校における人間関係別に学校における居場所タイプの特徴を捉える。なお、学校における人間関係については、①先生との関係、②友人関係、③先生や友人以外の知人（先輩や後輩など）との関係の3項目について検討した。

① 先生との関係

先生との関係別にみた、居場所タイプについて、図 9-2-2-1 に示す。

〈親世代〉においては、カイ二乗検定における10%水準の有意差があり、居場所タイプにやや特徴がみられた。本音で話す先生がいるものは、〈社（高）・個あり〉がやや多いことが捉えられ、先生との関係が良いものは学校に居場所を十分に所有していると見える。

〈子ども世代〉においては、カイ二乗検定における有意差はみられなかったが、〈親世代〉と同様の傾向である。先生と親しい関係をもっているものは、学校に居場所を十分に所有できているものが多いという傾向が捉えられた。

② 友人関係

友人関係別にみた、居場所タイプについて、図 9-2-2-2 に示す。

〈子ども世代〉では、カイ二乗検定で5%水準の有意差があり、居場所タイプにやや特徴がみられた。本音で話し合える友達が多いものは、〈社（高）・個あり〉のものが多くことが捉えられた。友達と親しい関係のものは、学校に居場所を十分に所有しているタイプが多いことが明らかになった。

〈親世代〉では、カイ二乗検定で1%水準の有意差があり、居場所タイプに特徴がみられた。〈子ども世代〉と同様の傾向であり、友達と親しい関係のものは、学校に居場所を十分に所有しているタイプが多いことが明らかになった。

③ 先生や友人以外の人（先輩や後輩など）との関係

先生や友人以外の知人（先輩や後輩など）（以下、知人と示す）との関係別にみた、居場所タイプについて、図 9-2-2-3 に示す。

〈親世代〉においては、カイ二乗検定で10%水準の有意差があり、居場所タイプにやや特徴がみられた。先生や友人関係と同様に、本音で話せる知人の多いものは、学校に居場所を十分に所有しているものが多いことが捉えられた。

〈子ども世代〉においては、検定による有意差はないが、〈親世代〉と同様の傾向がみられた。本音で話す知人の多いものは、学校に十分に居場所を所有しているものが多いことが捉えられた。

3. 本節のまとめ

本節では、学校における居場所の形成要因を明らかにするため、「高校生の属性」と「学校における人間関係」と「学校における居場所タイプ」との関連を検討した。その結果以下のことが明らかになった。

属性と居場所タイプとの関連については、性別から居場所タイプを検討すると、両世代とも女子の方が、高次元の社会的居場所を所有するタイプが多い特徴が捉えられた。性格別にみると、両世代とも外向的な性格の方が、高次元の社会的居場所を所有するタイプが多い傾向である。加えて、〈親世代〉では、プラス思考のものほど、学校に個人的居場所を所有するタイプが多い特徴がみられた。なお、居住期間と居場所タイプとは特に関連はみられなかった。

学校における人間関係と居場所タイプとの関連については、先生との関係別にみると、本音で話し合える先生がいるものほど、学校に居場所を十分所有しているタイプが多い傾向が捉えられた。友人との関係別にみると、本音で話し合える友人が多いものほど、学校に居場所を十分に所有しているタイプが多い特徴が捉えられた。また、先生や友人以外の知人との関係別にみても、本音で話し合える知人が多いものほど、学校に居場所を十分に所有しているタイプが多い傾向が捉えられた。これらのことから、学校における人間関係が良いものほど、学校に高次元の社会的居場所も個人的居場所も両方十分に所有しているタイプが多いことが捉えられ、特に友人関係が大きく関わっていることが明らかになった。

以上より、居場所の形成要因においては、世代を通してほぼ同様の傾向である。性格別

にみた場合においては世代で傾向がやや異なっているが、これは、〈親世代〉のデータは25～35年前の記憶を頼ったものであり、厳密な考察はできないため、世代別の違いの原因を追究することはできず、更なる考察は今後の課題である。

第三節 学校における居場所所有が及ぼす影響

本節では、学校における居場所所有が及ぼす影響について明らかにするため、学校における居場所所有が何らかの影響を与えている可能性のある「生活実態」「心理状態」「人間関係」と学校における居場所タイプとの関連を検討する。「人間関係」については、「居場所の形成要因（本章第二節）」の側面からも検討したが、居場所を所有することで何らかの影響をうけることも考えられるため、関連構造の両側面から検討する。

1. 居場所タイプと生活実態との関連

学校における居場所タイプ別に生活実態を検討し、居場所所有が生活実態に何らかの影響をあたえているかどうかを検討する。なお、生活実態については、①平日の行動パターン、②学校における放課後の過ごし方の2項目である。

① 平日の行動パターン

学校における居場所タイプ別にみた平日の行動パターンについて、図9-3-1-1に示す。

両世代とも、カイ二乗検定による有意差はなく、居場所タイプは、平日の行動パターンにあまり影響を与えていないと考えられる。

② 学校における放課後の過ごし方

学校における居場所タイプ別にみた学校における放課後の過ごし方について、図9-3-1-2に示す。

両世代とも、カイ二乗検定による有意差はなく、居場所タイプは、学校における放課後の過ごし方にあまり影響を与えていないと考えられる。

2. 居場所タイプと心理状態との関連

学校における居場所タイプ別に学校における心理状態を検討し、居場所所有が学校における心理状態に何らかの影響を与えているのかどうか検討する。なお、学校における心理状態については、①学校における6つの側面からみる心理状態、②学校における居心地が良いと感じる時、③最も居心地が良いと感じる場所の3項目について検討した。

① 学校における6つの側面からみる心理状態

学校における居場所タイプ別にみた、学校における心理状態について、図9-3-2-1-1～6に示す。

〈子ども世代〉の傾向を述べる。学校における心理状態と居場所タイプとの関連は、カイ二乗検定における有意差はなく、関連は弱いといえる。しかし、「安心感」「安定感」「快感」「満足感」「解放感」「好感」の全ての側面において同様の傾向がみられた。〈社（高）・

個あり><社（低）・個あり>は、心理状態の良いものがやや多いという傾向が捉えられたことから、学校に個人的居場所を所有しているものの、学校における心理状態の良いものがやや多い傾向であるといえる。このことから、〈子ども世代〉においては、学校に個人的居場所を所有することが心理状態に良い影響を与えていることが捉えられた。

〈親世代〉についてみると、心理状態の側面により、居場所タイプとの関連に違いがみられた。「満足感」と居場所タイプとの関連については、カイ二乗検定で 10%水準の有意差があり若干関連がみられ、〈子ども世代〉の傾向と同様に、<社（高）・個あり><社（低）・個あり>の心理状態が良い傾向が捉えられた。「安心感」と居場所タイプとの関連については、カイ二乗検定において 5%水準の有意差がみられ、<社（高）・個あり>の心理状態が最もよく、<社（低）・個あり>の心理状態はよくないという傾向が捉えられた。「安定感」「解放感」においても、検定による有意差はなかったものの、「安心感」と同様の傾向であり、高次元の社会的居場所を所有しているものほど、学校において「安心感」「安定感」「解放感」を感じているものが多いということが捉えられた。また、「好感」についてはカイ二乗検定において 1%水準の有意差がみられ、<社（高）・個あり>の心理状態が最も良いという傾向が捉えられた。「快楽感」についても、検定による有意差はなかったものの、「好感」と同様の傾向である。学校に十分居場所を所有しているものは、「好感」「快楽感」を感じているものが多いことが捉えられた。以上のことから、〈親世代〉においては、個人的居場所の所有よりも、高次元の社会的居場所を所有する方が心理状態の良さにつながっているといえる。

世代別の傾向を比較すると、学校における心理状態と居場所タイプとの関連は傾向が異なっていることが捉えられた。〈親世代〉においては、高次元の社会的居場所を所有することが心理状態の良さにつながっており、社会的居場所の質が重要である。これは、学校は集団生活の場であり、社会的居場所の中心的な場所となるため、当然のことと思われる。一方、〈子ども世代〉においては、社会的居場所の質よりも個人的居場所の所有の有無が心理状態の良さにつながっており、個人的居場所を所有することが重要となる傾向である。第四章において、〈子ども世代〉では学校における個人的居場所に対する要求率が高く、所有率よりも上まわっていることから、〈子ども世代〉の方が学校に個人的居場所を必要としている傾向が強いことが捉えられたが、これは、個人的居場所の所有が心理状態の良さにやや影響を与えていることが 1つの要因となっているのではないかと考えられる。

② 学校における居心地が良いと感じる時

学校における居場所タイプ別にみた、学校における居心地が良いと感じる時について、図 9-3-2-2 に示す。

〈子ども世代〉についてみると、カイ二乗検定において 5%水準の有意差があり、居場所タイプにより、居心地が良いと感じる時にやや特徴がみられた。<社（高）・個あり>は、「特に居心地が良いと坎じる時はない」というものが最も少なく、学校に居場所を十分に所有しているものは、学校で何らかの状況に居心地の良さを感じているものが多いこと

が捉えられた。居心地の良さを感じる状況についてみると、どの居場所タイプも「休憩中や放課後」に居心地の良さを感じるものが最も多く「授業中など」に居心地の良さを感じるものは最も少ないことから、居場所タイプに関わらず、居心地の良い状況は「休憩中や放課後」であるといえる。一方、＜社（高）・個あり＞のものは部活動をしている時に居心地の良さを感じるものが多いという特徴がみられ、居場所を十分に所有できているものは、休憩中以外の時間に居心地の良さを感じるものも多いことが捉えられた。

〈親世代〉についてみると、カイ二乗検定において5%水準の有意差があり、居場所タイプにより、居心地が良いと感じる時にやや特徴がみられた。＜社（高）・個あり＞は、「特に居心地が良いと感ずる時はない」というものが最も少なく、学校に居場所を十分に所有しているものは、学校で何らかの状況に居心地の良さを感じているものが多いことが捉えられ、〈子ども世代〉と同様の傾向である。

③ 最も居心地が良いと感じる場所

学校における居場所タイプ別にみた、最も居心地が良いと感じる場所について、図 9-3-2-3 に示す。

〈子ども世代〉についてみると、カイ二乗検定において10%水準の有意差があり、居場所タイプにより、最も居心地が良いと感じる場所に若干特徴がみられた。＜社（高）あり＞のものは、最も居心地の良い場所は「家庭」であるか、「特になし」とするものであり、学校を選択しているものはいない。このことから、学校に個人的居場所を所有していないものは、学校が最も居心地の良い場所にはなりにくい傾向があることが捉えられた。すなわち、学校に個人的居場所を所有することが学校の居心地をよくすることにつながっていると考えられる。

〈親世代〉についてみると、カイ二乗検定における有意差はなかったが、〈子ども世代〉とはことなる傾向がみられた。＜社（低）・個あり＞のものはすべて、最も居心地の良い場所は「家庭」であり、学校を選択しているものはいない。このことから、学校に高次元の社会的居場所を所有していないものは、学校が最も居心地の良い場所にはなりにくい傾向があることが捉えられた。すなわち、学校に高次元の社会的居場所を所有することが学校の居心地をよくすることにつながっていると考えられる。

両世代の傾向を比較すると、居場所タイプと最も居心地が良いと感じる場所とは異なった傾向であることが捉えられた。〈親世代〉では、高次元の社会的居場所を所有することが学校の居心地の良さにつながる傾向がみられたが、〈子ども世代〉では個人的居場所の所有が学校の居心地の良さにつながる傾向であり、「学校における6つの側面からみた心理状態（本節①）」と同様の傾向である。このことから、〈子ども世代〉では、学校に個人的居場所を所有することが重要になってきているといえる。

3. 居場所タイプと人間関係との関連

学校における居場所タイプ別に学校における人間関係を検討し、居場所所有が学校にお

ける人間関係に何らかの影響を与えているかどうかを検討する。なお、学校における人間関係については、①先生との関係、②友人関係、③先生や友人以外の人（先輩や後輩など）との関係の3項目について検討した。

① 先生との関係

先生との関係と居場所タイプとの関連について、図 9-2-1-1 に示す。

〈親世代〉においては、カイ二乗検定における 10%水準の有意差があり、居場所タイプにより先生との関係にやや特徴がみられた。〈社（高）・個あり〉のものは、本音で話し合える先生がいるものが多いという特徴が捉えられ、学校に居場所を十分に所有しているものは、先生との関係が良いものが多いといえる。

〈子ども世代〉においては、カイ二乗検定における有意差はみられなかったが、〈親世代〉と同様の傾向である。学校に居場所を十分に所有できているものは、先生との関係が良いものが多い傾向が捉えられた。

② 友人関係

友人関係と居場所タイプとの関連について、図 9-2-1-2 に示す。

〈子ども世代〉では、カイ二乗検定で 5%水準の有意差があり、居場所タイプにより友人関係にやや特徴がみられた。〈社（高）・個あり〉のものは、本音で話し合える友達が多いものが多く、学校に居場所を十分に所有しているタイプは友達と親しい関係のものが多いことが明らかになった。

〈親世代〉では、カイ二乗検定で 1%水準の有意差があり、居場所タイプにより友人関係に特徴がみられた。〈子ども世代〉と同様の傾向であり、学校に居場所を十分に所有しているタイプは友達と親しい関係のものが多いことが明らかになった。

③ 先生や友人以外の人（先輩や後輩など）との関係

先生や友人以外の知人（先輩や後輩など）（以下、知人と示す）との関係と居場所タイプとの関連について、図 9-2-1-3 に示す。

〈親世代〉においては、カイ二乗検定で 10%水準の有意差があり、居場所タイプにより知人との関係にやや特徴がみられた。先生や友人関係と同様に、学校に居場所を十分に所有しているものは、知人との関係がよいものが多いことが捉えられた。

〈子ども世代〉においては、検定による有意差はないが、〈親世代〉と同様の傾向がみられた。学校に十分に居場所を所有しているものは、知人と本音で話しているものが多いことが捉えられた。

4. 本節のまとめ

本節では、居場所所有が及ぼす影響を明らかにするため、「高校生の生活実態」と「学校における心理状態」と「学校における人間関係」それぞれと「学校における居場所タイプ」との関連を検討した。

生活実態との関連をみた場合、「平日の行動パターン」と「学校における放課後の過ごし方」いずれとも関連はみられなかった。本調査における「生活実態」に関する項目では関連はみられなかったが、今後さらに様々な角度から検討する必要がある。

学校における心理状態との関連をみた場合、世代によって異なる特徴が捉えられた。〈親世代〉においては、高次元の社会的居場所を所有しているものの方が、学校における心理状態が良いという特徴が捉えられ、社会的居場所の質が学校における心理状態に影響を与えていることが明らかになった。一方、〈子ども世代〉においては、学校に個人的居場所を所有しているものの方が、学校における心理状態が良いという傾向が捉えられ、個人的居場所所有の有無が心理状態にやや影響を与えていることが明らかになった。これは、〈子ども世代〉において、学校における個人的居場所の所有率や要求率の高さに関係しているものと考えられる。

学校における人間関係との関連をみた場合、学校に十分に居場所を所有しているものほど、学校における人間関係が良いものが多い傾向が捉えられ、特に、友人関係に大きな影響を与えていることが明らかになった。

第四節 本章のまとめ

本章では学校における居場所の関連構造について明らかにするため、学校における「居場所の形成要因」と「居場所所有が及ぼす影響」の 2 側面について検討を行なった。その結果、以下のようなことが明らかになった。なお、学校における居場所の関連構造を模式的に表したものを図 9-4-1,2 に示す。

1. 学校における居場所タイプの設定を行なった結果、〈高次元の社会的居場所及び、個人的居場所あり〉、〈高次元の社会的居場所はあるが、個人的居場所はもたないケース〉、〈低次元の社会的居場所及び、個人的居場所をもつケース〉の 3 タイプに集約され、論文中ではそれぞれ〈社（高）・個あり〉、〈社（高）あり〉、〈社（低）・個あり〉と示している。学校において、両世代とも社会的居場所は高次元の居場所を所有しており、個人的居場所も所有しているという居場所を十分に所有しているタイプのものがほとんどであることが捉えられた。しかし、個人的居場所を所有できていないものも、2 割程度みられ、一日の大半を過ごす学校において十分に居場所を所有できていないものも多いことが捉えられた。

2. 学校における居場所の形成要因について、属性との関連をみると、性別では女子が、性格では外向的な性格のものは、学校に高次元の社会的居場所と個人的居場所の両方を所有するタイプが多い特徴が捉えられた。居住期間と居場所タイプとは特に関連はみられなかった。学校における人間関係との関連をみると、先生や友人、その他の知人と本音で話し合えるような親しい関係を築いているものほど、学校に高次元の社会的居場所と個人的居場所の両方を所有するタイプが多い特徴が捉えられた。特に、友人関係と居場所タイプとの関連が最も強く、友人と親しい関係を持つことが、学校に居場所を十分所有すること

につながっていることが明らかになった。以上より、属性では、性別や性格が居場所形成に関わる面をもっており、友人関係をはじめ人間関係も居場所形成要因の1つであることが捉えられた。

3. 学校における居場所所有及ぼす影響について、生活実態との関連をみると、居場所タイプとの関連はみられなかった。本調査における生活実態の項目では関連はみられなかったが、今後さらに、様々な側面から生活実態と居場所タイプとの関連を検討する必要がある。学校における心理状態との関連をみると、世代によって異なる傾向が捉えられた。〈親世代〉においては、高次元の社会的居場所を所有しているものの方が、学校における心理状態が良いという特徴が捉えられ、社会的居場所の質が学校における心理状態に影響を与えていることが明らかになった。一方、〈子ども世代〉においては、学校に個人的居場所を所有しているものの方が、学校における心理状態が良いという傾向が捉えられ、個人的居場所所有の有無が心理状態にやや影響を与えていることが明らかになった。これは、〈子ども世代〉において、学校における個人的居場所の所有率や要求率の高さに関係しているものと考えられる。

学校における人間関係との関連をみた場合、学校に十分に居場所を所有しているものほど、学校における人間関係が良いものが多い傾向が捉えられ、特に、友人関係に大きな影響を与えていることが明らかになった。

以上より、居場所所有は学校における心理状態や人間関係に影響を与えている状況が捉えられた。〈親世代〉では学校における社会的居場所の質の高さが、学校における心理状態の良さにつながっている特徴である一方で、〈子ども世代〉では、学校における社会的居場所の質よりも個人的居場所を所有することが心理状態の良さにつながっているという特徴が明らかになり、世代により傾向が異なっている。これは、〈子ども世代〉において、学校における居場所の所有率や要求率の高さの要因となっていることが考えられる。また、人間関係においては、高次元の社会的居場所と個人的居場所を両方所有することが、人間関係の良さにつながっていることが捉えられた。

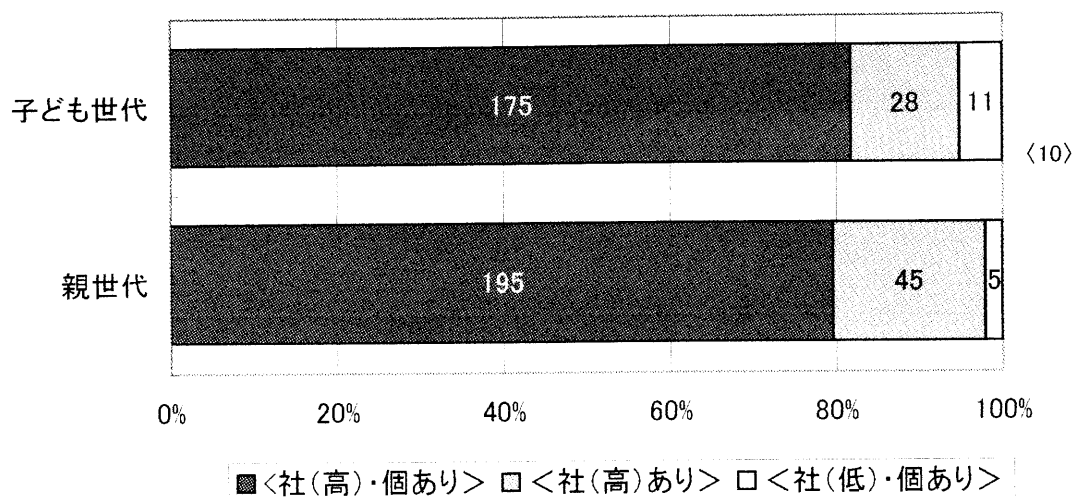


図9-1 学校における居場所タイプ

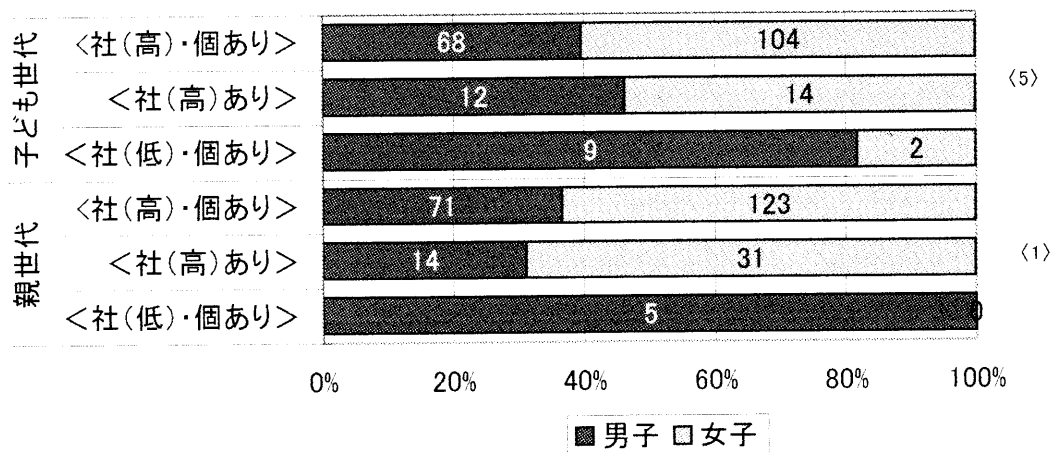


図9-2-1-1 性別と学校における居場所タイプとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

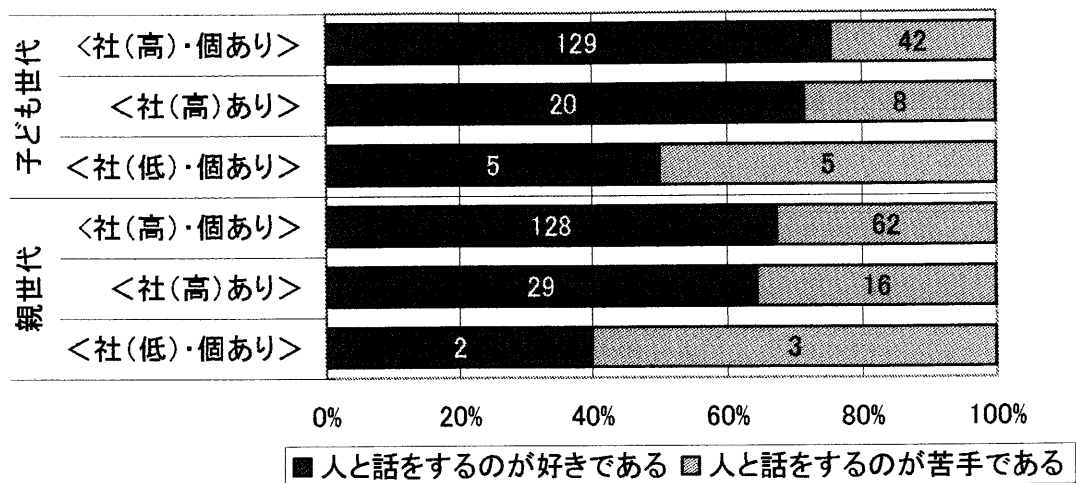


図9-2-1-2-1 性格(外向性—内向性)と学校における居場所タイプとの関連(両世代)

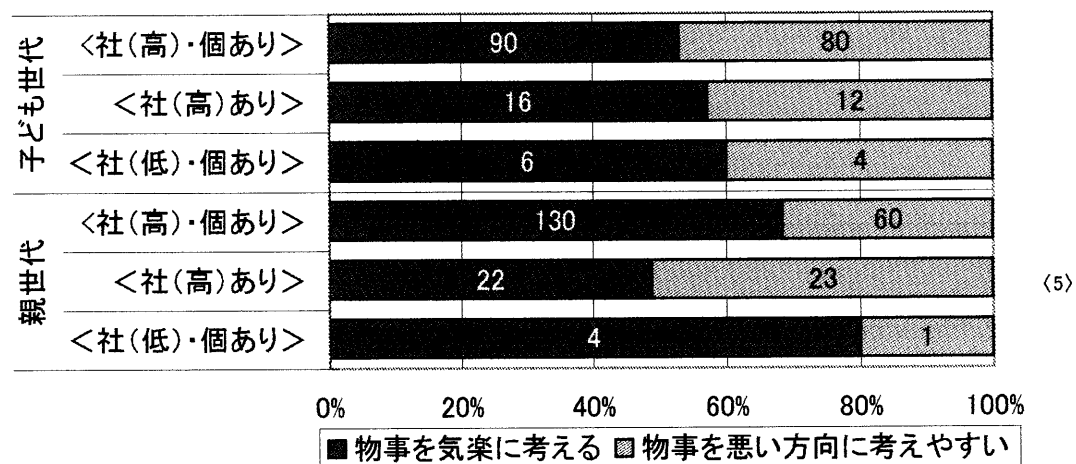


図9-2-1-2-2 性格(プラス思考—マイナス思考)と学校における居場所タイプとの関連(両世代)

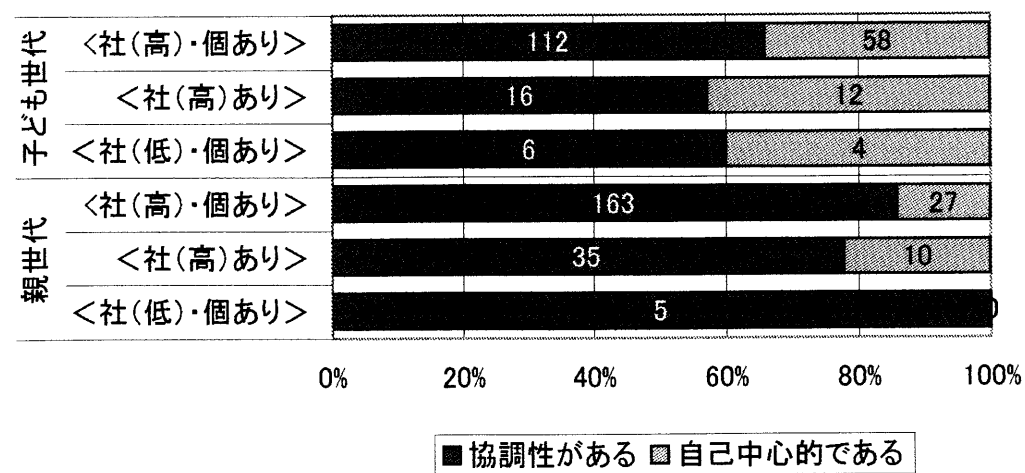


図9-2-1-2-3 性格(協調性—自己中心的)と学校における居場所タイプとの関連(両世代)

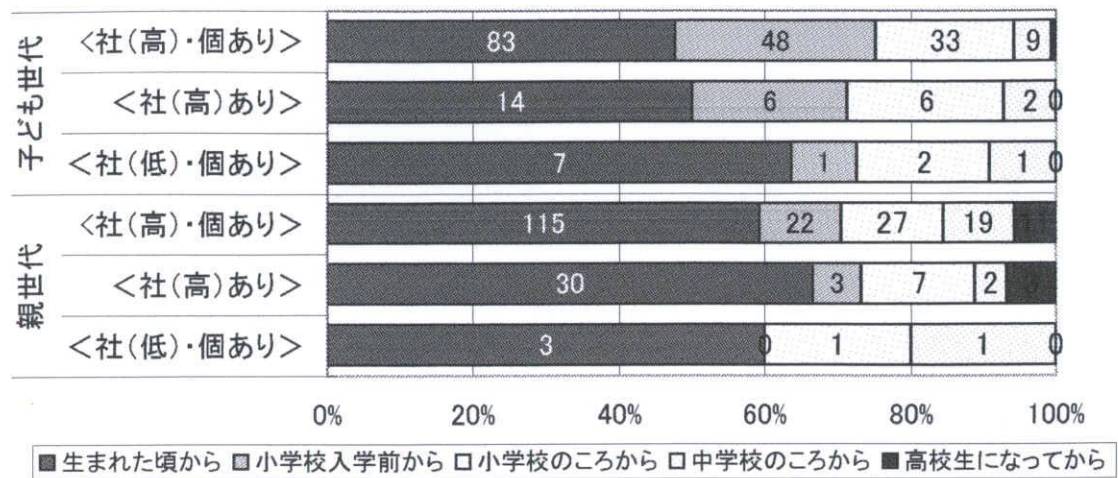


図9-2-1-3 居住期間と学校における居場所タイプとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

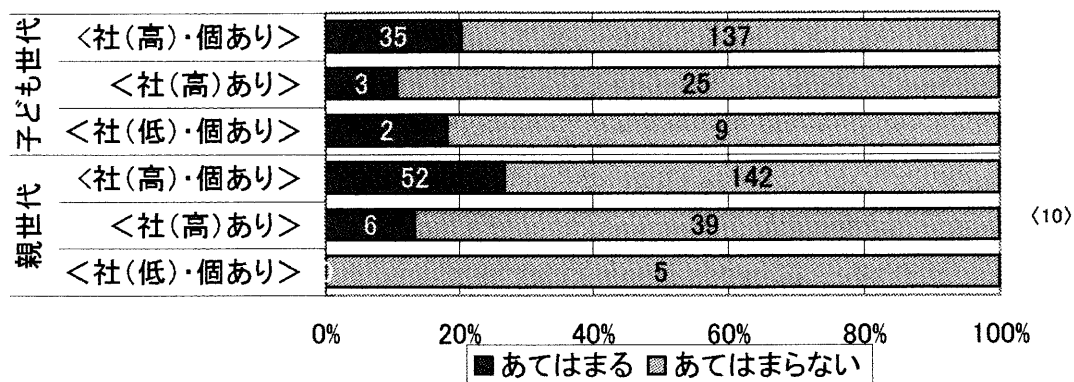


図9-2-1-1 先生との関係(本音で話せる先生がいる)と学校における居場所タイプとの関連(両世代)

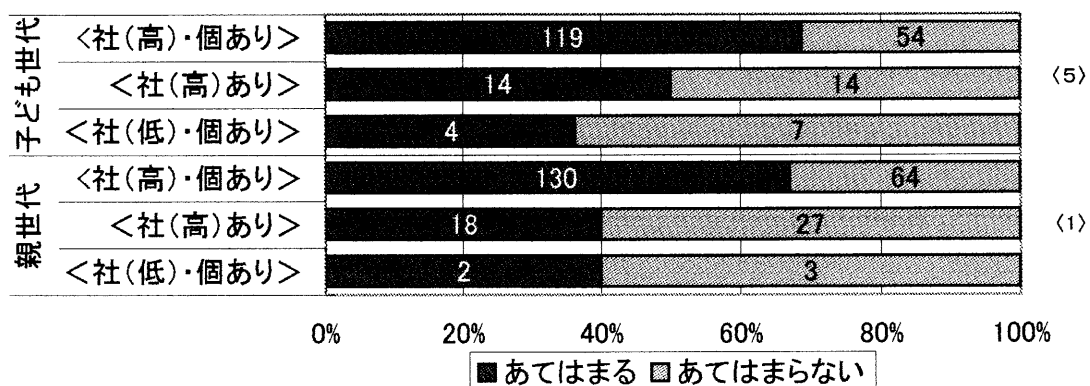


図9-2-1-2 友人関係(本音で話せる友達多い)と学校における居場所タイプとの関連(両世代)

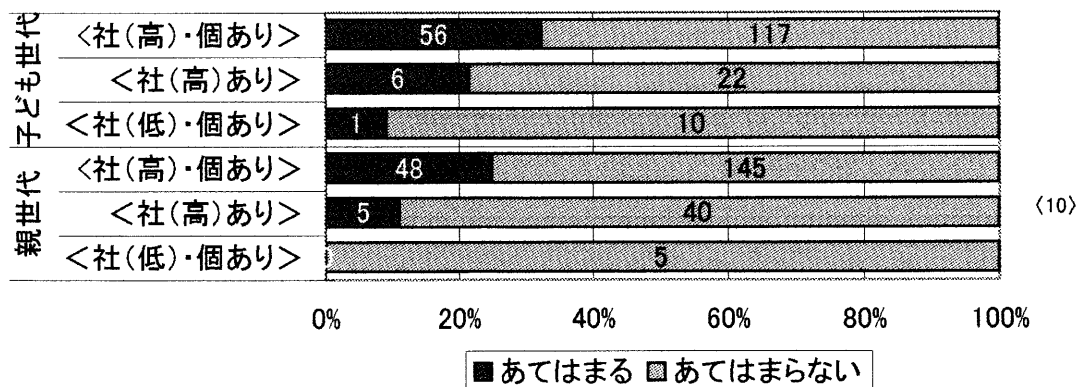


図9-2-1-3 その他の人との関係(本音で話せる人が多い)と学校における居場所タイプとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

<内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

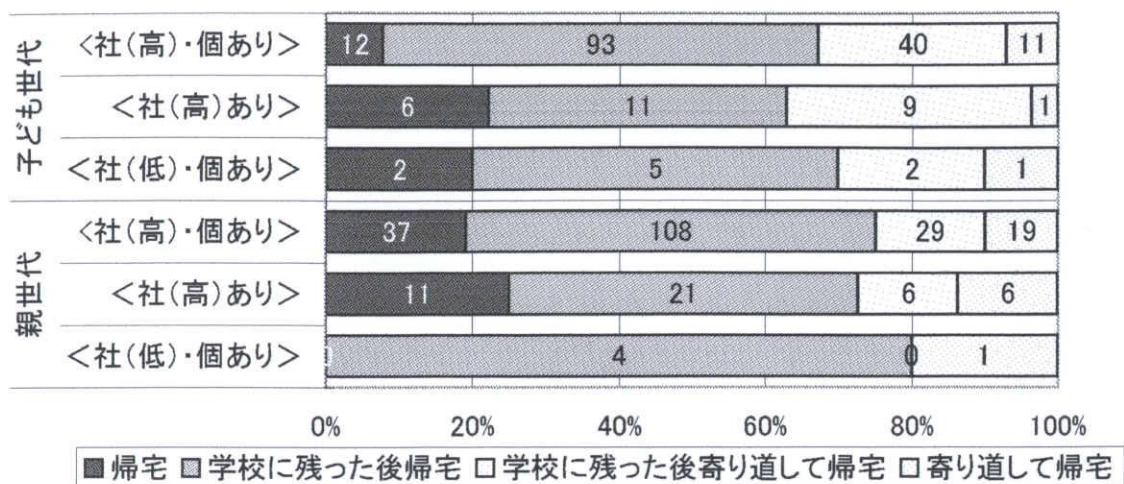


図9-3-1-1 平日の行動パターンと学校における居場所タイプとの関連(両世代)

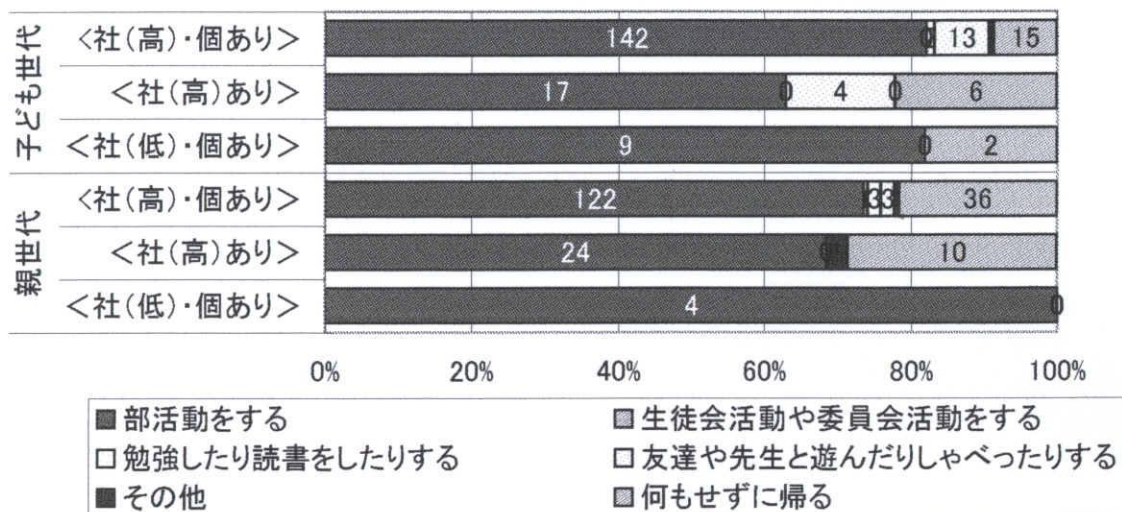


図9-3-1-2 放課後の行動パターン(学校)と学校における居場所タイプとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

<内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

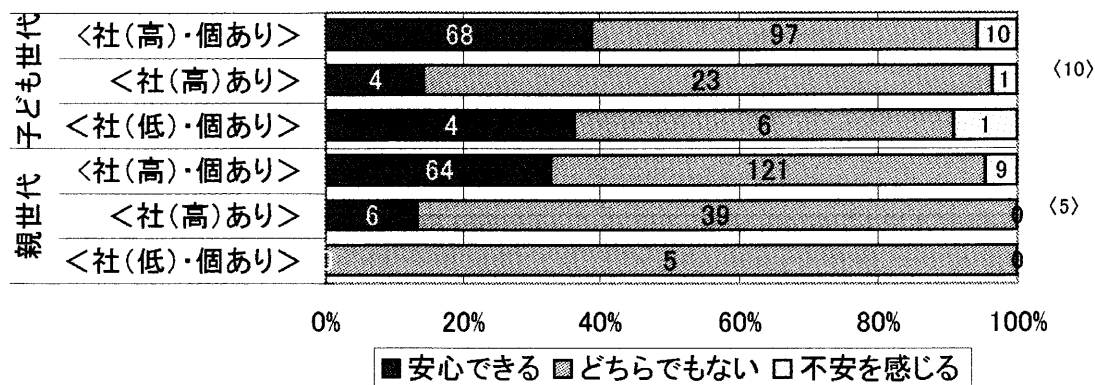


図9-3-2-1-1 心理状態(安心感)と学校における居場所タイプとの関連 (両世代)

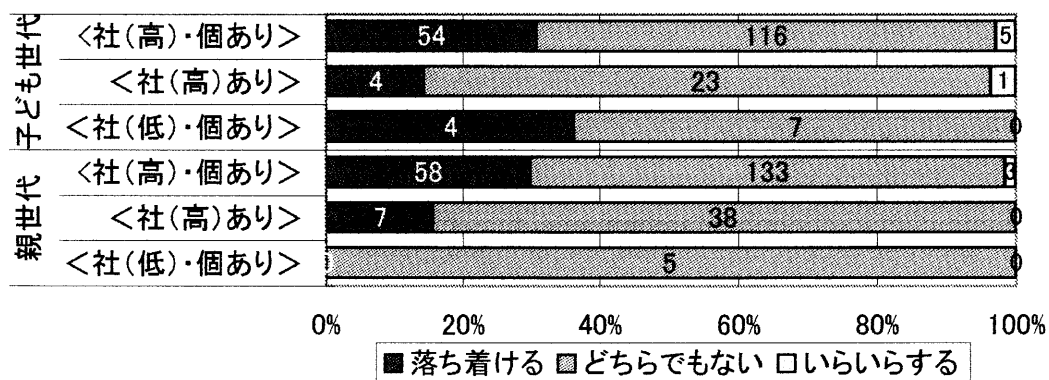


図9-3-2-1-2 心理状態(安定感)と学校における居場所タイプとの関連 (両世代)

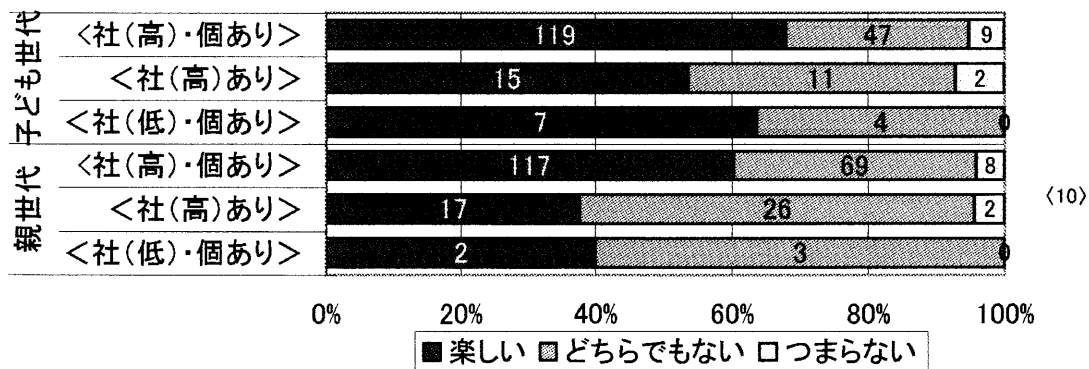


図9-3-2-1-3 心理状態(快楽感)と学校における居場所タイプとの関連 (両世代)

※グラフ内数値は件数。

＜＞内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

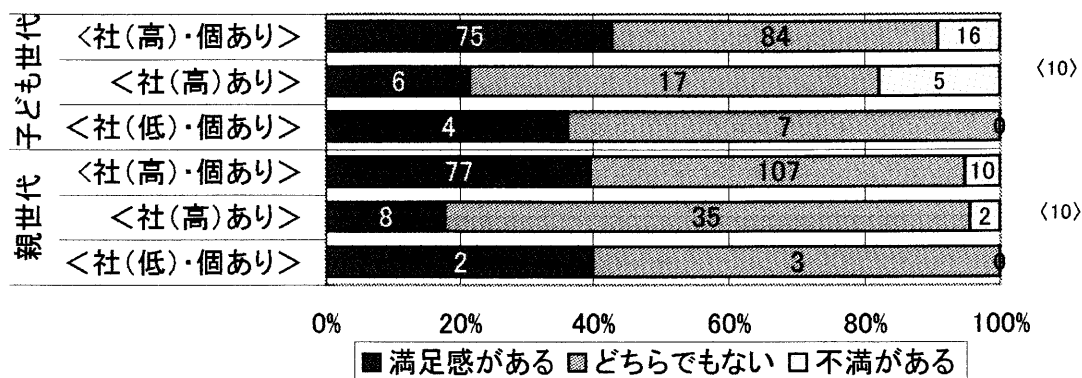


図9-3-2-1-4 心理状態(満足感)と学校における居場所タイプとの関連 (両世代)

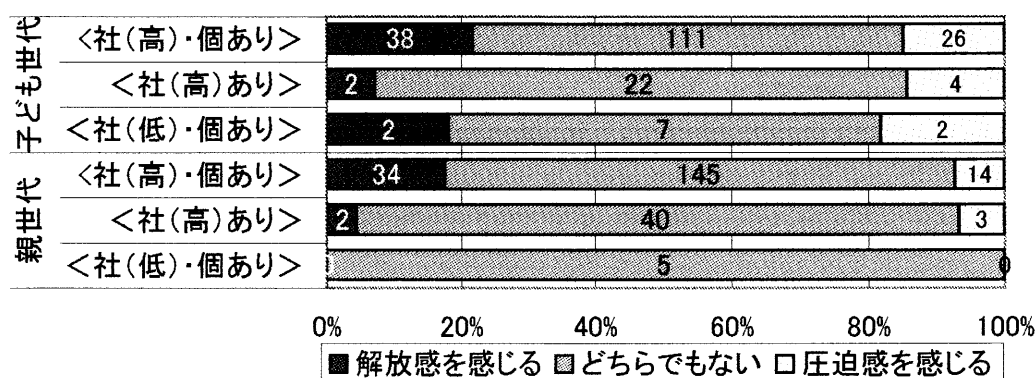


図9-3-2-1-5 心理状態(解放感)と学校における居場所タイプとの関連 (両世代)

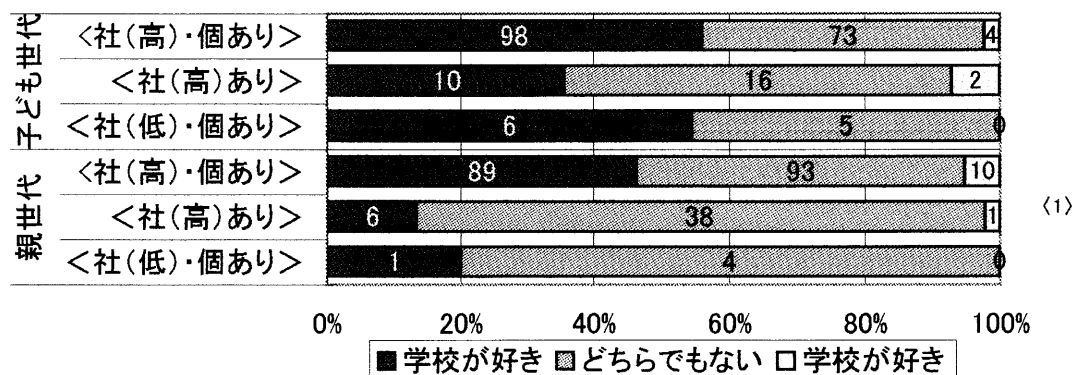


図9-3-2-1-6 心理状態(好感)と学校における居場所タイプとの関連 (両世代)

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

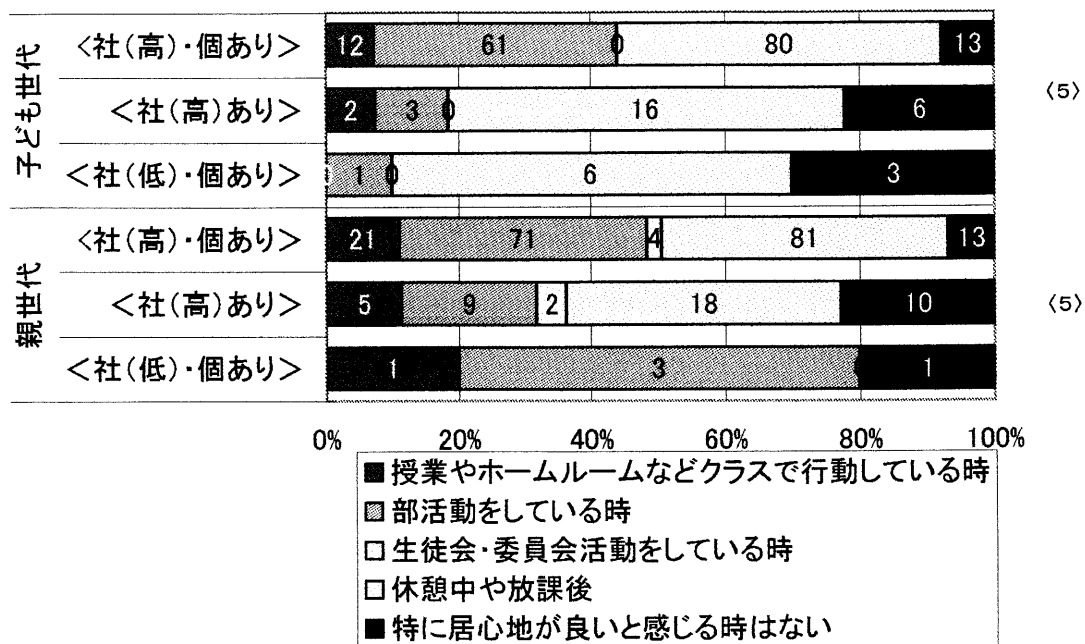


図9-3-2-2 学校における居心地と学校における居場所タイプとの関連(両世代)

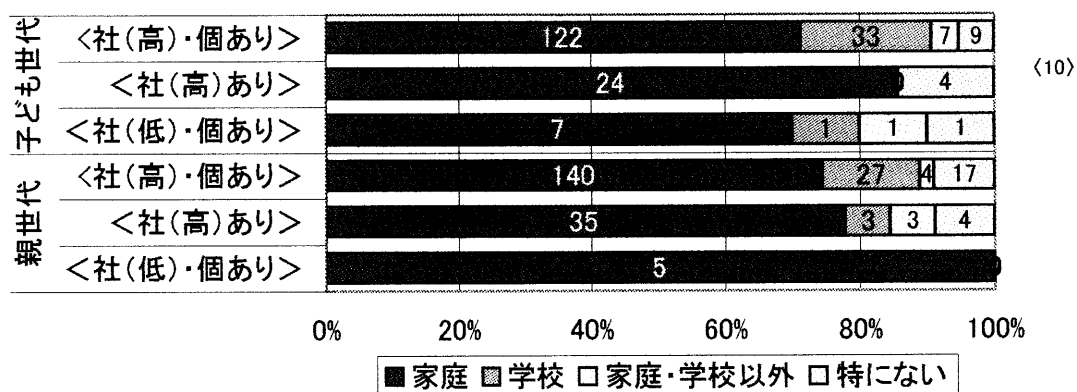


図9-3-2-3 居心地の良い場所と学校における居場所パターンとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

形成要因

学校における居場所の関連構造〈子ども世代〉

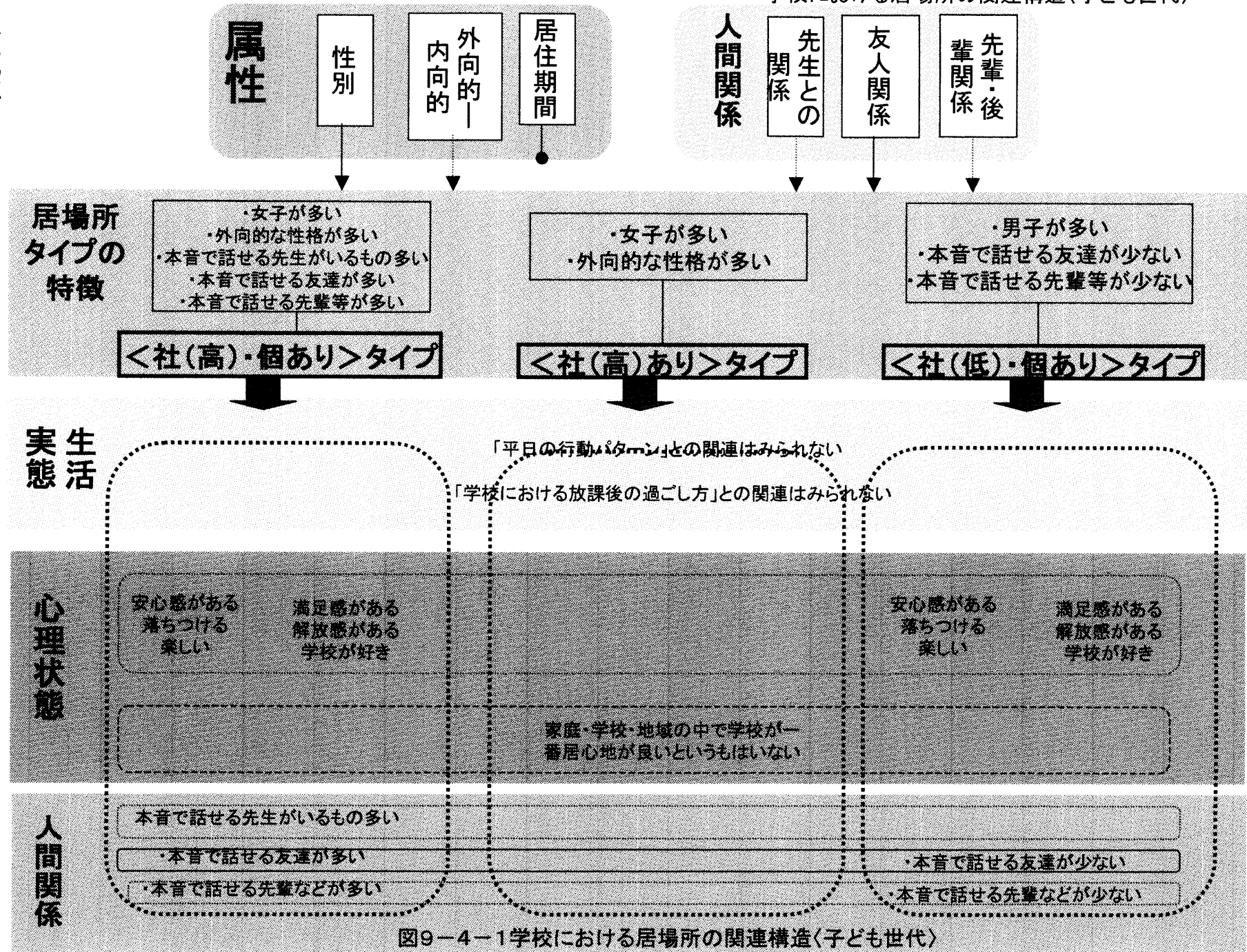


図9-4-1 学校における居場所の関連構造〈子ども世代〉

形成要因

属性

性別

プラス思考
マイナ思考

居住期間

人間関係

先生との
関係

友人関係

先輩・後
輩関係

居場所
タイプ
の特徴

・女子が多い
・プラス思考の性格がやや多い
・本音で話せる先生がいるものが多い
・本音で話せる友達が多い
・本音で話せる先輩等が多い

・女子が多い

・男子が多い
・プラス思考の性格がやや多い
・本音で話せる先輩等が少ない

<社(高)・個あり>タイプ

<社(高)あり>タイプ

<社(低)・個あり>タイプ

生活
実態

心理状態

人間関係

学校が好き

安心感がある

楽しい

満足感がある

落ちつける

解放感がある

本音で話せる先生がいるものが多い

・本音で話せる友達が多い

・本音で話せる先輩などが多い

「平日の行動パターン」との関連はみられない

「学校における放課後の過ごし方」との関連はみられない

学校が好きというもの少ない

安心感を感じるもの少ない

満足感がある

落ちつける

全て最も居心地の良い場所は家庭であるとしている

・本音で話せる先輩等が少ない

居場所所有が及ぼす影響

図9-4-2学校における居場所の関連構造<親世代>

第十章 親世代・子ども世代比較にみる地域における子どもの居場所と関連構造

本章では、地域における居場所の関連構造について検討する。家庭や学校の場合（第八章、第九章）と同様に、まず第一節において、本章の分析軸となる地域における居場所タイプを設定する。次に、第二節・第三節において、地域における居場所の関連構造について、「居場所の形成要因」と「居場所所有が及ぼす影響」の2側面を明らかにするため、表8-1に示す項目と地域における居場所タイプとの関連を検討する。

第一節 地域における居場所タイプの設定

本節では、本章の分析軸となる、地域における居場所タイプの設定を行なう。居場所タイプについて、第五章第三節6. でみた9つの居場所パターンをパターンのもつ意味別で集約し、タイプ分けを行なう。両世代とも、地域は家庭や学校とは異なり、様々な場所があるため、居場所パターンも様々である。そのため、個人的居場所と社会的居場所の所有を総括的に捉えられる居場所タイプを設定する。その結果以下のように集約できる。

9パターン中、「①個人的居場所（高次元）・社会的居場所（高次元）あり」と「②個人的居場所（高次元）・社会的居場所（低次元のみ）あり」と「④個人的居場所（低次元のみ）・社会的居場所（高次元）あり」と「⑤個人的居場所（低次元のみ）・社会的居場所（低次元のみ）あり」の4パターンは＜個人的居場所と社会的居場所を両方所有するケース＞である。次に「③個人的居場所（高次元）あり」と「⑥個人的居場所（低次元のみ）あり」は＜個人的居場所のみ所有するケース＞である。また、「⑦社会的居場所（高次元）あり」と「⑧社会的居場所（低次元のみ）あり」は＜社会的居場所のみ所有するケース＞である。最後に、「⑨居場所なし」は＜個人的居場所と社会的居場所の両方所有しないケース＞である。以上より、地域における居場所タイプは図10-1に示す4タイプに集約される。

第一に、＜個人的居場所と社会的居場所を両方所有するケース＞は地域に個人的居場所と社会的居場所を両方求めるタイプであるといえる。全体の約半数を占め、以下では＜個・社あり＞と示す。

第二に、＜個人的居場所のみ所有するケース＞は、地域に個人的居場所を求めるタイプであるといえる。全体の0.5～1割を占め、以下では＜個のみあり＞と示す。

第三に、＜社会的居場所のみ所有するケース＞は、地域に社会的居場所を求めるタイプであるといえる。全体の約2割を占め、以下では＜社のみあり＞と示す。

第四に、＜個人的居場所と社会的居場所の両方所有しないケース＞は、地域に居場所を所有していないタイプであるといえる。全体の約2割を占める。以下では＜居場所なし＞と示す。

以上より、地域における居場所タイプは4タイプに集約され、最も多いタイプは＜個・社あり＞で、地域に個人的居場所と社会的居場所の両方所有するものであり、家庭や学校と同様の傾向である。しかし、全体を占める割合は約半数でやや少ないことが捉えられた。個人的居場所と社会的居場所のどちらか一方しか所有しない＜個のみあり＞＜社のみあり＞

＞においては、社会的居場所のみ所有するタイプの方が多く、個人的居場所のみ所有するタイプは少数派のタイプである。また、＜居場所なし＞の居場所を所有しないタイプも全体の 2 割を占め、多いことが捉えられ、地域は居場所をもつもの、もたないもの様々であることが明らかになった。

第二節 地域における居場所の形成要因と居場所タイプとの関連

本節では、地域における居場所を形成する要因を明らかにするため、「地域における居場所の形成要因」になる要素をもつと考えられる、「高校生の属性」「地域における空間条件」「地域における人間関係」と地域における居場所タイプとの関連を検討する。

1. 高校生の属性と居場所タイプとの関連

高校生の属性別に地域における居場所タイプの特徴を捉える。なお、属性は、①性別、②性格、③居住期間の 3 項目について検討した。

① 性別

性別からみた居場所タイプについて、図 10-2-1-1 に示す。

両世代とも同様の傾向であり、カイ二乗検定において 1 %水準の有意差があり、性別の違いにより地域における居場所タイプに特徴がみられた。両世代とも、女子は＜社のみあり＞が多く、男子は＜社のみあり＞以外のタイプが多いことが捉えられた。このことから、女子の方が地域において、特に社会的居場所を所有するものが多い傾向が捉えられた。これは、学校における居場所の形成要因と同じ傾向である。

② 性格

性格の 3 側面〈外向性—内向性〉〈プラス思考—マイナス思考〉〈協調性—自己中心的〉からみた居場所タイプについて、図 10-2-1-2-1～3 に示す。

両世代とも、性格と地域における居場所タイプとの間に特に関連は捉えられなかった。

③ 居住期間

居住期間別にもた、居場所タイプについて図 10-2-1-3 に示す。

両世代とも、居住期間と居場所タイプとの間に関連はみられず、居住期間の違いによる、居場所タイプの特徴はみられなかった。

2. 地域における空間条件と居場所タイプとの関連

地域における空間条件別に地域における居場所タイプの特徴を捉える。そのため、高校生の居住環境と地域における居場所タイプとの関連を検討した。なお、居住環境とは、高校生の家の周辺で徒歩圏内にある自然環境と人工的な環境について捉えたものであり、具体的には自然環境については①「原っぱ・田んぼ・畑」②「河原・土手・池」③「雑木林・野山」の 3 項目、人工的な環境について、④「公園・アスレチック」⑤「商店街」⑥「デパート・ショッピングモール」⑦「スーパー」⑧「コンビニ」⑨「ファーストフード店・ファミレス」⑩「ゲームセンター・カラオケボックス」⑪「駅」⑫「空き地・

駐車場」⑬「公共施設（図書館・公民館・文化会館など）」の10項目、合計13項目である。結果を図10-2-2-1～13に示す。

① 原っぱ・田んぼ・畑

図10-2-2-1に示すように、両世代とも「原っぱ・田んぼ・畑」の有無と地域における居場所タイプとの間には特に関連はみられなかった。

② 河原・土手・池

図10-2-2-2に示すように、両世代とも「かわら・土手・池」の有無と地域における居場所タイプとの間には特に関連はみられなかった。

③ 雑木林・野山

図10-2-2-3に示すように、両世代とも「雑木林・野山」の有無と地域における居場所タイプとの間には特に関連はみられなかった。

④ 公園・アスレチック

図10-2-2-4に示すように、〈親世代〉において、カイ二乗検定における10%水準の有意差があり、若干関連がみられた。公園が近所にあるものは居場所を所有するタイプが多い傾向がみられた。これは、〈親世代〉は自然や公園を居場所として利用するものが多いことが関係していると考えられる。なお、〈子ども世代〉においては特に関連はみられなかった。

⑤ 商店街

図10-2-2-5に示すように、両世代とも「商店街」の有無と地域における居場所タイプとの間には特に関連はみられなかった。

⑥ デパート・ショッピングモール

図10-2-2-6に示すように、両世代とも「デパート・ショッピングモール」の有無と地域における居場所タイプとの間には特に関連はみられなかった。

⑦ スーパー

図10-2-2-7に示すように、両世代とも「スーパー」の有無と地域における居場所タイプとの間には特に関連はみられなかった。

⑧ コンビニ

図10-2-2-8に示すように、両世代とも「コンビニ」の有無と地域における居場所タイプとの間には特に関連はみられなかった。

⑨ ファーストフード店・ファミレス

図10-2-2-9に示すように、両世代とも「ファーストフード店・ファミレス」の有無と地域における居場所タイプとの間には特に関連はみられなかった。

⑩ ゲームセンター・カラオケボックス

図10-2-2-10に示すように、両世代とも「ゲームセンター・カラオケボックス」の有無と地域における居場所タイプとの間には特に関連はみられなかった。

⑪ 駅

図 10-2-2-11 に示すように、〈子ども世代〉において、カイ二乗検定における 5%水準の有意差があり、やや関連がみられた。家の近くに駅のあるものは、特に社会的居場所を所有するタイプが多く、駅が近くにあるものは、交通の便が良いため、地域において居場所をみつけやすいのではないかと考えられる。一方、〈親世代〉では特に関連はみられなかった。

⑫ 空き地・駐車場

図 10-2-2-12 に示すように、〈子ども世代〉において、カイ二乗検定における 10%水準の有意差があり、若干関連がみられた。空き地・駐車場が近所にあるものは地域に居場所を所有するタイプが多い傾向がみられた。空き地・駐車場を居場所とするものもいるため、家の近所であれば、居場所所有につながると考えられる。

⑬ 公共施設（図書館・公民館・文化会館など）

図 10-2-2-13 に示すように、両世代とも「公共施設」の有無と地域における居場所タイプとの間には特に関連はみられなかった。

以上より、世代を通して、居住環境と地域における居場所タイプとの間には、特に強い関連はみられず、居住環境は居場所の形成要因としての影響はあまり強くないことが捉えられた。高校生ともなると、行動範囲が広がっているため、徒歩圏内の環境に関わらず居場所をみつけられるのではないかと考えられる。一部みられた関連では、〈子ども世代〉では家の近くに駅のあるものは、特に社会的居場所を所有するタイプが多く、空き地・駐車場が近所にあるものは地域に居場所を所有するタイプが多い傾向がみられた。駅が近くにあるものは、交通の便が良いため、地域において居場所をみつけやすいのではないかと考えられる。空き地・駐車場については、〈子ども世代〉において、空き地等を居場所とするものがやや多いことが関係しているのではないかと考えられる。〈親世代〉においては、公園が近所にあるものは居場所を所有するタイプが多い傾向がみられた。これは、〈親世代〉の方が自然や公園を居場所として利用するものが多いことが関係していると考えられる。これらのことから、全体的に世代を通して居住環境と居場所タイプには強い関連はないが、〈子ども世代〉では、駅や空き地等が居場所所有に与える影響がやや大きくなってきているのではないかと考えられる。

3. 地域における人間関係と居場所タイプとの関連

地域における人間関係別に地域における居場所タイプの特徴を捉える。なお、地域における人間関係については、（１）地域で本音で話し合える相手、（２）近所付き合いの 2 項目について検討した。

（１）地域で本音で話し合える相手

地域でどのような人と本音で話し合っているのか捉えた項目と地域における居場所タイプとの関連を検討し、結果を図 10-2-3-1-1～6 に示す。なお、地域で本音で話し合える相

手についての具体的な項目は、「①学校の友達」「②学校以外の友達」「③近所の大人」「④塾やお店・公共施設などで知り合った大人」「⑤親戚（おじいさん、おばあさん、おじさん、おばさん、いとこなど）」「⑥本音で話し合える人はいない」の6項目である。

①. 学校の友達

図 10-2-3-1-1 に示すように、〈親世代〉においてカイ二乗検定における 1%水準の有意差があり、関連がみられた。学校の友達と本音で話すものは〈個・社あり〉〈社のみあり〉が多く、地域に個人的居場所と社会的居場所を両方所有するもの、あるいは社会的居場所を所有するタイプが多いことが捉えられたことから、社会的居場所を所有するには、学校の友達と本音で話せることが必要であるといえる。〈子ども世代〉においては、検定による有意差はなかったが、本音で話すものは、〈個・社あり〉〈社のみあり〉〈個のみあり〉が多く、学校の友達と本音で話すものは地域に居場所を所有するタイプが多い傾向が捉えられた。

②. 学校以外の友達

図 10-2-3-1-2 に示すように、〈親世代〉においてカイ二乗検定における 1%水準の有意差があり、関連がみられた。学校以外の友達と本音で話すものは〈個・社あり〉が多く、地域に個人的居場所と社会的居場所の両方所有するタイプが多いことが捉えられた。また、〈子ども世代〉においても 10%水準の有意差があり、学校以外の友達と本音で話すものは、〈個・社あり〉と〈社のみあり〉が多いことが捉えられた。これらのことから、学校以外の友達と本音で話せることは、地域に居場所を所有することにつながっていると考えられる。

③. 近所の大人

図 10-2-3-1-3 に示すように、〈親世代〉においてカイ二乗検定における 1%水準の有意差があり、関連がみられた。近所の大人と本音で話すものは〈個・社あり〉が多く、地域に個人的居場所と社会的居場所の両方所有するタイプが多いことが捉えられた。このことから、近所の人との良好な関係は地域における居場所所有に関係していると考えられる。また、〈子ども世代〉においては、近所の大人と本音で話すものはほとんどいないため考察できなかった。

④. 塾やお店・公共施設などで知り合った大人

図 10-2-3-1-4 に示すように、〈親世代〉においてカイ二乗検定における 10%水準の有意差があり、若干関連がみられた。塾やお店・公共施設などで知り合った大人と本音で話すものは〈個・社あり〉が多いことが捉えられた。また、〈子ども世代〉では検定による有意差はなかったが、〈親世代〉と同様の傾向であり、塾等で知り合った大人と本音で話しているものは、地域に居場所を所有するタイプが多いことが捉えられた。

⑤. 親戚（おじいさん、おばあさん、おじさん、おばさん、いとこなど）

図 10-2-3-1-5 に示すように、〈親世代〉においてカイ二乗検定における 1%水準の有意差があり、関連がみられた。親戚の人と本音で話し合っているものは〈個・社〉が多く、

地域に個人的居場所と社会的居場所の両方所有するタイプが多いことが捉えられた。また、〈子ども世代〉においては、検定による有意差はみられなかったが、〈親世代〉と同様の傾向であることが捉えられ、親戚の人との良好な関係は、地域における居場所所有につながっていることが捉えられた。

⑥. 本音で話し合える人はいない

図 10-2-3-1-6 に示すように、〈親世代〉においてカイ二乗検定における 1%水準の有意差があり、関連がみられた。地域に本音で話し合える人がいないものは、〈個のみ〉〈居場所なし〉が多く、地域に個人的居場所しか所有していないタイプ、あるいは全く居場所を所有していないタイプが多いことが捉えられた。また、〈子ども世代〉においては、10%水準の有意差があり、〈親世代〉と同様の傾向が捉えられた。これらのことから、地域に本音で話せる人がいることは、地域における居場所所有につながっていることが明らかになった。

以上より、両世代とも、地域の人と本音で話しているものは、地域に個人的居場所と社会的居場所を両方所有するタイプ、あるいは社会的居場所を所有するタイプが多い傾向であることが捉えられた。特に〈親世代〉の方が強い関連がみられたことから、〈親世代〉の方がこの傾向が強いといえる。一方、〈子ども世代〉は〈親世代〉ほど関連が強くなかったことから、〈子ども世代〉では地域における人間関係の居場所形成要因としてのウエイトはやや小さいのではないかと考えられる。〈親世代〉では、地域における人間関係全てにおいて、居場所との関連が強くみられ、地域における人間関係全体が居場所形成につながっていることが捉えられたが、〈子ども世代〉では、居場所形成につながる人間関係には偏りがみられる。特に、検定による有意差がみられた項目は、「学校以外の友達」のみであり、その他の特に「塾やお店・公共施設などで知り合った大人」「親戚」等の大人と居場所所有との関連は弱いことから、同年齢との関係の影響が大きいといえる。

(2) 近所付き合い

近所付き合いの状況別にみた、居場所タイプについて、図 10-2-3-2 に示す。

〈子ども世代〉において、カイ二乗検定における 5%水準の有意差があり、やや関連がみられた。近所付き合いをほとんどしないものについては、〈居場所なし〉が多い特徴が捉えられ、近所付き合いをしないものは、地域に居場所を所有しないものがやや多い傾向であるといえる。なお、〈親世代〉については検定による有意差はなかったが、近所付き合いが良いものは地域に居場所を所有するタイプがやや多い傾向がみられ、両世代とも近所付き合いが地域における居場所所有に関わっている側面が捉えられた。

4. 本節のまとめ

本節では、地域における居場所の形成要因を明らかにするため、「高校生の属性」「地

域における空間条件」「地域における人間関係」と「地域における居場所タイプ」との関連を検討した。その結果以下のことが明らかになった。

属性と居場所タイプとの関連については、性別から居場所タイプを検討すると、両世代とも女子の方が社会的居場所を所有するタイプが多い特徴が捉えられた。これは学校とも同様の傾向であり、女子は学校や地域では個人的居場所よりも社会的居場所を求める傾向が強いことが明らかになった。なお、性格と居住期間については、居場所タイプとの関連は特にみられなかった。

地域における空間条件と居場所タイプとの関連についてみた場合、世代を通して、居住環境と地域における居場所タイプとの間には、強い関連はみられず、居住環境は居場所の形成要因としての影響はあまり強くないことが捉えられた。自宅周辺の環境がどうであろうとも、自転車や電車等を使って移動し、幅広い範囲で居場所をみつけているのではないかと考えられる。〈子ども世代〉では、駅や空き地等と居場所タイプの間にやや関連がみられた。特に、自宅周辺に駅があれば、交通の便がよくなるため、居場所をみつける手段になると考えられる。

地域における人間関係と居場所タイプとの関連については、近所付き合いの状況別にみた場合、近所付き合いほとんどしないものは、地域に居場所を所有しないタイプが多いことが捉えられ、近所付き合いは居場所形成にやや関わっていることが明らかになった。地域における本音で話し合える人の有無との関連をみると、地域で本音で話し合える相手のいるものは地域に居場所を所有しているタイプが多いことが明らかになった。〈親世代〉では地域における人間関係全体と居場所との関連が強かったことに対して、〈子ども世代〉では学校以外の友達など同年齢との交流が居場所所有に関係しており、〈子ども世代〉の方が、関連が弱いことが捉えられた。このことから、〈子ども世代〉は〈親世代〉ほど、地域における人間関係が居場所形成につながっていないのではないかと推測される。

第三節 地域における居場所タイプと居場所所有が及ぼす影響との関連

本節では、地域における居場所所有が及ぼす影響について明らかにするため、地域における居場所所有が何らかの影響を与えている可能性のある「生活実態」「心理状態」「人間関係」と地域における居場所タイプとの関連を検討する。「人間関係」については、「居場所の形成要因（本章第二節）」の側面からも検討したが、居場所を所有することで何らかの影響を受けることも考えられるため、関連構造の両側面から検討する。

1. 居場所タイプと生活実態との関連

地域における居場所タイプ別に生活実態を検討し、居場所所有が生活実態に何らかの影響を与えているかどうかを検討する。なお、生活実態については、（１）平日の行動パターン、（２）地域における放課後の過ごし方の、（３）地域におけるよく行く場所に関する項目（第五章）の３項目である。

(1) 平日の行動パターン

地域における居場所タイプ別にみた平日の行動パターンについて、図 10-3-1-1 に示す。

〈親世代〉において、カイ二乗検定における 1%水準の有意差があり、関連がみられた。〈個・社あり〉のものは、地域に寄り道するものが多く、〈居場所なし〉のものは寄り道するものが少ない。このことから、地域に居場所を所有するものの方が、地域によく立ち寄るものが多いことが捉えられた。〈子ども世代〉においては、検定による有意差はなく、居場所タイプと平日の行動パターンとの間に関連はみられなかった。

(2) 地域における放課後の過ごし方

地域における居場所タイプ別にみた地域における放課後の過ごし方について、図 10-3-1-2 に示す。

両世代とも、カイ二乗検定において 1%水準の有意差があり、関連がみられた。〈個・社あり〉では家庭・学校以外にはいかないというものが最も少なく、〈居場所なし〉では、家庭・学校以外には行かないというものが最も多く、地域に居場所を所有するものの方が、地域によく行く傾向が捉えられた。

(3) 地域におけるよく行く場所

地域における居場所タイプ別にみた地域におけるよく行く場所について、図 10-3-1-3-1～14 に示す。

① 一人でぶらぶらしたり考え事などができる自然があるところ

図 10-3-1-3-1 に示すように、両世代ともカイ二乗検定において 5%水準の有意差があり、やや関連がみられた。〈親世代〉では、〈個のみあり〉のタイプが一人で自然に行くものが最も多く、次いで〈個・社あり〉のタイプが多い。このことから、地域に個人的居場所を所有しているものは、自然に一人で行くものが多いことが捉えられ、居場所所有がよく行く場所と対応しているといえる。一方、〈子ども世代〉では、〈個・社あり〉のタイプが一人で自然に行くものが多い。次いで、〈居場所なし〉のタイプが一人で自然に行くものが多いことから、居場所所有が地域における行動につながっているもの、そうでないもの両方みられ、〈親世代〉のように、居場所の所有がよく行く場所に対応していない。これは、〈子ども世代〉の方が自然を居場所としているものが少なくなっていることが関係していると考えられる。

② 仲間としゃべったり遊んだりできる自然があるところ

図 10-3-1-3-2 に示すように、〈親世代〉において、カイ二乗検定における 1%水準の有意差があり、関連がみられた。〈個・社あり〉タイプが仲間と自然に行くものが最も多く、地域に居場所を所有するものは、仲間と自然に行くものが多いことが捉えられた。〈子ども世代〉においては、検定による有意差はなかったものの、〈親世代〉と同様の傾向である。

③ 一人でぶらぶらしたり考え事などができる公園や広場

図 10-3-1-3-3 に示すように、〈親世代〉において、カイ二乗検定における 1%水準の有意差があり、関連がみられた。〈個のみあり〉タイプが一人で公園に行くものも多く、次いで〈個・社あり〉タイプが多いことから、個人的居場所を所有しているものは、一人で公園に行くものが多いことが捉えられた。このことから、居場所所有がよく行く場所と対応しているといえる。なお、〈子ども世代〉では特に関連はみられなかった。

④ 仲間としゃべったり遊んだりできる公園や広場

図 10-3-1-3-4 に示すように、〈子ども世代〉においてはカイ二乗検定における 5%水準の有意差があり、やや関連がみられた。〈個・社あり〉および、〈社のみあり〉タイプでは、仲間と公園に行くものが多いことから、地域に社会的居場所を特に所有するものは、公園に仲間と行くものが多いことが捉えられ、居場所所有とよく行く場所が対応しているといえる。〈親世代〉においては、カイ二乗検定において 1%水準の有意差があり、〈個・社あり〉タイプが仲間と公園に行くものが多い特徴がみられた。このことから、地域に居場所を所有するものは、仲間と公園に行くものが多い傾向が捉えられた。

⑤ 一人でぶらぶらしたり好きなことで時間をつぶせる店

図 10-3-1-3-5 に示すように、〈親世代〉では、カイ二乗検定における 5%水準の有意差があり、関連がややみられた。〈個のみあり〉〈個・社あり〉のタイプにおいて一人で店に行くものも多く、地域に個人的居場所を特に所有するものは、一人で店に行くものが多いことが捉えられ、居場所所有とよく行く場所が対応しているといえる。〈子ども世代〉においては、検定における有意差はなかったものの、〈親世代〉と同様の傾向がみられた。

⑥ 仲間としゃべったり遊んだりできる店

図 10-3-1-3-6 に示すように、両世代ともカイ二乗検定における 1%水準の有意差があり、関連がみられた。〈個・社あり〉と〈社のみあり〉のタイプにおいて、仲間と店に行くものが多いことから、地域に特に社会的居場所を所有しているものは仲間と店に行くものが多いことが捉えられた。このことから、地域における居場所所有とよく行く場所とは対応しているといえる。

⑦ 店員やお客さんと仲良くできる店

図 10-3-1-3-7 に示すように、〈親世代〉において、カイ二乗検定における 1%水準の有意差があり、関連がみられた。〈個・社あり〉タイプにおいて、店員と仲良くなれる店に行くものも多く、地域に居場所を所有しているものは、店員やお客さんと仲良くできる店に行くものが多いことが捉えられた。なお、〈子ども世代〉では検定における有意差はなかったものの、〈親世代〉と同様の傾向である。

⑧ 一人で好きなことに集中したり考え事などができる公共施設

図 10-3-1-3-8 に示すように、両世代ともカイ二乗検定における 1%水準の有意差があ

り、関連がみられた。〈親世代〉においては、〈個のみあり〉タイプが公共施設に一人で行くものが多く、個人的居場所を所有しているものは、公共施設に一人で行くものが多い傾向が捉えられ、居場所所有とよく行く場所が対応しているといえる。〈子ども世代〉においては、〈個・社あり〉〈個のみあり〉タイプが公共施設に一人で行くものが多いことが捉えられたことから、〈親世代〉と同様に、地域に特に個人的居場所を所有するものは、一人で公共施設に行くものが多いといえる。

⑨ 仲間としゃべったり遊んだりできる公共施設

図 10-3-1-3-9 に示すように、両世代ともカイ二乗検定にける 1%水準の有意差があり、関連がみられた。〈個・社あり〉タイプが仲間と公共施設に行くものが多く、次いで〈社のみあり〉タイプも多いことから、地域に特に社会的居場所を所有しているものは、公共施設に仲間と行くものが多いことが捉えられた。このことから、地域における居場所所有とよく行く場所とは対応しているといえる。

⑩ 職員や利用している人と仲良くできる公共施設

図 10-3-1-3-10 に示すように、両世代ともカイ二乗検定における有意差はなかったが、〈個・社あり〉タイプは職員などと仲良くできる公共施設に行くものが若干多い傾向が捉えられ、居場所所有とよく行く場所がやや対応しているといえる。

⑪ 勉強や自分の好きなことに集中して取り組める塾や習い事

図 10-3-1-3-11 に示すように、〈子ども世代〉においてカイ二乗検定における 10%水準の有意差があり、関連がややみられた。〈個・社あり〉タイプが勉強等に打ち込める塾に行くものが多く、次いで〈居場所なし〉タイプも塾に行くものが多い。このことから、塾が居場所所有につながっているものと、そうでないものの両方みられた。塾は本来勉強する場であり、居場所を所有することとはあまり関連がないように思われる。しかし、〈子ども世代〉においては、そういった塾も居場所所有につながる傾向があることが捉えられた。なお、〈親世代〉では特に関連はみられなかった。

⑫ 先生や生徒と仲良くできる塾や習い事

図 10-3-1-3-12 に示すように、〈子ども世代〉においてカイ二乗検定における 10%水準の有意差があり、関連がややみられた。〈個・社あり〉タイプが先生や生徒と仲良くできる塾に行くものが多く、地域に居場所を所有するものは、先生や友達との交流もできる塾によく行くものが多いことが捉えられた。勉強だけでなく、交流も持てる塾では、居場所所有と関連がみられることが捉えられた。なお、〈親世代〉においては、特に関連はみられなかった。

⑬ いっしょにしゃべったり遊んだりできる仲の良い友達の家

図 10-3-1-3-13 に示すように、両世代ともカイ二乗検定において 1%水準の有意差があり、関連がみられた。〈子ども世代〉においては、〈個・社〉と〈社のみ〉のタイプは友達の家によく行くものが多く、地域に特に社会的居場所を所有しているものは、友達の家に行くものが多いことが捉えられた。このことから、地域における居場所所有とよく行く場所は対応しているといえる。〈親世代〉においては、〈個・社あり〉

＜個のみあり＞＜社のみあり＞タイプはいずれも友達の家によく行くものが多い。このことから、〈親世代〉においては居場所を所有しているものは友達の家に行くものが多いことが捉えられた。

⑭ 仲の良い親戚や気軽に行ける近所の人の家

図 10-3-1-3-14 に示すように、〈子ども世代〉においては、カイ二乗検定において 10% 水準の有意差があり、関連が若干みられた。＜個・社あり＞タイプが親戚の家あるいは近所の人の家に行くものが多いことから、地域に居場所を所有しているものは、親戚の家等に行くものが多いことが捉えられた。なお、〈親世代〉においては特に関連はみられなかった。

以上より、両世代とも地域に居場所を所有しているものは、地域によく行くものが多い傾向が捉えられた。中でも、特に強い関連がみられたのは、友達の家、公共施設との関連であり、居場所を所有しているものは、これらの場所によく行くものが多い傾向が強いことが捉えられた。他の自然や公園、店は〈子ども世代〉における関連はやや弱く、〈親世代〉の方が関連が強く表れている。一方、〈子ども世代〉においては、塾と居場所所有との間に関連がややみられるようになり、塾が地域における居場所になっているものも増えてきているのではないかと考えられる。

2. 居場所タイプと心理状態との関連

地域における居場所タイプ別に地域における心理状態を検討し、居場所所有が地域における心理状態に何らかの影響を与えているのかどうか検討する。なお、地域における心理状態については、①地域における居心地が良いと感じる時、②最も居心地が良いと感じる場所の 2 項目について検討した。

① 地域における居心地が良いと感じる時

地域における居場所タイプ別にみた、地域における居心地が良いと感じる時について、図 10-3-2-1 に示す。

〈親世代〉においては、カイ二乗検定において 1% 水準の有意差があり、関連がみられた。＜居場所なし＞タイプは「特に居心地が良いと感じる時はない」が最も多く、＜個・社あり＞タイプは「特に居心地が良いと感じる時はない」が最も少ないことから、地域に居場所を所有しているものは、地域に何らかの形で居心地の良さを感じていることが捉えられた。〈子ども世代〉においては、カイ二乗検定において 10% 水準の有意差があり、〈親世代〉と同様の関連が若干みられた。両世代とも、地域に居場所を所有することは地域における居心地の良さにつながっていることが捉えられた。

② 最も居心地が良いと感じる場所

地域における居場所タイプ別にみた、最も居心地が良いと感じる場所について、図 10-3-2-2 に示す。

〈親世代〉において、カイ二乗検定における 10%水準の有意差があり、関連が若干みられた。〈個・社あり〉タイプは学校あるいは地域に居心地の良さを感じるものが若干多いことが捉えられ、地域に居場所を所有することは学校や地域を居心地良く感じることに繋がっているのではないかと考えられる。なお、〈子ども世代〉においては検定による有意差はなく、特に関連はみられなかった。

3. 居場所タイプと人間関係との関連

地域における居場所タイプ別に地域における人間関係を検討し、居場所所有が地域における人間関係に何らかの影響を与えているのかどうか検討する。なお、地域における人間関係については、(1) 地域における本音で話し合える相手、(2) 近所付き合いの2項目について検討した。

(1) 地域で本音で話し合える相手

地域でどんな相手と本音で話し合っているのか捉えた項目と地域における居場所タイプとの関連を検討し、結果を図 10-2-3-1-1~6 に示す。なお、地域で本音で話し合える相手についての具体的な項目は、「①学校の友達」「②学校以外の友達」「③近所の大人」「④塾やお店・公共施設などで知り合った大人」「⑤親戚（おじいさん、おばあさん、おじさん、おばさん、いとこなど）」「⑥本音で話し合える人はいない」の6項目である。

①. 学校の友達

図 10-2-3-1-1 に示すように、〈親世代〉においてカイ二乗検定における 1%水準の有意差があり、関連がみられた。〈個・社あり〉〈社のみあり〉タイプは学校の友達と本音で話すものが多く、地域に個人的居場所と社会的居場所を両方所有するもの、あるいは社会的居場所を所有するタイプは学校の友達との関係が良いものが多いことが捉えられた。〈子ども世代〉においては、検定による有意差はなかったが、地域に居場所を所有するタイプは学校の友達との関係が良いものが多い傾向が捉えられた。

②. 学校以外の友達

図 10-2-3-1-2 に示すように、〈親世代〉においてカイ二乗検定における 1%水準の有意差があり、関連がみられた。〈個・社あり〉タイプは学校以外の友達と本音で話すものが多く、地域に個人的居場所と社会的居場所の両方所有するタイプは学校以外の友達との関係も良いことが捉えられた。また、〈子ども世代〉においても 10%水準の有意差があり、〈親世代〉と同様の傾向が捉えられた。

③. 近所の大人

図 10-2-3-1-3 に示すように、〈親世代〉においてカイ二乗検定における 1%水準の有意差があり、関連がみられた。〈個・社あり〉タイプは近所の大人と本音で話すものが多く、地域に個人的居場所と社会的居場所の両方所有するタイプは近所の大人との関係が良いものが多いことが捉えられた。また、〈子ども世代〉においては、近所の大人と本音

で話すものはほとんどいないため考察できなかった。

④. 塾やお店・公共施設などで知り合った大人

図 10-2-3-1-4 に示すように、〈親世代〉においてカイ二乗検定における 10%水準の有意差があり、若干関連がみられた。〈個・社あり〉タイプは塾やお店・公共施設などで知り合った大人と本音で話すものが多いことが捉えられた。また、〈子ども世代〉では検定による有意差はなかったが、〈親世代〉と同様の傾向であり、地域に居場所を所有するタイプは塾等で知り合った大人との関係が良いものが多い傾向が捉えられた。

⑤. 親戚（おじいさん、おばあさん、おじさん、おばさん、いとこなど）

図 10-2-3-1-5 に示すように、〈親世代〉においてカイ二乗検定における 1%水準の有意差があり、関連がみられた。〈個・社あり〉は親戚と本音で話し合っているものも多く、地域に個人的居場所と社会的居場所の両方所有するタイプは親戚の人との関係も良いものが多いことが捉えられた。また、〈子ども世代〉においては、検定による有意差はみられなかったが、〈親世代〉と同様の傾向であることが捉えられた。

⑥. 本音で話し合える人はいない

図 10-2-3-1-6 に示すように、〈親世代〉においてカイ二乗検定における 1%水準の有意差があり、関連がみられた。〈個のみあり〉〈居場所なし〉は地域に本音で話し合える人がいないものも多く、地域に個人的居場所しか所有していないタイプ、あるいは全く居場所を所有していないタイプは地域に本音で話せる人がいないものが多いことが捉えられた。また、〈子ども世代〉においては、10%水準の有意差があり、〈親世代〉と同様の傾向が捉えられた。

以上より、両世代とも、地域に個人的居場所と社会的居場所を両方所有するタイプ、あるいは社会的居場所を所有するタイプは地域の人と本音で話しているものが多い傾向であることが捉えられた。特に〈親世代〉の方が強い関連がみられたことから、〈親世代〉の方が地域における人間関係と居場所所有との関連が強いといえる。一方、〈子ども世代〉は〈親世代〉ほど、居場所所有が地域における人間関係に与える影響は大きくないのではないかと考えられる。

（2）近所付き合い

居場所タイプ別にみた、近所付き合いの状況について、図 10-2-3-2 に示す。

〈子ども世代〉において、カイ二乗検定における 5%水準の有意差があり、やや関連がみられた。〈居場所なし〉タイプは近所付き合いをほとんどしないものが多い特徴が捉えられ、地域に居場所を所有しないものは近所付き合いが良くないものが多い傾向であるといえる。なお、〈親世代〉については検定による有意差はなかったが、近所付き合いが良いものは地域に居場所を所有するタイプがやや多い傾向がみられ、両世代とも地域における居場所所有は近所付き合いに影響を与えている側面が捉えられた。

4. 本節のまとめ

本節では、居場所所有が及ぼす影響を明らかにするため、「高校生の生活実態」と「地域における心理状態」と「地域における人間関係」それぞれと「地域における居場所タイプ」との関連を検討した。その結果以下のことが捉えられた。

高校生の生活実態との関連をみた場合、「平日の行動パターン」「地域における過ごし方」では、地域に個人的居場所と社会的居場所を両方所有しているものは、放課後地域に立ち寄るものが多いことが明らかになった。「よく行く場所」では、両世代とも地域に居場所を所有しているものは、地域によく行くものが多い傾向が捉えられ、地域における居場所所有は実際の地域における行動につながっていることが明らかになった。中でも、特に強い関連がみられたのは、友達の家、公共施設との関連であり、居場所を所有しているものは、これらの場所によく行くものが多い傾向が強いことが捉えられた。他の自然や公園、店は〈子ども世代〉における関連はやや弱く、〈親世代〉の方が関連が強く表れている。一方、〈子ども世代〉においては、塾と居場所所有との間に関連がややみられるようになり、塾が地域における居場所になっているものも増えてきているのではないかと考えられる。

地域における心理状態との関連をみた場合、「地域における居心地が良いと感じる時」では、両世代とも、地域に居場所を所有しているものは、地域に居心地の良さを感じているものが多いことが明らかになった。また、「最も居心地が良いと感じる場所」では、〈親世代〉において地域に居場所を所有することは地域を居心地良く感じることにつながっていることが捉えられた。

地域における人間関係との関連をみた場合、「地域で本音で話し合える相手」では、両世代とも、地域に個人的居場所と社会的居場所を両方所有するタイプ、あるいは社会的居場所を所有するタイプは地域の人と本音で話しているものが多い傾向であることが捉えられた。特に〈親世代〉の方が強い関連がみられたことから、〈親世代〉の方が地域における人間関係と居場所所有との関連が強いことが明らかになった。一方、〈子ども世代〉は〈親世代〉ほど、居場所所有が地域における人間関係に与える影響は大きくないのではないかと考えられる。「近所付き合い」では、近所付き合いが良いものは地域に居場所を所有するタイプがやや多い傾向がみられ、両世代とも地域における居場所所有は近所付き合いに影響を与えている側面が捉えられた。

第四節 本章のまとめ

本章では、地域における居場所の関連構造について明らかにするため、地域における「居場所の形成要因」と「居場所所有が及ぼす影響の 2 側面について検討を行なった。その結果、以下のようなことが明らかになった。なお、地域における居場所の関連構造を模式的に表したものを図 11・4・1,2 に示す。

1. 地域における居場所タイプの設定を行なった結果、地域における居場所タイプは 4 タイプに集約され、最も多いタイプは〈個・社あり〉で、地域に個人的居場所と社会的居場所の両方所有するものであり、家庭や学校と同様の傾向である。しかし、居場所タイプ全

体を占める割合は約半数でやや少ないことが明らかになった。個人的居場所と社会的居場所のどちらか一方しか所有しない〈個のみあり〉〈社のみあり〉においては、社会的居場所のみ所有するタイプの方が多く、個人的居場所のみ所有するタイプは少数派のタイプである。また、〈居場所なし〉の居場所を所有しないタイプも全体の 2 割と多く、地域は居場所をもつもの、もたないもの様々であることが明らかになった。

2. 地域における居場所の形成要因について、属性と居場所タイプとの関連については、性別から居場所タイプを検討すると、両世代とも女子の方が社会的居場所を所有するタイプが多い特徴が明らかになった。これは学校とも同様の傾向であり、女子は学校や地域では個人的居場所よりも社会的居場所を求める傾向が強い。なお、性格と居住期間については、居場所タイプとの関連は特にみられなかった。

地域における空間条件と居場所タイプとの関連についてみた場合、世代を通して、居住環境と地域における居場所タイプとの間には、特に強い関連はみられず、自宅周辺の環境は居場所の形成要因としての影響はあまり強くないことが明らかになった。高校生ともなると、行動範囲が広がっているため、自宅の周辺環境に関わらず、幅広い範囲で居場所をみつけているのではないかと考えられる。その中で、〈子ども世代〉では、駅や空き地等と居場所タイプの間にやや関連がみられた。特に、家の近所に駅があれば、交通の便がよくなるため、居場所をみつける手段になると考えられ、地域における居場所形成につながっているといえる。

地域における人間関係と居場所タイプとの関連については、近所付き合いの状況別にみた場合、近所付き合いほとんどしないものは、地域に居場所を所有しないタイプが多いことが捉えられ、近所付き合いは居場所形成にやや関わっていることが明らかになった。地域における本音で話し合える人の有無との関連をみると、地域で本音で話し合える相手のいるものは地域に居場所を所有しているタイプが多いことが明らかになった。〈親世代〉では地域における人間関係全体と居場所との関連が強かったことに対して、〈子ども世代〉では学校以外の友達など同年齢との交流が居場所所有に関係しており、〈子ども世代〉の方が、関連が弱いことが捉えられた。このことから、〈子ども世代〉は〈親世代〉ほど、地域における人間関係が居場所形成につながっていないのではないかと推測される。

3. 地域における居場所所有が与える影響について、高校生の生活実態との関連をみた場合、地域に個人的居場所と社会的居場所を両方所有しているものは、放課後地域に立ち寄るものが多いことが明らかになった。「よく行く場所」では、両世代とも地域に居場所を所有しているものは、地域でよく行く場所があり、居場所タイプが実際の地域における行動につながっていることが明らかになった。中でも、特に強い関連がみられたのは、友達の家、公共施設との関連であり、居場所を所有しているものは、これらの場所によく行くものが多い傾向が強いことが捉えられた。他の自然や公園、店は〈子ども世代〉における関連はやや弱く、〈親世代〉の方が関連が強く表れている。一方、〈子ども世代〉においては、

塾と居場所所有との間に関連がややみられるようになり、塾が地域における居場所になっているものも増えてきているのではないかと考えられる。

地域における心理状態との関連をみた場合、両世代とも、地域に居場所を所有しているものは、地域に居心地の良さを感じているものが多いことが明らかになった。

地域における人間関係との関連をみた場合、「地域で本音で話し合える相手」では、両世代とも、地域に個人的居場所と社会的居場所を両方所有するタイプ、あるいは社会的居場所を所有するタイプは地域の人と本音で話しているものが多い傾向であることが明らかになった。特に〈親世代〉の方が強い関連がみられたことから、〈親世代〉の方が地域における人間関係と居場所所有との関連が強いことが明らかになった。一方、〈子ども世代〉は〈親世代〉ほど、居場所所有が地域における人間関係に与える影響は大きくないのではないかと考えられる。「近所付き合い」では、近所付き合いが良いものは地域に居場所を所有するタイプがやや多い傾向がみられ、両世代とも地域における居場所所有は近所付き合いに影響を与えている側面が明らかになった。

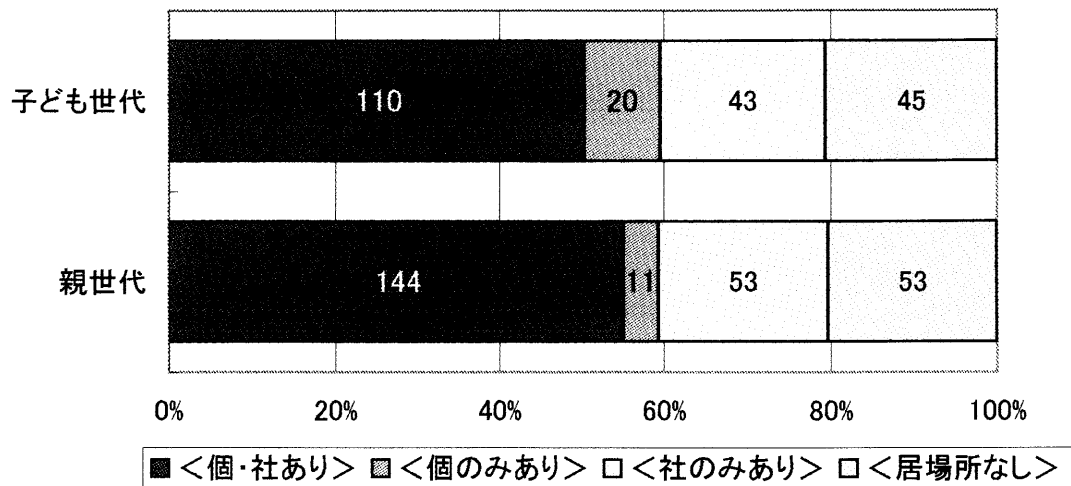


図10-1 地域における居場所タイプ(世代間比較)

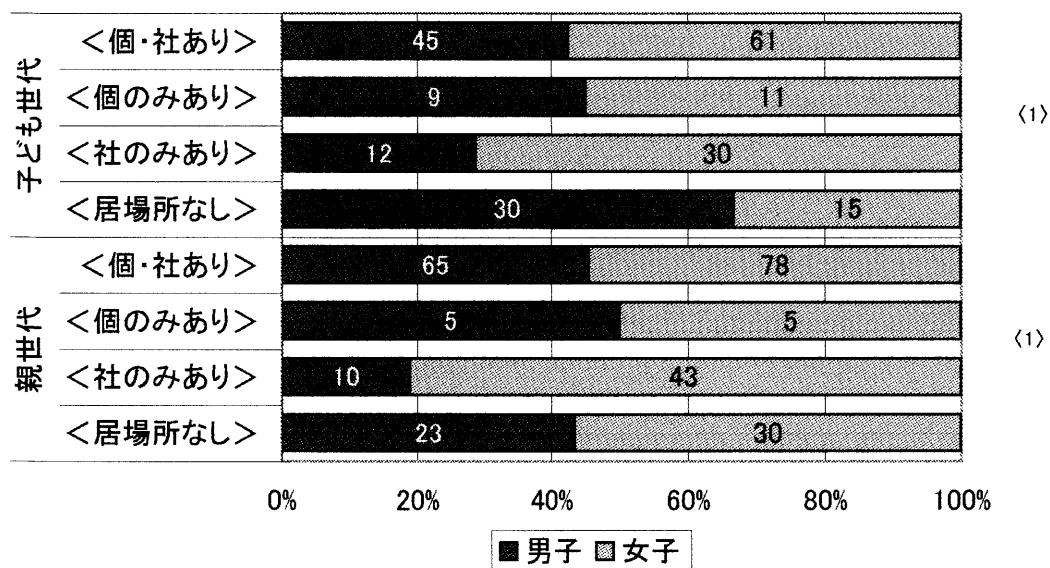


図10-2-1-1 性別と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

<>内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

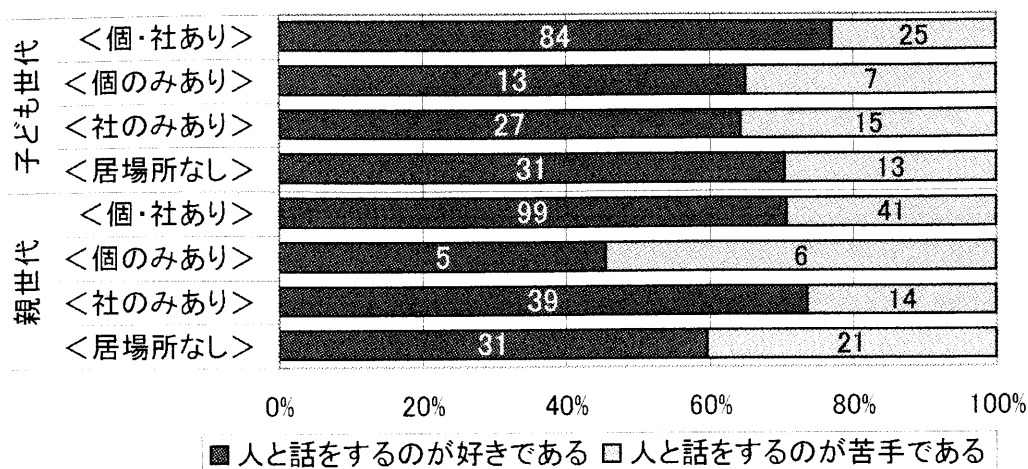


図10-2-1-2-1 性格(外向性—内向性)と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

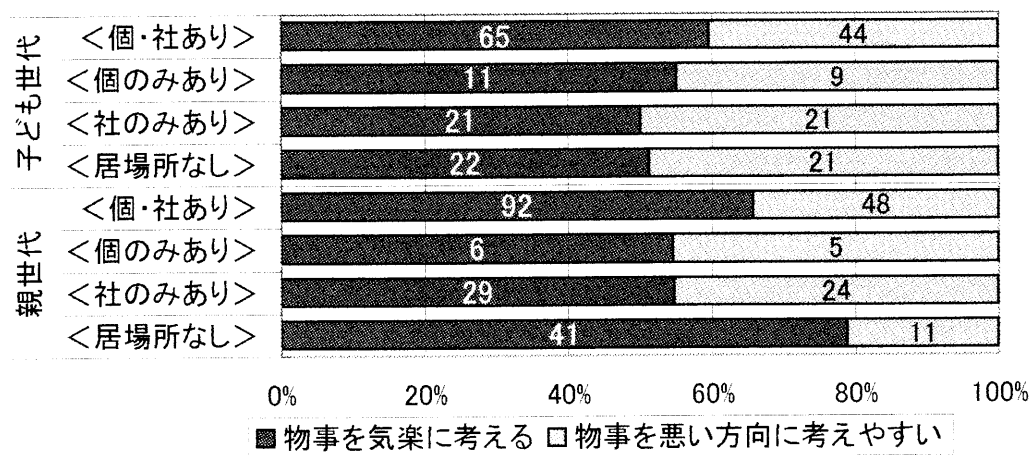


図10-2-1-2-2 性格(プラス思考—マイナス思考)と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

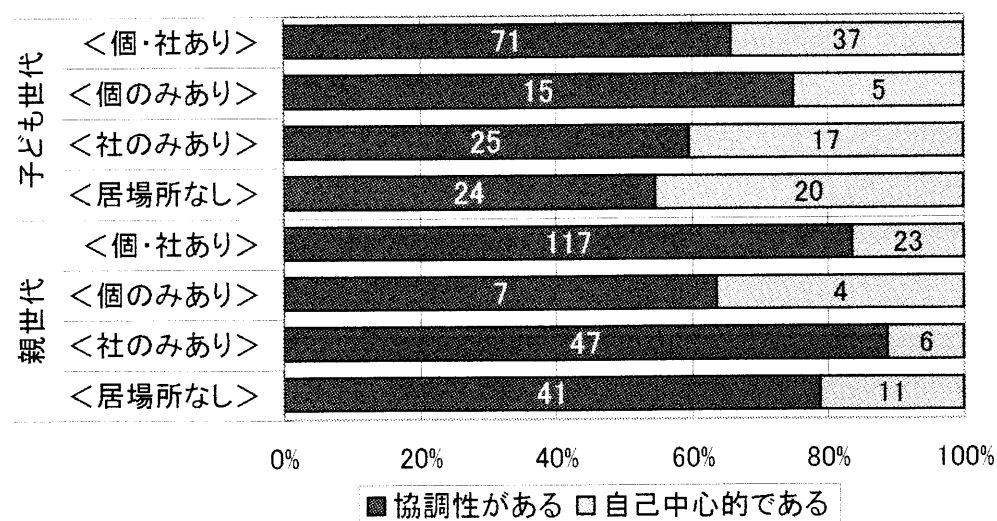


図10-2-1-2-3 性別と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

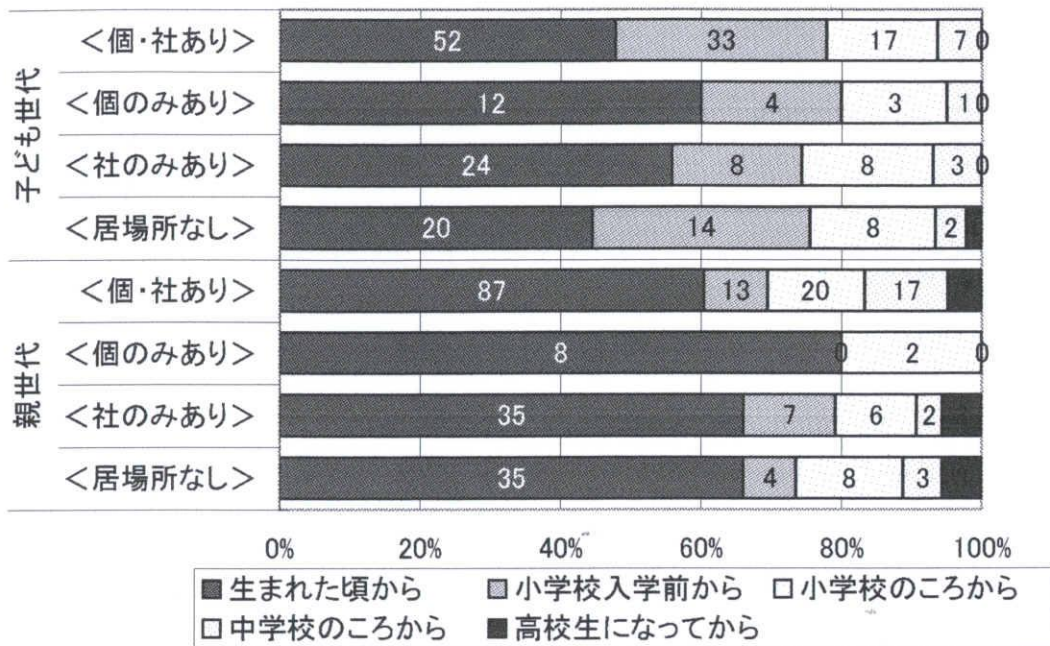


図10-2-1-3 居住期間と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

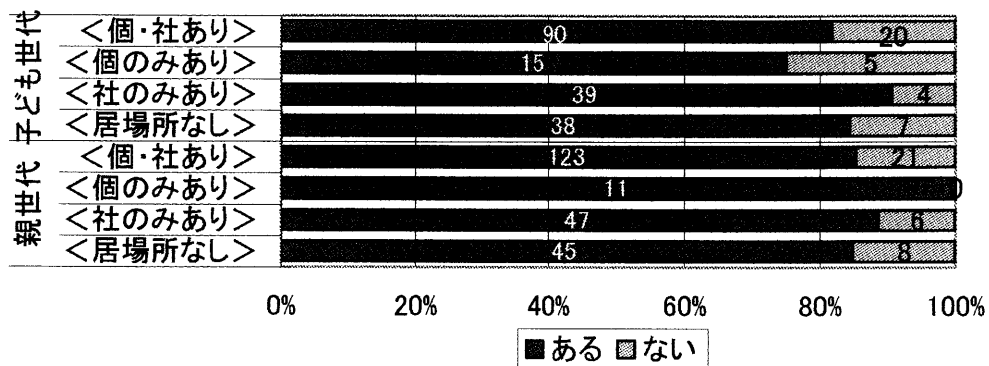


図10-2-2-1 居住環境(原っぱ・田んぼ)と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

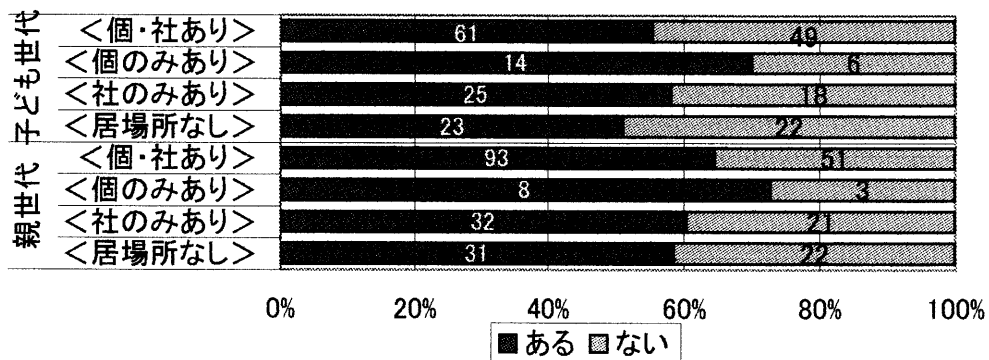


図10-2-2-2 居住環境(河原・土手)と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

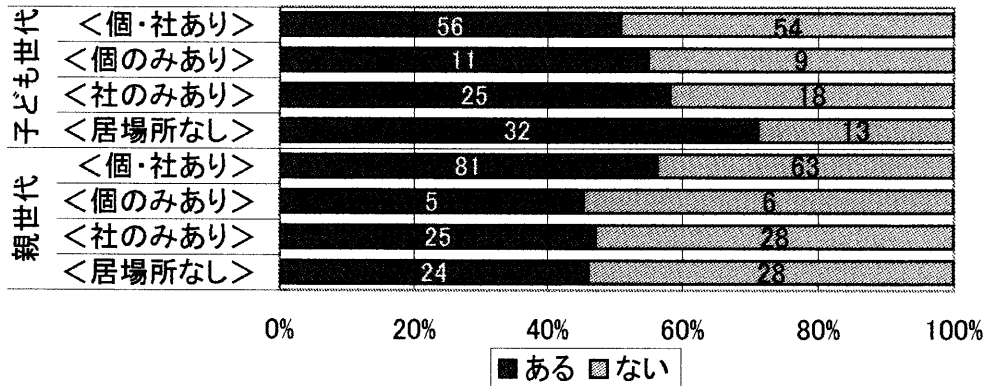


図10-2-2-3 居住環境(雑木林・野山)と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

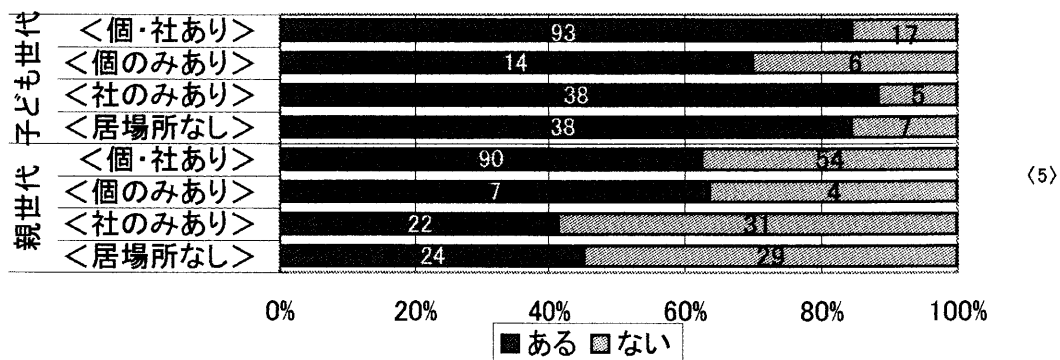


図10-2-2-4 居住環境(公園)と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

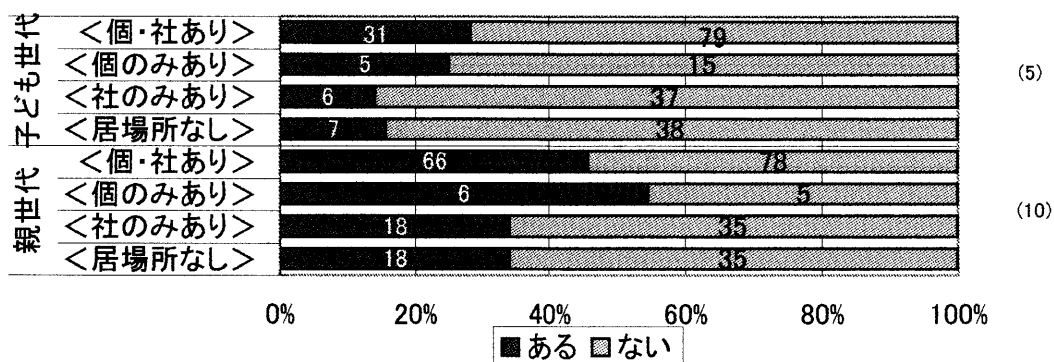


図10-2-2-5 居住環境(商店街)と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

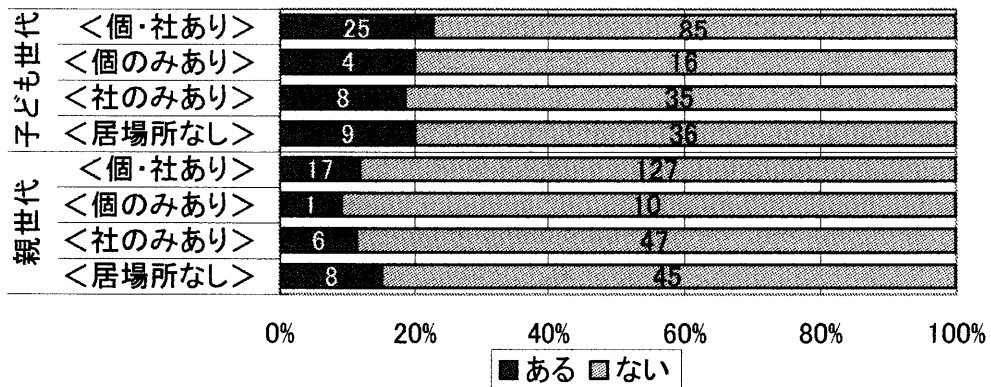


図10-2-2-6 居住環境(デパート)と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

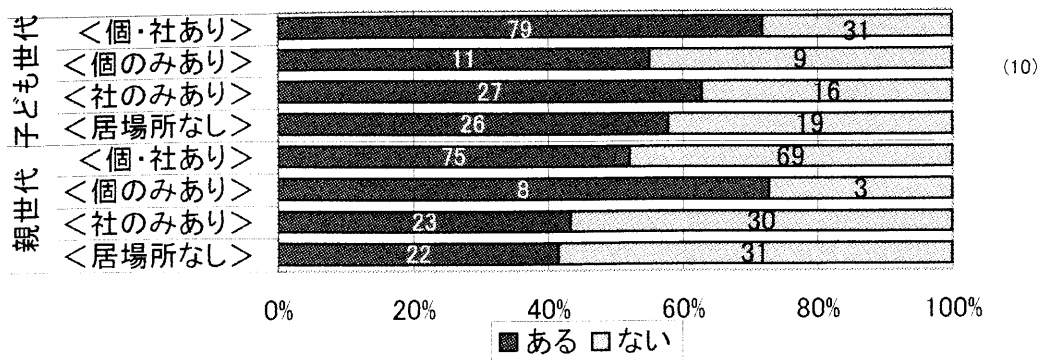


図10-2-2-7 居住環境(スーパー)と地域における居場所タイプとの関連
(両世代)

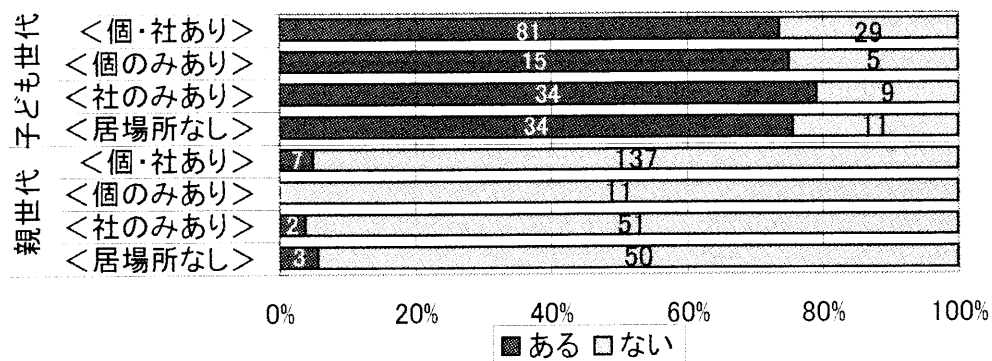


図10-2-2-8 居住環境(コンビニ)と地域における居場所タイプとの関連
(両世代)

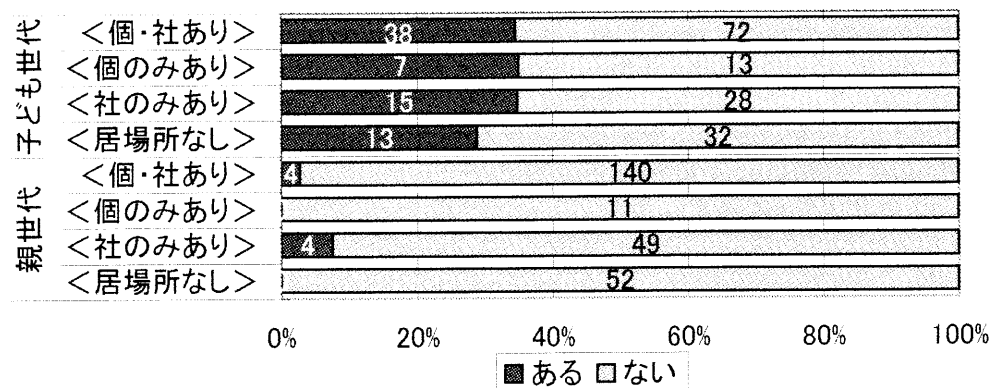


図10-2-2-9 居住環境(ファミレス)と地域における居場所タイプとの関連
(両世代)

※グラフ内数値は件数。

< >内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

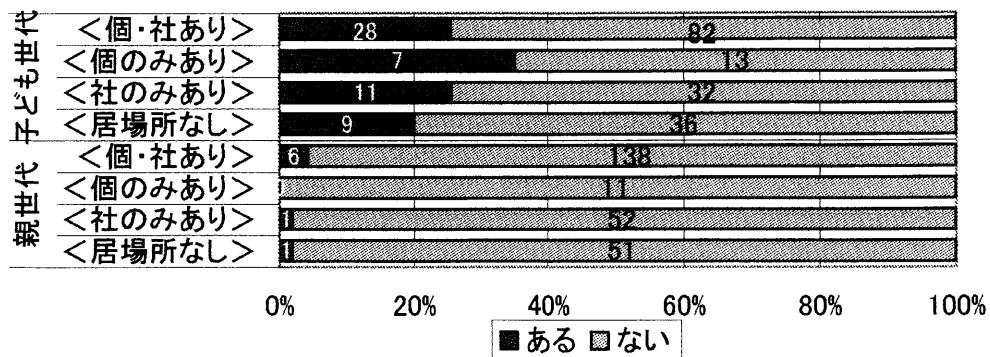


図10-2-2-10 居住環境(ゲームセンター)と地域における居場所パターンとの関連(両世代)

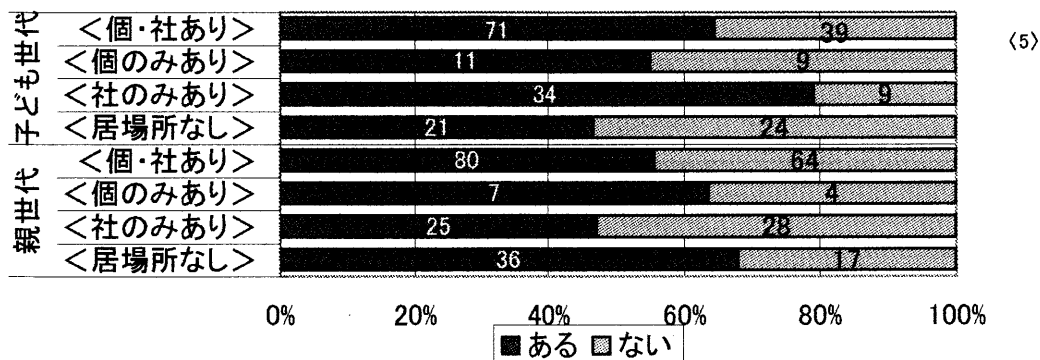


図10-2-2-11 居住環境(駅)と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

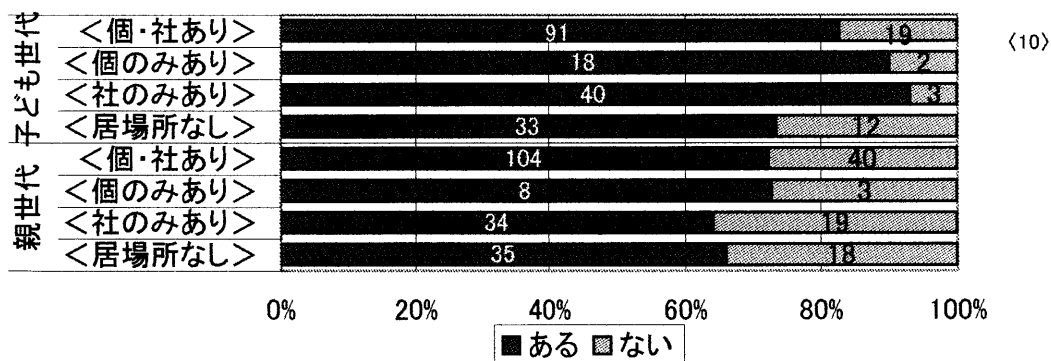


図10-2-2-12 居住環境(空き地・駐車場)と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

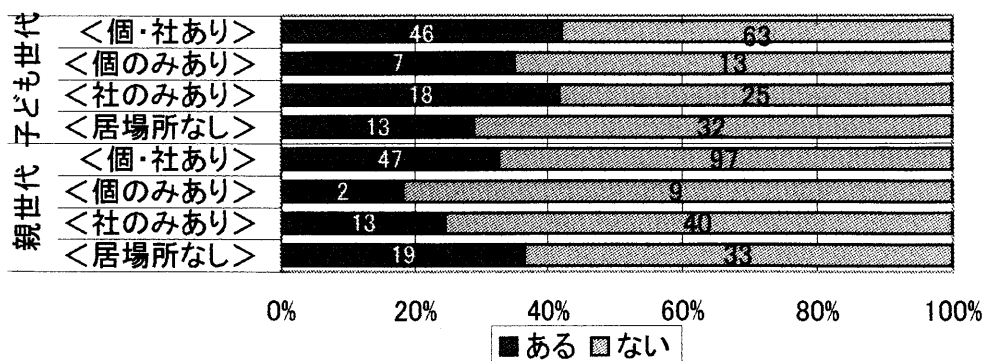


図10-2-2-13 居住環境(公共施設)と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

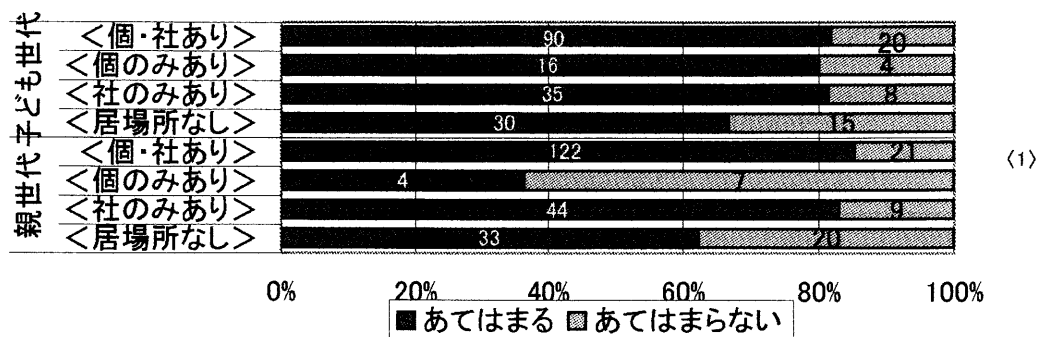


図10-2-3-1-1 地域で本音で話せる人(学校の友達)と地域における居場所パターンとの関連(両世代)

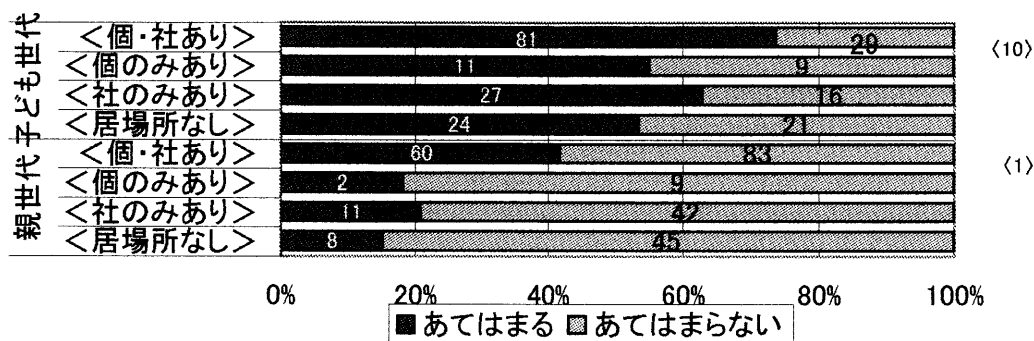


図10-2-3-1-2 地域で本音で話せる人(学校以外の友達)と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

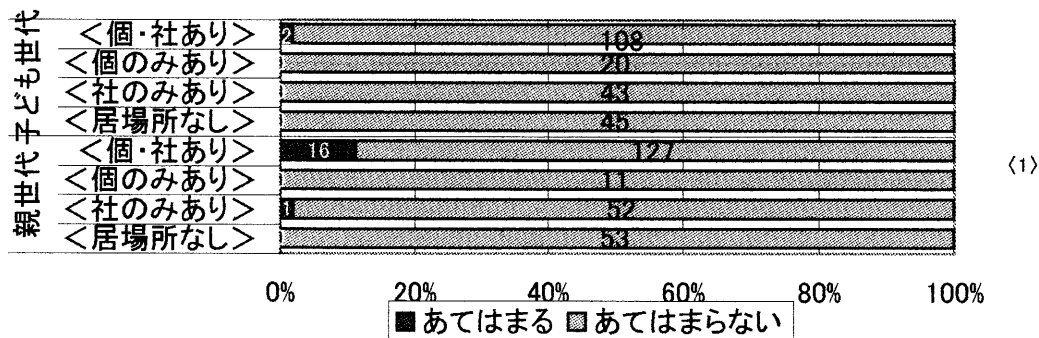


図10-2-3-1-3 地域で本音で話せる人(近所の大人)と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

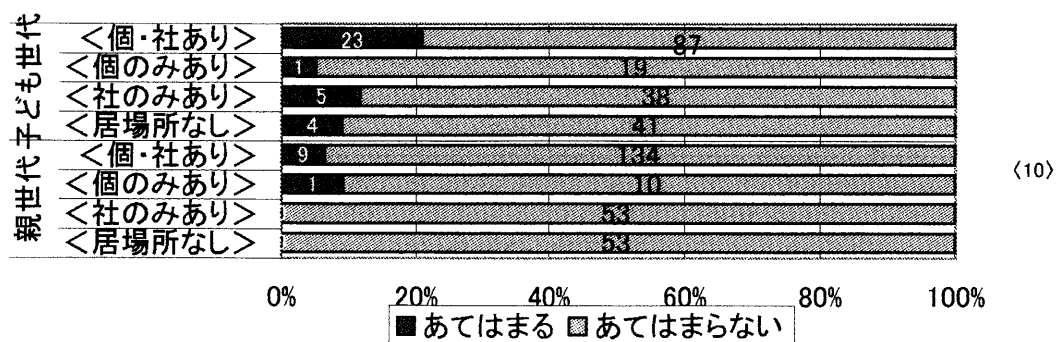


図10-2-3-1-4 地域で本音で話せる人(塾などで知り合った大人)と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

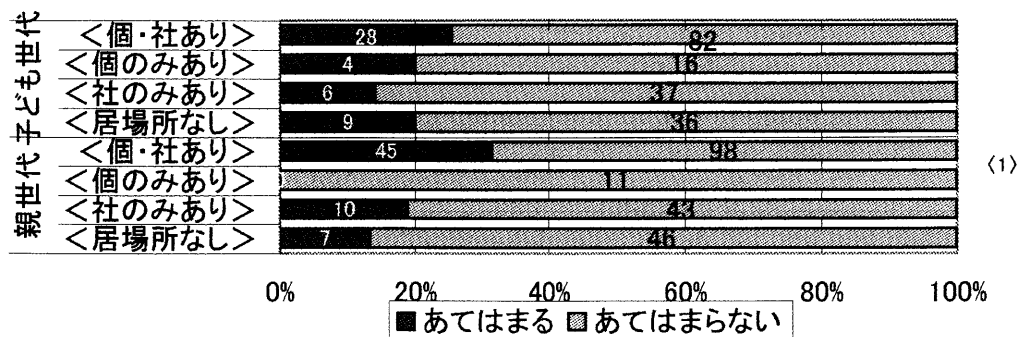


図10-2-3-1-5 地域で本音で話せる人(親戚)と地域における居場所パターンとの関連(両世代)

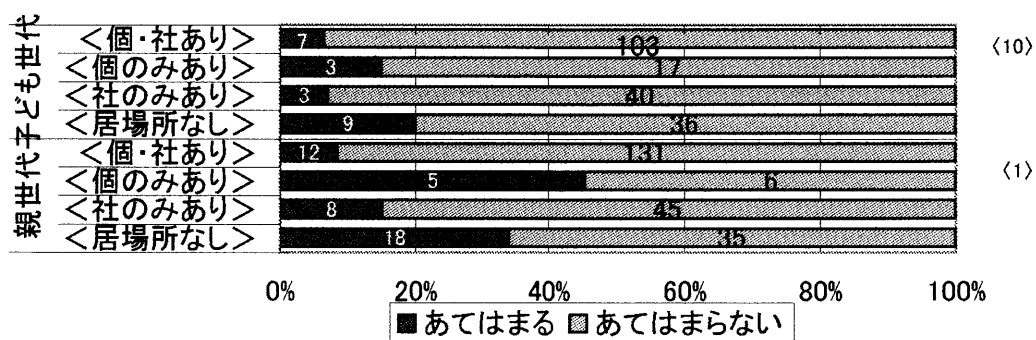


図10-2-3-1-6 地域で本音で話せる人なしと地域における居場所タイプとの関連(両世代)

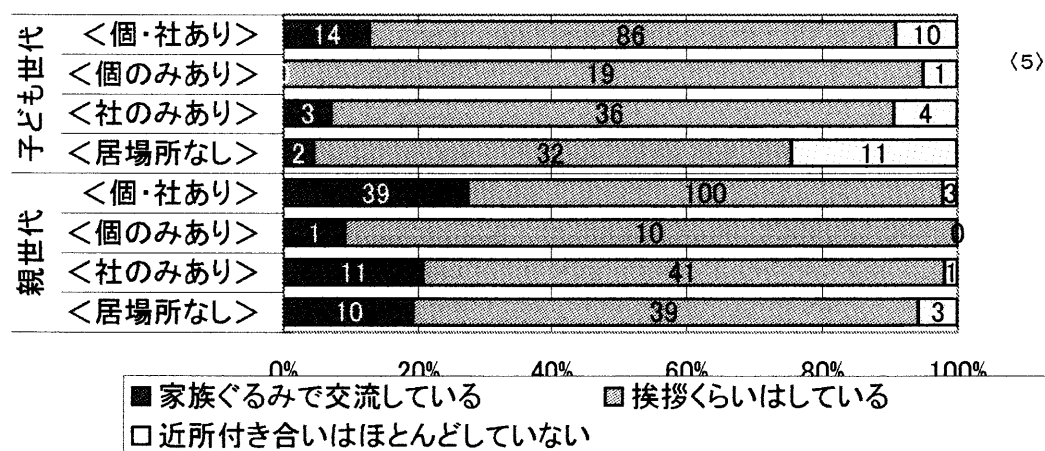


図10-2-3-2 近所付き合いと地域における居場所タイプとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

()内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

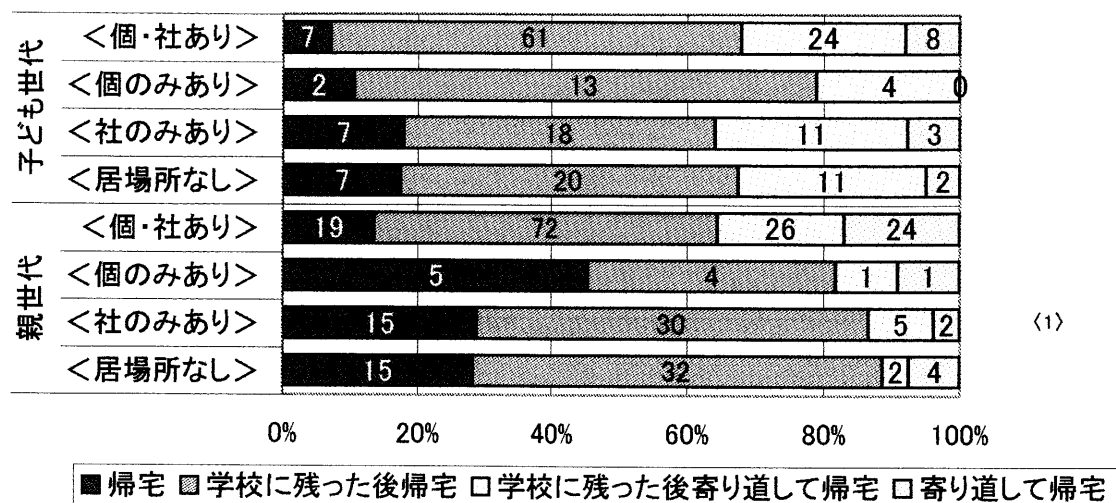


図10-3-1-1 平日の行動パターンと地域における居場所タイプとの関連
(両世代)

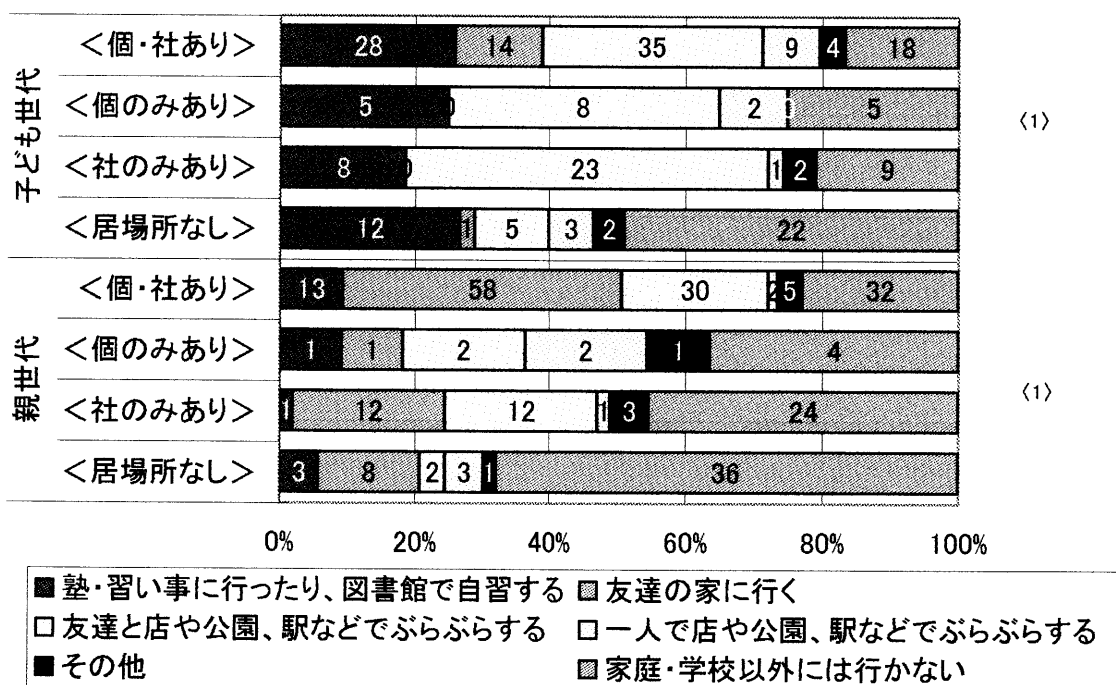


図10-3-1-2 放課後の行動パターン(地域)と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

<内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

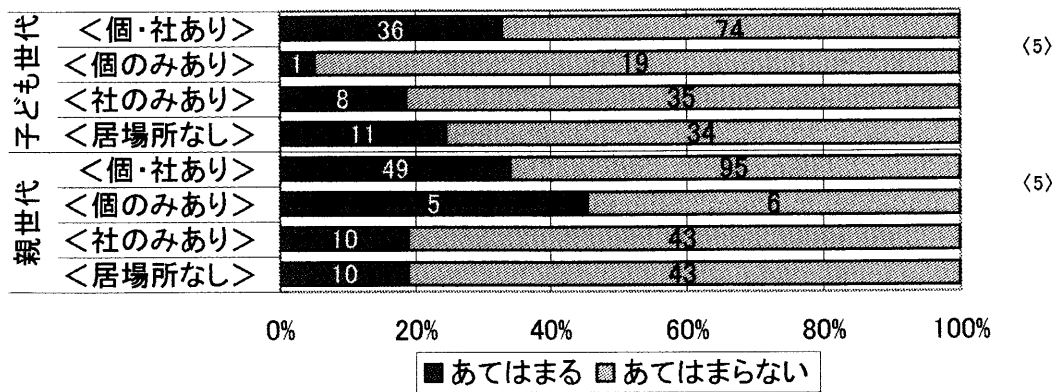


図10-3-1-3-1 よく行く場所(自然・一人)と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

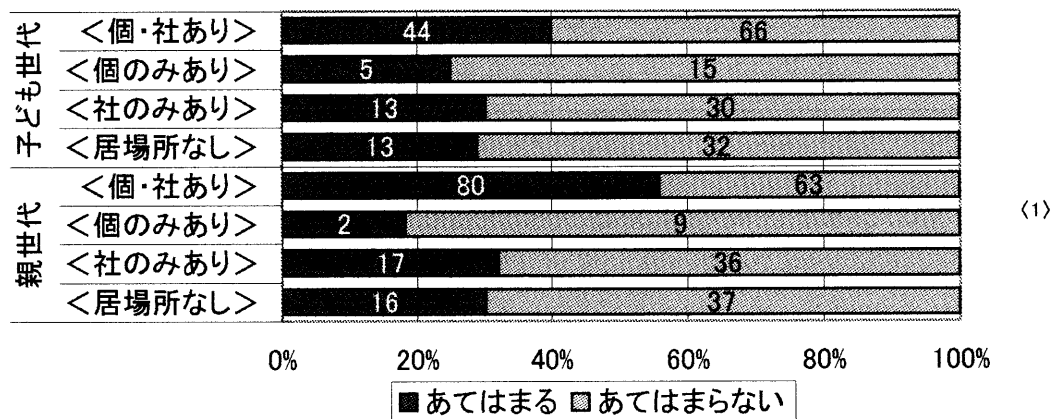


図10-3-1-3-2 よく行く場所(自然・仲間)と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

<内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

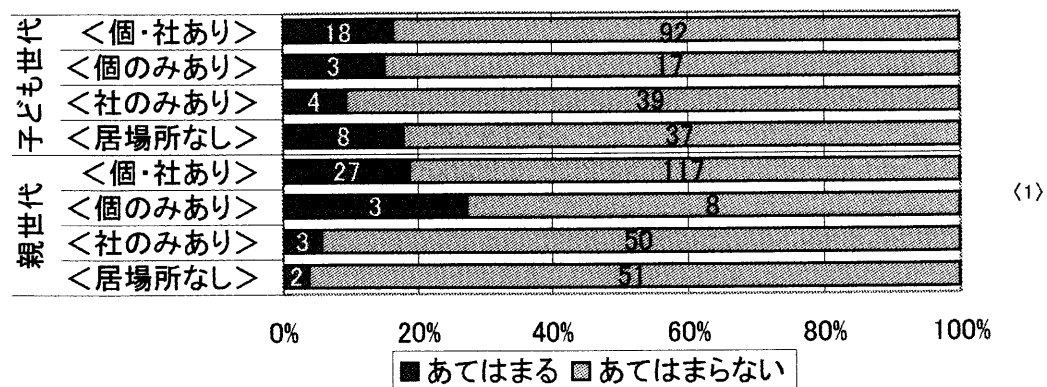


図10-3-1-3-3 よく行く場所(公園・一人)と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

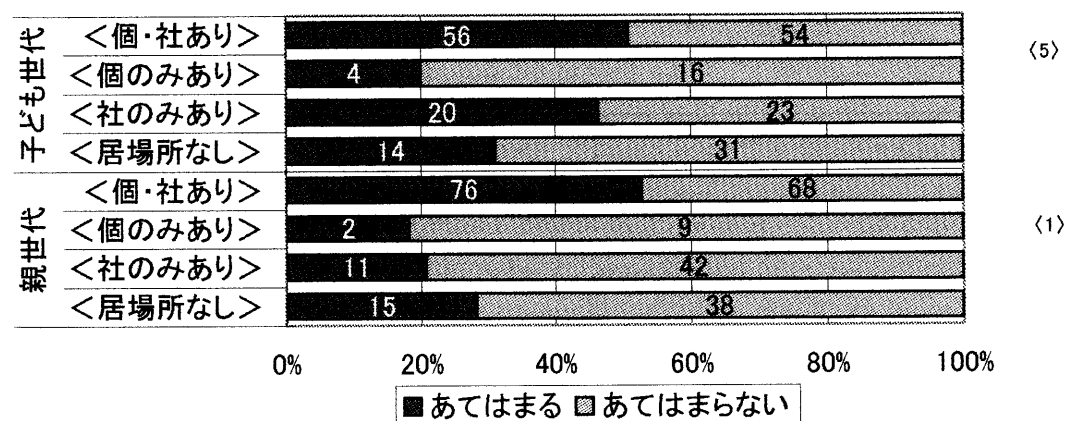


図10-3-1-3-4 よく行く場所(公園・仲間)と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

<>内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

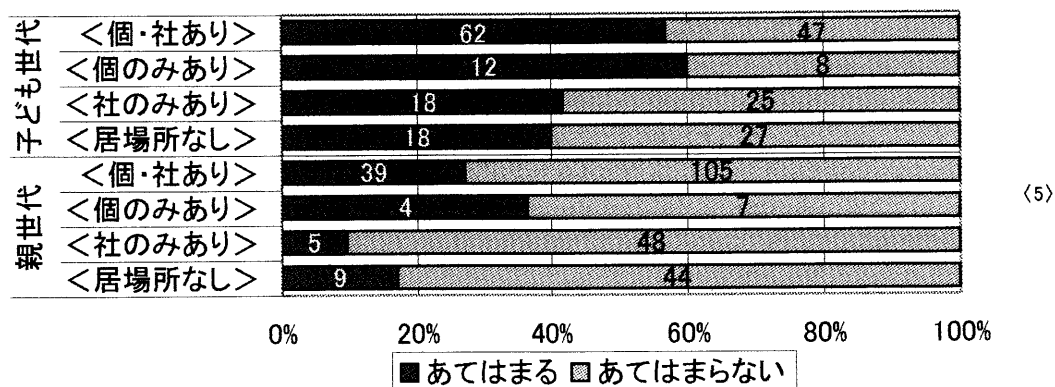


図10-3-1-3-5 よく行く場所(店・一人)と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

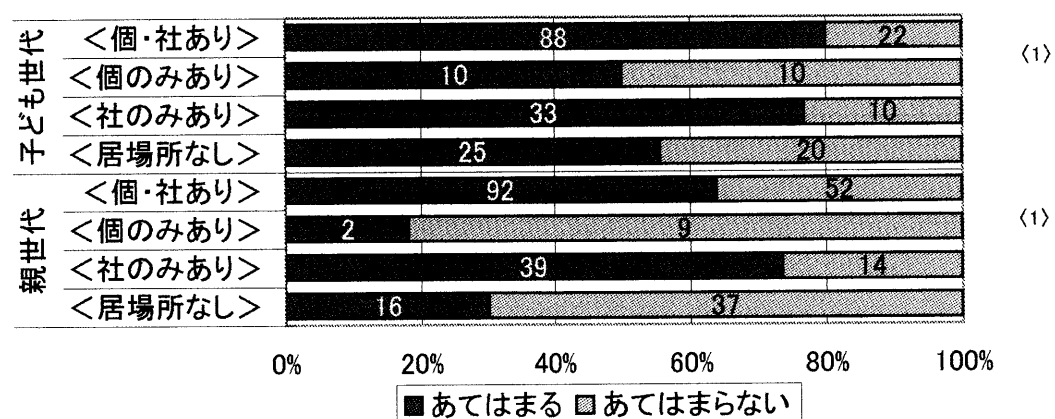


図10-3-1-3-6 よく行く場所(店・仲間)と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

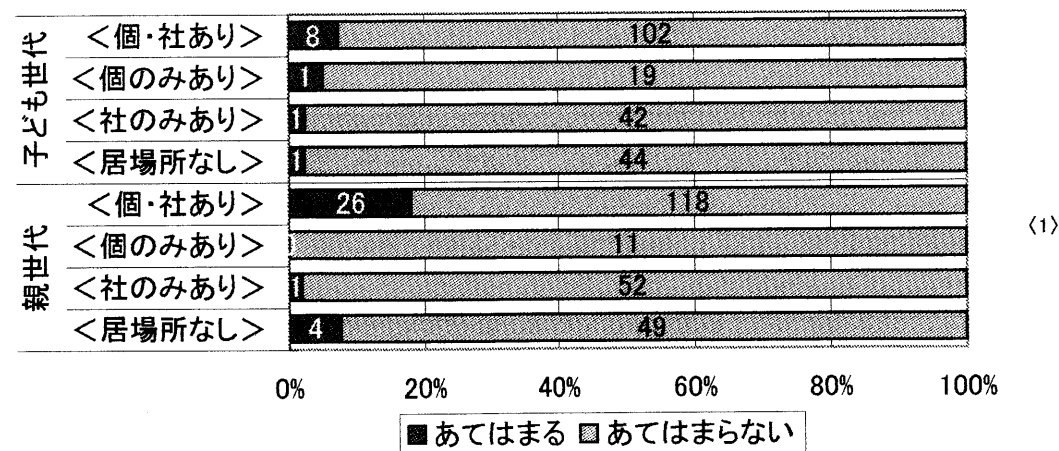


図10-3-1-3-7 よく行く場所(店・店員)と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

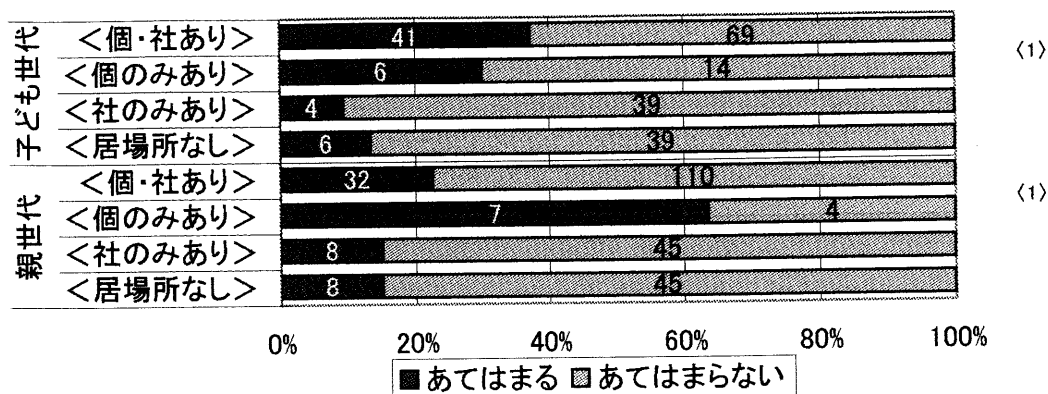


図10-3-1-3-8 よく行く場所(公共施設・一人)と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

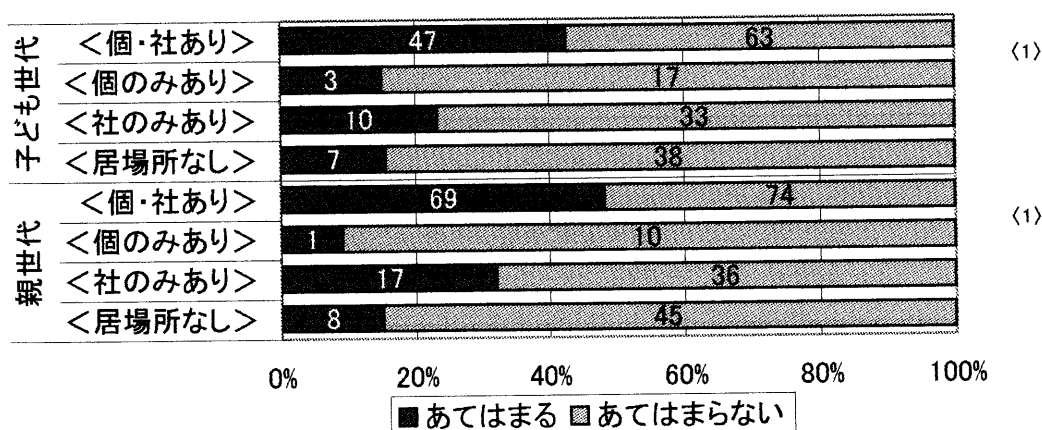


図10-3-1-3-9 よく行く場所(公共施設・仲間)と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

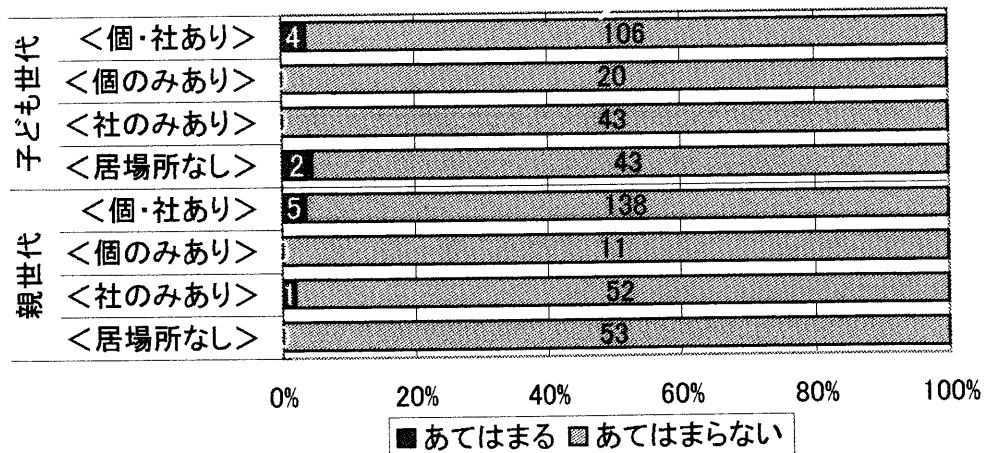


図10-3-1-3-10 よく行く場所(公共施設・職員)と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

<内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

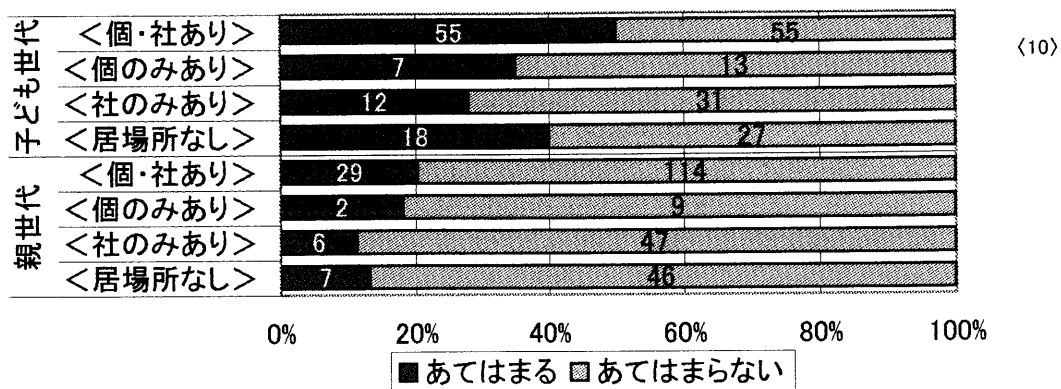


図10-3-1-3-11 よく行く場所(塾・勉強)と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

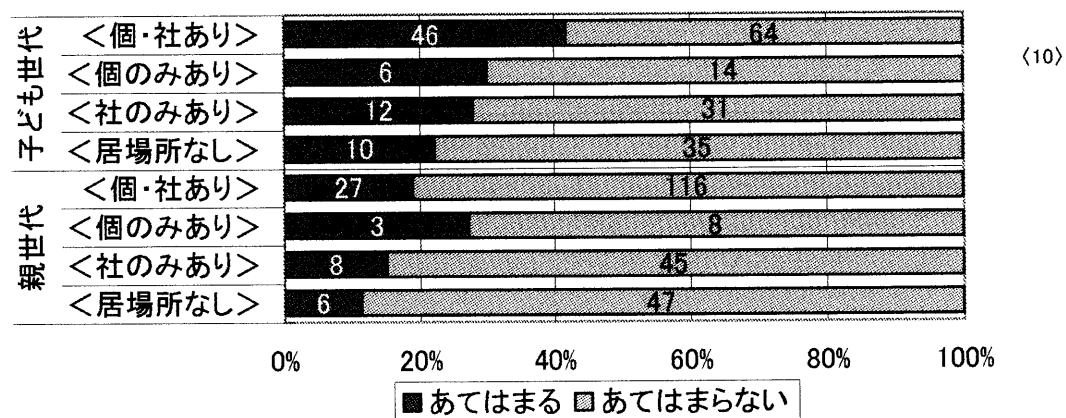


図10-3-1-3-12 よく行く場所(塾・仲間)と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

<>内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

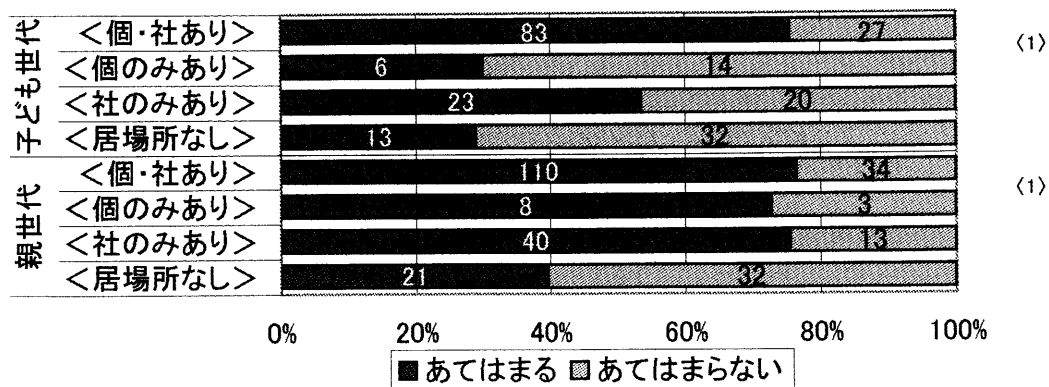


図10-3-1-3-13 よく行く場所(友達の家)と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

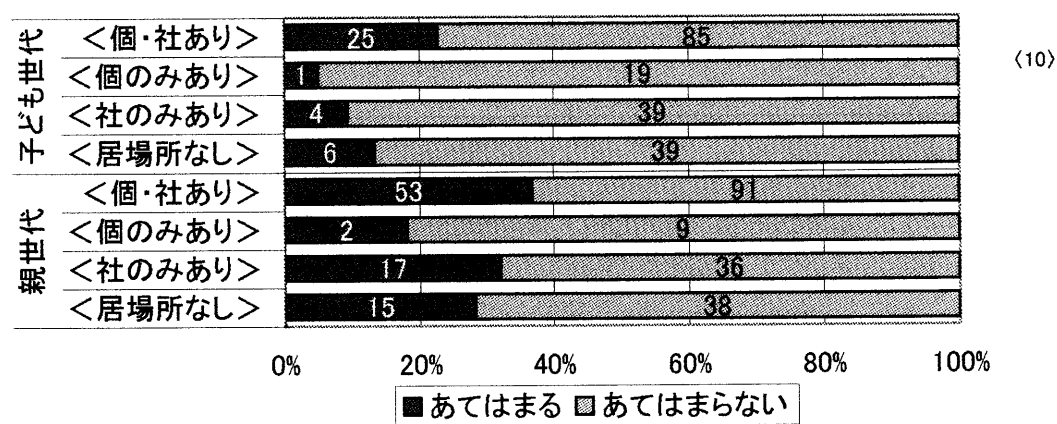


図10-3-1-3-14 よく行く場所(親戚の家)と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

<>内数値はカイ二乗検定における有意水準を示す。

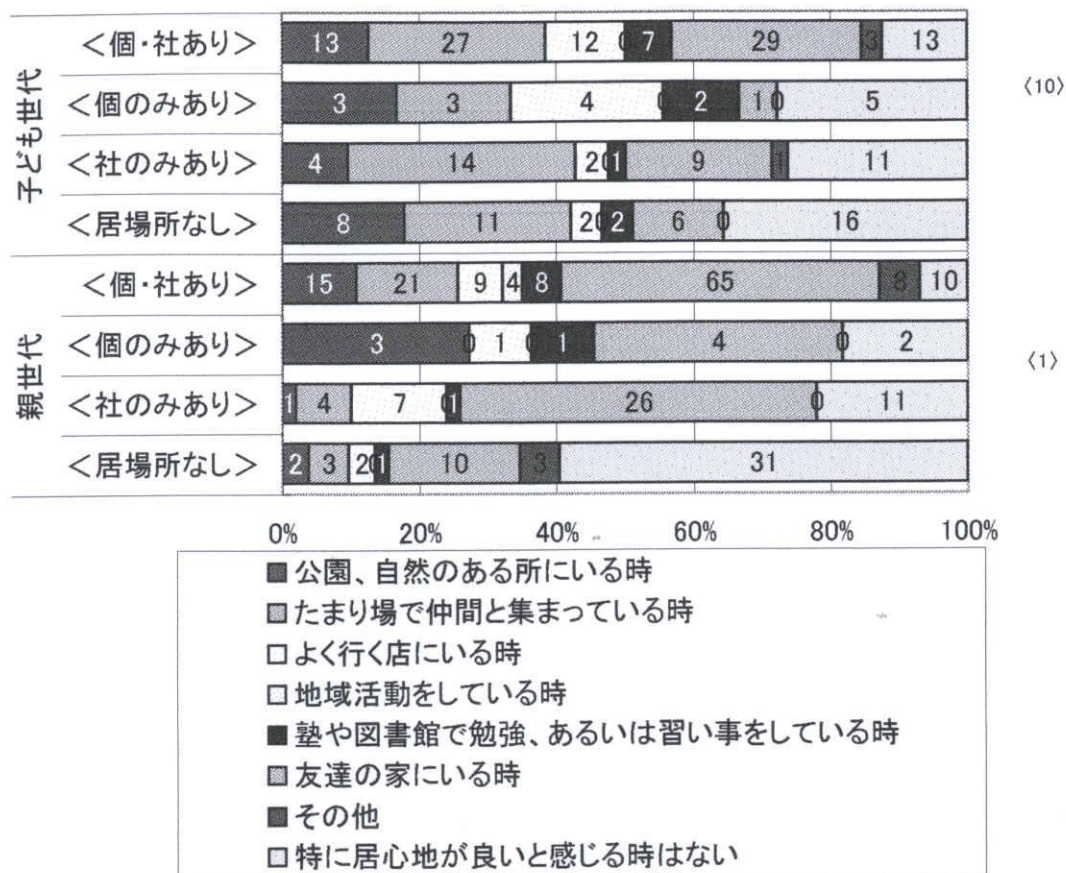


図10-3-2-1 地域における居心地と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

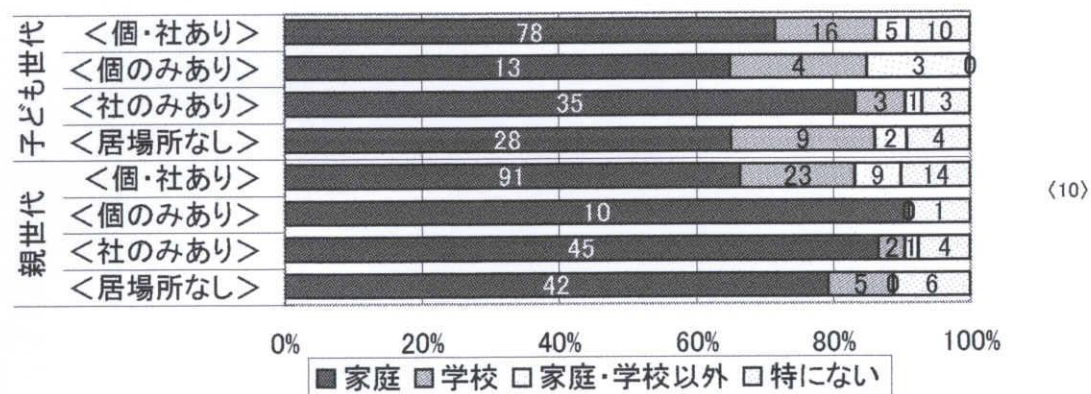


図10-3-2-2 居心地のよい場所と地域における居場所タイプとの関連(両世代)

※グラフ内数値は件数。

〈〉内数値はカイニ乗検定における有意水準を示す。

形成要因

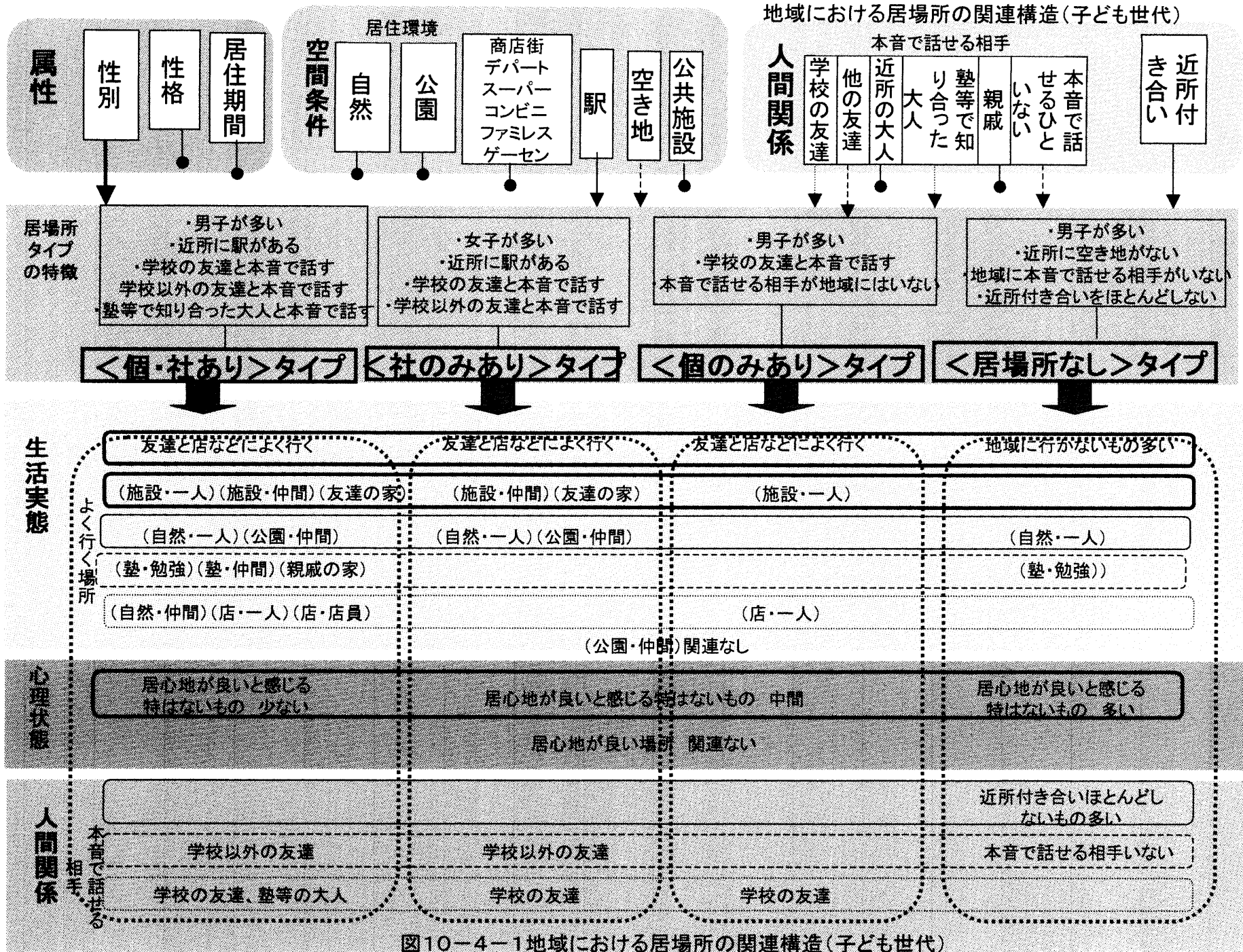


図10-4-1地域における居場所の関連構造(子ども世代)

形成要因

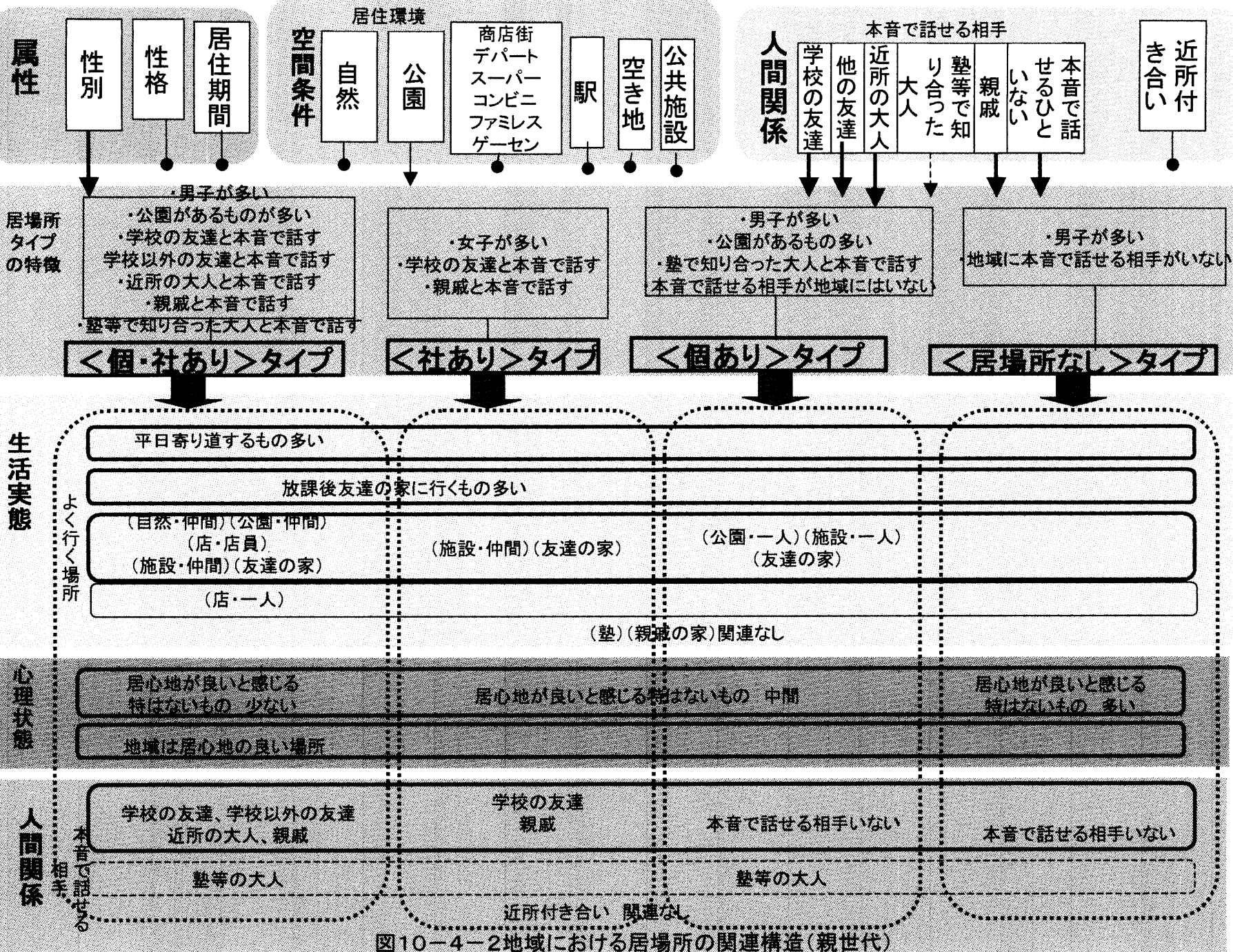


図10-4-2 地域における居場所の関連構造(親世代)

居場所所有が及ぼす影響

第十一章 親世代・子ども世代比較にみる家庭・学校・地域における高校生の居場所と関連構造

本章では、第八章から第十章まででみてきた、家庭・学校・地域それぞれにおける居場所について、総合的に考察し、家庭・学校・地域全体を通じた居場所の関連構造を総括的に検討する。そのため、第八章から第十章の結果を合わせて模式的な図で表し、それをもとに考察することとする。

なお、家庭・学校・地域それぞれにおける居場所タイプは、第八章～第十章の第一節で述べた通りであり、家庭では、＜個（高）・社あり＞＜個（高）あり＞＜個（低）・社あり＞の3タイプ、学校では、＜社（高）・個あり＞＜社（高）あり＞＜社（低）・個あり＞の3タイプ、地域では、＜個・社あり＞＜個のみあり＞＜社のみあり＞＜居場所なし＞の4タイプである。

第一節 家庭・学校・地域それぞれにおける居場所の形成要因

本節では、第八章から第十章まででみてきた、家庭・学校・地域における居場所の形成要因について検討していく。

1. 高校生の属性と家庭・学校・地域それぞれにおける居場所タイプとの関連

家庭・学校・地域それぞれの居場所タイプと「性別」「性格」「居住年数」との関連について検討していく。属性と家庭・学校・地域それぞれにおける居場所タイプとの関連を模式的にあらわした結果を、図 11-1-1 に示す。

（1）性別と居場所タイプとの関連

性別と居場所タイプとの関連をみると、両世代とも、学校と地域における居場所タイプとの間に関連がみられた。学校においては、女子の方が＜社（高）・個あり＞＜社（高）あり＞タイプが多く、女子の方が高次元の社会的居場所を所有しているものが多いことが捉えられた。地域においては、女子の方が＜社のみあり＞タイプが多く、女子の方が社会的居場所はあるが個人的居場所はないものが多いことが捉えられた。これは、友人関係において、女子は比較的少人数で親密な関係を持っているものが多い傾向であることが、高次元の社会的居場所を所有することにつながっているのではないかと考えられる。一方、男子は女子よりは表面的な友人関係のものが多いことが、低次元の社会的居場所を所有しているものの多さにつながっているのではないかと考えられる。なお、家庭では性別と居場所タイプとの間に関連はみられないことが明らかになり、家庭は性別を問わず、居場所の所有率が高いといえる。

（2）性格と居場所タイプとの関連

性格と居場所タイプとの関連をみると、〈子ども世代〉において関連がみられた。家庭と学校において、居場所タイプとの間に関連がみられ、外向的な性格のものは、内向的な性格のものより家庭では＜個（高）・社あり＞タイプが、学校では＜社（高）・個あり＞＜社

（高）あり＞タイプが多いことが捉えられた。外向的な性格のものは人と話したりする上で有利な性格であるといえ、社会的居場所所有につながる形成要因であると考えられる。特に家庭の居場所タイプとの関連が強くみられた。これは、家庭においてはほとんどのものが個人的居場所を所有している状況であり、社会的居場所の所有の有無が居場所タイプに大きく関わってくるため、性格との関連が強く表れたのではないかと考えられる。一方、学校においては、ほとんどのものが社会的居場所を所有している状況であり、個人的居場所の所有の有無が居場所タイプに大きく関わってくるため、性格との関連は弱くなってしまったのではないかと考えられる。

（３） 居住期間と居場所タイプとの関連

居住期間と居場所タイプとの関連をみると、両世代とも、家庭・学校・地域いずれにおいても、居住期間と居場所タイプと特に関連はみられなかった。このことから、家庭・学校・地域全体的に、居住期間は居場所形成の要因にはなりえていないことが明らかになった。

（４） 家庭における居場所タイプと家族構成との関連

家庭においては、居場所タイプと家族人数、家族形態との関連を検討した。その結果、〈親世代〉において、家族形態と居場所タイプとの間にやや関連がみられ、欠損家族のものは、社会的居場所のないものが多い傾向であることが捉えられた。欠損家族は家族員が少ないため、交流する相手も少なくなると考えられ、社会的居場所の所有の低さにつながるといえる。なお、〈子ども世代〉では特に関連はみられなかった。また、家族人数と居場所タイプとは、両世代とも関連はみられなかった。

２．空間条件と家庭・地域それぞれにおける居場所タイプとの関連

空間条件と居場所タイプとの関連をみるため、家庭においては、「子ども部屋所有形態」と「住居形態」の２項目と居場所タイプとの関連を検討し、地域においては「自宅周辺の環境」と居場所タイプとの関連を検討した。空間条件と家庭・地域それぞれにおける居場所タイプとの関連を模式的にあらわした結果を、図 11-1-2 に示す。なお、学校においては、空間条件と居場所タイプとの関連は検討していない。

家庭における空間条件と居場所タイプとの関連をみると、「子ども部屋所有形態」との関連をみた場合、両世代とも、自分専用の個室を所有しているものは、＜個（高）・社あり＞＜個（高）あり＞タイプが多く、きょうだいとの共用部屋しか所有しないものは＜個（低）・社あり＞のタイプが多いことが明らかになった。このことから、専用個室を所有しているものは高次元の個人的居場所と社会的居場所ともに所有できており、共用部屋しかないものは低次元の個人的居場所しか所有できていないものが多いことが捉えられた。居場所の具体的な場所として、自分の部屋を使用するものが多く、特に個人的居場所においては、ほとんどのものが自分の部屋を使用することから、自分専用個室の有無は居場所タイプに

			快感	○		
			満足感	○		
			解放感	○		
			好感	○		
		学校心理状態	安心感		○	
			安定感		○	
			快感		○	
			満足感		○	
			解放感		○	
			好感		○	

- . . . 関連を検討する。
- △ . . . 子ども世代のみ関連を検討する。
- / . . . 関連を検討しない。

学校における人間関係と居場所タイプとの関連をみた場合、先生との関係別にみると、本音で話し合える先生がいるものほど、学校に居場所を十分所有しているタイプが多い傾向が捉えられた。友人との関係別にみると、本音で話し合える友人が多いものほど、学校に居場所を十分に所有しているタイプが多い特徴が捉えられた。また、先生や友人以外の知人との関係別にみても、本音で話し合える知人が多いものほど、学校に居場所を十分に所有しているタイプが多い傾向が捉えられた。これらのことから、学校における人間関係が良いものほど、学校に高次元の社会的居場所も個人的居場所も両方十分に所有しているタイプが多いことが捉えられ、特に友人関係が大きく関わっていることが明らかになった。

地域における人間関係と居場所タイプとの関連をみると、近所付き合いほとんどしないものは、地域に居場所を所有しないタイプが多いことが捉えられ、近所付き合いは居場所形成にやや関わっていることが明らかになった。地域における本音で話し合える人の有無との関連をみると、地域で本音で話し合える相手のいるものは地域に居場所を所有しているタイプが多いことが明らかになった。〈親世代〉では地域における人間関係全体と居場所との関連が強かったことに対して、〈子ども世代〉では学校以外の友達など同年齢との交流が居場所所有に関係しており、〈子ども世代〉の方が、人間関係と居場所タイプとの関連が弱いことが捉えられた。このことから、〈子ども世代〉は〈親世代〉ほど、地域における人間関係が居場所形成につながっていないのではないかと推測される。

以上より、両世代とも家庭・学校・地域それぞれにおいて、人間関係が居場所形成に関わっていることが捉えられ、人間関係の良好なものは、社会的居場所を所有できているものが特に多く、人間関係の希薄なものは、社会的居場所を低次元の居場所しか所有できていなかったり、社会的居場所を全く所有できていないものが多い傾向である。世代間で傾向はやや異なっており、〈子ども世代〉の特徴をみると、家庭における人間関係と居場所タイプとの関連が最も強く表れており、それに比べ学校や地域における人間関係と居場所タイプとの関連はやや弱いことが捉えられた。特に、地域における人間関係との関連は弱く、〈子ども世代〉においては地域の人間関係の影響力は弱いのではないかと考えられる。〈親世代〉においては、家庭・学校・地域の中で特に地域における人間関係と居場所タイプとの関連が強いことが捉えられた。これらのことから、〈子ども世代〉では特に、家庭における人間関係と居場所タイプとの関連が強いといえる。

4. 本節のまとめ

本節では、第八章から第十章まででみてきた、家庭・学校・地域における居場所の形成要因について検討し、以下のことが明らかになった。

属性と居場所タイプとの関連をみると、両世代とも、学校では女子の方が高次元の社会的居場所を所有する傾向が強く、地域では女子の方が社会的居場所は所有しているが個人的居場所は所有していないタイプが多い傾向であることが明らかになった。これは、友人との付き合い方が男女で異なっていることが一つの背景になっていると思われる。一般的に女子の友人関係は少人数で親密な関係を持つ傾向があり、男子は女子よりは表面的な友

人間関係を持つものが多い傾向であることから、女子は学校では高次元の社会的居場所を所有し、地域では社会的居場所のみ所有することにつながっていると考えられる。家庭においては性別と居場所タイプの関連はないことが明らかになった。学校と地域のみで関連がみられたことについては、学校と地域は社会的居場所における交流相手がほとんど友達であるため、男女による友人との付き合い方の違いから、関連がみられたと考えられる。性格と居場所タイプとの関連においては、〈子ども世代〉において、外向的な性格のものは家庭と学校において社会的居場所を所有することにつながっていることが捉えられた。〈親世代〉ではこの傾向はみられなかった。また、家庭と学校と地域いずれにおいても、居住環境と居場所タイプとの関連はみられず、世代を通して共通の傾向である。

空間条件と居場所タイプとの関連について、家庭と地域においてそれぞれ検討を行った。家庭においては、両世代とも住宅の広さ、及び専用個室所有と居場所タイプとの間に関連がみられ、特に個人的居場所の質に影響を与えている。一戸建て住宅に住んでいるもの、自分専用の個室を所有しているものほど高次元の個人的居場所を所有する傾向が明らかになった。地域においては、両世代とも、自宅周辺の環境と居場所タイプとの関連はそれほど強くないことが明らかになった。高校生ともなると、行動範囲が広くなることから、自宅周辺だけに限らず、それ以外の場所でも居場所をみつけれられているのではないかと考えられる。なお、〈子ども世代〉では、家の近くに駅のあるものは社会的居場所を所有するものが多く、交通の便が良いと居場所所有につながっていることが捉えられた。家庭と地域を通してみると、家庭では空間条件が居場所に与える影響が強いが、地域ではあまり強い関連はみられないことが世代を通して捉えられた。家庭での居場所は限られた空間の中でみつけるため、住宅の広さや自室の有無が居場所所有に直接関わってくる。一方で、高校生は行動範囲が広がってきているため、電車や自転車等で移動が可能であり、自宅周辺の環境がどうであろうと、居場所所有にはあまり影響を与えていないのではないかと考えられる。なお、学校においては、空間条件と居場所タイプとの関連は検討していない。

人間関係と居場所タイプとの関連について、家庭と学校と地域それぞれにおいて検討を行った。両世代とも、家庭・学校・地域それぞれにおいて、人間関係が居場所形成に関わっていることが捉えられた。人間関係の良好なものは、社会的居場所を所有できているものが特に多く、人間関係の希薄なものは、社会的居場所を低次元の居場所しか所有できていなかったり、社会的居場所を全く所有できていないものが多い傾向が明らかになった。世代間で傾向はやや異なっており、〈子ども世代〉の特徴をみると、家庭における人間関係と居場所タイプとの関連が最も強く表れており、それに比べ学校や地域における人間関係と居場所タイプとの関連はやや弱いことが捉えられた。特に、地域における人間関係と居場所タイプとの関連は弱く、〈子ども世代〉においては地域における人間関係の影響力は弱いのではないかと考えられる。〈親世代〉においては、家庭・学校・地域の中で特に地域における人間関係と居場所タイプとの関連が強いことが捉えられた。これらのことから、〈子ども世代〉では特に、家庭における人間関係と居場所タイプとの関連が強いということが捉えられた。

第二節 家庭・学校・地域それぞれにおける居場所所有が及ぼす影響

本節では、第八章から第十章までみてきた、家庭・学校・地域における居場所所有が及ぼす影響について検討していく。

1. 家庭・学校・地域それぞれにおける居場所タイプと生活実態との関連

居場所タイプと生活実態との関連をみるため、家庭においては、「平日の行動パターン」と「家庭における過ごし方」と「家庭における交流」の3項目と居場所タイプとの関連を検討した。学校においては、「平日の行動パターン」と「学校における放課後の過ごし方」の2項目と居場所タイプとの関連を検討した。地域においては、「平日の行動パターン」と「地域における放課後の過ごし方」と「よく行く場所」の3項目と居場所タイプとの関連を検討した。生活実態と家庭・学校・地域それぞれにおける居場所タイプとの関連を模式的にあらわした結果を、図 11・2・1 に示す。

家庭における生活実態と居場所タイプとの関連をみると、「平日の行動パターン」との関連をみた場合、両世代とも居場所タイプとの関連がみられた。＜個（高）・社あり＞タイプは家族で過ごすのと一人で過ごすのが半々のものが多く、＜個（高）あり＞タイプはほとんど自分の部屋で過ごすものが多く、＜個（低）・社あり＞タイプはほとんど家族と一緒に過ごすものが多いという傾向がみられた。このことから、高次元の個人的居場所と社会的居場所どちらももつタイプは、家庭における交流も、交流と隔離のバランスのとれた過ごし方をしているといえる。高次元の個人的居場所は所有しているが社会的居場所をもたないタイプは、家庭での過ごし方が一人で過ごすことに偏っている。社会的居場所は所有しているが個人的居場所は低次元の居場所しかもたないタイプは家族と一緒に過ごすことがほとんどであり、自分ひとりの時間をあまりもたない過ごし方であるといえる。次に、「家庭における交流」と居場所タイプとの関連をみた場合、社会的場所を所有している＜個（高）・社あり＞＜個（低）・社あり＞タイプは家族や友達と交流するものが多いが、社会的居場所をもたない＜個（高）あり＞タイプは家庭では誰とも交流しないというものが多いことが捉えられた。以上より、家庭における生活実態は居場所タイプの特徴が反映しており、居場所タイプと生活実態とは対応している傾向であることが捉えられた。

学校における生活実態と居場所タイプとの関連をみると、本論文における生活実態に関する調査項目と居場所タイプとの間には特に関連はみられなかった。今後は、さらに様々な側面から生活実態を捉える必要がある。

地域における生活実態と居場所タイプとの関連をみると、「平日の行動パターン」との関連をみた場合、〈親世代〉において＜個・社あり＞タイプは平日に地域に寄り道するものが多いという傾向がみられた。このことから、地域に個人的居場所も社会的居場所も両方所有するものは、地域によく立ち寄っていることが捉えられた。「地域における放課後の過ごし方との関連をみた場合、〈子ども世代〉においては、＜個・社あり＞＜個のみあり＞＜社のみあり＞の地域に何らかの居場所を所有しているタイプは友達と店などによく行くも

が多く、〈居場所なし〉タイプは、平日に家庭・学校以外には行かないというものが多くという傾向がみられた。これらのことから、地域に居場所を所有しているものは地域で過ごすことも多いが、居場所を所有していないものは、地域にあまり行かないことが捉えられた。「よく行く場所」と居場所タイプとの関連をみた場合、両世代とも地域に居場所を所有しているものは、地域によく行くものが多い傾向が捉えられ、地域における居場所所有は実際の地域における行動につながっていることが明らかになった。中でも、特に強い関連がみられたのは、友達の家、公共施設との関連であり、居場所を所有しているものは、これらの場所によく行くものが多い傾向が強いことが捉えられた。他の自然や公園、店は〈子ども世代〉における関連はやや弱く、〈親世代〉の方が関連が強く表れている。一方、〈子ども世代〉においては、塾と居場所所有との間に関連がややみられるようになり、塾が地域における居場所になっているものも増えてきているのではないかと考えられる。

以上より、家庭と地域においては、生活実態と居場所タイプとの間に関連があることが捉えられた。家庭・地域それぞれにおける居場所タイプはその場所での実際の行動につながっていることが明らかになった。

2. 家庭・学校・地域それぞれにおける居場所タイプと心理状態との関連

居場所タイプと心理状態との関連をみるため、家庭においては、「6つの側面からみた家庭における心理状態」「家庭における居心地の良いと感じる時」「居心地が良いと感じる場所」の3項目と居場所タイプとの関連を検討した。学校においては、「6つの側面からみた学校における心理状態」「学校における居心地の良いと感じる時」「居心地が良いと感じる場所」の3項目と居場所タイプとの関連を検討した。地域においては、「地域における居心地の良いと感じる時」「居心地の良い場所」の2項目と居場所タイプとの関連を検討した。心理状態と家庭・学校・地域それぞれにおける居場所タイプとの関連を模式的にあらわした結果を、図 11-2-2 に示す。

家庭における心理状態と居場所タイプとの関連をみると、「6つの側面からみた家庭における心理状態」との関連をみると、〈親世代〉における関連の方が強く、〈子ども世代〉においては関連が弱いことが捉えられた。世代間で心理状態と居場所タイプとの関連で傾向がやや異なっており、〈子ども世代〉においては、〈個（高）・社あり〉〈個（低）・社あり〉タイプは家庭に対して、安心感、安定感、快楽感、満足感、好感を感じており、個人的居場所の質に関わらず、社会的居場所を所有しているタイプは家庭に対してプラスの心理状態であることが捉えられた。また、〈個（高）社あり〉〈個（高）あり〉タイプは家庭に対して、解放感を感じており、高次元の個人的居場所を所有しているタイプは家庭で解放感を感じているものが多いことが捉えられた。一方、〈親世代〉においては、〈個（高）・社あり〉〈個（低）・社あり〉タイプは家庭に対して安心感と好感を感じており、個人的居場所の質に関わらず社会的居場所を所有しているタイプは家庭に対して安心感と好感を感じている傾向については〈子ども世代〉と同様であるが、〈個（高）・社あり〉タイプが家庭に対して、安定感、快楽感、解放感を感じており、高次元の個人的居場所と社会的居場所

所を両方所有することが家庭において安定感と快楽感と解放感を感じることに繋がっている。また<個（高）・社あり><個（高）あり>タイプは満足感を感じている。これらのことから、〈親世代〉では高次元の個人的居場所を所有することが家庭に対してプラスの心理を感じられることに繋がる傾向の方が強いといえる。以上より、世代間で心理状態の良さに影響を与える居場所タイプはやや異なっていることが捉えられ、〈親世代〉では高次元の個人的居場所を所有することが家庭における心理状態の良さに繋がる傾向が強いことに対して、〈子ども世代〉では個人的居場所の質に関わらず社会的居場所を所有することが心理状態の良さに繋がる傾向であることが捉えられた。「家庭における居心地が良いと感じる時」と居場所タイプとの関連をみた場合、両世代とも、<個（高）・社あり><個（高）あり>タイプは一人でのんびりしている時に居心地の良さを感じているが、<個（低）・社あり>タイプは家族団らんをしている時に居心地の良さを感じているものが多い傾向であることから、高次元の個人的居場所を所有しているタイプは一人に居心地の良さを感じる傾向であるが、低次元の個人的居場所しか所有できていないものは、家族団らんの方が居心地が良いものが多いことが捉えられた。「居心地のよい場所」との関連をみると、〈子ども世代〉では、<個（高）・社あり><個（低）・社あり>タイプは家庭に最も居心地の良さを感じているものが多いのに対し、<個（高）あり>は特に居心地のよい場所はないというものが多い傾向であることが捉えられた。〈親世代〉では、<個（高）・社あり>タイプは家庭に最も居心地の良さを感じているものが多いが、<個（高）あり>タイプは特に居心地のよい場所はないというものが多い傾向であることが捉えられた。これらのことから、〈親世代〉は高次元の個人的居場所と社会的居場所を両方所有できているものは家庭が最も居心地が良いと感じているのに対し、〈子ども世代〉では家庭に社会的居場所を所有しているタイプは家庭が最も居心地の良い場所であるとするものが多いといえる。以上より、これまでみてきた中で、家庭では個人的居場所を中心に居場所を所有している状況が捉えられたが、心理状態と居場所所有の関連からみると、〈子ども世代〉では社会的居場所も所有することが重要になってきているといえる。

学校における心理状態と居場所所有との関連をみると、「6つの側面からみた学校における心理状態」との関連をみた場合、世代間で関連の強さに強弱があり、〈子ども世代〉における関連の方がやや弱くなっている。また、傾向も世代により異なっており、〈子ども世代〉では、<社（高）・個あり><社（低）・個あり>タイプは学校に対して、安心感、安定感、快楽感、満足感、解放感、好感を感じているものが多い傾向であり、社会的居場所の質に関わらず個人的居場所の所有が学校におけるプラスの心理に繋がっている傾向であることが捉えられた。一方〈親世代〉では、<社（高）・個あり><社（低）・個あり>タイプは学校に対して、安定感と満足感を感じており、これは〈子ども世代〉と同様の傾向である。しかし、<社（高）・個あり>タイプは学校に対して安心感、快楽感、好感、解放感を感じているが、<社（低）・個あり>タイプは安心感と好感を感じているものが少ない傾向が捉えられた。このことから、〈親世代〉においては、高次元の社会的居場所を所有することが学校における心理状態の良さに繋がっている側面があることも捉えられた。以上よ

り、世代間で心理状態の良さに影響を与える居場所タイプはやや異なっていることが捉えられ、〈親世代〉では高次元の社会的居場所を所有することが学校における心理状態の良さにつながる傾向が強いことに対して、〈子ども世代〉では社会的居場所の質に関わらず個人的居場所を所有することが心理状態の良さにつながる傾向であることが捉えられた。「学校における居心地の良いと感じる時」と居場所タイプとの関連をみた場合、両世代とも特に関連はみられなかった。「居心地が良いと感じる場所」と居場所タイプとの関連をみた場合、〈子ども世代〉では、〈社（高）あり〉タイプは学校が最も居心地の良い場所であるとするものは全くいなかったことから、学校に個人的居場所のないものは、学校が一番居心地が良いとは感じられないのではないかと考えられる。〈親世代〉では、〈社（低）・個あり〉タイプは全て最も居心地の良い場所は家庭であるとしており、地域が最も居心地が良いと感じているものは全くいない。このことから、〈子ども世代〉では学校に個人的居場所を所有していないものは学校に居心地の良さを感じるものが少なく、〈親世代〉では低次元の社会的居場所しか所有していないものは、学校に居心地の良さを感じるものが少ないという傾向が捉えられた。以上より、これまでみてきた中で、学校では社会的居場所を中心に居場所を所有している状況が捉えられたが、心理状態と居場所所有の関連からみると、〈子ども世代〉では個人的居場所も所有することが重要になってきているといえる。

地域における心理状態と居場所所有との関連をみると、「地域における居心地の良いと感じる時」との関連をみた場合、両世代とも〈個・社あり〉タイプは居心地が良いと感じる時はないとするものが最も少なく、〈居場所なし〉タイプは居心地が良いと感じる時はないというものが最も多い。〈個のみあり〉〈社のみあり〉はそれらの中間である。これらのことから、地域に居場所を所有しているものほど、地域に何らかの居心地の良さを感じているものが多いことが捉えられた。「居心地の良い場所」と居場所タイプとの関連をみた場合、〈親世代〉において、〈個・社あり〉タイプは地域が最も居心地の良い場所であるとするものがやや多い傾向であった。このことから、地域に居場所を所有するものは地域に居心地の良さを感じることにつながっていることが捉えられた。〈子ども世代〉においては特に関連はみられなかった。

以上より、家庭・学校・地域それぞれにおいて、居場所タイプと心理状態との間には何らかの関連がみられ、家庭と学校における関連は世代により傾向が異なっていることが捉えられた。家庭においては、〈子ども世代〉では、個人的居場所の質よりも社会的居場所の所有の方が心理状態の良さにつながる傾向であり、〈親世代〉では高次元の個人的居場所を所有することが心理状態の良さにつながっている。学校においては、〈子ども世代〉では社会的居場所の質よりも個人的居場所の所有の方が心理状態の良さにつながる傾向であり、〈親世代〉では高次元の社会的居場所を所有することが心理状態の良さにつながっている。これらのことから、〈子ども世代〉では家庭・学校それぞれにおいて、中心的な居場所以外の居場所である、家庭では社会的居場所、学校では個人的居場所の所有が心理状態の良さに影響を与えている傾向であることが捉えられた。

3. 家庭・学校・地域それぞれにおける居場所タイプと人間関係との関連

居場所タイプと人間関係との関連については、第一節3. でみてきたが、本節においては、居場所所有が人間関係に及ぼす影響を捉えることを目的とし、居場所所有が及ぼす影響としての側面から検討する。家庭においては、「親子関係」と「きょうだいとの関係」の2項目と居場所タイプとの関連を検討した。学校においては、「先生との関係」と「友人関係」と「先生や友達以外の知人（先輩や後輩など）との関係」の3項目と居場所タイプとの関連を検討した。地域においては、「近所付き合い」と「本音で話し合える相手」の2項目と居場所タイプとの関連を検討した。人間関係と家庭・地域それぞれにおける居場所タイプとの関連を模式的にあらわした結果を、図 11-2-3 に示す。

家庭における居場所タイプと人間関係との関連をみた場合、両世代とも<個（高）・社あり><個（低）・社あり>タイプは親やきょうだいと本音で話し合っているものが多く、家庭に社会的居場所を所有しているタイプは、親やきょうだいと良好な関係のものが多くことが明らかになった。また、<個（高）あり>タイプは〈子ども世代〉では親やきょうだいと表面上の会話しかしないものが多く、〈親世代〉では親と表面上の会話しかしないものが多くことが捉えられた。これらのことから、社会的居場所を所有しているタイプは親やきょうだいと良好な関係を築けているが、社会的居場所を持たないタイプは親やきょうだいとやや希薄な関係であることが明らかになり、〈子ども世代〉の方がこの傾向がやや強いことが捉えられた。

学校における居場所タイプと人間関係との関連をみた場合、両世代とも<社（高）・個あり>タイプは本音で話し合える先生がいるものが多く、本音で話せる友達やその他の知人が多いものが多くことが捉えられた。一方、両世代とも<社（低）・個あり>タイプは本音で話せる友達やその他の知人が多いものが少ない傾向である。これらのことから、学校に高次元の社会的居場所も個人的居場所も両方所有するものは先生や友達、その他の知人と親しいものが多く、低次元の社会的居場所しか持たないタイプは、友達やその他の知人と親しい関係のものが少ないことが捉えられた。特に両世代とも友人関係と居場所タイプとの関連が最も強かったことから、学校における居場所タイプと人間関係との関連は特に友人関係が大きいウェイトを占めているといえる。

地域における人間関係と居場所タイプとの関連をみると、「近所付き合い」との関連をみた場合、〈子ども世代〉において、<居場所なし>タイプは近所付き合いをほとんどしないものが多くことが明らかになった。〈親世代〉においては関連はみられなかった。「地域における本音で話せる相手」との関連をみた場合、〈子ども世代〉では<個・社あり>タイプは学校の友達、学校以外の友達、塾等で知り合った大人と本音で話せるものが多く。<社のみあり>タイプは学校の友達、学校以外の友達と本音で話せるものが多く。<個のみあり>タイプは学校の友達と本音で話せるものが多く。<居場所なし>タイプは本音で話せる相手がいないものが多く。また、〈親世代〉では<個・社あり>タイプは学校の友達、学校以外の友達、近所の大人、塾等で知り合った大人、親戚の人と本音で話せるものが多く。<社のみあり>タイプは学校の友達、親戚の人と本音で話せるものが多く。<個のみあり>

><居場所なし>タイプは地域に本音で話せる相手がいないものが多い。これらのことから、両世代とも、地域に社会的居場所と個人的居場所両方をしゅゆうしているものは、地域において本音で話し合える相手が多いことが捉えられた。一方、地域に個人的居場所しかないもの、個人的居場所も社会的居場所もないものは、地域に本音で話し合える相手がいないものが多い傾向が捉えられた。世代で比較すると、〈親世代〉では地域における人間関係全体と居場所との関連が強かったことに対して、〈子ども世代〉では学校以外の友達など同年齢との交流が居場所所有に関係しており、〈子ども世代〉の方が、人間関係と居場所タイプとの関連が弱いことが捉えられた。このことから、〈子ども世代〉は〈親世代〉ほど、地域における人間関係は居場所所有に影響を受けていないのではないかと推測される。

以上より、両世代とも家庭・学校・地域それぞれにおいて、人間関係と居場所所有との間に関連がみられ、特に社会的居場所を所有しているものは、人間関係の良好なものが多いことが明らかになった。一方、社会的居場所を低次元の居場所しか所有できていなかったり、社会的居場所を全く所有できていないタイプは、人間関係の希薄なものが多い傾向である。世代間で傾向はやや異なっており、〈子ども世代〉の特徴をみると、家庭における人間関係と居場所タイプとの関連が最も強く表れており、それに比べ学校や地域における人間関係と居場所タイプとの関連はやや弱いことが捉えられた。特に、地域における人間関係との関連は弱く、〈子ども世代〉においては地域における人間関係は居場所所有にあまり影響をうけていないのではないかと考えられる。〈親世代〉においては、家庭・学校・地域の中で特に地域における人間関係と居場所タイプとの関連が強いことが捉えられた。これらのことから、〈子ども世代〉では家庭・学校・地域間で人間関係と居場所タイプとの間の関連に強弱があり、特に家庭における人間関係と居場所タイプとの関連が強いことが明らかになった。

4. 本節のまとめ

本節では、第八章から第十章まででみてきた、家庭・学校・地域における居場所所有が及ぼす影響について検討し、以下のことが明らかになった。

生活実態と居場所タイプとの関連を検討した結果、両世代とも家庭と地域においては、生活実態と居場所タイプとの間に関連があることが捉えられた。家庭においては、<個（高）・社あり>タイプは家庭において一人で過ごすのと家族と過ごすのとが半々のバランスのとれた過ごし方であり、<個（高）あり>タイプは家庭ではほとんど一人で過ごすというものが多く、<個（低）・社あり>タイプは家庭ではほとんど家族と過ごすというものが多い傾向が捉えられた。また、社会的居場所を所有するタイプは家庭で家族や友達と交流しているものが多い傾向も捉えられ、居場所タイプの特徴は家庭における過ごし方や交流状況にも反映していることが明らかになった。また、地域においても、両世代とも地域に居場所を所有しているものは、地域によく立ち寄ったり、よく行く場所のあるものが多い傾向が捉えられた。これらのことから、家庭・地域それぞれにおける居場所タイプはその場所での実際の行動につながっていることが明らかになり、居場所所有は生活実態に影

響を与えているといえる。なお、学校における居場所タイプと生活実態との関連は本調査項目に関しては関連がみられなかった。

心理状態と居場所タイプとの関連を検討した結果、家庭・学校・地域それぞれにおいて、居場所タイプと心理状態との間には何らかの関連がみられ、家庭と学校における関連は世代により傾向が異なっていることが捉えられた。家庭においては、〈子ども世代〉では、個人的居場所の質よりも社会的居場所の所有の方が心理状態の良さにつながる傾向であり、〈親世代〉では高次元の個人的居場所を所有することが心理状態の良さにつながっている。学校においては、〈子ども世代〉では社会的居場所の質よりも個人的居場所の所有の方が心理状態の良さにつながる傾向であり、〈親世代〉では高次元の社会的居場所を所有することが心理状態の良さにつながっている。これらのことから、〈子ども世代〉では家庭・学校それぞれにおいて、中心的な居場所以外の居場所の所有、家庭では社会的居場所、学校では個人的居場所の所有が心理状態の良さに影響を与えている傾向であることが捉えられた。地域においては、両世代とも居場所を所有するものほど、地域における居心地がよく、居場所を所有しないものほど地域における居心地が良くないという傾向が捉えられた。

人間関係と居場所タイプとの関連を検討した結果、両世代とも家庭・学校・地域それぞれにおいて、人間関係と居場所所有との間に関連がみられ、特に社会的居場所を所有しているものは、人間関係の良好なものが多いことが明らかになった。一方、社会的居場所を低次元の居場所しか所有できていなかったり、社会的居場所を全く所有できていないタイプは、人間関係の希薄なものが多い傾向である。世代間で傾向はやや異なっており、〈子ども世代〉の特徴をみると、家庭における人間関係と居場所タイプとの関連が最も強く表れており、それに比べ学校や地域における人間関係と居場所タイプとの関連はやや弱いことが捉えられた。特に、地域における人間関係との関連は弱く、〈子ども世代〉においては地域における人間関係は居場所所有にあまり影響をうけていないのではないかと考えられる。〈親世代〉においては、家庭・学校・地域の中で特に地域における人間関係と居場所タイプとの関連が強いことが捉えられた。これらのことから、〈子ども世代〉では家庭・学校・地域間で人間関係と居場所タイプとの間の関連に強弱があり、特に家庭における人間関係と居場所タイプとの関連が強いことが明らかになった。

第三節 本章のまとめ

本章では、第八章から第十章まででみてきた、家庭・学校・地域それぞれにおける居場所について、総合的に考察し、家庭・学校・地域全体を通じた居場所の関連構造を総括的に検討した。その結果、以下のことが明らかになった。

1. 家庭・学校・地域それぞれにおける居場所の形成要因についてみると、属性、空間条件、人間関係いずれも居場所タイプと関連がみられた。属性においては、性別と性格において居場所タイプと関連がみられ、居住環境との関連は家庭・学校・地域通してみられなかった。両世代とも女子の方が、学校では高次元の社会的居場所を所有するタイプが多く、地域では社会的居場所のみを所有し個人的居場所は所有しないタイプが多い傾向が明

らかになった。これは、友人との付き合い方が男女で異なっていることが背景にあると考えられ、一般的に女子の方が男子よりも友人関係が少人数で親密な関係を持つ傾向が関係していると思われる。なお、家庭においては、性別と居場所タイプとの関連はみられなかった。これは、社会的居場所で話す相手が学校や地域はほとんど友達であるのに対し、家庭では家族との交流が大部分を占めていることが関係していると考えられる。性格と居場所タイプとの関連においては、〈子ども世代〉において、外向的な性格のものは家庭と学校において社会的居場所を所有することにつながっていることが捉えられた。〈親世代〉ではこの傾向はみられなかった。

空間条件においては、家庭と地域についてそれぞれ検討を行った。家庭と地域を通してみると、家庭では空間条件が居場所に与える影響が強いが、地域ではあまり強い関連はみられないことが世代を通して捉えられた。家庭においては、両世代とも一戸建てに住み、専用子ども部屋を所有するものほど高次元の個人的居場所を所有しているものが多い特徴である。家庭での居場所は限られた空間の中でみつけるため、住宅の広さや自室の有無が居場所所有に直接関わってくる。一方で、高校生は行動範囲が広がってきているため、電車や自転車等で移動が可能であり、自宅周辺の環境がどうであろうと、居場所所有にはあまり影響を与えていないのではないかと考えられる。なお、学校においては、空間条件と居場所タイプとの関連は検討していない。

人間関係と居場所タイプとの関連について、家庭と学校と地域それぞれにおいて検討を行った。両世代とも、家庭・学校・地域それぞれにおいて、人間関係が居場所形成に関わっていることが捉えられた。人間関係の良好なものは、社会的居場所を所有できているものが特に多く、人間関係の希薄なものは、社会的居場所を低次元の居場所しか所有できていなかったり、社会的居場所を全く所有できていないものが多い傾向が明らかになった。世代間で傾向はやや異なっており、〈親世代〉では家庭・学校・地域の中で特に地域における人間関係と居場所タイプとの関連が強かったのに対し、〈子ども世代〉では地域における人間関係との関連は弱く、家庭における人間関係と居場所タイプとの関連が強いことが明らかになった。

2. 家庭・学校・地域それぞれにおける居場所所有が及ぼす影響についてみると、生活実態は家庭と地域において、心理状態と人間関係においては家庭と学校と地域いずれにおいても居場所タイプとの関連がみられた。生活実態と居場所タイプとの関連では、家庭と地域それぞれにおける居場所タイプの特徴はその場所での行動に反映されていることが明らかになり、家庭と地域における居場所は生活実態に影響を与えているといえる。なお、学校における居場所タイプと生活実態との関連は本調査項目に関しては関連がみられなかった。

心理状態と居場所タイプとの関連では、家庭と学校における関連は世代により傾向が異なっていることが捉えられた。家庭においては、〈子ども世代〉では、個人的居場所の質よりも社会的居場所の所有の方が心理状態の良さにつながる傾向であり、〈親世代〉では高次元の個人的居場所を所有することが心理状態の良さにつながっている。学校においては、

〈子ども世代〉では社会的居場所の質よりも個人的居場所の所有の方が心理状態の良さにつながる傾向であり、〈親世代〉では高次元の社会的居場所を所有することが心理状態の良さにつながっている。これらのことから、〈子ども世代〉では家庭・学校それぞれにおいて、中心的な居場所以外の居場所の所有、家庭では社会的居場所、学校では個人的居場所の所有が心理状態の良さに影響を与えている傾向であることが捉えられた。地域においては、両世代とも居場所を所有するものほど、地域における居心地がよく、居場所を所有しないものほど地域における居心地が良くないという傾向が捉えられた。

人間関係と居場所タイプとの関連をみると、両世代とも家庭・学校・地域それぞれにおいて、人間関係と居場所所有との間に関連がみられ、特に社会的居場所を所有しているものは、人間関係の良好なものが多いことが明らかになった。世代間で傾向はやや異なっており、〈子ども世代〉の特徴をみると、家庭における人間関係と居場所タイプとの関連が最も強く表れており、それに比べ学校や地域における人間関係と居場所タイプとの関連はやや弱いことが捉えられた。特に、地域における人間関係との関連は弱く、〈子ども世代〉においては地域における人間関係は居場所所有にあまり影響をうけていないのではないかと考えられる。〈親世代〉においては、家庭・学校・地域の中で特に地域における人間関係と居場所タイプとの関連が強いことが捉えられた。これらのことから、〈子ども世代〉では家庭・学校・地域間で人間関係と居場所タイプとの間の関連に強弱があり、特に家庭における人間関係と居場所タイプとの関連が強いことが明らかになった。

以上より、〈子ども世代〉における特徴を明確にすると、居場所の形成要因については、特に家庭において、空間条件、人間関係が居場所形成要因としての関連が強く表れている。一方、学校・地域は性別の違いが特に大きいことが捉えられた。居場所所有が及ぼす影響については、生活実態、心理状態、人間関係いずれも居場所所有から影響を受けている側面が捉えられ、特に家庭と学校における心理状態と居場所との関連が〈親世代〉とは異なっており、家庭では社会的居場所の所有、学校では個人的居場所の所有が心理状態の良さにつながっているという特徴である。このことから、家庭、学校それぞれ中心的な居場所以外の居場所も所有することが必要であることが明らかになった。

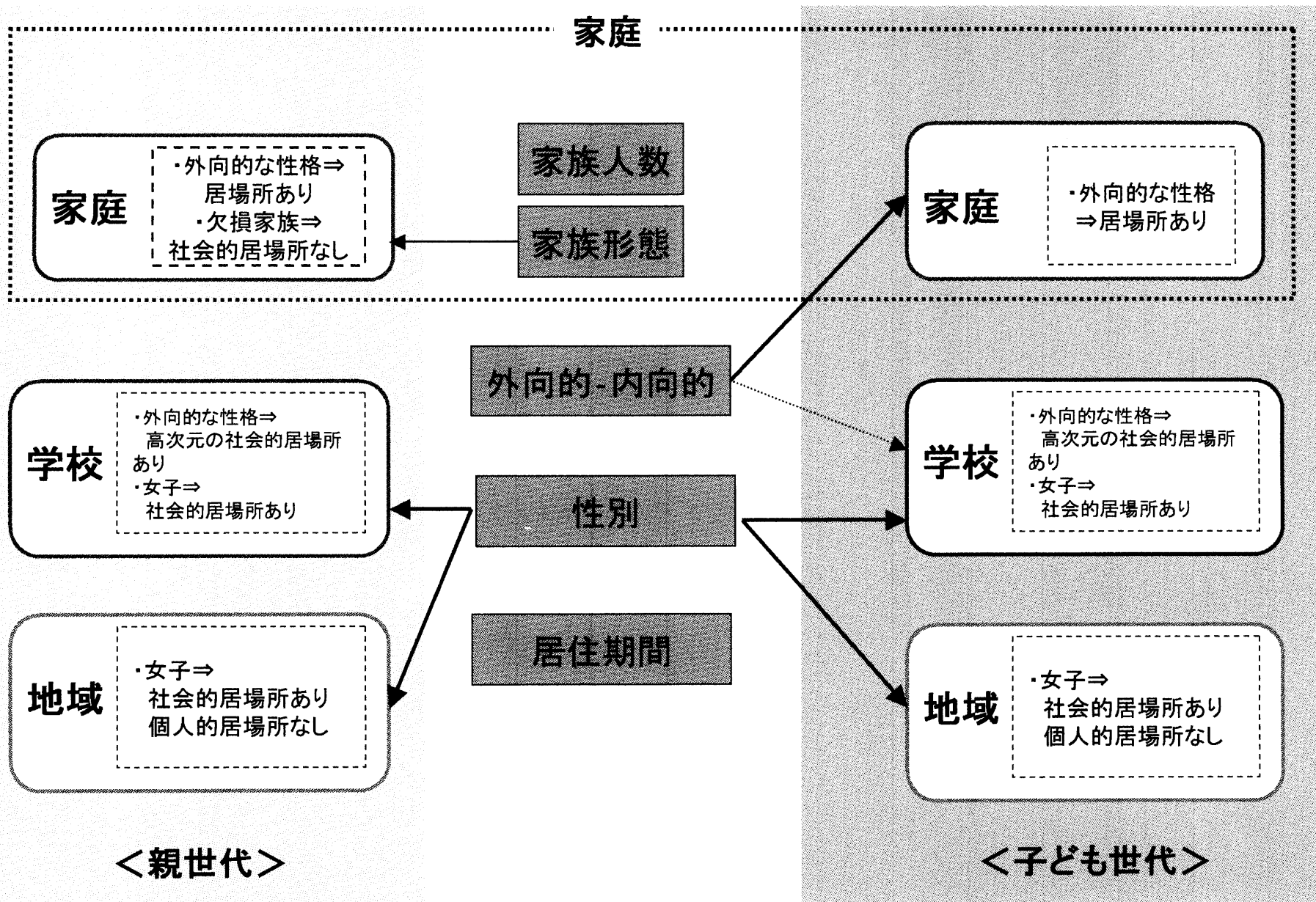


図11-1-1属性と家庭・学校・地域それぞれにおける居場所タイプとの関連図(形成要因)

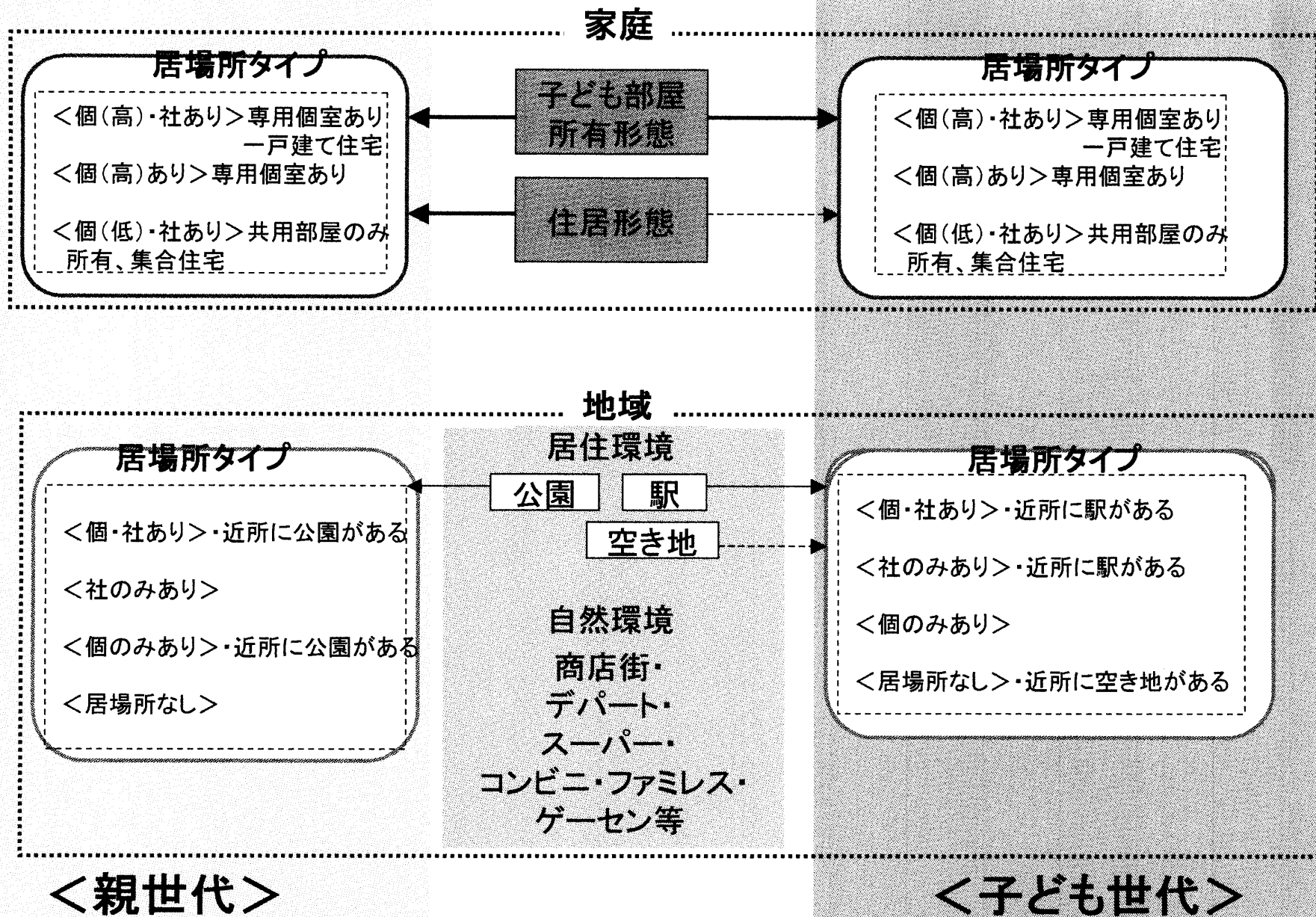


図11-1-2 空間条件と家庭・学校・地域それぞれにおける居場所タイプとの関連(居場所の形成要因)

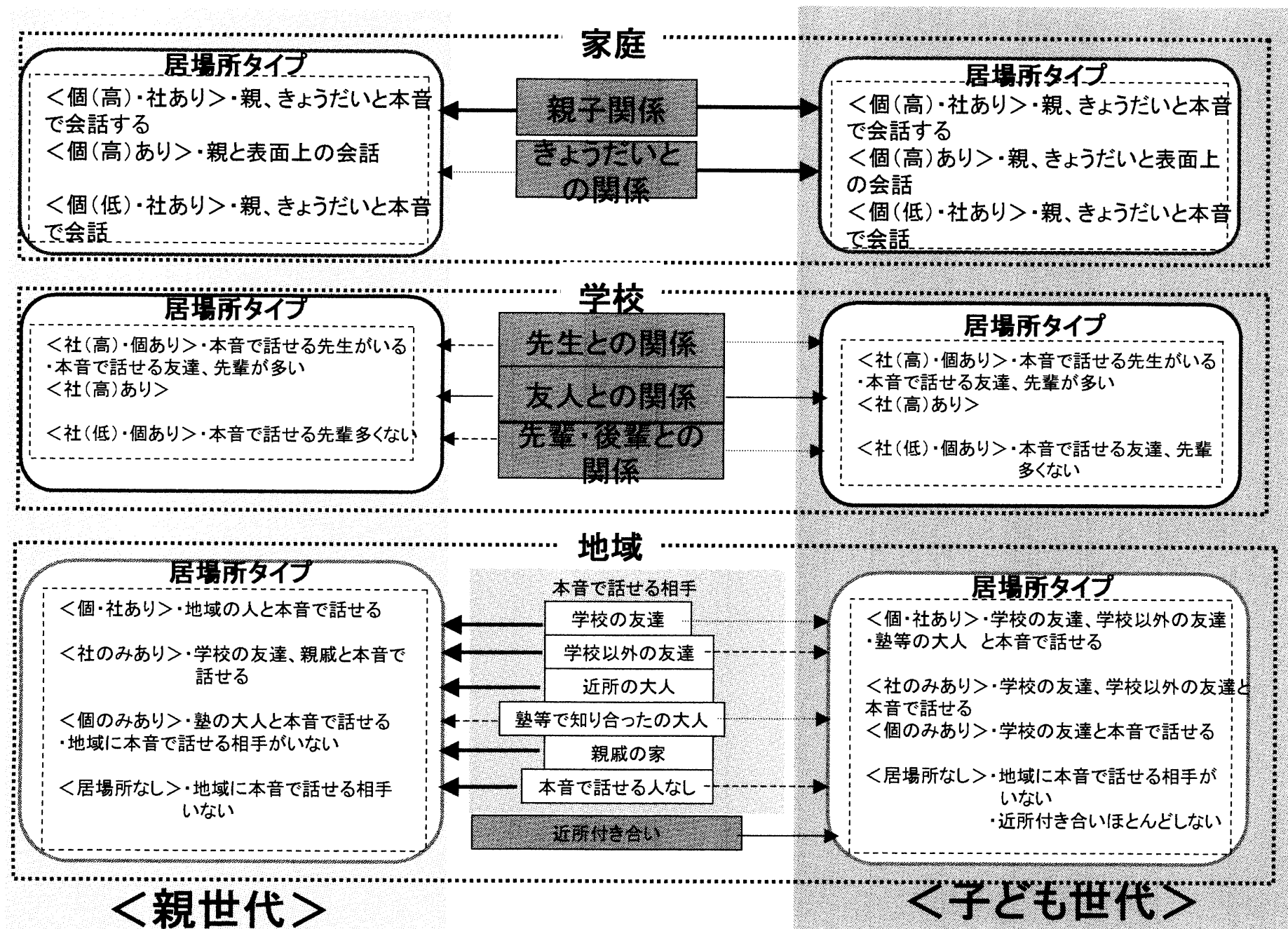


図11-1-3 人間関係と家庭・学校・地域それぞれにおける居場所タイプとの関連(居場所の形成要因)

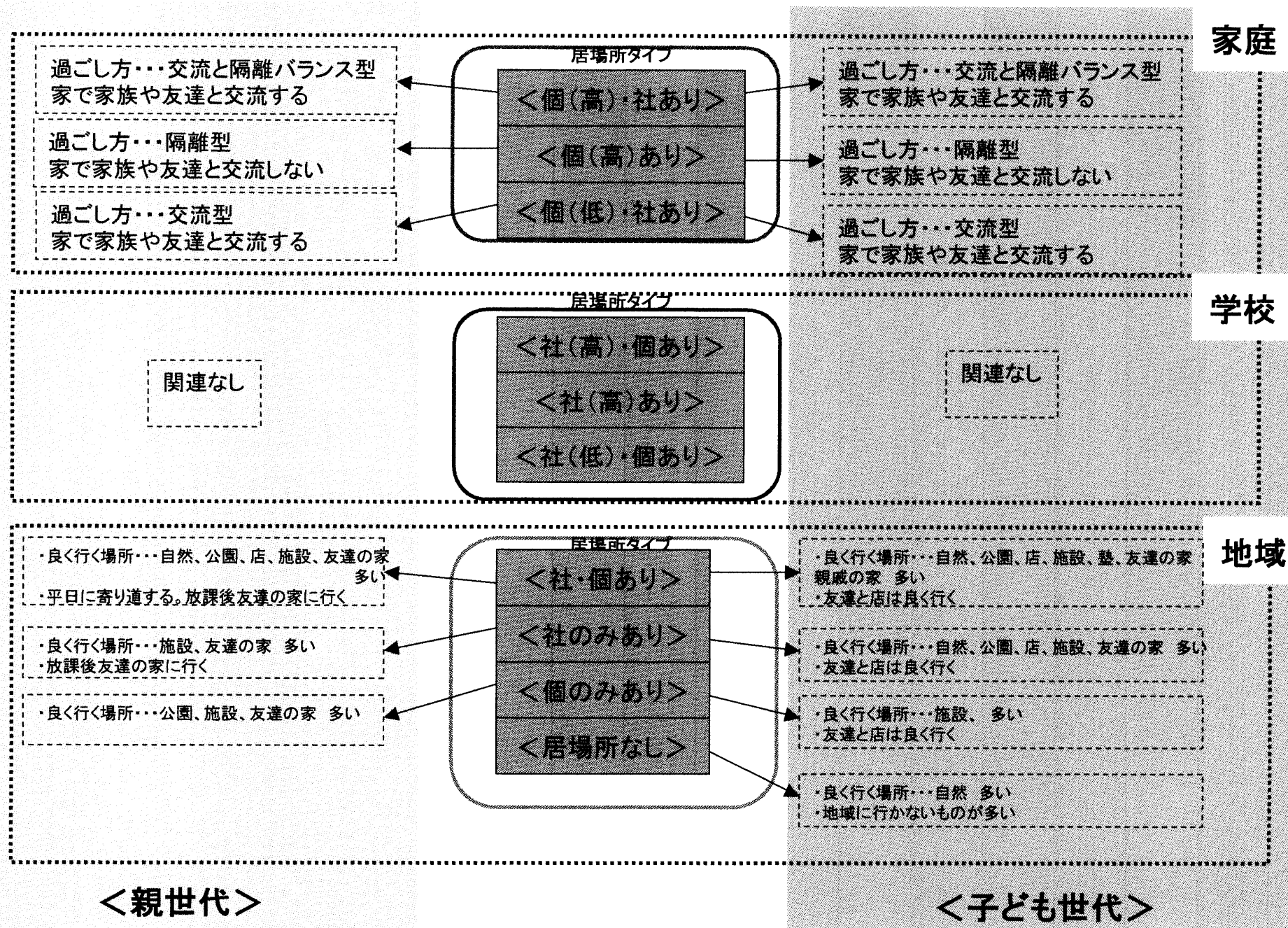


図11-2-1生活実態と家庭・学校・地域それぞれにおける居場所タイプとの関連(居場所所有が及ぼす影響)

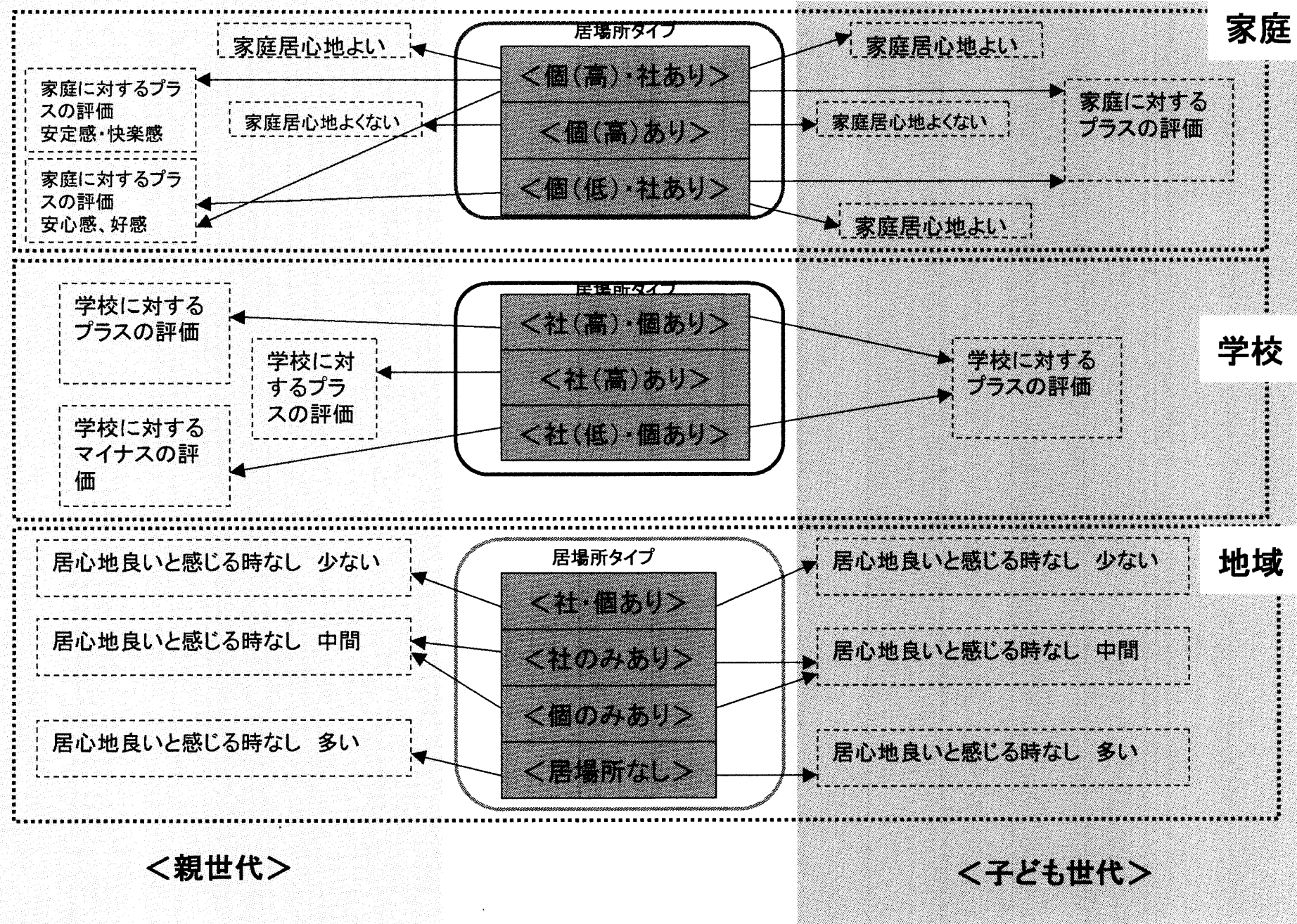


図11-2-2心理状態と家庭・学校・地域それぞれにおける居場所タイプとの関連(居場所所有が及ぼす影響)

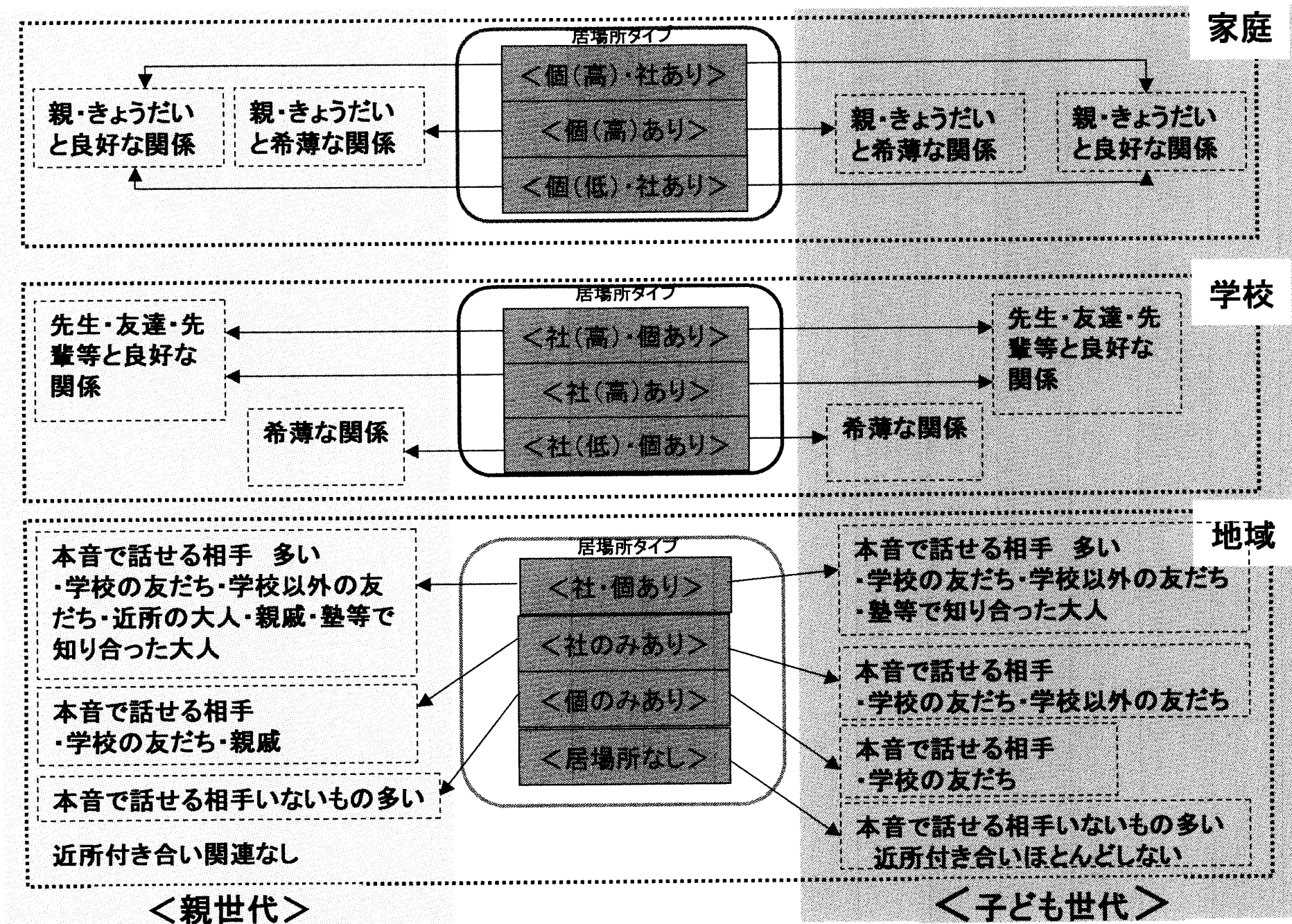


図11-2-3 人間関係と家庭・学校・地域それぞれにおける居場所タイプとの関連(居場所所有が及ぼす影響)

結 論

<結論>

本研究では、現在の高校生の居場所が以前と比べてどのように変化しているのか捉えるため、世代間比較を通して、家庭・学校・地域における高校生の居場所の実態や特徴の検討を行なった。また、家庭・学校・地域間で居場所所有にどのような相互関連が存在するのか捉えるため、居場所の補完構造についても検討した。さらに、それぞれの世代における居場所の関連構造を捉えるため、「居場所の形成要因」と「居場所所有が及ぼす影響」の2側面から検討を行なった。そのため、〈家庭〉〈学校〉〈地域〉についてそれぞれ居場所タイプを設定し、「居場所の形成要因」を、高校生の属性との関連、空間条件との関連、人間関係との関連から探り、「居場所所有が及ぼす影響」を、生活実態との関連、心理状態との関連、人間関係との関連から探ってきた。以下では、各章で得られた結果に基づいて、世代間比較による家庭・学校・地域における居場所の実態や意識について明らかにし、現在の高校生の居場所の特徴を検討し本研究の結論としたい。

第一節 本研究のまとめ

1. 親世代・子ども世代比較にみる高校生の生活と行動においては、高校生の居場所のあり方全般に関連があると思われる、高校生の行動と生活や心理について世代間比較を通して検討を行った。その結果、以下のことが明らかになった。

平日の行動において、両世代共通の傾向は、平日の行動パターンが「授業終了後学校に残り帰宅」というものが多く、家庭と学校が主な活動場所であるものが多い。放課後も学校で過ごすものが多く、学校における生活時間が特に長いことが捉えられた。平日に地域に寄るものについては、学校に残った後、帰宅途中に立ち寄るものが多い。学校における過ごし方は、部活動が大半を占め、それ以外は、先生や友達とおしゃべりをして過ごしている。家庭における過ごし方は、交流と隔離のバランスがとれた過ごし方をしているものが多いことが捉えられた。家庭における交流相手は主に家族であり、友達との交流は多くない。

平日の行動における世代別の違いについては、〈子ども世代〉の方が学校で部活動をするものが多い。地域における過ごし方では、〈親世代〉の方が友達の家に行くものが多いのに対し、〈子ども世代〉の方が塾や図書館、お店等、地域の施設をよく利用し、友達の家に行くものは少ない。このことから、地域において、高校生が利用できる施設は充実してきたが、友達を呼べるオープンな家庭は少なくなっていることが考えられる。家庭における過ごし方は、〈子ども世代〉の方が一人で過ごすものがやや多いことが捉えられた。家庭における交流は、友達との交流手段において世代間で違いがあり、〈子ども世代〉では、直接的な交流より電話やメールを使った間接的な交流の方が多いことが明らかになった。

休日の過ごし方について、両世代共通の傾向は、土日を家庭あるいは学校で過ごすものが多いということである。世代別の違いについては、〈子ども世代〉の方が部活動をするものが多く、平日だけでなく、休日にも部活をしている高校生が多いことが明らかになった。

所有物については、両世代とも自分専用の個室を所有しているものが多い。その中で、世代別の違いも大きいことが明らかになった。〈子ども世代〉の方が所有物の専用化が進んでおり、特に子ども部屋の専用個室化が進んでいる。このことから、〈子ども世代〉の方が、家庭において一人になれる場所を確保しやすく、居場所も得やすい環境であるといえる。また、世代間で通信機器の違いが大きく、〈子ども世代〉では携帯電話、専用パソコン等の所有率が

高く、通信手段が充実しているといえる。

性格において、両世代とも外向的でプラス思考で協調性のある性格のことが多い。世代間の違いは、〈子ども世代〉の方がマイナス思考の性格、自己中心的な性格のものも多いことが捉えられ、〈子ども世代〉の方が、良好な人間関係を築いていく上で障害になる性格のものが多くなっていることが捉えられた。

居心地の良い場所においては、両世代とも一番居心地が良いと感じる場所は「家庭」であることが捉えられた。

受験勉強・友人関係に対するストレスでは、両世代とも約半数の高校生がストレスを感じており、友人関係より受験勉強に対するストレスの方が多くなることが捉えられた。世代間の違いにおいては、〈子ども世代〉の方がストレスを感じている高校生が多い。ストレスの原因をみると、受験勉強より友人関係に対するストレスの方が世代間の違いが大きいことが明らかになった。性格において〈子ども世代〉の方がマイナス思考や自己中心的な性格が多く、人間関係を良好に築くことが困難なものが多いことが、友人関係に対するストレスの大きさにつながっているのではないかと考えられる。

2. 世代間比較にみる家庭における高校生の居場所では、家庭における居場所所有の実態や意識について世代間比較を通して検討した。さらに、家庭において居場所の形成に関わりがあると考えられる高校生の心理状態や人間関係についても合わせて検討を行なった。その結果、以下のことが明らかになった。

家庭における高校生の心理状態については、世代に関わらず、家庭では交流よりも一人でいる時に居心地の良さを感じる傾向が強いことが明らかになった。また、交流しているときに居心地の良さを感じるものの中では、友達よりも家族との交流に居心地の良さを感じるものの方が多くなることが捉えられた。心理状態を6つの側面から検討すると、全体的に家庭における心理状態は良い。その中で、安心感や安定感を感じているものが多く、世代を通して、家庭は安心できる心の拠り所になっていることが明らかになった。それに対して、好感、快楽感、満足感、解放感を感じているものはやや少ないことが捉えられた。この心の拠り所である家庭であっても、心理状態の悪いものもいることが明らかになった。世代による違いみると、快楽感、満足感、解放感、好感において、〈子ども世代〉の心理状態の方が良いことが捉えられ、家庭における心理状態は〈子ども世代〉の方が良いことが明らかになった。

家庭における人間関係では、両世代とも親やきょうだいと本音で話し合っているものは半数程度であり、親やきょうだいであっても本音で話せていないものが多いことが明らかになった。また、仲が良いが関係を悪くしないように気をつかうものや、表面上の会話しかしないものも2～4割もいることが捉えられ、家族との関係が希薄なものがやや多いことが、世代を通して明らかになった。世代による違いをみると、親子関係ときょうだい関係両方において、〈子ども世代〉の方が良好な関係のものが多くなることが明らかになり、特に〈子ども世代〉は親子関係の良いものが多くなることが明らかになった。これは、〈子ども世代〉における家庭の心理状態が良いことと関係するのではないかと考えられる。

家庭における子どもの居場所の実態と意識では、「家庭の各室における空間の支配度」においては、世代を通して共通の傾向であった。家庭における空間の支配度が最も強い場所は、子ども部屋であり、次いで居間や食事室であることが明らかになった。これは、高校生の子ども部屋が専用個室化しているため、その他の家族共用の空間より、支配度が強くなったと考えられる。しかし、子ども部屋が防御テリトリーではないものもみられ、子ども部屋が完

全に他者から離れ一人になれる場所になっていないものもいることが明らかになった。

家庭における居場所の所有率においては、個人的居場所の③【個人的な休息】のみ世代による違いがややみられ、〈子ども世代〉の所有率の方がやや高いことが捉えられた。他の居場所については、世代を通して同じ傾向であり、家庭における居場所所有の実態に関しては世代による違いはあまりみられないことが明らかになった。両世代とも個人的居場所の所有率は約 9 割で、ほとんどのものが所有しており、低次元・高次元の隔離逃避要求に関わらず、個人的居場所の所有率は高いことが明らかになった。社会的居場所の所有率は⑧【受容意識】が約 6 割であるのを除いて、他は約 8 割と高い所有率である。家庭は子ども部屋や、居間など居場所となりえる物理的環境が比較的整っているため、個人的居場所と社会的居場所どちらも所有率は高く、家庭は居場所を所有しやすい場所であるといえる。その中で、社会的居場所の所有率がやや低く、⑧【受容意識】の所有率は特に低い傾向がみられた。物理的に居場所を所有しやすい家庭であっても、社会的居場所においては、交流相手との関わりから、所有率が低くなるのではないかと考えられる。

居場所となる具体的な場所と社会的居場所において話す相手については、個人的居場所においては 9 割が子ども部屋であることが明らかになり、個人的居場所の中心的な場所であることが捉えられた。しかし、トイレ・風呂を居場所とするものも少数ではあるが、いることが明らかになった。社会的居場所の具体的な場所は、居間や食事室であり、社会的居場所で話す相手は、家族であるものが多い。その中で、⑥【価値観の共有】⑧【受容意識】の居場所においては、居間や食事室以外に子ども部屋を使うものも多く、交流相手は友達であるものが多い。世代により違いがみられた居場所は、個人的居場所においては、〈子ども世代〉の方がトイレや風呂を使う割合がやや高いことが捉えられた。トイレや風呂は居室ではないが、鍵をかけ一時的に完全に一人になることのできる場所であるといえる。このことから、〈子ども世代〉の方が、個人的居場所として、子ども部屋よりも完全な密室を求める傾向がやや強いと考えられる。また、個人的居場所において、〈子ども世代〉の方が、居間や食事室を使うものの割合がやや高いことが捉えられた。これは、〈子ども世代〉の方が家族との関係がよく、居間や食事室で家族がいても、家族の目が気にならないのではないかと考えられる。社会的居場所の⑨【被受容意識】においては、〈子ども世代〉の方が、子ども部屋を使うものの割合がやや高いことが捉えられた。

以上のように、両世代とも居場所の所有率は高いが、居場所とする場所はやや違いがある。〈子ども世代〉では、個人的居場所において、子ども部屋以外を居場所とするものがやや多く、トイレや風呂など密室性の高い場所を使うものもいる。このことから、〈子ども世代〉の方が、隔離・逃避傾向が強いのではないかと考えられる。

家庭における居場所に対する要求については、世代間で共通の傾向は、個人的居場所においては、④【管理からの逃避】を除く居場所をほぼ全員が要求していることが明らかになった。④【管理からの逃避】の要求率は個人的居場所の中では若干低いことが捉えられた。社会的居場所に対する要求率はどれも約 8 割であり、個人的居場所よりも要求がやや低いことが捉えられた。家庭における居場所所有の実態で明らかになったように、個人的居場所の所有率は約 9 割、社会的居場所の所有率は 6～8 割であったことと合わせてみると、個人的居場所では④【管理からの逃避】以外の居場所において、所有率より要求率の方が若干高い。社会的居場所では、⑧【受容意識】において、所有率より要求率の方が高く、居場所の所有要求を満たせていないものがあることが考えられる。

世代による違いをみると、個人的居場所においては、②【心理状態の維持】③【個人的な休息】④【管理からの逃避】において、〈子ども世代〉の要求率の方がやや高いことが明らかになり、特に④【管理からの逃避】において世代による違いが大きいことが捉えられた。社会的居場所においては、⑦【仲間（所属）意識】のみ、〈子ども世代〉の方が要求率が若干高いことが捉えられた。個人的居場所と社会的居場所を比較すると、個人的居場所に対する要求の方が、世代による違いが大きく、〈子ども世代〉の要求が強いことが明らかになった。このことから、人との交流に対する要求は世代によってあまり変化していないが、隔離や逃避に対する要求は世代によってやや変化しているといえ、〈子ども世代〉の方が、隔離や逃避傾向がやや強くなっていることが捉えられた。

「家庭における社会的居場所の具体的な場所と交流相手との関係」については、子ども部屋のようなある程度自由に使える場所を居場所とする場合、交流相手は友達であることが多いことが捉えられた。逆に、家族の共用部屋である居間を居場所とする場合は、家族が交流相手であることが多いことが明らかになった。

「家庭における居場所タイプの分類」については、個人的居場所と社会的居場所両方を十分に所有しているものがほとんどであることが捉えられた。他のパターンは限定的なケースであり、そのほとんどが、個人的居場所は十分に所有しているが、社会的居場所は十分に所有できていないパターンである。逆に、個人的居場所を十分に所有していないパターンは、ほとんどいないことが捉えられた。また、家庭であっても居場所を全く所有していないものが両世代とも約1%もいるという問題も明らかになった。

3. 世代間比較にみる学校における高校生の居場所では、学校における高校生の居場所を捉えるため、学校において居場所の形成に関わりがあると考えられる「高校生の意識」と、「学校における居場所の実態と意識」について世代間比較を通して検討し、以下のことが明らかになった。

学校における高校生の所属について、〈子ども世代〉のみ検討を行なった。高校生のほとんどが部活動に所属しており、そのうち、運動部に所属するものが多いことが明らかになり、部活の場も学校における居場所の選択肢となるものが多いことが捉えられた。生徒会・委員会活動については、一定人数が所属しているものの、部活動にくらべると活動をしていないものが多いことが捉えられた。

学校における心理状態について、両世代とも、学校生活の中では、比較的自由に過ごせる休憩中や放課後に居心地の良さを感じるものが多く、〈子ども世代〉ではさらにこの傾向が強いことから、〈子ども世代〉の方が学校のような管理社会になじめないものも多いのではないかと考えられる。「6つの側面からみた心理状態」については、学校は「快楽感」「好感」を感じるものが世代を通して多いことが明らかになった。これは、学校は友達と一緒に過ごす時間が長く、部活動にも打ち込めることが関係していると思われる。しかし、常に人と関わっている状態であり、くつろいだりする場には向いていないため、「安心感」「安定感」「満足感」「解放感」を感じるものは、両世代とも少ないことが明らかになった。世代別にみると、〈子ども世代〉の方が心理状態の良いものが多いことが捉えられた。一方で、〈子ども世代〉の方が不満や圧迫感を感じるものも若干多いことが明らかになり、〈子ども世代〉では心理状態の良いものと悪いものに分かれる傾向であることが捉えられた。これらのことから、学校を楽しいと感じ、好感を持っているものが多い一方で、一部のものは、進学校の勉強のスト

レスなどにより、学校になじめていないものもいるのではないかと考えられる。

学校における人間関係についてみると、両世代とも友達との関係が最も良いことが明らかになった。しかし、友達であっても気をつかったり、希薄な関係のものも多いことが捉えられた。先生や先輩・後輩との関係は表面上の会話しかしない希薄な関係が多いことが明らかになった。その中で、本音で話せるような親しい関係を築いているものもみられた。世代別にみると、先生との関係は世代を通して共通の傾向である。友達との関係においては、〈子ども世代〉の方が気をつかう関係のものが多く、やや希薄な関係であることが捉えられた。先輩・後輩との関係は〈子ども世代〉の方がやや親しい関係のものが多く、〈子ども世代〉は友達の他に他学年の人とのつながりをもつものが多いことが捉えられた。これは、学校における社会的居場所となる場所の範囲が広くなることにつながると考えられる。

学校における居場所の実態と意識について、学校の各場所における空間の支配度においては、学校の中で最も空間の支配度の強い場所は「自分のクラス」であり、「自分の部室、委員会の場など」がそれに続く。これ以外の場所の支配度は弱いことが明らかになった。世代別でみると、〈子ども世代〉の方がクラスや部室、廊下などの空間の支配度が強いことが明らかになった。これは、〈子ども世代〉の方が学校で過ごす時間が長いものが多いため、学校を自分のテリトリーであると認識しやすいのではないかと考えられる。また、学校の捉え方において、「学校は勉強をする場所」という捉え方から、「学校も生活をする場所」という捉え方になってきており、学校においても自分のテリトリーを確保しようとする傾向になってきているのではないかと考えられる。また、現在は以前とくらべると、少子化の影響で生徒数は少なくなっているが、学校数は増加してきておりや学校の規模も大きくなっていることから、〈子ども世代〉の学校の方が空間的に余裕があるということも背景にあるのではないかと考えられる。

学校における居場所の所有率については、両世代とも社会的居場所はほとんどのものが所有していることが明らかになった。それに比べ、個人的居場所の所有率は低く、全体的に所有しにくいことが捉えられた。集団生活が基本となる学校において、個人的居場所は得にくい居場所であると考えられる。世代別にみると、社会的居場所の所有率については世代で違いはなかった。個人的居場所においては、〈子ども世代〉の方が所有率が高い傾向が捉えられた。これは〈子ども世代〉の方が、学校の空間の支配度も強く、個人的居場所を得やすい環境であることが所有率の高さに関係しているのではないかと考えられる。特に、④【管理の目からの逃避】の所有率が〈親世代〉よりも高いという特徴があり、家庭でみられた〈子ども世代〉の方が隔離・逃避傾向がやや強いという状況が学校でも表れているといえる。

学校における居場所となる具体的な場所については、「自分のクラス」が最もよく使われていることが明らかになった。「自分のクラス」は学校の中で最も長くいる場所であり、空間の支配度も強いいため、居場所としてよく使われるものと考えられる。個人的居場所においては、④【管理の目からの逃避】以外の居場所は「自分のクラス」を居場所とするものが最も多く、居場所で行なう行為によっては、「部室や委員会の場」「グラウンドや体育館」などを使うものもいることが捉えられた。④【管理の目からの逃避】の具体的な場所は他の居場所と傾向が異なり、「自分のクラス」「部室、委員会の場」「廊下、階段、校庭の片隅、トイレなど」がそれぞれ同程度ずつであり、匿名性の強い廊下やトイレなどを使うものが多い。世代による違いをみると、社会的居場所全体を通して、「自分のクラス」を居場所として使用する割合は〈子ども世代〉の方が高く、その他の場所を使用する割合は〈親世代〉の方が高いことが明

らかになった。世代間では学校における物理的環境が異なっており、〈子ども世代〉の方が、生徒数は減少しているが、学校数は増加しており、学校の建物面積も増えていることから、〈子ども世代〉の方が学校やクラス内にゆとりがあると思われる。逆に〈親世代〉は〈子ども世代〉よりもクラス内にゆとりが少なかったため、「自分のクラス」以外の場所に居場所を求めざるを得ない環境だったのではないかと推測される。さらに世代別でみられた特徴は、④【管理の目からの逃避】では、〈子ども世代〉の方が「廊下、階段、校庭の片隅、トイレなど」のような学校の中で匿名的な場所を使うものが多く、学校においても隔離・逃避傾向がやや強いことが捉えられた。さらに、⑤【心理状態の回復】では、〈子ども世代〉では「職員室、保健室、相談室」を居場所とするものがおり、相談室や保健室など、学校における個人的居場所となる具体的な場所の選択肢が増えていることが捉えられた。

学校における居場所に対する要求については、社会的居場所を要求するものはほとんどであるが、個人的居場所に対する要求は低く、学校においては、個人的居場所より社会的居場所を必要としていることが捉えられた。世代別にみると、〈子ども世代〉の要求率の方が高いという特徴が捉えられた。特に、個人的居場所において顕著であり、〈子ども世代〉の方が、学校に個人的居場所を必要としている。これは、〈子ども世代〉の方が個人的居場所の所有率が高かったことの潜在的な要因であるといえる。

学校における社会的居場所で話す相手については、世代を通して共通の傾向であり、「友達のみ」がほとんどであることが捉えられた。⑨【被受容意識】においては、交流相手に先生を含むものがやや多いが、これは、「自分を受け入れてくれる」相手であるため、様々な側面で頼ることのできる先生が交流相手になるのではないかと考えられる。

学校における居場所パターンについては、両世代とも、個人的居場所・社会的居場所ともに高次元の居場所を両方所有しているものが多いことが明らかになった。また、社会的居場所は高次元の居場所を所有しているが、個人的居場所は低次元の居場所しか所有していなかったり、個人的居場所自体所有していないパターンも1～2割いることから、学校では、高次元の社会的居場所はほとんどのものが所有しているが、高次元の個人的居場所を所有できているものはやや少ないことが捉えられた。このことから、家庭が個人的居場所の中心な場所であることと対照的に、学校は社会的居場所の中心な場所であることが明らかになった。

5. 世代間比較にみる地域における高校生の居場所では、地域における高校生の居場所を捉えるため、地域における居場所の実態と意識について検討した。また、地域において居場所の形成に関わりがあると考えられる高校生を取り巻く環境、地域における高校生の生活と意識についても合わせて検討した。その結果以下のようなことが明らかになった。

高校生を取り巻く地域の環境についてみると、地域の雰囲気は両世代とも比較的良いものが多いが、〈子ども世代〉の方が地域の雰囲気がやや悪い傾向であることが明らかになった。自宅周辺の環境は、両世代とも自然環境が比較的豊かなところに居住していることが捉えられた。周辺施設については、両世代とも公園や空き地、駐車場といった広場が多く、駅も近くにあるものが多い。一方、世代間で周辺施設は大きく違っているところもあり、特に買い物をする場については、〈子ども世代〉では商店街からスーパーやコンビニに置き換わっていることが捉えられた。さらに、〈親世代〉ではほとんどみられなかった飲食店や娯楽施設も〈子ども世代〉では全体の三分の一にまで多くなっている。ショッピングモールのような複合

施設も〈子ども世代〉の方が多くなっており、買い物できる店や、一人で時間をつぶせる場所や友達と遊べる施設も多くなっていることが明らかになった。

地域における高校生の生活と意識についてみると、居住期間は、両世代とも生まれた頃から住んでいるものが多く、居住期間は比較的長いことから、地域になじんでいるものが多いことが捉えられた。地域の中でよく行く場所については、両世代とも友達の家や店、公園などによく行くものが多く、地域では一人で過ごすものより、仲間と交流するために行くものが多いことが明らかになった。世代間でみられた違いは、〈子ども世代〉では一人で地域を利用するものも多くなっており、その中でも店や塾によく行くものが多いことが捉えられた。その反面、友達など知り合いの家や自然に行くものは少なくなっており、地域において、一人で行動する傾向が強くなっていることが捉えられた。これは、〈子ども世代〉の方が、店等をはじめ社会的な施設が充実してきていることが背景にあると考えられる。また、塾によく行くものについては、進学校に通う高校生の特徴が表れていると考えられる。地域における居心地が良いと感じる時については、世代で傾向が異なっており、〈子ども世代〉はたまり場に居心地のよさを感じるものが多く、〈親世代〉は友達の家に居心地の良さを感じるものが多いことが捉えられた。このことから、〈子ども世代〉の方が、友達の家よりも匿名的な場所であるたまり場に居心地の良さを感じる傾向が強いことが明らかになった。これは、地域におけるよく行く場所において、〈子ども世代〉では友達の家に行くものより、店に行くものの方がやや多い傾向がみられたこととも関係していると考えられる。地域における人間関係について、近所付き合いは、両世代とも「あいさつくらいはしている」というものがほとんどであり、近所の人と顔見知りではあるものの、それほど親しい関係は持っていないことが捉えられた。さらに〈子ども世代〉の方が近所付き合いが希薄な傾向であることが明らかになった。地域において本音で話せる相手については、「学校の友達」が最も多く、次いで「学校以外の友達」であり、同年代がほとんどである。それ以外では、「親戚」が2割程度みられたが、他はほとんど本音で話せる相手にはなっていないことが捉えられた。世代間でやや傾向が異なっており、〈子ども世代〉では近所の大人との関係は希薄になっているものが多い。その代わりに、学校以外の友達、店などで知り合った大人と本音で話せるものがやや多くなっていることが捉えられた。

地域における子どもの居場所の実態と意識についてみると、「地域の各場所における空間の支配度」については、世代を通して、地域におけるどの場所の空間の支配度も弱いことが明らかになった。地域は、家庭や学校とは異なり、不特定多数の人が利用する場所が多いため、自分の自由にふるまうことは困難であることが背景になると考えられる。世代別でみると、店と塾における空間の支配度は〈子ども世代〉の方がやや強い傾向であり、友達の家の空間の支配度は〈親世代〉の方がやや強い傾向であることが明らかになった。これは、それぞれの世代がよく行く場所と一致しており、よく利用する場所であるため、支配度が強くなっていると考えられる。

地域における居場所の所有率については、両世代とも社会的居場所を所有しているものが過半数と比較的多いが、個人的居場所を所有しているものは全体の3割程度と低く、中でも、③【個人的な休息】を所有しているものはほとんどいないことが捉えられた。これは、地域を一人で利用するものよりも、交流を目的として利用するものの方が多いことと関係していると考えられる。また、地域のような公共の場所では、家庭や学校のように空間の支配度が強い場もないため、個人的居場所は所有しにくいと考えられる。世代による違いをみると、

個人的居場所では③【個人的な休息】、社会的居場所においては、すべてにおいて、〈親世代〉の方が居場所の所有率が高いという違いが捉えられた。〈子ども世代〉の方が、店など社会的な施設が充実しており、一人で地域に行くものも多い反面、将来大学受験が控えていることから、塾に通うものも多く、立ち寄るお店などを居場所と感じられるまでには至っていないのではないかと推測される。また、社会的居場所の所有率が低くなっていることには、〈子ども世代〉の方が、近所付き合いが希薄化しているということや、友達の家に行くものが少なくなっていることも関係しているのではないかと考えられる。

地域における居場所となる具体的な場所については、両世代とも個人的居場所においては、「自然のあるところ」を居場所とするものが多いことが明らかになった。特に、低次元の個人的居場所においてこの傾向が強く、自然はほっとしたり、心理的に一人になれるような場所であるといえる。また、高次元の個人的居場所においては、自然の他に「友達の家」を居場所とするものが多い。高次元の個人的居場所は、心理的にも物理的にも隔離できる場所が必要であるため、地域の中では、比較的自由に振舞える「友達の家」が居場所として使われるのではないかと考えられる。社会的居場所の具体的な場所は、「友達の家」で次いで「よく行く店」を居場所とするものが多いことが捉えられた。これは、地域の中で、友達の家や店に仲間とよく行くものが多いことから裏付けられる。世代間の違いをみると、個人的居場所、社会的居場所ともに、「よく行く店」「塾、習い事」を居場所とするものは〈子ども世代〉の方が多く、「自然のあるところ」「友達の家」を居場所とするものは〈親世代〉の方が多い傾向が明らかになった。特に、個人的居場所で顕著にあらわれている。これらは、それぞれの世代がよく行く場所と一致しており、よく行く所ほど、居場所となっていることが捉えられた。

地域における居場所に対する要求については、社会的居場所に対する要求率は6～7割であり、家庭や学校よりも過ごす時間の短い地域においても、社会的居場所に対する要求は高いことが捉えられた。個人的居場所に対する要求については、社会的居場所よりも低い傾向が捉えられた。世代による違いを検討すると、個人的居場所において、世代間で大きな違いがみられた。〈子ども世代〉の要求率が約半数あるのに対し、〈親世代〉の要求率は2～4割と低い。また、〈子ども世代〉においては、実際に居場所を所有しているものより、居場所を要求しているものの方が多く、〈子ども世代〉の方が、地域に対し個人的居場所を必要としていることが捉えられた。〈子ども世代〉の方が、個人的居場所の所有率は低いものの、地域のお店などが充実しており、お店に一人で行くものも多いことから、地域における個人的居場所に対する要求が潜在化していると考えられる。また、社会的居場所に対する要求についても、検定による有意差はなかったものの、〈子ども世代〉の要求率の方がやや高い傾向がみられ、個人的居場所と同様の傾向であることが捉えられた。

地域における社会的居場所です話す相手については、両世代ともほとんどが友達のみであることが捉えられた。一部に「友達と大人の両方」のものがみられ、特に⑨【被受容意識】においては1～2割と他の居場所よりも高い割合である。これは、「自分を受け入れてくれる」存在であり、大人との交流のウエイトがやや高くなるのではないかと考えられる。世代による違いを検討すると、〈子ども世代〉の方が、「友達と大人の両方」の占める割合がやや高いことが捉えられた。これは、〈親世代〉では近所付き合いの良いものもまだ多く、地域内での異年齢集団で遊んだり交流することがあったのではないかとと思われる。一方、〈子ども世代〉においては、近所付き合いの良いものは少なく、地域の異年齢間のつながりもなくなってい

るのではないかと考えられる。異年齢間のつながりがなくなったが、店や塾など大人のいる場所によく行くようになり、そこにいる大人と本音で話しているというものもやや多くなっていることから、大人が交流相手に含まれるものが多くなっているのではないかと推測される。

地域における居場所パターンについては、両世代とも、家庭や学校の場合と異なり、地域ではパターンの割合にばらつきがみられた。地域には様々な場所があるため、居場所パターンも様々になっていると考えられる。その中で、最も多いパターンは「①個人的居場所（高次元）・社会的居場所（高次元）あり」で全体の3～4割を占め、地域に居場所を十分に所有しているものは比較的多いといえる。次いで多いパターンは、「⑨居場所なし」が2割、「⑦社会的居場所（高次元）あり」が1.5割と続き、他のパターンは1割以下である。このことから、地域では個人的居場所よりも社会的居場所の方がやや所有しやすい傾向があるといえる。しかし、地域に居場所が全くないものも2割もいることが捉えられた。

世代による違いを検討すると、〈親世代〉の方が地域に個人的居場所も社会的居場所も両方所有しているものが多く、〈子ども世代〉は社会的居場所を所有するパターンはやや少ないことが捉えられた。これは、地域において、友達の家に行くものが〈子ども世代〉では少なくなっていることが背景にあるのではないかとと思われる

6. 子ども世代における社会的居場所としての面識のない人との間接的コミュニケーションでは、近年の携帯電話普及やパソコン所有の増化に伴い、電話やメールを使った間接的なコミュニケーションの状況を検討した。その結果、面識のない人と電話やメールを使って交流したことがあるものは、全体の約4割もいることが明らかになった。その中、交流内容についてみると、半数以上は、社会的居場所の中で低次元の交流につながる内容であることが捉えられた。しかし、社会的居場所の高次元の交流につながる内容のものは少なく、直接会ったことのない人とはあまり親しい交流をするものは少ないことが明らかになった。これらのことから、間接的なコミュニケーションは、社会的居場所の低次元の交流においては、直接的な交流を補完するものになることが期待できよう。

7. 親世代・子ども世代比較にみる家庭・学校・地域全体における高校生の居場所の実態では、高校生の居場所の実態を家庭・学校・地域全体で捉えるため、「家庭・学校・地域全体でみた高校生の居場所所有の実態」「家庭・学校・地域それぞれにおける高校生の居場所所有状況」「家庭・学校・地域間における居場所所有の関係」について検討した。その結果、以下のことが明らかになった。

「家庭・学校・地域全体でみた高校生の居場所所有の実態」については、個人的居場所においては、家庭ではほとんどのものが所有している状況である。家庭は子ども部屋のような、高校生が容易に一人になれる場所があるため、所有しやすいと考えられる。家庭以外では、学校において所有しているものが半数程度、地域では3割程度所有しており、専用部屋のない学校や地域においてもある程度のものは所有していることが捉えられ、特に学校において所有しているものが多い。学校は、高校生が一日の大半を過ごす場所であり、個人的居場所もなんらかの形で所有しているものと考えられる。特に、〈子ども世代〉では、学校における居場所所有率が高かったことから、〈子ども世代〉は家庭以外に学校でも個人的居場所を所有しているものが比較的多いことが明らかになった。

社会的居場所においては、学校で所有しているものがほとんどであり、家庭や地域における所有率も比較的高かったことから、学校をはじめ、家庭と地域すべてにおいて、社会的居場所の所有率は高いことが捉えられた。しかし、〈子ども世代〉では地域における社会的居場所の所有率が低いことから、〈子ども世代〉の方が、社会的居場所における地域のウエイトがやや低い傾向であることが捉えられた。

「家庭・学校・地域それぞれにおける高校生の居場所所有状況」については、家庭、学校、地域をくらべると、両世代とも、個人的居場所の所有状況は、家庭が最も良く、次いで学校、地域と続く。学校と地域においては、個人的居場所を全く所有しないものも2～4割もいることが明らかになった。〈子ども世代〉においては、学校でも個人的居場所を十分に所有しているものが多く、個人的居場所における学校のウエイトもやや高いことが捉えられた。

社会的居場所の所有状況は、学校が最も良く、家庭でも良いものが多いことが明らかになった。地域においても比較的所有状況は良いが、社会的居場所を全く所有しないものも多いことが捉えられた。

「家庭・学校・地域間における居場所所有の関係」については、家庭・学校・地域間における居場所所有の関係をみると、個人的居場所と社会的居場所ともに、「拡張型補完」の傾向であることが明らかになり、居場所を所有することが、他の場所で居場所を所有することにつながっていることが捉えられた。特に、学校と地域間の社会的居場所の所有関係で「拡張型補完」の傾向が顕著に表れており、学校と地域間では居場所所有の関連が強いことが明らかになった。これは、学校と地域における社会的居場所で交流する相手はほとんどが友達であり、地域において本音で話す相手も「学校の友達」が多いということから、学校での交流が地域に波及していると考えられる。

次に、居場所のないものを対象に、代替型補完の構造を検討すると、個人的居場所においては、中心的な家庭に所有できていないものは、他の場所で代替補完をすることは困難であることが捉えられた。なお、家庭に個人的居場所のないサンプルの数が少数であることから、「代替型補完」の構造をさらに追及するには至らなかったため、今後の課題となる。社会的居場所においては、中心的な学校に所有できていないものは、主に家庭がその代わりを果たしている傾向が捉えられた。また、地域に社会的居場所がない場合をみると、家庭や学校には所有できているものがほとんどであり、地域に居場所がなくても、他の場所で所有できていることが明らかになった。地域においては、家庭や学校に居場所がないものの受け皿にするため、居場所づくり事業がなされたり、施設が作られたりといった試みがされてきている。しかし、本調査結果からは、地域が他の場所を補完するような傾向はみられず、地域は家庭や学校の居場所を補完する役割を果たすには至っていないことが捉えられた。

8. 家庭における高校生の居場所と関連構造では、「居場所の形成要因」と「居場所所有が及ぼす影響」の2側面から、家庭における居場所の関連構造について検討をし、以下のことが明らかになった。

家庭における居場所タイプの設定を行った結果、「高次元の個人的居場所及び、社会的居場所ありケース」「高次元の個人的居場所はあるが、社会的居場所はないケース」「低次元の個人的居場所及び、社会的居場所ありケース」の3ケースに集約され、論文中ではそれぞれを<個(高)・社あり>タイプ、<個(高)あり>タイプ、<個(低)・社あり>タイプと示している。両世代とも共通の傾向であり、個人的居場所は高次元の居場所を所有しており、社会的居場所も所有している<個(高)・社あり>タイプがほとんどであることが明らかになった。

た。しかし、〈個（高）あり〉〈個（低）・社あり〉タイプも少数ではあるがおり、高次元の個人的居場所を家庭に所有できていないもの、社会的居場所を所有できていないものもいることが捉えられた。

「居場所の形成要因」についてみると、家庭の居場所形成には、家庭における空間条件と人間関係が居場所タイプに大きく関わっていることが明らかになった。

空間条件別にみた居場所タイプでは、高次元の個人的居場所の所有に違いがあり、一戸建てに住むもの、自分専用の子ども部屋を持つものは、高次元の個人的居場所を所有するタイプが多い。このことから、家庭に高次元の個人的居場所を所有するには、専用個室を確保できる空間的に余裕のある環境が基本的な条件になるといえる。この傾向は〈親世代〉で顕著にみられ、〈子ども世代〉では関連はやや弱い。

人間関係においては、親やきょうだいと良好の関係のものは、社会的居場所を所有しているものが多く、希薄な関係のものは社会的居場所を所有していないものが多いことが捉えられた。これは、〈子ども世代〉の傾向が強く、〈子ども世代〉の方が、人間関係との関連が強いことが明らかになった。

この他、性格別にみると、〈子ども世代〉では、外向的な性格のものの方が、高次元の個人的居場所と社会的居場所の両方を所有しているものが多い特徴が明らかになった。

これらのことから、家庭においては、居場所となる物理的な環境を整えることも基本条件ではあるが、それに加えて、良好な人間関係を持つことが、居場所の形成に大きく関わっていることが明らかになった。

「居場所所有が及ぼす影響」についてみると、生活実態においては、高次元の個人的居場所も社会的居場所も両方所有しているものは、家庭において交流と隔離のバランスのとれた過ごし方であり、社会的居場所を所有していないものは、家庭ではほとんど自分の部屋で過ごすものが多く、高次元の個人的居場所を所有しないものは、家庭ではほとんど家族と過ごすものが多いことが捉えられた。また、社会的居場所を所有しているタイプは、家庭で家族や友達と交流するものが多いという特徴も明らかになった。これらのことから、居場所タイプの特徴が実際の行動に反映しているといえる。

居場所タイプと心理状態との関連においては、社会的居場所を所有しているものは、心理状態の良いものが多いことが捉えられた。また、社会的居場所を所有しているタイプは、家庭を最も居心地の良い場所としているものが多い。この傾向は〈子ども世代〉で特にみられることから、〈子ども世代〉にとって、家庭における心理状態を良くするには社会的居場所を所有することが関わっていることが明らかになった。

居場所タイプと人間関係との関連においては、社会的居場所を所有しているものは、親やきょうだいとの関係が良好であるものが多い特徴がみられ、家庭において、社会的居場所を所有することが家族と本音で話し合える良い関係を持つことにつながっているといえる。一方、社会的居場所を所有していないタイプは、親やきょうだいとの関係が希薄なものが多い特徴がみられ、〈子ども世代〉でこの傾向が強い。これらのことから、〈子ども世代〉の方が人間関係と居場所タイプとの関連がやや強いといえる。

以上より、〈子ども世代〉における居場所所有が心理状態と人間関係に与える影響としては、家庭において個人的居場所の質よりも、社会的居場所を所有することが、心理状態の良さや、人間関係の良さに影響を与えていることが捉えられた。

9. 学校における居場所と関連構造では、学校における「居場所の形成要因」と「居場所所有が及ぼす影響」の2側面から、学校における居場所の関連構造について検討を行なった。その結果、以下のようなことが明らかになった。

学校における居場所タイプの設定を行なった結果、「高次元の社会的居場所及び、個人的居場所ありケース」、「高次元の社会的居場所はあるが、個人的居場所はないケース」、「低次元の社会的居場所及び、個人的居場所をもつケース」の3タイプに集約され、論文中ではそれぞれ<社（高）・個あり>、<社（高）あり>、<社（低）・個あり>と示している。両世代とも社会的居場所は高次元の居場所を所有しており、個人的居場所も所有しているという、学校に居場所を十分に所有しているタイプのものがほとんどであることが捉えられた。しかし、個人的居場所を所有できていないものも、2割程度みられ、一日の大半を過ごす学校において十分に居場所を所有できていないものも多いことが捉えられた。

学校における「居場所の形成要因」について、属性との関連をみると、性別では女子が、性格では外向的な性格のものは、学校に高次元の社会的居場所と個人的居場所の両方を所有するタイプが多い特徴が捉えられた。居住期間と居場所タイプとは特に関連はみられなかった。学校における人間関係との関連をみると、先生や友人、その他の知人と本音で話し合えるような親しい関係を築いているものほど、学校に高次元の社会的居場所と個人的居場所の両方を所有するタイプが多い特徴が捉えられた。特に、友人関係と居場所タイプとの関連が最も強く、友人と親しい関係を持つことが、学校に居場所を十分所有することにつながることが明らかになった。以上より、属性では、性別や性格が居場所形成に関わる面をもっており、友人関係をはじめ人間関係も居場所形成要因の1つであることが捉えられた。

学校における「居場所所有が及ぼす影響」について、生活実態との関連をみると、居場所タイプとの関連はみられなかった。本調査における生活実態の項目では関連はみられなかったが、今後さらに、様々な側面から生活実態と居場所タイプとの関連を検討する必要がある。学校における心理状態との関連をみると、世代によって異なる傾向が捉えられた。〈親世代〉においては、高次元の社会的居場所を所有しているものの方が、学校における心理状態が良いという特徴が捉えられ、社会的居場所の質が学校における心理状態に影響を与えていることが明らかになった。一方、〈子ども世代〉においては、学校に個人的居場所を所有しているものの方が、学校における心理状態が良いという傾向が捉えられ、個人的居場所所有の有無が心理状態にやや影響を与えていることが明らかになった。これは、〈子ども世代〉において、学校における個人的居場所の所有率や要求率の高さに関係しているものと考えられる。

学校における人間関係との関連をみた場合、学校に十分に居場所を所有しているものほど、学校における人間関係が良いものが多い傾向が捉えられ、特に、友人関係に大きな影響を与えていることが明らかになった。

以上より、居場所所有は学校における心理状態や人間関係に影響を与えている状況が捉えられた。〈親世代〉では学校における社会的居場所の質の高さが、学校における心理状態の良さにつながっている特徴である一方で、〈子ども世代〉では、学校における社会的居場所の質よりも個人的居場所を所有することが心理状態の良さにつながっているという特徴が明らかになり、世代により傾向が異なっている。これは、〈子ども世代〉において、学校における居場所の所有率や要求率の高さの要因となっていることが考えられる。また、人間関係においては、高次元の社会的居場所と個人的居場所を両方所有することが、人間関係の良さにつながっていることが捉えられた。

10. 地域における高校生の居場所と関連構造では、地域における「居場所の形成要因」と「居場所所有が及ぼす影響」の2側面から地域における居場所の関連構造について検討を行った。その結果、以下のようなことが明らかになった。

地域における居場所タイプの設定を行なった結果、「個人的居場所及び、社会的居場所ありケース」「個人的居場所はあるが、社会的居場所はないケース」「社会的居場所はあるが、個人的居場所はないケース」「個人的居場所も社会的居場所も両方ないケース」の4タイプに集約され、論文中には、それぞれ<個・社あり><個のみあり><社のみあり><居場所なし>と示している。最も多いタイプは<個・社あり>で、地域に個人的居場所と社会的居場所の両方所有するものであり、家庭や学校と同様の傾向である。しかし、居場所タイプ全体を占める割合は約半数でやや少ないことが明らかになった。個人的居場所と社会的居場所のどちらか一方しか所有しない<個のみあり><社のみあり>においては、社会的居場所のみ所有するタイプの方が多く、個人的居場所のみ所有するタイプは少数派のタイプである。また、居場所を所有しないタイプも全体の2割と多く、地域は居場所をもつもの、もたないもの様々であることが明らかになった。

地域における居場所の形成要因について、属性と居場所タイプとの関連については、性別から居場所タイプを検討すると、両世代とも女子の方が社会的居場所を所有しているが、個人的居場所は所有しないタイプが多い特徴が明らかになった。これは学校とも同様の傾向であり、女子は学校や地域では個人的居場所よりも社会的居場所を求める傾向が強い。なお、性格と居住期間については、居場所タイプとの関連は特にみられなかった。

地域における空間条件と居場所タイプとの関連についてみた場合、世代を通して、居住環境と地域における居場所タイプとの間には、特に強い関連はみられず、自宅周辺の環境は居場所の形成要因としての影響はあまり強くないことが明らかになった。高校生ともなると、行動範囲が広がっているため、自宅の周辺環境に関わらず、幅広い範囲で居場所をみつけているのではないかと考えられる。その中で、〈子ども世代〉では、駅や空き地等と居場所タイプの間にやや関連がみられた。特に、家の近所に駅があれば、交通の便がよくなるため、居場所をみつける手段になると考えられ、地域における居場所形成につながっているといえる。

地域における人間関係と居場所タイプとの関連については、近所付き合いの状況別にみた場合、近所付き合いほとんどしないものは、地域に居場所を所有しないタイプが多いことが捉えられ、近所付き合いは居場所形成にやや関わっていることが明らかになった。地域における本音で話し合える人の有無との関連をみると、地域で本音で話し合える相手のいるものは地域に居場所を所有しているタイプが多いことが明らかになった。〈親世代〉では地域における本音で話せる相手の全項目と居場所との関連が強かったことに対して、〈子ども世代〉では学校以外の友達など同年齢との交流が居場所所有に関係しており、〈子ども世代〉の方が、関連が弱いことが捉えられた。このことから、〈子ども世代〉は〈親世代〉ほど、地域における人間関係が居場所形成につながっていないのではないかと推測される。

地域における「居場所所有が及ぼす影響」について、高校生の生活実態との関連をみた場合、地域に個人的居場所と社会的居場所を両方所有しているものは、放課後地域に立ち寄るものが多いことが明らかになった。「よく行く場所」では、両世代とも地域に居場所を所有しているものは、地域でよく行く場所があり、居場所タイプが実際の地域における行動につな

がっていることが明らかになった。中でも、特に強い関連がみられたのは、友達の家、公共施設との関連であり、居場所を所有しているものは、これらの場所によく行くものが多い傾向が強いことが捉えられた。他の自然や公園、店は〈子ども世代〉における関連はやや弱く、〈親世代〉の方が関連が強く表れている。一方、〈子ども世代〉においては、塾と居場所所有との間に関連がややみられるようになり、塾が地域における居場所になっているものも増えてきているのではないかと考えられる。

地域における心理状態との関連をみた場合、両世代とも、地域に居場所を所有しているものは、地域に居心地の良さを感じているものが多いことが明らかになった。

地域における人間関係との関連をみた場合、「地域で本音で話し合える相手」では、両世代とも、地域に個人的居場所と社会的居場所を両方所有するタイプ、あるいは社会的居場所を所有するタイプは地域の人と本音で話しているものが多い傾向であることが明らかになった。特に〈親世代〉の方が強い関連がみられたことから、〈親世代〉の方が地域における人間関係と居場所所有との関連が強いことが明らかになった。一方、〈子ども世代〉は〈親世代〉ほど、居場所所有が地域における人間関係に与える影響は大きくないのではないかと考えられる。

「近所付き合い」では、〈子ども世代〉において、〈個・社あり〉〈社のみあり〉タイプは近所付き合いの良いものも多く、〈子ども世代〉では地域における居場所所有は近所付き合いにやや影響を与えている側面が明らかになった。

11. 家庭・学校・地域における高校生の居場所と関連構造では、家庭・学校・地域それぞれにおける居場所について、総合的に考察し、家庭・学校・地域全体を通した居場所の関連構造を総括的に検討した。その結果、以下のことが明らかになった。

家庭・学校・地域それぞれにおける「居場所の形成要因」についてみると、属性、空間条件、人間関係のいずれも居場所タイプと関連がみられた。属性においては、性別と性格において居場所タイプと関連がみられ、居住環境との関連は家庭・学校・地域全体を通してみられなかった。両世代とも女子の方が、学校では高次元の社会的居場所を所有するタイプが多く、地域では社会的居場所のみを所有し個人的居場所は所有しないタイプが多い傾向が明らかになった。これは、友人との付き合い方が男女で異なっていることが背景にあると考えられ、一般的に女子の方が男子よりも友人関係が少人数で親密な関係を持つ傾向が関係していると思われる。なお、家庭においては、性別と居場所タイプとの関連はみられなかった。これは、社会的居場所で話す相手が学校や地域はほとんど友達であるのに対し、家庭では家族との交流が大部分を占めていることが関係していると考えられる。性格と居場所タイプとの関連においては、〈子ども世代〉において、外向的な性格のものは家庭と学校において社会的居場所を所有することにつながっていることが捉えられた。〈親世代〉ではこの傾向はみられなかった。

空間条件においては、家庭と地域についてそれぞれ検討を行った。家庭と地域を通してみると、家庭では空間条件が居場所に与える影響が強いが、地域ではあまり強い関連はみられないことが世代を通して捉えられた。家庭においては、両世代とも一戸建てに住み、専ら子ども部屋を所有するものほど高次元の個人的居場所を所有しているものが多い特徴である。家庭での居場所は限られた空間の中でみつけるため、住宅の広さや自室の有無が居場所所有に直接関わってくる。一方で、地域における自宅周辺の環境と居場所所有との関係について、高校生は行動範囲が広がってきているため、電車や自転車等で移動が可能であり、自宅周

辺の環境がどうであろうと、居場所所有にはあまり影響を与えていないのではないかと考えられる。なお、学校においては、空間条件と居場所タイプとの関連は検討していない。

人間関係と居場所タイプとの関連について、両世代とも、家庭・学校・地域それぞれにおいて、人間関係が居場所形成に関わっていることが捉えられた。人間関係の良好なものは、社会的居場所を所有できているものが特に多く、人間関係の希薄なものは、社会的居場所を低次元の居場所しか所有できていなかったり、社会的居場所を全く所有できていないものが多い傾向が明らかになった。世代間で傾向はやや異なっており、〈親世代〉では家庭・学校・地域の中で特に地域における人間関係と居場所タイプとの関連が強かったのに対し、〈子ども世代〉では地域における人間関係との関連は弱く、家庭における人間関係と居場所タイプとの関連が強いことが明らかになった。

家庭・学校・地域それぞれにおける居場所所有が及ぼす影響についてみると、生活実態は家庭と地域において、心理状態と人間関係においては家庭と学校と地域いずれにおいても居場所タイプとの関連がみられた。生活実態と居場所タイプとの関連では、家庭と地域それぞれにおける居場所タイプの特徴はその場所での行動に反映されていることが明らかになり、家庭と地域における居場所は生活実態に影響を与えているといえる。なお、学校における居場所タイプと生活実態との関連は本調査項目に関しては関連がみられなかった。

心理状態と居場所タイプとの関連では、家庭と学校における関連は世代により傾向が異なっていることが捉えられた。家庭においては、〈子ども世代〉では、個人的居場所の質よりも社会的居場所の所有の方が心理状態の良さにつながる傾向であり、〈親世代〉では高次元の個人的居場所を所有することが心理状態の良さにつながっている。学校においては、〈子ども世代〉では社会的居場所の質よりも個人的居場所の所有の方が心理状態の良さにつながる傾向であり、〈親世代〉では高次元の社会的居場所を所有することが心理状態の良さにつながっている。これらのことから、〈子ども世代〉では家庭・学校それぞれにおいて、中心的な居場所以外の居場所の所有、家庭では社会的居場所、学校では個人的居場所の所有が心理状態の良さに影響を与えている傾向であることが捉えられた。地域においては、両世代とも居場所を所有するものほど、地域における居心地がよく、居場所を所有しないものほど地域における居心地が良くないという傾向が捉えられた。

人間関係と居場所タイプとの関連をみると、両世代とも家庭・学校・地域それぞれにおいて、人間関係と居場所所有との間に関連がみられ、特に社会的居場所を所有しているものは、人間関係の良好なものが多いことが明らかになった。世代間で傾向はやや異なっており、〈子ども世代〉の特徴をみると、家庭における人間関係と居場所タイプとの関連が最も強く表れており、それに比べ学校や地域における人間関係と居場所タイプとの関連はやや弱いことが捉えられた。特に、地域における人間関係との関連は弱く、〈子ども世代〉においては地域における人間関係は居場所所有にあまり影響をうけていないのではないかと考えられる。〈親世代〉においては、家庭・学校・地域の中で特に地域における人間関係と居場所タイプとの関連が強いことが捉えられた。これらのことから、〈子ども世代〉の方が家庭・学校・地域間で人間関係と居場所タイプとの関連に強弱のが大きく、特に家庭における人間関係と居場所タイプとの関連が強いことが明らかになった。

以上より、〈子ども世代〉における特徴を明確にすると、居場所の形成要因については、特に家庭において、空間条件、人間関係が居場所形成要因としての関連が強く表れている。一方、学校・地域は性別の違いが特に大きいことが捉えられた。居場所所有が及ぼす影響について

は、生活実態、心理状態、人間関係いずれも居場所所有から影響を受けている側面が捉えられ、特に家庭と学校における心理状態と居場所との関連が世代間で異なっており、家庭では社会的居場所の所有、学校では個人的居場所の所有が心理状態の良さにつながっているという特徴である。このことから、〈子ども世代〉では、家庭、学校それぞれ中心的な居場所以外の居場所も所有することが必要であることが明らかになった。

以上より、世代間比較を通して高校生の居場所を検討した結果、世間一般でいわれているような大きな違いはみられず、世代間における所有率の違いは1～2割程度である。その中で、家庭における居場所の所有率は世代で違いがみられず、世代を通して居場所を所有しているものがほとんどであることが明らかになった。学校においては〈子ども世代〉における個人的居場所の所有率がやや高くなっていることが捉えられた。この背景には、現在の学校には相談室という場所が設けられていたり、「保健室登校」といった形で学校に通うものもあり、居場所となる場所の選択肢が多くなっているが考えられる。また、「学校の捉え方」が「勉強をする場所」から、「学校も生活する場」という捉え方に変わってきており、教師も生徒に対して、勉強をはじめ生活全般に配慮してサポートするようになってきているのではないかと考えられ、学校に居場所を所有しやすい環境になってきているのではないかと考えられる。一方、地域においては〈子ども世代〉の方が社会的居場所の所有率がやや低いことが明らかになった。地域においては、〈子ども世代〉の方が社会施設が充実しており、また、民間や行政による「子どもの居場所づくり事業」など¹⁾が行なわれたりと居場所となる場所自体の選択肢は増えているにも関わらず、居場所の所有にはつながっていないことが捉えられた。しかし、〈子ども世代〉では地域に居場所を要求するものが多いことから、地域における様々な場所が高校生にとっての「居場所」となるような何らかの手立てが必要であるといえる。

第二節 今後の課題

本研究は、世代間比較を通して高校生の「居場所」について検討し、現在の高校生の「居場所」の実態や特徴、居場所の関連構造を明らかにした。その結果、世代間で居場所の所有実態においては、学校と地域において居場所所有率に違いがみられ、学校における居場所の所有率は〈子ども世代〉の方が高いが、地域における居場所の所有率は〈親世代〉の方が高いことが明らかになった。また、家庭・学校・地域それぞれにおける居場所の関連構造においても世代間で違いがみられ、さまざまな側面で世代によって異なる傾向がみられた。しかし、居場所の形成要因と居場所所有が及ぼす影響についてさらに多角的に分析することにより、居場所の関連構造は明確になると考えられる。

しかし、本研究における調査方法は、現在の高校生とその保護者を対象としたアンケート調査であり、保護者には自身が高校生であった頃を思い出して回答してもらっている。そのため、今から25から35年前の記憶に頼っていることから、高校生当時の生活についてすべてを覚えていることは不可能であるといえ、〈親世代〉のデータはやや記憶に曖昧な点が含まれるという問題点がある。しかし、世代間比較の調査方法としては、この方法をとらざるをえない。

また、各世代それぞれで、居場所の関連構造について検討したが、本調査における生活実態の項目と居場所所有とは関連がみられなかった。しかし、高校生の生活全般を把握するに

は至らなかったため、居場所所有と生活実態との間に何らかの関連があるかもしれない。そのため、今後はさらに多角的に生活実態を捉えることが必要である。また、本研究では、家庭・学校・地域における居場所の相互関連についても検討を行ったが、サンプル数の少なから、詳しく分析するところまで至らなかったため、この点も今後の課題となる。

謝 辭

謝辞

本論文で筆者が三重大学大学院教育学研究科在学中に進めてきた研究を取りまとめたものである。研究を進めるにあたり、これまで実に多くの方々のご指導、ご助言を頂いた。ここに感謝の意を記したい。

まず、担当教官としてお世話になった中島喜代子 三重大学教授には、研究のテーマ設定から立論、調査・分析、論文の執筆段階に至るまで、始終懇切丁寧なご指導を頂いた。

中島教授には学部の学生の段階から大学院修士課程在学中に渡り、終始変わらぬご指導とあたたかい助言をして頂き深く感謝しています。

また、筆者が三重大学に入学してから今日まで、学部、研究科を通じて三重大学教育学部家政科の諸先生方にも多くのご指導を頂いた。

そして、中島研究室に在籍した学部学生、大学院生の方々とは共に多くのことを学び、貴重な経験をすることができた。

本論文はアンケート調査に基づくものであり、アンケート調査の以来を引き受けて下さった三重県立Y高等学校の先生方及び生徒の皆様のご協力なしではなし得なかったものであり、深く感謝の意を表します。

上記以外にも研究を進める過程で、たくさんの方々から貴重なご助言やご協力、励ましのお言葉を頂いた。

心から感謝いたします。

2007年2月

小長井 明美

「子どもの居場所」に関する調査

【お願い】

2006 年

近年、「居場所」という言葉をよく耳にするようになりました。「自分の居場所がある」と思えるには、その場の雰囲気、人間関係、自分の性格など様々なことが関係していると考えられます。自分にとってよりよい「居場所」をつくっていくためには、どのような工夫をしていけばよいのでしょうか。

私たちの研究室では今、このようなことを研究しています。そこでこのアンケートで、あなたの生活や、あなたのふだん関わっている空間について教えてもらい、この研究を進めていく上で、役立てたいと思っています。

これはテストではありませんし、また外部にもれることもありませんので、家族や友だちとは相談せずにあなたの考えを正直に書いてください。

まず、下の欄に自分の学年を書き、男、女のいずれかに○を記入してから、アンケートにお答えください。

三重大学教育学部 教授 中島 喜代子

大学院2年 小長井 明美

大学4年 笹尾 伊津美

年（ 男 ・ 女 ）

* 以下には何も記入しないでください。

--	--	--

中 ・ 高 校 生 用

* このアンケートの質問の意味、記入の仕方でわかりにくい点、またこの調査に関してのご意見、ご要望がありましたら下にご記入ください。

--

〒514-8507

三重県津市栗真町屋町1577

三重大学 教育学部 住居学研究室

Tel&Fax 059-231-9300

E-mail jyukyo@edu.mie-u.ac.jp

Ⅰ. 家庭について

ここでは家庭の生活についてお聞きます。

1	家にいる時、最も「居心地が良い」と感じるのはどんな時ですか。 最もあてはまるものを1つに○をつけてください。	1. 家族団らんをしている時 2. 一人でのんびりくつろいでいる時 3. 友達を部屋によんだり、電話やメールをしている時 4. 人に邪魔をされずに好きなことに集中できる時 5. 特に居心地が良いと感じる時はない																																																
2	家庭にいてどのように感じますか。 1～6の項目について、例にならって答えてください。	<table border="0"> <tr> <td></td> <td>あてはまる</td> <td>ない</td> <td>どちらでも</td> <td>あてはまる</td> <td></td> </tr> <tr> <td>例) 安心できる</td> <td>(1</td> <td>2</td> <td>3)</td> <td>不安を感じる</td> <td></td> </tr> <tr> <td>1. 安心できる</td> <td>(1</td> <td>2</td> <td>3)</td> <td>不安を感じる</td> <td></td> </tr> <tr> <td>2. 落ち着ける</td> <td>(1</td> <td>2</td> <td>3)</td> <td>いらいらする</td> <td></td> </tr> <tr> <td>3. 楽しい</td> <td>(1</td> <td>2</td> <td>3)</td> <td>つまらない</td> <td></td> </tr> <tr> <td>4. 満足感がある</td> <td>(1</td> <td>2</td> <td>3)</td> <td>不満がある</td> <td></td> </tr> <tr> <td>5. 解放感を感じる</td> <td>(1</td> <td>2</td> <td>3)</td> <td>圧迫感を 感じる</td> <td></td> </tr> <tr> <td>6. 家庭が好き</td> <td>(1</td> <td>2</td> <td>3)</td> <td>家庭がきらい</td> <td></td> </tr> </table>		あてはまる	ない	どちらでも	あてはまる		例) 安心できる	(1	2	3)	不安を感じる		1. 安心できる	(1	2	3)	不安を感じる		2. 落ち着ける	(1	2	3)	いらいらする		3. 楽しい	(1	2	3)	つまらない		4. 満足感がある	(1	2	3)	不満がある		5. 解放感を感じる	(1	2	3)	圧迫感を 感じる		6. 家庭が好き	(1	2	3)	家庭がきらい	
	あてはまる	ない	どちらでも	あてはまる																																														
例) 安心できる	(1	2	3)	不安を感じる																																														
1. 安心できる	(1	2	3)	不安を感じる																																														
2. 落ち着ける	(1	2	3)	いらいらする																																														
3. 楽しい	(1	2	3)	つまらない																																														
4. 満足感がある	(1	2	3)	不満がある																																														
5. 解放感を感じる	(1	2	3)	圧迫感を 感じる																																														
6. 家庭が好き	(1	2	3)	家庭がきらい																																														
3	家の中で、「①自分の持ち物を自由に置け、好きな時に好きなことができる場所」はありますか。また、「②他人の侵入や、物の出入りを制限できる場所」はありますか。 次の1～6の場所について、①と②それぞれ、あるものには○、ないものには×をすべての()につけてください。※ただし、場所自体がない場合は、()に斜線(/)を引いてください。	<table border="1"> <tr> <td>① 自分の持ち物を自由に置け、好きな時に好きなことができる場所</td> <td>② 他人の侵入や、物の出入りを制限できる場所</td> </tr> <tr> <td> 1. 自分専用の部屋、きょうだいとの共用部屋・・ () () 2. 自分以外の家族の部屋・・・・・ () () 3. 居間・食事室・・・・・ () () 4. 納戸・衣装部屋・・・・・ () () 5. 客間・応接間・・・・・ () () 6. トイレ・風呂・・・・・ () () </td> <td></td> </tr> </table>	① 自分の持ち物を自由に置け、好きな時に好きなことができる場所	② 他人の侵入や、物の出入りを制限できる場所	1. 自分専用の部屋、きょうだいとの共用部屋・・ () () 2. 自分以外の家族の部屋・・・・・ () () 3. 居間・食事室・・・・・ () () 4. 納戸・衣装部屋・・・・・ () () 5. 客間・応接間・・・・・ () () 6. トイレ・風呂・・・・・ () ()																																													
① 自分の持ち物を自由に置け、好きな時に好きなことができる場所	② 他人の侵入や、物の出入りを制限できる場所																																																	
1. 自分専用の部屋、きょうだいとの共用部屋・・ () () 2. 自分以外の家族の部屋・・・・・ () () 3. 居間・食事室・・・・・ () () 4. 納戸・衣装部屋・・・・・ () () 5. 客間・応接間・・・・・ () () 6. トイレ・風呂・・・・・ () ()																																																		

4	家庭で、次の1～9のようなことができる場所はどこですか。〈場所〉 また、6～9について、話をする相手はだれですか。ただし、電話やメール等を使って話をする場合を除きます。〈相手〉 1～9について、それぞれ最もあてはまるものを1つ選んで、すべての()に番号を記入してください。																														
	<table border="0"> <tr> <td colspan="2">〈場所〉</td> <td></td> </tr> <tr> <td>1. 一人になって考え事などができる場所・・・・・ ()</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>2. 好きなことに集中できる場所・・・・・ ()</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>3. 一人になってくつろぐことができる場所・・・・・ ()</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>4. 大人の目を避けられる場所・・・・・ ()</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>5. 嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所・・・ ()</td> <td></td> <td>〈相手〉</td> </tr> <tr> <td>6. お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所・・・ ()</td> <td>()</td> <td>()</td> </tr> <tr> <td>7. 自分の仲間、あるいは家族など、 仲間意識を感じられる人と話をする場所・・ ()</td> <td>()</td> <td>()</td> </tr> <tr> <td>8. 自分を頼ってくれる人と話をする場所・・・・・ ()</td> <td>()</td> <td>()</td> </tr> <tr> <td>9. 自分を受け入れてくれる人と話をする場所・・・・・ ()</td> <td>()</td> <td>()</td> </tr> </table>	〈場所〉			1. 一人になって考え事などができる場所・・・・・ ()			2. 好きなことに集中できる場所・・・・・ ()			3. 一人になってくつろぐことができる場所・・・・・ ()			4. 大人の目を避けられる場所・・・・・ ()			5. 嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所・・・ ()		〈相手〉	6. お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所・・・ ()	()	()	7. 自分の仲間、あるいは家族など、 仲間意識を感じられる人と話をする場所・・ ()	()	()	8. 自分を頼ってくれる人と話をする場所・・・・・ ()	()	()	9. 自分を受け入れてくれる人と話をする場所・・・・・ ()	()	()
〈場所〉																															
1. 一人になって考え事などができる場所・・・・・ ()																															
2. 好きなことに集中できる場所・・・・・ ()																															
3. 一人になってくつろぐことができる場所・・・・・ ()																															
4. 大人の目を避けられる場所・・・・・ ()																															
5. 嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所・・・ ()		〈相手〉																													
6. お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所・・・ ()	()	()																													
7. 自分の仲間、あるいは家族など、 仲間意識を感じられる人と話をする場所・・ ()	()	()																													
8. 自分を頼ってくれる人と話をする場所・・・・・ ()	()	()																													
9. 自分を受け入れてくれる人と話をする場所・・・・・ ()	()	()																													
	<table border="1"> <tr> <td> ① 自分の専用個室、きょうだいとの共用部屋 ② 自分以外の家族の部屋 ③ 居間・食事室 ④ 納戸・衣装部屋 ⑤ 客間・応接間 ⑥ トイレ・風呂 ⑦ 場所がない ⑧ 家庭ではその行為自体しない </td> <td> ① 家族のみ ② 友達のみ ③ 家族と友達の両方 ※ただし、場所で⑦か⑧を選択した場合は、 ()に斜線(/)を引いてください。 </td> </tr> </table>	① 自分の専用個室、きょうだいとの共用部屋 ② 自分以外の家族の部屋 ③ 居間・食事室 ④ 納戸・衣装部屋 ⑤ 客間・応接間 ⑥ トイレ・風呂 ⑦ 場所がない ⑧ 家庭ではその行為自体しない	① 家族のみ ② 友達のみ ③ 家族と友達の両方 ※ただし、場所で⑦か⑧を選択した場合は、 ()に斜線(/)を引いてください。																												
① 自分の専用個室、きょうだいとの共用部屋 ② 自分以外の家族の部屋 ③ 居間・食事室 ④ 納戸・衣装部屋 ⑤ 客間・応接間 ⑥ トイレ・風呂 ⑦ 場所がない ⑧ 家庭ではその行為自体しない	① 家族のみ ② 友達のみ ③ 家族と友達の両方 ※ただし、場所で⑦か⑧を選択した場合は、 ()に斜線(/)を引いてください。																														

Ⅱ. 学校について

ここでは学校の生活についてお聞きます。

1	部活動に参加していますか。 あてはまるものには○、あてはまらないものには×をすべての()につけてください。	1 () 運動系クラブ、サークル 2 () 文化系クラブ、サークル 3 () 入っていない
2	生徒会、委員会活動をしていますか。 あてはまるものには○、あてはまらないものには×をすべての()につけてください。	1 () 生徒会活動をしている 2 () 委員会活動をしている 3 () 特にしていない

3	<p>学校にいる時、最も「居心地が良い」と感じるのはどんな時ですか。</p> <p>最もあてはまるもの1つに○をつけてください。</p>	<p>1. 授業やホームルームなどクラスで行動している時</p> <p>2. 部活動をしている時</p> <p>3. 生徒会活動、委員会活動をしている時</p> <p>4. 休憩中、放課後</p> <p>5. 特に居心地が良いと感じる時はない</p>																																																
4	<p>学校にいてどのように感じますか。</p> <p>1～6の項目について、例にならって答えてください。</p>	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>あてはまる</th> <th>ない</th> <th>どちらでも</th> <th>あてはまる</th> <th></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>例) 安心できる</td> <td>(1</td> <td>2</td> <td>3)</td> <td></td> <td>不安を感じる</td> </tr> <tr> <td>1. 安心できる</td> <td>(1</td> <td>2</td> <td>3)</td> <td></td> <td>不安を感じる</td> </tr> <tr> <td>2. 落ち着ける</td> <td>(1</td> <td>2</td> <td>3)</td> <td></td> <td>いらいらする</td> </tr> <tr> <td>3. 楽しい</td> <td>(1</td> <td>2</td> <td>3)</td> <td></td> <td>つまらない</td> </tr> <tr> <td>4. 満足感がある</td> <td>(1</td> <td>2</td> <td>3)</td> <td></td> <td>不満がある</td> </tr> <tr> <td>5. 解放感を感じる</td> <td>(1</td> <td>2</td> <td>3)</td> <td></td> <td>圧迫感を 感じる</td> </tr> <tr> <td>6. 学校が好き</td> <td>(1</td> <td>2</td> <td>3)</td> <td></td> <td>学校がきらい</td> </tr> </tbody> </table>		あてはまる	ない	どちらでも	あてはまる		例) 安心できる	(1	2	3)		不安を感じる	1. 安心できる	(1	2	3)		不安を感じる	2. 落ち着ける	(1	2	3)		いらいらする	3. 楽しい	(1	2	3)		つまらない	4. 満足感がある	(1	2	3)		不満がある	5. 解放感を感じる	(1	2	3)		圧迫感を 感じる	6. 学校が好き	(1	2	3)		学校がきらい
	あてはまる	ない	どちらでも	あてはまる																																														
例) 安心できる	(1	2	3)		不安を感じる																																													
1. 安心できる	(1	2	3)		不安を感じる																																													
2. 落ち着ける	(1	2	3)		いらいらする																																													
3. 楽しい	(1	2	3)		つまらない																																													
4. 満足感がある	(1	2	3)		不満がある																																													
5. 解放感を感じる	(1	2	3)		圧迫感を 感じる																																													
6. 学校が好き	(1	2	3)		学校がきらい																																													
5	<p>学校の中で、「自分の持ち物を自由に置け、好きな時に好きなことができる場所」はありますか。</p> <p>次の1～6の場所について、あ るものには○、ないものには× をすべての()につけてく ださい。</p>	<p>1 () 自分のクラス</p> <p>2 () 他のクラス</p> <p>3 () 自分の部室、委員会の場など</p> <p>4 () グラウンド、体育館、図書室、多目的教室</p> <p>5 () ろう下、階段、校庭の片隅、トイレなど</p> <p>6 () 職員室、保健室、相談室</p>																																																

6	<p>学校で、次の1～9のようなことができる場所はどこですか。(場所)</p> <p>また、6～9について、話をする相手はだれですか。ただし、電話やメール等を使って話をする場合を除きます。(相手)</p> <p>1～9について、それぞれ最もあてはまるものを1つ選んで、すべての()に番号を記入してください。</p>																														
<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">(場所)</th> <th>(相手)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1. 一人になって考え事などができる場所.....</td> <td>()</td> <td></td> </tr> <tr> <td>2. 好きなことに集中できる場所.....</td> <td>()</td> <td></td> </tr> <tr> <td>3. 一人になってくつろぐことができる場所.....</td> <td>()</td> <td></td> </tr> <tr> <td>4. 大人の目を避けられる場所.....</td> <td>()</td> <td></td> </tr> <tr> <td>5. 嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所.....</td> <td>()</td> <td></td> </tr> <tr> <td>6. お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所.....</td> <td>()</td> <td>()</td> </tr> <tr> <td>7. 仲間意識を感じられる人と話をする場所.....</td> <td>()</td> <td>()</td> </tr> <tr> <td>8. 自分を頼ってくれる人と話をする場所.....</td> <td>()</td> <td>()</td> </tr> <tr> <td>9. 自分を受け入れてくれる人と話をする場所.....</td> <td>()</td> <td>()</td> </tr> </tbody> </table>		(場所)		(相手)	1. 一人になって考え事などができる場所.....	()		2. 好きなことに集中できる場所.....	()		3. 一人になってくつろぐことができる場所.....	()		4. 大人の目を避けられる場所.....	()		5. 嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所.....	()		6. お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所.....	()	()	7. 仲間意識を感じられる人と話をする場所.....	()	()	8. 自分を頼ってくれる人と話をする場所.....	()	()	9. 自分を受け入れてくれる人と話をする場所.....	()	()
(場所)		(相手)																													
1. 一人になって考え事などができる場所.....	()																														
2. 好きなことに集中できる場所.....	()																														
3. 一人になってくつろぐことができる場所.....	()																														
4. 大人の目を避けられる場所.....	()																														
5. 嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所.....	()																														
6. お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所.....	()	()																													
7. 仲間意識を感じられる人と話をする場所.....	()	()																													
8. 自分を頼ってくれる人と話をする場所.....	()	()																													
9. 自分を受け入れてくれる人と話をする場所.....	()	()																													
<table border="1"> <thead> <tr> <th>(場所)</th> <th>(相手)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>①. 自分のクラス ②他のクラス</td> <td>① 友達のみ ②先生のみ</td> </tr> <tr> <td>③ 自分の部室、委員会の場など</td> <td>③ 友達と先生の両方</td> </tr> <tr> <td>④ グラウンド、体育館、図書室、多目的教室</td> <td></td> </tr> <tr> <td>⑤ ろう下、階段、校庭の片隅、トイレなど</td> <td></td> </tr> <tr> <td>⑥ 職員室、保健室、相談室</td> <td></td> </tr> <tr> <td>⑦ 場所がない ⑧学校ではその行為自体しない</td> <td></td> </tr> </tbody> </table> <p>※ただし、場所で⑦か⑧を選択した場合は、()に斜線(/)を引いてください。</p>		(場所)	(相手)	①. 自分のクラス ②他のクラス	① 友達のみ ②先生のみ	③ 自分の部室、委員会の場など	③ 友達と先生の両方	④ グラウンド、体育館、図書室、多目的教室		⑤ ろう下、階段、校庭の片隅、トイレなど		⑥ 職員室、保健室、相談室		⑦ 場所がない ⑧学校ではその行為自体しない																	
(場所)	(相手)																														
①. 自分のクラス ②他のクラス	① 友達のみ ②先生のみ																														
③ 自分の部室、委員会の場など	③ 友達と先生の両方																														
④ グラウンド、体育館、図書室、多目的教室																															
⑤ ろう下、階段、校庭の片隅、トイレなど																															
⑥ 職員室、保健室、相談室																															
⑦ 場所がない ⑧学校ではその行為自体しない																															

Ⅲ. 地域について

ここでは地域での生活についてお聞きします。

1	<p>あなたの住む地域の雰囲気は次のどれにあてはまりますか。</p> <p>最もあてはまるもの1つに○をつけてください。</p>	<p>1. 地域活動*や交流が盛んで、住民同士の仲が良い</p> <p>2. 地域活動*や交流が時々行われ、住民同士の仲はそれほど悪くはない</p> <p>3. 地域活動*や交流はほとんどなく、住民同士はよそよそしい感じがする</p> <p>*地域活動…清掃活動や運動会、旅行、寄り合いなど</p>
2	<p>あなた自身は近所の人とどのように付き合っていますか。</p> <p>最もあてはまるもの1つに○をつけてください。</p>	<p>1. 家族ぐるみで交流している</p> <p>2. あいさつくらいはしている</p> <p>3. 近所付き合いはほとんどしていない</p>

3	<p>今の家にはどれくらい住んでいますか。 <u>あてはまるもの1つに○をつけて</u> <u>ください。</u></p>	<p>1. 生まれた頃から 2. 小学校入学前から 3. 小学校の頃から 4. 中学校の頃から 5. 高校生になってから</p>
4	<p>家の近く（歩いていける距離）には何がありますか。 <u>あるものには○、ないものには×</u> <u>をすべての（ ）につけて</u> <u>ください。</u></p>	<p>1 () 原っぱ・田んぼ・畑 2 () 河原・土手・池 3 () 雑木林・野山 4 () 公園・アスレチック 5 () 商店街 6 () デパート・ショッピングモール 7 () スーパー 8 () コンビニ 9 () ファーストフード店・ファミレス 10 () ゲームセンター・カラオケボックス 11 () 駅 12 () 空き地・駐車場 13 () 公共施設（図書館・公民館・文化会館など）</p>
5	<p>次の1～6について、あなたがよく行く場所はどこですか。 <u>あてはまるものには○、あてはまらないものには×</u><u>をすべての（ ）につけて</u> <u>ください。</u></p> <hr/> <p>1. 自然 $\left\{ \begin{array}{l} a () \text{ 一人でぶらぶらしたり考え事などができる自然があるところ} \\ b () \text{ 仲間としゃべったり遊んだりできる自然があるところ} \end{array} \right.$</p> <p>2. 公園・広場 $\left\{ \begin{array}{l} a () \text{ 一人でぶらぶらしたり考え事などができる公園や広場} \\ b () \text{ 仲間としゃべったり遊んだりできる公園や広場} \end{array} \right.$</p> <p>3. 店 $\left\{ \begin{array}{l} a () \text{ 一人でぶらぶらしたり好きなことで時間をつぶせる店} \\ b () \text{ 仲間としゃべったり遊んだりできる店} \\ c () \text{ 店員やお客さんと仲良くなる店} \end{array} \right.$</p> <p>4. 公共施設 $\left\{ \begin{array}{l} a () \text{ 一人で好きなことに集中したり考え事などができる公共施設} \\ b () \text{ 仲間としゃべったり遊んだりできる公共施設} \\ c () \text{ 職員や利用している人と仲良くなる公共施設} \end{array} \right.$ <u>図書館・公民館・児童館・スポーツ施設など</u></p> <p>5. 塾・習い事 $\left\{ \begin{array}{l} a () \text{ 勉強や自分の好きなことに集中して取り組める塾や習い事} \\ b () \text{ 先生や生徒と仲良くできる塾や習い事} \end{array} \right.$</p> <p>6. 地域 $\left\{ \begin{array}{l} a () \text{ いっしょにしゃべったり遊んだりできる仲の良い友だちの家} \\ b () \text{ 仲の良い親戚や気軽に行ける近所の人の家} \end{array} \right.$</p>	

6	<p>家庭・学校以外で最も「居心地が良い」と感じるのはどんな時ですか。 <u>最もあてはまるもの1つに○をつけて</u> <u>ください。</u></p>	<p>1. 公園、自然のあるところにいる時 2. たまり場で仲間と集まっている時 3. よく行く店にいる時 4. 地域活動（清掃活動、子ども会など）をしている時 5. 塾や図書館で勉強、あるいは習い事をしている時 6. 友達の家にいる時 7. その他（具体的に ） 8. 特に居心地が良いと感じる時はない</p>
7	<p>家庭・学校以外の場所で、「自分の持ち物を自由に置き、好きな時に好きなことができる場所」がありますか。 <u>次の1～6の場所について、あるものには○、ないものには×</u> <u>をすべての（ ）につけて</u> <u>ください。</u></p>	<p>1 () 自然のあるところ（公園、川の土手など） 2 () 空き地・駐車場など 3 () よく行く店、駅 4 () 公共施設 （図書館、公民館、児童館、スポーツ施設など） 5 () 塾・習い事などの教室 6 () 友達の家</p>

質問は次のページに続きます。

- 8 家庭・学校以外で、次の1～9のようなことができる場所はどこですか。〈場所〉
また、6～9について、話をする相手はだれですか。ただし、電話やメール等を使って話をする場合を除きます。〈相手〉
1～9について、それぞれ最もあてはまるものを1つ選んで、すべての〔 〕に番号を記入してください。
また、〈場所〉については、具体的な場所名を右側の〔 〕に記入してください。

(回答例)

	〈場所〉		〈相手〉
	(番号)	(具体的な場所名)	
1. 一人になって考え事などができる場所			

(解答欄)

	〈場所〉		〈相手〉
	(番号)	(具体的な場所名)	
1. 一人になって考え事などができる場所			
2. 好きなことに集中できる場所			
3. 一人になってくつろぐことができる場所			
4. 大人の目を避けられる場所			
5. 嫌な思いをしたり、 ストレスをためた時にいられる場所			
6. お互いに気が合ったり、 考え方が合う人と話をする場所			
7. 仲間意識を感じられる人と話をする場所			
8. 自分を頼ってくれる人と話をする場所			
9. 自分を受け入れてくれる人と話をする場所			

〈場所〉	〈場所〉 番号 で、⑥・⑦・ ⑧を選択した 場合は、〔 〕に 斜線 〳 を 引いてくださ い。	〈相手〉
① 自然のあるところ（公園、川の土手など） ② 空き地、駐車場など ③ よく行く店、駅 ④ 公共施設 （図書館、公民館、児童館・スポーツ施設など） ⑤ 塾・習い事などの教室 ⑥ 友達の家 ⑦ 場所がない ⑧ 家庭・学校以外ではその行為自体しない	① 友達のみ ② 大人のみ ③ 友達と大人の両方 ※ただし、場所で⑦か⑧を 選択した場合は、〔 〕に 斜線 〳 を引いてくだ さい。	

IV. 居場所について

ここでは居場所についてお聞きします。

あなたは次の1～9のような場所が必要だと思いますか。

〈家庭〉〈学校〉〈地域〉それぞれについて、必要だと思うものには○、必要ないと思うものには×をすべての（ ）につけてください。

	〈家庭〉	〈学校〉	〈地域〉
1. 一人になって考え事などができる場所	()	()	()
2. 好きなことに集中できる場所	()	()	()
3. 一人になってくつろぐことができる場所	()	()	()
4. 大人の目を避けられる場所	()	()	()
5. 嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所	()	()	()
6. お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所	()	()	()
7. 仲間意識を感じられる人と話をする場所	()	()	()
8. 自分を頼ってくれる人と話をする場所	()	()	()
9. 自分を受け入れてくれる人と話をする場所	()	()	()

V. 生活について

ここでは生活全体についてお聞きします。

1	あなたは次の1～7のようなものを持っていますか。 持っているものには○、持っていないものには×をすべての（ ）につけてください。	1 () 自分専用の携帯電話 2 () 家での自分専用の電話 3 () 自分専用のパソコン 4 () 自分専用のテレビ 5 () 自分専用のテレビゲーム機 6 () 自分専用の部屋 7 () きょうだいとの共用部屋
2	あなたにとって居心地の良い所はどこですか。 最もあてはまるもの1つに○をつけてください。	1. 家庭 2. 学校 3. 家庭・学校以外（具体的に ） 4. 特にない
3	あなたは今現在、自分に次のようなストレスがあると思いますか。 1～3について、あてはまるものには○、あてはまらないものには×をすべての（ ）につけてください。	1 () 受験勉強に対するストレスを感じている 2 () 友人関係に対するストレスを感じている 3 () 特に受験勉強や友人関係に対するストレスは感じていない

4	<p>あなたの平日の授業終了後の行動パターンは次の4つのうちどれにあてはまりますか。 1週間のうち最も多い行動パターンを1つ選んで番号に○をつけてください。 ※ ただし、「帰宅」とは家に帰った後もう一度外出するものは含みません。</p> <div style="display: flex; align-items: center; justify-content: space-between;"> <div style="flex: 1;"> <pre> graph LR A[授業終了] --> B[帰宅] A --> C[学校に残る (例) 部活、友だち ちとおしゃべり など] A --> D[寄り道する (例) お店、友だち の家、塾、図書館 など] C --> E[帰宅] C --> F[寄り道する (例) お店、友だち の家、塾、図書館 など] F --> G[帰宅] </pre> </div> <div style="flex: 0.5;"> <p>回答番号</p> <p>1</p> <p>2</p> <p>3</p> <p>4</p> </div> </div>
5	<p>放課後、あなたは学校でどのように過ごすことが多いですか。 最もあてはまるもの1つに○をつけてください。</p> <div style="display: flex;"> <div style="flex: 1;"> <ol style="list-style-type: none"> 部活動をする 生徒会活動や委員会活動をする 勉強をしたり読書をしたりする 友達や先生と遊んだりしゃべったりする その他 (具体的に) 何もせずに帰る </div> </div>
6	<p>家庭・学校以外で、あなたはどのように過ごすことが多いですか。 最もあてはまるもの1つに○をつけてください。</p> <div style="display: flex;"> <div style="flex: 1;"> <ol style="list-style-type: none"> 塾・習い事に行ったり、図書館で自習をする 友達の家に行く 友達と店や公園、駅などでぶらぶらする 一人で店や公園、駅などでぶらぶらする その他 (具体的に) 家庭・学校以外には行かない </div> </div>
7	<p>家庭で、あなたはどのように過ごすことが多いですか。 最もあてはまるもの1つに○をつけてください。</p> <div style="display: flex;"> <div style="flex: 1;"> <ol style="list-style-type: none"> ほとんど自分の部屋にいる ほとんど家族と一緒に過ごす 家族と一緒に過ごすのと自分の部屋にいるのが大体半ずつくらい 家には寝る時だけしかいない </div> </div>

8	<p>家庭では、誰とどんなことをして過ごすことが多いですか。 あてはまるものには○、あてはまらないものには×をすべての () につけてください。</p>	<ol style="list-style-type: none"> () 友達を家によんで遊ぶ () 友達に電話したり、メールしたりして過ごす () 家族と一緒に過ごす () 家ではほとんど誰とも関わらない
9	<p>土日はどのように過ごすことが多いですか。 最もあてはまるもの1つに○をつけてください。</p>	<ol style="list-style-type: none"> 家の中で一人でのんびりする 家の中で趣味や好きな事に一人で集中する 家で家族や友達と一緒に過ごす 家で宿題や予習、復習など勉強をする 部活動をする 一人で店や公園、公共施設などでのんびりする 一人で買い物に出かけたり遊んだりする 家族と一緒に買い物に出かけたり遊んだりする 友達と一緒に店や公園、友達の家などで遊ぶ 塾・習い事に行ったり、図書館で自習する その他 (具体的に)
10 A	<p>会ったことのない人と、電話やメールを使って、交流をしたことがありますか。 あてはまるもの1つに○をつけてください。</p>	<ol style="list-style-type: none"> 交流したことがある 交流したことがない
10 B	<p>問10-Aで「1. 交流したことがある」と答えた方にお聞きします。それは、どのような交流ですか。 次の1～4について、あてはまるものには○、あてはまらないものには×をすべての () につけてください。</p>	<ol style="list-style-type: none"> () お互いに気が合ったり、考え方が合う人との交流 () 仲間意識を感じられる人との交流 () 自分を頼ってくれる人との交流 () 自分を受け入れてくれる人との交流

VI. 性格について

ここではあなたの性格についてお聞きます。

あなたは次のどのタイプですか。

例にならって答えてください。

	どちらかといえば あてはまる	どちらかといえば あてはまる	
例) 人と話をするのが好きである	(1	2)	人と話をするのが苦手である
1. 人と話をするのが好きである	(1	2)	人と話をするのが苦手である
2. 物事を気楽に考える	(1	2)	物事を悪い方向に考えやすい
3. 協調性がある	(1	2)	自己中心的である

VII. 人間関係について

ここでは人間関係についてお聞きます。

1	親との関係はどうか。 <u>あてはまるものには○、あてはまらないものには×をすべての()につけてください。</u>	1 () 親とは表面上の会話しかしない 2 () 親とは仲が良いが、関係を悪くしないように気をつけることがある 3 () 親とは本音で話し合っている
2	きょうだいとの関係はどうか。 <u>あてはまるものには○、あてはまらないものには×をすべての()につけてください。</u> <u>※きょうだいがいない場合はすべての()に斜線(/)を引いてください。</u>	1 () きょうだいとは表面上の会話しかしない 2 () きょうだいとは仲が良いが、関係を悪くしないように気をつけることがある 3 () きょうだいとは本音で話し合っている
3	先生との関係はどうか。 <u>あてはまるものには○、あてはまらないものには×をすべての()につけてください。</u>	1 () 先生とはほとんど表面上の会話しかしない 2 () 仲が良いが、関係を悪くしないよう気をつける先生がいる 3 () 本音で話し合える先生がいる
4	友達との関係はどうか。 <u>あてはまるものには○、あてはまらないものには×をすべての()につけてください。</u>	1 () 表面上の会話しかしない友達が多い 2 () 仲が良いが、関係を悪くしないよう気をつける友達が多い 3 () 本音で話し合える友達が多い

5	学校で先生と友達以外の知人(先輩や後輩など)との関係はどうか。 <u>あてはまるものには○、あてはまらないものには×をすべての()につけてください。</u>	1 () 表面上の会話しかしない知人が多い 2 () 仲が良いが、関係を悪くしないよう気をつける知人が多い 3 () 本音で話し合える知人が多い
6	家庭・学校以外の場所で、本音で話し合える人はどんな人ですか。 <u>あてはまるものには○、あてはまらないものには×をすべての()につけてください。</u>	1 () 学校の友達 2 () 学校以外の友達 3 () 近所の大人 4 () 塾やお店、公共施設などで知り合った大人 5 () 親戚(おじいさん、おばあさん、おじさん、おばさん、いとこなど) 6 () その他(具体的に) 7 () 本音で話し合える人はいない

VIII. あなた自身について

ここではあなた自身についてお聞きます。

1	あなたの家族は自分も含めて、何人いますか。	() 人
2	あなたの家族について、 <u>自分以外であてはまる人すべてに○をつけてください。</u> <u>※3～8は2人以上いる場合、その人数を()に記入してください。</u>	1. 父 2. 母 3. 兄 () 人 4. 姉 () 人 5. 弟 () 人 6. 妹 () 人 7. 祖父 () 人 8. 祖母 () 人 9. その他 (具体的に)
3	住んでいる地域についてお聞きます。 例にならって記入してください。	(例) (四日市) 市・町・村 () 市・町・村
4	現在住んでいる家は次のうちどちらですか。 <u>あてはまる方に○をつけてください。</u>	1. 戸建住宅(一軒家) 2. 集合住宅(マンション、アパートなど)

大変、面倒な調査にご協力いただき誠にありがとうございました

「子どもの居場所」に関する調査

【お願い】

2006 年

近年、子どもの「居場所」という言葉が注目されるようになってきました。その社会背景として、少年犯罪やいじめ、不登校などの増加があげられ、それら子どもの問題行動の要因の1つに「子どもの居場所がなくなったからだ」ということが指摘されています。

「居場所」とは、他者に受け入れられ、安らぎを感じることでできる場所を意味し、子どもの成長には不可欠な場所であると考えられます。「自分の居場所がある」と思えるにはその場の雰囲気、人間関係、性格など様々なことが関係していると考えられます。子どもにとってよりよい「居場所」をつくっていくためには、どのような工夫をしていけばよいのでしょうか。

私たちの研究室ではこのような研究を行っています。本年度は、現在と過去の「居場所」を比較検討し、よりよい子どもの「居場所」づくりの考察を深めていきたいと考えています。そこで、このアンケートでは現在中学・高校生の保護者の方に、中学・高校時代の生活や、よく関わっていた空間について教えていただき、この研究を進めていく上で、役立たいと思っています。

大変面倒をおかけしますが、調査の趣旨をご理解の上、アンケートにご協力くださいますようお願いいたします。

なお、調査は統計的に処理しますので、個人名やプライバシーに関わる情報を漏らすなど、ご迷惑をかけることは絶対にありませんので、ありのままをご記入いただきますようお願いいたします。

三重大学教育学部 教授 中島 喜代子
大学院2年 小長井 明美
大学4年 笹尾 伊津美

* 以下には何も記入しないでください。

--	--	--

保 護 者 用

* このアンケートの質問の意味、記入の仕方でわかりにくい点、またこの調査に関してのご意見、ご要望がありましたら下にご記入ください。

--

〒514-8507

三重県津市栗真町屋町1577

三重大学 教育学部 住居学研究室

Tel&Fax 059-231-9300

E-mail jyukyo@edu.mie-u.ac.jp

※ このアンケートでは、あなたの高校（中学）時代のことをお聞きます。
当時、考えたことのないような質問、あるいは、質問に対して答えをあまりはっきり思い出せないような質問に対しては、今この場で、高校（中学）当時に振り返って考えていただき、一番近いと思われる答えを選択していただきますようお願いいたします。

※ なお、高校時代または、中学時代のどちらか一方でお答えください。
はじめに、下欄の高校時代か中学時代のいずれかに○を記入し、お子様とのご関係と年齢をご回答いただいてから、以下の質問にお答えください。
また、調査の都合上、できるだけ高校時代の方でお答えください。

1	1、高校時代 2、中学時代
2	1、父親 2、母親 3、その他（具体的に ）
3	現在の年齢 （ ） 歳

I. 家庭について
ここでは、高校（中学）時代の家庭の生活についてお聞きます。

1	高校（中学）時代、家にいる時、最も「居心地が良い」と感じたのはどんな時でしたか。 最もあてはまるもの1つに○をつけてください。	1. 家族団らんをしていた時 2. 一人でのんびりくつろいでいた時 3. 友達を部屋によんだり、電話をしていた時 4. 人に邪魔をされずに好きなことに集中できていた時 5. 特に居心地が良いと感じる時はなかった																																																
2	高校（中学）時代、家庭にいてどのように感じましたか。 1～6の項目について、例にならって答えてください。	<table><tr><td></td><td>あてはまる</td><td>ない</td><td>どちらでも</td><td>あてはまる</td><td></td></tr><tr><td>例) 安心できる</td><td>(1</td><td>2</td><td>3)</td><td>不安を感じる</td><td></td></tr><tr><td>1. 安心できる</td><td>(1</td><td>2</td><td>3)</td><td>不安を感じる</td><td></td></tr><tr><td>2. 落ち着ける</td><td>(1</td><td>2</td><td>3)</td><td>いらいらする</td><td></td></tr><tr><td>3. 楽しい</td><td>(1</td><td>2</td><td>3)</td><td>つまらない</td><td></td></tr><tr><td>4. 満足感がある</td><td>(1</td><td>2</td><td>3)</td><td>不満がある</td><td></td></tr><tr><td>5. 解放感を感じる</td><td>(1</td><td>2</td><td>3)</td><td>圧迫感を 感じる</td><td></td></tr><tr><td>6. 家庭が好き</td><td>(1</td><td>2</td><td>3)</td><td>家庭がきらい</td><td></td></tr></table>		あてはまる	ない	どちらでも	あてはまる		例) 安心できる	(1	2	3)	不安を感じる		1. 安心できる	(1	2	3)	不安を感じる		2. 落ち着ける	(1	2	3)	いらいらする		3. 楽しい	(1	2	3)	つまらない		4. 満足感がある	(1	2	3)	不満がある		5. 解放感を感じる	(1	2	3)	圧迫感を 感じる		6. 家庭が好き	(1	2	3)	家庭がきらい	
	あてはまる	ない	どちらでも	あてはまる																																														
例) 安心できる	(1	2	3)	不安を感じる																																														
1. 安心できる	(1	2	3)	不安を感じる																																														
2. 落ち着ける	(1	2	3)	いらいらする																																														
3. 楽しい	(1	2	3)	つまらない																																														
4. 満足感がある	(1	2	3)	不満がある																																														
5. 解放感を感じる	(1	2	3)	圧迫感を 感じる																																														
6. 家庭が好き	(1	2	3)	家庭がきらい																																														

3	高校（中学）時代、家の中で、「①自分の持ち物を自由に置き、好きな時に好きなことができる場所」はありましたか。また、「②他人の侵入や、物の出入りを制限できる場所」はありましたか。 次の1～6の場所について、①と②それぞれ、あるものには○、ないものには×をすべての（ ）につけてください。※ただし、場所自体がない場合は、（ ）に斜線（/）を引いてください。	<table><tr><td>① 自分の持ち物を自由に置き、好きな時に好きなことができる場所</td><td>②他人の侵入や、物の出入りを制限できる場所</td></tr><tr><td>↓</td><td>↓</td></tr><tr><td>1. 自分専用の部屋、きょうだいとの共用部屋・・・</td><td>() ()</td></tr><tr><td>2. 自分以外の家族の部屋・・・</td><td>() ()</td></tr><tr><td>3. 居間・食事室・・・</td><td>() ()</td></tr><tr><td>4. 納戸・衣装部屋・・・</td><td>() ()</td></tr><tr><td>5. 客間・応接間・・・</td><td>() ()</td></tr><tr><td>6. トイレ・風呂・・・</td><td>() ()</td></tr></table>	① 自分の持ち物を自由に置き、好きな時に好きなことができる場所	②他人の侵入や、物の出入りを制限できる場所	↓	↓	1. 自分専用の部屋、きょうだいとの共用部屋・・・	() ()	2. 自分以外の家族の部屋・・・	() ()	3. 居間・食事室・・・	() ()	4. 納戸・衣装部屋・・・	() ()	5. 客間・応接間・・・	() ()	6. トイレ・風呂・・・	() ()								
① 自分の持ち物を自由に置き、好きな時に好きなことができる場所	②他人の侵入や、物の出入りを制限できる場所																									
↓	↓																									
1. 自分専用の部屋、きょうだいとの共用部屋・・・	() ()																									
2. 自分以外の家族の部屋・・・	() ()																									
3. 居間・食事室・・・	() ()																									
4. 納戸・衣装部屋・・・	() ()																									
5. 客間・応接間・・・	() ()																									
6. トイレ・風呂・・・	() ()																									
4	高校（中学）時代、家庭で、次の1～9のようなことができる場所はどこでしたか。〈場所〉 また、6～9について、話をする相手はだれでしたか。ただし、電話等を使って話しをする場合を除きます。〈相手〉 1～9について、それぞれ最もあてはまるものを1つ選んで、すべての（ ）に番号を記入してください。	<table><tr><td colspan="2">〈場所〉</td></tr><tr><td>1. 一人になって考え事などができる場所・・・</td><td>()</td></tr><tr><td>2. 好きなことに集中できる場所・・・</td><td>()</td></tr><tr><td>3. 一人になってくつろぐことができる場所・・・</td><td>()</td></tr><tr><td>4. 大人の目を避けられる場所・・・</td><td>()</td></tr><tr><td>5. 嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所・・・</td><td>()</td></tr><tr><td>6. お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所・・・</td><td>() ()</td></tr><tr><td>7. 自分の仲間、あるいは家族など、 仲間意識を感じられる人と話をする場所・・・</td><td>() ()</td></tr><tr><td>8. 自分を頼ってくれる人と話をする場所・・・</td><td>() ()</td></tr><tr><td>9. 自分を受け入れてくれる人と話をする場所・・・</td><td>() ()</td></tr><tr><td>〈場所〉</td><td>〈相手〉</td></tr><tr><td>① 自分の専用個室、きょうだいとの共用部屋 ② 自分以外の家族の部屋 ③ 居間・食事室 ④納戸・衣装部屋 ⑤ 客間・応接間 ⑥トイレ・風呂 ⑦ 場所がなかった ⑧ 家庭ではその行為自体しなかった</td><td>① 家族のみ ② 友達のみ ③ 家族と友達の両方 ※ただし、場所で⑦か⑧を選択した場合は、 ()に斜線（/）を引いてください。</td></tr></table>	〈場所〉		1. 一人になって考え事などができる場所・・・	()	2. 好きなことに集中できる場所・・・	()	3. 一人になってくつろぐことができる場所・・・	()	4. 大人の目を避けられる場所・・・	()	5. 嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所・・・	()	6. お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所・・・	() ()	7. 自分の仲間、あるいは家族など、 仲間意識を感じられる人と話をする場所・・・	() ()	8. 自分を頼ってくれる人と話をする場所・・・	() ()	9. 自分を受け入れてくれる人と話をする場所・・・	() ()	〈場所〉	〈相手〉	① 自分の専用個室、きょうだいとの共用部屋 ② 自分以外の家族の部屋 ③ 居間・食事室 ④納戸・衣装部屋 ⑤ 客間・応接間 ⑥トイレ・風呂 ⑦ 場所がなかった ⑧ 家庭ではその行為自体しなかった	① 家族のみ ② 友達のみ ③ 家族と友達の両方 ※ただし、場所で⑦か⑧を選択した場合は、 ()に斜線（/）を引いてください。
〈場所〉																										
1. 一人になって考え事などができる場所・・・	()																									
2. 好きなことに集中できる場所・・・	()																									
3. 一人になってくつろぐことができる場所・・・	()																									
4. 大人の目を避けられる場所・・・	()																									
5. 嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所・・・	()																									
6. お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所・・・	() ()																									
7. 自分の仲間、あるいは家族など、 仲間意識を感じられる人と話をする場所・・・	() ()																									
8. 自分を頼ってくれる人と話をする場所・・・	() ()																									
9. 自分を受け入れてくれる人と話をする場所・・・	() ()																									
〈場所〉	〈相手〉																									
① 自分の専用個室、きょうだいとの共用部屋 ② 自分以外の家族の部屋 ③ 居間・食事室 ④納戸・衣装部屋 ⑤ 客間・応接間 ⑥トイレ・風呂 ⑦ 場所がなかった ⑧ 家庭ではその行為自体しなかった	① 家族のみ ② 友達のみ ③ 家族と友達の両方 ※ただし、場所で⑦か⑧を選択した場合は、 ()に斜線（/）を引いてください。																									

Ⅱ. 学校について

ここでは、高校（中学）時代の学校の生活についてお聞きます。

1	高校（中学）時代、学校に いる時、最も「居心地が良 い」と感じたのはどんな時 でしたか。 最もあてはまるもの1つに ○をつけてください。	1. 授業やホームルームなどクラスで行動していた時 2. 部活動をしていた時 3. 生徒会活動、委員会活動をしていた時 4. 休憩中、放課後 5. 特に居心地が良いと感じる時はなかった																																																
2	高校（中学）時代、学校に いてどのように感じました か。 1～6の項目について、例 にならって答えてくださ い。	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>あては まる</th> <th>あ て は ま る</th> <th>ど ち ら か も</th> <th>あ て は ま る</th> <th></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>例) 安心できる</td> <td>(1</td> <td>2</td> <td>3)</td> <td></td> <td>不安を感じる</td> </tr> <tr> <td>1. 安心できる</td> <td>(1</td> <td>2</td> <td>3)</td> <td></td> <td>不安を感じる</td> </tr> <tr> <td>2. 落ち着ける</td> <td>(1</td> <td>2</td> <td>3)</td> <td></td> <td>いらいらする</td> </tr> <tr> <td>3. 楽しい</td> <td>(1</td> <td>2</td> <td>3)</td> <td></td> <td>つまらない</td> </tr> <tr> <td>4. 満足感がある</td> <td>(1</td> <td>2</td> <td>3)</td> <td></td> <td>不満がある</td> </tr> <tr> <td>5. 解放感を感じる</td> <td>(1</td> <td>2</td> <td>3)</td> <td></td> <td>圧迫感を 感じる</td> </tr> <tr> <td>6. 学校が好き</td> <td>(1</td> <td>2</td> <td>3)</td> <td></td> <td>学校がきらい</td> </tr> </tbody> </table>		あては まる	あ て は ま る	ど ち ら か も	あ て は ま る		例) 安心できる	(1	2	3)		不安を感じる	1. 安心できる	(1	2	3)		不安を感じる	2. 落ち着ける	(1	2	3)		いらいらする	3. 楽しい	(1	2	3)		つまらない	4. 満足感がある	(1	2	3)		不満がある	5. 解放感を感じる	(1	2	3)		圧迫感を 感じる	6. 学校が好き	(1	2	3)		学校がきらい
	あては まる	あ て は ま る	ど ち ら か も	あ て は ま る																																														
例) 安心できる	(1	2	3)		不安を感じる																																													
1. 安心できる	(1	2	3)		不安を感じる																																													
2. 落ち着ける	(1	2	3)		いらいらする																																													
3. 楽しい	(1	2	3)		つまらない																																													
4. 満足感がある	(1	2	3)		不満がある																																													
5. 解放感を感じる	(1	2	3)		圧迫感を 感じる																																													
6. 学校が好き	(1	2	3)		学校がきらい																																													
3	高校（中学）時代、学校の 中で、「自分の持ち物を自由 に置き、好きな時に好きな ことができる場所」はあり ましたか。 次の1～6の場所につい て、あるものには○、ない ものには×をすべての () につけてください。	1 () 自分のクラス 2 () 他のクラス 3 () 自分の部室、委員会の場など 4 () グラウンド、体育館、図書室、多目的教室 5 () 廊下、階段、校庭の片隅、トイレなど 6 () 職員室、保健室、相談室																																																

※質問は右側のページに続きます。

4	高校（中学）時代、学校で、次の1～9のようなことができる場所はどこでしたか。（場所） また、6～9について、話をする相手はだれでしたか。ただし、電話等を使って話をする場合を除 きます。（相手） 1～9について、それぞれ最もあてはまるものを1つ選んで、すべての（ ）に番号を記入して ください。	<p>（場所）</p> 1. 一人になって考え事などができる場所・・・・・・・・・・・・（ ） 2. 好きなことに集中できる場所・・・・・・・・・・・・（ ） 3. 一人になってくつろぐことができる場所・・・・・・・・・・・・（ ） 4. 大人の目を避けられる場所・・・・・・・・・・・・（ ） 5. 嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所・・・・（ ） 6. お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所・・・・（ ）（ ） 7. 仲間意識を感じられる人と話をする場所・・・・・・・・・・・・（ ）（ ） 8. 自分を頼ってくれる人と話をする場所・・・・・・・・・・・・（ ）（ ） 9. 自分を受け入れてくれる人と話をする場所・・・・・・・・・・・・（ ）（ ）
<p>（場所）</p> ① 自分のクラス ②他のクラス ③ 自分の部室、委員会の場など ④ グラウンド、体育館、図書室、多目的教室 ⑤ 廊下、階段、校庭の片隅、トイレなど ⑥ 職員室、保健室、相談室 ⑦ 場所がなかった ⑧ 学校ではその行為自体しなかった		<p>（相手）</p> ① 友達のみ ②先生のみ ③ 友達と先生の両方 ※ただし、場所で⑦か⑧を選択した場合は、 （ ）に斜線（/）を引いてください。

Ⅲ. 地域について

ここでは、高校（中学）時代の地域での生活についてお聞きます。

1	高校（中学）時代、あなたの住ん でいた地域の雰囲気は次のどれ にあてはまりますか。 最もあてはまるもの1つに○を つけてください。	1. 地域活動*や交流が盛んで、住民同士の仲が良かった 2. 地域活動*や交流が時々行われ、住民同士の仲はそれほど悪 くはなかった 3. 地域活動*や交流はほとんどなく、住民同士はよそよそしい 感じがしていた <p>*地域活動…清掃活動や運動会、旅行、寄り合いなど</p>
2	高校（中学）時代、あなた自身は 近所の人とどのように付き合っ ていましたか。 最もあてはまるもの1つに○を つけてください。	1. 家族ぐるみで交流していた 2. あいさつくらいはしていた 3. 近所付き合いはほとんどしていなかった

3	<p>高校(中学)当時の家にはどれくらい住んでいましたか。 <u>あてはまるもの1つに○をつけてください。</u></p>	<p>1. 生まれた頃から住んでいた 2. 小学校入学前から住んでいた 3. 小学校の頃から住んでいた 4. 中学校の頃から住んでいた 5. 高校生になってから住んでいた</p>
4	<p>高校(中学)時代、家の近く(歩いていける距離)には何がありましたか。 <u>あるものには○、ないものには×をすべての()につけてください。</u></p>	<p>1 () 原っぱ・田んぼ・畑 2 () 河原・土手・池 3 () 雑木林・野山 4 () 公園・アスレチック 5 () 商店街 6 () デパート・ショッピングモール 7 () スーパー 8 () コンビニ 9 () ファーストフード店・ファミレス 10 () ゲームセンター・カラオケボックス 11 () 駅 12 () 空き地・駐車場 13 () 公共施設(図書館・公民館・文化会館など)</p>
5	<p>次の1～6について、<u>高校(中学)時代、あなたがよく行っていた場所はどこでしたか。</u> <u>あてはまるものには○、あてはまらないものには×をすべての()につけてください。</u></p> <p>1. 自然 $\left\{ \begin{array}{l} a () \text{ 一人でぶらぶらしたり考え事などができる自然があるところ} \\ b () \text{ 仲間としゃべったり遊んだりできる自然があるところ} \end{array} \right.$</p> <p>2. 公園・広場 $\left\{ \begin{array}{l} a () \text{ 一人でぶらぶらしたり考え事ができる公園や広場} \\ b () \text{ 仲間としゃべったり遊んだりできる公園や広場} \end{array} \right.$</p> <p>3. 店 $\left\{ \begin{array}{l} a () \text{ 一人でぶらぶらしたり好きなことで時間をつぶせる店} \\ b () \text{ 仲間としゃべったり遊んだりできる店} \\ c () \text{ 店員やお客さんと仲良くできる店} \end{array} \right.$</p> <p>4. 公共施設 $\left\{ \begin{array}{l} a () \text{ 一人で好きなことに集中したり考え事などができる公共施設} \\ b () \text{ 仲間としゃべったり遊んだりできる公共施設} \\ c () \text{ 職員や利用している人と仲良くできる公共施設} \end{array} \right.$ <u>図書館・公民館・児童館・スポーツ施設など</u></p> <p>5. 塾・習い事 $\left\{ \begin{array}{l} a () \text{ 勉強や自分の好きなことに集中して取り組める塾や習い事} \\ b () \text{ 先生や生徒と仲良くできる塾や習い事} \end{array} \right.$</p> <p>6. 地域 $\left\{ \begin{array}{l} a () \text{ いっしょにしゃべったり遊んだりできる仲の良い友だちの家} \\ b () \text{ 仲の良い親戚や気軽に行ける近所の人の家} \end{array} \right.$</p>	

6	<p>高校(中学)時代、家庭・学校以外で最も「居心地が良い」と感じたのはどんな時でしたか。 <u>最もあてはまるもの1つに○をつけてください。</u></p>	<p>1. 公園、自然のあるところにいた時 2. たまり場で仲間と集まっていた時 3. よく行く店にいた時 4. 地域活動(清掃活動、子ども会など)をしていた時 5. 塾や図書館で勉強、あるいは習い事をしていた時 6. 友達の家でいた時 7. その他(具体的に) 8. 特に居心地が良いと感じる時はなかった</p>
7	<p>高校(中学)時代、家庭・学校以外の場所で、「自分の持ち物を自由に置き、好きな時に好きなことができる場所」はありましたか。 <u>次の1～6の場所について、あるものには○、ないものには×をすべての()につけてください。</u></p>	<p>1 () 自然のあるところ(公園、川の土手など) 2 () 空き地・駐車場など 3 () よく行く店、駅 4 () 公共施設 (図書館、公民館、児童館、スポーツ施設など) 5 () 塾・習い事などの教室 6 () 友達の家</p>

※質問は次のページに続きます。

- 8 高校（中学）時代、家庭・学校以外で、次の1～9のようなことができる場所はどこでしたか。（場所）
- また、6～9について、話をする相手はだれでしたか。ただし、電話やメール等を使って話をする場合を除きます。（相手）
- 1～9について、それぞれ最もあてはまるものを1つ選んで、すべての□に番号を記入してください。
- また、〈場所〉については、具体的な場所名を右側の□に記入してください。

（回答例）

	〈場所〉		〈相手〉
	（番号）	（具体的な場所名）	
1. 一人になって考え事などができる場所			

（解答欄）

	〈場所〉		〈相手〉
	（番号）	（具体的な場所名）	
1. 一人になって考え事などができる場所			
2. 好きなことに集中できる場所			
3. 一人になってくつろぐことができる場所			
4. 大人の目を避けられる場所			
5. 嫌な思いをしたり、 ストレスをためた時にいられる場所			
6. お互いに気が合ったり、 考え方が合う人と話をする場所			
7. 仲間意識を感じられる人と話をする場所			
8. 自分を頼ってくれる人と話をする場所			
9. 自分を受け入れてくれる人と話をする場所			

〈場所〉

〈相手〉

- ① 自然のあるところ（公園、川の土手など）
② 空き地、駐車場など
③ よく行く店、駅
④ 公共施設
（図書館、公民館、児童館・スポーツ施設など）
⑤ 塾・習い事などの教室
⑥ 友達の家
⑦ 場所がなかった
⑧ 家庭・学校以外ではその行為自体しなかった

〈場所〉番号
で、⑥・⑦・
⑧を選択した
場合は、□に
斜線／を
引いてくださ
い。

- ① 友達のみ
② 大人のみ
③ 友達と大人の両方
※ただし、場所で⑦か⑧を
選択した場合は、□に
斜線／を引いてくだ
さい。

IV. 居場所について

ここでは、高校（中学）時代の居場所についてお聞きします。

高校（中学）時代、あなたは次の1～9のような場所が必要だと思っていましたか。

〈家庭〉〈学校〉〈地域〉それぞれについて、必要だと思っていたものには○、必要ないと思っていたものには×をすべての（ ）につけてください。

- | | 〈家庭〉 | 〈学校〉 | 〈地域〉 |
|------------------------------|------|------|------|
| 1. 一人になって考え事などができる場所 | （ ） | （ ） | （ ） |
| 2. 好きなことに集中できる場所 | （ ） | （ ） | （ ） |
| 3. 一人になってくつろぐことができる場所 | （ ） | （ ） | （ ） |
| 4. 大人の目を避けられる場所 | （ ） | （ ） | （ ） |
| 5. 嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所 | （ ） | （ ） | （ ） |
| 6. お互いに気が合ったり、考え方が合う人と話をする場所 | （ ） | （ ） | （ ） |
| 7. 仲間意識を感じられる人と話をする場所 | （ ） | （ ） | （ ） |
| 8. 自分を頼ってくれる人と話をする場所 | （ ） | （ ） | （ ） |
| 9. 自分を受け入れてくれる人と話をする場所 | （ ） | （ ） | （ ） |

V. 生活について

ここでは、高校（中学）時代の生活全体についてお聞きします。

- | | | |
|---|--|---|
| 1 | 高校（中学）時代、あなたは次の1～6のようなものを持っていましたか。
持っていたものには○、持っていなかったものには×をすべての（ ）につけてください。 | 1 （ ） 家での自分専用の電話
2 （ ） 自分専用のパソコン
3 （ ） 自分専用のテレビ
4 （ ） 自分専用のテレビゲーム機
5 （ ） 自分専用の部屋
6 （ ） きょうだいとの共用部屋 |
| 2 | 高校（中学）時代、あなたにとって居心地の良い所はどこでしたか。
最もあてはまるもの1つに○をつけてください。 | 1. 家庭
2. 学校
3. 家庭・学校以外（具体的に ）
4. 特になかった |
| 3 | あなたは高校（中学）当時、次のようなストレスがありましたか。
1～3について、あてはまるものには○、あてはまらないものには×をすべての（ ）につけてください。 | 1 （ ） 受験勉強に対するストレスを感じていた
2 （ ） 友人関係に対するストレスを感じていた
3 （ ） 特に受験勉強や友人関係に対するストレスは感じていなかった |

4	<p>高校（中学）時代、あなたの平日の授業終了後の行動パターンは次の4つのうちどれにあてはまりますか。 1週間のうち最も多かった行動パターンを1つ選んで番号に○をつけてください。</p> <p>※ ただし、「帰宅」とは家に帰った後もう一度外出するものは含みません。</p>	<p>回答番号</p>
		<p>1 帰宅</p> <p>2 学校に残る (例) 部活、友だちとおしゃべりなど → 帰宅</p> <p>3 寄り道する (例) お店、友だちの家、塾、図書館など → 帰宅</p> <p>4 寄り道する (例) お店、友だちの家、塾、図書館など → 帰宅</p>
5	<p>高校（中学）時代、放課後、あなたは学校でどのように過ごすことが多かったですか。</p> <p>最もあてはまるもの1つに○をつけてください。</p>	<p>1. 部活動をしていた</p> <p>2. 生徒会活動や委員会活動をしていた</p> <p>3. 勉強をしたり読書をしたりしていた</p> <p>4. 友達や先生と遊んだりしゃべったりしていた</p> <p>5. その他（具体的に)</p> <p>6. 何もせずに帰った</p>
6	<p>高校（中学）時代、家庭・学校以外で、あなたはどのように過ごすことが多かったですか。</p> <p>最もあてはまるもの1つに○をつけてください。</p>	<p>1. 塾・習い事に行ったり、図書館で自習をしていた</p> <p>2. 友達の家に行っていた</p> <p>3. 友達と店や公園、駅などでぶらぶらしていた</p> <p>4. 一人で店や公園、駅などでぶらぶらしていた</p> <p>5. その他（具体的に)</p> <p>6. 家庭・学校以外には行かなかった</p>
7	<p>高校（中学）時代、家庭で、あなたはどのように過ごすことが多かったですか。</p> <p>最もあてはまるもの1つに○をつけてください。</p>	<p>1. ほとんど自分の部屋にいた</p> <p>2. ほとんど家族と一緒に過ごした</p> <p>3. 家族と一緒に過ごすのと自分の部屋にいるのが大体半半ずつくらいだった</p> <p>4. 家には寝る時だけしかいなかった</p>

8	<p>高校（中学）時代、家庭では、誰とどんなことをして過ごすことが多かったですか。</p> <p>あてはまるものには○、あてはまらないものには×をすべての () につけてください。</p>	<p>1 () 友達を家によんで遊んでいた</p> <p>2 () 友達に電話したりして過ごしていた</p> <p>3 () 家族と一緒に過ごしていた</p> <p>4 () 家ではほとんど誰とも関わらなかった</p>
9	<p>高校（中学）時代、土日はどのように過ごすことが多かったですか。</p> <p>最もあてはまるもの1つに○をつけてください。</p>	<p>1. 家の中で一人でのんびりしていた</p> <p>2. 家の中で趣味や好きな事に一人で集中していた</p> <p>3. 家で家族や友達と一緒に過ごしていた</p> <p>4. 家で宿題や予習、復習など勉強をしていた</p> <p>5. 部活動をしていた</p> <p>6. 一人で店や公園、公共施設などでのんびりしていた</p> <p>7. 一人で買い物に出かけたり遊んだりしていた</p> <p>8. 家族と一緒に買い物に出かけたり遊んだりしていた</p> <p>9. 友達と一緒に店や公園、友達の家などで遊んでいた</p> <p>10. 塾・習い事に行ったり、図書館で自習していた</p> <p>11. その他（具体的に)</p>

VI. 性格について

ここでは、高校（中学）時代のあなたの性格についてお聞きします。

高校（中学）時代、あなたは次のどのタイプでしたか。

例にならって答えてください。

	どちらかといえばあてはまる	どちらかといえばあてはまる	
例) 人と話をするのが好きである	(1	2)	人と話をするのが苦手である
1. 人と話をするのが好きである	(1	2)	人と話をするのが苦手である
2. 物事を気楽に考える	(1	2)	物事を悪い方向に考えやすい
3. 協調性がある	(1	2)	自己中心的である

VII. 人間関係について

ここでは、高校（中学）時代の人間関係についてお聞きします。

1	<p>高校（中学）時代、親との関係はどうでしたか。</p> <p>あてはまるものには○、あてはまらないものには×をすべての () につけてください。</p>	<p>1 () 親とは表面上の会話しかしていなかった</p> <p>2 () 親とは仲が良いが、関係を悪くしないように気をつかうことがあった</p> <p>3 () 親とは本音で話し合っていた</p>
---	---	---

2	<p><u>高校(中学)時代、きょうだいとの関係はどうでしたか。あてはまるものには○、あてはまらないものには×をすべての()につけてください。</u></p> <p>※ <u>きょうだいがいない場合はすべての()に斜線(/)を引いてください。</u></p>	<p>1 () きょうだいとは表面上の会話しかしていなかった</p> <p>2 () きょうだいとは仲が良いが、関係を悪くしないように気をつかうことがあった</p> <p>3 () きょうだいとは本音で話し合っていた</p>
3	<p><u>高校(中学)時代、先生との関係はどうでしたか。</u></p> <p><u>あてはまるものには○、あてはまらないものには×をすべての()につけてください。</u></p>	<p>1 () 先生とはほとんど表面上の会話しかなかった</p> <p>2 () 仲が良いが、関係を悪くしないよう気をつかう先生がいた</p> <p>3 () 本音で話し合える先生がいた</p>
4	<p><u>高校(中学)時代、友達との関係はどうでしたか。</u></p> <p><u>あてはまるものには○、あてはまらないものには×をすべての()につけてください。</u></p>	<p>1 () 表面上の会話しかなかった友達が多かった</p> <p>2 () 仲が良いが、関係を悪くしないよう気をつかう友達が多かった</p> <p>3 () 本音で話し合える友達が多かった</p>
5	<p><u>高校(中学)時代、学校で先生と友達以外の知人(先輩や後輩など)との関係はどうでしたか。</u></p> <p><u>あてはまるものには○、あてはまらないものには×をすべての()につけてください。</u></p>	<p>1 () 表面上の会話しかなかった知人が多かった</p> <p>2 () 仲が良いが、関係を悪くしないよう気をつかう知人が多かった</p> <p>3 () 本音で話し合える知人が多かった</p>
6	<p><u>高校(中学)時代、家庭・学校以外の場所で、本音で話し合える人はどんな人でしたか。</u></p> <p><u>あてはまるものには○、あてはまらないものには×をすべての()につけてください。</u></p>	<p>1 () 学校の友達</p> <p>2 () 学校以外の友達</p> <p>3 () 近所の大人</p> <p>4 () 塾やお店、公共施設などで知り合った大人</p> <p>5 () 親戚(おじいさん、おばあさん、おじさん、おばさん、いとこなど)</p> <p>6 () その他(具体的に)</p> <p>7 () 本音で話し合える人はいなかった</p>

VIII. あなた自身について

ここでは、あなた自身について高校(中学)時代のことをお聞きます。

1	<p><u>あなたの高校(中学)時代の家族は自分も含めて、何人いましたか。</u></p>	() 人
2	<p><u>あなたの高校(中学)時代の家族について、自分以外であてはまる人すべてに○をつけてください。</u></p> <p>※ 3～8は2人以上いる場合、その人数を()に記入してください。</p>	<p>1. 父</p> <p>2. 母</p> <p>3. 兄 () 人</p> <p>4. 姉 () 人</p> <p>5. 弟 () 人</p> <p>6. 妹 () 人</p> <p>7. 祖父 () 人</p> <p>8. 祖母 () 人</p> <p>9. その他 (具体的に)</p>
3	<p><u>高校(中学)時代、住んでいた地域についてお聞きます。</u></p> <p><u>例にならって記入してください。</u></p>	<p>(例) (三重県) 都・道・府・県 (四日市) 市・町・村</p> <p>() 都・道・府・県 () 市・町・村</p>
4	<p><u>高校(中学)時代に住んでいた家は次のうちどちらですか。</u></p> <p><u>あてはまる方に○をつけてください。</u></p>	<p>1. 戸建住宅(一軒家)</p> <p>2. 集合住宅(マンション、アパートなど)</p>

大変、面倒な調査にご協力いただき誠にありがとうございました